

---

# コンフリクト

松嶋ネコチロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コンフリクト

### 【Nコード】

N6361P

### 【作者名】

松嶋ネコチロウ

### 【あらすじ】

「こんなものに意味なんてない」「何気に初だったんだけど。初がお前って」数年振りに再会した俺のいとこは、いじめられてるくせに妙な撃退法でいじめっこを退けてしまっ。恋愛感情もくそもない俺たちがしたキスのせいで事態はどんどんこじれていくわけだけど、問題はそれだけではなかった。後ろの席の真面目系おさげ女子はトラウマ持ってるわ色恋沙汰に疎いわで、いつも屋上でのんびり絵描いてるあいつもあいつでおかしな人間関係形成しちゃってるし、ある友情が崩壊する一方でまた新たな友情が生まれたり、案の定い

じめもエスカレーターしたりなんかもして、人間関係って往々にしてそんなものなんだけど、なんだか俺自身も笑えない状況になってきた。高校生活の中で生まれるコンフリクト 葛藤、軋轢、衝突の数々。果たして俺たちは、この夏を無事に乗り切ることが出来るのだろうか。

このクラスで依子よしこがいじめられているかもしれないなんて、俺は今まで考えたこともなかった。

それでいて俺は、「依子なら何があっても大丈夫だろう」なんて構えているから、自分の気持ちにさえ違和感を覚えてしまうのだ。

それは六月の教室のことで、あくびをしようとしたら、ふいに後ろの生徒が俺の背中をつついてきた。

俺の席は窓際の後ろから二つ目、そして俺の背後、最後尾の鍋島なべ由多加しゆたかがどこか神妙な面持ちをしながら、ある一枚の紙切れを渡してきた。

それはノートのページの切れ端のようで、何故か採尿に使う折り紙コップみたいに折られていた。

深刻そうな顔で折り紙コップを差し出してくる鍋島はどこか滑稽で、俺は彼女と視線を突き合わせたまま笑いそうになってしまったが、なんとか少しだけ耐えて、それでもやっぱり我慢できずに吹き出してしまった。

季節は梅雨入りで、外はざあざあと豪雨がさざめいていた。俺の漏らした声は教師には届かなかったようだ。

「笑いごとじゃないです」

何がおかしいのかという風に、鍋島は声を低くして言う。俺はその折り紙コップを受け取りながら彼女に苦笑いだけを返した。

前に向き直ると、教師の五頭がさり気はこちらに視線を送ってきたので、俺はかたくなに知らん振りを決め込み、手元の折り紙コップに目を落とした。

コップの口を開いて覗くと、中に何やら文字が見えた。

「これ、なに？」

首だけ後ろに巡らせて鍋島に尋ねると、鍋島はノートに黒板の板書をしながら上目遣いでこちらを見上げる。

「回ってきたんです。ちなみに今泉くんが最後。とりあえず読んでみてください」

筆箱の陰に隠して折り紙コップを開くと、中には三行ほどの短文が記述されてあった。全体的に丸みを帯びた字体からして、女子が書いたものらしいと分かる。

緊急速報！ 昨日ラブホからキモオヤジが平野依子ひのよこを連れて出てくるとこ見ちゃいました。エンコーかな？ 皆さんどー思います？ 平野以外に回すように！

読み上げて顔を上げると、早川沙樹がこちらを見てにやにやしていた。それから前の方を指さしてまた性悪そうな笑みをたたえるので、仕方なく俺は早川の指す方を見る。

そこには平野依子の背中があった。依子の席は最前列で、彼女は行儀よく背筋をぴんと伸ばして黒板の内容をノートに書き写していた。教師に対して、いかにも自分は模範的な生徒ですとも言わんばかりの体裁だった。本人は意図的ではないのだろうけれど。

俺が早川に向かって肩をすくめてみせると、早川はそれでもどこか楽しそうに顔を前へ戻した。

この折り紙コップは早川沙樹の仕業か、そう察して、俺の中で早川への印象が著しく落ちる。じめじめと他人に干渉し、こうして当人の知らないうちで噂が広がっていくような陰気な雰囲気は、本当に気分が悪い。

ふと、突然後ろ襟を掴まれて、俺は思わずむせてしまった。振り返ると鍋島が机に腹ばいになって俺の目を見据えていた。自然と両者にらみ合うような形になる。

「びっくりしただろ」

「どう思いますか」

鍋島はあくまで小声で怒気を露わにした。

「何が」

「その内容です。本当に援助交際なら、平野さんに止めるよう説得しなきゃいけませんよね」

その口調は真面目そのものといった感じで、俺は思わず拍子抜けして彼女を見つめた。俺がひねくれているのかな、逆にそういう発想は出てこない。

「お前って、意外と抜けてるよな」

「どつという意味ですか？」

すると、五頭がしびれを切らせたように咳払いをした。慌てて俺は前へ向き直り、ちらりと五頭を盗み見たが、そのせいでばっちり彼と目が合ってしまった。

「今泉」

五頭に名前を呼ばれ、俺は諦めて返事をした。

「お前、話聞いてなかったろ」

「はい、全く聞いてませんでした」

はつきり言い切ってしまうと逆に清々しい。五頭は眉をひそめたが、今度は鍋島の名前を呼ぶ。

「鍋島、お前も聞いてなかったな」

後ろで、鍋島が息を呑む音が聞こえた。「あ、あ」と喉に魚の骨でも詰まらせたような声を出していた。

「き、聞いていました」

「じゃあ俺が今なんと言っていたか、言ってみろ」

背後にいるから見えないが、彼女が冷や汗を浮かべ頬を硬直させているのが容易に想像できた。余計なこと言わなきゃいいのに、と俺は心の中でせせら笑う。

「すみません、やっぱり聞いてなかったです」

どつと笑いが起こる。にやにやしながら後ろを見ると、鍋島は顔を真っ赤にして俯いていた。五頭が一層厳格な表情を作る。

「二人とも、廊下に立ってなさい」

二人で廊下に立っていると、にわかには後ろからクラスメイトたちの視線を感じて、俺は苛立ちの息を漏らした。

「今どき高校生を廊下に立たせる教師なんて、県内中探してもあいつくらいだと思っ」

老害、という言葉が頭に浮かぶ。俺が普段の音量で鍋島に話しかけると、彼女は怒りを露わに睨みつけてきた。

「もっと小さい声で喋ってください。全部今泉くんのせいですから「なんでだよ。そもそも鍋島があんな下らねえのわざわざ回してくるからだろ」

「今泉くんが五頭先生の注目を浴びないように配慮していれば、こんなことにはならなかつたんです」

鍋島はむすつとして顔を逸らす。俺もこれ以上言い返す気はなかった。

廊下は思いのほか静かで、教室からの五頭の授業は幾分か抑えられていた。窓の外を見ると、にわか雨はさっきよりずっと控えめになっでいて、グラウンドを叩くしつとりとした水音が心地よい。

横を見ると、鍋島が二つに結んだおさげの片方をいじっていた。何か考え事をするように遠い目をしている。やがて俺の視線に気づいたのか、鍋島が見つめ返してくる。

「さっき今泉くんが言いたかつたこと、なんとなく分かつた気がします」

すぐにはぴんと来なかつた。首を傾げていると、鍋島が続ける。

「平野さんのことです。私が平野さんを説得しなきゃって言ったとき、今泉くん、お前抜けてるなって言いましたよね」

「ああ、そっぴや言つたかも」

鍋島は、続きを言うべきか迷っているように目を泳がせる。彼女が口を開いたのは、それから三十秒ほど経ってからだった。

「平野さん、いじめられてるのかな」

「そこまでは言っただけでさ」

後方の窓から教室内を盗み見る。視線の先には依子がいた。

黒髪を背中まで伸ばし、肌は病的なほどに青白い。身体も細いで、病み上がりだと言われれば誰も疑わないと思う。授業開始からずっと、規則正しく頭を上下させて黒板の内容を板書していた。

恐らく、彼女は授業が終わっても席を立つことはないだろう。クラスメイトに話しかけることは絶対ないだろうし、そういう光景は今まで一度として見たことがない。彼女が席を立つのは移動教室のときか、昼休みか放課後になってからと決まっている。

「平野さんは美人さんだけど、すごく大人しいじゃないですか。言い方が悪いかもしれないけど、いじめられそうな雰囲気を持っていてるのかなって」

「美術展覧会に出てくる石像みたいだもんな、あいつって」

俺の比喩を中傷ととったのか、鍋島が厳しい目で諫めてくる。別にそんなつもりじゃなかったのに、無実の罪を浴びせられた気分です。黙り込む。ほどなく、鍋島はまた元の虚しげな表情を作った。

「悲しいです。私、弱い者いじめって大嫌いだし、見るのも嫌。関係ないかもしれないけど、うちって県内トップクラスの進学校じゃないですか。こういう学校ならいじめなんて起こらないと思ってたんですけど」

「学校の程度は関係ないんじゃないか。どこの世界でもさ、集団の中でいじめが起こり得ないってことはないだろ。猿の世界にもいじめがあるくらいだぜ。きっと誰かをいじめたいって気持ちは、本能なんだと思うけどな」

抑揚もなく言うと、鍋島はどこか不安げに見上げてくる。

「今泉くんは、いじめなんてどうでもいいと思いますか？」

俺は廊下の天井を仰いだ。

実感が湧かない、というのが即座に出てきたけど、そんなの答えになっただけだ。

確かに俺は、今までいじめというものを目撃したことがない。人



生経験が浅いんだ、と言われてしまえばそこまでで、偶然いじめのない環境に恵まれただけでも言える。

実感が無いというのは、つまりいじめる側、いじめられる側の気持ちが分からないということ、だからつい客観的な思考をしてしまふ。

いじめる側は何が楽しくてこんなことをやっているんだろうとか、いじめられる側は本人にも原因があるんじゃないか、とか。

こんな考え方、ただ他人行儀で冷酷なだけなのだろうか。

実際、依子なら何があっても大抵は大丈夫だろう、なんて他人事のように思ってしまうのだから。

「まだいじめだと決まったわけじゃないだろ」

柔らかい口調で言ったつもりだったけど、鍋島は申し訳なさそうに目を伏せて、そうですね、と呟いた。

廊下に立たされた上、こんな空気になってしまっただけは居心地が悪い。

腕時計を見ると、授業終了まであと十分を切るところだった。話題を切り替えようと頭を悩ませていると、ふとした疑問が頭をつく。

「なあ、一つ質問していいか」

「なんですか？」

怪訝そうに鍋島を見ると、彼女はきょとんとまばたきをした。

「なんでお前、丁寧語なの？」

「今さら!？」

思えば、鍋島とまともに言葉を交わしたのは今日が初めてだ。今まで挨拶くらいしかしたことなかったし。

鍋島が自分の声の大きさに気づいて口を塞いだのは、教室内の五頭が怒声を上げたのとほぼ同時だった。

放課後のこと。その日、俺が図書室に足を運んだのはほんの偶然のことで、この学校の図書室へ入ったのもそれが初めてだった。

ぐるりと図書室の内装を見回してみる。去年まで通っていた中学の図書室に比べると、広さは二倍ぐらいあるだろうか。市の図書館ほどではないが、学校内の施設としては異例ではないかと思う。

進学校を名乗っているだけあって利用者は多かった。テーブルは七割ほど生徒で埋められていて、一様に参考書やノートに向かっている。

見回したところで、俺は受付カウンターの方へ目を向けた。

平野依子ひのよこが居た。

依子は受付で教科書を広げて勉強しており、ときおり本の貸し出しや返却をする生徒の対応をしていた。対応は至って作業的で、終始無表情を崩さない。声もどこか機械的で単調だし、音声アナウンスでも聞いているような気分だった。

受付に歩み寄ると、依子は眉ひとつ動かさずにこちらを見上げてくる。

「お前、ここの受付なんてやってたんだな」

むしろ、依子が図書委員だったということすら知らなかった。

「今日は司書の先生がいないから、特別に」

依子はひどく細かい声で言う。声自体小さいこともあるが、声質からして消え入りそうな色を持っている。

「用件は？」

「受付の奥にバガボンドがあるって聞いてきたんだけど」

「馬鹿ボンド」

「バガボンドな」

依子はきよんととして、沈黙した。

それから無言の視線交差を続けること、一分半。やがて依子の口

元がうごめいた。

「漫画だっけ、それ」

それから受付横の扉を指した。

ある、ということでもいいのかな。なにせお互い言葉が足りないからよく分からない。でも、これは受付の中に入れてくれるということなのだろう。

本当にいいのか、と依子を見たが、彼女は瞳すら動かさず俺を見つめてくるばかりだった。

扉を開けると、受付内部は外から見るとより奥行きがあつて広い。

奥のスペースは長方形のように広がっており、敷きつめられた本棚には見るからに古そうな本が蔵書されていた。

依子が「そこにあるよ」と受付の引き出しを指す。開くと、まるで隠されているかのように漫画が何十冊も入っていた。

「ただの噂だと思つてたけど、本当にあるんだな」

「宮下先生がこっそり持つてきているから」

依子は教科書に目を向けたまま、お座なりに言う。宮下とは、司書の先生のことだろう。

バガボンドの九巻から十五巻を手に取り、俺は壁際のパイプ椅子に腰掛けた。

漫画を読み出した途端、依子との会話は完全に途絶えた。お互いのわずかな所作音、図書室内で誰かがページを擦りめくる音、そして依子が利用者の応対をする控えめな声だけが静かに響く。

依子は教室のときと同じように姿勢を正し、カウンターを机代わりにして、変わり映えもなくノートや教科書に視線を落としていた。見ていると飽きるだけなので、俺はまた漫画を読み始めた。おっ、ついに柳生編か。

十五巻まで読み終え、顔を上げると、夕日が受付カウンターに濃い澄色を落としていた。図書室内の音が極端に少なくなっている。

もう残っている生徒はほとんどいないだろう。

十五巻を置いて、俺は一つあくびをした。

依子は、やはり先程と同じ姿勢で勉強をしていた。いつもあの姿勢で腰は疲れないのだろうか、といつも思う。

「お前、エンコーしてんの」

流れるように紙面を走っていた依子のシャーペンが、一瞬止まる。瞬きを数回していたが、事もなげに再度彼女の手は動き始めた。

「してたら、どうするの」

否定されることを前提で質問したばかりに、俺はかなり戸惑った。

「えっ、してんの？」

「してないよ」

起伏に乏しい声と表情は相変わらずで、そのせいか、依子の言葉は誰に向けたものなのか、瞬間分からなくなる。俺もぼうつとして次の言葉を紡ぐのにちよつと時間がかかった。

「やっぱお前っていじめられてんのな」

「よく分からない。微妙」

「微妙って。たとえばほら、上履きに画鋲入れられたりとか」

依子はシャーペンのノックを顎に当てて考える。やがて、ちらりと俺の方を一瞥して、ぼそぼそと話し始めた。

「それはないけど、筆箱や教科書隠されたり、ノートに落書きされたり、わざとらしくぶつかってきたりとか、そういうのはあるかな」

「そういうのをいじめって言うんだよ」

「そうなんだ」

「そうなんだよ。うん、多分そうだよ。いやおい待て」

また視線を手元に落とそうとする依子を制止する。本人にそれらしい自覚はないのに、俺は何を必死になるのだろうかと虚しくなってくる。だが、事実は事実なのだ。

「どうも思わないわけ？　そういう嫌がらせ受けて」

「うざいと思う」

「だろ」ようやくまともな感想が聞けて俺はほっと胸を撫で下ろす。

「できれば死んでほしいと思う」

「だよな」依子の言葉を受け流そうとして、留まる。「いや待て、ちよつと極端だなそれは」

依子は息を吐き、シャーペンを置いてこちらへ向き直った。まさかこのタイミングで依子が俺を正面にとらえてくるとは思わなかったので、ちよつと身構えてしまう。

「どうして警戒するの」

「いや、依子が動くの久々に見たからさ」

「失礼だね」

失礼、とは言うものの、依子はやはり頬の筋肉ひとつ動かさない。

「結局、純は何が言いたいの」

下の名前を家族以外で呼ばれたのはかなり久しぶりな気がする。なんとなく恥ずかしい。いや、全く照れる状況じゃないんだけど。

「困ってるなら俺に言えよ。力になるから」

「見ての通り全く困ってないよ。偽善？」

自分の耳が赤く染まるのが分かった。こんな奴に声なんか掛けなきゃよかったと後悔したが、俺は見栄を張ってパイプ椅子を蹴り、顔面にガキみたいな憤怒を浮かべて依子を見下ろした。

「俺がそんな風に見えるかよ」

「見える。純みたいに薄っぺらい自己満足で動いてるような人間、あたし一番嫌い」

「お前、久しぶりに喋ってみれば随分大人しくなってると思ったけど、全然変わってないのな。クラスでもそれくらい喋ってみるよ。だからいじめられんだよ」

依子の表情に初めて翳りがさす。それは微かに眉をひそめるほどのものだったが、彼女が不快感を覚えていることは手に取るように分かった。

何も言えないでいる依子に追い打ちをかけようとした、そのとき。ストップ、ストップ、と図書室の奥から女子の声が聞こえた。

「なんで普通に喧嘩始めてるんですか！」

鍋島由多加が何か動揺したようにカウンターに詰め寄り、二度三度と、交互に俺たちの顔を見据えたきた。依子は不機嫌そうに眉を下げたままで、俺は深いため息を吐いてパイプ椅子に座りなおした。「なんで鍋島がここに居んだよ」

「図書室で勉強するためです。平野さんがここに居ることは分かってたし、なんとなく気になったから……」

なら最初から顔出せ。言いかけて、俺は腕組みをして口をつぐんだ。キレたとこ見られたの、結構恥ずかしかったし。

「二人は一体何なんですか？」

「何って？」

無然として聞き返すと、鍋島はもどかしそうに首を振った。

「二人は、話すの初めてじゃなかったんですか？」

「全然。俺ら、いとこだし」

「いとこ？」鍋島は啞然としたように聞き返す。

「お互いの親が兄弟関係にあることをいとこっつーんだけど」

「いや、それは知ってるんですけど」

鍋島が頭を抱え始める。俺は依子と顔を見合わせたが、依子がすぐに嫌そうに目を逸らした。

「どうして教えてくれなかったんですか。多分、クラスの人誰も知らないですよ」

依子は一切答えようとせずそっぽを向いているため、俺が答えるしかなさそうだった。考えてみたけれど、特に理由がない。

「言う必要もなかったからな。いとこなんて他人みたいなもんだし」

「三親等って、今泉くんにしたらもう他人なんですね」

鍋島が呆れたような、それとも諦めたような息を吐く。

依子は勉強を再開して、鍋島はカウンターに腰を預けつつ、じつとそれを眺めた。

俺は読み終えたばかりバガボンド十五巻を開いて、気に入ったコマを何度も何度も見返す。佐々木小次郎の戦闘描写がやけに生々しくて、俺は吸い込まれるように次々と絵と文字を追っていく。

そのうち依子が「四親等」と呟いて、俺と鍋島は同じタイミングで首を傾げた。

翌日。

三時限目の移動教室で物理室に行くとき、そこでやっと気づいたんだけど、依子は上履きを履いてなかった。代わりに履いていたのは群青色の職員用スリッパ。

俺は今日一時限分の遅刻をして、二時限目はずっと居眠りをしてきた。三時限の前にクラスのみんなで廊下を歩いていて、誰ださつきからペタペタと間抜けな音鳴らしながら歩いてるやつは、と前をよく見てみると、それが依子だったわけだ。

早川沙樹が俺の肩をちよんとつついて、依子を指さして笑った。俺は昨日依子に生意気な口を利かれたから早川と一緒に笑ってやるうと思っただが、多勢に無勢は卑怯だし、それ以前に人として何か終わる気がしたので、早川に下手くそな愛想笑いだけを返して、それから依子の隣に並んだ。

「俺の上履き貸してやろうか。もう一足あるし。超汚れてて、もう捨てようと思ってたやつ」

依子が俺の上履きへと視線を落とす。つられて、俺も自分の足元を見る。

「サイズが合えば、貸して」

次に俺は依子の足元を見た。スリッパは気持ちぶかぶかなようで、依子の足は余計小さく感じる。

「二十六センチくらいか。俺二十八だけど、ギリいけるだろ」

「二十三センチ」

俺は言葉を失って、頭頂の辺りを掻いた。こいつと話すとかげに空回りする。

すると、鍋島も依子の隣に並んできた。俺と鍋島で、依子を挟む形になる。

「そのスリッパ、私の上履きと交換しませんか」鍋島がにっこりと



微笑む。「青系って好きなんですよね」

俺は入学当初の頃を回顧して、鍋島がクラスメイトとの顔合わせで「好きな色は黄色と澄色で、苦手な色は青と黒です」と言っていたのを思い出した。それを口に出すのは野暮なんだろうな。

依子が首を小さく振り「スリッパは蒸れないから」と言って、鍋島の提案を拒んだ。意地になっっているのか、それとも鍋島に気を使っているのか、はたまたそれが本心なのか。彼女の声の調子からは計れなかった。

昼休みになると、依子はふらりと席を立つ。

この日も弁当箱と参考書とノートを小脇に抱えて音もなく立ち上がり、気配を殺すようにすいすいと机と机の間を縫っていった。

早川沙樹の机の横を通るとき、彼女に軽く肘を当てられた。

早川沙樹は女子の友人らと席をくつつけて卵焼きをちびちびとかじりつつ談笑していたが、依子が歩いていくのを認めた瞬間、瞳をすこし薄めた。机に乗せた肘をさりげなく横へ突きだし、依子の腰にぶつけた。

依子はよろめきもせず、どころか表情一つ変えずに歩みを続け、何事もなく教室を出ていった。早川沙樹が嫌みったらしく顔を歪めて依子を見送る様子を、俺は視界の端にとらえたのだった。

そこで、俺は視線をそばに戻す。

鍋島はいつもの友達二人を合わせて、三人でお昼を食べていた。

俺の机と鍋島の机は、昼休みだけ一体となってその三人の食卓と化している。俺は邪魔だと言わんばかりに席を立たされ、仕方がないでうしろの棚に寄りかかり、鍋島たちの背中や横顔を眺めつつカツサンドを頬張った。

鍋島たち三人のガールズトークがまれにこっちへ飛んでくることがあったが、俺は「ああ」とか「うん」とか気のない返事を返すだけで、やはり会話の中心は女子三人の中でループした。

鍋島は会話に集中するあまり箸が進んでいなくて、依子がいつもどこへ弁当を食べに行っているのか、そんな気をかける暇もないようだった。

依子はいつも図書室で食べているんだろうな、と俺は勘ぐる。昼休みや放課後に依子が消失してしまうのは、やはり図書室が落ち着くからだろうと思った。

最後のカツサンドを口に入れ、俺はさっさと教室を後にした。

屋上へ上がり、タンクの裏へ煙草を吸いに行くと、ヘッドフォンをつけたままの原村がスケッチブックを広げていた。

よう、と声をかけると、原村は小さく右手を上げた。タンクに寄りかかって煙草に火をつけると、原村が顔を上げて、どうだった、という顔をした。

「マジで図書室に漫画置いてあったわ。ありがとな、しばらくあそこに入り浸るかも」

原村は頷き、またスケッチブックに向かう。ヘッドフォンからはオーケストラらしき音色が漏れている。

原村はいつも屋上から町の風景を描いていて、毎回同じ絵を描いて一体何が面白いのだろうと思ったが、原村はいつも音楽を聞いているし、彼とは今までほとんど会話を交わしたことがなかったので、今さら聞く気にもなれなかった。

分かるのは、ブレザーのネクタイの色から彼が二年生だということだけだ。

煙草を吸い終わると、原村に「お前も図書室来る？」と尋ねてみたが、彼は小さく手を振るだけだった。

それから、俺は図書室へおもむいた。やはり図書室の受付には依子が居たし、司書の宮下先生は今日も不在だった。

彼女は昨日と同じように勉強をしていたが、近寄ると、「開いてるよ」とだけ言った。

受付の内側に入る。依子のパイプ椅子の下には食べ終えた弁当箱が置いてあった。半ば本の倉庫と化しているそこはやけにかび臭く、古本屋を連想させた。俺としては、そんな場所で食事をする気にもなれない。

引き出しを開けてバガボンドの十六巻を手に取ると、昨日のパイプ椅子を探して首を傾げた。

「あれ、椅子なくね」

「今週の土曜、というか明日だけど、保護者会があるでしょ。宮下先生が椅子足りないからって、持ってた」

「そうなの？」

「やっぱ、いつも寝てるんだね、純って」

依子が呆れたような息を吐く。顔は参考書を向いたままだった。

俺は壁に背中を預け、そのまま滑るように腰を降ろす。

「先生が何度も言ってたじゃん。保護者だよりも出たし」

「保護者だより？ 捨てたかもしんねえ」

俺が漫画を広げつつ言うと、依子は顔にかかった髪を手で払いながらこちらを見る。

「あたしのあげよっか。ママ、どうせ来ないだろうし」

俺は吹き出しそうになるのを抑えた。我慢はしたが、それでも依子は察したようだった。

「なに？」

「道子叔母さんのこと、今だにママって呼んでんだなって思っってお前がママって、似合わねえ」

「ママはママだし」

それ以上のことは俺も言及しなかった。依子がこつこつ細なことで怒り出すのを見てみたい気持ちもあったが、今は漫画に集中しなかった。

「清志叔父さんは？」

「パパは寝たきりだから無理」

彼女の言葉を流しそうになって、俺は耳を疑った。

「はあ、なんで？」

「ちよっとした事故。バイクを運転してたら車とぶつかったみたいなんだけど、右足を骨折しただけで済んだよ」

「まだ入院してんの？」

「うん、もうすぐ一年になるかな」

「骨折って、一年も入院するもんなの？」

依子は何も言わなかった。聞こえていないかのように、ノートに英語の単文を翻訳している。

代わりに俺は、昔小さい頃に遊んでもらった叔父さんの顔を思い出す。記憶の中の叔父さんは、病気や怪我など俺には無関係だ、などと笑っていた。

何か他の事情があるのかな、とも思ったが、俺は黙って漫画を読み直した。

カリカリ、というシャーペンと紙の擦れる音がする受付室内は、漫画を読むのにはすごく集中できる。欲を言えば、ここで煙草も吸えたら最高なんだけどな。

昼休み終了まで十分を切ったところで、依子の手が止まった。図書室入り口のガラス扉の方を見ている。

俺もそちらを見ると、そこには依子を発見してしかめっ面をする早川沙樹が立っていた。早川の隣には同じクラスの友達も居たが、俺はその女子の名前を思い出せなかった。

入学して三ヶ月は経つが、クラスの生徒の名前は半分も覚えていない。

多分早川は、依子が図書室の受付をしていることなど知らなかったのだろう。早川は友達の手を引き、すぐさま参考書コーナーの奥に消えていった。

「いじめてくんのつて、あいつだろ？」

依子を見ると、彼女は早川のことなど意に介していないようにノートを読み返していた。

「直接話しかけられたことはないけど、周りから見ればそうなんだと思う」

「依子つてマジで周りに感心ないよな」

「そうだね。純に言われたくないけど」

やがて、早川とそのプラスアルファが早足で受付にやってきて、カウンターを叩くように和英辞書を置いた。そして依子が和英辞書に手を伸ばすところで「早くして」とあからさまに急かす。辞書を手にしたまま固まっていた依子が、ふと口を開く。

「学生証は？」

「は？」

「学生証がないと、貸し出しできないんだけど」

早川が眉根を寄せ、明らかかな不快感を示す。貸し出しつて学生証いるんだな、と俺も初耳だった。

「教室にあるわよ、そんなもん。ないと出来ないの？」

「うん」

「なによ、融通が利かないわね」

ご年配のクレーマーみたいだ。早川が隣のプラスアルファに向かって、あんたは持つてないの、と詰め寄るが、彼女も苦笑いで首を振った。俺は財布から学生証を取りだし、受付に顔を出してみる。

すると、早川が驚いたように一歩身を引いた。

「なんで今泉がそこにいんの」

「バガボンド読んでた。俺の学生証使えば？」

いいだろ、と隣で静かに鎮座している依子を見下ろすと、依子はすまし顔で頷いた。

早川はひるんだように俺が差し出す学生証を見つめたが、やがて引つたくるようにそれを受け取る。

依子は流れるような動作で学生証に記載されたバーコードを読み

とると、いつもの能面のまま早川に和英辞書を渡した。

「返却は再来週の金曜まででお願いします」

早川は舌打ちだけを返し、それから友達の手を引いて入り口へと向かっていく。一度依子と俺の方を流し見て、何かを呟いて出ていった。様子から、何か悪態を吐いたんだと思う。よく聞こえなかった。

「なんで早川、俺にビビってるみたいな感じなの」

尋ねると、依子は前を向いたまま「だって純、不良っぽいじゃん」とだけ言う。何だか腑に落ちない。

昼休み終了のチャイムが鳴り、もつとクラスと交流を図った方がいいのかな、と俺は思ったが、不特定多数の友人らに囲まれる自分を想像しただけで、もう肩が凝ってきた。じじい臭え。

その日の放課後。

帰ろうと自転車置き場へ行くと、そこには依子が忽然と立っ  
て、俺に一枚のわら半紙を手渡してきた。

それには保護者だよりと書かれていて、俺は昼休みの依子との会  
話を思い出した。

そういえば道子叔母さん来られないんだっけ。だからといって俺  
に渡されても、うちの親だってすげえ面倒臭がるだろうし、欠席に  
決まってるんだらうけど。

「よくそんなの覚えてたな。こんなとこで待っててくれなくてもよ  
かったのに」

「一緒に帰ろうと思って」

依子が言わなさそうな台詞ランキングというものがあつたら、こ  
れは間違いなくランクインしそうだなと思う。

「あ、そう」

依子といえはいつも一人で帰るイメージがあつたから、誰かと馴  
れ合いを持つとうとするなんて意外だ。でも、依子を相手にいちいち  
勘ぐっても疲れるだけだな。

自転車にまたがる俺を、依子は黙って見つめていた。

「なに？」

「乗せて」

何の冗談だよ。しばし沈黙するが、依子は明け透けな顔を保つた  
ままで、ここは俺が事情を訊かなきゃ先に進まないんだらうなと腹  
をくくる。

「なんで乗せなきゃいけないんだよ。お前、自転車あるだろ」

「ないよ」

「なんで。自転車通学じゃなかったっけ？」

「だから、ないんだってば」

そこでようやく彼女の言いたいことが分かった。盗まれたか、もしくは自転車が再起不能になったか。誰がやったかは大体想像はつくけど、あえてここでは触れないようにした。

「なんで鍵かけてなかったんだよ」

「かけてたけど」

依子が後方の地面を指さす。自転車置き場の片隅には自転車用のU字ロックが放置されていて、それはヤスリか何かで荒く擦り切られていた。ここまですんのかよ、といじめっ子の無駄な根気強さに薄ら寒いものを覚える。

「日にちをかけて切断されたみたい。一週間くらい前からずっと削られた跡が深くなっていつてたし」

「なんだそれ。つーか、いじめられてるくせに無防備なんだよお前。気づいてたなら鍵買い換えろ」

「いいから乗せて」

「俺が徒歩になっちまうだろうが」

「二人乗りでいい」

やっぱそうなるのかよ、後ろ髪を搔いてうなった。依子との二人乗りといえば、俺にとってはトラウマものでさえある。

小学生の頃の話になるんだけど、俺の通っていた小学校は自転車登校を禁止されていた。いまだき自転車オーケーな小学校なんてあまり聞かない。

自宅から学校まで割と距離があって、多分三キロくらいだったんだろうけど、小学生にとっての体感距離としては三キロメートルは計り知れないほどだった。そこで、俺は校則を破ることにしたのだ。

隠れて自転車で通い始めた。他の児童に見つからないような通学ルートを普段から研究し、試行錯誤を重ねたオリジナルの通学路を作り上げた。自転車は小学校近くのバス停小屋の影に隠し、素知ら



ぬ顔で校門をくぐる。

自転車はもしかしたら人類英知の結晶で、恐らく未来永劫なくなることのない乗り物なのではないか。老若男女誰でも乗れるし、燃料もいらないうし、なにより健康的だし。小学生の俺は真面目にそう思った。

しかし、その自転車を隠す作業をしているところを、運悪く依子に見咎められた。

あたしを乗せてくれれば告げ口しない、そう彼女は言った。それなら俺の真似をすればいいだろ、と反論したけど、当時依子は自転車を持っていなかった。

俺は震え上がった。小学生にとって学校の先生とは絶対的な存在であって、たとえ俺ですら逆らうことはできないのだから。

その日から毎日依子の自宅へ迎えに行き、通学途中の長い坂道と戦った。一人でなら耐えられる坂道も、二人分の体重を支えるとなれば地獄である。高学年になり、依子が遠い地へ引越すという知らせを聞いたとき、俺は心の中でひそかに万歳三唱をした。

悪夢が蘇ったような気分だった。

この高校に入学して依子と六年振りの再開をした瞬間もそうだったが、そのときよりも更に胃がもたれた。

幼少期の嫌な思い出とは、すべからず誇張されて人生の足を引っ張るものである。

依子は俺の返答をじっと待つばかりで、こっちがいくら嫌そうな顔をしてみせても退かないし媚びないし省みないしで、俺はもう諦めるしかなかった。

「分かったよ。でも、校門出てからな。恥ずいから」

こくりと頷く依子を背後に、俺は自転車を押してさっさと歩き出した。

学生鞆を肩にかけ直して、じっと前方を見て歩く依子の横顔をあ

おぎ見る。

「引っ越して思い出したけど、お前いつここに戻ってきたの」

「引っ越しなんて言葉、出たっけ」

「出なかつたっけ？」

俺の気のせいかな。

「パパが入院するからって、その関係で半年くらい前にお祖母ちゃんの家に戻ってきたの」

「へえ、そうなんだ」

「知らなかつたの？」

「うん、自分でもびっくり」

「適当に生きてるって感じ、純って」

俺は笑いを浮かべ頬をさすった。思い返してみれば、母ちゃんがちらりとそんなことを言っていたような気がする。言っていなかったような気がする。だめだ、忘れた。

「あ、乗せて」

気づけば、もう校門はとっくに越えていた。依子が前に乗ってくれないかな、と意地汚い期待を込めて依子を見つめたが、彼女には意味が伝わらなかつたらしく、ぴたりとも動かずに待っていた。諦めてサドルに跨り、親指で荷台を指して「乗れよ」と指示する。

「それ、ナンパするライダーみたい」

依子でも冗談を言うのか、と意外過ぎて俺は絶句した。しかし表情が冗談を言うにはそぐわない鉄仮面ぶりだったので、笑えばいいのかなのかしはばらく逡巡してしまう。それからようやく、「早くしろ」と俺は口を開いた。

十分ほど自転車をこいでみて、ようやくある疑問に思い当たった。

「祖母ちゃんちってどこだったっけ」

「それ、いつ聞いてくるのかと思った」

依子は後ろで横向きに座り、後ろ手に荷台の端を掴んでいた。小

学校の頃は普通に荷台に跨っていたのに、今はやけにフェミニンな乗り方をするんだなと違和感を覚える。しかもかなり不安定で、彼女を落つことさなにか不安で仕方なかった。

後ろから、依子が口頭で道順を指示してくる。適当に走っていたものの、どうやら方向はあっていたらしく、流れるように二人乗り自転車は進んでいった。

それにしても蒸し暑かった。額に前髪がへばりついてくる。俺は六月下旬が嫌いになった。

学校周辺の街道を抜け、二十分ほど進んでいくと、どこか見覚えのある道に出た。畑や田んぼが眼前に広がっており、民家の数などは目視で確認ほどである。右を見ると、山の裾野から海の青がちらちらと除いており、かすかに潮風の臭いを感じた。

祖母ちゃんの家へ行くのはどれくらい振りだろうか。随分と久しぶりなので、はつきりと思い出せない。祖母ちゃんがうちへ来ることはたまにあったが、祖母ちゃんの家へ行ったことなど数えるほどしかない。

しばらくして、右前方の畑の間を抜ける道を依子が指示してくる。そこは車一台がようやく通れそうなほどの細いあぜ道だった。あぜ道には車の轍わだちが伸びており、二本の轍の間には雑草が無造作に生えていた。

整備されていない道のためか、自転車はがたがたと不規則に上下する。俺はタイヤの状態を案じた。こんな道を毎日通学すればすぐに傷んでしまいそうだ。

前方に、見るからに古そうな日本家屋が見えてくる。祖母ちゃんの家だ。

そのとき、いきなり依子が俺の腹に手を回してきたので、思わずむせてしまった。

「暑苦しいんだけど」

「もつとゆっくり走ってくれないと落ちる」

「分かったよ」

速度を落としてみるが、不安定さは変わらなかった。むしろ速度が落ちたためにふらついてしまいそうだった。余計疲れるし、喫煙習慣と運動不足で痰咳は出るしで、ここ数日で最も気分が悪かった。依子の顔を見ると、彼女はどこか不満そうな顔をしていて、俺はまた腹が立った。そんな顔をするならお前が前に乗れと言いたかったが、でも祖母ちゃんの家は目前だから言い出せなかった。

「ほれ、着いたぞ」

玄関前で自転車を止める。

祖母ちゃんの家は俺の曖昧な記憶と比べればやけに小さく感じたが、田舎に立地されているためか、それなりに広さはありそうだった。

俺は少しずつ息を整えながら、胸ポケットから煙草を取り出して火をつけた。

依子は聞き漏らしてしまいそうなほど小さな声で、ありがとう、と呟く。疲れたからもつとちゃんとお礼言ってくれ、と返してみたが、依子はふてふてしくも押し黙った。

「道子叔母さんと祖母ちゃんはいねえの。挨拶していいのかな」

「今の時間は多分パパのそこ行ってる。ほら、扉閉まってるし」

言って、依子は学生鞆から鍵を取り出し、玄関を解錠する。玄関の戸を開きかけて、ぼつと突っ立って家を眺めている俺を一瞥した。

「帰らないの？」

「えっ、俺、帰るの？」

「うん、もう帰っていいよ」

「んだよ、人をこき使っておいてそりゃないだろ。お茶くらい出してけばーか」

ブーイングを漏らすと、依子はふうと息を吐いた。

「いいけど、本読むから邪魔しないでね」

依子は二階の自分の部屋に籠もってしまった。

仕方がないので台所でひたすら携帯をいじりながらお茶菓子を食い荒らした。一時間以上そうしていると、やがて夕飯を作りにきたという依子がやって来て、「食べ過ぎだよ」と言っただけの手からかりんとうの袋を取り上げた。

暇を持てあまし過ぎて、俺は家中を回って懐かしんだり、依子の調理する姿を覗きに行ったり、最後にテレビのお笑い番組を見て笑い転げていたりなどしていたが、そうしていると依子がポテトチップスの袋を持ってやってきた。

「これあげるからもう帰って」

「夕飯にありつけそうだから待つてただけど」

「正直だね。用意してあげようかと思っただけど、騒ぐ人は嫌いだから早く帰って」

依子は嫌悪感を目だけで表現してくる。しぶしぶ、ポテトチップスを受け取り、鞆に押し込んだ。そのとき、依子から貰った保護者だよりが見えて、それはところどころ破れてしわしわになっていた。でもせつかく貰ったし、とりあえず親には渡しておこうか。

俺は家を後にした。

辺りはもう暗み始め、腕時計を見ると午後七時を回っていた。髪が汗でべたついてたけど、それでも海の方からやってくる風は気持ちが良い。一度深呼吸を試みる。煙草を吸いながらキックスタンドを蹴り上げ、自宅へ向けゆっくりと自転車をこぎ出した。

あ、結局祖母ちゃんと道子叔母さんに挨拶できなかったな。

家に帰った頃にはもう八時を過ぎていて、俺は疲れあまり、すぐに居間の畳へと倒れ込んだ。

少しだけ寝ようとしたら、母ちゃんに「邪魔」と背中を蹴られ、俺は転がりながら居間の隅っこで小さく丸まった。

母ちゃんが食卓にしゃぶしゃぶの鍋を置き、「父ちゃんと雄二呼んできて」と命令され、俺はのっそり立ち上がり、弟と親父の部屋へ向かった。弟も親父も布団に寝そべって居眠りをこいてたので、母ちゃんみたいに二人とも蹴り起こした。そしたら弟の方と少し喧嘩になった。

家族四人で、もそもそとしゃぶしゃぶの豚を頬張る。

小学生の弟はさっき俺にぶん殴られて半べそをかいていたが、誰一人として慰めはしなかった。そのとき、俺が母ちゃんに保護者だよりを見せたために、注目はむしろそちらへ集中した。

「明日って、また急ねえ。これ、絶対出なきゃいかんの？」

母ちゃんが眉をひそめて保護者だよりを眺めた。やっぱり面倒臭そう。

「自由参加じゃね。知らんけど」

俺は豚肉の少なさに絶望しながら答えた。

横を見ると、弟の受け皿に豚肉が大量に積まれていた。弟が涙目であっかんべーをする。さっきの仕返しらしい。

まあいいけど。お菓子食いすぎてあんま腹減ってないし。

「年に一回くらいは出席しとけな、母さん。それに、純一が高校入って初めての保護者会だろう」

親父は眼鏡を曇らせながら味噌汁をすすった。汁が気管に入ったのか、二、三度咳をして、親父のでかい図体が揺れた。親父の唾が

あたりに飛び散って俺たち三人は顔をしかめる。

母ちゃんは保護者だよりを見つめて何か言いたそうにしていたが、その口を塞ぐようにレタスを食べた。

食後、弟はすぐに部屋に向かった。明日は休みだろうに、もう寝るなんて我が弟ながら感心だ。

親父と母ちゃんに、今日祖母ちゃんの家に行ったことを話すと、二人はテレビから俺へと視線をシフトした。

「道子はいたか？」

親父が顎を撫でながら言う。道子叔母さんは親父の妹である。

「いなかったよ。叔母さんも祖母ちゃんも、清志叔父さんのお見舞いに行ってた」

道子さんも大変よねえ、と母ちゃんが虚空をあおぐ。親父は黙ってビールを飲んだ。そんな雰囲気の中で清志叔父さんの容態を聞く気にはなれなくて、今度お見舞いに行ってみようかな、と俺はこっそり計画を立て始めた。

次に依子のことを話すと、母ちゃんがえらい勢いで食いついてきた。俺すら知らない、依子の武勇伝的なものを聞かされた。

母ちゃんによると、依子は中学で生徒会長をやっていたらしく、成績は学年で常にトップをキープしてたとか、男子にはモテモテだったとか、活発な子で友達もいっぱいだったとか、うだるような長話をしてきた。なにその漫画みたいな完璧人間。

俺は、とてもじゃないがその噂を信じることは出来なかった。

「本当、あんたが依子ちゃんと同じ学校に入れたことが奇跡よね」  
愚痴が始まりそうだったので、俺は自分の部屋に戻った。机で教科書を広げ、期末テストの範囲を追って勉強を始める。やっぱり学問は一人で学ぶに限る。

五時間ほど机に向かって、ふと壁時計を見れば、針は午前三時を指していた。一度伸びをして、風呂でシャワーを浴び、煙草を二本吸って俺はベッドに飛び込んだ。

そして翌朝。俺の目を覚ましたのは携帯の着信音だった。

俺は布団を被ってそのけたたましく鳴る着信音を拒絶する。しかしこれが一向に鳴りやむ気配がない。

しばらくして鳴り止んだと思えば、一分もしないうちにまた鳴り始める。一時、これは目覚まし時計のスヌーズ機能ではないかと疑ったが、どうかんがえても昨日の晩に目覚ましをセットした覚えはないし、そもそも曲が携帯の着信用に設定されたものだった。

鳴って切れて鳴って切れてが十分ほどエンドレスする中、今度は部屋のドアが蹴り叩かれるような音がした。

「兄ちゃんうるせえ！」

弟だ。お前がドア蹴る音のがうるせえ。

せっかくの休日なのにさんざんだった。

布団から手だけを出して枕元の携帯を取ると、その瞬間、また着信音は止まった。せっかく出ようと思ったのに。怒りに任せて壁に携帯を叩きつけてやろうかとも思った。

携帯を開くと、寝起きにはきつい液晶の光が瞼を刺激する。ちょっとだけ瞼を開くと、着信十六件と表示されていた。どこの阿呆だよ。

また着信が来る。通話ボタンを押すと、最近やたらと関わりが出てしまった親戚の声が、「迎えに来て」と言った。

無視して切ろうかともくろんでいた所、声はまた「自転車で来て」とやたら滑舌よく補足してきた。

「挨拶くらいしろバカ」

「おはようございます」

依子は無感情に言う。一昔前に流行ったファービー人形でももつとマシなりアクションをしてくれそうなものだ。俺のペースも乱されそうだったから、俺はさらに苛立ちを表現してみる。

「あと俺の睡眠妨げたから謝れ」

「ごめんなさい」



声のトーンは一ミリも変わっていないようで、俺はやむなくため息だけを吐いた。

「なんか用？俺が寝ながらも大丈夫な用事にしてくれ」

「出掛けなきゃいけないから、自転車を迎え来て」

「やだ。俺の家までくりや貸してやる」

「あたしと純の家って、どれくらい離れてるかな」

「十キロくらいじゃね」

俺は適当に答えた。昨日ゆっくり走って一時間かかったから、多分それくらい。

依子が黙った。電話越しに息づかいすら聞こえてこないから、居なくなってしまうんじゃないかと疑ったが、名前を呼ぶと「なにとだけ返ってくる。会話は続かない。」

「ママは今日仕事だから、送ってもらえない。お祖母ちゃんは畑仕事」

「あつそ」

また依子が閉口した。無言の怒りを伝えたいらしい。俺だって怒りたい。休日の早朝から駆り出される身にもなってほしい。

沈黙はそれから五分ほど続いた。切ればよかつたんだけど、無言の依子を相手に電話を切れれば後で生き霊となって呪い殺しにきそつだったから、俺は激しくこめかみを搔いて半身を起こした。

「行けばいいんだろ行けば！」

「ありがと」

依子が即座に電話を切った。やり場のない怒りを壁にぶつけたら、壁が「兄ちゃんうるせえ！」と返事をした。

依子の家に着いたのは十一時ほどで、俺は依子と祖母ちゃんと素麵を食べた。

相変わらず空気はじめついていたけど、空は絵に描いたような晴天で、縁側には早くも風鈴が取り付けてあった。時期の早い夏を堪

能する。

祖母ちゃんは昔と変わらず無口で、俺との久々の再会を果たしたのが嬉しいのか、ずっとここにこしていた。素麺を食べ終えたあとヨーグルトを食べさせられ、煎餅を勧められ、梨を無理矢理食わされたりで、満腹だと言っても祖母ちゃんは「そんなんじゃないや大きくならん」と、食べ食べ攻撃を止めなかった。

祖母ちゃんはそのあと畑仕事へ向かった。ようやく昼寝できそう

だ。  
しばらく縁側に寝転がっていると、依子がやってきた。俺のそばで足を崩して座り、「図書館行ったり買い物行ったりするけど」とだけ言う。

「俺の自転車使っただろ。いいよ、使えば」

「純も来る？」

「いい。寝る」

図書館も買い物も興味がなかった。昨日はまともに寝なかったから、昼寝もしたいし。

すると、大根をいっぱい抱えた祖母ちゃんがひよっこりと顔を出して、「デートかい、行ってくりやええ」と笑い、農具庫の方へさっさと行ってしまった。梅雨の晴れ間の畑仕事は忙しいらしい。

「パパのお見舞いも行くよ」

たたんだ座布団の上に頭を乗せたまま、ぶら下がった風鈴を見上げて俺は考える。外から温風がやってきて、俺の前髪と依子のスカート揺らす。

「清志叔父さん、どこの病院いんの」

「駅の近くにある中央総合病院」

「ここから歩いて五十分ってどこか」

「分かった。ちょっと寝たら、歩いて行くわ」

依子は頷いて、縁側のたもとに並べられたカジュアルサンダルを履いた。俺の自転車をこぎ出し、ガタガタあぜ道を進んでいく。依子の小さな背中を見送りながら、俺は瞼を閉じた。

三時間ほどで目が覚めてしまった。

日が暮れてしまわないうちに早く出かけてしまおう、江戸時代の庶民のような感覚で、時計も確認せずに縁側のスニーカーを履いて外に出る。

真っ昼間はあるなに晴れていたのに、空は灰色の雨雲に覆い尽くされようとしていた。それに気づいたのは祖母ちゃんの家を出て十五分ほど歩いてからで、今さら傘を取りに戻る気にはなれなかった。一面に広がる田園風景は弱冠十五歳の俺には少し退屈で、よくこんなコンビニもカラオケもゲーセンもないところに住めるものだ、と依子の立場を不憫に思ったが、そもそも依子は本さえあれば他の娯楽など必要なさそうだ。

左を見ると、背の高い石造りの鳥居がぼつんとあって、人の姿も確認した。木々に隠れた奥に石段が伸びていて、そいつはその石段をゆったりとした足取りで降りてくる。

見覚えのある顔だったので、俺は足を止めた。

「原村あー」

鳥居をくぐりつつ原村が手をあげる。

原村はこの曇天空のような色のスウェットにサンダル履きという俺が深夜にコンビニに行くような格好をしていた。原村が近づいてきて分つただけで、彼は脇にスケッチブックやその他画材道具を抱えていて、よく見ると彼は目の下にクマをつくっていた。

何をしていたんだと尋ねると、原村は後ろの鳥居を指し、一晩中神社の絵を描いていた、と答えた。

「数時間くらい前か、平野が来てね」

「あいつが、その神社に？」

原村はだるそうに頷き、ぼさぼさのマッシュルームカットを掻いた。

「平野がお参りしてたからさ。あーちょっと君、モデルになってよって頼んだんだけど、なんか断られた」

「なんでまた依子を」

「なんでって。いい背景には美少女と決まってるだろう」

原村は当たり前のように言うが、俺にはよく意味が分らなかった。彼は器用にあくびをしながら笑い、「じゃあ僕は家に帰るよ」と目を半開きにさせて歩き出した。どこへ行くのだろうと眺めていたら、何故か俺の方に寄ってくる。

原村が猫背気味に、頭から俺の胸にぶつかってきた。

「俺はお前の家じゃないぞ」

自分の口から出た台詞がやたらと新鮮だった。

「ごめん」

原村はきよろきよろと辺りを見回し、こっちか、と呟いて俺の歩いてきた道へとふらふら進んでいった。

彼は背中に丈の長い懐中電灯を背負っていた。一晩中って言うだけど、今ってもう夕方だよな。いつからあの神社にいたんだろう。

清志叔父さんの入院しているという病院に到着して、ようやく気付いた。見舞い品を何も用意してきていない。

幸い病院内に売店があって、俺は今日発売のONEPIECE最新刊を購入した。

偶然、受付ロビーには依子が居た。ちょうど彼女も今来たばかりらしい。

受付を済ませ、依子と二人で叔父さんのいるという202号室へ向かった。

叔父さんは半身を起こし、テレビでスポーツニュースを見ていた。俺の顔を見て、「純一か。でかくなつたな」と、ひどくこけた頬で、どこかうすら寒い笑みをたたえた。

叔父さんは昔、地区の少年サッカーの監督をやっていて、俺もそ

のチームに所属していた。普段は温厚なのに、少年チームの指導で啖呵をとばして子供たちを引つ張る姿は、今だから言うけど、俺たちに畏怖と尊敬を交錯して抱かせたものだった。

少し痩せたくらいで顔は変わっていないのに、清志叔父さんの纏う空気は色の沈んだ深淵を思わせた。俺は何を言うべきか分からず、簡単な挨拶とおおまかな身辺情報だけを報告した。

ONEPIECEの最新刊を手渡すと、叔父さんは「俺の中ではグランドラインに入ったあたりで止まってる」と気難しい顔をし、「まあ、これを機会に続きを読んでみるかな」と、また笑った。俺は何も言えなかった。

依子は叔父さんの横で梨を剥き始めた。俺が祖母ちゃんの家で食った梨。

「純一、サッカーはまだ続けてるか？」

「……いや、中学で辞めた。才能がなかったから」

俺は柄にもなく口ごもった。

「何言ってる。才能なんて努力したあとに出てくるもんじゃないか」「努力する才能がなかったんだ」

嘘を吐く。本当のことは言わなかった。俺はあえて、叔父さんが怒りだしそうな言葉を選んだのだから。

叔父さんは俺を見つめて口を閉ざしたが、ずっとテレビに視線を戻して、「なるほど、それじゃあ仕方ねえな」と寂しそうに漏らした。

そんな叔父さんを見て、俺は叔父さんに対してかまを掛けたことを激しく後悔した。

歳を取って丸くなったとか、そういう部類の話ではないように思う。文字通り、『人が変わったよう』だった。

俺は叔父さんから目を逸らして、依子の手元の梨を見つめた。依子が梨を八等分してから、顔を上げる。

「依子、食わしてくれ」叔父さんは言った。

依子が手を添え、叔父さんに梨を食べさせる。叔父さんの顎がゆ

つくりと咀嚼を始めた。長く、のろい咀嚼だった。

依子は一度皿の上に食べかけの梨を置き、叔父さんが飲み込み終わるのをじっと待った。

「うめえな。林檎もうまいが、俺は梨の方が好きだ」

叔父さんが噛みしめているのは、梨の味だけではないんだろうな。俺は腹のそこで考えた。

病院を出てまもなく、依子が「パパ、脳梗塞なんだ」と短く言った。

俺が空を見上げ、コンビニで傘買っていいこうぜ、と言いかけたときだった。

依子は自転車を押し、うつむきながら歩いていた。いつものように表情に変化はなかったけれど、依子が今にも泣き出すのではないかと、俺は気が気でなかった。

自転車のかごには、図書館で借りたらしい本と、夕飯の食材、そして買ったばかりらしい上履きの箱が入っていた。買い物ってこれのことか、と今さらながら気付く。

そのうち雨足が立ってきたので、依子が折傘を取り出した。俺は周囲を見回しコンビニを探した。

「俺も傘買わねえと」

「いいよ、入れてあげる」依子が折傘をよこしてくる。「お金もつたいないでしょ」

依子が俺に優しさを見せてくるなど、今まで何度あっただろうか。俺はひそかに感動し、傘を広げた。

相合傘では、傘を持つ側が気を使って相手ができるだけ濡れないように配慮することが多い。今回、少しだけ依子に感激してしまつたので、俺もそれに倣って彼女の方へと傘を傾けた。

依子ちゃん、いじめられてるの？

翌日、日曜日の朝。

朝飯どきに母ちゃんが出してきた話題は、昨日保護者会のあとに鍋島の母親から聞いたという噂だった。母ちゃんは心配そうな顔で訊いてきたけれど、俺にはただの野次馬にしか見えなくて嫌な気分になった。

気晴らしで駅前のCDショップへ行つたときに早川沙樹に出くわして、さらに気分を削がれた。

「今泉じゃん。何してんの？」

棚に隠れてやり過ごそうとしたが、無駄だった。早川はやけに嬉しそうにしていた。

「CD買いに来ただけ」

「暇？」

「まあな」

「ちよつとだけ、私の買い物付き合ってくんない？」

ね、ね、と早川がねだるように見上げてきて、本当に反吐が出るような思いだった。

俺の横を歩きながら、早川はひたすら前髪の位置を気にしていた。対して変わらないのに、何をそんなに気にする必要があるのだろう。早川は髪を後ろで一つにしぼっており、後れ毛が微妙にあったので、むしろそっちの方をなおした方がいいんじゃないかと思っただが、本当に数本ほどだったので指摘するのは止めておいた。

でも、俺もトイレ行ったときは一応鏡で髪型気にしたりするしな。そんなもんか。

俺は早川に連れられて、駅に隣接しているマルイに向かった。本当は断って、さっさと帰ってCD聴きながら漫画でも読みたかった。世の中には、悪い意味での誘い上手って奴がいる。誘う対象に予定がないと分かれば、何が何でも誘いこもつとするあれだ。断っても意味はない。「でも予定ないんでしょ？」で押し切ってくる。相手の気持ちを汲む気はないようだ。

それとも俺に主体性が足りないせいかもしれない。早川の方を流し見ると彼女と目が合い、煮えきらないような笑みを向けられた。

「どうした？」

「んーん、なんでもない」

これはただの推測で、俺の勘違いだったら恥ずかしいのだけど、もしかして早川は俺に気があるんじゃないだろうか。だとしたらすごく面倒なことだ。だって俺は早川をそんな目で見ることはないのだから。というより、あまり彼女のことをよく思っていない。はっきり言って。

俺の勘違いだといいなあ。



日曜日というだけあって、マルイの店内も混んでいた。

人混みはあまり好きじゃないので外で煙草でも吸って待っていたかったが、それを言えば早川に怒られてしまいそうだ。

早川は水着売場へ入って行った。夏休みに友達と海水浴やプールに行く予定があるのだという。ならば何故俺と来る必要があるんだ。俺は売場前で待っていた。

しばらくして早川が水着を三着持ってきて「どれがかわいいと思う？」と訊いてくる。かわいいという基準で考えて、三着とも俺には違いがないように思えた。でも、「どれもいいよ」という言葉は女子には禁句だどこかで見聞いた覚えがあるので、「全部かわいいと思う」と答えた。

早川は俺の返答が不服だったようだ。なるほど、どれも同じくらいかわいい、という回答は求めていないらしい。要はどれを選べばいいか意見が欲しいと。

早川が水着を買い終えたのは四十分ほど経ってからだった。水着一つで、結構人生損している。

これでやっと帰れるな、と安堵していると、今度はすぐ近くの映画館に連れられた。

観たい映画があるという。

早川が受付で示した映画はピクサーアニメの最新作だった。

「高校生が観るようなもんじゃなくね？」

「なめてるわね、ピクサー」

ポップコーンを一粒口に放ってから、早川は小さく笑う。俺はチケットを見つめた。

映画を観終わった結果から言うと、俺は不覚にも泣いてしまった。最近の映画は3D映像を楽しめるようになっていたのだが、あまりに心打たれるシーンがあったため画面を観ることができなくて、下を向いたら3Dメガネにぼたぼたと涙が落ちてしまった。それで顔上げたら視界が水中のようになった。

映画館を出て、早川が俺の顔を指して笑う。

「今泉目え真つ赤。おつかしー」

などと嘲笑してくる彼女の鼻頭も赤かった。しかし俺ほどの号泣ではなかったので、俺は恥ずかしくなって顔を背けた。

次にマックへ行って、それから帰ろうと早川が言う。俺は心の中でガッツポーズをした。早く済ませて家でCDを聴こう。

マックへ行くのは久しぶりだったので、奮発してビックマックを注文した。俺がビックマックの食べ辛さに苦戦している横で、早川はひたすら学校の話をしていた。

あの話題を振ってきたらどうしよう。そんな風に考えた矢先、謀ったかのように早川はその話題を出してくる。

「そうそう、この前平野がね」

陰口つてやつだ。依子は根暗だとか、話しかけても無視するし感じが悪いとか、実は男好きだとか、そういう内容を山もなく落ちもなく早川は延々と語り続けていた。

やっぱり俺はこれが苦手だ。フェアではない。

ビックマックの味が途端に薄れた気がして、食べるのが辛くなってきた。俺は食べかけのビックマックを置き、煙草を吸おうと思っただが、ここが禁煙だということに気付いて、出しかけた煙草の箱を乱暴にポケットに戻した。

早川がそんな俺を見て話を止め、少休止を入れるようにストローをくわえた。

「なんか、怒ってない？」

「いや、全然」

舌打ちをしそうになる。原因は様々だが、最近精神的に不安定だ。「この前、図書室にいたじゃない？」

早川の声は低く、小さかった。視線だけ向けると、早川は遠慮がちに口を開いた。

「平野と仲良くしてたみたいだけど、どういふ関係なの」

「いとこ」

そうやって即答してみたら、早川は唇を歪め、じっと俺を睨んできた。

「ふざけないで」

「冗談だと思われたらしい。」

「ねえ、付き合ってるんだよね、平野と。だから平野の悪口言つと怒るんだよね」

「違うよ。俺はただ陰口が嫌いなだけ」

「なら最初からそう言えばいいじゃない。おかしいよ、だっていつもは優しくしてくれるのに、平野の話のときだけ素っ気ない。隠してるんでしょ、付き合ってること」

俺、早川に優しくしたことなんてあつたっけ。言い淀んでると早川がだんだん確信を持った顔をしてくるので、なんだかもう、俺はやけくそになってきてしまった。

「だってお前、依子のこといじめてんだろ。そりゃあそんなやつ陰口直接聞いたら嫌な気分にも」

「依子、って呼び捨てなんだ」

早川は俺の言葉を遮って、問い詰めるような表情をつくった。

「……いとこだしな」

「へえ、そうなんだ。ふうん」

何を言っても通じない雰囲気だ。人と対話している気がしなくなってきた。

「つか、なんでそんなこと気にすんの。まさか、まだ俺のこと気になってるたり？」

「冗談混じりに笑いながら言ってみた。早川は我に返ったような顔をして、視線を落とす。ぶつぶつ何か漏らして、それっきり黙ってしまった。」

そんな早川の反応に俺は愕然とした。なんだか、俺の勘違いとは言えなくなってきた。

場に流れた空気が一転する。全身の毛を逆撫でするような気持ち

の悪い感じ。

その雰囲気はマツクにいる間中続き、帰り別れるときでさえ、ほぼ無言の状態だった。本当に明日が心配になる。できればほとぼりが冷めるまで学校をサボりたかった。

翌日。悩んだ挙げ句、サボることに決めていたのだけど、五時くらいに依子の電話で叩き起こされた。自転車で迎えに来てくれ、という用件だった。

さすがにそこまで面倒は見きれないと断ったが、例のごとく依子は食い下がってくる。土曜日の朝と同じ流れだったが、そういえば今日は弟の小学校が休みなのを思い出した。週末に修学旅行があるため、その振替休日なのだ。

弟に頼んでみたところ、あっさり了承してくれた。昔からこいつは依子に懐いていたので、楽な交渉だった。多分弟は自転車なしで歩いて帰ることを計算に入れていないのだろう。馬鹿め。

弟は母ちゃんの自転車を一日だけ借り、依子の家へ派遣された。八時になり、俺は自分の自転車で悠々と学校へ向かったのだが、学校に着いて「今日も微妙に遅刻しちまったなあ」と一人呟きながら、ようやく気づいた。

あれ、俺サボってねえ。

放課後になつて、俺は図書室へ向かった。昼休みは生徒指導室に呼び出されていたので行っていない。理由は言うべくもないな。

いつも通り依子は受付をやっている、宮下先生も不在だったが、今日は何故か原村が居た。原村はパイプ椅子に座ってバガボンド十七巻を読んでいた。俺がこれから読もうと思つてたやつ。

「僕、図書委員長だからね」

原村はヘッドフォンを外し、へらへらと笑いながら言う。彼がこ

ここに漫画があることを知っていたのにも合点がいった。俺はパイプ椅子をもう一脚出して原村と向かい合うように座った。

原村が十七巻を読み終わるまで携帯をいじって待っていたんだけど、この日、結局俺が十七巻を読むことはなかった。

受付に、早川沙樹が来たのだ。

昨日のマツクのような空気が再来する。俺は受付の影に身を隠そうとしたけど、あっさり早川に見つかって、ばっちり目が合ってしまった。

「今日も二人つきりで受付番してるんだね」

俺はぽかんと口を開けた。原村居るんだけど。

見ると、原村は壁に隠れるように寄り添っており、何か面白そうに口元を緩めていた。どうやら早川からは彼が見えていないらしい。早川は和英辞書をカウンターに置き、「返却」と高圧的に言った。しばらく場が沈黙する。そうだ、俺の学生証使ってたんだっけ。慌てて財布から学生証を出し、依子に渡した。

早川が睨むように依子を見下ろし、俺がげんなりとした表情でそれを見守る中、依子だけはいつもの無表情で作業をする。雰囲気でなんとなく分かるだろうに、依子の神経の太さが羨ましくなった。

「ご利用ありがとうございます」

にべもしゃしゃりも無く言っただけのシャーペンを取ろうとする依子の頭上に、早川の突き刺すような言葉が降りてくる。

「平野さん」

「なに」

依子はもう片手間に数式を解き始めていた。早川は憎々しげに依子を見下ろして、今にも怒声を張り上げそうだった。携帯を操作するふりをしてやり過ぎそうとした俺だったが、もはや早川が何を言おうとしているのか先読みしてしまったので、非常に迷ったが、やむを得まいと携帯を閉じた。

「付き合っただけで昨日言っただけ」

すぐに早川がこちらを見てくるので、俺は目を逸らした。逸らし

た先に原村の顔があつて、彼はにやけ面を余すところなく顔面に晒していた。ちくしょう、人の気も知らないで。

「いとこなんだって。なあ」

耐えきれず、事実確認を依子に振ったつもりだったが、依子は気づいていないのかうんともすんとも言わなかった。どころか、この話にあたしは関係ないですよと言わんばかりに参考書に目を落としている。俺はその呑気な頭に手刀を振り下ろしたかった。

「いとことか、関係ないわよ。私の友達にいとこと付き合ってる子いるし」

知るか。

「それに私、見たのよ」

「何をだよ」

何を見たのか知らないが、早川は破滅的に声を震わせていた。

「この前、あんたたち仲良さそうに二人乗りしてたでしょ」

「だからなんだよ。依子の自転車が盗まれてたから仕方なかったんだよ」

「知ってる。私が盗んだんだもん」

ぶっちゃけてんなあ、予想通りだけど。

「それに、それに、一昨日なんか、相合傘してた」

こいつは依子が俺をストーカーでもしているのだろうか。

早川はもう泣きそうになっていた。自分で自分の言葉にショックを受けているようだった。原村がそれを聞いて七福神のえびすのような笑顔をした。今だけは笑えない。

「それで？」

「それで確定じゃん。違うっていうの？」

俺は後頭部を激しく搔いて立ち上がった。立ち上がったはいいものの、何と返せば信じてもらえるか分からなかった。

妄想が一人歩きしている。ここで俺がどう弁解しても、早川はきつと信じないだろう。苛々してくる。煙草を吸いたい。

「ねえどうなの。黙ってないでなんとか言つてよ」

「付き合ってねえよ。俺は誰とも付き合ってねえし、誰のことも好きじゃない。ただな、」

言いかけて、息を呑む。続きを言っしまえば、予想も想像もできないけれど、何か悪いことになりそうな気がする。しかし早川の顔を改めて見つめたら、どうしても俺は鬱憤を晴らさずにはいられなかった。

「ただ、俺はお前が嫌いだ」

早川の表情が蠟で塗り固めたように硬直する。

「聞こえなかったか？ 俺は、お前が」

「もういい」

依子だった。シャーペンをノートに叩き、依子は椅子を蹴るように立ち上がっていた。音に反応して、図書室内の生徒全員が目がこちらへ集中する。

深いため息をついたかと思うと、依子は唐突に俺の方を向いた。

「付き合ってるとか、付き合ってないとか、本当にくだらない」

依子が一步一步、俺へと近寄ってくる。俺は反射的に後ずさったが、すぐに背中が本棚にぶつかった。

引っぱたかれると思った。もしくはぶん殴られるのかと。理由は分からないし、過去に依子から暴力を振るわれた経験もあるっちゃあるのだけど、とにかく彼女の表情の裏には確かな怒りが宿っていた。

依子が俺の肩に手を置き、俺は思わずびくりと震え上がってしまった。誰かがはつと息を呑む。俺も息を吸いたかったけど出来なかった。

依子が少し背伸びをして、俺と唇を重ねていた。依子の髪の毛の香りが鼻腔をくすぐる。

ひゅっ、と原村が口笛を吹く。短いキスで、俺は呼吸すら出来ずに固まっていた。唇が離れた直後、依子の顔がすぐ目の前にあって、こんなにも接近して彼女の顔を見たことがなかったから、少しだけ新鮮だった。

「こんなものに意味なんてない」

依子は早川の方を振り返り、突き放すように言い捨てる。早川はまた、さっきの泣きそうな顔をした。

早川がすすり泣きながら図書室を出て行ったあと、原村は勉強を再開した依子に向かって「かけえ、まじかけえよ平野」とたえず賞賛の拍手を送っていた。俺はパイプ椅子にうな垂れて座り、ぼうつと天井を見上げる。

「なんてことしてくれたんだよ依子。二重の意味で」

キスしてきたことと、早川を再起不能並に傷つけたこと。後者は俺の言えたことじゃなけど。

「ごめん」

「何気に初だったんだけど。初がお前って」

「ごめんってば」

依子は苛立たしげにノートに数式の解を書き殴る。いつしか原村は拍手喝采を止め、嬉しそうにバガボンド十八巻を開いていた。もう十七巻を読む気は起きない。

ふと依子が手を止め、未だざわつく図書室内を見つめる。

「なんであの子、あんなにしつこかったの」

この場合、依子へのいじめではなく、俺のことを指しているのだろっ。

「中学、早川と一緒にだったんだよな」

「それがなに」

「昔、あいつに告られたんだよ。振ったけど」

「そうなんだ」

俺は再び顔を伏せ、目頭を抑えた。胸に手を当て、ゆっくりと深呼吸をする。本当に、心臓に悪かった。



今日は本当に、学校なんか来なければよかったと後悔している。昨日の図書室での出来事は目撃者が致命的に多かった。七月に入り、期末テストも目前に迫っていたから、あの時間に図書室を利用していた生徒は三十人ほどはくだらなかつただろう。噂が広まらない方がおかしい。

俺もあの直後は浮き足立っていたので、後のことを何も考えていなかった。図書室が閉まって、依子と原村と自転車置き場に行く途中、部活をする生徒たちの視線がやたらと気になるな、とは思っていた。もうあの時点でそこそこに広まり始めていたんだ。

朝、登校して一番に、三人の女子生徒に囲まれた。鍋島とその仲間たちだ。その三人の勢いに、俺は訳も分からずたじろいでいた。

「平野と付き合ってるってマジ？」

開口一番そう訊いてきたのは、鍋島より少し背の低い女子だ。ショートカットで赤縁眼鏡、活発そうなきりりとした目鼻立ち。名前には、忘れた。

俺がどう答えようかと逡巡していると、間髪入れずにまた横やりが入ってくる。

「その情報は間違いだよ村瀬ちゃん。中学のころ今泉くんが平野さんに告白して、それでふられちゃったもんだから昨日無理矢理平野さんにキ、キスをせまって……だよ、ね？」

変な噂の広まり方になっている。そもそも俺と依子、中学違うし。しどろもどろに語ったのは先ほどの女子よりさらに小さい、まるで小学生のように華奢な女子。いかにも大人しそうな小さな口で、とろんとした二重瞼が控えめに俺をとらえている。この女子の名前も忘れた。

いや、思い出した。たしか鈴木。

「その前に二人は親戚同士なんですよ。間違ってるのは城川さんです！」

全然違った。鍋島はじれったそうに友達二人を押しつけ、切迫して俺へ詰め寄ってくる。

「どうなんですか今泉くん。いとこの上、付き合ってるなんて、異常です。それに、それならそうとどうして私に教えてくれなかったんですか」

鍋島、村瀬、城川の中、小、極小トリオに三包围を塞がれた俺は、自分の席を立つことも出来ずに三人の好奇と期待と憤怒の視線にさらされた。気付けば、すでに登校している生徒みんなの目もこちらへ集中していた。恐らく入学以来最も俺が注目された瞬間だろう。

俺は額に冷や汗を浮かべ、目だけで教室内の様子を追う。どこを見ても誰かと視線が合って気持ちが悪かった。

「ねえ由多加、どちらにせよ、平野と今泉、図書室の面前でキスしたらしいじゃん。風紀委員として注意してあげなよ」

茶化すように鍋島の背中をつつくのは村瀬だった。鍋島が風紀委員だとは知らなかった。城川がおずおずと小さく手を上げる。

「いとこって本当？ 全然似てないけど、というか、正反対みたいな……」

「本当らしいよ。隠してたんだよね、今泉も平野も。ますます怪しいよねー」

村瀬はケタケタと笑い城川の肩に手を回す。城川が慣れた手つきで村瀬の手をどかした。村瀬はスキんシップの多い女子らしい。

「や、隠してたわけじゃ」

「付き合ってたことをですか？」俺の言葉に即座に反応する鍋島の顔は、どこか怒っているようだった。

「そうじゃなくて」

「じゃあどういうこと？」村瀬。

「親戚だっただけを隠してたわけじゃなくて」

「隠してたわけじゃ、なくて？」城川。

「ともかく、付き合っただけじゃないってこと」

「じゃあどうしてキスなんてしたんですか」鍋島。

「知らねえよ。その場の流れで」これは説明するのが面倒だ。

「今泉って場の流れでキスするようないやつなんだ。うっわー」城川。  
「いや、これは村瀬か。」

「俺からしたわけじゃなくって」

「平野さんからだったの……？」城川。

「まあ、うん」

「そっちの方が、ますます信じられませんか。あの平野さんが、絶対あり得ません」これは……村瀬じゃない。城川でもない。鍋島だ。

「本当なんだよ。流れでやむをえず。やむをえずってのはおかしいけど、とにかく依子から」

「うっそだー。どうせ今泉が無理矢理やったんでしょ。言い訳しないで正直に言いなよ。ほら、あそこで密かな平野ファンが泣いてるよ。土下座した方がいんじゃない？」

だんだん三人の顔の見分けがなくなってきた。恐らく村瀬だと思われる女子が後方の席を指した。

彼女の指す席には、長めの黒髪をジェルでぴっちり固めた男子が座っていて、そいつは耳を塞ぎ、机に突っ伏して肩を震わせていた。名前は確かロベルトだったと思う。俺の覚え違いだったらいいけど。

俺もロベルトの真似をして机に突っ伏した。耳を塞ぎ、鍋島ら三人の詰問から逃れる。そうしていたら三人から身体を揺すられたり頭を軽くどつかれたりしたが、俺は必死に耐えた。

そのうち依子が教室に入ってきて、その瞬間、教室内は水を打ったように静まり返った。少し顔を上げて依子を確認してみると、彼女は扉を開けたまま教室内の不穏な様子に首を傾げたが、すぐに自分の机へ向かい、すぐさま参考書を広げていた。

静かな教室でただ一つ聞こえてくるのは、ロベルトのすすり泣く声だけだった。

昼休みになって気づく。早川は今日学校を欠席していた。早川を中心に取り囲んでいた女子グループは今日は大人しく弁当箱をついている。

相当なシヨックだったのだろう。俺も早川の立場だったらと想像を巡らせてみるが、俺は早川ほど誰かを好きになったことがないので、いまいち真に迫る感覚は掴めなかった。

期末テストが来週に控えていた。俺は例の図書室事件とテスト勉強のため、しばらく図書室へ行くことは止めた。そして依子ともあまり関わらないようにもする。依子には母ちゃんの自転車を借りさせたままだったし、俺が図書室に来ずとも彼女にはなんら影響はなかったので、つまり少し前までの俺たちに戻ったわけだ。

図書室事件の翌日は学校中の生徒からの視線に晒されていたが、そんな憤ましやかな生活を経て、日を追うごとに騒ぎは鎮火の一途を辿った。結局、依子と付き合っているという話は嘘情報として認識されつつあったが、一部の生徒ではまだ疑いを持つ者がいたようだ。

ある日、男子トイレに行ったらロベルトと鉢合わせることがあった。そのとき、そのトイレに居たのは俺とロベルトだけだった。

ロベルトは俺を認めると、敵意を含んだ目をしていきなり俺の胸ぐらを掴み上げたのだ。

「お前が平野をたぶらかしたんだな。平野はお前みたいな不良とは釣り合わないんだ」

ロベルトの髪は今日もてかてかに固められていて、俺はゴキブリの表皮を思い出した。歯をかちかちと鳴らして、今にも噛みついてきそうだった。

「なんとか言え！ よくも、よくも平野の初チツスを」

言い回しの古臭さに思わず笑ってしまった。ロベルトは、何がおかしい、と俺の身体を揺すって怒り出した。そのうち「援交の噂もお前が流した」とか「平野の上履きもお前が隠したんだ」とか支離滅裂な言いがかりをつけてきたので、俺はだんだん腹が立ってきた。「校舎裏に行くぞ！ ぼこぼこにしてやる」

そうロベルトが言うので、そんな面倒なことはせずともここで叩きのめしてやる、とばかりに拳骨をロベルトの頭に振り落としてやった。するとロベルトは鼻水を垂らしてその場で泣き崩れてしまった。

他の男子がトイレに入ってきて俺たちを気にするように見てきて、流石にばつが悪くなった俺は「悪い、大丈夫かロベルト？」と声を掛けたが、俺の伸ばした手はロベルトによって弾き返された。

それから涙声で「俺は曾根本だ！」と一喝されてしまった。覚え違いでよかったと俺は安心した。

その翌日。曾根本は学校を欠席した。理由は早川と似たようなものだろうが、彼のことはどうでもいいのでフェードアウトする。

問題は早川で、彼女はまだ学校に来ていない。

早川が登校してきたときのことを考えると憂鬱で仕方がなかった。出来れば夏休みが始まるまで登校してこなければいい、とも思った。

しかし、期末テスト二日前になって、早川は学校に来た。朝、容態を心配する友人らに迎えられた早川だったが、早川は生気の抜けた声で「大丈夫よ」とだけ返して自分の席に座った。俺はぞつとした。目がすわっていて、以前の早川とは一線を画しているような、そんな印象を受けた。

早川はクラスメイトに話しかけることもなく、一日中席に座ったままだった。依子以上に近寄り難い雰囲気を発散していた。

昼休みになって、煙草を吸いに屋上へ向かった。

原村が流れるような手つきでスケッチブックに絵を描いていた。ほとんど街の風景を見下ろすこともなく。多分、何度も何度も描いているうちに覚えてしまったのだろう。そんな原村を眺めながら、あることについて考える。

先月終わりに起きた、図書室での一件のことだ。あれで一時、学校中でさまざまな諸説が飛び交っていたようだが、一つ気になることがある。

話の中で、早川沙樹の名前が出るのがあまりなかったことだ。あのとき確かに早川はあの場にいたし、そもそも早川が騒ぎの元を作った。泣きながら図書室を出て行くところを何人も生徒が見ていたはず。

それでもあの件について直接訊かれるのは俺と依子のこと、早川の名前は、出るには出るのだけど、彼女については誰もが曖昧に濁した。

最初は、振られた早川に気を使っているのかな、と思った。それとも、あの場でキスをしたことが生徒たちにとってあまりに刺激的だったからとか。だから話の中心は俺と依子で、早川についてはほとんど広まらなかった。

そういう解釈であっているならいいけど、どうしても俺には作爲的に思えてしまう。

そんなこと、本当は気にしたくもなかったけど、どうしてももやもやしてしまつて、俺はそのことについて原村に相談してみた。

すると原村はヘッドフォンを外し、一度街並みを見下ろした。

「そついやあいつつて、今日登校してきたんだよね」

「早川のことか？ よく知ってるな」

「まあね」

原村は柔らかな笑みを浮かべる。

「そつか、今泉は知らないんだな。早川沙樹つてさ、やばーい奴らとの付き合いがあるんだぜ」

原村がおどけるように言うので、俺は愛想笑いを返した。

「やばい奴ら。ヤクザとか？」

「そういうんじゃないけど、詳しくは言えないなあ。ま、みんなそれを恐がって早川沙樹のことを口にしないんだと思うよ」

「なんだよ、詳しく言えないって」

「詳細を知りたいなら、そうだな、僕の絵を買っことだ。よっしや今泉。君には特別価格、一枚五万円で売ろう」

「ぼったくりじゃねえか」

原村が拳を振りかざして怒る真似をし、俺は大袈裟に身構えた。

それから馬鹿みたいに笑い合う。はたから見ると気色悪い光景だろ  
うな。

俺は煙を吐いて貯水タンクに背中を預け、お絵描きを再開する原村の背中を眺めた。

「五万で売るほどなんだから、よっぼど厳密な情報を教えてくれるんだろうな」

「そうだね。なにせ、この学校で早川沙樹のことを一番知ってるのは僕だから」

新しい煙草に火を点けようとして、俺は手を止めた。引っかかる言い方に、俺は懐疑的な視線を原村の後頭部へ飛ばす。ライターを持ったまま言葉を詰まらせていると、原村はこちらを振り向き、いつものように笑った。

「五年前に生き別れた妹なんだよね、あいつ」

いとこだと打ち明けたときの鍋島の気持ちがあった気がした。

「複雑なんすね、原村先輩も」

「いやいや、今泉君ほどじゃないさ」

「いやいやいや」

「いやいやいやいや」

二人でいやいや言い続けてたら、昼休み終了のチャイムが鳴った。

翌日の朝の教室。

早川沙樹は何故か今日、上履きを履いていなかった。代わりに履いていたのは職員用の群青色スリッパ。

あれ、なんか既視感。

早川はずっと机で俯いていて、友達から「上履き忘れてきたの？」、「私の貸そうか？」などと問われても、じつと黙って首を振るだけだった。すっかりふさぎ込んでいるようだった。そのまま黙っていてくれればいいのになあ。おっと、これは口に出せない。

明日は期末テストだ。

昨日、家で深夜まで自主学習をしていたのでかなり眠い。朝のホームルームが始まるまで机の上に教科書を広げてぼんやり眺めていたが、どうにも頭に入っていない。やっぱり夜中じゃないと勉強できないよ、俺。

四時限目の休み時間のこと。

居眠りしようと思っただけ首をかくかくさせていたら、思い切り後ろに頭が反ってしまった。おかげで、後ろの鍋島の頭とぶつかってしまう。

お互い頭を抱えてしばらくうなり、それから同時に立ち上がって睨みあった。

「なにすんだこら」

「はあ、信じらんない。そっちからぶつけてきたくせに。ていうか、寝るなら屋上にも行ってください。勉強の邪魔です」

「こっちは昨日一夜漬けで勉強してんだよ。居眠りくらい自由にさせる」

「な、何てこと言ってるんですか。そんな自分勝手、集団の調和を



乱します。今すぐ教室から出ていきなさい」

「なんだと。勉強は自分との孤独な戦いなんだ。集団なんて関係ねえ、個々で責任もって勉強する環境を確保すべきなんだよ。俺のせいにするな！」

「だからって周りに迷惑をかけるなんてことがまかり通りますか！ やっぱりあなたはバカ泉です！」

我ながら無茶苦茶な理論だと思った。でもここまで来て引つ込むのも悔しい。

すると、クラス中から「邪魔なのはお前ら二人だ」だの「あんたらが叫んだせいで単語一つ忘れた」だの「痴話喧嘩は犬も食わないワン」だのと野次が飛んでくる。テスト前でみんなピリピリしているようだ。変な野次も混ざってるし。

俺も鍋島も、不服を残しながらも大人しく席に座った。

あつちからもこつちからもシャーペンを走らせる音が聞こえる。

ここ、本当にガリ勉校だよなあ。何で俺この高校入ったんだろ。

眠気眼で視線を送ると、斜め前方には早川がいた。さっきの俺と鍋島の言い合いに全く反応を示さなかったのは、早川と依子ぐらいだった。

依子はともかくとして、早川は明らかに以前と変わった。早川の友達一行も彼女の変貌ぶりにたじろいでいるようで、朝の上履きの件以来、彼女らに会話らしい会話はなかった。

それでも、クラスのほとんどは早川のことなどものもしない様子で、自分のことで精一杯のようだ。早川の友達含め、鍋島含め、依子含め、その他諸々含め、という感じで。

もうどうでもいいや。

俺は開きっぱなしの教科書に目を落とした。

初夏の雰囲気だだよ季節。窓からの斜光が気持ち良くて、俺はまた一分後に居眠りをこいた。

目が覚めたのは放課後のチャイムのおかげで、どうやらあれからずっと眠りとおせたらしい。俺が眠り始めたのは四時限目前だから、合計して三、四時間ってところか。

誰にも起こされないなんてラッキー、なんて思ってたら、後ろの席の鍋島が教科書に目を向けたまま、「今泉くん、死んで永眠しちやったのかと思いましたよ」と微塵の心配もなく言う。

「マジで寝てたわ。すげえよな、誰にも起こされないなんて」

「四時限目で五頭先生に起こされまくってましたよ。今泉くん全然起きないし、もう大激怒。掃除の時間も邪魔でした。五頭先生から、放課後必ず職員室に来させるよう言いつけられましたし」

耳が痛くなるような長台詞だった。

俺は五頭からのお告げを無視して屋上へ行き、一本だけ煙草を吸った。珍しく原村がいなかったから、もしやと思い図書室に行ったところ、やはりそこには原村がいた。バガボンド二十三巻を読んでいる、ときおり欠伸をしている。

依子はいつものように受付をやっていて、さすがの俺も、司書の宮下先生って人物は本当は実在しないんじゃないかと疑った。期末テスト前日になってまで、生徒に受付任せっきりじゃん。

「おや、今泉。帰って勉強しなくていいのかい、明日期末だろう」

原村はバガボンドを見つめたまま言う。

「ちよつと漫画読んで帰ろうかなと。原村は勉強いいのかよ。二年生は期末なし？」

「いいかい今泉。結局勉強なんてもんはね、自分の学びたいこと以外、いくらやっても身にならないものだよ」

なんて詭弁。それから原村はゆっくり立ち上がって、「それになあ、おいらのこの青春は二度と戻ってこないんだあ、よい」と歌舞伎風に吟じた。原村と関わりと悪い影響しか受けなさそうだなあと、俺は漠然と結論づける。

依子を見ると、彼女はてつきり勉強をしているものと思っていたが、どうしてか今日は小説を読んでいた。

「範囲は一週間前に勉強し尽くしたから、もうやることない」

ということらしい。ガリ勉もここまで来れば極めつけだ。不真面目な原村と真面目な依子とで板挟みになって、俺はどっち側につきうかな、なんて突っ立ったまま考えた。そこで、やっと自分が手ぶらなことに気づく。起きてそのまま煙草を吸いに行ったから、教科書諸々が入ってる鞆を教室に忘れてきた。

今ここで勉強をしようにも出来っこないから、結局俺は漫画を読むことにした。バガボンド面白い、あはは。

図書室も閉まりかけて、原村は鼻歌混じりに二年の教室へ向かった。俺も依子の戸締まりを手伝って、一緒に図書室を出た。

この学校の図書室は五階にあり、一階まで降りるのは多少億劫だ。屋上から図書室へは楽なだけだ。

放課後に聞こえてくるはずの野球部のかけ声や吹奏楽器の音が聞こえてこない。廊下や階段にも人の影すらなくて、ああ、やっぱり明日は期末テストなんだな、と少し憂鬱になった。

依子は階段を降りながらも小説を読んでいて、本当に節操のない奴だと呆れてくる。暇だったので試しに本を取り上げてみようとしたけれど、依子はそれを見通していたかのように俺の手から本を避けさせる。

「転ぶぞ」

「転びそうになったら支えて」即答。

俺は絶対に手は貸さないと心に誓った。

三階の踊り場に入ると、窓から夕暮れに染まったグラウンドと、その先の街の風景を望めた。夏に入るだけあって日が落ちるのも大分遅くなってきたな、と年寄り臭い風致を感じる。

下から、階段を足早に駆ける音がしてくる。この時間に校舎にい

る生徒が俺たち以外にもいるんだな。俺はその程度にしか思っていないかったし、依子にいたっては普段のわれ関せずの態度で本に集中していた。

依子が踊り場を曲がって、また階段を降りようとするのとほぼ同時。階段を駆け上がってくる影が飛び出して、無防備な依子の体とぶつかった。

依子の本が宙を舞い、音も控えめにはさりと床に落ちる。依子は尻餅をついた。飛び出してきたのは女子生徒で、その女子はよろめき、危うく階段でつまづきかけてその場にへたり込む。その女子の顔を見て、俺の首筋からさっと血の気が引いた。

「おい、大丈夫かよ」

思わず声が裏返りそうになる。二人が転んでいる光景が、しばらく止まって見えた。

まもなくして依子が平然と立ち上がり、スカートのほこりを払う仕草をしてから、地面に腰をつけたままの女子生徒に手をさしのべた。

「大丈夫？ 早川さん」

早川は畏怖の表情をつくり、目元に涙を浮かべた。俺にはその顔がどうしてか、わざとらしく見えてしまったのだ。早川は依子の手を取ろうとせず、彼女を拒絶するように顔を手で覆う。

「いやっ、やめて」

親から虐待を受ける子供のように早川は言う。どうして偶然ぶつかったくらいで、そんな顔をして、こんな哀れじみた声を上げるのだろうか。

とっさに、俺は依子の手を引いてこの場を逃げ出さなくなった。実際そうしようと思い、依子へ手を伸ばしたが、階段の下から発せられた怒声にそれはあっさりと遮られてしまった。

「やめなよ、平野！」

階下の下を見おろし、この声の主を確認した俺は、額に冷や汗が滲んだ。それは中学時代からの見知った顔だった。

吉岡美野里。中学のとき、いつも早川の後ろについていた女子であった。早川の腰巾着的女子は数多くいたが、吉岡だけは目立って早川の隣にいた記憶がある。

吉岡は荒々しく音を鳴らしながら階段を上がってきて、依子から守るように早川の肩を抱いた。依子は口を結んで、一步後ずさる。

「沙樹、怪我はない？」

早川が吉岡の胸に顔をうずめ、かすかにすすり泣く。吉岡の丸みを帯びた目尻が少し上がり、唇をおおげさに振るわせて依子を睨んだ。

「沙樹になんてことすんの」

吉岡の淡い茶色の前髪が揺れた。肩まで伸びたボブカット。そして校則ぎりぎりの染髪だ。

「たまたま、ぶつかって」依子の語尾はほとんど聞き取れなかった。

「たまたまぶつかって？ 私には“平野が乱暴に押し倒したようにしか見えなかった”けど？」

「おい待てよ」

さすがに聞き捨てならなかった。俺がこうしてすぐに口を挟めたのも、吉岡がこんなことを言うてくる確信があったからだ。

「俺は見てたぞ。依子が踊り場を曲がったら、階段を駆け上がってくる早川と偶然鉢合わせになった。なにが乱暴に押し倒しただよ」

「じゃあ、どうして沙樹は泣いてるの」

吉岡が早川の髪を撫で、早川の泣き声が少し強まった。その茶番に苛々きて、俺は腰をかがめて早川の肩を揺すった。

「おい、ふざけんなよ早川。何下手くそな猿芝居してんだてめえ」

「やめてよ今泉！」

吉岡が叫び、早川は小さく悲鳴を上げる。どうすればいいかわからなかった。ただ、はめられ、仕組まれた苛立ちだけはつのる。

「なんとか言え早川」

「う、ごめんなさい」

半ば泣き叫ぶように謝る早川に、全身の力が抜けてしまいそうだ

った。違う。こんな被害者ぶったごめんなさいは、全然意味が違くないか。

ついに吉岡まで泣き始めて、俺は混乱した。握力がなくなって、早川の肩から手がずり落ちる。

「何やってるんだ、お前たち」

後ろから、聞き慣れた堅苦しい声がかかる。振り返ると、書類を胸に抱えた五頭が立っていた。五頭は俺を見下ろして不快そうに眉根を寄せる。

視界の端で、早川が薄く笑った気がした。

「平野さんと今泉が、沙樹のことをいじめてたんです」

吉岡が声を震わせて言う。

五頭まで早川たちと共謀していたのだろうか。一瞬そんな風に思ったが、この教師に限ってそれはないだろう。早川たちにとってはこれは僥倖で、俺たちにとってはただ運が悪すぎただけなんだ。

五頭は俺の顔を見て、それから早川たちに視線を移し、最後に依子を見た。依子はこんなときでさえ表情を崩さない。託宣を待つように押し黙る俺たちに、五頭が口を開いた。

「まずは、詳しい話を」

「ごめんなさい」

五頭が言い終わる前に、依子が頭を下げる。早川も吉岡も啞然として、深く頭を下げる依子を見つめた。多分、俺も早川たちと同じような顔をしていたんだと思う。

「テスト勉強でいらいらしてて、偶然見かけた早川さんに、つい八つ当たりをしてしまいました」

本当にごめんなさい、ゆっくりと噛みしめるように依子は言う。

俺や早川たちはそんな彼女を前に微動だにできなくて、それは五頭も同じだったようだった。

しばらくして、五頭が短く咳払いをする。

「平野は今から職員室に来なさい」

「はい」

「今泉は、明日一時間早く登校して私のところへ来なさい」

俺は口を開けたまま返事すら出来なかった。

「分かったな」

俺は小さく頷く。それを見届けた五頭は、俺たちの脇を通って階段を降りていった。依子は床に落ちた本を取り、事もなげに俺に押しつけてから「明日返して」と言っ、五頭の後を追った。

明日返してと言われても、俺は依子を残して帰ることが出来なかった。胸の底がもやもやして、依子の顔を見るまでは気分が和らぎそうもない。

下駄箱の前で、俺は前髪を掴んでうつむいた。何も頭に浮かんでこない。唯一浮かんでくるのはさっきの階段でのやりとりだけで、俺は自分の軽率さを何度も嘆いた。

そこで待つこと四十分。依子がいつの間にか俺の隣にいて、玄関の先の風景を見据えていた。顔を上げると彼女と目が合い、視線を逸らしたい気持ちを必死でおさえる。もう辺りは暗くて、幸い依子の顔はよく見えなかった。

「悪かった。あんなので熱くなつて」

「いいよ。あだし、嚴重注意だけで済んだし」

「でも、あの場を混乱させたのは俺のせいで」

「純は悪くないよ」

平坦な口調でそう残し、依子は下駄箱から靴を取る。髪が顔の前に垂れたせいで依子の表情が分からなくて、俺はとてつもなく不安になった。

「帰ろ」

一度もこちらを見ずに玄関へ歩いていく依子を、俺は慌てて追う。彼女の小さな背中を見ながら、自分のあまりのふがいなさに、ぎりと奥歯を鳴らした。

翌朝に家族四人で鮭茶漬を食べた。

母ちゃんはよく朝食で手抜きをする。共働きだから仕方ないとはいえ、この鮭茶漬はお茶漬の素を米の上にかけてお茶を入れるだけだ。ぶつちやけ米を炊くだけである。

親父と弟は何も言わず、美味しそうに鮭茶漬を食べた。だから俺も黙って食べる。

母ちゃんは依子の話をしていた。

中学のときみたいに友達はあるのかしら。いたらいじめなんて大丈夫なんだけど。

そんなことを言っていた。

今日はおかわりを控えた。一時間早く学校に来いと五頭に言われているから。

自転車をこいで、学校に着いたのは七時頃だった。生徒もまばら。早朝の空気は爽やかなものである。ただ、俺の気分は落ちたままだった。

職員室に行ってみる。今日はさすがに行かないとまずい気がした。テスト期間中に面倒事は起こしたくないし。

デスクに座っていた五頭はレンズの大きい眼鏡を上げ、校長室に来なさい、と言う。

校長室は無人だった。校長がいるのかと少し緊張したが、まだ出勤していないようだ。

五頭は黒の革張りソファに深く腰掛け、俺を向かいのソファに座るよう指示した。

「厳しいことを言うが、お前、この学校合っていないんじゃないか」  
本当に厳しいことを言うてくる。でも、それからの五頭は肅々と、



一言ずつゆつくりと俺に諭してきた。本当に学校を辞めさせようという気はないらしくて、切に俺の生活態度を改めて欲しいという願いを込めているようだった。だから俺は黙って聞いた。こんな説教ならいくらでも聞こうと思う。

いつになく素直な自分に驚く俺だった。

あらかたの説諭を話し終えたところで、五頭が一度口を閉ざし、湯飲みを傾けた。

俺もあらかじめ出されていたお茶を飲んで、それから校長室に並ぶ賞状やら校訓を眺めた。そろそろ教室戻ってテスト勉強したいんだけどなあ。

「クラスメイトの中で、平野と一番仲が良いのはお前らしいが」  
口火を切ったのはもちろん五頭だった。多分そうなので、俺は頷いた。あいつ、クラスに友達とかいなさそうだし。

五頭は俺を見つめたまま、また閉口した。何を聞き出せばいいのか迷っているのか、ともかくデリケートな問題らしい。

「じゃらくせえ。じれったいので、自分から話の核心をついてみる。依子はいじめなんてしませんよ」

「私もそう思う」五頭は一度腕組みし、考え込む。「が、生徒に対して偏見はよくない」

頭が固い。でも教師ならこれくらいの心構えがちょうどいいんだろうけど。

「依子は何て言ってたんすか、昨日」

「いらいらしてやりました、と。それしか言わないんだ」

確かにそれくらいしか喋らないだろうな、五頭に詰問される依子を想像して納得する。

何せあいつは口下手だから、冗談だってほとんど言わないし、思ったことはどこまでも素直に言う。たとえば、自転車に乗せてほしいなと思ったら乗せてくれるまで諦めない、とかさ。嘘のほうも吐

き慣れていないんだろう。

「ほら、いまどきの女子ってドロドロしてるじゃないか。昨日の押し押さないも複雑な事情があるんですよ、きっと」「まあ、事情は知ってるんだけど。」「先生まで首を突っ込む話じゃないと思う」「

「そうなのか？」

五頭は珍しく、自分の判断に迷っているようだった。懇願するよううに俺の意見を待っている。

教師って仕事は大変そうだなと思う。どこまで生徒の人間関係に介入すればいいのか、そんな細かな所まで考慮しなければいけない。高校生ともなれば、その中で形成される人間社会もそれだけ複雑になる。

入り込み過ぎればプライバシー侵害だと言われ、ほったらかしなら監督不十分だと叱責を食らう。今の時代で金八先生をやるのは難しいんだよな。虚しい。

「本当にやばくなったら先生に相談しますよ」

「何かあってからでは遅いからな、頼む」

五頭はためらいながらも頷く。

うそぶきつつも、先生に相談するつもりはなかった。あれでほとぼりが冷めるとは思えないけれど、早川が傷ついたのは俺たちの責任だし、これは俺たちで解決することだと思うから。それに、昨日俺は大失態を犯してしまった。どうしても自分の力で挽回したい。そしてなんといいっても、俺は自律したいお年頃なのだ。

五頭はお茶を飲み干した。

「あとお前、平野と親戚だそうだな」

どこまで知ってるんだよこのおっさん。

「平野が孤立しないよう、影で仕向けてやってくれないか」

「わかりました」

要は友達を作らせろと。一番の難題だけどね、それ。

教室に入ると、生徒はまだ五、六人ほどしか来ていなかった。その中に鍋島の姿も認める。

席に着いて後ろを向くと、鍋島はかじりつくようにノートを見返していた。

「おはよ」

「おはようございます」

手短かに朝の挨拶を済ます。テスト当日だけあって鍋島も切羽詰まっているようだった。

「お前さ、依子の友達になれよ」

早速と言えば聞こえがいいけれど、策もへつたくれもなく俺はそう言ってみた。鍋島は弾かれたように顔を上げる。

「え」

「いやだからさ、お前、依子の友達になれよ」

「あ、はい」

反応がよろしくない。鍋島は狼狽したようにおさげを指に巻き、一度視線を下げた。

「あの、何度もそうしようと思って、いつも話しかけてはいるんですけど」

「無視されるんだろ」

「そうです。無視されるんです。全部つてわけじゃないけど、話しかけても何も返してくれないことが多くて。私、何故だか知らないけど、嫌われちゃってるみたいなんです」

鍋島は眉を下げて言う。彼女なりにへこんでいるようだった。仕方ないことだ。勇気を出して話しかけてシカトされたら、誰だって落ち込むだろう。

「安心しろ鍋島。俺もたまに無視される。あいつさ、自分にとってどうでもいい話題はしないんだよ。協調性ねえの、性格悪いだろ」

「協調性がなくて性格悪いのは今泉くんのことだと思います」

最近鍋島と会話するようになって分かったんだけど、何気にこいつは毒舌だ。そうでなければ、鍋島は俺が何を言われても傷つかない

い無頓着野郎だと思っっていやがる。

怒りたい気持ちをごらえていたら、また鍋島が話し始めた。

「それに、私の場合はそんなじゃくて」

それから口をつぐんだ。ずっと目を伏せているので、俺が続きを聞き出すしかなさそうだった。

「なんだよ。本当に嫌われてるっの？」

「はい、明らかに避けられてる感じ。私、何か悪いことしたかなあ」  
鍋島はため息を吐いて、それっきり窓の外を見つめたまま黙ってしまった。かなり傷心のようなのである。諦めるしかなさそうだったので、俺は他の生徒を狙ってみることにした。

といっても俺もクラスメイトと滅多に交流しないので、誰に話しかけていいか分からない。なんだか悲しくなってきたぞ。

教室の扉から鍋島の友達が入ってきて、机に学生鞆を置いた。背がやたらと低い女子で、名前は確か城川だ。城川は鍋島の席に来て、鍋島と挨拶をした。

こいつでいいじゃん。依子ほどではないけど大人しそうだし、多分気も合いそう。

「城川、お前依子と友達になつてよ」

城川はびくりと身を震わせて俺を見る。「わたし？」というように人差し指で自分を指す。

「え、うう、あ」

「なれよ」

「やめてください今泉くん。城川さんが恐がってます」鍋島の目は窓を向いたままだった。

城川は目を泳がせて、今にも逃げ出しそうに身構えていた。恐がられているというか、嫌がっているというか。どちらかというところ、恐がられる方がへこむんだけど。

これ以上恐がられたくないので、俺は鍋島と城川との会話を止め、鞆から教科書を出した。

ちょうどそのとき早川と吉岡が教室に入ってきて、その二人と一

瞬目を合わせてしまった。吉岡は寄り添うように早川についていて、早川は今日も職員用スリッパを履いていた。二人は俺から視線を逸らし、さっさと自分たちの机へ歩いていった。

そんな彼女らから視線を外して、俺は気分を落ち着かせるべく教科書の内容を復習する。

こんなに勉強のはかどらないテスト週間は初めてだった。

案の定、テストは撃沈した。

今日の科目は三つで、現代文と物理と世界史だった。特に世界史。暗記系は俺にとって最大の鬼門なのだ。

今日はテストの三時限だけで終わり、生徒は解散となる。

出来なさすぎて、帰って勉強する気もおきない。もっとも俺の場合は出来すぎても調子に乗って勉強しなさそうだから、本当にさじ加減が難しい。何度考え直しても、この学校に入れたのは奇跡だ。

俺は図書室へ向かった。バガボンドはもう読み終えてしまったので、今日からは一度読破したことがあるスラムダンクを読むことにする。

図書室に入って室内の混み具合に驚くと共に、受付に依子がいないことでさらに吃驚した。

受付に座っていたのは二十代後半ほどの、見たこともない男だった。さっぱりとした短髪だが、ネクタイを緩め、やる気なさそうにパイプ椅子にうなだれていた。そんな彼の様子を見て確信する。こいつが宮下だな。

彼は何かぶつぶつ呟いていた。受付に近づくと、その呟きの内容が分かった。

「めんどくせー、帰りにー」

最悪の司書だと思った。なんとなく、「面倒臭いわねえ」が口癖

の母ちゃんを思い出した。

受付の扉を開けて勝手に中に入ると、宮下の顔がこちらを向いた。「もしかして今泉くん？」

「よく分かりましたね」

受付内の奥を見ると、両端の本棚に挟まれて、窮屈そうに長机が設置してあった。長机には原村と依子とが対面するように座っており、二人は漫画やら小説やらを読んでくつろいでいた。

原村だけ俺に気づいて、無駄に朗らかな笑顔で手を振ってくれた。気持ち悪かったけど、俺も小さく手を振り返した。

「ここに勝手に入ってくる不良風の男子が来たら、そいつが今泉だよって。原村くんが教えてくれた」

宮下は緩い感じの笑みを浮かべた。

「宮下先生ですよ」

「はい、宮下です。司書兼、二年一組の副担任です。よろよろ」

「よろよろ」

よろしく、の意味だと思うのでそう返した。

「いや、でも本当に来るとはね。五頭先生がさ、君が必ずここに来るはずだから、来たら勉強させろって言付けされてたんだよねえ。ちようどよかった」

五頭という教師に改めて畏怖の念を抱いた。どこまで生徒のことを把握するつもりでいるのか。

宮下が、俺を長机へ移動するよう誘導する。原村の隣に俺専用と思われる椅子がちゃっかりと用意されていて、あれよあれよという間に、俺は原村から勉強を教えてもらう形となった。

「今日のテスト酷かったんだって？ 原村くんはすごい勉強できるからねえ。みっちり教えてもらうといいよ」

宮下は腰に手を当て、満足そうに頷く。それからまた受付の椅子に座り、さっきの「めんどくせー」などの文言を再開した。

そんなまさか、原村が勉強できる？ 昨日の原村の発言と食い違っじゃないか。そんな風なことを原村にまくしたてると、原村は偉

そつに鼻を鳴らした。

「勉強出来ないとは言っていない。自分の学びたいこと以外は身にならないと言ったのは、あくまで今泉視点で助言してあげただけだ。僕にとつてこの世は学びたいことだらけなのだよ」

「この裏切りもの」

「なんとでも言え」

「俺は昨日のお前の言葉に感銘を受けた。だから昨日は勉強をしなかつたんだよ」ただの言い訳だけだ。

「その点については僕も反省している。だから責任を取ろうってんだ」

原村は俺の鞆を引つたくり、中から教科書やノートを引つ張り出す。

助けを求めるべく依子を見たが、彼女は俺と目を合わそうともせず、お澄まし顔で小説を読んでいた。

図書室なんか来なきやよかつた。マジで。

原村とのマンツーマン学習は実に効率が良かつた。しかし俺の本分は自主学習なので、いくら効率がいいとはいえ苦痛だつた。

今日のスケジュールは午前で終わりだが、図書室はいつもの時間まで開いているらしい。

マンツーマン開始から二時間後、休憩と称して、原村は依子とトランプを始めた。俺も混ぜろうとしたら、宮下が「サボるんなら五頭先生に言いつけなきやなあ」とぼやいて、俺は泣く泣くシャーペンを握つた。

原村と依子は神経衰弱をやっている、こつそり横目で眺めていると、二人の実力はほぼ互角のように見えた。

五回目の神経衰弱中、原村がぽつりと口を開いた。

「うちの妹は、最近どうかな」

依子がトランプをめくる手を止める。

「どう、っていうのは」

「いやさ、また君たちに迷惑かけてないかなって」

「原村先輩の心配するようなことは、何もありません」

冷たく言い放つ依子に原村はきよんとして、やがて「だよ、良かった」と誤魔化すように笑った。

俺は昨日の出来事を回想した。何度思いだしてもはらわたが煮えくり返りそうだった。今の依子の言葉に対しても、思わず頬が気色ばむ。

「どうしたの、純」

それを見越したように依子が声をかけてくる。俺はため息を吐き、シャーペンを乱暴に置いた。

「人との付き合い方、考え直した方がいいかもな、依子は」

「どういう意味」

「せっかく原村が心配してんのに、そんな言い方はねえんじゃねえのってこと」

原村が慌てるような顔した。自分のせいだと思っているらしいが、彼のせいではない。依子が原村を一瞥する。

「何もなかったって言うのは、本当だと思っけど」

俺も、昨日の件を原村に話すつもりはなかった。彼に罪悪感を感じさせたくなかった。

以前、早川の前で依子とキスしたとき、原村はどう思ったのだろう。外面ではおちゃらけていたけれど、本当のところ、早川と同様に良い思いはしなかったんじゃないか。

それに、彼の内心がどうであろうが、これ以上原村の心を乱したくはない。

それについては同意だった。けれど、この場合俺が言いたいのではなく依子の人間関係の話だ。

「友達作った方がいいよお前。友達がいたら、何があったって依子の味方になってくれるんだから」

「余計なお世話」



「何を意地張ってんだよ。お前、中学んときは友達いたって聞いたぞ。何気に人気者だったそうじゃねえか」

依子はトランプを見つめま唇を閉じた。神経衰弱で勝ち取った何組ものトランプを手でいじり、じっと視線を固める。

原村は気まずそうに俺たちから視線を逸らした。俺たちが喧嘩を始めたことに責任を感じているのか、本当に原村らしくなかった。

「友達と、そうじゃない人の違いって、なんなの」

依子が唐突な質問を投げかけてくる。返答に窮した。時間稼ぎをしようと思っ、聞こえないふりで聞き返す。

「なんだって？」

「友達なんて曖昧な存在、もし作っても、いつか失望するだけだから」

依子は俺と視線を絡めてくる。彼女の瞳が揺れた。

「昔、鍋島さんみたいな友達がいたの。几帳面で、明るくて、根っからのお人好しみみたいな子。話し方まで似てるから、余計被る」

鍋島のことを思い浮かべて、俺は小さく頷く。

「でも、あたしのちょっととした発言でね、あつという間に疎遠になった」

俺も原村も黙って聞く。きーンとした沈黙が流れ、ずっと何かをぼやいていた宮下も、じっと依子の話に耳を傾けていることに気づく。

無言の時間は延々と続いた。

てつきり俺は、その疎遠になったという友達について依子が何か言うはずだと待っていたが、依子はぼんやりと俺の顔を見据えたままだった。

「え、終わり？」野暮とは思いつつも突っ込みを入れる。

「うん」

「なんかないの。その友達に対してどう思ったとか」

「ない。その子のこと、もうなんとも思っ、てないから」

嘘だと思っ、た。やっと俺は、鍋島が「自分は避けられている」と

言った意味を理解したんだ。本当はないのなら、鍋島を故意に避ける理由なんてないのに。

依子は素直だ素直だと思っていたけれど、こうして本心を隠すのには訳があるはず。まして面倒臭い女だ。

「じゃあ何で話したんだよ……」

さらに何か問い詰めようとしたが、原村に先を越された。

「いとこなら、曖昧な存在じゃないはずだよ」

原村は普段の笑顔で、俺の肩に手を置いた。こんなときに無理な表情だと感じさせないのは、彼のすごいところだと思う。

「ちゃんと繋がりがあわけだよ。こうして君らは喧嘩しても、これから嫌でも繋がってなきゃいけない。ならば仲良くすべきだ。もう喧嘩はいけない」

原村は目を細め、俺の顔を覗き見る。

「確かな存在である君が教えてやんなさい。平野に、曖昧な存在がいかにも尊く大切であるかを」

「いや、俺も友達いるか微妙なんだけど」これは今気づいた。やべ、そのくせ超偉そうなこと言ってたし俺。

「僕がいるだろう」

いつから俺は原村と友達になったのだろう。

「これから平野とも友達になる」

原村は俺の肩に寄りかかり、親指で依子を指す。依子は黙して鎮座していた。

「というわけで、三人でメアドを交換しよう。これも一つの繋がりだから」

なんでそうなるんだ。とっさに出てきた友達の定義の一つがメアド交換なのか。

原村に流されるままに俺たちは携帯を取り出した。初め俺は、依子は携帯を持っていないものと思いついていた。

依子は鞆から、白い卵形の携帯を出した。結構懐かしい機種だな。俺はいつか、依子に携帯で叩き起こされたことを思い出した。そ

ういえば、なんでこいつ俺の番号知ってたんだろ。

「純のうちに電話して、純のお母さんから教えてもらった」

母ちゃんから一言も聞いてないぞそんなの。これこそプライバシーの侵害だ。

三人のメアド交換が終わって、原村は満足げに携帯を閉じた。

「これから君らには毎日、一時間ごとにメールを送るよ」

「さすがにそれはうざいから止めてくれ」

苦笑して、俺も携帯を鞆にしまった。宮下が「めんどくせー」をどこか楽しそうに呟き始めた。

原村はマンツーマンなど忘れたかのように依子とトランプを再開した。そんな彼を見ながら、俺はまたしても自分の無力さを感じる。今日のはちょっと気分がいいけど。

図書室内の誰かが窓を開放した。風が受付奥のここまでそよいでくる。涼しい。これなら勉強にも身が入りそうだ。

神経衰弱も一段落して、原村は携帯をいじっていた。

「兄と妹も、ちゃんと繋がってなきゃいけないんだけどね」

ふと、そんなことを小さく漏らす原村に気づいたのは、すぐ隣にいる俺だけだった。

原村のメール攻撃は凄まじかった。

一時間どころか二十分に一通というペースで、「今何してるの？僕は今大河ドラマ見てまーす」と、どうでもいい身辺状況を報告してきたかと思えば、「今晚はチーズグラタンを作ったよ」と謎の黒焦げ料理画像が添付されていたりと、変化球ぶりにも枚挙にいとまがなかった。

公園の公衆トイレと思われる画像付きのメールで、「この壁面の削れ具合よくない？」と送られてきたときは、もう意味が分からなさすぎて腹が立った。俺はそのまま携帯の電源を切り、勉強をした。

翌朝。テスト二日目。

自転車置き場で偶然依子と出会う。

依子は母ちゃんの赤茶色のママチャリに鍵をかけていて、自転車をのろのろこいで到着する俺を認めると、鞆から携帯を出しながら歩み寄ってきた。

「これ、どうやったらメール来たときの音消せるの」

俺のいとこは挨拶を知らない。依子は、真っ白で傷一つない卵みtainな携帯を俺に突き出して、少し困ったような顔をした。

俺は自転車のスタンドを下ろし、学生鞆を肩にかけてから、依子の携帯を受け取った。

なんでマナーモードすら知らないで学校に携帯を持ってくるんだろ。授業中に鳴ったらどうすんだ。

思い返せば、依子の携帯が学校にいる間で鳴っているところを一度も見たことがない。

俺は無言で依子の携帯を操作して、律儀にサイレントモードにまでして返した。依子はそれを受け取って、不満を隠しきれない表情

をする。

「昨日からピリピリうるさかった、これ」

十中八九原村のメールのせいだろう。この分だと依子はメールの打ち方も知らないだろうから、原村はかなり寂しい思いをしたんじゃないかな。俺も一通だけしか返信してないし。

それでもずっと送ってきやがったけど。

「今度携帯の使い方教えてやる」

依子は小さく頷いた。

今日のテストの出来は上々だった。原村の個人レッスンと、帰っ  
てからの猛勉強の成果だ。

テストの三時限とHRを終え、俺は意気揚々と屋上へ向かう。

旧校舎側の無駄に長い階段を上がり、鍵の外れた非常扉を開けて  
屋上へ入る。灰色の剥き出しコンクリートは屋上全体に広がり、ひ  
びが入った所からむら無く苔が生えている。

すぐ前方の足元に段差と、その上に塗装の剥げかけた貯水タンク  
があり、原村はいつもこの段差に腰掛けて絵を描いているのだけど、  
昨日と同じく彼は居なかった。やっぱり先に図書室へ行ったらしい。  
と思つたら、上から声がかかってきた。

「どうしてメールを返さない！」

見上げると、何故か原村が貯水タンクの上っでいて、彼は仁王立  
ちで俺を見下ろしていた。原村は怒っていた。

「返したじゃん」

「一通だけな！ しかも内容が『死ぬ』って」

原村が黄色い声で叫ぶ。俺は煙草に火を点けながら鉄柵の方へと  
歩み寄り、柵を背に寄りかかって再度原村を見上げた。鉄柵は俺の  
胸ほどの高さしかないから、ちょうど両肘をかけられる。太陽は真  
上にあつて、雲もほとんどなかったから、それだけで紫外線にやら  
れて目が痛かった。

「今泉からの返信が来ない度に胸のうちが荒んだ。寂し過ぎて三回泣いた」

「お前は俺の彼女か」

「そうか、僕が今泉の彼女になればいいのか」

あまり洒落にならない冗談だったので、俺は何も言わなかった。

昨日勉強を教えてもらったお礼を言う雰囲気でもないから、原村のシイタケみたいな髪型をただぼうつと眺める。

「平野は十二回も返信をくれた」

「うそだろ」

あいつはまともに携帯を使えないはずだ。

「うそなんか吐くもんか」

原村はポケットから携帯を探り出す。それから手に持った携帯をふらふらと左右に揺らした。投げるからちゃんと受け取れ、という意味のようだ。俺は手に持った煙草を口にくわえなおし、両手を顔の前で広げた。

原村は右手に唾をつけ、その手で携帯をぐつと握る。きたねえ。

俺は受け取るのを辞退しくなった。

原村は大きく振りかぶり、投げた。放られた携帯は、何故か剛速球。

躊躇する暇も与えられず、俺はなんとか体で受け止めるようにキヤッチをした。

「今泉なら取れると思ってた」

「取れなかったらどうするつもりだったんだよ」

俺の後方は校庭がはるか下だし、屋上のコンクリートに当たったって完全破壊は免れない。中々デンジャラスなことをする野郎だ。

俺はいやに高鳴った心臓に不快感を覚えながらも、改めて原村の携帯に目を落とした。iPhoneだった。俺にはいまだに使い方が分からない。

原村に説明してもらいながら操作したけど、メール送受信欄を開くの五分くらいかかってしまった。

画面上で、原村と依子のメールのやりとりが吹き出し形式でまとめて表示された。便利なもんだなあと感心する。

確かに依子は原村のメールを返していたようだった。五、六通に一度くらいの割合で依子の返信内容が表示されている。依子の返信内容だけ追って見る。

「たいがどらまみた」「こげている」「おふるあがった」「けずれてる」「ねます」「うるさいです」「もうやめて」

なんだかシユールだった。これを見ると、依子は漢字変換の仕方を知らないのだろう。慣れてないから長文も打てない。

「平野の文、メールのやり方分からないけど一生懸命打ちましたって感じでかわいいよね。これ、もしかして狙ってやってる?」

「間違いなく素だと思う」

メール出来るの、実は嬉しかったんだろうな。朝の自転車置き場であんな風だったのは、原村の着信がしつこ過ぎたせいだろう。それがなければ珍しく上機嫌なレア依子を見物できただろうに。

今度、なんて曖昧に言ったけれど、このあと図書室に行ったら早速携帯の使い方を教えてあげよう。

「あ、ブックマークは見ないでね」

そう原村に言われて、俺は慣れない手つきでブックマークを開いた。一番上のおっぱいなんとかの項目を読み上げようとしたら、原村は耳を塞いで奇声を上げた。うるさかったので、もう返してあげることにした。

さつき剛速球を食らったから、こちらもそれなりの返球をしてあげべきだろう。そう思い、原村と同じように深く振りかぶったら、太陽光が目を刺激して手元が狂った。

俺の投げたiPhoneは綺麗な弧を描き、原村の頭上高くを通り過ぎた。おお、飛んだ飛んだ、などと現実逃避をしていたが、一向にiPhoneの落下音は聞こえてこなくて、なるほど、屋上の下に落ちていったんだなと俺は把握した。

原村は後ろに首を回し、それから俺を見て、あり得ない、という

表情をした。

「君とはもう絶交だ」

俺と原村の友情ははかなく散った。

図書室の受付内へ移動しても、原村は一切口を利いてくれなかった。その代わり、水浸しとなったiPhoneをこれみよがしに何度も見せつけてきた。プールに落ちたので、危ういながらも原型を留めていたが、完全復活は厳しいだろう。

謝っても謝っても原村は拗ねるばかりだった。バイトして弁償する、と言ってみたが、原村は歯を剥き出しにしてうなるだけだった。口は利かないが威嚇はするらしい。

原村のことは一旦諦めて、俺は依子に携帯の使い方を教えた。俺の説明を真面目に聞いていた依子だったけど、何度同じことを教えても覚えてくれなかった。勉強は出来るくせに、肝心な所で都合の悪い脳みそだ。

なにもかもが嫌になって俺は勉強に逃げた。原村との仲直りも、依子に携帯の使い方を教えるのも、テストが終わってからゆっくりやろう。

このとき、俺はこのまま平和に夏休みを迎える自信があった。この図書室の、もはや固定メンバーとなった二人の顔を眺めながら、なんとなくそう思ってしまったのだ。

翌日のテスト最終日、教室での出来事。

依子の棚入れから早川の上履きが見つかった。



テスト期間最終日。テストは四時限までで、五時限目、六時限目は通常どおり授業がある。

三日目のテストもよく出来た。二日目ほどではないけれど、自分なりに満足のいく出来だった。でも、周りの奴らはもっと前々から効率のいい勉強していただろうから、俺がいくら試験前日に足掻いてみせようが学力を覆せるはずもなく、また母ちゃんや教師から『この子はやればできるのに』の烙印を押されてしまっわけである。俺はこの高校に受かったことに未だうかれている状態なので、この『やれば』のところは絶対にしない。一日目以降は頑張ったから、許してください。

四時限目のテストが終わって、昼休みに卵サンドを食べる。親父が作ってくれた卵サンド。今日からリフレッシュ休暇を取ったから暇だったそうだ。しかし所詮は下手の横好きなので、サンドイッチの入った弁当箱を開けたらかなり凄絶な状態だった。なにか、黄色い半ジェル上の物体が弁当箱の中いっぱい飛び散っていたのだ。パンに挟まれた卵が、見事に半生だった。

「卵が飛散して悲惨だね」

鍋島の友達が俺の弁当箱を見てそう言った。赤い縁取りの眼鏡をかけた女子で、たしか村瀬。

俺と鍋島の席をくつつけて座っていた鍋島アンド城川は、おほほとお上品に笑った。村瀬だけはゲラゲラとやかましく笑った。全く笑えないのに、俺にしてみるとかなり異常な光景だった。愛想笑い女子の人間関係を円滑良好にするための必須スキルなのだろうか。俺はいつもどおり席を立たされて、後ろの生徒用ロッカーに寄りかかって卵サンドを素手で食べた。卵はパンから垂れて、俺の手の

ひらをつたい、床にぼたぼたとこぼれた。鍋島がそれで眉をひそめて「食べ終わったらちゃんと片づけてください」と言った。

いざ食べ終わって、床に落ちた黄色い斑点を眺めながらどうしようかと悩んでいると、視界の端に城川の横顔があり、彼女はもぐもぐと小さな口を動かしていた。

「城川、ティッシュ貸して」

城川がせき込んだ。それから怯えた目つきで俺を見る。あわててポケットからティッシュを出して、賞状贈呈みたいに両手を添えて差し出してきた。

「すみません」

「なんで謝るの」

「気が利かなくて、すみません」

どうしてここまで恐がられるのだろう。何か悪いことしたかな。

考えても分かるわけがないので、黙って城川からポケットティッシュを受け取り、丹念に半生の卵液たんえきを拭き取った。それから恐がらせないように、恐る恐る城川に返す。

その一連の流れを見ていた鍋島に、「今泉くんは声と顔が恐いんですよ」と言われてしまった。今年で一番酷い言葉だった。

屋上で、原村は音楽を聴きながら絵を描いていた。普通に話しかけるとやはりそっぽを向かれたので、俺はポケットから四千元を出して、「十二回払いでお願いします」と頭を下げた。

原村は俺の差し出す四千元をじっと見つめる。やがてヘッドフォンを外し、優しく微笑みつつ首を振って、俺の手を引っ込めさせた。「喧嘩のあとは友情の絆を強くする。だが、これからは気をつけなさい」

原村と握手を交わした。安い友情劇だなあと思いつつ、ひとまず安心した。携帯代は、夏休みにバイトして改めて返そうと思う。こちらの方は安くはない。

図書室に行き、依子に携帯の使い方を教えた。

今日はちゃんと司書の宮下がいて、例の愚痴をこぼしながらも受付をやっていたから、俺と依子は長机に並んで着いて、ゆっくり依子に教えることができた。

昨日帰ってから一人で練習していたのか、少しだけ要領を得ているようだった。それでも機械音痴のお婆ちゃんを相手にしている気分なのは変わらない。

依子にものを教えることに、俺は少しだけ優越感を感じた。

昼休みは短い。

依子はプチトマト大にかすかに唇を開け、携帯に顔を近づけて、一心不乱に俺宛ての練習メールを打っていた。受付内の壁掛け時計で時間を確認すると、もう昼休みは七分しかなかった。

「五時限目ってなんだっけ」

俺は依子に問う。メール作成を続けるか、俺に返事をするか、依子はしばらくまごついて、やがて諦めたように携帯から目を離れた。「五頭先生の現代文。たぶん、テストの結果が返ってくる」

「まじか。テストの結果はいいんだけど、今日はノート忘れてきた。一冊もねえ」

テストのことばかり考えていて、ついすっかりしていた。板書をしていない生徒を、五頭は問答無用で晒しあげる。

依子は「だからなに？」という顔をして、再び携帯の画面に目を落とした。本当に冷たいやつだと思う。

「なんでもいいからノート貸して。ページ破ったやつでもいい」

「あたしのロッカーに、使ってないピンクのやつがある。もうあげる」

「悪いな。お礼にこれやるよ」

俺は自分の携帯からストラップを外し、依子に手渡した。ご当地限定、まりもっこりストラップ。中学の修学旅行で金沢八景シーパ

ラダイスに行ったとき、ノリで買ったやつ。

依子は自分の手のひらに乗ったまリモっこりを見て、一瞬、すごく嫌そうな顔をしたが、「ありがと」と言っつて、自分の携帯に取り付けた。

あ、使っつんだ。

俺はとてもないことをした気分になつた。また時計を見上げる。昼休み終了まであと五分。

終わるまで依子と駄弁つていようと思ひ、話題を探すと、ずっと依子に聞きたいことがあつたと思ひ出した。

「そつえば、依子の笑つてるとこ見たことないな」

依子はまばたきもせず俺を見返して「ないの」と言つた。

「ない。お前、小学校のときはよく笑つてたけど、今全然笑わないじゃん。ロボットみたいで気持ち悪いんだけど」

男友達はもう原村がある、ということにしておいて、女友達を作るには、一番重要なのは笑顔なんだと思ふ。さっきの鍋島たちを見て、俺はそついう結論に至つた。

依子は斜め上を見て考えた。もしかしてこついうことを言われたことがないのか、迷つているようだつた。

「すごく面白いお笑い番組を観たときは、極まれに笑つ」

「笑つてみせて」

「じゃあ、面白いこと言つて」

そつ来ると思つてちゃんと用意してある。俺は鞆から空の弁当箱を取り出して、中に卵液が飛び散つたままなのを確認して、依子に見せた。

「見る依子。卵が飛散して悲惨だ」

無視された。

依子は俺の渾身のぱくりギャグを見事に無視してくれて、メールの続きを打ち出した。本当に冷たいやつだと思つた。

そんな感じで今日も平和な昼休みを終えたのだが、掃除の時間になって、俺は持ち場である校舎裏庭をサボって教室におもむいた。それから依子のロッカーを探した。

どうして五時限目前にそれをしなかったのかというと、単純に早川にそれを見られたくなかったからだ。ただでさえ、今は早川の前では依子との関わりを極力避けているというのだから。

教室では早川の友達の吉岡美野里が掃除をやっていたが、早川と一緒に見られるくらいならば、まだこっちの方がましだ。

生徒用ロッカーは教室後方に配置されていて、一人分のロッカーの奥行きが40センチほどあり、木製だが、容積はなかなか大きい。しかも引き出し式で一見して中身は見えないから、置き勉をしたい生徒には最適というわけだ。といっても、あからさまに置き勉をする生徒は俺以外に知らない。

依子のロッカーを見つけた。迷わず開けると、中の私物類は割と几帳面に整理されていた。俺のロッカーとは大違いだ。

ノートやプリントなどが積まれていて、依子の言っていたピンクのノートとやらを探した。すると、ノートの下に何か不可思議なものを見つけてしまったので、俺はいったん引き出しを閉じた。

それがまた意味の分からないものだったので、俺は長考した。

周りを見回すと、吉岡が幕を動かしながらこちらをちら見していた。他に教室に居た生徒は村瀬と、あー、名前を覚えていない生徒が三人。あ、曾根本も居た。

曾根本は俺と目が合った瞬間、ものすごい形相をして、持ち上げていた机を乱暴におろし、やたらと慌ただしげにこちらへ歩み寄ってきた。

「平野のロッカーになんの用だ、このヘンタイ野郎」

この前の拳骨の痛みはもう克服したのだろうか。

「依子にノート貸してって頼んだら、あげるって。だから探してんだけど」

「ほー」

曾根本は腕組みをして、少し顎を上げながら言った。『ほー』の語尾のイントネーションが上擦っていたので、俺はウグイスの真似をして『ホケキヨ』と言いたくなくなった。言わなかったけど。

「そんなうそで俺を騙そうってか。あの平野が、お前みたいなチンピラかぶれに、ノートを貸す。馬鹿にしてんのか」

「悪いか。ちなみに、俺はノートの代わりとして依子にまりもつくりストラップをプレゼントした」

曾根本はこれを冗談と取ったのか、小馬鹿にするようににやりと笑った。

「まりもつこり？ お前はやっぱりヘンタイだな」

「でも依子、ありがとうつつつてたけど」

「ほー」

「ホケキヨ」

今度こそ言ってしまった。決してわざとではなく、でも出てしまった。窓を拭いていた村瀬がそれを聞いてフツと鼻で笑う。

曾根本はまたすごい形相をして、一度咳払いをしてから、余裕ぶつた引きつり笑いをしてみせた。

「あはは、ユーモラスだなあ今泉は。俺にはどうやったって、そんな小学生じみた低レベルな返しは出来ないよ」

無理矢理上げた口角がぴくぴくとしていて、ああ、無理をしてるんだなと分かった。だんだん相手をするのが面倒になってきたので、俺は彼から視線を外して依子のロッカーを眺めて、さてどうしようかと頭を抱えた。

無視された曾根本は、ついに堪忍袋の尾にほつれが生じたのか、いきなり俺の肩を掴んできた。

「どうせ平野のリコーダーでも入ってないか探りを入れに来たんだろ。あわよくば舐めに来たんだろ！ あわよくばお持ち帰りする気だろ！」

なんと低次元な妄言。俺は曾根本のことが恐ろしくなってきた。それから、うちの学校にリコーダーを使った授業があるかを思い返

してみた。そもそも、高校生にもなつてクラス全員でピーヒョロピーヒョロやつてたらおぞましい以外のなにものでもない。そんな想像をしても違和感がないというのか、この男は、と俺はやっぱり曾根本のことが恐ろしくなった。

誰かが、「きも」と呟いた。窓を拭き終わって、俺たちを見物する村瀬だった。村瀬は赤縁眼鏡の奥から、軽蔑するような目を曾根本に向けていた。

曾根本は自分の発言を思い起こしたのか、この世が終わったような顔をした。

「そうだよ、ヘンタイは俺だよ」

曾根本は俺を押しつけ、依子のロッカーの引き出しに手をかけた。「俺だつて、平野のロッカー開けてみたいよ！」

開けた。  
はつとして、俺は急いで曾根本の脳天へ渾身の拳骨を食らわせる。曾根本はやはり泣き出し、殴られた頭を抱えながら俺を見て、それからよく分からないことを叫びながら教室を飛び出していった。

ほっとしたのもつかの間で、俺は視界に映る依子のロッカーの中身を見て、また嫌な予感を受けた。

上履きだった。ノートの影からのぞくそれは、もはやほとんど元の形を留めていなくて、もっと言えば、刃物かなにかでスタスタに切り裂かれていた。

誰のものなのか、二つ可能性があり、それは依子が早川のものだ。しかし依子はさつき図書室にいたときまではちゃんと履いていたから、それはないと思う。すると、早川の上履き？

俺はすぐさま引き出しを閉めようとしたが、先にロッカーに手が掛かったのは、吉岡の手だった。吉岡はしゃがみ、ロッカーの中に入れた。

「ねえ、これはなに」

ぴくりとも動けないでいる俺の横で、吉岡が訝しげな顔をして、引き裂かれた上履きをつまみ上げた。上履きはつま先部分に深く切

れ込みが入っており、ゴム底の皮一枚でつながっているような状態で、吉岡が取り出した途端、ぷつりと千切れてしまった。

後ろで村瀬がはっと息を呑んだ。

吉岡の手の下で、細かく裂傷の刻まれた綿布の塊が揺れる。

「どうして平野のロッカーから、こんなひどいものが出てくるの。

これは、だれの上履き？」

「俺が知るかよ……」

吉岡は俺の目をじっと見つめたままだった。暗くくすんだ瞳に、俺は目を離すことも出来ずに、首筋に嫌な汗をかいた。

吉岡は依子のロッカーに手を入れて、かき混ぜるように荒々しく動かして、そして目を歪めさせた。

「やっぱり。かかとのとこ、沙樹の名前が書いてある」

ロッカーの中身をぶちまけながら上履きの残骸を引っ張って、吉岡は俺の眼前にそれを見せつけた。ぶら下がった布きれの先には、たしかに『早川』とマジックペンで記載があった。ピンクのキャンパスノートが地面に落ちて、吉岡が俺へとにじみ寄ってくることで、ノートはタイミングよく踏みつけられた。

俺は吉岡の手を弾いて、彼女を睨んだ。

「ふざけんなよ。お前ら、この前の件じゃ飽きたらず、また懲りずに俺たちを嵌めようってか」

「なんのこと？」

「これはいつ仕組んだ？ 依子のロッカーに、いつこれを入れた」

「あんたは、もういい」吉岡は上履きの残骸を一つ一つ拾い集め、地面を蹴るように立ち上がった。

「平野に問い詰めてやる。あいつ、絶対に許さない」

吉岡は言い捨て、教室を出て行くこととした。依子は図書委員だから、今は図書室を掃除しているはず。俺も立ち上がって吉岡を追いかけたかったが、床に散乱したプリントに足を取られ、床に両手がついてしまう。

ふつぶつと、小さな怒りが少しずつ積み上がっていくような感じ



がした。数日前の階段踊り場での感覚と同じで、俺はこの抑えがたい気持ちはどうしていいか分からず床を拳で叩いた。

「沙樹……」

教室の入り口の方から吉岡の声がした。視線を上げると、吉岡の前には、気脈を通じたように早川が立っていて、彼女は吉岡の手に収まっているものを凝視して離さなかった。

「どうして、ここまで酷いことをするの」

早川が唇を震わせた。下を向いて床に涙をこぼし、拳を握った。

「私が、何をしたっていいのよっ」

早川が叫ぶ。誰に向けての訴えなのか、恐らく、依子がここにいたなら間違いなく彼女に向けていたのだろう。早川は奪い去るように上履きの残骸を取り上げて、しゃくり上げながら俺たちの前から姿を消した。

吉岡が悔しげに斜め下を見下ろす。隣のクラスの男子が何事かと顔を出してくる。俺たちの教室は誰もが動けないでいて、やがて村瀬だけが歩み、吉岡の横に立った。

吉岡の近くでささやきかけ、吉岡が小さく頷く。それから、村瀬は流すように俺を見た。

敵意を持った目だった。

掃除の時間が終わった。

俺は並べられたばかりの机群の中で、窓際、後ろから二つめの自分の席に着いていた。さきほどの光景を目撃したのは、クラスの中では俺含め四、五人ほどで、その生徒たちは息を殺すように、俺と同じように席に座っていた。吉岡の席には村瀬が寄り添っていて、吉岡と村瀬はときおりこちらをうかがいながら会話をしていた。

続々と持ち場の掃除を終えた生徒が戻ってきて、その中に鍋島や城川の姿もあった。

鍋島は俺の方へ歩み寄ってきて、厳しい表情をした。鍋島の後ろには、鍋島の背中に隠れるように城川が立っていた。

裏庭掃除は俺と鍋島と城川の三人の担当になっている。トイレに行ってくると言って抜け出したこと、今さら思い出した。

「よくも掃除をサボってくれましたね今泉くん。こっちは、大変だったんですよ」

「何がだよ」

ここであつたことより大変ならば、是非教えてほしい。

「何がだ、じゃありません」

鍋島は今にも怒鳴り出しそうにしている、ぎゅっとスカートの端を掴んだ。城川がおずおずと一歩あゆみ出る。その小さな両手にはグレーの紙袋があつて、城川は痛ましく眉を歪ませた。

鍋島は周りを気にするようにして、そっと俺に耳打ちをしてくる。「城川さんが持つてる紙袋、中に早川さんの教科書やノートが入っています」

しばらく、鍋島の意図が分からなくて、俺はじっと紙袋のグレーに見入る。補足をつけるように、鍋島が続けた。

「裏庭の焼却炉に捨てられていたんです。誰がこんなことをしたのか、検討もつきませんけど」

「なんだよ、それ」

俺はそれつきり絶句し、また周りを見回し始める鍋島を呆然と見上げた。誰かを捜そうとしているのか、落ち着かないように指の先をいじっていた。

「早川さんはどこですか？ 灰や汚れは出来る限り落としたんですけど、それでもまだ汚くて……。ともかく、彼女に見せて原因を突き止めないと」

「さて、鍋島」

早川に見せる？ 鍋島の浅はかさに呆れてしまいそうだった。

俺はどこかへ動きだそうする鍋島の手首を掴み、それから城川を見た。城川はびくりと肩を震わせるが、今はそんなことに気を使っている暇はない。

「おかしいんだよ。さっきの早川の上履きといい、この捨てられた教科書といい。城川、一度それを俺に渡せ」

城川を見ると、彼女はまた怯え、助けを求めるように鍋島を見る。

鍋島は俺の様子からただならぬ予感を察知したのか、少し頬を緊張させた。

「今泉くん、早川さんの上履きって、なんのことですか？」

「早川、ここんとこずつとスリッパで過ごしてただろ。依子のロッカーに入ってたんだよ、早川の上履き。しかも刃物か何かで切り刻まれてて」

「平野さんの、ロッカーに……？」言葉を失う鍋島の横で、城川が声を強張らせた。

鍋島が疑念を顔にして、俺は焦る。依子を一瞬でも疑っているようだった。俺は鍋島の手首を持ったまま立ち上がった。「城川もこい」と言って、鍋島を廊下まで引っ張っていく。

廊下に出ると、俺は動揺をおさえ、鍋島と城川を振り返った。

「いたいです、今泉くん」

鍋島が、俺に掴まれた手首を見て顔を歪める。慌てて離すと、鍋島の手首はほんのりと赤くなっていて、鍋島は軽く手首をおさえた。「悪い。俺もまだ落ち着かなくて」

「いえ、いいんですよ」鍋島は俺を励ますようにぎこちない笑みを浮かべる。「それより、一体何なんですか」

「何から話せばいいのか。その、つまり」

「廊下で何してんの、その三人」

その声は、言葉をつつかえらせながらも発言する俺を、意図的に阻もうとしているようであった。教室の中を見ると、その声はやはり吉岡のものだった。彼女の行動はまるで、このタイミングで俺たちを介入してしようと初めから計画していたかのようなようだ。俺は吉岡を追い払うこともせず、こちらへ近づいてくる様をただ睨み据える。ゆっくと、教室の奥で村瀬も立ち上がる。

「その紙袋、何が入ってるの」

吉岡に詰め寄られ、城川は半歩後ずさり、ぐしゃりと紙袋を胸に抱いた。

「それ、私に貸してくれない、城川さん？」

城川はやはり鍋島に視線を送った。彼女の大きな瞳が小動物のようにはるかに震える。

そんな城川を見て、俺の中でどこまでも醜い感情が湧いてくる。俺は心に浮かんだ気持ちを反芻しないように、あえてその場を見守った。

鍋島は、俺や城川、吉岡と、その隣に寄ってきた村瀬にも視線を迷わせ、息を荒くした。自分が今どう行動を取るべきか頭を回転させているはずだ。無理もない、俺でも、大体の状況は分かっているはずなのに、こうして指一本すら動かせないのだから。

「とにかくみんな落ち着いてください、まずは、まずは早川さんを」

「沙樹なら今保健室にいるよ。具合が悪い、だつてさ」

吉岡は抑揚もなく言い切り、それから俺の方を刺すように見た。

「あんとこの、いとこのせいだね」

「依子はやってねえつつつてんだろつが。これは全部、お前らが俺の声は掠れて、情けないことに最後まで言葉を絞り出すことが出来なかった。」

吉岡は構わず俺を見つめる。

「どつしてそう言い切れるの？ その紙袋を見せないのだって、おおかた、平野のいじめの証拠を隠すためなんでしょ。やってないつて言うのなら、さっさと見せてよ」

口巧者。悔しさのあまり、俺は唇を噛む。またこれだ。また俺は頭に血がのぼって訳が分からなくなる。

もう我慢出来ず、怒鳴り上げようとした、そのとき。

「どいて」

俺の背中に手が触れる。やけに小さい手で、だけど邪魔だと言わんばかりに押してくる。後ろを見ると、俺より頭一個分背の低いやつがいて、そいつは俺を見上げた。

「教室、入れない」

依子は今の状況を全く読んでいないのか、いつもの無愛想な表情をたたえていた。俺は閉口し、道を開けた。依子是不審げに俺や吉岡たちを見回したが、それから何事もなかったように教室に入っていく。

ここまで冷静を貫いていた吉岡が、初めて揺らぐ。口元を歪めて怒りを露わにし、依子の背中を静かに追いかけた。

そこでようやく、俺は教室内の様子を認めた。他の生徒たちも、ほとんどこの状況を理解していないようで、ひたすら俺たちの動向をうかがうばかりのようだった。

依子はスカートの位置を気にして丁寧に座り、自分の方へ近づいてくる吉岡を小さく見上げた。吉岡は依子の机を叩き、声を上げる。「あんだ、沙樹にあんなことしておいて、よく平然としていられるね」

「なんのこと」

「あんだのロッカーに沙樹の上履きが入ってたよ。あれはなに？」

ハサミかカッターでやったの？ あそこまでやるなんて、あんたおかしんじゃない」

依子は訳が分からないという風にぼかんと口を開けた。俺は吉岡の図々しさに逆に感心してしまう。「おかしんじゃない」なんて台詞、そのまま自分に向けているようなものだ。

「バックの中身を見せなさい。刃物が入ってるかも」

依子は何かを言いかける前に、吉岡は机の脇にかかっていた依子の学生鞆に手をかけた。さすがに依子も手を伸ばした。よく分からないままに、鞆を取り上げる吉岡の手を掴む。

「意味がわからない、やめて」

俺は珍しく、瞬時にこれを理解する。依子の鞆にも、きっと何か細工をしてあるんだ。

すぐさま駆け出そうとして、思わず前方にいた城川にぶつかった。城川はかるうじて紙袋を持ったまま尻餅をつく。

俺は迷った。城川に謝罪を入れて助け起こすか、それともこのまま吉岡と依子のところへ行くか。落ちて置いて考えれば、城川に「ごめん」とだけ言って、すぐに吉岡たちのところへ行ってしまえばよかったんだけど、なにせ頭の中が混乱していた。城川は緊張が限界を迎えたのか、いよいよ目に涙を浮かばせ始めたので、俺はさらに逡巡する。

そのとき、俺のもとへ、無機物の落下音と、その中に隠れた光がかすかに届いた。

俺はその音の方を見送り、周りの生徒たちも同様にそうした。

依子の鞆のファスナーが勢いよく開き、中の参考書やノート、鏡などが床に散らばったのだ。後を追うように、窓から射し込む光に反射して、地面に吸い込まれるように落下していくカッターナイフが俺の目に飛び込む。カッターナイフはあからさまに刃を限界まで引き出されていて、床に落ちた瞬間、先端が音もなく欠け落ちた。

依子の隣に居た女子生徒が、短く悲鳴を上げる。

誰もがそれに見入り、沈黙に包まれる中で、最初に口を開こうと

したのは吉岡だった。

しかし、彼女が何か言う寸前、ふいに背後から怒声が上がった。

「何の騒ぎだ！」

五頭だ。彼は教材を持ち、俺たちのクラスを目を剥いて見回していた。吉岡が依子の鞆を掴む手を瞬時に引っ込める。

「高校生にもなつて、まだ中学生気分が抜けとらんのか。じゃれ合うなら余所でやれ」

声量が幾分か抑えられたことで、五頭の凄みが際だった。教室が静まり返り、依子だけが床に散らばったものを拾い上げ始めた。

村瀬が眉をしかめ、口に手を当てて何かを呟く。鍋島は状況についてきていないのか、愕然として立ち尽くすのみだった。

依子はカッターナイフを見つけると、何の疑念も動揺も見せずに拾い上げて、刃を引っ込めてから鞆に仕舞い込んだ。

「何やつてる。お前ら、早く席に戻れ」

村瀬、鍋島の順に、ぼつりぼつりと教室へ入っていく。俺は城川を見下ろし手を差し伸べた。

「ごめん、怪我してないか」

城川は躊躇い、控えめに頷きながらも、片手に俺の手を取って立ち上がった。

現代文のテストが返ってきた。名簿順に名前を呼ばれ、五頭からテストを受け取る際、彼がふとささやく。

「何かあったのか？」

「何もないっす。先生の言う通り、じゃれ合ってただけですよ」

俺は首を振り、それだけを告げた。席に戻るとき依子や吉岡の顔が見えて、彼女らは伏し目がちに視線を落としていた。それは他のどの生徒も同じで、五頭から見るとやはりこれは何かあったのだと思わざるを得ないのだろう。

席に座る直前に鍋島と目が合ったが、彼女もすぐに視線を逸らし

た。いつもの鍋島なら、今泉くんは赤点だったんじゃないですか、  
とでも冷やかしてきそうなのに。お互いがお互いに、どう接してい  
いのか分からないのだと思う。誰もが同じ考えだった。

俺は音を殺して席に座り、前を向いた。

同級生たちと少しずつ亀裂が生じていくような気がして、どうし  
ても不安を拭えなかった。



五時限目の現代文が終わり、依子からもらったピンクのキャンパスノートを閉じる。ノートの表紙には吉岡の靴跡がついていた。消しゴムで何度もごしごしやってみたけど、完全には消えなかった。

窓際の最前席は村瀬の席で、彼女のもとに吉岡が近づいていく。

トイレ行こう、吉岡の声が小さく聞こえた。二人は二、三言会話を交わし、それから村瀬が頷く。

さっきの掃除の時間を皮切りに、この二人はよくこうしてひそひそ話をしている。俺は今まで、吉岡と村瀬がこうして親しげに寄り添っている様を見たことがない。疑心暗鬼ならいいけど、そうでないことはもはや俺の中で確信めいている。

吉岡は先に教室を出ていってしまった。二人で行くんじやないのか、と不審に思っていると、席を立った村瀬の足がこちらを向いた。机と机で並べられた直線を、まっすぐ俺の方へと歩いてくる。村瀬のくせっ毛気味のはねた横髪が揺れる。

俺は少しだけ緊張した。視線を村瀬から外し、窓の外の眩しい風景を見つめる。ひとつの入道雲が、空を覆いつくさんばかりに存在を主張していた。

村瀬の足音が、俺の横を過ぎていく。

「由多加」

後ろで鍋島の衣擦れの音がする。横目に後ろを盗み見る。鍋島はぼうつと顔を上げていた。

「トイレいこーぜ」

「あ、はい」

快活な笑顔をする村瀬に対して、鍋島は開けっ放しの缶筆箱を閉じた。鍋島の反応は日常に構成された何気ない一コマのようで、女子は一人でトイレに行くものだと思っていた俺からすると、ちょっと意外だった。

「おいおい、元気ないぞ由多加っ」

村瀬が鍋島の肩に抱きつく。それは唐突で、俺の視界に村瀬がいきなり入ってきて、少しどきりとしてしまった。

「なんで由多加まで落ち込んでんのさ。あたしらさ、はっきり言って関係ねーじゃん？」

村瀬がにへへと笑う。果たしてそうだろうか。村瀬だって、ひそかに依子に腹を立てているんじゃないか。少なくとも俺にはそう見えなかった。

「それは、そうかもしれないですけど。でも、他人事で終わらせちゃ駄目っていうか……」

「なにが言いたいのか分かんないけどさあ、そんなことより可愛い可愛いおさげちゃんがずれてるよ。あたしが直してやる」

抱きついたらたま鍋島の髪をいじりだす村瀬。くすぐったいのか、鍋島がくすりと笑い出す。

「や、やめて、それくらい自分で直します」

「親友の好意を無碍にするではないよ由多加。ちょっとだけ、ちょっとだけでいいから触らせて」

「ちょ、恐いです村瀬さん」

「さらさら。ぐふふ、由多加の髪、超さらさら」

二人がいちゃつく中、ふいに俺の背筋が凍り付く。村瀬が、鍋島のおさげをくるくると指に巻きながら、瞳を俺の方へと向けた。吉岡と同じ、暗く刺すような目だった。

俺はそっと、自分の足下に視線を落とした。

村瀬は、鍋島に続き城川も誘っていた。城川は自分の席にうずくまるようにしていたが、村瀬に話しかられて顔を上げた。そっと首を振って、控えめに拒否を示す。

城川の鞆には、早川の教科書類が収まった紙袋が入ったままのはずだった。五頭の授業が始まる前、紙袋をどうするかまごまごしていたが、苦肉の策で自分の鞆に入れていた。あれは、恐らくそのままのま

俺は鍋島と村瀬が教室を出ていくのを確認すると、目を閉じ、机に突っ伏した。

トイレから返ってきた鍋島は、どこか当惑した顔をしていた。それが何を意味しているのか、俺は特に気にも止めなかった。村瀬が鍋島をトイレに誘った理由すらも。そのとき、俺の頭の中は眠気でぼんやりとしていたのだ。

六時間目は居眠りを決め込み、HRを終えて、やっと放課後となる。今日は長い一日だった。

早川は結局、あれから教室に姿を見せなかった。まだ保健室にいるのか、それとももう帰ってしまったのかもしれない。誰も早川の名前を口にしないから、真実は定かではない。

俺はすぐに後ろの鍋島に話しかけた。

「鍋島、これから暇？」

鍋島はやはり困ったような表情をする。

「なんですか？ 私、これから塾があるんです」

「何時から？」

「七時半、ですけど」

鍋島は躊躇いつつもそう答える。まだ五時にもなっていない。どうしてそんなに時間を気にする必要があるのだろう。

「まだ時間あるじゃん。ちょっと俺に着いてきてほしいんだけど。」

あと、城川も」

俺は教室を見回した。ちょうど、城川が鞆を守るようにしながらこちらへ近づいてきた。鍋島がとたんにそわそわとし出す。

「私と城川さんに、何の用があるんですか」

「だから、着いてきたら改めて話すよ」

城川が鞆の紐を握って、びくついたように俺たちを見てくる。

「これ、どうしよう、由多加ちゃん、今泉くん」

幸いなことに、吉岡は机や鞆の中の持ち物を確認しているところ

だった。俺は鍋島と城川にしか聞こえないように声をおさえる。

「ちようどよかった。二人とも今から俺に着いてきてくれ。城川、まずはそれを俺に超越せ」

城川は例のごとく鍋島を見て、彼女の判断をあおいだ。鍋島はためらいながらも、やがて「渡してあげてください」と言う。俺は心の中で鍋島に感謝した。

その言葉を受け取った城川は、手を震わせながら鞆を開け、周りから見えないように身体で紙袋を隠し、俺に差し出す。俺はそれを素早く受け取ると、即座に自分の鞆にしまった。

その次の瞬間だった。

「心結<sup>みゆ</sup>つ」

城川の顔が跳ねるように強ばる。村瀬がいつの間にか城川の後ろにいて、城川の首に手を回していた。みゆつて、城川の下の名前だっけ。そういえばそんなんだったかも。そんな悠長なことを考える反面、俺の心臓も鼓動を早めていた。

「心結は今日もちっちゃくて可愛いねえ。あたしの娘にならないかい、みゆみゆ」

「やめて……」

城川はきつと恐れているはずだ。俺に紙袋を渡すところを、村瀬に見られたかもしれない。城川は嫌がるふりをしながら、さりげなく鞆のファスナーを閉めた。

「心結、これからあたしたちとちよつと駄弁つてさ、そこでマックでも行こうぜ」

あたしたち。俺はそのメンバーを予測した。あたしたちとは、鍋島のことではなく、吉岡たちだろう。

でも、と言って、城川は鍋島を見下ろした。鍋島は申し訳なさそうに、城川から目を逸らした。

「由多加は今日塾だつてさ。つれねーよな、塾なんて辞めちめー！」

村瀬は酔っぱらった中年のように言う。不気味なほどにテンションが高い。

そうか。五時限目の終わり、鍋島が村瀬とトイレへ行ったとき、きつとトイレには吉岡がいたんだ。

放課後、私たちに付き合って。

こんな風に鍋島も、吉岡や村瀬らの誘いを受けたに違いない。そして、その誘いは俺と同じように「塾だから」と断った。

鍋島は当たり前障りのない笑みを浮かべ、村瀬を見上げた。

「すみません、私のことは、また今度誘ってください」

「おう、また誘うよ」

村瀬が鍋島に手を振り、城川を半ば強引に引っ張っていった。城川は困惑して、俺たちに視線を送ってくる。城川には悪いと思いながらも、やむをえまいと断じ、村瀬とできるだけ目を合わせないように明後日の方を向いた。

「どこへ連れて行くの、村瀬ちゃん」

「女子高生流の女子会のトレンドと言えば、女子更衣室に決まっているだろ！」

教室の前で吉岡とその女友達三人が待っていた。村瀬と城川が到着すると、その女子生徒、計六名は教室を出ていった。

次々と、生徒が教室から姿を消していく。時刻はほぼ五時の頃。

生徒は全員姿を消した。

俺と、鍋島だけを残して。

俺は鍋島以外の生徒が出ていくのを頼杖をついて待っていた。鍋島が黙って帰らないことを願っていたが、ありがたいことに、まだ後ろに気配がある。

みんなが居なくなつたあとの五分間。俺は静かに、窓の隙間から入ってくる風を感じていた。後ろで鍋島が何かを漏らす。

「今日はなんだか、みんなおかしかつたです」

誰もいない中、俺が前へと送る視線を外す必要はなかった。前方の教材棚の脇に飾られたユリの花瓶を、俺はじつと見つめる。

「おかしくなつていくのは、まだまだこれからだと思っけどな」

「不吉なこと言わないでください」

微妙な差異だが、鍋島の声は荒っぽくなっていた。どこへ向けていいのかわからない不安が漏れ出したんだろ。

「吉岡たちのこと、どう思う」

「まだなんとも言えません」

鍋島ならそう言うと思った。馬鹿みたいに吉岡についていく女子たちとは違う。そんな鍋島だからこそ、俺はこうして声をかけようと思えたのだから。

俺は嘆息し、鞆をかけて席を立つ。

「頼む、俺についてきてくれ」

迷いながらも、鍋島は頷いてくれた。

これから旧校舎の屋上へ行く、そう俺が言うと、鍋島は静かに激怒した。

「新校舎の屋上じゃだめなんですか？ 旧校舎の屋上は、ずっと昔に立ち入り禁止になっているはずですよ」

「これから俺たちは内緒話をするんだ。立ち入り禁止の場所だからいいんだろ」

まあ、俺は毎日のように通っているんだけど。

鍋島は肩書きに違わず風紀委員長然としているから、ここで鍋島に来るのを拒否するかもしれない。それだけが心配だったけど、鍋島は釈然としないながらもついてきてくれた。

屋上への非常扉を開けると、見慣れた灰色のコンクリートが広がる。貯水タンクに寄りかかって座る原村も居た。原村は、上を見上げながらスケッチブックに筆を走らせていた。町の風景には飽きたのだろうか。

原村は俺を見つけて、ぱっと顔を明るくした。

「図書室にも居なかったから、もう帰ったのかと思った。寂し過ぎて三回も泣いたよ」

マイブームなのか、その台詞。

「お前好みの、ちょっときつめの女子を連れてきたんだ。これがまた呼び出すのに苦戦しちゃって」

後ろの鍋島から背中を引っ叩かれた。

「まじで？ よくやった今泉。僕が彼女大募集中なの、なんで知ってるの」

適当に言ったのに喜ばれた。恐る恐る、鍋島が俺の横から顔を出す。原村がきよとんとした。

「あら、鍋島だ」

「昭文くん」

鍋島の口から出たアキフミクンという単語に、いまいち俺はぴんと来なかった。

ねえねえ鍋島さん、アキフミクンって誰？ と尋ねようとしたが、鍋島はチーターまがいのスタートダッシュで原村のもとへと駆けていった。

「昭文くん！」

「そういう君は鍋島か、鍋島由多加なのか」

二人はハイタッチをして、キャツキャとはしゃぎ出した。なんだろう、この取り残された感。

「この学校に入学したって聞いたのに、全然校内で会わないから、不登校になっちゃったのかと思いましたよ」

「僕は周りから神隠しの原村と呼ばれるほど影の薄い有名人なのだよ」

「相変わらず訳分かんないですね！」

なんつー矛盾。神隠しっていうか、いつも屋上か図書室受付に隠れてるだけなんだけど。

二人が落ち着いて、どういう関係なのか話を聞くと、中学時代の部活仲間らしい。案の定美術部。鍋島もたまたま絵を描くという。そういうイメージ全くないんだけど。

「原村の下の名前、昭文って言うんだな」

ふと俺は言ってみた。原村が目を見開き、それから悲しそうな顔

をした。鍋島は引いていた。

「なんで知らなかったんですか」

「だって、名字さえ知ってればそいつのこと呼べるじゃん。知る必要なくね？」

鍋島は呆れて突っ込みすら入れてこなかった。原村が悲しみを通り越して、絶望的な雰囲気を全身から漂わせる。俯いて、僕はそこまでの存在だったのか、としょんぼりしていた。

それにしても、ここまでハイテンションの原村と鍋島を見たことがない。いちやいちやする二人を前に、俺は猛烈に帰りたくなった。でも鍋島を呼んだのはちゃんと理由があるので、とてもやりにくいんだけど、本題に入ることにした。

俺は習慣的に胸ポケットから煙草を取り出し、口にくわえて火を点けた。

鍋島が驚愕を顔に浮かべる。

「今泉くんが、煙草を吸っています」

「そんな英語の例文みたいなこと言われても反応に困んだけど」

「ふざけないでください。そして、煙草はいくつから吸っていいことになってるのか言ってみなさい」

「十八？」

「二十です！ ていうか、もし十八だとしてもアウトじゃないですか」

激昂する鍋島を前に、えへへ、と言って俺は誤魔化してみた。そろそろ本題に入りたいのに。

「まあまあ、今泉だってワルになりたいお年頃なのさ」

原村が柔らかく鍋島をなだめ、フォローを入れてくれる。

「そういう問題じゃないし、それにどことなく臭うなと思ったら、まさか本当にここまで極悪の不良だったなんて……」

不良の敷居も低くなったもんだ。

不満そうにしながらもやがて鍋島は押し黙った。話が終わったら、このことについて攻めてきそうな雰囲気である。めんどくさ。



しかし、これでやっと話が出来そうだ。

日も暮れ始めていたので、俺はさっそく鞆から例の紙袋を取り出した。鍋島が表情を引き締める。

紙袋を開けると、鍋島たちの話通り、中には教科書やノートが入っていた。それらは焼却炉の灰で薄くすすけていて、それぞれの表紙の名前欄には、たしかに早川沙樹の名前があった。

「これ、もう中は見たか？」

鍋島が首を振る。

俺はその場にしゃがみ、原村と鍋島に見えるように地面にノートや教科書を置いた。二人も俺と同じように座り込み、それらを凝視する。

開けるぞ、そう言っつて、二人の返事も待たずに教科書を開く。世界史の教科書だ。

鍋島の、唾を飲み込む音が聞こえた。原村が顔をしかめる。

表紙を開くと、さっそく赤字の落書きがあった。ページを縦横無尽に走る赤。

死ね、の羅列だった。なんと幼稚な。

次々とページをめくっていく。鍋島は気分が悪そうに、口に手を当てていた。

と、あるページで俺は手を止めた。違和感の残る言葉だった。

根暗。ビッチ。淫乱。幽霊女。病人顔。

どれも早川にあてた悪態とは思えない単語ばかりだ。まるで依子に向けたメッセージのような言葉が、あるページに集中して書き殴られていた。

図書室での早川との一件以前、早川が、依子の援交疑惑の噂を流していた。依子が援交はあり得ないだろうけど、淫乱などの言葉はその名残りののか。ともかく、これをやった犯人が吉岡や早川たちだということが濃厚になってきたんじゃないかな。

鍋島の方を見ると、鍋島は怪訝に眉を寄せて俺を見返した。俺は口火を切る。

「これは早川と吉岡がやったという一つの根拠だと思う」

もちろん万が一の話だけど、本当に依子が犯人の場合。これはもしものときの保険でやったということだ。このページよって、俺たちも早川たちへの疑いを強めた。

依子のカモフラージュで、わざと隠すように記したのだとしたら。俺は心の中で否定した。あの嘘を吐くのが下手くそな依子が、こんなずる賢い思惑を思いつくだろうか。

鍋島も原村も何も言わなかった。

それから俺は数日前の、依子と早川たちの階段踊り場での一件を二人に話した。原村には隠そうと思っていたことだが、ここまで来るともうそんなことは言っていられない。原村の力も借りたい。

早川や吉岡たちは依子をはめようとしている。それを強調して二人に訴えた。

話し終わると、二人はまた口を閉ざした。二人が俺の訴えをどう思っているのかは分からない。でも俺は伝えたいことは伝えた。

鍋島は血色を悪くしながらも口を開いた。

「これは一つの可能性なので、気を悪くしないで聞いてください。このページの落書き、平野さん自身が疑われないようにするために、逆に早川さんたちに罠をかけたって可能性はないですか？」

早川たちが暗に依子を罵倒中傷するためなのか。それとも依子が、何かあったときに備えて早川への疑いを持たせるためのカモフラージュなのか、という話。

鍋島の言葉に、俺はすぐにかぶりを振った。

「それは俺も考えた。でもさ、依子と、早川や吉岡を比べて考えてみる。馬鹿正直な依子と、なにかとずる賢い二人。印象だけで言うと早川たちの方が怪しいと思わないか」

「印象だけで言われたら、確かにそうなんですけど……」

ここで、見かねた原村の助け舟が入る。

「つまり今泉が言いたいのは、なにもこの場で真犯人を突き止めよってことじゃないんだろう。鍋島や僕が、平野と早川勢のどっち

を信じてくれるのか、ということだよな」

原村の言葉に俺は頷いた。

俺たちは警察じゃない。指紋検証も権力行使もできない。犯人が認めない限り、俺たちにはどうしようもないんだ。

ならば、依子が一方的にやられてしまわないように対策しなければいけない。

「あと、こんなものもある」

俺は鞆から、依子からもらったピンクのキャンパスノートを取り出した。中には俺が現代文の板書をしたものしかないが、表紙には確かに依子の字がある。吉岡の足跡があるからちよつと見辛いけど、表紙上部に『自主学習用』、表紙下部には『平野依子』と、依子の字で書いてある。女の子っぽくない、角張った達筆字。それを二人に見せた。

それから、早川の教科書やノートに書かれた落書きと比べてみる。こちらはいかにも女の子らしい丸文字。

「依子、小学校のときに習字教室に通ってたんだ。おっさん臭い字書くだろ。それに対してこっちの落書きは丸っこくて、女子らしさを隠せない字体なんだよ」

鍋島が反論しようとしたので、俺は先読みするように続けた。

「もちろんさつきと同じように、依子の力モフラージュって可能性もある。でもさ、いくら依子が頭がいいとはいえ一介の高校生がそこまでするか？」

「それも印象論、つてことですね」

鍋島が教科書の落書きと依子のノートを交互に見ながら答える。

原村はいつもの余裕ぶった反応をする。  
「筆跡鑑定だよな。僕ら、なんだか探偵になったみたいで格好いいな」

正直俺は原村の反応を警戒していた。妹の教科書にこんな落書きをされたら、兄だったら普通、問答無用で憤慨するだろう。平野が犯人だ、そうやって理性をなくしてしまうかもしれない。

しかしそこはやはり原村で、彼はいつもの落ち着きを払っていた。そんな原村に俺はまた好感を持った。

「僕は平野と今泉を信じるよ」

原村は真顔で言った。あっけなさ過ぎて、俺は思わず「は？」と聞き返す。原村は俺の肩を叩き、微笑んだ。

「だって、平野と今泉は僕の友達だからね。信じ合ってこそその友達なのだよ」

原村はさらに破顔した。

これは本来なら喜ぶべきなのかな。俺の心中は複雑だった。原村にとって妹である早川沙樹は、どういう存在なのだろう。

そんな原村を見ても、鍋島はまだ真剣な表情を崩さなかった。

「私は、まだ信じるわけにはいきません」

鍋島ははつきりとした口調で言い切る。

「私、弱い者いじめって大嫌いだし、見るのも嫌。だからこそ、簡単に今泉くん的主張を鵜呑みにするわけにはいきません。私は自分の目でちゃんと見極めたいんです」

どこかで聞いたことのある台詞だった。

弱い者いじめは嫌い。見るのも嫌。

ああ、これか。鍋島と初めてまともに会話を交わしたとき、そのときも鍋島はそんなことを言っていた。

あのときはなんとも思わなかったけど、今の俺には染み渡るような言葉だった。いじめの現場をリアルに受け止めたからだろうか。

当たり前のことを当たり前のように言うのは難しい。俺はそう思った。

今の時代でいじめと言えば、いじめられる方にも原因がある、なんて言われてしまう。

いじめられる方にもたしかに原因はある。依子を例にとってみれば、あいつは無口だし、暗いし、人のことを無視するし、その上無神経だし。早川の前で、俺にキスしやがった。思えば、あれは完全に依子が悪い。今度改めて叱ってやろう。原因は間違いなく依子に

もあるんだ。

だからって、いじめっ子をどう擁護できるんだ。いじめられっ子に比べても、酌量の余地はあるのか。

いじめられる側に原因があるのは百も承知、本当は誰だって分かってる。それを踏まえた上で、俺たち部外者はいじめを断ずるべきじゃないのか。実際、俺が何も出来ないせいでクラスメイトの心は離れ始めている。これは一部の人間が心のどこかでいじめを肯定してしまっているからじゃないのか。

いじめは悪いことだなんて今日び小学生でも滅多に口にしない。当然過ぎるからわざわざ言葉にはしない。だからこそ心の中で消化されてしまつて、その意味が揺らいでしまつんだ。

誰も声高に言わないから、いじめが起きてしまつ。

当たり前のことを当たり前のように言うのは難しいけれど、鍋島はそれを臆面もなく言ってしまった。俺だったらそんな誰もが分かりきっていることを、こうやって真剣な顔で言うのは恥ずかしい。

俺はそんな鍋島を尊敬した。

「分かった。無理に理解を求めようとして悪かったよ」

「いえ、今泉くんがいつになく冷静なので、私も助かりました」

鍋島は頬を掻いて、今泉くんならここで怒鳴ってくるのかと思いましたが、と笑う。俺ってそんなに怒鳴ってるイメージあるのかな、とちよつと傷ついてしまつたが、思えば結構喚き散らしてるよな、俺。

これからはもつと冷静になろう、俺は自分の頬を叩いた。

原村がそんな鍋島を見て微笑ましそうにする。

「この中じゃ鍋島が一番まとよだね。僕なんて、結局は『友達だから』なんていう感情的なものだし」

「昭文くんは私なんかよりずっと人間的で好感が持てると思います。今泉くんを友達だとは思いたくないですけど」

うんうん、いやおい待て。

「鍋島の夢って、たしか学校の先生だったよね」

「そうです。私、小学校の先生になるのが夢で」

「君ならなれると思うよ。鍋島ならまさにぴったりって感じ」

「えへへ、そんなことありませんよ」

鍋島がおさげをいじって照れる。また二人がデレデレし出したので、俺は死ぬほど憂鬱になった。なんだったんだよ、原村の彼女募集中発言は。もう鍋島と付き合えよ、くそっ。

俺は心の中で毒つきまくり、もう鍋島なんか屋上に呼んでやんねえ、まじでそう思った。

原村と鍋島は中学時代の思い出話に花を咲かせていた。俺は全くついていけなくて、一人寂しく煙草を吸い、屋上からの暮れなずむ景色を見下ろした。

三十分しても四十分しても二人は話し続けていた。午後六時過ぎ。鍋島はそろそろ塾に行かなくていいのか。忘れていそうな雰囲気である。

でも教えてあげなかった。さんざん惚気を見せられて、俺はご立腹なのだ。

「先に帰るわ」

そう言ってみると、原村も鍋島もぞんざいに手を振って、それからまた会話を続けた。寂しすぎて三回くらい泣きそうになった。

屋上を出て階段を降り、廊下を進んでいく。今日は一人で帰るのが無性に寂しい。図書室へ行って依子と一緒に帰ろうかと思ったが、こちらから誘うのはこっ恥ずかしいのでやめておく。

暗み始める廊下の先、なにやら姦しい声が聞こえてくる。そういえば、この先には女子更衣室がある。

夏だというのに、ギヤーギヤーと暑苦しいくらいやかましかった。もし俺が女子である中に混ざっていたら、とつくに鼓膜が熱で破れていると思う。

一気に通り過ぎてしまおう。女子更衣室直前で歩を早めようとする、ふいに更衣室の扉が開いた。そこから次々と出てくる女子たちは、見慣れた顔ばかりだった。

村瀬の顔もあって、そうか、たった今更衣室の女子会とやらは終わったのだなと得心した。

城川が最後に出てきて扉を閉じる。五名ほどの女子群の中で、吉

岡だけが居なかった。城川は俺を見つけると、すぐに視線を足下の床に落とした。他の女子たちの反応も似たようなものだった。

村瀬は俺を一瞥し、城川の肩に手を置く。

「みんな、これからマツクでいい？」

女子たちは顔を明るくして村瀬に頷いた。女子の一人が、村瀬みたいに城川の頭を撫でる。

「心結みゆちゃんも行くよね？」

女子に問いかけられ、城川は下を向いたまま頷いた。どうしてなのか、彼女の手は震えていた。

女子群は俺を一切無視して廊下を進んでいく。それはいいんだけど、やはりどう見ても吉岡がいない。

閉じられた更衣室の扉を、俺はしばらく見つめた。

ここで何があったのか大体は想像できる。吉岡も、俺みたいに誰かを味方につけようとしていたんだ。孤立しないように、依子を安全にいじめ抜くために。

味方集めをしていたという点で、俺は吉岡と同レベルのように感じられた。すぐに否定する。違う、俺は正しいことをしているんだ。そう自分に言いきかせた。

「いくらなんでもやり過ぎだわ」

突然扉の奥から聞こえてきた声に、俺は反射的にのけぞった。聞き覚えのある声で、これは早川のものだと確信した。

保健室に行ったと聞いて、俺はもうてっきりそのまま帰ってしまったものだと思い込んでいたから、余計にビビった。

早川のヒステリックな声が続く。

「なんで私の上履き、あんなに酷くしちゃうのよ。あれじゃもう履けないじゃない」

「でも、ああした方がみんなの怒りを買えるでしょ。きつとみんなも平野のこと大っ嫌いになったよ」

こちらは吉岡。早川がいるということとは、なんとなく、吉岡はまだこの更衣室にいるんじゃないかと思っていた。



「大丈夫。沙樹の新しい上履きなら、私ともう買ってあるんだから。上履き代は私がつから、それでいいでしょう?」

「だからって……」

だんだん二人の声が小さくなっていく。俺は更衣室の扉の近くに寄って周りを確認した。時間が時間だから、この廊下には誰も見当たらない。俺は慎重に扉に耳をつけた。耳たぶに冷たい木の感触がつく。

次に声を上げたのは早川だった。

「あと、世界史の教科書はどうするのよ。ノートはいいけど、教科書のことは私、全然聞いてなかったわ」

「世界史の教科書ならアキラからもらったよ。知ってた? ここで使ってる世界史の教科書、ここ二年は改訂されてないんだよ」

アキラ。誰かの名前だろうか。どこか聞き覚えのある名前で、喉の奥につつかえるような気持ち悪さがあった。

俺が思い出す間もなく、早川の涙ぐむ声がしてくる。

「嘘でしょ、まだあんな人と付き合ってたの。ねえ美野里、悪い冗談はやめてもう普通の子に戻りなさいよ」

「最初から付き合ってたんじゃないよ。セフレってやつ。お金にもなるし、アキラは私のためならなんだってしてくれるんだよ」

「私に、あいつの教科書を使えっていうの」

戦慄する。俺はここで原村の言葉を思い出した。

早川沙樹ってさ、やばーいやつらとの付き合いがあるんだぜ。

まさか、と俺は額に汗をかく。やばいやつとは、もしかして吉岡美野里のことで、ひいてはアキラとかいう男のことなんじゃないか。これはただの直感だけど、俺にはそうとしか思えなくなってきた。

「どうして、ここまでするの。いくらなんでもこれじゃ平野が……」

早川の切実に訴えるような声がしてくる。吉岡がそれを聞いて不気味な笑い声をあげた。

「平野が、なに? 可哀想だって言いたいのか? 馬鹿なことを言ってるのは沙樹の方じゃん。あいつ、沙樹から無理矢理今泉を奪って、

それで沙樹のことを影で笑ってるんだよ。マジで魔性だよ。今頃、沙樹のこと馬鹿にしながら今泉を食ってるかも」

早川は何も言わなかった。

「今泉だってそうだよ」

吉岡が俺の名前を指して、俺はまた嫌な汗をかいた。

「あいつ、沙樹にあんな酷い振り方をしておいて、よく平気な顔して教室に出てこられるよね。本当なら今泉のこともどうにかしてやりたいんだけど、それでも沙樹、今泉のこと諦められないんだもんね？」

数秒の間を置いて、早川が言い漏らす。

「でも、美野里には関係ないことじゃない。傷ついたのは私で、美野里には」

「私には関係ないってなんだよっ！」

吉岡が空気を裂く大声を張り上げて、俺の鼓膜を打った。俺は身じろぎ一つ出来ずその場に固まる。息が荒くなって、この音が早川と吉岡に漏れ聞こえないか、俺は気が気でなかった。

吉岡が荒く息を吐く音がする。扉越しに伝わる一触即発の空気。

それを和らげたのは、吉岡自身の優しい言葉だった。

「私たち、友達でしょ」

早川は何も言わなかった。

「私の親友を傷つけたあいつらを、私は絶対に許さない。私は沙樹のためなら命だってかけるよ。沙樹のこと、大好きだもん」

扉の奥から音がした。誰かが立ち上がる音。俺は想像を巡らせる。

「ありがと、美野里。私も大好きだよ」

多分今早川は、吉岡を抱き締めて泣いている。

歪んだ友情が扉の奥にある。こんな形の友情があるのかと、おぞましくて背筋が震えた。胃の中のものごみ上げてくるようで、俺は唾を飲み込み、ぎゅっと瞼を閉じてそれに耐える。

それから一分、二分と立っても俺は動けなかった。早川たちがそのうちここから出てくるかもしれないのに、一歩も動けずに扉に耳

をつけ続けた。

「なにをしてるの」

隣で声がして、俺は女みたいなき鳴を小さくあげた。そこには依子がいて、慥然として俺を見つめていた。

「きゃあ」

依子が珍しくふざけて俺の真似をした。今日はあることがあったのに、逆に感心してしまう。

そんなことより、更衣室の中に俺の悲鳴が聞こえなかったかが心配だ。俺はその場に立ちすくんで扉の方へ注意を向ける。幸い、依子は黙っていてくれた。

反応なし。ここでようやく、ふう、と息を吐いた。

改めて依子の方を見る。よし、さっさとこいつを引っ張ってこの場から遁走だ。そう判断して依子の手首を握る。依子は不思議そうに俺を見つめた。

そのまま駆け出そうとしたが、運悪く、廊下の奥から鍋島と原村が歩いてきた。見つかってしまったのだ。

「おう偶然。一緒に帰ろうよー」

遠くから、原村が満面の笑みで手を振ってくる。しかもこの二人、やたらちんたらちんたら歩いてくる。一緒に帰るのはいいけどとつと歩きやがれ、俺は叫びそうになるのを我慢した。原村と鍋島を無視してこのまま逃げようかとも思った。しかし逃げると、余計に騒いで追いかけてきそうだ。

仕方なく人差し指を口に当て、『黙れ』の合図を送ってみたが、これがびっくりするくらい伝わらなかった。原村は馬鹿みたいに手を振っておーいおーいと叫んでいる。俺は原村のえびすスマイルに拳を突き立てたくなった。

二人がやっと近くにきて、そして原村がにやりとした。

「手なんかつかないじゃってどうしたの。もしかこれからデート」

言葉を切って、原村はドン引いたような顔をした。

「うわあ……」

なんだろう。俺は自分の立ち振る舞いを見改める。片手に女子更衣室の扉、もう片方の手は依子の手首。

「神聖な学業の場で何をするつもりですか、今……エロ泉くん」

鍋島が軽蔑するような目を向けてきて、依子は嫌そうに俺を見る。

「けどもの」

「お前ら、なんか勘違いしてるだろ」

ふいに、片手についていたはずの扉の感触が失せた。

反射的に俺は身を引く。いきなり俺に引かれて、依子が転びそうに軽くつんのめっていた。

扉が開き、中から早川と吉岡が顔を出した。

早川も吉岡も、俺を見て表情を固める。早川だけは目を腫らしていた。それから吉岡が、原村と鍋島を見回し、最後に依子を見て、嫌悪感いっぱいな表情をした。早川は原村を見つけて、どこか嬉しそうにする。

原村は、ぞつとするほどの無表情をたたえた。

なんだ居たのか、俺はとっさにそんな顔を作った。どんな顔かは分かんないけど。でも、依子と鍋島はそれに近い表情だった。

「お兄ちゃん」

「行こ、沙樹」

早川が何か言い終わる前に、吉岡が彼女の手を引いて歩き出した。吉岡に手を引かれながら、早川はときおり原村の方を振り返った。俺たち四人は無言でそれを見送る。

ばれてない、ばれてない。心の中で繰り返して気持ちを落ち着かせる。振り返る早川に、俺が盗み聞きしていたことを悟られたくなかった。

二人の姿が見えなくなっただけから俺たちは沈黙した。たった数秒が長く感じる。

最初に声を出したのは、鍋島だった。

「四人で、帰りにどこか寄っていきませんか？」

俺はみんなの顔を見た。鍋島はぎこちない笑みで、依子は廊下の

先をじつと見据えていて、原村は、何故か目を閉じていた。早川を見ないようにはしていたのだろうか。

まだ依子の手首を握っていたことに気づいて、俺は手を離れた。依子は俺の手跡で黄色くなった手首を見つめた。

「ああ、どこ行く?」

俺の喉もとからやつと声が出てくる。原村がゆつくりと目を開け、口を開いた。

「マックへ行こう」

マックは駄目、そうやって俺が叫ぶと、三人から変な目で見られた。

今日一日を振り返る。

テスト最終日で、昼休みの弁当は卵が飛散して悲惨で、原村と仲直りして、依子にメールの打ち方を教えて、まりもっこりストラップをあげて、掃除サボって曾根本殴って、依子のロッカーから早川の上履きが出てきて、村瀬の様子がおかしくて、早川の教科書類が焼却炉に捨てられていて、紙袋に入ったそれは城川が隠してくれて、吉岡と依子ともみ合って、依子の鞆からカッターナイフが出てきて、五頭がキレて、鍋島と城川が更衣室に誘われて、それを断った鍋島と屋上に行つて、鍋島と原村はラブラブで、早川の教科書とノート調べて、更衣室で歪んだ友情が繰り広げられていて、鍋島は塾サボって、そんで、依子と原村と鍋島と四人でガスト行つて帰った。記憶力の悪い俺でも、最初から最後まで忘れられない場面ばかりだった。これが全部一日の間で起こったのだ。最後のガストは微妙だけど、鍋島が塾をサボると言い出したのには驚いたので、やつぱりこれも印象深い。

俺はアキラについて考えた。

俺はアキラのことについて、未だにもやもやしていた。どうしてアキラという名前に引つかかるのかは分からない。早川はこの名前を聞いて、なにか怯えた様子だった。

俺は城川について考えた。

城川が吉岡たちに誘われたのは、もちろん味方集めのためもあるけど、一番の目的はあの紙袋にあるのではないか。吉岡は、更衣室で紙袋の中身を女子たちに見せて、みんなの士気を高めようとしたに違いない。しかし、件の紙袋は俺の鞆の中にある。多分、城川や鍋島や原村以外には誰にもばれていないと思う。俺は未だにこのグレーの紙袋をどうするか考えあぐねていた。

帰ったら卵サンドについて親父に苦情を入れようと思ってたけど、疲れていたのでやめた。言ったとしても、じゃあお前が作れ、とぶん殴られてしまいそうだ。まじで自分で作ろうかな。

飯食ってきたから夕飯いらねえ、そう母ちゃんに言ったら、ちようどよかった、帰りが遅いから雄二が純一の分も食べちゃったんだよ、と言われた。いつもならここで弟を締めあげるところだが、腹はいっぱいだし今日は全身が疲れて重かったので、風呂に入って部屋で煙草を吸ってベッドに転がった。

携帯にメールが届いていた。ガストでメアド交換したばかりの鍋島から一件、依子から一件。原村からはない。原村の iPhone ぶっ壊れてるし。もう眠いんだけど、内容だけは見ておくことにした。

まず鍋島。

『夜分遅くに失礼します。今日はお疲れさまでした。平野さんや早川さんたちの件、月曜の朝に改めて話し合いましょう。それはそうと、昭文くんの笑顔はかわいいですよね』

そうか、明日は土曜だから学校は休み。休日大好きな俺が、ここに来て初めて意識するのは珍しいことだった。

前半はいいけど、最後の一文はにやにやする鍋島の顔が浮かんできたので腹が立った。うるせー馬鹿、と返信しようかと思ったが、指が疲れるので断念した。

そして依子。

『お見舞いに来てほしいと、パぱがいつていた。あしたあたしのいえにしゅうご』

俺が教えたことは一体なんだったのだろう。あり得ないほどの虚しさで敗北感を覚える。

というか、誤字ばかりのメールをどうしてこつも平気で送ってくるのだろう。依子には、「今日せっかく教えてもらったのに、これじゃ純が悲しむな。今回はメールじゃなくて電話で伝えよう」とか、そういう気遣いはないのか。

憤りも不満も様々だったが、こちら指が疲れるので断念。俺は携帯を閉じ、扇風機の風向きを調整してから眠りに落ちた。

翌日の土曜日。

俺と依子は今、清志叔父さんの入院する病院に来ている。

先々週の土曜日も、大体同じくらいの時間にここへ来た。その次の日曜日に早川とマルイに行ったりピクサー映画を観たりしたけど、たった二週間ほど前の出来事とするにはすごく懐かしい感じがする。俺たちは叔父さんのいる202号室に入った。

叔父さんは相変わらずベッドから半身を起こしてテレビを眺めていて、俺たちが入ってきた瞬間、また柔和に笑った。

「純一か、でかくなっただな」

前に来たときと全く同じ台詞。

俺ってそんなに背高いのかな、と隣にいる依子と比べてみたら、なるほど、俺と依子は十五センチ以上の身長差があるし、叔父さんがそんな感想を持つのも無理はないなと思った。

依子は先々週と同じくお見舞い品に梨を持ってきていて、また叔父さんに喜ばれていた。

俺は前回と同じく、不躰にも見舞い品を用意してきていなかった。なので、少し申し訳ない感じで見舞い客用の椅子に腰掛けた。いや、用意し忘れたというか、用意出来なかった、というのが正しいのかも。

ここに来るまで経緯をまとめてみる。

今日、俺は寝坊をした。いや、依子のメールに何時集合と書かれていなかったから寝坊と言うのはおかしいんだけど、ともかくお日様も真上を迎える頃に起きてしまったのだ。

俺の目を覚ましたのは依子の電話コールで、もちろん依子は大激怒していた。それからメリーさんのごとく速攻で俺の部屋に上がり



込んできて、そんでこれはびっくりし過ぎて笑いそうになったんだけど、依子はイメチェンでも試みたのか、髪を頭のとっぺんでまとめていて、なんだかパイナップルのようだった。

そのあと依子と二人つきりで叔父さんの病院へ向うのだけど、途中で依子とちよつと一悶着あったり、そのくせ無駄にあっさり仲直りしたりで、俺はこの時点で相当疲弊していた。

その後は妙に依子が俺と喋りたがるので、俺はそんな依子を相手にするのが気まずくて仕方なかったのだけど、それでもしばらくは付き合っただけで、でもやっぱり面倒くさくなってしまった俺は依子のパイナップルヘアを馬鹿にしてみたのだが、そしたらまた依子に嫌われた。

そんな感じ。寝起きからてんやわんやの幕開けだった。  
見舞い品もちゃんと前日に用意しとけばよかったと大後悔する。

それから依子は一切俺と目を合わせてくれないし、声をかけても完全無視を決め込まれる始末だった。

しかも俺に髪型を馬鹿にされて、一瞬でもとのストレートヘアに戻ってしまった。

その髪型かわいいね、とでも言ってほしかったのだろうか。俺に見せるより、原村や鍋島あたりに見せてはどうだろう。俺なんかやりすんなりお世辞も言ってくれそうだし。

それともあれか。俺がいつも依子に冷たくしてるから、ならば俺の胸でもときめかせて優しくしてもらおうとか、そういう魂胆だったのか。だとしたらマジで依子らしくないんだけど。

どうしても気になってしまって、彼女から返事を聞けるかはわからないけれど、俺は隣で梨を剥く依子に声をかけてみた。

「なあ依子」

無視。依子がかたくなに俺をシカトして果物ナイフをさくさく扱っている。

大丈夫、名前だけ呼んでも無視されることは分かってんだよ。

「お前、イメチェンでもしたいの」

依子の手が止まる。叔父さんはテレビから目を離し、俺たちを見て小首を傾げた。

やがて依子が剥きかけの梨を見つめ、小さく頷く。

やっぱイメチェンだったのかよあれ。

「俺なんかに見せなくても学校でやればいいじゃん」

そう提案してみると、依子がやっと俺の方を見てくれた。表情がいつも通りだから何考えてるか分かんないけど。

「純に見せて、変じゃないか試した」

なんて合理的な女。俺が素直な感想を言うことを見越していたのか。んだよ、全然可愛くねえこいつ。これじゃ、俺のハートを驚掴みにしたいから、の方がよっぽど女の子らしくていい。いや、それはそれで恥ずいんだけどさ。

叔父さんはそれで無駄にうるさく笑った。彼は事情を知らないはずなんだけど、なんとなく分かるのだろう。

それから依子の頭に手をやって、それからぐりぐりと撫で回した。

「女の子らしいのからしくねえのか分かんねえよなあ、依子は」

荒々しい手つきだけど、依子は黙って叔父さんに撫でられた。というか、むしろ嬉しそう。このファザコンめ。

俺も叔父さんにあわせて笑い、それから依子を睨んだ。くそ、俺を変に意識させやがって、という意味を込めて。

依子は叔父さんに撫でられるのに集中していて俺の視線に全く気づいてくれなかった。ちくしょう。

叔父さんは依子の頭から手を離して、それから俺の方を見た。

「純一、まだサッカーは続けてるか」

これも前回と同じ台詞。

何を聞かれるんだらうと構えていたのに、俺は啞然としてしまった。これは、前と同じ返答でいいのかな。俺は以前、この質問に対してどう答えたかを思い返したが、そうしたらひどい罪悪感に苛ま

れてしまった。

中学でやめた。努力する才能がなかったから。

たしか俺はそう答えた。俺は、叔父さんに嘘を吐いたんだ。しかも、叔父さんを悲しませるような嘘。

俺は答えずに、下を向いてズボンを掴んだ。

叔父さんはきつと俺が嘘を吐いていたことを知っていて、その上でこうして同じ質問を投げかけてくるのだと思う。

もう本当のことを言ってしまうおうか。けれど、あまり依子に聞かれない話だ。心配されたくないし、俺があまりにも情けなく、みじめだったらしい話なのだから。

「パパ」

依子は少し語調を強めて叔父さんと呼ぶ。俺はそれでも顔を上げなかった。

「純は、もうその質問には答えたよ」

依子はこの話を知らないはずだけど、俺をかばってくれているようだった。それがまた情けなくて、俺はさらにズボンを掴む力を強めた。

しばらく場が沈黙して、叔父さんは口を開いた。

「そうだったか。悪いな純一、病気が病気だから最近物忘れが激しくて」

俺は叔父さんの顔も見ずに頷いた。それからまた沈黙。

依子が梨を剥き終わって、最後の一切れを皿に並べた。依子の手の上の皿を俺は横目に盗み見る。皿の上に並ぶ八つの白梨。

依子は皿を手に乗せたまま、叔父さんの言葉を待った。前のように、食べさせてくれ、というのを。

「食べさせてくれ」

依子の皿が動きかけるところで、叔父さんがまた続ける。

「純一、食べさせてくれ」

皿が止まる。俺はここで初めて顔を上げた。叔父さんは、叔父さんらしくない弱々しい笑みで俺を見ていた。

「俺が」

「ああ、純一がだ」

俺の手元に皿がやってくる。見ると、依子が不満そうな顔をしていて、黙って俺に梨の皿を差し出していた。

俺もそれを黙って受け取る。気持ちが揺れるのに合わせて、つまようじを取る俺の手も震えた。

見かねた叔父さんが明るい声を出す。

「依子、ここからは男子禁制ならぬ、女子禁制だ」

俺は後ろめたくて、じつと梨を見つめた。

「すぐに終わるから、純一のこと、待合室でも待っていてくれ。」

今日も来てくれてありがとうな。ママにもよろしく言ってくれ」

依子は不服そうな表情をたたえたが、しばらくの間を持って、分かった、と椅子を立った。それだけを確認して、俺は帰る準備をする。依子も見ずに、手元の梨に視線を落とし続けた。

正直言うと、叔父さんと二人きりにしてほしくなかった。叔父さんが、少年サッカーの監督をやっていた叔父さんに戻ったようですごく恐かった。

依子が嫌だといえば、叔父さんは依子のわがままを聞き入れそうだから、俺は少しだけ依子を恨みそうになる。こんなときだけ大人ぶる依子を、俺は恨んでしまいたいそうだったのだ。

依子が立ち去ったあと俺は黙り込んだが、叔父さんはそれでも優しく声をかけてくる。

「どうした。食わせてくれないのか、純一」

「ああ、食わせる」

俺はできる限りの笑顔をもってゆっくり顔を上げた。叔父さんはまだ微笑んでいて、それがまた俺を勇気づけるような笑顔だったから、俺は安堵して、また心が揺れた。

叔父さんに梨を食べさせる。叔父さんの咀嚼は、先々週と比べても随分ゆるゆるとしていて力強さがなかった。

梨一切れを全部食べ終えるのに五度、梨を叔父さんの口へ持って

いく。叔父さんは最後の一口かけを食べ終えて、また幸せそうに笑った。

「うめえな。林檎もうまいが、俺は梨の方が好きだ」

これも前と同じ。

停滞は後退である、なんて格言をどこかで聞いたことがあるけれど、叔父さんの場合、それ以上のものが目に見えている気がした。

俺はつまようじが折れそうなくらい握りしめて、叔父さんの顔を見つめた。

「サッカーのこと、なんだけござ」

もう叔父さんに質問を促させるわけにはいかなかった。俺はこれ以上みじめで情けなくなつてはいけなかった。叔父さんは黙して俺の言葉を待っていてくれる。

「中二の頃、試合で足怪我しちまったんだよ。相手校の二年だか三年だか、俺の左足、わざとらしく狙つてさ。そいつの恨みを買った覚えもねえんだけど、何故かね」

俺は曖昧に笑った。俺の誤魔化し笑いは全然叔父さんには通じなくて、俺の勇気はすぐに揺らぐ。

「それでやめたのか」

俺はまた下を向いた。

「いや、そこまではいいんだよ。ちょっと足ひねったくらいでさ、ちよつとすれば試合にも出られるはずだったんだけど」

「俺の目を見て話せ」

心臓が跳ねあがるようだった。とつさに顔を上げる。叔父さんの目は昔のそれに戻っていて、それがものすごく恐ろしくて、俺は緊張した。

声を出せないでいると、やがて叔父さんが、続ける、と言う。なんて残酷なのだろう、そう思ったが、これは俺の構え方が甘すぎるのだろう。

俺は一度だけ小さく咳払いをした。

「そこまではいい。叔父さんも知ってると思うけど、この町で一度、

通り魔が流行ってた。実は、俺が最初の被害者なんだけど」

叔父さんが眉をひそめた。俺がこの通り魔の被害を受けたこと、親父経由で叔父さんも知っていたと思う。それでも俺は説明をする。「居残りしたあとの学校帰りでさ、つい帰りが遅くなっちゃったんだ。辺りは真つ暗で、俺はひねった左足をかばって歩いていたら、突然後ろからバイクの音がしたんだ。その音には別段、俺は気にも止めなかったんだけど」

俺はその場の状況を想像しながら続けた。

「原付バイクだった。乗ってたやつはバットか何かを持っていたらしくて、俺のそのひねった足の方、それで殴られて。びっくりし過ぎてバイクのナンバーだつて見られなかった」

叔父さんは黙って耳をすませる。

「幸い骨折はしなかった。足首にひび入ったくらいで。サッカーだつて、本当は続けられたはずなんだ。でも」

俺は顔を下げた。もう叔父さんはそれを注意してこなかった。だつて、俺はもう泣いてしまっていたのだから。

「でも、心の方が、先に折れて」

俺の涙はぼたぼたと皿の上に着ち、梨の実にじんわりと染み込んでいった。何故こんなに泣けてくるのか分からなかった。逃げたことを後悔しているからじゃないと想う。多分、格好つけて叔父さんに嘘をついて、それが申し訳なくて、縮みこまるほど後悔して、死にたくなるほど恥ずかしくなって、心の中が罪悪感でいっぱい、もう、耐えられなかった。

そのうち鼻水も垂れ落ちて、それも梨の上に乗った。やべ、もうこれ俺が食うしかないじゃん。

「恐くなったんだ。俺、もしかして呪われてるんじゃないかって、あり得ねえくらいの被害妄想モードで。つつか、もういいやって、逃げ出したんだ」

「純一が煙草を吸い始めたのもそれからだつて、純一の父ちゃんと母ちゃんも嘆いてたな」

叔父さんは俺を元気付かせたいのか、やけにおどけるようにそう言った。実際、それに少しだけ癒されたし、俺ももうちょっとだけ声を出せそうだった。

俺は叔父さんに向かって深く頭を下げた。

「ごめん。この前は才能がないからだなんて嘘吐いて。俺、本当は逃げただけなんだ」

俺はときおり涙を床に落として頭を下げ続けた。すると、俺の頭の上に叔父さんの手が乗る。

「純一も、依子も、どうしていつも強がんなのかなあ。俺らからしたら二人ともまだまだ子供なのに」

叔父さんの声は温かくて、なんか知らんが俺はまた泣いた。叔父さんがそのまま撫でてくるので、俺は依子みたいに黙って撫でられた。

「二人とも、こうやって誰かに甘えたがってるくせしてよ」

「依子は、叔父さんに甘えてんじゃん」

泣きながらだからかすげえ喋り辛い。撫でられ終わって、泣き顔見られるのは恥ずかしいんだけど、俺は顔を上げた。叔父さんはもとの笑顔に戻っていた。

「依子、ああ見えて全然俺に甘えてくれねえんだよ」

俺は鼻水をすすって疑問を顔に浮かべた。意味深だったけど、叔父さんは、ともかく、と首を振る。

「サッカーのことは怪我と一緒に忘れる。俺はもう何も気にしない」  
「でも」

「いいんだよ。俺にとっちゃサッカーなんかより純一の方が大事なんだから。こんなこと、無理に話させて悪かった」

俺はだくだくに流れる涙を飛ばして首を振った。うちの親より親らしい叔父さんだった。うちの親に聞かれたら嫉妬されるだろうな。

叔父さんは結局、サッカーのことなんてどうでもよかったんだ。

俺が嘘を吐いたこと、それだけが気にかかっていて、俺が正直に懺悔したことであっさり許してくれた。

叔父さんは俺の不細工な泣き顔が面白いのか、くすりと小さく笑った。

「俺も純一に話しておきたいことがあるんだ。だから、今日はお前を呼んだ」

叔父さんはそれから、ベッド脇の引き出し棚に目をやる。

「そこにノートとボールペンが入ってる。代わりに取ってくれないか、ちよつと身体を動かすのもだるくてだるくて」

俺は頷き、引き出しを開けた。一番上の引き出しにはたしかに大卒ノートとペン類が入っていたので、俺はそれらをベッド備え付けの台に乗せた。ノートを開き、叔父さんの手にボールペンを持たせる。

「話をする前に、ちよつとりハビリだ。たまにこうして書かなきゃダメだつて、戸田恵梨香似の美人看護師に言われてんだよな」

「いやいや、うらやましいけど、浮気はよくないぜ叔父さん」

俺は袖で涙を拭いながら言った。道子に言ったらぶつ飛ばすぞ、と叔父さんが笑うので、俺も短く笑った。

叔父さんは鈍重な動きでボールペンを握り、その先端をノートの紙面に置く。うまく握れないのか、それだけでボールペンが紙面を滑った。手伝おうとしたけれど、叔父さんに拒否される。リハビリにならないからだそうだ。

叔父さんは自力でボールペンを持ち直し、それから再度紙の上にペンを乗せる。

「恥ずかしい話、漢字を忘れちゃってな」

三分ほどかけて叔父さんが書いた字は『よりこ』だった。字体はひどく波打っていて、一見してそうは読めなかったけど、なんとなく俺には分かった。

ふいに、叔父さんがペンを落とした。叔父さんの手は震えていた。ペンは手元の台を転がり、それから俺の足もとに落下する。俺は白梨の皿を棚の上に置き、そのペンを拾い上げ、また叔父さんに渡そうとするのだけど、叔父さんはもう、細りきった右手を台の上に



投げ落としていた。

俺はペンを持ったまま、微動だに出来ずにそれを見つめる。

叔父さんは自分の手をじっと見つめ、それから窓の外を見やる。

俺もつられて見ると、ちょうど、鳶が彼方の空を飛び交って鳴いていた。

「依子の依は、たよる、という字なんだけだよ」

それから叔父さんは入道雲の空を見上げ、粛々と話し始めた。

葛藤。

202号室を出て真っ直ぐ待合室へ向かう。依子が待っていた。

依子はメールでも打っているのか、長椅子に座ってずっと携帯をいじっていた。俺が来ると顔を上げ、それから微かに口を開ける。

「純、泣いてたの」

マジ泣き後の俺の顔は相当ひどいのか、依子はわりと心配してくれているようだった。依子に心配されるなんて珍しいことだから、俺はもつと恥ずかしくなって、これ以上依子に気を使われたくなくて、すぐに彼女から目を逸らした。

「泣いてねえよ。帰るぞ」

そのまま俺は入り口の方へ歩いていく。依子は何も言わずに俺に続いた。

病院を出て振り返り、依子を見つめた。依子はやはり何も言わず、こちらを見つめ返してくる。

俺は迷う。自分がどうすればいいのかが分からなかった。

俺はたった今、叔父さんの頼みを聞き入れてきた。叔父さんの想いが正しいとは到底思えない。でも、他にどうすれば叔父さんの期待に答えられるのかも分からない。

答えが二つも三つもあり、もしその選択に迷うことができるのなら幾らか楽なだけで、この場合、正解なんてあるのだろうか。

分かるまでは叔父さんの頼み事に従うべきだ。俺はそう判断し、

依子へ向けて声をかける。

「依子。これからは自分の携帯、いつも近くに置いとけよ」

「どうして」

「いいから」

依子はまだ何か言いたそうにしていたが、俺はそれを無視して自転車の駐輪場へ歩いていく。

俺はただ口をつぐむしかない。

今の俺には、それくらいのことしか出来ないのだから。

日曜日。

布団の上で仰向けになつて天井を仰ぐ。木製の天井には蜘蛛が一匹、巣を張っていた。そろそろ掃除をしなければいけない。

でも、ああ、やる気出ねえ。

ずつと考え事をしていて、たまに寝て、また考えての繰り返しだった。昨日の叔父さんの言葉を思い出すと何もする気が起きない。解決策だつて分からない。もう昼を回っていたけれど、何の進展もない日曜日だった。いい加減扇風機の風が寒くなつてきたので布団を被る。そのうちまた睡魔がやってきて、俺は今日四度目の眠りに落ちた。

次に起きたのは夜の八時ほどで、夕飯を食べたり風呂に入ったり弟とWiiで遊んだりもしたが、そのあと全く寝付けなかった。なので俺は学習机に向かつて勉強などしてもみるのだが、しかしこれがまた集中出来ない。

今の俺に何が出来るのか、それだけを考えて。今はまだ叔父さんの期待に応えられないかもしれないけれど、他に出来ることならいくらでもあるのではないか。

俺の学生鞆の中にあるグレーの紙袋。

早川や吉岡のいじめを防ぐ。依子の友達作り。それから、俺自身のこと。

何にしる、夏休みに入るまで耐ればいい。俺は机を立ち、一本だけ煙草を吸ってから布団に転がった。今一度目をつむる。もう一度だけでいいから、眠りに落ちたかった。

翌日の月曜日。

七時半に学校に来て、俺は自分の机に突っ伏した。

昨日は徹夜をして、今更になってようやく眠気が襲ってきたのだ。一時間近くこうして机で居眠りをしていよう。

三十分ほどしてからだろうが、ふいに俺の肩を誰かがつついてきた。

このクラスで直接俺にちよっかいを出してくるのは鍋島ぐらいしか思いつかないから、うぜえなどは思いつつ俺は無視を決め込んだ。それから一分おきくらいに肩をつつかれる。鍋島のしつこさが無性に腹立たしい。

今度は頭をつつかれ始めた。さすがに頭にきたので、俺は凄みの利かせた顔を作り、それから勢いよく顔を上げた。

「んだようぜえなあ！」

びっくりさせて、あわよくば鍋島を失神させてやろうという作戦。しかし、失神しそうになったのは俺の方だった。

「う、う、ごめんなさい……」

城川心結しろかわみゆだった。俺に怒鳴られて、三秒以内に泣き顔になる。

世界が終わった。いや、実際世界の方は全く終わってないんだけど、むしろ終了したのは俺と城川の関係の方だ。いや待て、諦めるにはまだ早い。

俺はがちがちに固まった頬を緩めて、それはもう体操のお兄さん並に爽やかな笑顔を作ってみせたのだけど、城川にしてみればそれは不気味以外のなにものでもないのか、また泣きそうな顔をされた。「まで、泣くな。ごめんな、俺って寝起きすげえ悪いからさ。つい怒鳴っちまったけど、今は全然怒ってないから。城川が謝ることじやないんだよ。な？」

「ごめんなさい」

「謝るんじゃないっつってんだろ」

「ひっ」

はっとして俺は自分の頬をつねった。自分の口の悪さをこれだけ恨んだことはない。あまりに強く頬をつねっていたら、俺より城川の方が痛そうな顔をした。意味が分からない。

それから一進一退の攻防で城川をなだめたり泣かせてしまいそうにしていたのだけど、気づいたら後ろに鍋島が立っていて、彼女はの様子を見て口角をひくつかせた。かなりご立腹していた。代わりに俺は絶望した。

「笑いながら城川さんを泣かせるなんて、今泉くんはもう人間じゃありませんね」

そんな俺がドSみたいな言い方されても困るんだけど。

「この笑顔は城川を落ち着かせるため」

「黙って校舎裏に来なさい」

鍋島にぼこぼこにされる。恐れおののき窓にへばりついていると、城川が慌てて鍋島の袖を掴んだ。

「ち、違うよ、由多加ちゃん。わたしが勝手に泣きそうになっただけで」

「今泉くんは何を吹き込まれたんですか、城川さん」

金剛力士の仁王像の形相を呈する。俺の方が泣いてしまいそうだった。

鍋島の誤解を解けたのはそれから十分ほども後のことだった。生徒はもうほとんど登校していて、HRもあと五分で開始という時間だ。

「で、何の用だったの」

俺は生気を欠いた面持ちで城川を見上げた。鍋島はいまだに納得していないのか、後ろでむすつとして頼杖をついている。

「あ、あのね」

城川は指をいじって下を向き、何か恥ずかしそうにもぞもぞとしていた。

俺はそのじれったさにまたキレてしまいになったんだけど、これ以上何かあると本当に色々なものが終了してしまうので、それを表情に出すまいと努めて笑顔でそれを待つ。

「平野さんと、どうやったら仲良くなれるのかなあって思って……」  
俺は目を見開いて彼女を見つめた。同時に後ろでがたりと音がす

る。鍋島も俺と同じく驚いているようだ。

「今泉くん、平野さんと親戚だよ。だから、今泉くんならいいアドバイスくれるかなって、あの、話しかけたんだけど」

話しかけたっていうか、つついてきたただけなんだけど。一言でも何か言ってくれれば相手が城川だって分かったし、俺も怒鳴らずに済んだのに。

不満はあったけど、それ以上に城川の言葉が嬉しかった。俺は今度こそ自然な笑顔で城川の手を両手で握る。

「依子と友達になってくれるのか」

「う、うん」

俺に手を握られて彼女は多少怯えていたが、俺にとってはもうどうでもよかった。城川の手を持ち上げ、有り難く丁寧に頭を下げる。

「ありがとう、ありがとう城川」

それから城川の手を離し、教室を見渡す。依子はまだ登校していない。ファツキンと叫びそうになるのをこらえて再度城川を見上げる。突然俺に視線を投げられて、城川はまた身を震わせた。

「昼休み、俺と図書室へ来い」

「私も同伴します」

そう言っただけ席を立つのは後ろの鍋島だった。俺は彼女を睨みつける。

「お前は駄目」

「どうしてですか。城川さんを一人で行かせるのは心配です」

「保護者かよ。つーか、図書室は原村がいるかもしれないから、お前は駄目なの」

「それがどうして駄目なんですか」

「だって、お前すぐ原村といちゃつくじゃん。見ててうざいんだけど」

鍋島が顔を真っ赤にする。口をぱくぱくとさせていて、ちょっとだけ笑えた。何か言うのだろうかと思ひ、そのぱくぱくを眺めながらしばらく待っていたが、鍋島は何も言い返せないのか、そのまま

荒々しく席に座った。

「か、勝手に二人で行ってください」

鍋島の声があり得ないくらい裏返る。俺は城川と顔を見合わせてお互いくすりと吹き出した。

「笑わないでっ」

鍋島はそのまま机に伏して顔を隠してしまった。やがて城川がそつと俺に耳打ちをしてくる。

「由多加ちゃんね、原村先輩のことが好きなんだよ」

「ああ、見れば分かる」

鍋島が睨んできたような気がしたが、俺も城川も気づかないふりをした。それと、城川と少しだけ打ち解けた気がする。

鍋島にはいつも小馬鹿にされてるからいい気味なんだけど、原村と鍋島って両思いくさいから、やっぱり少しだけ憂鬱になった。

それから鍋島はずっと俺のことを無視した。それは城川が話しかけても同じで、城川の場合は、鍋島が原村を好きなことを俺に教えたかららしい。見え透いていたことだし、どうしてここまで恥ずかしがるんだ。

この前の鍋島からのメールで、依子や早川の件を話し合いましたよ、などと送られてきたが、これが原因で何も話し合えなかった。こんな暢気にしていいのだろうか。

そして昼休み。

昼休み開始後、いの一歩に教室を出ていく依子を見送り、俺は城川が弁当を食べ終わるのを待った。この頃になると、鍋島はすっかり城川と仲直りしていた。俺とは未だに口を利いてくれないのに。

城川はしきりに村瀬から頬をつつかれながら、視線を落としてウインナーを食べていた。これから依子に会いに行くのが不安なのだ

ろっ。

「あたしが平野を笑わせる、とっておきのギャグを伝授してやる」

村瀬が城川の横髪をいじりながら言う。城川はぼうっとして村瀬の言葉に反応を示さない。村瀬は少し傷ついたような顔をした。

「俺に教えるよ」

「うるせっ、今泉はもう存在がネタだろっ」

村瀬の言葉に、今度は俺が傷ついた。

というか、村瀬は今こうして普通に鍋島グループに取り入っているけれど、今日は吉岡たちと交流している様を一切見ていない。何を考えているか分からないやつだ。

城川がようやく弁当を食べ終える。俺は城川を連れて教室を出た。てつきり城川とは打ち解けたものと思っていたけれど、城川は俺の後ろを三メートルほど離れてついてきた。離れ過ぎである。尾行でもされているような気分だ。

煙草を吸いに一度屋上へ行こうかと思っていたがやめておく。吸っているところを城川に見られれば今度こそ逃げられてしまいそうだった。

図書室の前で足を止める。振り返ると、城川がすぐさま身構えた。ここまで人のことを警戒するのは逆に失礼なんじゃないのか。もう慣れたけどさ。

「なんでお前、依子と友達になりたいの」

城川は構えを解いて、また例の指いじりで下を向いた。

「今泉くん、平野さんの友達になってって言われたから、えと、わたしも、もつと友達作りたいなって思ってたし、それで……」

後半がほとんど聞き取れなかったけれど、まあいいかと納得して俺は図書室の扉を開けた。慌てて城川が後からついてくる。

期末テストのすぐあとだからか、図書室はいつもより閑散としていた。俺は一度室内を見回して、思わず少し身を引いてしまう。後



ろの城川とぶつかりそうになった。

図書室の隅の木製テーブルに吉岡が居た。吉岡は足を組んで座っていて、俺たちが入つてくると、無機質な目でこちらを一瞥した。彼女の手には、図書室備え付けのファッション雑誌があった。この図書室は本当になんでもありだなと思う。

見回すが、早川の姿はないようだ。珍しく吉岡は一人だった。

俺の背中を後ろの城川が掴んでくる。見ると、城川はまた子兔のように怯え震えていた。彼女にとって吉岡は俺以上に恐ろしい存在らしい。吉岡だから仕方ないか。

あんなやつなど気にするまいと、背中を掴む城川を引つ張り、俺は受付へ歩みよった。

受付には司書の宮下が居た。宮下はパイプ椅子にぐったりと背中を預け、上を向いていびきをかいていた。俺が言えたことじゃないけど、さすがの駄目人間ぶりである。

それでも最近宮下はサボらずに受付に来ている。原村の話だと、他の教師から毎度受付をサボっていることを叱られたのだという。それでもまああして居眠りをこけるのは、まじですごい神経の持ち主だと言わざるを得ない。

受付横の扉を開け、城川と共に中へ入っていく。

受付奥の長机には、本を読む依子がいた。依子は、俺が城川をここに連れてくるという変則事態に一切の興味を示さず、しきりに本の活字を追っていた。

宮下のいびきが若干やかましいが、彼を気にしないように通り過ぎ、依子の正面に座った。

「城川が遊びに来てくれたぞ」

「うん」

依子はそれだけ返す。素っ気なさ過ぎる。城川がやってきて、依子と仲良くなりに来たくせに俺の隣に座ろうとするので、俺は依子の隣のパイプ椅子を指した。

「お前はあっち」

「は、はい」

城川はおどおどしながら依子の隣に座った。依子はそれでも城川の方を見ようとしないし、城川は城川で椅子の上で縮こまってもじもじとし出す。とても苛々する俺だった。

「挨拶しろ馬鹿」

「す、すみません」

「あ、いや、今は依子に言ったんだけど」

城川が一瞬で目に涙を浮かべるので、俺はかなり焦った。でも城川の方もまだ挨拶してないし、良しということでもいいか。

「こんにちは、平野さん」

「……にちは」

いつもより一層声の小さい依子だった。依子の表情がいつも通りだから分からなかったけれど、依子も緊張しているらしい。よく見ると、本を持つ彼女の手もどこかおぼつかない。

それっきり城川は黙ってしまった。無言が気まずいのか、それとも俺の視線に怯えているのか、とにかく小刻みに震えていた。震えすぎだ。自家発電でもしてんのか。

「城川さん、ずっと震えてるけど、自家発電でもしているの」

依子の心ない一言に、城川が多大なショックを受けた顔をした。俺もショックだった。依子と同じことを考えていたのもそうだし、しかもこれ、いつか城川と普通に会話できるようになったら使おうと思っただ突っ込みだったのに。

「え、え？」

何と返せばいいのか迷っている様子の城川。

ともかく依子に注意しようとする俺だったが、少し考えてみると依子が冗談を言うのはあまりなことなので、依子なりに面白いことを言おうとしていたのかもしれない。しかし依子の無表情突っ込みで笑えという方がおかしいし、というかはたから見ると城川を馬鹿にしているようにしか見えない。

それはそうと、さきほどから受付の方が騒がしい。

見ると、本の貸し出しに来た生徒が居眠りをする宮下を前にまごついていた。

依子もそれに気づいて小さくため息を吐く。それから依子は受付へ向かうのだが、それより今のため息によって城川がまたシヨックを受けていた。自分が何も返せなかったことで依子から呆れられたのだと思ったらしい。

しかしそれよりも何よりも、俺は宮下に猛烈に腹が立った。せつかくの交流会を駄目司書に邪魔されるとは思ってもよらなかったのだ。依子が受付を終えて戻ってくると、俺はすぐさま宮下のもとへ行って彼の頭を小突いた。

「起きろ、宮下」

宮下は涎を拭いつつじんわりと目を開け、それから俺を見上げた。「おはよ、母ちゃん」俺はお前のような駄目男を産んだ覚えはない。「起きろ、起きて受付をやれ」

「へい」

俺の怒りが通じたのか通じていないのか、ともかく宮下は両肘をカウンターにつき、寝ぼけ眼で一点を見つめた。

振り返ると、城川がちょっと首を伸ばして依子の顔を覗き込んでいた。依子はちょっと身を引いていた。今度はなんなんだ。

「ひ、平野さん、藤沢周平読んでるの」

俺は長机に近寄り、静かに座って二人の様子を眺めた。若干鼻息を荒くして興奮気味の城川と、本を読むふりでちらちらと城川を見る依子。奇妙過ぎる光景。

「平野さん、時代小説好きなの？」

「好き。よく読む」

「わ、わたしも好きだよ。あとね、五味康祐とか、吉川英治とか」吉川英治ならバガボンドの影響で俺も少し読んだ。でも、俺の浅知恵で話に混ぜても多分ついていけなさそう。

依子がいよいよ城川の顔を控えめに見る。城川の顔が近いので依子もちよっと引いてる。

「城川さんは、剣豪ものが好きなの」

「うん、うん、好きだよ」

だんだん城川が依子に告ってるように見えてきて俺も勝手に引いた。

「わたしね、用心棒が好きなの。先生、お願いします、っていうあれ。前髪垂らした用心棒が、ゆらり、って立ち上がるの」

「わかる」

頷く依子。俺だけなのか、分からないの。

二人がそれから語り出す話は、ちよつと俺には理解し難かった。おかしいな、バガボンド全編二周は読んだのに。語り合つと言つても、一方的に話すのは城川だけで、依子は引きつつも相づちを打つただけだった。いつもより楽しそうではあるけど。

それにしても趣味の渋い二人だった。依子の読む本など興味はなかったが、依子も城川も変わったもの同士なのかもしれない。

「ねえ、平野さん」

「なに」

「依ちゃんって、呼んでいい？」

なんだよそれ、聞いているこつちが恥ずかしい。依子も相当恥ずかしいのか、開いたままの本で顔を隠してしまった。城川は嫌われてしまったとも思ったのか、はつと我に返つたように唇を震わせた。

「あ、あの、ごめんね、変なこと言つて」

「呼んでいいよ」

本で顔を隠したままの依子。城川の顔も明るくなる。

「わたしのことは、なんて呼ぶの」

さらに詰め寄る城川。本一つでここまで食いつくのだから、俺も時代小説を読めば恐がられないで済むのかもしれない。

「わからない。あなたが決めて」

「じゃあ、心結つて呼んで」

「心結」

「依ちゃん」

依子はいよいよ本を顔に押しつけて恥じらう。こんな依子を見れば、普段なら物珍しさを存分に楽しむはずなんだけど、俺もだんだん全身がもぞがゆくなってきた。どうしてこんな甘酸っぱいやり取りをただじつと見つめているだけなんだろう。もう帰っていいかな。城川の辱め攻撃は昼休み終了まで続く。俺は長机に伏してひたすら寝たふりを決め込んだ。

昼休み終了のチャイムが鳴り、俺はやつと顔を上げる。長い昼休みだった。依子はまだ本で顔を隠していた。そろそろ窒息でもしそつである。

「城川、掃除行くぞ」

俺が声をかけると、城川はまだ依子と語り足りないのか、物惜しそうに依子を見送りながら席を立った。

「お前の友達作りつて、意外と大胆なのな」

そんなことを言われた城川は、またもじもじわさわさし出した。もとの城川に戻ったようで俺も安心する。こっちの城川の方がよっぽどましだ。

図書室を出ると、窓側には何故か吉岡が寄りかかって立っていて、俺には目もくれなかったが、城川が後から出てきた瞬間、ふいに吉岡がこちらへと歩み寄ってくる。吉岡は目を細めて笑っていた。

「心結ちゃん」

吉岡の、城川に対する呼び方が変わっていた。城川のびくついた様子からして、二人の仲が良くなったからとは思えない。俺は警戒した。

「平野さんとは、仲良くなれた？」

城川はうつむき、小さく頷いた。何をするのかとしばらく眺めていると、吉岡は顔を城川の耳元まで近づけてくる。何か城川に向けて囁きかけているようで、それがどうも平和的なものとは思えなかった。俺はすぐさま城川の腕を引いた。

「行くぞ城川」

城川は黙って俺に引かれた。吉岡はやはり意味深な笑みをたたえ、俺たちが去っていく様子を見守った。

「あんなやつ、気にしてんじゃねえよ」

城川と持ち場の裏庭へ向かうまで、彼女は視線を落とし続けた。

そんな城川に俺はまた嫌な予感を受けるのだが、俺は首を振ってそれを払った。

その日の放課後。

屋上へ行き、いつものように絵を描く原村の横で、いつものように煙草を吸う。上を見上げ、やけに空が曇っているとは思っていたが、案の定、突然の驟雨しゅうまが俺たちを襲った。

「そうだ、今日は雨が降るのをすっかり忘れていた。退避だ、今泉」  
原村はスケッチブックや画材道具を身体で守るようにしながらちよこちよこと屋上出口へ向かう。俺はまだ煙草一本目を二口しか吸っておらず、とはいえこの雨で吸えるはずもないので、とても口惜しい気持ちでしぶしぶ原村のあとを追った。災難だ。昼休みだって一本も吸ってないのに。

俺も原村も今日は傘を忘れてきた。俺たちはさっそく図書室へ向かう。そこ以外で他に暇をつぶせる場所など俺たちにはなかった。

図書室入り口付近の廊下で、鍋島一行と偶然鉢合わせる。鍋島、村瀬、城川の中、小、極小トリオ。

「また屋上で煙草を吸っていたんですね」

鍋島は俺を見咎め、挨拶なしにそんなことを責めなじってくる。

「なんで分かったの」

「あなたは今、昭文さんと一緒に上の階から降りてきました。さらにそのにわか雨に濡れたシャツ、そしてかすかに鼻腔をつく煙草の匂いがなによりの証拠……」

「犯人はお前だっ！」 鍋島を押しつけ、村瀬が俺を指さす。

「そういうことです。どうです、当たりでしょう」

村瀬の割り込みに釈然としないながらも得意げな鍋島。安っぽいシャーロックホームズですね。

それから俺たちは図書室に入り、受付の扉を開けて中に入るのだが、何故か鍋島一行は談笑を交えながら普通に俺たちについてきた。受付に座っていた依子も、この大所帯にはさすがに顔を上げる。

宮下はいない。あいつは結局サボるのか。

「何で三姉妹まで入ってくんだよ」

「ここは僕らの秘密基地だ。よそ者は出てけ！」

ブーイングで追い立てる俺たち。村瀬が不満げに城川を指す。

「心結は昼休みにここへ来たんだろ。あたしらだけ入れてくれないなんて、ずるいじゃないかっ」

「村瀬さんの言う通りです。私たちだけ仲間外れなんてひどいですよ」

鍋島の後ろで城川だけは小さくなっているが、三姉妹の方も負けではない。なんだかとても不毛な争いをしている気がしてきた。

原村は唸り、それから依子の方を見る。

「ここは公正に、図書室受付の長の判断をあおごう」

あれ、原村って図書委員長じゃなかったっけ。

依子は俺たち五人の顔をなめるように見回し、やがて目線の高さで人差し指と親指で丸を作った。受付入室許可の意である。

俺たち五人は受付奥の長机に座った。

俺の右隣に原村。そして俺たちと対面する三席に三姉妹が座る。

左から城川、鍋島、村瀬。位置的に合コンのようで緊張する。合コンしたことないけど。

城川がお菓子を持っていた。カントリーマムとコンソメポテチ。三姉妹はそれぞれ校内の自販機でジュースを買ってきている。本気でくつろぎに来たようである。

原村は正面に座る村瀬の顔をまじまじと見つめた。村瀬も負けじと原村の顔を観察するように見る。

「君はもしかして、レズ疑惑の村瀬彩音だな」

「そういうあなたは、神隠しの原村昭文先輩だ」

不名誉な通り名ついてんな二人とも。

やがて村瀬が笑いながら柏手を打つ。



「昭文だから、アツキーって呼んでいい？」

「いいよ。じゃあ君は村瀬だから、村瀬って呼ぶよ」

「おお、シンプルイズベスト。尊敬します」

変なノリで馬の合いそうな二人。ちよつと俺にはついていけない。鍋島と城川の方を見るも、二人はすでにカントリーマアムを食べながら談笑を始めていた。早くも取り残される俺だった。

もし左隣に依子が座っていればちよつかいでも出すところなんだけど、あいにく彼女は受付と読書で忙しいようだった。

仕方がないので漫画を読もう。スラムダンクの続きを読むため、席を立ち受付横の引き出しに手をかけると、原村からの声がかかった。

「あ、ベルセルク五巻から適当に持ってきてくれる？」

原村の要望通り、ベルセルクを引き出しから取り出し、それから俺の分の漫画も出してから長机に戻った。

原村は俺からベルセルクを受け取ると、鞆からヘッドフォンを出して装着した。

「僕はこれに集中したいからさ、あとは一年連中で仲良くやってくれよ」

はい、という三姉妹の小学生児童のような返事。俺もスラムダンを開き、原村みたいにダレて椅子に座った。

正直俺は女子との会話は苦手なので、こうやって漫画でも読んでいる方が楽だ。というか一人が好き。だから俺って友達少ないのかな。

それはそうと、原村のヘッドフォンから漏れ聞こえる音がやかましくて仕方がない。

原村は「なんかかっこいいから」という理由でいつもオーケストラやジャズを聞いているんだけど、今日に限って聞こえてくるのはハードロック調のものだった。原村の組んだ足もそれに合わせて小刻みに揺れる。気分転換かなにか知らないが、マジでうるせえ。

城川はときおり依子に話しかけるが、依子は昼休みほどの気の利

いた反応はしてくれない。城川はしょんぼりした。依子も、みんなの前で話すのが恥ずかしいのだろう。

三姉妹が談笑を続ける中、俺は古書棚の間から覗く窓から、外の景色を眺めた。

驟雨だと思っていた雨は断続的になっており、図書室が締まるまでは降り止むだろうと踏んでいたのだが、文字通り雲行きが怪しくなってきた。

まあいいか。スラダン読も。

「おい、おいバカ泉ー」

村瀬から名前を呼ばれ、漫画へ向けていた集中を解く。何度も俺を呼んでいたのか、村瀬は呆れたような顔をしていた。

「悪い、なんか用？」

「なんだよ、寝ちゃったのかと思った」

村瀬は明るく笑い、俺も苦笑いを返す。

なんだろうと待っていると、村瀬は笑顔で、というかにやにやしなながら口を開いた。

「今泉つてさ、平野とはもうやったの？」

とてつもなく嫌な予感。鍋島と城川は耳を疑うように村瀬の方を見る。

これ、なんて返せばいいの。とりあえずとぼけてみようか。

「なにが？」

「平野とはもうセックスしたのかって聞いてんの」

なに言ってるんだこいつ。

当然だが場は凍る。誰もが下手に発言出来ないようだ。

受付の方からページをめくる音がした。聞こえてくるくせに、依子は普通に本を読んでいる。

俺の隣で、原村が漫画を読んで吹き出していた。ヘッドフォンのせいで聞こえていないらしい。ていうか、ベルセルクって笑えると

ころあつたっけ。

村瀬が諦めるまで聞こえないふりで通そう。そう思って、俺は申し訳なさそうに頬を掻いて聞き返す。

「ごめん、ちよつとよく聞こえなかつたんだけど」

「だから、平野と、今泉は、もうセックスしたの、って聞いてんだろ！」

ちよつと怒ってる感じの村瀬。キレたいのはこっちの方だ。

セックスセックス連呼するあたりが激しく中学生臭い。こいつつてこつというキャラだっけ、という風に鍋島や城川に視線を送るが、彼女らも啞然として村瀬の顔を見るばかりだった。

村瀬の方もようやくこの空気に気づいたのか、きよるきよると俺たちの顔を見回した。赤縁眼鏡の位置を直してから、ついでに破顔一笑。

「なに、もしかしてみんな童貞？ 処女？ なんだよ、このあたしがおかしいみたいだな雰囲気はさー」

「いやおかしいだろ。エロ本読みだした思春期の男子みたいだから、お前」

「そうかなあ」

まああたしも処女だけどねー、という村瀬のどうでもいい補足。聞いてねえから。

俺も落ち着いてきたので、ようやく村瀬の顔を見据える。

「いや、俺と依子って親戚だからさ。そういう関係じゃねえの。知らなかったっけ？」

「いとこってのは言い訳にならないね。今泉と平野ってかなーりいい感じじゃん。それにほら、うちのクラスに家庭教師と付き合ってるやついるだろ。実はその家庭教師ってのがいとこらしいぜー」

初耳だしどうでもいいし知らねえし。

「で、どうなのよ、ぶつちやけ」

「ぶつちやけない。ないっていうかあり得ない」

「んだよつまんねー」

悔しそうに机をぺしりと叩く村瀬。ここで若干だが、凍った空気が解け始める。鍋島と城川が引きつった笑みを浮かべた。

俺も漫画に視線を落とすが、やはり村瀬の動向が気になり、ときおり漫画から目を上げると、彼女は頭の後ろで手を組み、わざとらしくきよるきよると視線を這わせていた。

やがて村瀬と鍋島とが視線を合わせる。鍋島が少し身構えた。

「ほんとは今泉と平野なんてどうでもいいんだよねー」

獲物に狙いを定め、にやつく村瀬。鍋島さん、ご愁傷様です、と俺は心の中で合掌する。

「アッキーとはさ、もうキスくらいしたわけ？」

鍋島の顔が瞬時に赤くなる。城川はもう、鍋島の後ろに隠れて縮こまっていた。

原村が漫画で爆笑した。原村の立場が羨ましくなる。俺も明日からipod持ってこようかな。

「あ、昭文くんとはそういうんじゃないんですってば」

「由多加とアッキーって、てっきりできてるもんだと思ってたんだけどなあ。違うの？」

鍋島は真っ赤にした顔を下げ、一度原村に視線を送り、それから城川みたいに指いじりをし出す。

「そもそも、好きとか、そういうんじゃないって、ただの中学時代の部活友達ってだけで……」

「ほんとに？」

「は、はい……」

ほとんど聞こえないくらい小さな返事をする鍋島。城川も視線を下げて指をいじっていたから、本気で二人が姉妹みたいに見えてきた。

村瀬はひどくつまらないという表情で「ふうん」と呟く。

沈黙。鍋島と城川は同じ角度で頭を下げ、村瀬はじつと鍋島の頭を見つめ、原村は横でくすくすと笑い、俺は漫画から微妙に視線を上げ、依子は受付で本を読んでいた。

村瀬は一体何がしたいのだろう。原村が聞こえていないから、だからこんな質問を平気で投げかけてくるのか。

なら俺と依子のことはどう責任を取ってくれるんだ。今後が気まぐずくて仕方がないだろうが。依子は気にしないだろうけど、俺は出来ればこれを忘れるまで依子と関わりたくない。

「じゃあさ」

沈黙を破ったのはやはり村瀬だった。彼女はパイプ椅子から立ち上がり、無邪気に笑んだ。

「こついうことをしても、由多加は別に気にしないわけだ」

そう言って村瀬が歩み寄ったのは、原村の真横すぐだった。鍋島と城川はほぼ同時に顔を上げる。

原村の肩に、村瀬の手が置かれる。原村も不思議そうに村瀬を見上げた。

村瀬が何をしようとしているのか、今更ながらに予測した俺だったが、もうその時点で村瀬の顔は原村に接近していた。村瀬と原村の距離がゼロになる。

唇を合わせる二人に、俺は既視感を覚える。鍋島にとって、これは恐らく、以前の早川と同様の視点。彼女らの気持ちがる気がしてくる。

村瀬の唇が離れた瞬間、原村は頬を赤くしてヘッドフォンを外し、しきりに辺りを見回した。

「え、なにこれっ、なになに、王様ゲーム!？」

んなわけねーだろキノコ頭。

村瀬は子供っぽい笑みをたたえ、驚愕する鍋島を見下ろした。それから三十秒たっぷりの無言が続き、ようやく俺は口を開く。

「なにしてんの、お前」

「どつきりチュー」

まんまだった。うん、いやいやいや、え、はあ？俺はそんな顔で村瀬を見る。ゆでだこ状態の原村は発言した俺と村瀬を交互に見つめた。本当に何も分かっていないらしい。

またしても沈黙。

鍋島が視線を落とし、自分の膝を見つめた。掠れた声が彼女から漏れる。

「村瀬さん、昭文くんのが好きだったんですね」

そんなことを言い出す鍋島。

「それならそうと言ってくれればいいのに、私、一人で舞い上がっちゃって、馬鹿みたいじゃないですか」

それを返すのは嘲笑を交えたような村瀬の言葉だった。

「いんや全然。っーかあだし、アッキーと話すの今日が初めてじゃん」

それから村瀬はくすりと笑い出し、原村の肩に肘を乗せる。

「ここで今泉と平野がチューしたって話聞いてさ、ずっと面白そうだなあって思ってたんだよね。だからやってみた」

理由にならない理由だった。彼女がどういう原理で行動したのか、悪いけど全く理解できない。呆然とする俺の頭も回らなかった。

城川は何か言いたそうに口を蠢かせていたが、いくら動かしたところで言葉にならないようだった。鍋島は自分の膝を見つめたまま、つつかえるように声を出す。

「そうだ、塾。私、これから塾があるので、もう帰ります」

鍋島は拳動不審に床に置かれた鞆を取り、荒々しく席を立つ。城川が痛ましい目で彼女を見上げた。

そのまま足早に受付扉へ向かう鍋島に、またしても声をかけたのは村瀬だった。

「帰るんなら、もう一回アッキーにキスしちゃうぞー」

それでも鍋島は一瞬も足を止めず、まるで聞こえていないかのようになり、突き飛ばすように扉を開け、ほとんど走るように図書室を出ていった。

そんな彼女の背中を全員が見送る。

俺は深くため息を吐き、机を両手で思い切り叩いてから立ち上がった。そして村瀬を睨む。

「なにがしたいんだよお前」

「刺激の足りない学校生活に、あたしがおもしれー燃料を注いでやったのさ」

俺の睨みに一切の怯みを見せず、村瀬はまたあざ笑うように言った。

拳を握る。別に殴ろうというわけではない。怒鳴りたくなるのを抑えたかった。城川も原村も、不安そうに俺の拳へと視線を送る。

「いつまでもふざけたこと言ってんじゃねえよ。本当にそれだけの理由なら、今すぐ鍋島追いかけて土下座してこい。絶交されるぞ」

「はあ、なにそれ」

村瀬は興ざめだともいうように顔をしかめる。原村の肩から肘を離し、床の鞆を取り上げ、頭の後ろで組むように鞆を提げた。

「あーつまんね。心結、もう帰ろうぜー」

城川はびくりと身を震わせ、一步も動けないでいた。村瀬はそのまま城川の後ろを通り過ぎていく。俺の視線に目もくれず、悠然と扉の方へと歩いていった。

そのときだった。

受付の方から椅子を立つ音がした。村瀬は手に持った鞆を膝辺りにぶらりと下げ、彼女と対面する。

「なに？」

依子が村瀬の前に立ちはだかり、村瀬の道を塞いでいた。依子は、寒気を覚えるほどの無表情をたたえた。

「ねえどいてくんない？ 通れないんですけど」

村瀬が笑う。次の瞬間、肌を打つ乾いた音が辺りに飛んだ。

依子が、平手で村瀬の頬を叩いていた。村瀬の赤縁眼鏡は床を滑るように転がり、遅まきに城川の小さな悲鳴が上がる。村瀬は頬をおさえて半歩後ずさり、依子はそんな彼女を冷淡な目で睨み据えた。

「へらへらしてんな」

俺の口の悪さでも移ったか。ともかくとして俺は二人のもとへ駆け寄ろうとしたが、今度は村瀬の方が動いた。

また同じ音。

しかし、村瀬が依子の頬を叩く音は、さきほどのものよりも幾分痛々しく聞こえた。依子は二歩下がり、受付の壁際に手をつく。二人の体格は同じぐらいだったが、村瀬の方がいくらか本気だった。村瀬はそれでも依子に食いかかり、彼女の胸ぐらを掴む。

「やっぱお前は気に食わねーよ、平野」

裸眼のまま依子に顔を近づける村瀬。ここでやっと俺は二人の間に割って入った。

「止めるって、どうかしてるよお前ら！」

俺の脇に一発だけ村瀬の拳が入るが、それは気にしない。受付のひらけた場所から見える図書室内の風景。当然だが、生徒は一人残らず俺たちに視線を集めていた。

依子も村瀬も、俺に押し退けられて一端身を引く。両者荒く息を吐き出していた。俺は先に依子の方を見た。

「なにいきなり殴りにかかってんだよお前」

「むかついたから」

「むかついただけで殴っていいんなら今頃みんな青あざだらけなんだよ！ つーかお前、人のこと言えねえからな！」

村瀬は依子の真似をしたらしいし。それでも意味分からんけど。

叩かれる際に村瀬の爪が当たったのか、依子の左頬には一線の赤が引かれており、そこから血が滲んでいた。

俺は村瀬の方を振り返る。村瀬の瞳孔は開いていた。

「依子のことはこの際もういいよ。どうして鍋島の前であんなことをした」

「どけ今泉。そいつ、もう一発殴らせろ」

聞こえてねえのかよ。どっちが不良だ。

「止めとけ、これ以上やると停学になるぞ」

村瀬の右手人差し指の爪が赤くなっていた。爪の周りから血が溢れている。

村瀬はしばらく俺と睨みあうが、やがて苛立たしげに舌打ちをし



た。鞆を持ち直し、小走りで俺たちの横を通り過ぎていった。受付の扉が村瀬の手により、叩き壊されんばかりに強く閉められる。

みんなの息づかいだけが、音として残った。

俺も息を落ち着かせ、それから依子の顔を見る。依子はいつもの彼女然とした平静さを取り戻しており、俺は依子の心臓の強さに呆れてしまった。頬の傷は細いが、割と深く刻まれているようだ。

ここからどうすればいいのか逡巡するが、ともかく依子の顔の傷が心配だ。

「保健室行くぞ」

依子にそう言って、それから城川と原村の方を振り返る。城川は意外にもまだ泣いておらず、それでも気力の抜け落ちた顔をしている。原村は依子の傷を見て痛そうに顔を歪めている。

「城川は村瀬を追いかけろ」

「えっ」城川が目を見開いて俺を見る。

「本当の理由だけでも聞いてくれ。俺が行っても悪化するだけだし、城川だけで行った方があいつも落ち着くだろ。大丈夫、お前なら殴られないから」

多分ね。ややあつて城川は二、三度頷く。彼女が椅子を立つのを見届けて、今度は原村に声をかける。

「原村、説教ついでに依子を保健室に連れていくから、あとは受付頼む」

「待て今泉！」

依子を引いて歩き出そうとすると、原村が手を前に出して俺たちを引きとめる。城川は村瀬の赤縁眼鏡を拾い上げ、相当慌てているのか、さっさと受付を飛び出して行ってしまった。

「何から何まで訳が分からない」

「俺もほとんど分かってないから安心しろ」

村瀬が何故故意に友達の鍋島を傷つけるようなことをしたのかとか、依子はどうしてここまで怒るのかとか。

この分だと原村は、何故鍋島があんな様子だったのかすら分かつ

ていなさそうである。てつきり原村は鍋島の気持ちに気づいているものと思っていたが、本当に罪作りな男だ。

はっとして、自分の頬の傷を撫でようとする依子の手を弾いた。血はもう顎の辺りまで伝っている。

「触るな、結構深いから」

依子とともに受付を出る。図書室出口の前で足を止め、俺は図書室内の生徒たちに頭を下げた。

「お騒がせしました。こっちで解決できそうなんで先生は呼ばないでください」

教師に知られると、二人とも本気で停学になりそうだし。もしここに宮下が居たらどうなっていたらろう。もたついて役に立たなさそうな印象だ。

俺の言葉に室内の生徒たちはざわめき始めるが、こんなもんでいいだろうと俺たちは図書室を出た。

放課後だからなのか知らないけど、保健室に保険医の先生は居なかった。肝心なときに運が悪い。

加えて、俺も依子も保健室に入るのは初めてだった。扉が開いていたからよかったものの、物の場所を把握していないために二人でもたつく。

室内の隅に簡易洗面台があったので、まずは依子にそこで傷を洗うように指示し、その間に俺は救急箱を探す。救急箱はガラス棚に三箱並べて置かれていた。使用記録帳なんてものもあったが、これはよく分からないので無視。

傷を洗い終えた依子と丸椅子で向かい合うように座る。

動かないようにと首根っこを掴んだら少しびっくりされた。弟と喧嘩するときの癖が何故ここが出るのかはよく分からないが、とにかく慌てて離れた。

依子の左目の下には長さ二センチほどの切り傷が入っていて、血はもうほとんど止まりかけていた。出血が酷かったので傷も深いだろうと思っていたが、こうして見ると案外そうでもないのかもしれない。

ただちにバンドエイドで傷を覆う。

なんだか、やんちゃな野球少年のようになった。色白の依子には似合わない。

「これで大丈夫だと思うけど、一応、形成外科行く？」  
「行かない」

依子は小さく首を振る。こうして傷を心配してあげているのに、こいつはやたらと平気そうな顔をしている。普通、顔の傷って女の方が気にするものじゃないのかな。

本人がいいならいいんだけどさ、俺はやっぱ後味が悪い。

「痕、残らないといいな」

「残らないよ」

妙に自信ありげな依子。

「昔、純と喧嘩して、あごのところ引っ搔かれたときも、ちゃんと治ったし」

「あつたな、そんなことも。あんなときは悪かったよ」

「あたしもいつぱい純のこと叩いたから、おあいこ」

小学校低学年の頃か。小学生なんて男子も女子も体格は変わらな  
いから、昔は依子とよく引っぱたき合いの喧嘩をしていた。俺ほど  
ではないにしろ、依子もすぐに感情的になるガキだったし、今以上  
に喧嘩は絶えなかった。昔は手が出て、今は口が出てって感じだけ  
ど。

「お前も女の子らしくなったと思ったんだけどな。なにかある度に  
思うけど、やっぱり人って簡単には変わらねえのな」

昔と比べれば異常なくらい大人しいけど。

依子は口をつぐみ、俺の膝元に視線を落とす。さっきの騒動も、  
一応反省はしているらしい。反省なしなら叱りつけようと思ってい  
たけど、これならもういいか。

「この前、中学のときに鍋島そっくりの友達がいたって言ってたよ  
な、お前」

依子は躊躇いがちに頷く。

「頭にきたんだろ。そんときの友達が馬鹿にされたように見えて」  
依子は下方を見つめたまま押し黙った。

否定しないところを見ると遠からず近からずって感じか。自分で  
もよく分かっていないのだろう。

「明日、ちゃんと村瀬に謝れよ」

「嫌」

「なんでだよ」

「あの子が鍋島さんに謝ったら、あたしも謝る」

ふてくされる依子。まだ村瀬の件は根に持っているらしい。意地  
っ張りなのか、中々強情なやつだ。

「こういつときって、謝る優先順位なんてものはあるのかな。鍋島を故意に傷つけた村瀬と、その怒りに任せて村瀬を殴りにかかった依子。どっちもどっちな気もするけれど、原因を作った村瀬から謝る方がお互いすっきりするかもしれない。」

それにしても、やっぱり依子は鍋島のことを気になるのだろうか。そのくせ鍋島を避けようとするのは、好きな子をいじめたくなるみたいなお子さま的心理なのか。何しても、とことん不器用なんだろうな。

図書室に戻ると、もう利用者の姿は見当たらなくなっていた。大きな騒ぎにはならなかったようだ。

依子を後ろに連れて、受付の扉を開ける。城川はすでに帰っていた。外の雨でブラウスが湿っている。彼女は長机に突っ伏し、数秒間隔で鼻をすすっていた。

原村は受付を離れ、城川の隣に椅子を置き、頭を垂れて座っていた。俺たちが入ると原村は顔を上げ、口元だけで笑う。

「眼鏡だけは渡せたらしいんだけどね」

原村が城川の肩をぽんと叩くと、城川も伏せた顔を少し上げた。鼻頭が真っ赤で、随分と泣きはらしていたようだ。スカートのポケットからハンカチを出し、じっとりと濡れた目をしきりにこする。

「もうわたしたちには関わらないって、それだけ言われて、逃げられちゃった」

それっきり城川はハンカチに顔をうずめてしまった。依子は城川の隣に腰掛け、彼女の髪をすくように撫でる。

原村はそんな二人の様子に苦笑いを浮かべた。

「もう僕には何がなんだか」

原村は説明を求めるように俺を見てくるが、俺もどう説明しているのか分からない。鍋島が彼に向ける好意を、軽々しく俺が口にし

ていいものかどうか。

一度後頭部を掻き、誰にも聞こえないくらいに小さく息を吐いてから、俺は口を開いた。

「明日、村瀬と話してみるよ。俺の知ってることだけじゃまともな説明はできないし」

とりあえず保留。原村は曖昧な笑みのまま頷いた。しかも、これは村瀬が明日来てくれればの話だ。ついでに鍋島も登校してこないかもしれない。うちのクラスって、なにかショックを受ければすぐ休む風潮があるんだよな。すこぶるメンタルが弱い。

城川はハンカチから顔を覗かせて、不安そうに俺を見上げた。

「もし話せても、村瀬ちゃんを怒らないであげて。きっと村瀬ちゃんにも、なにか理由があると思うから」

「怒らねえよ。話聞くだけだ」

よかった、と城川が小さく笑う。それから俺は依子に視線を送るが、依子は城川の髪を撫でつけるままで、俺と目を合わせようともしなかった。

「言っとくけど、僕は何も気にしてないからね」

ふと、原村がそんなことを言う。

「あんなものはただの行為だし、気持ちに伴っていなければ何の意味もない」

そうだろ、平野、そう原村に問いかけられ、依子は疑問を表情にする。

「早川沙樹の前で、平野が今泉に迫ったときのことだよ。たしか平野はそう言ったんだ。こんなものに意味はないって」

原村の問いかけに、緩慢な間をもって依子は頷く。

一週間以上も前、配役は違えど、この場所で今日と似たような出来事があった。そのときの依子が早川になんと言ったかなんて、俺は動転していたから欠片も覚えていないんだけど、原村と依子がそう記憶しているのならそうなんだろう。

「だから僕も、今日のことは意味のないこととしてすっぱり忘れる

よ。だから僕のことは気にしないで、あとは頼む」

「原村」

原村は笑顔のまま、返事もなく俺を見返す。

「どうして鍋島があんな風だったのか、お前、実はなんとなく分かってんだろ」

原村がたまに俺と依子のことと茶化してくるように、俺も彼の調子を真似して訊いてみた。原村は目をぱちぱちとしばたかせて、んー、と唸り、それから気色の悪いはにかみ笑いを浮かべた。

「んふふ、どうだろうね」

訊かなきゃよかった、と俺は激しく後悔した。とても癪に障る反応をしてくれる男だ。鈍感で無頓着な原村が俺は好きだったのに。くそ、裏切られた。正直、すねを二、三回ほど蹴り小突きたいな、とも思った。しかし今の雰囲気だと冗談半分でも許されないので、余計に悔しかった。

原村ははにかんだままの顔で、鳴らすように手を打った。

「みんなご傷心のようにだけど、そろそろここも閉室だから、僕らも引き上げようか」

原村はもつと傷心した方がいいと思うが、帰ることに關しては俺も同意だ。

依子も城川も、彼の言葉に控えめに頷く。俺は窓から外を遠望する。

雨雲は、もうすっかり形を縮めていた。

途中でブックオフに寄り、それから家に帰る。夕飯を食べ、一度ベッドで横にながら煙草を吸っていたときのこと。携帯に依子からの着信があった。

「なんだよ」

もしもし、という合い言葉は依子流マナー事典には存在しないので、俺は端から用件を聞くことにした。

「携帯に変なメールが来る」

「迷惑メール？ どんくらい来んの」

「五十件くらい」

俺は煙草をくわえたまま勢いよく半身を起こした。

「なんでそんなに来るんだよ」

「わからない」

「内容は？」

「きもいとかうざいとか。面倒臭かったからあんまり見てない」

半分しか吸っていない煙草を灰皿に押しつける。スパムメールの類ではなさそうだ。

嫌がらせメール。いかにも今どきのいじめって感じがする。

「依子、学校の生徒には誰と誰にメアド教えた？」

依子はしばし考えるように口を閉ざす。

しばらくして彼女は口を開いた。嫌がらせメールなどものともしていないようで、依子は淡々とその名前を言い連ねる。その生徒名を頭の中で並べ、よく思索してみると、やがて俺は考えたくもない可能性に行き着いてしまう。

「分かった。明日、アドレス変更の仕方教えてやる」

「うん」

依子が電話を切るより先に、俺は通話を切断した。もう一度煙草に火をつけ、天井を見上げるようにベッドへ横たわる。可能性で終わることを、ただ願った。

翌日の火曜日。

俺は遅刻した。割と久々に寝坊をした。ブックオフで買ったクローズ全巻を読んでいたら、つい、というわけである。

三時限目の政経で、教室後方の扉からこっそり入ろうと計画していたが、廊下側の窓から見える教師の顔が何故か司書の宮下だったわけで、あいつならバレてもいいやと勢いよく教卓側の扉を開けた



ところ、宮下は満面の笑みで俺を指さしてきた。

「これから五頭先生に怒られる今泉くんだけー」

「なんで宮下先生がここにいんの」

宮下のはやし立てを無視した。

「政経の池田先生が今日から産休に入るんですよ。だから一年の政経はしばらく宮下が受け持ち。よろろん」

「よろろん」

よろしく、意味だと思うのでそう返した。

教室を見回した。一番に早川と目が合い、お互いすぐに目を逸らす。村瀬も鍋島も全員登校してきているようだ。村瀬は頬杖をつき、窓の外を眺めていた。彼女の右手を注視すると、人差し指の爪を巻くように絆創膏が貼られていた。

鍋島は手元に視線を落としていたので表情は分からないが、ちゃんと学校に来たのは意外だ。真面目なのか、ただ無理をしているのか。

依子は昨日と同じくバンドエイドを貼った野球少年的な面持ちをノートに向け、城川はそわそわと心配そうに俺を見つめ、吉岡はつまらなさそうにペンを回した。

自分の席へ向かおうとすると、すぐに宮下から肩を掴まれる。そしてにつこりと微笑まれた。

「君の来るべきところはここ一年二組の教室じゃありません。生徒指導室で鬼の五頭がお待ちですよ」

「宮下先生も指導された方がいいんじゃないの」

「宮下に母ちゃん以外の指導は意味を為しません」

「俺には五頭先生の指導も母ちゃんへの指導も意味を為さないんだだけ」

「なるほど。自分に似て君もかなりの問題児だ。よーしみんな、残りの時間は自習にします」

笑顔の宮下に引つ張られていく。廊下に出ると、教室から曾根本一人の寂しい歓声が上がった。

結局俺は三、四時限目を生徒指導室で過ごした。学年主任の五頭と生徒指導の玉木に交代で見張られながら、ひたすら四時限分の設問を解かされた。

帰ってきたのは昼休みに入った頃で、自分の席に座り、すぐに疲れで机にうな垂れた。いつもならここで鍋島がせせら笑いながら話しかけてくるところだが、やはり今日の彼女は大人しかった。

机に寝そべったまま後ろを見ると、鍋島もこちらに気づく。鍋島は一人で弁当箱を広げていた。

「昼飯、城川と食わねえの」

あえて村瀬の名前は出さなかった。すると、鍋島は力のない笑みを浮かべる。

「城川さんは、図書室で平野さんと食べるそうです」

「だったら鍋島も図書室で食べばいいじゃん」

「城川さんにそう誘われたんですけど、えっと、遠慮しておきました」

今日は一人にしてほしいのだろうか。しかし鍋島の顔を見ると、どうも俺にはそう思えなかった。きっと、城川や依子に気を使わせたくないのだろう。

教室の前方を見渡す。早川と吉岡のグループに、村瀬が混ざっていた。彼女らは寄り集まり、姦しく騒ぎながら昼食をとっている。

そんな一団から目を離し、俺は横向きに座りなおした。

「たまには俺と飯食うか」

鍋島は下を向いたまま頷いた。

鍋島との無言の昼食会が始まる。横綱力士六人分ほどの重い空気が襲いかかり、息苦しいほどに気まずかった。本当は旧校舎の屋上で原村と食べるか、もしくは図書室で依子たちと食べた方がずっと気は楽なんだけど、鍋島を一人にするのはあまりにも酷だ。

俺は、親父が再挑戦して作ったサンドイッチを無言で食べた。卵

サンドは大分ましになってはいるが、今度はカツサンドの方がびちゃびちゃだった。ソースかけすぎだよ。今回は自分は自分で持ってきたポケットティッシュを駆使する。

鍋島のために、ない話題を必死で探した。明るい話題をフル回転で模索する。あ、一つだけあった。

「依子と城川、すっかり仲良くなったみたいだな」

言葉にしてみても、これもどうだろうと頭を抱えた。その影響で鍋島は一人きりの昼休みを過ごすところだったのだから。

「いいことですよ。平野さん、孤立しないで済みそう」  
「だな」

逆に鍋島が孤立しないか心配する俺だった。

沈黙、第二ラウンド。

そもそも俺は会話下手なのだ。この役どころは荷が重い。カツサンドに苦戦しつつ、紙パックの野菜ジュースを飲む。手も紙パックもべたべたになってきた。

そのうち、鍋島の方からぼつぼつと話題を振ってくる。

「昨日、平野さんから電話がありました」

パン生地が喉につまりそうになった。信じられない、という顔で鍋島を見る。鍋島は弁当箱の中を見つめたままだったが、どこか嬉しそうに口元を緩めていた。

「依子、なんて言ってた？」

「開口一番に『大丈夫？』って訊かれました。大丈夫ですよ、って答えたら『よかった』って言われて、すぐに切られちゃいましたけど」

悪戯電話かよ。聞くやつが聞いたらただの嫌がらせだ。依子も鍋島を心配したことだったんだらうけど、もっと上手い慰め方は思いつかなかったのか。

「依子も、鍋島のこと相当心配してくれてたんだらうな。昨日のあいつ、お前のためにかなり怒ってたんだぜ」

とりあえずフォローを入れる。村瀬を引っ叩いたことまでは伏せ

ておいた。

「依子だって実は鍋島のこと気にしてんだよ。鍋島からももつと話しかけてやってくれ。そのうち心を開いてくれるかも」

「そうします。昨日の電話をもらってから、私、すごく救われた気がしました。嫌われてるわけじゃないんだなって」

「そうだよ。今度からは依子と城川と三人で食べたらいい」

鍋島の笑顔も幾分か自然になってくる。

「はい。今泉くんも、いつでも混ざっていいですからね」

「ああ、気が向いたらな」

重い空気はいつの間にか取り払われていた。

そのうち鍋島との昼食は終わり、鍋島はさっそく図書室へ行くと言いつ残して教室を出ていった。昨日の今日である場所に行く鍋島も、かなり精神的にタフなのだなと思う。

早川の一団の方を見やる。村瀬と話をするとは言ったものの、あの中においては話しかけれそうもない。

俺は生徒指導室の鬱憤を晴らすべく、煙草を吸いに屋上へ向かった。

昼休み終了後の掃除の時間のこと。

裏庭の焼却炉を鍋島と城川と三人で掃除していたところ、焼却炉の蓋を開けた鍋島が声を上げた。

「今泉くん、城川さん、ちょっとこっちへ来てください」

訝しんで鍋島のもとへ歩み寄ると、鍋島が焼却炉の中を指した。

「また、捨てられています」

見ると、灰や木炭に薄く隠れて一冊のノートが捨てられていた。人差し指と親指でつまみ上げると、名前欄にばっちり『平野依子』と書かれていた。見覚えがある。依子のロッカーに入っていたものだ。鍋島と城川が絶句する横で、俺は表紙を開いた。

予期した通り、依子へあてたばかり罵詈雑言の数々。見ていても鬱

になるだけなので一瞬で閉じる。

「仕返しのつもりみたいだな。よっぽど暇なんだろうな、あいつらも」

もつとも、これは依子に見せなければ意味がないのではないか。すると、城川がもごもごと発言した。

「依ちゃんから聞いたんだけど、依ちゃんの机の引き出しにもこれと似たようなノートが入ってたんだって」

「じゃあ、こっちのノートは俺へのあてつけてわけか」

早川たちから宣戦布告を受けた気分だ。今日の依子を思い出すが、今の俺よりよっぽど泰然とした様子だった。いじめる側としては手応えを感じなかっただろう。

「こんなこと、もう絶対に止めさせましょう。私たちがなんとかしないと」

鍋島が悲痛に訴える。もはや彼女も、依子は完全にいじめられる側だと認識しているようだ。俺は頷き、手を汚しながらノートを焼却炉の奥へと突っ込んだ。灰が舞い上がり、俺は顔をしかめた。

「あの、今泉くん」

城川に背中をつつかれる。声量も極小なので、彼女がそうしなければ俺も意図せず無視していたかもしれない。

「なに」

「あの紙袋、どうなったの？」

「紙袋？」

一瞬なんのことが分からなかったが、すぐに思い出した。早川のノートが入った紙袋のことだ。そうか、城川はあれから紙袋がどうなったのか知らないんだっけ。これについてどう答えるべきかと俺は長考する。城川は俺の返事を待つ間、じつと斜め下に視線を落とした。

「あれなら、俺の鞆に入ってるよ」

灰の中から手を引き出す。うわ、腕まで真っ黒。

「鞆の中に？ 持ち歩くのは、危険じゃないですか？」

鍋島の言葉に俺は首を振る。

「何かあったときに備えてだよ。早川と吉岡を追いつめるために、逆に証拠として使えるだろ」

「そうでしょうか。あんなの、どう考えても決定的ではないような気がします。逆に揚げ足を取られそうなの……」

「いいんだよ」

言い捨てるようにして俺は焼却炉の蓋を閉じる。心の中で、執拗に自分の発言を正当化させた。

そんな俺を見て、鍋島と城川は不思議そうに顔を見合わせるのだった。

放課後になり、誰もが教室を後にした頃。

一度図書室へ行き、気分を落ち着かせるべくスラムダークを読んでいた。図書室には依子と原村と、あとは宮下がいた。宮下については図書室に来るだけで感心ものである。本当に俺の言える義理じゃないけど。

依子と原村と三人で神経衰弱をした。六回やって、一度たりとも二人には勝てなかった。

壁掛け時計を確認する。そろそろか。俺はパイプ椅子を立った。

「鞆、教室に忘れてきた。ちょっと取ってくる」

二人にそう言い残し、俺は図書室を出た。

まだ依子にはメールアドレスの変更をさせていない。真意を確かめてからでも遅くはないと思ったからだ。

夕日の射し込む廊下を歩く。夏にしては、やけに涼しい空気が辺りに漂っていた。コピー室の前を通りかかると、偶然そこから出てきた鍋島と出会う。彼女は両手に書類の束を抱えていた。

「これから帰りですか？」

「そんなところ。鍋島は？」

「委員の仕事です。夏休みも近いので、ちょっと忙しいんですよ」

それから適当に挨拶を交わし、鍋島と別れた。鍋島は書類を持ち直し、早足でどこかへ消えていった。それを見届け、俺も歩き出した。

進むにつれて足取りは重くなるが、なるべく気にしないようにして進む。

教室に到着する。薄暗くなった教室の中を、扉に隠れてそっと覗き込んだ。

一つの影が、忙しなくいそいそと蠢いていた。ちょうど俺の机の付近である。ここからではその顔は判然としないが、体格からして俺の予想は外れていなかったらしいと分かる。一度だけ入るのを躊躇う。見逃してあげたい、そんな考えが今日だけで何度と頭をかすめたことか。こうしてはつきりと目撃するに至ってまで、俺は今まで彼女を信じている。

数回の深呼吸を敢行し、俺は静かに扉を開けた。

影は跳ねるようにこちらを向いた。それから怯えた目つきをたたえ、慄然とした足取りで後ずさる。

俺は確認を取るように彼女の名前を呼んだ。

「城川、俺の席に何か用か」

城川の胸には、わざと置き忘れた俺の学生鞆が抱かれていた。

「あの、ここ、これは、その」

言い訳をする余裕もないらしい。ついでに彼女は嘘を吐くのも下手くそだ。よく観察すれば、城川は呆れるほどに正直者なのだなど分かる。

昨日の夜の依子との電話、彼女が並べた名前。依子が直接メールアドレスを教えたという生徒たち。その中に城川の名前があり、ここで予想の半分以上は固まった。

そして今日の掃除の時間、焼却炉でのやりとり。そのときの城川も、隠しているつもりだったのだろうが、どこか動揺を隠せないそぶりを見せていた。そもそも、あのタイミングで紙袋の詳細を聞いてくること自体が疑わしい。彼女には悪いとは思いながらも、俺は

罨を掛けた。

歩み寄ると、城川は俺の鞆を抱いたままぺたりと窓に背中をつける。唇を震わせ、血の気の失せた顔をしていた。

「それに紙袋は入ってねえよ。鍋島の言う通り証拠にもならないし、もう捨てた。ごめんな、嘔吐して」

「そ、そんな」

言いかけて、城川は片手に口を塞ぐ。

「まあ座れよ」

震え怯えつつも、城川は大人しく俺の席に座った。俺は彼女の前の席に座り、頬杖をつけてその顔を見据える。

「ちよつとだけ、俺と駄弁ろうか」

城川は小刻みに息を吐き、焦点の合わない視線を返した。



夕暮れに染まる夏の教室は安穩としていたが、俺と城川を挟む空間だけは緊迫していた。確実に主導権を握っている俺でさえ息が詰まりそうだ。

俺は手のひらにあごを乗せたまま城川の目を覗き込むが、城川は額に薄く脂汗を浮かせ、視線をあちこちへと這わせている。逃げようにも、腰から全身から力が抜けて身じろぎ一つできないという状態だった。

責めるのをやめてあげたい、というのが半分、いたく嗜虐心を煽られるな、というのが半分だった。自分でも最低な心理状況だったと思う。

「依子のメアド回したのって、城川？」

「……はい」

緊張でまともに答えられないだろうと思っていたが、彼女も腹を決めているのかもしれない。

「ノートは？」

「え」

「依子の、あのノートだよ」

城川の身体が震え、大きな目をさらに見開かせた。俺も思わず語調が強くなってしまったようだ。

城川は俺の鞆をぎゅっと抱きしめ、左上に目をやり、右上にやり、そして俺の胸元まで泳がせてから答える。

「あさ、朝早くに学校に来て、依ちゃんの机に、入れました。それで、それで」

「焼却炉には」

「焼却炉には、三時限目の休み時間に、トイレに行くふりをして、入れにいきました」

城川の声質にはもう水気を感じなかった。

「落書き自体も城川が書いたのか」

「かか、書いてませんっ」

「だよな。城川にそんなこと出来るわけねえよな」

落ち着かせるべく微笑みかけたつもりだったが、城川は唇の奥でかたかたと歯を鳴らして押し黙った。

皮肉と受け取ったのだろうか。落書きは出来ないけど、捨てにくいことは出来るんだな、という皮肉に。

「他には？」

城川は答えない。机を叩くと、コンマ遅れて城川の全身も跳ね上がった。

「他には？」

「剃刀、を」

「剃刀を？」

「朝、剃刀の刃を、上履きにしかけました」

「それ、どうなった」

「依ちゃんはずぐ気付いたみたいで、し、新聞紙に、くるんで、捨てていました」

「よかつたな、城川。せつかく作った大切な友達が怪我しなくて」

城川は下を向き、みしりと鞆を抱く。俺の鞆なんだけどなあ。横髪が肩から落ちて目を隠す。歯のかち合う音も些少大きくなる。

俺は城川の唇を見つめた。震えているというより、ぱくぱくと開け閉めしているように見える。何か言いたいらしい。ここにきて何故か、俺は彼女の言い訳を聞く気がしなくなっていた。

俺はそのまま続ける。

「依子と友達になりたいって言ったのも、全部こういうことだったんだな」

うつうつ、と城川が咽ぶ。ぎゅっと閉じた瞼の間から一雫。

「別に依子が傷くどうの怒ってんじゃねえよ。俺、結構お前のこと信じてたんだよな。こうして城川に裏切られてさ、今すげえ泣けてくるんだわ」

言い過ぎだ。

「誰に仕向けられた。吉岡か？ それとも早川？ そんなにあいつらは恐いか。いじめに走りたくなくなるくらい恐えのかよ」

「……なさい」

「あ？ 聞こえねえよ」

止めるって。もうマジ泣きだから、城川。

「……ごめんなさいっ」

「聞こえねえ聞こえねえ全く聞こえねえ。俺はな、お前のそういうめめめそうじうじしたところが前々から鼻についてたんだよ。そのどっちつかずの態度がよっ」

本当に城川は悪いのか。俺は、誰かに責任転嫁したいだけなんだ。「すみません、もう、許して」

それとも俺の頭がおかしくなったのかも。だって、可哀想だなんて微塵も思えなくなってきた。

城川は鞆を落とし、守るように頭を抱える。俺は隣の席を蹴ってから、城川の肩を掴む。彼女は小さく悲鳴を上げた。

「やめ、てっ」

「何とか言え。はっきりものを主張しろ。わたしは、どっちにく、おら言えっ！」

「うっっっ」

はつきり喋らない。恐れる。負ける。泣く。逃げる。震える。怯える。臆病者。

弱いことは、悪いこと？

「お前は、卑怯なんだよ！」

卑怯はどっちだよ。

「今泉くん」

俺？

左頬に石が突き刺さった、と思った。視界に星がちらつき、何故か土星やスペースシャトルまで見えた。感触からして、石だと思っていたそれは拳だった。しかも俺よりずっと小さい。反動で右側の

窓にこめかみから激突する。みしりという音がした。窓の音か、俺の骨の音かは分からない。

視界の端に、グーを振り抜いた鍋島の姿があった。なんで鍋島がここに居るんだ。城川は口元をおさえて言葉を失った。

「どろりで騒がしいと思いましたよ」

俺はとっさに右のこめかみと左頬の両方を抑え、机に顔を落とした。口の中で血の味がした。超いてえ。

「こういうときって、普通パーじゃね？」

「今泉くんにはグーがお似合いです。本当は目潰しでも良かったんですけど」

じゃんけんは三すくみ型ではなくピラミッド型だと知る。

頭を下げつつ、まず窓に視線を送った。あれだけ全力でやられたのにヒビ一つ入っていない。前方にシフト。城川が居ない。左へ。

鍋島が城川を隠すように抱いていた。

「お前なっ、鍋島がそうやって甘やかすから城川は」

「あなたが城川さんを語らないで」

鍋島の気迫に俺は口を閉ざした。為すすべもなく机の平面に視線を落とし、頬とこめかみのじんじんとした痛みに耐える。

痛みより先に、徐々にではあるが思考の方が冷えてきた。あと、目も覚めた。

「今泉くんの味方集めってこういうことだったんですね。ありえない。最低。これじゃ、吉岡さんたちの方がよっぽどましです。この大バカ泉。唐変木。変態。痴漢。暴漢魔」

鍋島の辛辣な言葉が降りそそぐ。二つの意味で頭が痛い。痴漢とか暴漢魔とかはちょっと違う気もするが、言い返す筋合いは一糸たりとも俺にはなかった。

激痛に耐えながら再度視線を上げる。鍋島は未だ激情を顔にして、軽蔑と敵意の眼差しを俺へ向けていた。

城川は、鍋島に抱かれながら震えた手をぶら下げている。もう泣いていなかった。代わりに、痛ましいほどの謝罪の色を浮かべる。

「ごめんね、今泉くん」

「城川さん、もうこんなのに謝ることはありません」

痛みがだんだん引いてくる。俺は静かに椅子を立ち、二人へと正対した。鍋島が警戒する。また殴られそうだったが、俺はそのまま頭を下げた。

「ごめん城川。俺、ちよつと頭いかれてた」

視界いっぱい教室の床が映り込む。夕暮れはもう色をなくし、淡いグレーの木目を晒していた。

「卑怯は俺の方だったよ。本当は城川に悪気はないって分かったんだけど、調子こいて、マジださかった。ごめん」

それから顔を上げると、城川は沈んだ顔で俺を見返した。斜め下を向き、また涙を一つ落とす。鍋島の手を解いてから、今度は城川から頭を下げてきた。

「ごめんなさい」

しかも、俺よりずっと深く。

「もう、負けないから……」

それから城川は後ろを向き、小走りで自分の机にかかった鞆を拾い上げる。鍋島が彼女の名前を呼ぶが、城川は止まらなかつた。ときおり椅子や机にぶつかりながら、教卓側の出口から走り去っていった。

きんとした静寂が訪れる。鍋島は扉の方を向いたまま立ち尽くした。鍋島が城川へ向けて伸ばした右手は虚空を握り、膝元へと落ちる。

俺はその右手を見つめる。握られた拳は、まだ俺への怒りを残しているからなのか、それともまた違う意味なのか。

「今泉くんには、話しておきます」

「なにを」

やがて握られた拳がゆるやかに開かれていく。静寂の中に紛れ込むように、鍋島の声が宙を浮いた。

「城川さん、昔いじめられてたんですよ」

俺は彼女の右手から、おさげが二つさがった後頭部へと視線を移した。

「中学三年生のときだったかな。私が初めて城川さんを知ったのも、ちょうどそのとき」

鍋島が横顔を見せた。口元は曖昧に緩んでいたが、心を揺すられるほどに哀しい目をしていた。彼女が振り返りきつて、その目で見つめられると、俺の心臓はまたじりじりと熱く痛んだ。

「城川さん、引っ込み思案だし、気も弱いじゃないですか。それにあの頃は身体もずっと弱くて、風邪ばかりひいてて。いじめられたって、彼女、何も言い返せないし、されるがままだったんですよ」

いじめられる城川を想像する。確かにいじめやすいだろうな、と思った。依子と比べてもずっと。実際、さっきの俺がそうだった。責めれば責めた分だけ謝るし、もしこっちが完全に悪いとしても、城川はそれでも謝り続けるだろう。叩いても叩き返さないし、物を盗んでも諦めるだろうし、裏切られても文句すら言えないし、何をされたって無抵抗。

今みたいに、鍋島のような存在がいなければどうなるか。

「だから私、助けようとしたんです。止めるって喚いたり、直接先生に訴えたり」

鍋島は俺へと向けた目を伏せる。それから、二度と俺を見ようとしなかった。

「そうしていると、今度は私がいじめられ始めたんです。そのおかげで城川さんは一時的にいじめの標的から外されたんですけど」

こんな顔をするのならいつそ泣いてくれた方がいい、一瞬だけそう思った。二度目の罪悪感が俺を襲う。

「私、城川さんがああして恐がる気持ち、なんとなく分かる気がします。いじめられて、初めて見える景色があつて」

いじめられる鍋島を想像する。

叩かれても盗まれても裏切られても何も言えない鍋島。想像出来ない。本人とは食い違う。ただし、俺の中での鍋島だけ。

「景色が色褪せて見えるんです。視界が狭くなるんです。何も見えなくなるんです。どろどろです。朝を迎えるだけで気分が悪くなる。足は鉛みたいになります。月曜日が嫌いになって昼休みが嫌いになって体育が嫌いになって行事が嫌いになって、頭の中にあるのは、明日の不安だけ。こうなったらもう、心の中で泣き叫ぶことしかできない。お願いだから、もうやめてください、って」

俺は何も言えないまま、崩れるように椅子に座り込んだ。俺は、鍋島のことを全然知らなかった。

「結局、私は逃げました。三年生の残りの半年間、逃げて逃げて、また城川さんがいじめられ出しても、逃げて、全力で逃げきりました。どうして城川さんが今、私と普通に接してくれるのか、正直、全く理解できません。いつそのこと、好きに罵ってくれればいいのに」

そう言つと、鍋島は両膝を床についた。両手もつき、力なくうな垂れる。

「私、弱いものいじめは大嫌いだし、見るのも嫌なんですけど、でも」

床を打つ涙。おぼつかない声色。

「されるのは、もつと、嫌だったから……」

今の鍋島に、俺はどうすべきなのか。褒めることは出来ないし、かといって蔑むことも出来ない。

いじめに立ち向かって負けたからって誰が笑えるか。負けたことより、そこから腐ってしまうことが問題だ。だとしたら鍋島はまだ全然腐っていない。

とにかく、目を逸らしては駄目だと思った。鍋島のとった行動を悪だというのならば、目を逸らし、鍋島を見捨てることの方がもっと悪なのだから。

「城川さんや今泉くん、私には何も言う資格はありません」

俺は椅子を離れ、彼女のそばに腰をおろした。

「本当に、すみませんでした。私のことも殴ってください。私も、

目を覚ましたいです」

「殴らねえよ」

代わりに鍋島の頭に手を置く。もし俺が原村なら、ここで抱き締めて慰めることも出来たかもしれない。しかし人には適材適所というものがあるから、俺に出来ることといえば、これくらい。

「話してくれてありがとう。お前が完璧人間じゃなくて、逆に安心したよ」

俺は心のどこかで鍋島を尊敬していた。いじめは悪いことだと言いつ切る姿勢を尊敬していた。

尊敬という言葉について考える。

相手の人格を崇高だと敬いながら、実のところ相手突き放すことになっていたのかもしれない。尊敬にも種類はあれど、俺が彼女に向けたのはそういうものだった。同じ人間として対等な目線に立つことを放棄していた。

鍋島は強いだなんてただの思い込みで、ただずさんな扱いをしていただけで、彼女への配慮を怠っていただけだった。

今からでもいいから、鍋島を助けてあげよう。

「これからは、鍋島も城川も依子も、誰もいじめられないようにしないとな」

鍋島は声もなく頷いた。

教室を出て鍋島と別れる。鍋島が泣き止むまでにも結構時間がかった。

図書室へ行くと、当たり前なんだけど、もう閉室になっていた。そして、これまた当たり前のように依子と原村も居なかった。とても薄情なやつらだと思う。ちょっと鞆取ってくる、だけで一時間近くも戻らない俺が言うのもあれだけど。

校舎を出ると、もう辺りは薄暗く、かなり寂しい思いでとぼとぼと自転車置き場へ向かった。一度校舎の方を振り返る。職員室にし



か明かりは灯っていない。そのうちあの明かりも消えて、ついでに校門も閉まってしまふのだろう。せかせかと歩く。

自転車置き場の照明に照らされ、依子と原村がキャッチボールをしていた。二人とも額に青春の汗をにじませていた。特に原村。

おーし、えいしやおら、しゃーこら。変なかけ声。

「置きっぱなしの自転車のかごにグラブとボールがあつたからね。こいつあやらなきや損だろうと。一心不乱の無我夢中で平野と放り合いつてたんだ。楽しかったなあ、平野」

原村の説明は説明になつていなかった。無駄に爽やかな感じで顔面の汗を手の甲で拭う。

「原村先輩に、無理矢理つきあわされた」

不憫な依子だった。グラブにバンドエイド顔のザ・野球少年依子。いじめを受ける張本人なのに、こいつが一番お気楽としているのは気のせいなのか。

「もしかして俺のこと待ってた？」

「正確には、今泉ともキャッチボールしたいから待ってた」

俺が原村の iPhone を投げ壊したこと、もう忘れたのかな。

それから三人で三十分ほどキャッチボールをした。そうしていると、生徒指導の玉木が怒鳴り声を上げて校舎から出てくる。真っ暗でよかつたと思う。からくも玉木の魔の手から逃げ帰った俺たちだった。

翌朝。昨日のキャッチボールの影響で、腕を軽い筋肉痛にして起床。あれしきの運動でこのザマとは、俺も結構歳なのかな。しかし俺はまだ十五歳だった。中二で部活を辞めて以来ほとんど運動をしてこなかった弊害なのだと諦めるしかないのか、それとも、もしかしたら俺は後天性の虚弱体質なのかもしれない。ちよっぴり悲しくなったりもする。

目覚めになにか食おうかなと冷蔵庫を開け、冷凍庫を開けると、ガリガリ君ソーダ味を発見した。ラッキー。

台所でガリガリ君をガリガリやって過ごす。そうしていると居間の方から弟がやってきて、わなわなと震えながら俺が今まさに啜えているガリガリ君を指した。

「ぼくが、朝食べようと大切に取っておいた……」

朝からアイス食うつもりだったのか。実際食べている俺には何も言う筋合いはないのだけど。

怒り猛って襲いかかってくるのかと思えばそうではなく、弟は何故か二階の自分の部屋へと戻っていった。

しばらくして帰ってきた弟の手には水鉄砲が握られていて、弟は片方の口角だけをフリ上げてそれを構えたのだ。そんな弟の立ち姿は、どこぞのロシアマフィア然とした威光を放っており、俺の方も朝っぱらから激烈に嫌な予感を受けたのだった。

「観念しな兄ちゃん。これには便器の水をためてきた」  
ジーザス。

家中を走り回り、弟の便器水鉄砲の脅威から逃げまどい、朝飯もとらず追い出されるように家を飛び出した。

そんなわけで、相当早い時間に学校に到着する。生徒の影はほと

んどなく、学校全体が閑散としていた。少しだけ気持ちがいい。

教室に入ると、すでに一名だけ登校していた。教室後方から入ったために後ろ姿しか確認できないが、座っている席の位置から察するに、村瀬彩音だった。窓際の最前席。

これは好機。身から出た錆である。一昨日の、繰り返された図書室事件の真意を確かめなければいけない。

自分の席に鞆をかけ、存在をアピールするように多少足音を強めてから村瀬に近づく。

村瀬はDSで遊んでいた。後ろから覗き込む。ぷよぷよだった。

村瀬はやっと俺の存在に気づき、ゲームを一時停止させてから顔を上げた。

「おつす、今泉」

「おつす」

それからまたゲームを再開する村瀬。それを中腰で覗き込む俺。なんだろう、この何事もなかったような日常挨拶。

カチカチとDSを操作して、ぷよを次々と落としていく村瀬。彼女自身も完全にプレイモードだ。

「あの、村瀬」

「んー？」

「お前、鍋島と喧嘩中なんだよな」

「喧嘩中、ねえ」

ちよつと笑う村瀬。確かに適切な表現ではないかもしれないけどさ。

「仲直りしないの？」

今度は無視された。ぴくりとも反応もしないガン無視である。

いえーい九連鎖、とかやってる場合じゃないんだけど。

「一昨日のあれ、理由だけでも教えてくれない？ ほら、俺が二人の仲を取り持つこともできるし」

村瀬は答えない。俺はぷよぷよから目を離し、村瀬の横顔、というか村瀬の眼鏡を見つめた。薄赤色のセルフレーム。薄いというか、

少しだけ透明を帯びているようだ。一昨日、盛大に図書室受付の床に転がしていたけれど、一見して傷一つ入っていない。衝撃に強いフレーム加工？ いや、どうでもいいんだけどさ。今はシカトされることが問題なわけで。

「あ、ここで話すのが嫌ならさ、昼休みに屋上で俺と飯食わね？  
そんなとき話してくればいいし」

「はあ、なにそれナンパ？」

画面を向いたままの村瀬。どうしてそうなる、と首を傾げる俺だが、なるほど、屋上と言われれば、普通は新校舎の屋上を思い浮かべるだろう。新校舎の屋上といえば校内中のカップルが集まることで有名だ。虫酸が走りに走って発狂しそうなので俺は行ったことないけど。

「いや違くて、旧校舎の屋上なんだけど」

「旧校舎……？」

ピンと来ない様子の村瀬。旧校舎の屋上は名目上閉鎖となっていてるし、そもそも存在自体が希薄だから、村瀬の反応は至って普通なのだろう。

DSの画面上でデフォルメの激しいポップなキャラクターたちが動き回る。

「一昨日のあれ、みんなも訳分かんねーって状態だからさ、動機だけでも知っておきたいんだよ。鍋島と仲直りできるかは別としてもさ」

村瀬は答えない。ぶよぶよもラストステージへ突入。

「最近、城川ともあんまり話してないんだって？ お前も結構寂しいんじゃないの。お前、あいつのこと相当気に入ってたじゃん」

やはり無言の村瀬。操作する指の方は一層忙しく動く。ここまです無視を決め込まれると、俺もだんだん、拗ねた弟を相手にしている気分になってきた。

「なあ、おい村瀬ー」

村瀬の肩を叩いた、そのときだった。

DSの画面上で表示される『ばたんきゅ〜』の文字。

あーっ、と声を上げる村瀬。たじろぐ俺を前に村瀬は憤慨して、ようやくこちらを向く。

「なにすんだよっ、今泉のせいで負けちゃったじゃないかっ」

「……お前なあ」

「コンテニューだ。今泉が責任持って勝てよっ」

言われて、村瀬からDSを押しつけられる。今さらながらこれ、レッドカラーのDSである。多分村瀬は赤が好きなのだろう。

村瀬は、さっさとやれ、と目で表現してきた。

「これで勝つたら、ちゃんと話してくれよ」

「ああいいとも」

ほんとかよ。

それとも、俺が勝てないとも思っているのかな。悪いけど、こつちも最近弟とはまってやってんだよ、ぶよぶよ。スーフアミのだけど。

「上等だ。やってやるよ」

俺は村瀬の隣の席にどかんと腰を降ろす。村瀬が腕組みして見守る中、ぶよぶよ再開。

腕がなるぜ、なんて意気込んで次々とぶよを動かしていたら、後ろから明るい声がした。

「彩音ちゃんおはよー」

吉岡の声だった。彼女はそのまま俺の横を通り過ぎて行く。気になつて、ぶよぶよを一時停止して顔を上げる。

吉岡は腰を屈め、両腕を村瀬の席に乗せた。

「おー美野里。今日も肌つるつるだなー」

吉岡の頬をぎゅっつつまむ村瀬。恐ろしい。俺には絶対できない。吉岡は口元を引っ張られながらも明るい笑顔を絶やさない。

「どんな手入れましたらこんな赤ちゃん肌保てんの？」

「えー、私、何もしてないよー？」

「肌綺麗なやつは大抵そう言うよなあ、羨ましー」

肌なんて、にきび以外で綺麗かどうかなんて俺にはよく分からない。俺はぶよぶよを再開した。

「あの、そこ、私の席なんだけど」

はっとして後ろを向く。早川が曖昧な笑みをして立っていた。

「わ、悪い」

慌てて席を空ける俺。早川は席に座りながら、俺の顔も見ずに「おはよ」と短く挨拶をしてくる。俺もただどしい挨拶を返す。

とても気まずい。それからすぐに村瀬の声が飛んだ。

「サボってんじゃねーぞ今泉っ、クリアできたのかよっ」

俺はDS画面に視線を落とす。うわ、いつの間にか負けてるし。

思わず、やべえ、という顔をしたら、村瀬からDSを取り上げられた。画面を見つめて、またさっきみたいいな声を上げる。

「全っ然、ダメじゃん！ この下手くそ！」

しっし、と村瀬は手を振って俺を犬のように追い払う。もう一度やらせてくれ、と言いたいところなのだけど、これ以上早川の近くでぶよぶよをするのは猛烈に気が引けた。振った相手というのは接近するだけで空気が悪くなる。

迷うが、村瀬はさっさとゲームを再開してしまうし、早川は背中だけで拒絶を示してくるし、吉岡は意味不明の笑顔をこちらに振りまいてくるしで、居辛さも峠に達した俺はあえなく自分の席に戻ることとなった。

一時限目、玉木の数学。昨日のキャッチボールの件がばれていなかと、拳動不審にひやひやししながら過ごす。

二時限目、宮下の政経。俺は寝た。

三時限目、山岡の英語。実践対話で二人組を組めと言われ、余った。余った者同士ということでも曾根本と組むことに。余った際はいつもなら早川の目の届きにくい隅っこで、依子とこっそり組んでいたのだけど、今回は城川に先を越された。越されたというか、依子

に二人でせまつて、依子が城川を選んだのだ。シヨック。軽く城川に嫉妬。

四時限目、移動教室で物理。

そして昼休み。

今日はどこで飯を食おうか、そんなことをぼんやり考えていたときのことだった。

「純」

依子がいつの間にか俺の席のすぐ横で亡霊のように立っていて、俺は椅子を揺らしながらあり得ないくらいにビビった。

「どうしてびびくりするの」

「いや、なんでもない」

だって、依子が俺の席に来るなんて、もしかして入学以来初めてのこともかもしれない。しかも、これがまた煙のように音もなく現れたので、うっかり心臓が口からこぼれ出るかと思ったのだ。後ろの鍋島も物珍しそうに依子を見上げた。

「なんか用？」

「シャーペンと消しゴム貸して」

「なんで？」

「ないから」

意味が分からない。今までの授業はどうしてたんだ。

今までの経験から、依子が自らまともで分かりやすい説明をしてくれるとは思えない。詳細を聞くのもいいのだけど、こちらが内容を推理した方が早いときもある。例えば、こういう小さいアクシデントの場合だとか。

家に忘れてきたということはないだろう。三時限目の英語の時間、依子の席に近づいたとき、確かそのときは、依子のナイロン製の白い筆箱は机の上にあったと思う。俺も自分の記憶に絶対の自信はないのだけだ。

ここで濃厚なのは、途中で盗まれてしまったということだ。わざわざ人に借りにくるのだから間違いはないと思う。そして盗まれた

のは四時限目の可能性が高い。つまり移動教室の物理。

「今泉くん」

ふと、後ろの鍋島が俺の背中をつついてくる。振り返ると、鍋島は何かに気づいたように教室中に視線を這わせていた。鍋島がそつと俺に耳打ちしてくる。

「早川さんと吉岡さん、それに城川さんがまだ教室に戻ってきていません」

はっとして俺も教室内を見回した。確かに鍋島の言う通りだった。村瀬は、他の早川の友達と席を囲み、既に昼食を始めている。

鍋島が懸念を連ねた。

「もしかして、まだ物理室にいるのかも」

絶対にそうだ。俺は突っ立ったままの依子を見上げる。依子が、「さっさと貸せよ」みたいな顔で見つめてくるので、俺は自分の缶筆箱ごと依子に押しつけてから言った。

「依子、お前はもう図書室行ってる」

「うん」

言われなくとも、という感じで依子は教室を出て行った。それを見届け、俺と鍋島は頷き合った。

物理室は旧校舎側の二階にある。俺と鍋島は半ば走るように旧校舎へと向かった。

階段を上がると、すぐ左に物理室が見える。手前の扉は閉じているが、奥の扉は半開きになっていた。人の気配もある。というか声がした。

早川の声だった。

「あんだ、何が言いたいの」

音を立てないように歩き、扉上部の丸窓から中を覗く。鍋島と俺で丸窓を挟むような形となる。

まず一番に早川と城川の姿が目飛び込んでくる。城川は奥の壁



に背中をつき、早川が退路を塞ぐように彼女を追い詰めていた。吉岡は生徒用実験機のスツールに足を組んで座り、机上に頬杖をついて二人の様子を眺めていた。

俺はその机に目を凝らす。吉岡が肘をついているすぐ傍に、案の定、依子のナイロンの白筆箱が置いてあった。さらに、筆箱の横にティッシュが一枚広げてあり、その上に無数に光る何かが乗っていた。

俺は声を殺して鍋島に話しかける。

「鍋島、あのティッシュの上にあるの、あれはなんだ？俺、目悪いから見えねえ」

鍋島は息を呑み、俺同様に音量を抑える。

「刃、ですかね。よく分かりませんが、たとえば、オルファの刃を細かく折ったならあなるのかも」

言われてみれば、確かにそういう風に見えてきた。あの刃を筆箱にどう仕組むのかは知らないが、依子に怪我をさせようというのは確からしい。

城川は薄く汗ばみ、畏怖の眼差しで早川を見上げた。早川は背中しか見えないが、彼女が城川を睨みつけているのは城川の様子からも間違いないだろう。早川は身長も高めなので、クラス一背の低い城川を上から見下ろすには充分だった。

「ねえ、城川さん、黙ってないで何とか言いなよ」

鍋島が軽く俺の制服を引く。

「助けますか？」

「もう少し待とう」

「どうして？」

「あいつ、きつと自分から抜けたいって言ったんだよ。だからあんな問い詰められ方してるんだ。俺らが行っても城川のためにならない」

鍋島は何も言わず、不服そうな顔をして丸窓に視線を戻した。

黙って二人の様子を見つめていた吉岡だったが、このままじゃ城

川は何も喋らないと分かったのか、柔和な声色で早川へと声をかけた。

「沙樹、もう心結ちゃんみゆが可哀想だよ」

吉岡が実験機の黒い面をこつりと叩く。早川の後ろに結わえた髪が揺れ、顔が吉岡の方を向いた。

「ここで座つてゆっくり話そうよ」

微笑む吉岡。早川は城川を一瞥し、大人しく吉岡のもとへ行き、彼女の隣に座った。

壁際で固まったままの城川。あなたも早く来て、と早川がきつく言いつけると、城川はびくつきながらも歩み、吉岡と早川に對面するように立ち尽くした。

「沙樹、すっごく恐いでしょ。そこが可愛くていいんだけどね。ほら、心結ちゃん。私の前に座つてよ」

園児を誘導するように優しく告げる吉岡。城川は慎重にスツール引き、吉岡と正面に机を挟むように腰掛ける。三者面談のような位置取りだ。

城川は両の拳をぎゅっと握り、それを両膝の上に置いてから、頭を少しだけ下げた。

吉岡は両肘をついて五指同士を絡ませ、そこにあごを乗せて、また笑顔を浮かべた。

ふと、階段の方から足音がした。俺も鍋島も若干動揺して階段の方を見やる。

階段から上がってきたのは依子だった。どうして依子がこんなところこゝに、と俺は冷や汗をかく。

依子は階段を上りきり、俺たちに気づくと、真っ直ぐこちらへ歩み寄ってきた。手を左右に振って、こっちに来るな、という合図を送ったが、依子は何の疑心もなく近づいてくる。幽霊なのではないかという風に足音も立てずにやってきたから、ひとまずは安心。

音を立てないように依子を掴まえ、顔を近づけながら彼女を睨み据えた。

「何しに来た。図書室行けつつたろうが」

俺がこんなにも必死なのに、依子は眉一つ動かさない。状況を知らないながらも、依子も一応空気を讀んだのか極小に声をひそめた。

「消しゴムが入ってなかったから」

「消しゴムだあ？」

わざわざそれで探しに来たのか。入っていないなら入っていないで、しからはシャーペンの頭についてる小さい消しゴムを使えばいいし、つか、俺ら以外に借りるやつはないのかよ。

くそ、いないんだろ。小さく舌打ちをしつつ、藁にもすがる思いで自分のポケットを探る。あ、入ってた。なんでこんなところに入れてんだ俺。

依子の手のひらにMONNOの消しゴムを乗せる。

「おら、これやるからさっさと帰れ」

依子が物理室の異変に気づいていない今のうちだ。城川が依子を裏切っていたなんて絶対に知られてはいけないのだから。

しかしここで、「世間話でもしようか」と吉岡が話し始める。

「平野さんとは、どこまで仲良くなれた？」

依子の目を覆おうとしたが、遅かった。吉岡の声に反応して、依子の顔がぱっちり丸窓の方を向いた。鍋島も気まずそうに目を泳がせる。

城川は答えず、下を向くばかりだった。吉岡がまた続ける。

「情が移るくらい仲良くなっちゃったんだね。だから心結ちゃん、さつきみたいなこと言うんだよ。でもね、平野さんってすぐ友達を裏切るから、あんまり入れ込んだじゃダメだよ」

あることないこと吹き込んでいるらしい。あんな風に、暗示のように何度も何度も。

俺は依子を流し見る。こうして陰口を直接立ち聞きしてしまっても、依子はやはり無表情を崩さない。

ここまで聞いてしまったのならもう仕方ない。吉岡が依子の陰口を次々と述べる中、俺は依子の耳元に顔を寄せて言った。

「城川に裏切られたなんて思うなよ」

依子は丸窓の方を見つめて押し黙る。

「たしかに最初は、吉岡に命令されて騙すつもりで依子に話しかけたかもしれない。でも今の城川は、依子と本当の友達になりたいって思ってたんだよ。だからああやって吉岡たちと戦ってる」

依子は城川たちを見つめたまま、やがて小さく頷いた。

「あたし、心結のこと信じる」

「それでいいんだよ」

そのとき、早川がしびれを切らしたように大声を上げた。

「いい加減、何か言いなさいよっ！」

声に合わせて、城川の全身が震えた。城川はさらに顔を下げた。

まあまあ、と吉岡が早川をなだめると、釈然としないように早川はそっぽを向いた。

「心結ちゃん。私の話、つまんない？」

「そ、そんなこと、ありません」

城川がようやく答える。虫のささやきのような矮小な声だった。

城川が答えてくれたことが嬉しいのか、吉岡はまた楽しそうに微笑んだ。

「よかったあ。でも心結ちゃん、どうしてそんな話し方なの？ もつと普通に話してよ。私たち、友達だよな？」

「……うん、ごめんね」

厚かましい友達意識だ。

吉岡が、ティッシュの上に乘せられたカッターの刃の欠片をいじり始める。城川が怯えてそれを見つめた。

「それで、これはどういうことかなあ」

吉岡は手のひらの上にカッターの刃の断片を一つ一つ乗せていく。「今泉に沙樹のノートを取り上げられて、その上、取り返せなかつたんだよな。拳げ句の果てにもう捨てられた？ なにそれ。沙樹、超可哀想じゃん」

やがて、吉岡の右手の上に刃の山が出来上がる。城川は目も離せ

ずにその山を凝視した。

「それで心結ちゃん、なんて言っただけ。いじめはよくない、もう止めよう、だっけ？」

吉岡の右手が軽く握られる。とっさに城川が目をつむり、顔を守るように手をかざした。横で鍋島が口元を覆う。

吉岡の手から刃の山が放られた。窓から射す光を浴びながら、悲鳴も上げずに城川はその雨を受ける。

「寝言は寝て言えよ」

口調とは裏腹に、吉岡は口角を吊り上げて笑った。俺たちは微動だに出来ずそれを見守る。

幸い城川の顔に目立った外傷はなかったが、ただ一つ、刃の一片が左眉の上に突き立ったままだった。城川は恐怖のあまり、こちらまで聞こえてくるほどに荒く息を吐き出した。

「心結ちゃんって、役立たずの上に頭もおかしいんだね。私たちがいじめなんてするわけないじゃん。ねえ沙樹」

「ほんと。城川さんもひどい思い込みするわよね」

早川は先程の吉岡の行動に一切の動揺を見せていない。吉岡は小さく首を傾げて城川の顔を覗き込んだ。

「私たちがしてるのはね、いじめじゃなくて抵抗なの。平野さんが沙樹のこといじめるから、これ以上やるなら私たちも黙っちゃいないうぞーって、彼女に警告してるんだよ。あの子相当間抜けだから、まだ全然分かってないみたいだけど」

鍋島からの視線に気づく。そろそろ止めに行こう、鍋島はそんな目をしていた。俺は首を振った。城川はまだ何も言い返していない。

鍋島が厳しく睨めつけてくるが、俺はあえて目を逸らした。  
やがて、城川がたどたどしく口を開く。

「あのね、美野里ちゃん、わたしね、もう」

「なに？ 全然聞こえない。もっとはつきり喋りなよ」

城川は唇を噛み、また下を向く。額に刺さった刃がぶつりと抜け、地面へ落ちていく。吉岡はひどくつまらなさそうにボブカットの毛

先を指に巻き、それから少しだけ声のトーンを上げた。

「あの子、彩音ちゃん。あの子は使えるよね」

村瀬の名前に、城川の肩がぴくりと反応する。

「使う……？」

「人の身体べたべた触ってきて超うざいんだけどね。でもあの子、私たちの言うこと全部信じちゃうんだよ。なんでもだよ？ なーんでも」

城川の反応が面白いのか、吉岡は口元に不気味な笑みを浮かべ、嘲笑した。

「なんだってあの子、馬鹿なんだもん」

城川のまつげが細かく揺れ、瞼が僅少大きく開かれる。

「あんなに頭の悪い子、私初めて見ちゃった。でもね、よく動くしちゃんと使えるんだよ。私、ほんとおかしくておかしくて。ほら、調教されたお猿さん。あれ思い出しちゃった」

早川が小さく吹き出す。吉岡はさらに口元を歪めて城川の顔を覗き込んだ。

俺は隣を流し見る。依子は一部始終を冷めた目で見つめるばかりだった。ふいに、鍋島が俺の腕を掴む。爪が食い込み、思わず声を上げそうになる。

鍋島も悔しいのだろうか。彼女がどこまで村瀬のことを許しているのかは分からない。しかし、村瀬が原村にした行為自体を許していないにしても、少なくとも鍋島が村瀬の全てを否定しているはずがない。俺の腕を掴む手が、雄弁にそれを物語っていた。

俺は物理室を見つめ、心中で城川へと念じを送る。

言え、城川。

やがて、城川が吐息を漏らした。

「村瀬、ちゃんを……」

「だからあ、全っ然聞こえないんですけど。ちっちゃいのは身長だけにするば？」

悔しさのあまり、城川が鼻をすすり始める。

「わたしの……わたしの、友達を……」

「わたしの友達を馬鹿にするな」

すぐ隣から声が上がった。何が起こったのか、俺は事態を一瞬計りかねた。

鍋島だった。彼女は扉を開け、城川へ向けてはつきりと言いつつ抱えていたのだ。俺は軽く頭を抱える。せつかく言おうとしてたのに。物理室にいた全員の目が鍋島へと向いた。

「村瀬ちゃんを馬鹿にするな、ですよ。城川さん」

はあ、もういいんだけどさ。鍋島が笑いかける。城川は吃驚したように鍋島を見つめ、目に涙を浮かべた。しばらくの沈黙が流れ、それから城川は吉岡の方を向く。

「わたしの友達を、馬鹿にするな。村瀬ちゃんを、馬鹿にするな」

大きく息を吸い込み、ぎゅっと目をつむる。溜まった涙が零れ飛んだ。

「馬鹿はお前だっ！」

鼓膜を叩き破らんばかりの怒号が飛び、俺の全身をびりびりと打つ。あの小さい身体の一体どこからあれだけの声が出るのか、本当に不思議で仕方なかった。

吉岡も早川も口を小さく開け、ぽかんとして彼女を見つめていた。まもなくして、吉岡がまた笑う。軽く引きつった笑み。

「なにそれつける。なあおいクソチビ。お前今なんだった？ どの、誰が馬鹿だった？ こら、おい、もういっぺん言ってみるよ」  
城川の前髪を掴み上げる。城川は一度喘ぐが、それでも果敢に声を発する。

「何回だって言うよつ。馬鹿、ばか、ばかばかばかばか」

吉岡の手がゆっくり上がっていく。さすがにもう止めるか、俺は声を上げようとしたが、先に彼女の手を止めたのは早川だった。

「もういいよ、美野里」

早川は、吉岡から軽く視線を外して言う。

「馬鹿とかどうとか、マジくだらない。こんなやつもういいから、帰ってお昼食べよう」

早川を一瞥し、吉岡は逡巡する。それから再度城川を睨みつけるが、やがて掴んでいた前髪を離した。早川の言葉には従うんだな、と俺が思ったその直後、吉岡の平手が素早く振り抜かれた。

ぱんと弾けるような音がして、城川はスツールごと床に倒れ伏した。マジでぶちやがった。

「おいっ」

城川のもとへ駆け寄り、起こし上げる。彼女は半分自分の力で起き上がった。

「もう行くぞ」

吉岡の視線を無視し、机の上に乗った依子の筆箱を引つたくるように拾い上げ、城川を連れて扉の方へと向かう。鍋島が心配そうに待っていた。

城川の頬を見ると、ぱつちり手の形に赤くなっていた。左眉の上にカッターの痕も。すげえ痛そう。

そんな風に思っていると、城川がふと足を止める。何をするのかと怪訝に城川を見下ろした。

城川は吉岡の方へと勢いよく振り返り、片方の下脛を引つ張って思いつきり舌を出した。

「あっかんべーっ」

なんと幼稚な。いまだき小学生でもやらない。吉岡の顔を見ると、しかし彼女は結構マジギレな様子で頬をひくつかせていた。

俺は慌てて、今度はべろべろばーを始める城川を引つ張って物理室を出た。依子も何故か城川を真似てあっかんべーをしていたので、軽く彼女の腕を小突いて連行。

「これ、私もやった方がいいんですか？」と鍋島。

「やらなくていいから。もう戻るぞ」

心結のくせにつ、という吉岡の怒声が室内から上がるが、気にしないようにして俺たちは物理室を後にした。



鍋島、城川、依子とともに物理室から逃亡し、旧校舎を出て新校舎東棟の廊下を歩いていたとき。

吉岡が投げたカッターの刃の一部が城川の服の中に入ってしまった。いたらしく、それを知った依子が慌てて城川の制服を脱がし始めた。

内心焦ってるくせに、普段のクールフェイスで城川のブラウスのボタンに手をかける依子。校舎の廊下で堂々と。しかも俺がいる目の前で。しかも道行く男子が怪訝に流し見る中で。

俺がそれを認めた頃には、胸リボンとボタン二つがすでに外されていて、城川は顔を真っ赤にするだけで依子の為すがままにされていて、別に死に際でもないのに、俺の目には世界がやけにスローに映った。

すぐ隣にいるくせに鍋島は依子の奇行に気づいていない。廊下の先の女子トイレを指して、「あそこにトイレがあります」と、なんのガイドだよみたいな台詞をのたまっていて、多分鍋島はそこでカッターの刃を除去しようとしていたのだろうが、そんなことより彼女の背後で行われているストリップに気づかないのは如何ともし難いもどかしさがあり、そんな焦燥とした想いがコンマで俺の脳内を巡った。

依子の両手を抑えるか、城川を依子から離すか、鬼気迫った瞬間の状況下で、城川の方が俺に近い位置にいたため、俺は彼女の両肩を掴んで依子から引っ剥がした。

鍋島がこちらを向いた。

鍋島はクラーク博士みたいにトイレを指したまま、城川の肩を掴んだ俺とブラウス半脱ぎの城川を見て、それから両手を前に出している、奇しくも危機感を煽るような体勢の依子を見て、最後に俺に視線を戻し、憎悪と羞恥を存分に目だけで表現した。ピンチ。

「誤解だ」

「速やかに城川さんから手を離しなさい」  
誤解だ。

昨日の放課後みたいに全力グーで殴られるのかと思ったが、そうではなかった。

代わりに、鍋島は俺の顔も見ずに「言い訳はあとで聞きます」と言い残して、城川にがちりと寄り添ったままトイレへと消えていった。

俺は依子を睨んだ。

「責任取れ」

「ごめん」

依子は俺から顔を逸らした。

反省しているのかは知らないけれど、俺は依子から謝られるのに慣れておらず、というかほぼ初めてだったので、俺はそれ以上の責め苦を思いつけずに黙り込み、仕方がないので依子の左目の下に貼られたバンドエイドを眺めた。

日が経つとバンドエイド姿も様になるものだ。これも慣れなのか。眼鏡だって、最初は似合わないなと思っても時が経つにつれて定着してしまうものである。多分それと一緒に。

「その傷、治りそうか」

「うん」

うなずくと、依子は唐突に顔のバンドエイドを剥がした。

傷はもうほとんど目立たなくなっていた。よく見れば、うっすらと薄い肌色の細い線が確認できるが、この分だともう痕は残らないだろう。ちなみに村瀬との図書室の一件から二日しか経っていない。「わざわざ剥がさなくてもいいんだけど」

「もういらなと思うって。いちおう、替えもあるし」

依子はポケットから絆創膏を出した。サンリオのうさぎを模した

キャラクターの柄が入った絆創膏だった。なんだっけ、シナモロール？ そちらへんの園児が膝小僧にでも貼っていそうな絆創膏。

「このくそ恥ずかしい絆創膏が替え？ え、これ顔に貼んの」

「もう家にこれしかなかった」

「じゃあ剥がすなよ。」

依子はシナモロールの絆創膏を見つめた。顔に貼るか貼らないか、迷っているようだった。

「貼らない」

スカートのポケットに絆創膏をしまいかけて依子は手を止める。

ちょうど、鍋島と城川がトイレから出てきたところだった。依子は再度シナモロール絆創膏を取り出し、城川の額の切り傷に目を凝らした。で、そこに絆創膏貼った。

「心結なら、似合っ」

確かに似合ってるかもしれない。俺も鍋島もにやにやしてそれを見つめた。城川は訳も分からず、しきりに額の絆創膏を手で隠してもじもじしていた。

さっきの誤解はうやむやになった。

俺は三人と別れて屋上へ煙草を吸いに行くことにした。

「あ、あの、今泉くん」

図書室の前で三人と別れるとき、城川から声をかけられた。城川は手元へと視線を落としていた。

「昨日は、怒ってくれて、ありがとう」

鍋島も依子も足を止める。依子は明後日の方を向いていたが、城川の言葉に耳を澄ませているようだった。

ありがとうだなんて、俺に向けられても困るんだけどな。俺は限度を超えて感情的になって、自覚できるほどに城川を責め過ぎてしまったんだから。

「わたし、人からあんなに真剣に叱られたの、すごく久しぶりで、

というか、初めてで。すごく身に染みちゃって、それで分かったの。わたし、今すごく間違ったことしてるんだなあ、って」

城川はさらにうつむいた。

「間違ってるなんて、分かったつもりでいたんだけど、心の中で依ちゃんに謝るだけで、それって、本当は全然分かってないことと一緒にだったんだなって。結局自分のことしか考えてなくて、人の痛みなんか、知らんぷりで。わたし、すごく、ひどいことしてた」

彼女は鼻をすすり、真っ赤にした目を依子の横顔へと向けた。

「依ちゃん、本当に、ごめんなさい」

依子は小さく首を振り、

「おいで」

細い声でそう言った。立ち尽くす城川の背中を鍋島が押す。

「仲なおり」

依子が城川を抱き寄せると、城川はまた泣き出した。ごめんなさいを何度も繰り返して泣いた。

俺は廊下の壁に背中を預け、窓の外を眺める。

弱いことが悪いわけではない。自分の弱さに甘えることがいけないのであって、真摯に弱さと向き合うことが出来るのなら、いくら気が弱くたって、いくら身体が小さくたって、いくら力がなくなっても、いくら声が小さくたって、一向に構わないと思う。

勝利つてのは案外簡単に手に入るもので、要はギブアップしなければいいんだ。殴られ、倒されて、地面にひれ伏していったって、相手が諦める最後まであつかんべーをしていれば勝ち。自分の意志さえ折れなければ、それこそ誰を相手にしたって絶対に負けない。

「今日の城川さん、格好良かったですね」

俺の隣で、鍋島も壁に寄りかかって窓の外を見ていた。

確かに、とうなずきながら、俺はさっきの城川を思い出した。

「そういう鍋島も格好良かったよ。あれのお陰で城川も勇気付けられたんだし」

「私なんかが出しゃばらなくても、城川さんはきつと自分で言えて

たんです」

鍋島は寂しそうな目で、口元だけのアルカイツクな笑みをした。鍋島の目には、今の城川は自立してしまった妹のように映るのだから。

「きつと私は、城川さんを甘くみていたんですよ。私の知らない城川さんがまだあつたんです。彼女があんなに大きな声を出せるだなんて、私、全然知らなかった」

「馬鹿とか余計なことまで言ってたもんな」  
あれはちよつとスツキリしたけど。

城川はまだ依子の胸に顔を埋めていた。最後は強がっていたが、本当はかなり恐かつたんだと思う。

鍋島は物思いにふけるように黙ってしまった。

寂しいんだろ、そう意味深に尋ねてみると、鍋島は人差し指と親指で五センチほどの幅を作った。ちよつとだけ、という意味だった。鍋島つて将来、筋金入りの馬鹿親になりそう。

屋上に一人で行くと、そこには原村が居たが、彼は絵を描いていなかった。スケッチブックを開いてはいたけど、今は売店で売っていたらしい棒アイスを食べるのに忙しいようだった。

絶えず降り注ぐ太陽の刺激光を手のひらで遮断する。そろそろ真つ昼間の屋上に出るのも辛くなってきた。超あちい。

「放課後、画材買いに行くんだけど、今泉も一緒に来ない？ 結構買い込むから手伝つてほしいんだよね」

原村はそう言つて、急いで棒アイスを口に入れなおした。俺は煙草の三口目に口をしながら、ある提案を試してみる。

「鍋島と二人で行つてくりゃいいじゃん。あいつ、元美術部なんだから」

「あー、なるほど」

うん、じゃあ誘つてみるよ、と原村はあっさり言う。そういうの

意識しないのな。

原村から誘うのはいいんだけど、問題は鍋島の方か。二日前の図書室の件があつて以来、会話の中で原村の名前が出るたびに、あいつすぐテンション落とすんだよな。

「いきなり二人きりにして大丈夫かなって思ってるだろ、今泉。こういうのって時間が解決してくれる場合もあるからね。普段と違う接し方してたら余計に逆効果だと思うよ」

さとられな俺。そしてエスパーな原村。

「で、村瀬の方はどうなったの？」

「それが全然。話聞こうとしてもシカトされるし。正直、あいつが何考えてんのかさっぱりなんだよ」

アイスは下の方から溶けていき、原村は慌ててそれを舐めとる。苦肉の策で、アイスを口に突っ込んで真上を向いた。それからうなづいて考える。

「じゃ、可能性をあげてみよう。その一」

原村は人差し指を立てた。

「村瀬は本気で鍋島のことを好きで、鍋島が僕にとられたように思えて嫌気がさしてやった」

「なんだそれ。マジで村瀬が女好きだつて言いたいなの？」

「そこまでは言わないけどさ、まあ、これは一番現実的じゃないよね。はいじゃあ次」

原村は次の指を立てる。

「二つ目。なにかしらの原因で村瀬は鍋島が嫌いになつてしまった」

「それはないと思うけどな。村瀬が騒動起こすまで、あの二人普通に仲良さげにしてたし」

「三つ、僕の唇があまりにも魅力的だったので突発的にしてしまった」

「お前、よくそつという気色の悪いこと平気な顔して言えるよな」

「四つ、村瀬は僕に一目惚れしてしまった。案外モテるアッキー」

「それが理由なら、逆に分かりやすくいいんだけど……」

それ以上原村の推理シリーズは出てこなかった。

村瀬が初めに言った『面白そうだからやってみた』、あれがただの建前だっことは分かりきってんだけど。考えれば考えるほど村瀬の行動原理が読めなくなってきた。

放課後。一年二組の教室に原村が顔を出した。もちろん鍋島を買い物に誘うためだが、それは放課後開始からたった十分ほどしか経っていない頃で、生徒も教室に七割は残っているという状態。もちろん、村瀬在室。

「鍋島ー、駅前の文房具店行こうよー」

原村、目立ち過ぎ。クラスの半数以上の目が原村に向く中、鍋島が表情をがちがちに固めて俺の背中を掴んだ。

「ですつて、今泉くん。さあ行きましよう」

「お前ら二人で行くんだよ」

鍋島は目を見開き、ゆっくりと強調するように首を横に振った。

「んだよ、今まで二人で出掛けたことないのかよ」

「あるわけないじゃないですか。だって、二人つきりですよ」

「原村のこと嫌いななの？」

「そ、そういうことじゃないですけど」

「じゃあいいじゃん、二人で行ってくれば。俺、このあと図書室で依子のメアド変更手伝ってやらなきゃだし」

「そんな……」

鍋島は恋愛事に関してはやたらうじうじする。図書室事件があった後とはいえだ。ここはあえて、鍋島を突き放すことが最善なのだと思う。

原村は扉の外から俺たちに向けて手を振っていた。

「それにほら、私最近、耳の裏にきびができて、それ見られるのすごく恥ずかしいし、あとお腹の調子も悪くて、えーと……」

俺が持てる最大限の眼光で鍋島を睨むと、精神的にまいっている

鍋島にはこれがまた結構効いたようだった。

「いいから行け」

「は、はい」

鍋島は鞆を持ち、逃げ出すように原村のもとへと駆けて行いった。

煙草を吸った後で図書室へ行こう。そう思い、旧校舎の屋上へ上がると、その場には見慣れぬ女子の後ろ姿があった。

女子はこちらに背を向けたままフェンスに腕をかけていて、そんな不動の姿勢で向こうの山と海を眺望していた。確かそっちは依子の家がある方角。

近づいてようやく分かる。やはり村瀬だった。

「よく来たな」

風の強い放課後だった。煙草の火をつけるのに苦戦しながら、俺は村瀬の隣のフェンスへ前のめりに体重を預けた。ボボボ、そんな危うい音を立てながら、百円ライターは煙草の先に火を灯す。

「今泉って、やっぱり煙草吸うんだ」

村瀬には似合わないナーバスな語調だった。

「あたしも吸ってみたい」

「だめ。残りがもつたいねえ」

村瀬が瞼をぱちぱちさせて煙草の先を見つめた。盛大に煙を吸い込むと、先端は音も立てずに灰色と化し、屋上のはるか下へと降下していく。降下していく途中、乱暴な横風にぶん殴られて灰は無残にも空中分解して果てた。

ふと、唇からフィルターの感触が失せた。

見ると、村瀬が吸いかけの煙草を口に挟んでいるところだった。俺の真似をして思いつきり吸い込み、案の定、女子らしからぬ豪快さで咳き込んだ。片手で眼鏡を外し、手首で目をこすってから、「なにこれ、くそまじー」と吐き捨てる。右手の人差し指にはまだ絆創膏が巻かれていた。



携帯灰皿の口を広げて差し出すと、村瀬はそこへ半分も吸っていない煙草を突っ込んだ。ビニールの上からよく揉み込んで消す。ああ、やつぱもつたいねえ。

村瀬はフェンスの向こう側へ気怠そうに頭をぶら下げた。うっかり落ちてしまいそうな体勢。

注意喚起しようとしたところ、村瀬が先に口火を切った。

「笑わないで、つーか引かないで聞いてよ」

「ああ」

なんの話なのか、すぐに分かった。やっと話す気になったらしい。「よく考えたらあだし、由多加のこと、すっげー好きなんだろうなあ」と

すごいシンプル。直情的っていうか、意味不明なくらいに簡素。

「それは、どういう意味で？」

「もちろん友達として。だから、あたしはレズじゃねっつの」

原村の出した可能性その一、的外れではなかったってことか。女つてのはつくづく男には理解し難い生き物なんだろうな、と暫定的に思った。

「どんくらいのレベルで？」

「分かんない。分かんないくらいレベル」

別の意味で俺もちよつとよく分らない。

「……友達なのに？」

「わりーか」

髪の毛のあいだから覗く村瀬の表情はかなり傷心した様子で、そんな歪んだ心理状態を受けた俺の目と耳には変にもぞがゆい感覚が残った。本当になんと返していいのかわからない。村瀬が異常なのか、それともこれが女の友情なのか、俺には到底推し量れない一線なのだろう。いったん理解することを放棄して訊き返した。

「嫉妬、みたいなもんか」

「全然違うけど、そんな感じ」

風が止むのを見計らって二本目の煙草に火を付け、村瀬の言葉を

頭の中で反芻してみる。

全然違うけど、そんな感じ。

結局どっちだ。村瀬の中でも曖昧で複雑なんだろうな。

「あたし、マジいてーよな」

「……うん」

俺は躊躇いつつ、今のファジイ状態な村瀬みたいに頷いた。

人間の無限の可能性を前にした俺は底抜けな辟易と虚脱感を覚えて、それから二十分ほどを費やして村瀬と景色を眺めた。

そろそろ屋上を出るか、というときのこと。

「由多加とアッキー、どこに遊び行つたの」

村瀬がそんなことを訊いてきたので、俺は無駄に勘ぐってしまった。

「なんで？」

「なんとなく」

村瀬は地面に放つてあつた学生鞆を拾いながら言った。さつきから俺と目を合わせようとしない。まあ、俺も気まずいから合わせたくないけど。

教えても教えなくてもいいんだけど、もう二人が一緒に出かけたことは村瀬も知っているわけだし、ここで不自然に答えないのもどうかと思えた。

「買い物行つただけっばいよ。原村が画材買い込むからって、鍋島はその手伝い」

「ふーん」

村瀬はぞんざいに相づちをして非常扉の方へ歩き出した。

「じゃ、また明日」

背中を見せつつ手を上げる。あんまり急に帰っていくものだから、俺は「あ、ああ」みたいな締まりのない声で村瀬の背中を見送る。

結局、何を考えてんのかはつきりしないやつだった。

時刻はまもなく六時というところで、そんな時間の図書室はまさにゴーストタウンみたいな雰囲気醸し出していたんだけど、その寂しい空間でもやっぱり依子は置物のように受付に座って本を読んでいた。

毎日写真を撮っても一ミリたりとも変化しなさそうな光景だなど

思う。変化がないということは平和だっという証拠なのかな。

あくびをしながら受付の扉を開けると、奥の長机に茶色のポブカ  
ットヘアー女子が足を組んで座っていた。すぐく当たり前のように  
あくび後の涙を目元に残してドアノブを握ったまま、ポブカッ  
トの丸い頭頂ラインを凝視して固まる。

ポブカット女子、フーか、もう面倒くさいのでぶっちやけて言う  
と吉岡美野里なんだけど、吉岡はブルーの二つ折り携帯を膝あたり  
に下げ、俺を見てにつこりと微笑んだ。

「いらっしやい、純くん」

なにその気持ち悪い呼び方。鳥肌立った。なんでこの人、いち  
いち人の呼び名変えてくるんだろう。いや、どうでもいいんだけど、  
なんでここにいんの？

とりあえず扉を閉めて、穏やかな笑みをひたすら振りまいてくる吉  
岡を微妙な心境で見つめ返して、ふー、と深い息を吐いてから、俺  
は口を開いた。

「何しにきたの」

「彩音ちゃんから聞いたの。平野さんに言えば受付に入れてもらえ  
るよって」

理由になってないし。

「いやそうじゃなくて、なんか用？」

「ちょっと話したいことがあって」

悪い予感しかしない上に、すげえ聞きたくない。

俺は依子の後頭部を覗む。なんでこいつ、どいつもこいつも普通  
に入れちまうんだ。屋上と図書室受付は俺にとっての聖地だったの  
に。

未だに困惑して立ち尽くす俺に、吉岡がまた慣れ慣れしい口調で  
声をかけてくる。

「座らないの？」

急かされてる。俺はもう一度深くため息を吐き、嫌々ながらも足  
を動かした。途中で依子の背中を軽く叩く。

「依子、アド変してやるから携帯貸して」

本当はそのためにだけに図書室に来たはずなんだけど、どうしてこ  
ういうことになんのかな。

依子は鞆を開き、無言で卵形携帯を渡してくる。腹立つくらい、  
いつも通りの無表情だった。こいつ、絶対なにも考えてなさそう。  
もっと今の状況を懸念しろよ。

依子の携帯を受け取ると、携帯に変なストラップがぶら下がって  
いるのに気づく。まりもっこりだった。

「なにこの趣味悪いストラップ」

現実逃避気味に訊いてみると、依子は本へと目を戻しながら答え  
る。

「最初は気持ち悪いと思ったけど、よく見るとかわいかったから、  
つけてる」

魚っぽい着ぐるみを着た、ご当地限定らしきまりもっこり。じっ  
と眺めてみる。だめだ、どう見ても可愛くない。

「純からもらった」

「俺？　こんなんあげたっけ？」

「うん」

携帯の下でぶらぶらと揺れるまりもっこりを見つめて、それから  
俺は長机に歩み寄り、どこに座ろうかと悩んで、結局吉岡の正面の  
パイプ椅子に落ち着いた。

吉岡は本当になにが楽しいのか、自然に繕った笑みを俺に固定し  
て向け、俺はそんな吉岡を避けるように手元のまりもっこりを見下  
ろした。

あー、思い出した。たしか俺がノート忘れてきて、依子が使って  
ないキャンパスノートくれたから、そのお礼にあげたんだ。ちよっ  
とすつきり。それから顔を上げると、吉岡が笑顔で小首を傾げた。  
やっばげんなり。

「で、何の話？」

「んー、ふふ」

ふふ、じゃねえよ。

中学もこいつと一緒の学校だったけど、吉岡は昔から表情を作るのが上手かった。いつもこの作り笑いに毒気を抜かれてしまいそうだったから、毎回気分が悪い。

「その前に私、二人のために自販機でジュース買ってきたんだよね」  
吉岡は鞆からペットボトルの午後ティーを取り出す。二人のためつつつたのに、一本だけ。

一緒に飲めってこと？

なんか地味に試されてる気がする。うぜえ。

俺は午後ティーを受け取り、じつとりとした目で吉岡の顔を見つめた。吉岡は依子の方を振り返る。

「人全然いないし、平野さんもこっちに來たら？」

「嫌」

即答する依子。一応、依子も吉岡を拒絶する姿勢らしい。

俺もこいつのねちっこい計らいに苛つく。俺も依子もいちいちこんな細かいことを気にする間柄じゃないし、回し飲みぐらいならやぶさかではないんだけど、俺としては、吉岡にこの程度の小競り合いですら屈しなくなかった。

「せつかくの差し入れで悪いけど、俺、のど渴いてないんだよな。

依子にあげるわ」

「どうぞ、ご自由に」

依子の背中に向け、投げるぞ、と声をかける。すると依子が半身程度にこちらを向いたので、俺は下投げで軽く午後ティーを放った。受け取り損ねて床に落つことす依子。くそ、今ぐらい取れよ格好わりい。俺は、原村と依子とした夜のキャッチボールを思い出した。依子、あんとときもあり得ないくらいの運動音痴ぶりを露呈してたな。午後ティーを拾いなおす依子に、吉岡は一切のリアクションも見せず、そのまま俺へと視線を戻した。

「もういいかな、純くん」

「いいけどさ、その前にその呼び方やめてくんない？　なんか気味

悪いんだけど」

俺の言葉に、吉岡は馬鹿にするように小さく吹き出す。

「うぶだよな今泉って。こういうの、いちいち意識するんだもん」  
何も言えなかった。マジで何しにきたのこいつ。吉岡ってこんな腹立つやつだったっけ。

しかし、これでキれるのも吉岡にまた馬鹿にされるだけというか、さらに恥を重ねるだけなので、俺は慎重に声のトーンを落とす。

「早く話してくんない」

「もう、そんなに怒らないでよ」

「怒ってねえから。俺は常にこういう顔なの」

そういえばそうだね、とまた笑われた。もう話聞くの止めようかな、と半ギレ気味に思う。

「ちよつとだけ、今泉に確認したいことがあって」

内容に大体の予想がついた。

「沙樹のことなんだけど」

やっぱり。吉岡の考えてることや目標って意外と単純なんだよな。

この辺は村瀬より分かりやすくいい。

「早川がなに？」

「単刀直入に聞くけど、今泉って沙樹のことどう思ってるの？」

深くパイプ椅子に座りなおし、腕を組んでから吉岡の顔を見返す。どんな気持ちで吉岡がこの言葉を投げかけてくるのか、彼女の表情からは読めなかった。

それに、いつか吉岡から聞かれるのではないかと身構えていた質問だった。そろそろ、俺も無闇に早川を避けるばかりでは、やり過ぎせないと思っていたし。これもいい機会なのかもしれない。

「別に。何とも思っていない。中学からの同級生で、今もただのクラスメイト。それだけ」

「中二の頃に沙樹から告られたと思うけど、本当になんとも思っていないの？」

段飛ばしに突っ込んだところまで問いかけてくる。

本当になんとも思っていない、そうあっさり答えてしまうのは簡単だけど、この話にも吉岡の企みがあるのではないかと勘を働かせた。そもそも吉岡は、早川を友達という枠組み以上に溺愛していそうだから、吉岡が何も考えていないはずがなさそうだ。

六月の終わり頃、この場所で、俺は早川に向けてはつきり、『お前が嫌いだ』と言った。中学時代に早川を振ったときは、ここまで酷い突き放し方じゃなかった。そのときは、今は部活に集中したいから、そんな在り来たりでその場しのぎの理由で誤魔化したのだから。

吉岡は心中を悟られたくないのか、顔色を明るくしたまま俺の返答を待っていた。

吉岡は、あの図書室の一件をどこまで知っているのだろう。あのとときの依子の奇行なら周知の事実だけど、俺の発言を知っているのは依子と原村と早川だけ、と今までは楽観的に捉えていた。早川と吉岡くらいの仲ならば、早川も一部始終を彼女に話しているのかもしれない。でなければ、吉岡がステップも踏まずに事の真意を確かめようとは思わないと思う。

とにかく、俺も正直に答えよう。

やっと腹を決めたところで、吉岡が質問を重ねる。

「沙樹のこと嫌いつて言ったの、マジ？」

あくまで緩められた瞼の間から覗く吉岡の目は冷淡だった。やっぱり、吉岡は件の全てを知っていたんだ。その上でここへ押し掛けてきたのだから、彼女の心境は半端なものではないはず。

軽い怖気をおさえながら、俺は答える。

「嫌いつつたのは、場の勢いで言っただけ。あんまり早川がしつこく依子との関係疑ってくるから、俺もカッとなって思わず言っちゃったんだよ」

吉岡は口を結び、探るように俺の顔を見つめた。

そんなに観察するように見なくても、俺の本音はこうなのだから仕方ない。早川に対して、俺はただ苦手ではないというだけ



で、実際そこまで激しい感情を抱いていないんだし。近くに居たり、意識して思い出さなければ、本当に今は無関心。

「そうなんだ」

納得したのか、吉岡は長机の上に置かれた携帯を手に取った。携帯を操作し始める吉岡を確認して、俺も依子の携帯を開く。

吉岡はしばらく質問をしておかなかった。この質問のためだけに来たとは思えないから、小休止ということなのだろう。

俺はアドレス変更の前に、なんとなくメール受信欄を開いて見ていた。依子の話から、嫌がらせメールが大量に送られてくるという話だった。内容を一応見ておきたい。勝手に見ても、どうせ依子のことだから気にしないだろうし。

受信欄を開くと、一面に未読のメールが表示された。やっぱり、依子はメールを開くのすら面倒くさいようだ。

送信者は不特定多数。女子数人でやったのだろう。でなければこれだけの量は送信出来ない。次々とメールを開き、流し見るように文面を追う。

「学校くんなんてばあ」「さっきの朗読全然聞こえなかったわ」「あれ、下着って白と水色しか買わないの?」「空気さん今日も存在感ないっすね」「シカトうぜえ」「明日一万持ってきてくださーい」「ていうか読んでますー?」「おーい無視すんなー」

読まなくて正解だなと思った。下らないはずなのに、地味に腹立つし。

まれに鍋島や城川からの普通のメールが届いていたが、他のメールと一緒に未読になっていた。携帯をいじるのに飽きたのか、嫌がらせのせいでうんざりしているだけなのか。

ふと、ある未読一覧に、一件の画像付きのメールがあった。送信

者は、未登録のアドレス表示のまま。躊躇いつつ、そのメールを開く。

画像には、体操服の上を脱ぎかけた依子が写っていた。しかも依子、ばつちりカメラ目線。あ、ほんとだ、白のブラ。ってそうじゃなくて。

「依子」

「なに」

受付からのんびりした声が返ってくる。吉岡が上目遣いで携帯から顔を上げた。

「ごめん、見ちゃったんだけどさ、お前盗撮されてるぞ。多分これ女子更衣室」

「知ってる」

知ってるじゃねえよ。普通にカメラの方見てるからそうなんだろうけどさ。

「撮られそうになったら止めろって言えば」

「知ってるけど、そのときは油断した」

「他にもなんか撮られた？」

「たぶんない。それ撮られたときに、その子の携帯はたいて睨んだら、もう誰も撮りにこなくなった」

何で最近の依子ってこんな血の気多いんだろう。つーか、そういう所ばつか俺に似るんだよな。

俺はメールの受信日へとスクロールした。今から五日も前に送られてきてる。なのに俺がここで初めてこれを知ったのは、多分、鍋島もこの事実を知らないからなのだろう。知っていて、鍋島が俺に伝えてくれないはずがない。恐らく、いじめる側も俺や鍋島の前では極力行動を起こさないようにしているんだ。

裏でなにが起こっているのか分からなくなってきた。依子は自分から話をするようなやつじゃないから、これからは俺から詳しく状況を聞いていくべきだ。

選択削除で嫌がらせメールの部分のみを選び、全て消去してから顔を上げる。吉岡は頬杖をついて携帯の画面を眺めていた。

そろそろこつちもぶっちゃけていいだろ。

「吉岡、俺も本当のこと言ったんだから、お前も真面目に答えるよ」「ん」

「お前、依子のこといじめてんだろ」

「へえ。平野さん、いじめられてるんだ」

吉岡の目は携帯を向いたままだった。ああ、椅子蹴り倒して正座させてやりたい。

「とぼけてんじゃねえよ。お前、昼休みに城川に言ってたよな。これはいじめじゃなくて抵抗なんだって。よくそんな下らねえこじつけ思いつくよ。こつちから見りゃ、こんなの普通にいじめなんだけど」

吉岡は携帯からかすかに俺を見上げ、片まゆを下げてから怪訝に口を開く。

「そんなこと言ったっけ」

「は？」

「今泉の聞き違いじゃないかなあ。たしかに心結みゆちゃんとは喧嘩したけど、私、平野さんの話なんてした覚えないし。ていうか、盗み聞きとかありえない」

「話逸らすな。俺にはそう聞こえたんだよ」

「あつそ。なら明日からテープレコーダーでも持つてくれば？」

あ、やべ、キレそう。我慢だ我慢。

「ていうか、城川とのあれ、喧嘩だったんだな。カッターの刃投げつけるなんて、吉岡も結構過激だよなあ。おい、じゃあ喧嘩なら明日城川に謝れよ。あいつ、あれで怪我してんだから」

「うん、了解。でももう友達には戻れないかなあ。あの子、よく分からなけれど、すぐ人のこと悪者呼ばわりするんだよね。多分心結ちゃんって、ちょっと頭のおかしい子なんだよ」

依子が吉岡の背中へと視線を送っていた。表情は普段のままだけ

ど、城川を悪く言われて内心ご立腹なんだと思う。

「依子。気持ちは分かるけど、お前は黙っとけよ」

また村瀬のときみたいに殴りかからないとも限らないし。

依子はしばらく吉岡を見つめ、それからまた読書へと戻る。それを見届け、俺はまた吉岡を見る。吉岡はうつとおしそつに眉をひそめ、携帯を閉じて息を吐く。

「そんなにいじめ止めさせたいなら、いじめっこ探し、手伝ってあげようか」

なんだ、また予想外のことを言ってきた。言葉を詰まらせていると、さらに吉岡が続ける。

「いたずらメールが来るんでしょ。私、ほとんどの女子のアドレス知ってるから、調べればすぐに送信者分かんと思うけど」

吉岡は携帯を開きなおし、俺の反応を待つ。

俺はメールを読むとき、送信者アドレスに注意していた。中学のよしみで、俺は情性的に吉岡と早川のアドレスを知っている。見たところ、依子の携帯にこの二人のアドレスらしきメールは届いていなかった。

つまり彼女らは直接いじめに手を下さないということだ。吉岡たちがするのはただの煽動と誘導で、城川にしていたように、他の女子を動かすだけ動かし、自分たちはいつでも無実を装えるように構えておく。今日の昼休みは、たまたまその誘導を発見出来たに過ぎなかった。

たとえメールの送信者を知っても意味がない。

俺は黙って吉岡と視線を交わした。あれ、いつもよりまつげが長い気がする。マスカラ？

やがて、吉岡は口元に性悪そうな笑みを浮かべる。

「今泉って、万が一教師にでもなったら、超うざくなりそうだよ。五頭先生みたいな感じ。目先のことしか考えない、あつたま悪い偽善者」

「何が言いたいんだよ」

「ほら、たまにあるじゃん。いじめを乗り越えて成長しましたってやつ。すごいね、えらいねって、周りは馬鹿みたいに褒め称えるけど。あんなのさ、ヤンキーが更正して尊敬されるのと一緒にじゃん。クズが普通になったからって、なに偉ぶってんの？ 最初から真面目にやってる人の立場なくない？」

俺は何も言わず吉岡を睨めつける。

「ふるいにかける行為なんだよ、いじめって。クズはいじめくらい乗り越えなきゃ、周りと同じ環境に居てはいけないんだよって、そういう、愛情を込めた行為なの」

「なるほどね。いじめる奴らしい屁理屈理論だ」

「私は、いじめなんて暇人みたいなことはしないけどね」

吉岡は俺の言葉を柔らかく否定し、余力の有り余った笑みをたたえる。依子もここまで自然に笑えたら言うことないんだだけだな。

「今泉って、戦隊シリーズとか水戸黄門とか好きそうだな。正義のヒーローに憧れてたり」

「さあ。俺はそんなもん、意識したこともないけどな」

「勧善懲悪って言葉は便利だね」

話の切り出し方が唐突だな。微妙にかみ合っていないし。

「善意を持って行動すれば誰にも否定されない、悪意は問答無用で正せるんだもん。悪者は全否定で、もはや人間扱いすらされない。

怪人は大爆発。悪代官は打ち首獄門。やっつけるだけやっつけて、救いの手は一切差し伸べられない」

吉岡は暗い瞳で、突き刺すように俺の目をのぞき込む。

「悪意の裏にある人間らしい心も、平気で踏みじじる。ほんと、いい気なものだね」

人間らしい心。いじめる原因。早川を傷つけたこと。

頭の熱が引いていく。冷静な俺の思考に残るのは、それでも吉岡を否定する言葉ばかりだった。

「何が言いたいのか分かんないけどさ、要するに、無理に止めるな  
ってことだろ、いじめ」

「うん、そういうこと。平野さんは一度くらい、黙っていじめられた方がいい人なんだよ」

吉岡はそれつきり口を閉じ、満足そうに頬を緩めて俺を見る。

「それなら」

依子は、身体を吉岡の方へと向けた。吉岡が振り返ると、依子は真正面から彼女の目を見据える。

「いじめを肯定するのなら、もしあたしが早川さんをいじめても、あなたは何も口出ししないでね」

俺は啞然としたまま吉岡の横顔を流し見る。吉岡は、もう笑っていないかった。

「平野さんって、面白いこと言うんだね」

そのとき、図書室入り口の扉が開いた。依子と吉岡は睨み合ったままだったが、俺は視線をずらしてそちらを見る。

司書の宮下だった。彼は満面の笑みで黒いビニール袋を抱えていた。

「今泉くんっ！ 井上雄彦のリアル、最新刊まで全部持ってきたよ！」

嬉しいけど、今はちよつと笑えない。宮下は上機嫌で受付扉を開け、依子に軽く挨拶してから受付横の引き出しを開け、丁寧にリアルを並べ入れて、それから顔をあげる。宮下は間の抜けた顔で吉岡を見つめ、短髪をさらさらと掻く。

「えーと、たしか君は吉岡さん。今泉くんたちと同じ二組の、だっけ？」

吉岡は外交的な笑みでうなずく。ついさっきまで依子と睨み合っていたくせに、本当に吉岡は感情表現の制御が上手いと思う。

「政経の授業でお世話になってます。私も遊びに来ちゃいました」「うんうん、賑やかになるのはいいことです。ゆっくりしていつてね。あわよくば図書室の仕事も手伝ってください」

相変わらず何かと駄目な教師だ。そのうち、この場所が生徒のたまり場になりそうで物凄く心配。

「もつとゆつくりしていきたくところなんですけど、私、そろそろ帰って勉強しなきゃいけないので」

「そうなの？ 残念」

すると、吉岡が俺に謎のアイコンタクトをしてくる。彼女は鞆を手に持ち、何故かこちらへ歩み寄ってくるので、俺は警戒した。吉岡は俺の耳元に顔を近づける。

「左足、もう治った？」

吉岡は意味深な笑みをたたえ、鞆を肩にかけてから扉の方へと歩いていく。その際依子を一瞥するが、何事もなかったかのように明るい挨拶をして、そのまま彼女は受付を出ていった。

俺は視線を落とす。

足。左足？

俺は制服ズボンの布を掴み、裾を少し上げ、左足首を露出させた。ぼんやりとした思考のまま、自分の左足首を見つめる。

そこに刻まれていたのは、中二の頃、通り魔にバットで打たれて骨折と裂傷を起こした、その手術痕だった。うん、もう治ってる。手術から半年足らずで、とっくに全快だったんだけど。

それがどうして、今。

木曜日。

何かと慌ただしい毎日を送っている俺からすればこの日の午前は比較的平和で、朝っぱらから鍋島に寝顔写メ取られたり、その影響でクラス中からの嘲笑の的となったり、挙げ句の果てに現代文の授業中、鍋島と共にまた廊下に立たされたりと、まあ思い返せばそこに災難だったんだけど、それでも微笑ましい程度の災難だった。

昼休み。

鍋島のグループから村瀬が一時外れているため、鍋島と城川は最近、図書室で依子と昼食を食べている。

つまり鍋島らが居なくなれば、昼休みに俺の席が彼女らにぶん取られることはなくなるわけだが、そうなる俺は完全に一人ぼっちで昼食をとらなければいけない。

みんながグループを作ってわいわいしている中で一人きりご飯タイムはかなり苦痛なもので、それはいくら孤独が好きな俺だって例外ではない。

しかし、俺にも友達がいけないわけではない。旧校舎の屋上へいけば多分原村がいるはずなので、俺は屋上へ上がることにした。

靴から出した煙草を胸ポケットに入れ、弁当箱を持って席を立つ。依子の席には鍋島と城川が集まっていた。やっぱり今日も三人で図書室へ行くらしい。

俺は教室を出てのろのろ歩きだした。

俺たちの教室は西棟にあり、そこから東棟へ移り、そして東棟から旧校舎につながる。結構遠いけど、時間があるのでゆっくり歩く。

東棟の廊下を歩いていくところで、俺の背中をとんと叩くものが



あつた。

振り返る。仏頂面を構えた依子だった。依子の後ろには、奇遇と  
いった顔をした鍋島と城川もいる。

「どこへいくの」

依子の声のトーンは、依子が怒ってるときに出てくる、微妙に低  
音に落ちたものだった。

「どこって、屋上だけど。旧校舎の」

「図書室にきて」

「なんで？」

依子は何も言わず、じろつと俺を見つめた。

一応図書室も旧校舎にあるので、俺たち四人はそのまま廊下を歩  
き続けたけど、依子がどうして俺に図書室に来てほしいのか言わな  
いと、俺もそのまま屋上に行つちまうんだけど。ぶっちゃけ、この  
三人の中に混ざるより原村とのんびりする方が楽し。

依子は無言で俺を見続けた。意味が分からないし、ちょっと恐か  
った。鍋島と城川は、雑談しながら俺たちの後ろをついてくるだけ。  
「ねえ、なんでつっつってんじゃん」

「いいからきて」

いつもの無愛想だけど、やっぱり怒ってるっぽかった。なんか知  
らんが、叱られるのかもしれない。

そもそも依子は、用事がないとき以外は俺と関わろうともしない  
のだ。そのくせ用事があるときだけはこちらの行動を無益に要求し  
てくるし、その上その理由を自分から言ってくれない。かなり一方  
的で、はつきり言つてものすごく付き合いつらい。

図書室の前を通りかかるとき、俺はそのまま図書室を通り過ぎよ  
うとしたが、そうすると依子が小走りで追いかけてきて、俺の腕を  
がっしりと掴んできた。

「いっ」

単調なくせにこの口の悪さなのだから、すごい威圧的だった。為  
すすべもなく依子に引つ張られていくと、鍋島と城川が図書室入り

口の前で待っていて、鍋島の方がにやつとした。

「ほんと仲いいですよね、二人」

原村のまどろっこしい茶化し方に似てきてるな、と思った。

受付には宮下がいた。

宮下は受付につきながら、昨日持ち込んだばかりの井上雄彦のリアルを読んでいた。この司書がまともに受付をやっている様を見たことがない。

俺たち四人は受付の中に入り、奥の長机で昼食を取ることにした。そのとき、宮下が漫画から顔を上げる。

「お、相変わらず悪そうな顔してるね今泉くん。今日はここでお昼？」

「そうつす。宮下先生は今日もアンニュイな感じっすね」

えへへ、みたいな感じで宮下は頭をかく。少年チツクな笑顔はとて二十六歳のものとは思えない。

「今泉くんや原村くんは、いつも可愛い女の子たちに囲まれてますよね。どちらもそんなにモテそうな感じはしないけど、何か秘訣とかあるの？」

「すごく失礼なことを言われているような。」

宮下は別に顔が悪いわけではないと思う。むしろ整ってるっていうか、性格さえ治したら結構モテそうな気がする。

「宮下先生、彼女でも欲しいの？」

「先月までいたんだけど、母ちゃんに彼女紹介したら、この女が嫁いだら宮下家は終わりだって言われた。だから別れました」

「なるほど。じゃあまずそのマザコンを治した方がいいんじゃないすか」

「何言ってるんですか今泉くん。男はみんなマザコンだよ」

「すげえ無茶苦茶な偏見振りかざしてるよこの人。」

鍋島と城川が並んで長机に座り、それと対面するように依子と俺

が座る。

俺の弁当は、またしても親父が作ったカツサンドと卵サンドだった。最近母ちゃんも全く料理をしない。もし作る気があったとしても、親父の方が格段に作る気まんまん。しかし、やる気はあるくせに何故いつもサンドイッチなのだろう。流石に飽きてきたんだけど。もしかしてこういう嫌がらせ？

一言も喋らずにサンドイッチを食べる。鍋島と城川の会話に依子は一切混ざろうとせず、しきりに俺の横顔を見つめて弁当を食っていた。

多分睨んでいるつもりなのだろうが、表情の変化に乏しいというのが依子の性分なので、本当にそれが不気味で仕方なかった。

俺は横目に依子の弁当箱を見る。

十五穀米と卵焼きが一つの箱に。里芋や人参などの煮物がいくつか、あとはメインの鮭の西京漬けの入った箱が一つ。和風一色で豪華。俺のとはえらい違いだ。

「美味そうだな。これ、依子で作ったの？」  
フレッシュ満天な笑顔で尋ねる。

依子はうなずき、また無感情な瞳で俺を射抜く。俺は無言の笑顔でその視線と対抗する。鍋島と城川は二人ですごい盛り上がりつつ、やっぱり俺は居心地が悪かった。

「なんか食ってみていい？俺、依子の料理食ったことないんだけど」

依子は何も言わなかった。

「駄目？いやだって美味そうじゃん。ほら、この煮物とかさ」  
やっぱり何も返してくれない。今の俺、普段と違ってかなり感じのいい話し方してんだけど。

ちよつと頭にきたので、俺は勝手に依子の弁当箱の煮っ転がしを素手でつまみ、口に放り込んだ。

「うめえなおい。なあ依子、うめえよお前の料理。こりゃ将来いい嫁になるな」

俺が依子にお世辞言ってる。いや実際美味いけど、でも依子のと褒めてる。すげえいい人みたいじゃん俺。

でもやっぱり依子は何も言わないし、喜ばないし、それどころか頬の筋肉一つ動かさずに俺を見つめ返すばかりだった。

「なにさつきからガンくれてんだてめえ」

軽い口調で、あくまでふざける感じで挑発してみた。

しかし、これでも反応なし。依子は西京漬けを二、三口食べ、穀米を咀嚼し、煮物を食べ尽くし、また俺を見つめた。

この熱すぎる視線は一体なんなのだろう。何の意味があるんだろう。羨望でもない、軽蔑でもない、嫉妬でもない、求愛でもない、とすると、やっぱり俺に怒りを伝えたいのだと思う。さつきの様子から、多分それしかないし。

「ごめん。俺、なんか悪いことしたっけ」

「新しいメールアドレス、昔の友達にも教えた」

依子は、もともと小さい声をさらに小さくした。それだけ言って、俺への視線ロックを解除し、それからじっと弁当箱へ目を向けて食事をする。

俺はそんな依子に声をかけることも出来ずに、黙ってサンドイッチを頬張った。

昨日の放課後、吉岡が受付を出ていったあと、俺は依子の携帯のアドレス変更をした。その際に、依子の電話帳に登録されているアドレス全部に、変更のお知らせメールまで送ってあげただけで、依子は多分、それが気に食わなかったらしい。

でも、この様子からすると、依子もあんまり強く俺を責め立てられないんだと思う。

俺がアドレス変更をしてくれたからってのはもちろん、恐らく、そのついでに依子は中学のときの友達と縁を切るつもりだったのかもしれない。それについて感情的に責めるのが恥ずかしいからなのか、それとも別の動機からなのか、俺にはそこまで分からないけど。いつか母ちゃんが、中学時代の依子の話をしていた。

生徒会長だったとか、成績は常にトップだったとか、友達に囲まれていて、男子にもモテていた、とかなんとか。

この噂にも母ちゃんの誇張が混ざっていそうだけど、小学生時代の依子を考えればそれなりに信じることは出来る。でも、今の依子では及びもつかない噂話。

「お前、中学のときなんかあったの」

空中へと投げるように、俺はぼつりと問いかける。

依子は答えなかった。黙って弁当を食べ続けた。

何もないやつなんていない。俺だって、早川を振ったり、足を怪我したり、それでぐれて煙草を吸い出したり、そのくせ受験だけは無駄に頑張ったりで、色々あった。

俺らの正面で楽しそうにお喋りしてる鍋島や城川だって、俺同様に、多分それ以上に辛い目に合っているんだから。

人並み以上に活発だった依子が、どうしてここまでふさぎ込むようになったのか。

依子は穀米を飲み込み、小さく口を開く。

「友達と喧嘩した。嫉妬されていたみたいで、あたしもかっとなつた」

依子の友達。

昔、鍋島さんみたいな友達がいたの。几帳面で、明るくて、

根っからのお人好しみみたいな子。話し方まで似てるから、余計被る。

鍋島を盗み見る。携帯を広げ、城川にそれを見せる鍋島の表情は明るかった。

鍋島たちに聞こえないような声で、依子は続ける。

「あたしは、あなたなんか何の取り柄もないくせに、って言った。そうしたら、あたしの悪口いっぱい言ってきて、もう絶交した」

依子の友達。

あたしのちょっとした発言でね、あつという間に疎遠になつた。

俺は耳を澄まし、依子の横顔をじつと見つめる。

「その子は、そのあとすぐにいじめを受けた。実はその子、すごく弱かった」

俺は黙って聞いた。

「その子は自殺した。知らないビルの屋上から飛び降りて、簡単に死んだ」

依子は瞼すら動かさない。

「本当に弱かったから、いじめられて、簡単に死んだ」

俺の手は無意識的に動き、依子の頭の上に乗る。枝毛すらない依子の髪の毛が手についた。

「辛かったな」

依子はさらに視線を下げる。

これは疎遠なのか。二度とやりなおせない疎遠。謝ることだって許されない死別。

依子は責任を感じていて、きっとその友達が死んだのが自分のせいだと思っていて、だから昔の知人との縁を切ろうとしていたのだろうか。罪悪感から、もう一切関わらないと決めたのか。

だけど、髪の間から覗く依子の目は、ひどく冷えていた。

どうしてこんなときくらい、依子は泣かないのだろうか。

鍋島と城川へと視線を向ける。楽しそうに笑っていて、依子とは別の世界にでもいるような気がした。

依子が、頭に乗せていた俺の手の甲を握る。依子は俺の手を握り、肩の辺りまで下げてから、冷え切った目でこちらを見据えた。

握られた俺の手が、何故か震える。

「あたしがいじめた」

矮小で、歪曲していて、それは俺の耳に届く。依子のささやき。

「本当に弱かった。あたしには味方がいっぱいいた。いじめるのはすごく楽しくて、だからいじめた。そしたらあの子は死んだ。知らないビルから落ちて死んだ。周りは笑っていたけれど、あたしは」

クズはいじめくらい乗り越えなきゃ、周りと同じ環境に居てはいけないんだよ。

平野さんは一度くらい、黙っていじめられた方がいい人なんだよ。「あたしは笑っていたのか、泣いていたのか、よく覚えていない」もしあたしが早川さんをいじめても、あなたは何も口出ししないでね。

「お前」

「どうしたんですか？ 二人とも、仲良く手つないじゃって」唾を飲み込み、開ききった目を動かす。

鍋島は、やっぱり笑っていた。

あたしがいじめた。

依子は俺の手を離し、弁当を食べ終えたあと、昼休みが終わるまで本を読んだ。俺は頭の中で依子の言葉を整理するばかりで、そのまま昼休みの終わりを迎える。

いじめられた方がいい人間が本当にいるとしたら。

人を殺しすぎた人間が死刑を受けるように、人を死に追いやるまでいじめた人間も、同じようにいじめられるべきなのか。

だとしたら、道徳観念って一体何のためにあるんだろう。

掃除の時間。

「由多加ちゃんね、もう村瀬ちゃんと仲なおりしたいんだって」

城川が無邪気な笑みをして言った。城川は空き缶やペットボトルのゴミ袋を二つ両手に抱えていて、俺がそれを手伝おうということ、空き缶の袋を手渡されたときのことだった。

「昨日、わたしのところね、村瀬ちゃんから電話があったんだよ。由多加、あたしのことどう思ってるの、って。わたしはね、由多加ちゃん、もう村瀬ちゃんのこと怒ってないと思うよ、って言ってあげたんだ」

城川の笑顔を見ていらなくて、俺は前方へと視線を逸らした。

「由多加ちゃんにそのこと教えてあげたら、由多加ちゃんもね、私も村瀬さんとやりなおしたい、って言ったの。だからね、放課後、わたしたち三人でカラオケに行くんだ」

「よかったな」

図書室で起こったことを城川や鍋島がどう解釈しているのかが気になるけれど、城川があまりにも楽しそうに語るものだから、俺は



それくらいのこと返事しか出来なかった。

安直すぎる仲直りに不安を覚える。

ゴミ置き場に到着すると、そこにいた鍋島のもとへ城川が駆け寄り、なにかひそひそと話し始めた。俺はかまわずプランターの水やりを始めたが、やがて鍋島がやってきてこう告げた。

「今泉さんと平野さんも、放課後私たちと遊びませんか？」

「なんで？ 三人で遊んでくりやいいじゃん。仲良し三姉妹の復活パーティーでもやれよ」

「これからは今泉さんと平野さんも入れて、五人兄弟を作るんです」  
そう言って鍋島は微笑む。俺の目には今の鍋島はどこか倒錯したように見えた。浮かれているようにも、正常な思考を欠いているようにも見える。昨日の放課後に原村と出掛けて以来、悩んでいるような素振りをしていても、実は浮かれているのではないかと思っただ。原村がいつもの飄々とした態度で、普段通りに彼女に接したせいなのかもしれない。

原村を入れて六人兄弟にはしないの、その言葉を言うか言わないか、それを考えあぐねているうちに掃除の時間は終わった。

そして放課後。

結局、依子はカラオケは嫌いだと三姉妹からの誘いを断った。そもそも依子は図書室の仕事があるため、初めから無理な話だった。依子が行かないのなら確実に俺の居場所はなくなるわけで、俺も依子にならって「カラオケとかマジ苦手だから遠慮しとくわ」とやんわりお断りした。

鍋島と城川は残念そうな顔をしたが、すぐに村瀬の席へと歩み寄った。

村瀬は早川と談笑していたが、鍋島たちが歩み寄ると、早川に短く別れを告げて彼女らを迎えた。村瀬は屈託のない笑みで鍋島に抱きつく。懐かしい光景だった。

「なんだかんだで、やっぱり抱き心地は由多加が一番だなー」

どうやって三人がこの関係を取り戻したのか、俺は詳しく知らない。もう俺が首を突っ込むことではないのだろう、そう思ったけど、だからなのか、俺にはその三人の様が不気味で仕方なかった。

教室を出ていく三人を、依子は席に座りながら見ていた。見届けて彼女は席を立つ。俺もそれとほぼ同時に席を立ち、依子と並んで廊下を歩いた。

今日の昼休みから、俺たちの間に一切会話はなかった。

図書室には宮下がいたが、俺と依子が入ってくると、

「おっ、来たね。じゃ、あとは受付頼みますよ」

などとめかして図書室を一目散に出て行った。声を掛ける隙すらないほどに俊敏な動作だった。あそこまで堂々とサボる意志を見せつけてきたのは、恐らく今回が初めてじゃないかと思う。明日五頭にチクっておこう。

依子は受付に座り、現代文で早めに渡された夏休みの宿題をカウンターの上に広げた。長期休暇も始まっていないうちから片付けるつもりらしい。勉強に関してはとことんせつかちなやつだ。

俺は引き出しからリアル五巻から八巻を手に取り、後ろの古書棚際で乱雑に放置されたパイプ椅子に座る。

しばらく依子の後ろ姿を眺めながら、鍋島たちのことをぼんやりと考えた。

うまくやれているか、また喧嘩などしていないか、憂いを頭の中で並べる。お互い、あれだけ及び腰で距離を取っていたくせに、唐突に和解して、しかも何の気後れもなく元通りの関係を見せてくるのだから、俺はなんだか釈然としなかった。

そこまで考えて頭を振る。

俺は一体なにを心配しているのだろう。三人の仲を知った気になっただけなのかもしれない。きっと俺は、あいつらの友情を甘

く見ているんだ。

依子の髪の間からは形のいい耳がのぞいていて、それをずっと見つめていたが、その前に形のいい耳ってなんだろう。どうでもいいことまで考え始める始末だった。

耳たぶは小振りながらも厚みがあり、そこから伸びる耳の輪郭はきれいな曲線を描いている。そこまではいい。どうして内側の耳郭って、こう、ぐねっとしていて、眺めれば眺めるほどに奇妙な構造をしているのだろうか。もっとシンプルなデザインにはならなかったのかな。

だんだん、自分が耳フェチの変態みたいになりそうで恐かったので、そろそろ漫画を読もうとしたところ、ふいに耳が上向きに傾いた。依子が顔を上げたのだ。

依子の視線の先には、早川沙樹の姿があった。俺のぼやけた脳みそも覚醒する。

早川はカウンターに身を乗り出し、受付内部を覗き見るようにしていた。

「お兄ちゃんはどこ？」

俺に向けた問いなのか、依子に向けた問いなのか、恐らく俺たち二人に向けてだろうと思う。

早川の兄、つまり原村のことだ。俺や依子の前だというのに、早川は全く臆することなく、むしろいらだったように問いたです。

「彩音から聞いたの。私のお兄ちゃん、たまに図書室にいるらしいって」

吉岡のときといい、村瀬はマジでよく喋るやつだ。やつには今度苦情を入れておこう。

突然やってきて何事かと思えば、今まで俺がほとんど触れてこなかったことだった。

原村と早川が生き別れの兄妹だと知ったのは、いつ頃のことだっただろう。

たしか、この場で最初の図書室事件があって、しばらくしてから

だ。屋上で原村からそれを打ち明けられたときは、こいつも複雑な事情があるんだな、程度にしか思っていなかった。

一度だけ、原村が早川をわざと避けるように振る舞っていたのを見たことがある。

吉岡と早川の女子更衣室での密談を盗み聞きした、その直後だ。

二人が顔を突き合わせるのは俺も初めて見たが、原村は、早川を拒絶していたように思う。

「だんまりしてないで、早く教えてよっ」

「待て、落ち着けよ早川」

「今泉、あんた、お兄ちゃんと友達になったそうよね。お兄ちゃんが今どこにいるのか、今泉なら分かるんじゃないの？」

早川の口調は、俺たちが今まで敬遠しあっていたことが嘘のように切迫していた。

「最近、お兄ちゃんの携帯に全然つながらないのよ。校内でも全く見かけないし。ここなら居ると思って来たのに……」

早川は下を向き、諦念の息を吐く。

原村の携帯につながらないのは、俺がiPhoneを屋上から投げ壊したからだけど、早川は今までそれすら知らなかったらしい。というか俺の方は、この二人が携帯で何かしらのやりとりをしていたことだって知らなかったんだけど。だんだん混乱してきた。

まず悩むのは、ここで俺が原村の居場所を教えていいものかどうか、ということだった。原村は俺たち同様すぐに帰宅するようないつじやないし、多分今は旧校舎の屋上にいる可能性が高い。

何故原村が『神隠し』なんてふざけたあだ名で呼ばれるまで、生徒の前からひたむきに姿を隠そうとしているのか、俺はようやく理解した。

昼休みや放課後などの生徒たちが広く交流を持つ時間に、どうして原村は図書室受付や旧校舎屋上などという目立たない場所に居座るのか。つまり、妹である早川を避けるためではないのか。

「それとも、私には会わせるなって、お兄ちゃんに口止めされてる

の？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

俺は二人の過去を知らない。原村は隠そうとするだろうし、俺も聞き出すのは控えていた。結局は他人の内輪事情だから、という解釈で片づけて。

「ねえ、今泉」

顔を上げる早川の目には薄く涙がたまっていた。

依子が横目に俺を流し見る。依子が俺に何を伝えようとしているのかは分からない。

沈黙し、しばし俺は葛藤する。

兄妹というワードに、弟の顔がちらついた。毎日顔を合わせるのが当たり前で、いくら喧嘩したって、腐れ縁でつながり続けている。それが俺にとつての兄弟だった。依子だって同じようなものだ。友達と違って、大した気遣いや仲直りもなく、いつの間にか元に戻っているような、そんな奇妙な結びつきが血縁関係には存在する。

兄が故意に妹を遠ざけるなんて、何か違うような気がする。過去を語らないこと、身を隠すこと、目を背けること。どういう理由からなのかは知らないけど、原村は妹という存在から逃げようとしているだけじゃないのか。

「旧校舎の屋上。多分、原村はそこに居る」

瞬間的な、安易な判断のまま俺は答える。

「ありがとう」

早川は頬を紅潮させてうなづく。彼女が図書室を出て行くと、依子はシャーペンを持ち、カウンター上の宿題へと目を落とした。肩から脱力するような感覚がして、開きかけた漫画を閉じる。

「なあ、依子」

「なに」

「俺、軽率だったかな」

依子は答えずに、右手に持ったシャーペンの動きを止める。静止するその右手をしばらく見つめる。

「心配なら、見にいけば」

依子らしくない一般論的な返答だった。

彼女の言う通りにするのなら、俺は今すぐにでも早川を追いかけるべきなんだけど、何故だかそんな気にはなれなかった。半分、これでよかったのかもしれない、と思っっているのだろう。

動き出すシャーペンの先を、三十分、四十分ほどじっくり眺めてから、俺はパイプ椅子を立つ。

「ニコチン切れ。煙草吸ってくる」

依子がかすかに頷く。

拭いきれない不安を胸に抱きながら、俺は図書室を出た。

屋上へと続く階段を上がっていく。

薄暗い階段の先、質素な扉の一枚向こうで、訳あり兄妹の昼ドラ展開が為されているのかと思うと、部外者の俺が我がもの顔で仲裁に入るのはお門違いじゃないか、とふと思った。

二人が喧嘩でもおっぴぼめていようものなら、俺は止めてしまうのかもしれない。そして、主に原村を責めるんだ。

てめえの妹突き放してんじゃねえぞ、って。殴っちまうかもしれない。

俺、何様？ フィクションの見すぎだったの。青春はスクリーンの中だけでやれよ。

それでも、やっぱり原村は卑怯だと思う。自分の妹をよそよしくフルネームで指すのも癪にさわる。気取ってるし、格好つけてるし、いつも達観ぶってる態度だつて鼻につく。

なんだか複雑になってきたぞ。

こんな感情を原村に抱くのは今日が初めてだ。図書室に押し掛けてきた早川の顔を見たら、何故か腹が立ってきたんだ。正直、早川の代わりに一発くらいいっちゃってもいいんじゃないかな、とも思っただし。

しかしこういった激情を抱えるのは、俺にとっちゃ、原村と早川のことなど間違いないく他人事なわけで、変な話、さつき例えたようなスクリーンの向こう側の話だからだ。劇中の極悪キャラに腹が立つように、こんな悪党が俺のそのそばに居たら絶対ぶん殴ってるのになあ、みたいいな。

漫画の主人公なんかで、初対面の悪者にいきなり正拳かまして、自分の人生論押しつけて、それで悪者の更正まで促そうとするやつがいる。少年誌でたまに見かける。

今の俺はまさにそういう熱血主人公的な状態で、多分、このまま

屋上に入ったら自分本位に暴れてしまふのだろう。頭ごなしに否定を並べて、即物的な解決を求めてしまふんだ。

階段の頂上まであと三段というところで、足を止める。

扉の向こうから微かに話し声が聞こえる。よかった、とりあえずあの兄妹はまだいるらしい。

壁に背を預ける。正面の壁に、相合い傘の落書きがあった。落書きというか、彫刻刀かなにかで彫られているようだった。

グレーな壁面の上にぼっかりと浮かぶ相合い傘。そこに彫られた二つの名前は、残念ながら俺には読むことが出来なかった。ここ薄暗いし、そもそも近づいてまで確認しようとは思わない。相合い傘の下に『フォーリンラブ』の文字。見てるこっちが恥ずかしい。

いかん、話を戻そう。

じゃあ、俺はあの二人のために何が出来るだろうと考えてみる。

まずは知ることだ。

俺は原村の過去を知らない。人は過去があつて初めて『人間らしい』と言えるんだと思う。周りに流されるままにいたら生きてきましたってやつも、一流企業に入りたいたいから勉強しかしてこなかったってやつも、そういう過去を歩んできたって分かれば、こいつもそこそこに生きてきたんだなと思える。

今のところ、あいつとは上っ面だけの付き合いしかないし、原村という人物に奥行きがない。愛着を持つという方が無理だ。紙の上に描いた人物画だけ見せて、「こいつのこと愛してやってください」というようなもんだし。

次に早川沙樹。

早川を知ったのは中一のときで、中学で初めて出来た女友達も早川だった。今は友達とすら呼べないだろうけど。

俺は小学校のときからサッカー一筋だったから、中学もサッカー部に入った。早川は、何部だったかな。確か吹奏楽やってたような気がする。で、それ兼サッカー部のマネージャー。俺にとってはマネージャーってイメージのが強かった。



まあ、中二で俺に振られてから、マネージャー辞めちゃったけど。無情にも。

それで、どうして俺は高校に入るまで、早川に兄がいたことを知らなかったんだろう。隠されていたか、言いたくなかったのか、それとは逆に、言う必要がなかったからなのか。

そういえば、早川は片親らしい。母親と二人暮らしだとか。最初にそれを聞いたときは深く気にも止めなかったけど、この後に及ぶと、きな臭い匂いしかしてこない。

家庭の事情って、子供はほとんど干渉出来ないよな。そのくせ、傷やわだかまりだけは子供にも飛び火してしまう。

延々と原村アンド早川兄妹の考察をしていると、唐突に屋上扉が開いた。

出てきたのは早川で、彼女はしゃくり上げて泣いていた。前髪が汗で額に張り付いて、それが更に悲壮感を露わにしている、見ているだけで痛々しかった。

早川はこちらに目もくれず、ドアノブをぱつと離して階段を駆け降りていく。階段を踏む度にびよんびよんと跳ねるポニーテールは、早川自身の感情の動きを現しているように見えた。

俺は一言も声を上げずにそれを見守る。ここに俺は存在していないよ、という感じで。

静寂が訪れ、五分たっぷりそれを堪能してから、俺は屋上の扉を開けた。

いつにも増して濃い澄色の夕日だった。目が痛い。

原村はフェンス際に立って景色を見下ろしていて、片手をポケットに突っ込んで夕日を一身に浴びていた。

感傷に浸るオレンジきのこと。

俺は煙草に火をつけてから原村の隣に並び、彼の横顔を眺めた。

原村はヘッドフォンで音楽を聞いていた。漏れる音から察するにオーケストラ。本気で浸っていやがる。

そんな原村の立ち姿を見ると、煙草をくわえていたらもっとな

なるのにな、と思った。妹を泣かせる罪な男、原村昭文。

だから俺はもう一度煙草の箱を取り出し、一本抜いてから、そつと原村の口に挟んでみた。それでも微動だにしない。そのまま火をつけてみる。

原村は、すー、という呼吸音を立てて煙を吸った。いったん停止し、それから紫煙を吹き出す。村瀬のようにせき込んだりはしない。

「原村、煙草吸ったことあんの」

「一年のとき、ちょっとね。前年度の卒業生で、この屋上に通う先輩が居たって、いつか話したよね。その先輩に看過されて稀に」

ヘッドフォンをしたまま原村は言う。いつも思うけど、こいつって音楽聞きながら平気で会話続行するよな。

「もう吸うつもりはなかつたんだけど、これは油断した」

原村は左手に煙草を持ち、また煙を吐く。様になりそうだと期待していたのに、原村の喫煙姿はまるで似合っていないくて、お化け屋敷で蒸気を吹く妖怪の造りものみたいで、逆に面白かった。

原村は二度しか吸っていない煙草をもみ消す。

自分の、左手の手首で。

じゅう、という音と、かすかに漂う肉の焦げる匂い。一片の迷いすらない、見事なセルフ根性焼きだった。開いた口がふさがらないとはこのことか。

「あつ、ちいー……」

「お前の手首つて、灰皿だったの？」

「ひひっ、うん。今日だけね」

でもさすがに右手は無理だった、と顔面汗だけの原村。頬がひくひくしていた。

頭がいつてしまったのではないかと危惧したが、どうやら熱さは感じていられない。利き手もちゃっかり守ってるし。

早川泣いてたな、とやんわり尋ねようとしていた俺だったが、なんとなくだけど、それを訊けば俺の煙草の消化先まで原村の人体灰皿行きになってしまいそうな気がした。

「だけど、俺は口を開く。」

「早川、泣いてたな」

原村が根性焼き程度でうやむやにするつもりなら、それこそ俺は食い下がるわけにはいかない。原村と友達でいたいから、原村を知りたいから、だからあえて訊く。

「沙樹を泣かしたことで、怒ってる？」

もうフルネームじゃなかった。

「別に。あいつのことで、俺が怒る理由はないし」

「だろうね」

原村はヘッドフォンを外して首にかけ、左手をふるふる振りながら笑う。指まで震えていた。

「でも、俺にも怒る理由が欲しいなあ、なんて思ったり」

「僕のこと、あとは、僕と沙樹のことを知りたい、ってことだね」

「そゆこと」

そうだな、と震え続ける左手で無理に頬を撫で、原村は空をあおぐ。

「知りたいんなら、まずは僕の絵を買うことだ」

なんか前にも同じようなこと言ってたな、こいつ。

「いくらだっけ、お前の絵」

「今泉だけの特別価格、一枚五万円だ」

「やっぱぼったくりだわ、それ。教える気ねえんだもんよ」

言って、フィルターを唇で隙間なく挟み、肺活量の限界まで煙を吸い込み、吐き出す。

うまくもなんともなかった。

多量に排出された煙の先を追う。風に流され、それは原村の頬に触るが、彼は表情を崩さない。

「今泉、こんな僕をどう思う」

「最悪。もう友達じゃねえ」

「そうかい」

原村は左手を差し出す。朱色に丸く剥がれた消化痕。自己嫌悪の

証。

煙草の先を、そのすぐ隣に突き立てる。原村は眉間にしわを寄せ、口元に浮かべた笑みすらも絶やした。どれだけ熱いか、俺には分かるはずもない。俺の腕も焼け、と言っても、原村は絶対にしてくれないのだから。

たちまち小さくなっていく煙が、じんわりと空気に溶けていく。手首に残る二つの痕を見つめ、ぐっと奥歯を噛む。

原村にとって俺はそれまでの存在であって、苦しみを共有する価値すらない男だったということだ。それを望んでいた俺の気持ちは脆くも裏切られた。

友達に振られるなんてこと、世の中にはあるんだな。

「絶交だな」

「だね」

「あとで病院いけよ」

「そうする」

悔しくて悔しくて泣けてくるんだけど、止めておいた。男に振られて泣くとか超だせえし。

原村は息を乱し、さきほど以上に脂汗をにじませるが、無理矢理に笑みを作る。

「また今泉と友達になれるよう、頑張るよ」

「ああ」

原村は、あちいあちい、と浮かした左手を揺らして、貯水タンクの側に歩み寄り、コンクリートに置かれたスケッチブックと画材を脇に抱える。俺は唾を飲み込み、原村に声を掛ける。

「俺が早川を二回も振ったこと、お前は怒ってねえのかよ」

本当は絶交なんかしたくないんだよ、分かれ馬鹿、とまでは恥ずかしいから口にしないけど。

怒ってるつつつて、そんで思いつきり殴るなり、根性焼きするなりすればいい。別に俺はDMでもなんでもないが、今は原村と同じ痛みを味わっておきたいと思った。それこそ、自分本位な考えなん

だけど。

原村はへんてこな照れ笑いをする。

「実はちよこつとね。でも、今泉は悪くないって分かってるし、そのことは気にしなくていいよ」

嘘か本音かは分からないが、彼が言葉にした以上、こちらも潔く受け取るべきだ。俺は黙ってうなづく。

「あばよ」

無駄に格好つけて、原村は屋上をあとにした。

図書室では、もう依子が閉室の準備を始めていた。

ぼーっとそれを眺める。なんか、原村と縁切った実感が全然なかった。明日の昼休みは普通に屋上に煙草吸いに行っても大丈夫なのかな、やっぱり気まずいかな、ってどうでもいい心配をした。

「手伝って」

依子から催促され、俺はゆるゆるとした足取りで室内の窓という窓を閉めていく。

その後、図書室の外で依子を待ちながら、何の気なしに携帯を開く。着信が一件入っていた。しかも登録されてない番号。後ろでドアの開く音がしたので振り返ると、依子が入り口の鍵を締めているところだった。

「依子、この番号知ってる？」

あんまり期待しないで依子にその番号を見せる。依子は画面を見つめ、静かに首を振った。だろうな、電話番号なんて教えてもらっても覚えることなんて滅多にないし、ましてや依子のことだし。

どうせ間違い電話だろうな、そう思って俺は依子と一緒に廊下を歩いた。

廊下の途中で、今度は依子の携帯がバイブレーションを震わせる。靴の中だ。でも依子は携帯を取り出そうともしないで、普通に前を向いたままスタスタ歩いている。

「このバイブ音、依子の携帯じゃね」

「うん」

おっさんのうなり声みたいな振動音は靴の中で継続中。ずっと鳴り続けているから多分メールじゃなくて電話なのだろうが、依子はやっぱり携帯を取らない。

「いや出るよ。それ電話だろ」

「面倒くさい」

「そういうの友達なくすから、マジで」

すれ違う教師に軽い会釈をしながら俺は言う。依子はやっと鞆を開いて、早く出やがれって叫んでる携帯を左手に取った。

開いたはいいものの、依子はディスプレイをじっと見つめたままで、信じがたいことに彼女は通話ボタンがどれなのかすら知らないのか、ていうか忘れたのか、開きっぱなしの携帯を俺の胸に押しつけてきた。

俺の手に携帯が渡った瞬間、着信が途切れた。

「依子、通話ボタンってこれだから。つか俺、この前教えたよね」  
そっぽを向かれた。本気で携帯嫌いになったらしい。ついでに俺にも冷たい。

着信履歴を見ると、城川からの着信が三件入っていた。見ると、俺の携帯に来たものと同じ番号だった。

ちょうど玄関に到着する。肩と頬で依子の携帯を挟んで、上履きを靴箱に入れながら、城川の携帯にかけなおす。

「依ちゃん？」

城川はおよそ二秒くらいで出た。しかも何故か涙声。

「いや、俺」

「今泉くん？」

「ああ。依子、今携帯アレルギー発症してるから」

依子が革靴を履き終え、俺を置いて歩き出そうとするので、慌ててその肩を掴んで引き止める。

「依ちゃんと一緒なの？」

「うん。俺の目の前でむすつとしてる」

携帯越しに、鼻をすする音、ふーっと息を吐く音が聞こえた。どう考えてもこれ、泣いてんだらうな。

依子が、早く帰ろう、という顔で見えてくるので、俺も、ちょっと待て、と目だけで合図を返した。

「あのね、来てほしいの」

「なんかあったの？」

「村瀬ちゃんがね、あのね、えとね」

「やっぱ村瀬か。」

「分かった、今から依子とそっち行くから。つか、どこいんの？」  
受音口から微かにボサノヴァ風のBGMが聞こえる。どこかの店内だろうとは思うけど、城川は半泣き状態で何言ってるか分かんなかった。

「一原駅前の、ドトール」

「やっとまともに言葉を発した。一原駅。最寄り駅から二つ隣だ。多分、自転車より電車乗った方が早い。」

「すぐ行く」

「通話を切った。急いで靴履いて、依子を追い越して玄関を出る。」

「依子、一原駅前のドトールだって。俺らも行くぞ」

「どうして」

「知るか。城川が呼んでんだよ」

「城川の名前が出ると、依子は若干足を早めた。」

駅隣接の駐輪場に自転車を止めて、慣れない券売機の前に依子と少しおたおたしながらも、何とか切符を買って改札を通る。

ホームで電車を待つ間、依子は電光掲示板で時刻を確認したり、鞆から携帯を出して着信を気にしたり、それから携帯をポケットにしまつて、やっぱり出して鞆にしまいなおして、そんでまた電光掲示板を見上げたかと思うと、今度は線路の先を遠望したりなどして、あり得ないくらいの拳動不審ぶりを披露してくれた。

「純、電車こない」

「腕時計を確認する。午後七時三十二分。」

「あと三分で来るから落ち着け」

「なんて余裕ぶってるけど、依子に劣らず俺もそわそわしてる。気を沈めるべく、俺も線路の先に目を凝らした。日も落ちかけている。ビル群や住宅などの明かりが目立ってきた。時間的にも、う」



っかり夜遊びしてる制服姿の生徒なんかは補導の対象だ。

やっぱり、いきなりあの三人だけで遊びになんか行かせない方がよかったのかな。俺の心配は杞憂で終わらなかつたわけで、そう考えたと虚しさがこみ上げてくる。ついさつき原村と絶交した俺からすれば、今日はもう友情崩壊シーンなど見たくないし、消化不良だよ。「きた」

線路の奥から二つの丸い目が瞬き、箱型の鉄の塊がひょっこりと顔を出した。

一原駅で下車し、ドトールを探すも、普通に迷ってしまった。俺も依子も初めて降りる駅で、出口が五つも六つもある上、駅の構造もダンジョンじみているし、『駅前のドトール』だけで探せつてのが無理な話だ。

携帯を開いて城川からの着信を開き、電話をかける。城川はすぐに出た。

「迷った。どこの出口？」

「えっ。えとね、たしか、六番出口出たらすぐに」

電話を切る。挨拶なしにいきなり用件聞いて速攻切る。依子式の通話法。でも仕方ない、今の俺はちよつとばかり焦っていた。

六番出口を探し、依子を後ろにつれて階段を上がっていく。

夏にしては、いやに肌寒い風が通り抜けていた。俺らの住む町と比べればビルは高く、すでに歓楽街の体を醸し出していた。完全に夜のゴールデンタイムで、ドトールを探そうとするが、会社帰りと思われるオーケー団が視界を塞ぐように目の前を歩いていく。

依子が道の向かい側のビルを指す。ビルの一部と化したドトールがごじんまりとあった。

ドトールに入り、適当にアイスコーヒを二つ注文して、城川を

探す。

城川は一人で、テーブル席にうつむきがちに座っていた。俺が正面の椅子に座っても、彼女は顔を上げない。依子は城川の隣のソファに座る。

「他の二人は？」

城川はうつむいたまま首を横に振った。木製の四角テーブルの上には、半分も減っていない抹茶ラテのグラスが二個、空っぽで氷すらも残っていないグラスが一個置かれていて、押しつけられるようにテーブル上で佇むそれが更に重苦しさを引き立たせていた。

鼻をすする瞬間に少し見えたが、城川は目を真つ赤に充血させていた。隣のテーブルに座るおばちゃん二人組がいちいちこちらを伺ってくる。多分俺たち、すげえ目立ってる。まあ、城川は俺たちが来るまで一人で泣いていたのだから、そっちのが異様だっただろうけど。

「依子、城川の顔洗わせて、落ち着かせてやって」

依子はうなずき、城川の手を取って席を立つ。

俺はその間に喫煙スペースで一服しようとしたけど、制服姿で堂々と吸えるはずもないことに気付き、大人しく椅子に座って、アイスコーヒーをすすりながら二人の帰りを待った。ちよつと苦い。

無駄に半分まで飲み干したところで、依子が保護者のごとく城川の手を引いてやってくる。正面のソファに二人が座り、城川が事情を語り出すのを待った。

しかし、彼女は中々口を開かない。

依子が、城川の指で遊び始めた。自分の膝の上に城川の手を持ってきて、人差し指と中指を開いたり閉じたりさせていた。こいつも案外落ち着きのないやつである。

俺も喫煙欲求を紛らわすようにアイスコーヒーを少しずつ消費していく。苦さにも段々慣れてきた。

「お前ら、また喧嘩したの」

こちらからそう尋ねてみると、城川は頭を振った。それから拙い

口ぶりで話し始める。

「三人でカラオケ行ったあと、服屋さんとか、トイザラスとか見て回ってただけど、由多加ちゃんのお父さん厳しいから、門限あって、七時までで、最近塾とかも勝手にさぼっちゃってたから、さらに厳しいらしくて、もう帰らないと怒られちゃうから、そろそろ帰りましようって由多加ちゃんが言ったんだけど、そしたら村瀬ちゃんが不機嫌になって、由多加ちゃんも喋らなくなって、わたしはずっとジュース飲んでて、氷食べて黙ってたなら、もういいって、村瀬ちゃん帰っちゃった」

城川が語ると、なんだかほのぼのした感じに聞こえるのは気のせい。いやそれ以前に、話にまとまりがなさ過ぎてどこで問題が起きたのか全く把握できないんだけど。

「つまり？」

「えっと、トイザラスは、わたしが行きたいって言ったんじゃないかって、村瀬ちゃんが」

「いやそこじゃなくて。村瀬が不機嫌になったって言ったよね、そのへん詳しく聞きたいんだけど」

「村瀬ちゃんは、なんか分かんないけど、えっと、わたし、トイザラスで村瀬ちゃんに、シルバニアファミリー買ってあげようかって笑われたんだけど、そしたら由多加ちゃんが、あんまり子供扱いしたら可哀想ですよって」

「だから、トイザラスのくだりいらなくね？　なんで村瀬がそういう風になったのかって聞いてんの」

「純」

城川が申し訳なさそうに顔を下げのを見かねて、依子が非難の視線を浴びせてくる。

「あたしが聞くから、純はだまって」

「あっそ」

背もたれに寄りかかり、またコーヒーを飲む。

どうやってこのややこしそうな話を聞き出すのか、依子の出方を

観察してみるが、依子は待ちの姿勢で城川を見つめるだけだった。しかし城川にとっては話しやすいのか、ぼつりぼつりと説明を始める。

城川の話 요약すると、こういうことだ。

三人は予定通り、放課後の遊びに出掛け、元の関係を順調に取り戻そうとしていた。村瀬の様子が変わったのは、さつき出たトイザらスからのようで、城川はそれを俺に伝えようとしていたらしい。城川を子供扱いする村瀬を、鍋島がやんわり注意しただけのことだったが、村瀬は萎縮するような、白けたような態度をあらわにする。私、そろそろ家に帰らないと。また、お父さんに叱られちゃう。

そんな鍋島を、村瀬が引きとめる。

いいじゃん、もうちょっとくらい。あそこでゆっくりしていいぞ。

駄々をこねる村瀬に流され、彼女らは不承不承にこのドトールに入るようになった。

帰りたいつつつてんのに、何の用もなくこんな所でぐだぐだとさせられるのだから、鍋島もやきもきしたことだろう。

どうして、そんなに帰りたがんの。この前アッキーと遊んだときは、もっと遅かったらしいじゃん。

村瀬がそう言ったらしい。空気が読めないってわけじゃなく、多分わざと原村の名前を出していそう。

アッキーとすぐに別れるのさびしい、ってのは分かるけどさ、そついうとこ、友達のあたしらと差作っちゃいけないと思うぜー？すげえ嫌らしい責め方してくる。こういうことはズバズバ言う反面、まともに自分の内面すら表現できないのだ。どれほどのフラストレーションが村瀬の中で蔓延していたのか。

狼狽し、鍋島は黙りこくってしまう。誰とも視線を合わせずに。

険悪そうな雰囲気容易に想像できる。友達が原因で出来る悪い空気つてのは、なかなかどうして息苦しいものだろう。言いたいことも言えない世の中を自分らで勝手に作ってるよ。

気まずい静寂を紛らわすように、城川はオレンジジュースを吸い続け、無くなっても行儀悪くずると音を立ててすすり、拳げ句に氷まで食い始めたところで、そこで村瀬が苛立たしげに席を立った。そして、小さく言い捨てる。

もういい。

村瀬はそのまま帰ってしまったが、鍋島は顔も上げずにソファに座り込んでいた。

鍋島が声を漏らしたのは、またしばらく経ってからだった。

私、もう友達作らない方がいいのかもしれない。普段はいい人ぶってるくせに、笑っちゃいますよね。いざというときは、こんな風に、簡単に人を裏切っちゃうのに。

鍋島は今にも泣き出しそうな顔をして言う。どうして自分にそんなことを言うてくるのか、城川にはもう察しがついていた。鍋島は言わなくてもいいことを、穿たれた傷をさらに掘り出してまで言葉にする。

ねえ城川さん。中学でいじめを見過ごしたと、本当は恨んでるんですね？

城川はすぐさま首を振る。声は出なかった。

同情っていうんですよ、そういうの。

反応を待たずに、鍋島は続ける。

私が哀れで仕方ないんですね、城川さんは。実際、私は城川さんよりずっと弱い人間なんです。口ばかりで、行動を起こすに当たって、上っ面だけの安上がりな慈善行為だけ。私は、きっと、自分が世界の誰よりも可愛くて仕方がないんです。いじめを見過ごしたのは、自分がいじめの矢面に立たされるのが恐かったから。昭文くんにいつまで経っても告白しないのは、振られて傷つくのが恐いから。さっき、村瀬さんを前にして黙り込んだのは、うやむや

にして、どうにかなればいいな、って思ったからなんですよ。これが、友達に対してすることですか？ 根性曲がってるでしょう。こうならないうちに、あなたも早く私から離れた方がいいんじゃないですか。

城川は、最後まで否定を口に出来なかった。

同情で続けられるくらいなら、私はもう友達なんていらぬ。

軋轢。

話し終わると、城川はまた鼻をすすった。依子が彼女の背中を撫でると、小さく嗚咽が漏れ始める。

ストローをくわえてアイスコーヒーを飲み干し、俺は席を立った。「外で待つてる」

そう言い残してドトールを出る。

ドトールの角を曲がって路地へと入る。ビルの間の通路には外灯もなく、連なった自動販売機の明かりがほの暗く辺りを照らしていた。

自販機の側に寄り、煙草に火を点けて、星一つ見えない灰色がかった夜空を見上げる。

依子の家の近くにでも行けば、もつとまともな星空を拝めそうだけど、こういった都会の一角から見上げる空は濁っているようで、人工的に見えて、ただ不透明でしかなかった。

なにもかもが、不透明だ。

村瀬の本音が分からない。鍋島は城川とまで縁を切るつもりでいるのか。俺は依子の過去にどう向き合えばいい。俺の足の怪我には何か意味があるのか。原村とはどう関係を取り戻せばいい。どうすれば俺は原村と早川を知れる。吉岡の背景、アキラ。叔父さんと依子、約束。

空に向けて煙を吐くと、空気が色が白みがる。

どうしてこうなるんだろう。どこで間違ったら高校初めの一学期

でこうなんだろうな。

俺たちは、そんなに間違っただことをしたのか。

違うだろ。どこまでいっても俺らは子供だし、所詮若気の至りでしかない。

なるべくしてこうなった？　じゃあ俺、どうすりゃいいんだよ。

煙草を地面に転がし、踵で念入りに火だねを潰してから、二本目に火を点けた。

煙草を吸い終わって、ドトールの前で待っていると、十分ほどで依子と城川が出てきた。

城川の目は真っ赤だったが、一応泣き止んでいた。いつもこんな顔してるイメージあるけど、ここまで本気で泣いたのは初めてだと思う。城川は両手で持った携帯を気にしていた。

「お母さんから電話があつて、もう遅いから早く帰ってきなさいって」

俺は腕時計に目を落とす。午後八時二十五分。今から帰っても、余裕で九時超えるな。

「あたしも、ママからメールきてた」

依子の方は、別に見せなくてもいいのに、叔母さんのメールを開いて渡してきた。

『きようは遅くなるのかな。みたらDENNWA』

道子叔母さんのメールは、そこはかたなく依子と同じ匂いがした。どういふ風に打ったらこうなるんだろう的な。すごい勢いで血つながつてるんだろうな。

しかし、こうして家族から電話やメールをもらえる依子と城川は幸せだと思う。帰りを心配する着信が来ないのは俺だけだ。いや、別に気にしてないけど。

ノーコメントで依子に携帯を返す。

城川の家はここから歩いて帰れる距離らしいので、俺たちはその場で城川と別れた。

依子と共に一原駅へと戻る。切符を買い、ホームで電車を待ちながら、ちよつと気になっていたことを尋ねる。

「もう叔母さんに電話した？」

依子は首を横に振った。

「なんで？ さっきのメール、見たら電話してって書いてあったじ



やん」

依子はしばし沈黙して、「そうだった」と小さく言って、鞆から携帯を出した。

大丈夫かよこいつ、と思ったけど、城川の話聞いてから、依子も色々考えごとをしているのかもしれない。顔には出さないけど、意外と動揺しやすいやつなのだ。

依子は電話帳を開くのに相当苦戦していたが、俺は依子のためを思って、というか、もう教える作業にうんざりしていたので手伝わなかった。

依子が携帯を耳にあてた。道子叔母さんはすぐに電話に出たようだった。三、四言くらい短い会話をして、依子は電話を切る。

「あたしの家に、健一叔父さんと、美紀叔母さんが来てるんだって」「親父と母ちゃんが？ 雄二は来てねえの」「わすれてた。雄も来てるって」

すごい懐いてるのに、依子に忘れられる弟は可哀想だ。

「あたしんちで、純たちの家族と一緒にご飯食べるつもりだったのにつて、ママがいった」

「まじか。で、俺らどうすりゃいいの。さつさと依子の家行った方がいいのかな」

「あたしたちだけ、外でご飯食べてきなさいっていわれた」

俺たちも結構可哀想なのかも。つか、それだけの理由があるのに、依子にだけメール来て、俺には親からの呼びかけが全く無いってはいったいどういう見なのだろう。そのへんで野垂れ死んでやろうかな。

電車を降りて、改札を通り、駅の構内にある定食屋に入る。かなり客も入っており、空いている席は外側のテーブル席のみだった。そこに座り、俺はロースカツ定食を注文して、依子は天ぷらうどんを注文する。

俺と依子で共有できる話題など、ほぼ皆無に等しいので、一原駅のホーム上でのやりとり以降、俺たちの間に会話はなかった。

茶木製のテーブルに肘をつき、ガラス張りの窓越しに外を見る。そこから見えるのは駅の中の様子だけで、構内を無造作に行き交う人間たちくらいしか観察出来ない。あくび出てきた。超ねみい。

「三時間くらい、ここで寝てていい？」

「いただきます」

俺の冗談は息を吸うようにシカトされ、依子はそのまま天ぷらうどんを前に割り箸を割った。もう慣れたからいいけど、いつのまにうどん来てたんだ。

依子が食べ始めると、まもなくしてロースカツ定食も運ばれてくる。俺は無言で割り箸を取る。

ふと、依子からの視線を感じた気がして、俺はいちおう顔を上げてみるのだが、微妙に視線が合わなかった。

振り返ると、後方の壁に、落語会の告知ポスターが貼ってあった。依子はそれを見ていたらしい。俺は前に向きなあって、黙ってとんかつを食べなおす。

恐ろしく会話がなかった。夏にしては随分と寒い夕食だった。我が家での食事だと、うざいくらい母ちゃんと弟が話題をふってくるので、毎回うっとおしい思いをしていたけど、ここまでサイレントな状態で誰かと食事をするのも、中々息苦しいものだった。ほかのテーブルの客が馬鹿みたいに喧しいので、余計つらい。

また依子から見られているような気がしたが、どうせ俺じゃなくて、また後ろのポスターを見ているんだと思う。どんだけ落語に興味示してるんだ。

「村瀬さんって、なにがしたいの」

ようやく、自分が話しかけられているのだと知って顔を上げる。

依子は、純粹な疑問をぶつける顔をしていた。俺は口の中の物を咀嚼しながら考えて、飲み込んでから言う。

「村瀬、鍋島と原村が仲良くしてんの、気に食わないっばい」

依子は斜め十度くらいに首を傾げた。髪が肩から垂れ落ちる。

「原村に嫉妬してんだよ、あいつ」

傾けたまま、懐疑的に眉をひそめられる。

「いや、変な意味じゃないと思うんだけど、そのまんまの意味で。

たとえ男が理由でも、友達がとられた気分になって、嫌なんだって説明し辛いけど、そういうことだよ」

「意味がわからない」

普通の反応だと思う。それだけの理由であんな露骨な態度を示すのだから、俺も初めて聞いたときはこんな感じだった。

「村瀬さんは、おかしいの？」

「まあ、おかしいっちゃ、おかしいんだろうけど……」

「じゃあ鍋島さんは、なにも悪くないんだよね」

俺は何も言えなかった。この確認を取るような質問に嫌な感じがした。鍋島は悪くない、なんて安易に答えでもしたら、依子は一体どんな行動を出るのだろう。また厄介なことをしでかしそうだ。

「誰が悪いとかじゃねえんだよ、こういうのは」

語感を強めて、会話を打ち切る。未だに疑問を浮かべる依子から視線を外して、窓の外を流し見る。

そこで、高校生くらいの男子が、窓越しのすぐそばを通り過ぎていく。それがうちのクラスの男子だと分かったのは、彼が一度足を止め、俺と目が合った瞬間だった。

確か添野という名前で、うちのクラスの副委員長だ。ちなみに委員長は鍋島。

添野は私服姿でコンビニ袋を手に提げていた。彼は挨拶程度に手を上げると、俺の正面に座る依子を見た。視線をこっちに戻して、ちよつとにやけてる。何か勘違いされているような。

俺は軽く手を振って、適当に否定を表現しておいたが、添野はにやついたままの腹立つ顔で歩き去っていった。

それから、相変わらずの沈黙は続く。こんな風なのに、依子とただだれた関係を疑われるのは、ひとえに俺と依子が、他のクラス

メイトと交流しなすぎることからなのかもしれない。自分でもかなり閉鎖的なコミュニケーションだと思う。

時間はあっさり過ぎていき、お互い食べ終わって、早急に帰宅するべく伝票をとる。

「おごつて」

依子が無表情をひっさげて言った。伝票を掴んだままの俺の右手が止まる。

「あ？」

「おごつて」

周囲の温度が二くらい下がった気がした。なんのつもりだろう。男が女におごるのは当たり前前みたいなきたりが、いとこ同士においても成立すると思っっているのだろうか。

「なんで俺、依子に奢らなきゃなんないの」

「お金ないから」

反論しかけた口を閉じる。依子の顔色を慎重に窺うが、相変わらず表情からは何も情報を得られない。しかし、大体の事情は察したので、それ以上の詮索をやめて短く息を吐く。

「わかったよ。つか、そういうの最初に言えよな」

「おごづかいもらったら、返すから」

いつもは図々しくせに、妙な所だけ律儀なのも面倒だ。俺は伝票を持って席を立つ。

「奢るつつつてんだから、返さなくていいよ」

その後も会話らしい会話はなく、駅の駐輪場から自転車に乗り、途中まで並んで走る。廃れたアーケード街の一角、親父の知り合いの婆さんが経営するタバコ屋の前で、俺は自転車を止める。

「ちよつと寄っていい？ 煙草買いたい」

依子は自転車から片足を地面について、迷惑そうに俺を見ただけで、そのままペダルに足をかけて帰ってしまった。アーケード街の

薄暗い照明の中、小さくなっていく依子の背中を見つめながら、いよいよのない怒りと虚無感に苛まれる。

窓口で居眠りをしている婆さんを叩き起こして、ハイライトを三箱要求していると、ポケットの中の携帯が震えた。

タバコ屋の壁際にはスタンド灰皿が設置されており、そこで俺はハイライトを啜えて、ポケットに手を突っ込む。どうせ親父が母ちゃんだろう。やっと電話よこす気になったのか。いや、別に心配してほしいとか全然思っていないけど。

携帯を開き、画面上で表示された名前に吃驚した俺は、火の点いた煙草を口からこぼしかける。

着信一件。早川沙樹からだった。

「ありがとうね。今泉に話してよかった」

電話越しの声を聞きながら、俺は徐々に、早川の言葉に現実味を抱いていく。なんとかなるかも、と漠然とした希望を持つ。

「別にいいけどさ、あんま無理するなよ」

「うん」

「じゃ、また明日学校で」

「うん、ばいばい」

通話を終える。全身にどっと疲れを感じ、本日最後の一服を肺にしみこませる。俺らの騒動なんて所詮、餓鬼の喧嘩みたいなものだ、やってみれば案外どうにかなるものだ。そう考えると、気が楽になってきた。

窓を引き、網戸をして、湿気の立ちこめた部屋の空気を開放する。風が涼しい夜だったので、そのままベッドに転がって眠りに落ちた。

翌日の金曜日。

少し早めに登校し、生徒玄関を抜ける。廊下の壁に、上位三十名の成績順位表が掲出されていた。ささやかながらも人だかりが出来ている。

シャボン玉ほどの儂い願望を抱きつつ、今泉純一の名前を探してみるが、突如、偶然となり立っていた曾根本に睨めつけられ、「お前の名前なんか載ってねーよばーか」と肩を小突かれる。やり返したかったが、殴られた部分がゾワゾワしてきたので慌ててさする。朝からすげえ胸くそ悪い。

「鍋島と平野、やっぱ頭いいよな。まさに高嶺の花みたいだな」

曾根本が順位表をさして言う。こいつからまともに話しかけられたことなど、多分これが初めてなので、俺は若干動揺しつつも貼り

紙に目をやる。

平野依子、一学年二百三十八人中、八位。思ったより微妙。いや、でも結構すごいのかな。

鍋島の名前はどこだろう。徐々に視線を上げていく。上位三名は、ちよつと可哀想なことに、名前を拡大して印字されている。鍋島は、まさかの一位だった。あ、そういう人だったのね。今まで生意気な口利いてすみませんでした。

適当に見回していく。十一位に吉岡美野里。こいつは中学の頃から成績良好。十八位、早川沙樹。右に同じ。で、二十三位は城川心結。ああもう、マジかよ、お前まで。

「あの、おはよ、えっと、あのう、おはよ」

声をかけられて俺は振り向く。誰もいない。と思つたら、城川が軽くこちらを見上げていた。まじまじと城川の顔を見返す。頭の骨格、小さそう。なのにこの高成績。

「うん、おはよ」

気にしないようにして順位表に戻る。二十八位、曾根本。いやいやいや、流石に嘘だろこれは。ふと、曾根本の顔面の異変に気付く。自慢げに長つたらしい前髪をかき上げていて、それで、言い表しにくいけど、とにかくむかつく顔してた。死ね。

二年の方を見ると、三位の欄に原村昭文の名前があった。いい加減、俺の中で何かがハジけてしまっそうだった。

「あの、今泉くん。わたし、チビだから、は、貼り紙見えなくて」

「ああ、ごめん。お前二十三位だよ」

人混みにうろたえる城川にそう教えてあげて、教室へと向かう。がむしゃらに足を動かしながら思う。

どうして人は無意味に順位や優劣をつけたがるのだろうか。何故、数字やデータごときに踊らされなければいけないのだろう。この当たり前のように行われる残酷かつ無神経なシステムに腹が立つ。

一等賞とり続けたら偉いのかよ。一位キープしてたら王様にでもなれんのかよ。お前ら全員、一生教材とお話ししてろ！

教室に入ろうとして、扉付近にいた村瀬とぶつかりかける。おーびつくりした、と村瀬がおどける。

「あ、そういや今泉。政経のテスト、さっき宮下せんせーに聞いたんだけど、うちのクラスで赤点なの、あたしと今泉だけらしいじゃん。馬鹿同士、これから仲良くやるーぜっ」

「うるせえ！」

一喝して自分の席へと急ぐ。

なんだよヤ二切れ？ と後ろからばやきが聞こえたが、俺は頑なにシカトを決め込んだ。

HR開始まであと十分。机にうなだれて教室の前方を見渡す。

吉岡の席で、女子数名が固まって騒いでいる。さっきの成績順位表のおかげで、ちやほやされているようだった。村瀬がペットみたいに、吉岡の背中に覆い被さるように抱きついている。モテモテである。

女子の中に、早川の横顔を見つめる。塗り固めたような笑み。昨日の図書室や電話でのやりとりからは、想像も出来ない表情を浮かべていた。

やがて、教室に依子が入ってくる。女子一団はそれを盗み見るようにして、声をひそめてせせら笑う。相変わらず、見ているだけで胃が痛くなる光景だ。それなのに依子は、まるで自分が笑われているだなんて気づきもしないようだ。

席に着いてさっそく本を開いている。俺は依子の足元を見た。つい昨日新調したばかりのような、新品同然の上履き。実際そうなのかもしれない。しかし、あれは一体、何足目の上履きだ？

お金ないから。

昨日の依子の言葉を思い出すたびに、頭痛がしてくる。

HR開始まであと五分を切ったところで、後ろの席を振り返る。今日はまだ、鍋島が登校してきていない。



昼休みになり、恐る恐る屋上へ上がった。

非常扉を開けると、生ぬるい風が前髪を撫でる。初夏の日射に目を眩ませながらも、俺はコンクリートの先を見据えた。ただでさえ広く感じるそこは、昨日と比べても、さらに広大に見える。分かった。きっていたことだが、原村は不在だった。

胸騒ぎと違和感を抱きつつ、煙草を一本だけ吸って屋上を出る。

足早に図書室へ向かう。図書室のガラス扉には、夏休みに向けた図書だよりが貼られており、開けると、受付の依子のもとに女子が三人寄り集まっていた。いぶかしんで近づくと、彼女らが好奇心な視線を向けてくる。

「あー、噂をすれば。ねえ今泉、昨日のデート楽しかった？」

女子の一人が尋ねてくる。唐突過ぎてなんのことだか分からない。依子は黙り込んでるし。返答しかねていると、また別の女子が重ねて言う。

「昨日、夜遅くまで二人で遊んでたって聞いたよ。結構話題になってるんだけど。ねえねえ、恥ずかしがらないで教えてよ」

昨日の定食屋での光景を思い返す。ガラス越しに、からかうような笑みを見せてきた添野。嫌な予感がしてたけど、やっぱりあいつが言いふらしたのか。くそ、どうすりゃいいんだよこれ、面倒くせえ。「いや、昨日のはデートとか、そんなんじゃないよ」

「っていつか一時期、平野と今泉が付き合ってるって話あったよね」「そうそう、あれ結局うやむやになったけど、これ、もう確定っぽくない？」

こちらの弁明は、女子三人の勢いにあっさり遮られる。俺は、受付内に入れもせず固まった。

「でも、やっぱりとこ同士って異常じゃない？ 法律的にアウトでしょ」「いやセーフだから。ギリだけど」「ほんと？ つか、たとえセーフだとしても、ちょっと引くよね」「でもさ、うちのクラス、

他に親戚とくつついてる子いるって話じゃん。ただの噂かもだけど  
耳が痛い。イライラしながらうなじを掻いて、いまだ受付室内に  
入るに入れず、俺はカウンターに寄りかかった。

「純、この子たち、うるさい」

依子が不機嫌そうに俺を見つめる。依子の声量では女子三人には  
到底届かず、真っ黄色な金切り声はエンドレスする。

「あー思い出した！ あれでしょ、いとこでカテキョっていうあれ」  
「ていうかもうさあ、知ってる人ぶっちゃけてくれない？ 誰なの、  
その、既にいとこと付き合ってるって子」「だっから、いつも言っ  
てんじゃん。絶対、奈実だって。最近付き合い悪いってか、なんか  
こっ、色気付いてる感じで」「わかる。色気ってか、ケバいつてか、  
もうあれ高校生ってレベルじゃねーよ。いい加減誰か指摘してあげ  
なって」「奈実とかまんまじゃん。鍋島は？」「ないない。由多加  
ちゃんって、超真面目そうだし」「だからあ、ああいう真面目そう  
なのに限って」

「ねえ」

依子が若干ながら声を張る。三人の顔が依子へと向く。

「ここ、図書室だから、しずかにして」

女子たちは顔を見合わせてくすりと笑い、内一人が口を開いた。

「あー、ごめん。でも平野さん、ここだけの話さ、今泉とは本当の  
所、どうなの？」

依子が苛立たしげに口の端を噛む。空気が一気に悪くなるのを感じ  
取っている、依子はそのツラのまま俺へと視線を投げた。ここ  
でこっちに振ってくるか。他三名の目もこちらを向き、いよいよ逃  
げられなくなった俺は、渋々答える。

「ほんとに依子とは何にもないの。友達以下ってか、もう親戚以下  
みたいな。むしろ俺ら、仲悪いし」

「うそだ」

「うそじゃねえよ」

「でも今泉って、昼休みはいつもここ来てるよね」

「それは、お前、あれだよ……」

ここからは長くなるので省略。十分近くの質問責めに合い、俺もややキレ気味の返答を繰り返していると、女子三人は確実に納得していなさそうな顔をしながらも、その場を離れていった。

ようやく解放された俺は、しばらくカウンターに寄りかかった。

依子もじつと黙っていたが、三人が居なくなってもまもなく、深いため息を吐いて手元で文庫本を開いた。

「しねばいいのに」

いらついで、辛辣な台詞を吐きながら。

その後、図書室内の生徒たちからの痛い視線を感じた俺は、結局受付に入ってゆっくりすることも出来ず、何のために図書室へ足を運んだのかも分からないまま退室した。

再度屋上へ行き、原村が来るかもしれないという可能性にびくつく。しかし当然のごとく彼が現れるはずもなく、そのまま無作為に時間を潰した。

掃除の時間では、城川と二人きりで裏庭掃除をすることとなる。

鍋島が欠席だと分かったいま、俺たちの間では事務的な会話しか交わされなかった。

もやがかかったような、得体の知れないものを抱いたまま、一日が過ぎようとしている。

終業のHR。担任の池田は産休中のため、駄目司書でお馴染みの宮下が代理として教卓に立ち、HRを進行していく。

話を聞き流しつつ、ひそかに帰り支度を始める生徒たち。俺は特に、早川の背中を眺めていた。昨日の彼女との通話の内容を、ぼうつと思り返す。

昨日、俺が早川からの着信を折り返したのは、一度、家に戻ったあとのことだ。風呂に入り、歯を磨いて、落ち着きのなかった気分を沈めるべく、二、三本喫煙して、それから早川の番号にかけなおした。

電話に出た早川の声には、放課後同様、いつもの活発さが見られなかった。俺は牽制するように軽く挨拶をして早川の用件を待つ。

「今日の放課後、今泉、屋上に行ったのよね。お兄ちゃんが何か言っただけで、教えてほしくて」

しおれたような口調で切り出される。俺はむろん、原村から何も聞き出すことが出来ず、しかも絶交という最悪の形で終えてしまった。それを正直に話すと、早川の相づちも一層小さくなっていく。

しばらく、お互い何も言えずに黙り込む。すると、俺が知りたがっていたことが、やがて彼女の口から明かされていく。

「私、お兄ちゃんから恨まれてるのよね。まあ、今思い返せば、当然のことなのかもしれないけど」

「恨まれてるって？」

早川は細かく息を呑む。

「私たちのお父さん、おおげさな言い方かもしれないけれど、私が殺したようなものだったし」

俺は耳を澄ませ、早川は肅々と語る。

「私たちの両親、もとは二人とも、小学校の教員だったの。私たちが産まれて、生活が安定してくると、お父さんが、お母さんに仕事を引退しろって言ったらしいのよ。お父さん、昔から何でも背負い込んでいた性格だったみたいで。私、お父さんはずっと一人で働いていたものと思っていて、お母さんが昔、学校の先生だったなんて全然知らなかったくらいなのよ」

早川から家庭の事情を聞き出すのは、中学で知り合ってから、初めてのことだった。自然と俺も、話の腰を折らないよう務める。

「私が小学校四年生くらいのときかな。そのときお父さん、学校を異動になったの。異動した先がひどい職場だったらしくて。そこ、

特別支援学級のある学校だったんだけど、あ、特別学級って分かる？」

「ああ、俺の通ってた小学校にもあったから、なんとなく」

精神遅滞だったり、身体虚弱だったり、主に健康障害のある生徒のための学級だ。たしか俺の小学校では、特別教室は別の棟に移されていた。そのためか、特別学級との交流はほとんどなかったし、俺の中での印象もかなり薄い。

一息して早川が続ける。

「お父さん、仕事出来る人なんだけど、新しい学校に配属されていきなり、その特別学級を受け持たされたのよ。ほら、そういうクラスって色々面倒事が起きそうだし、普通は誰も受け持たがらないものじゃない？ でも、お父さんは押しに弱い人だったし、責任感も強かったから、引き受けたみたい。その他にも学級主任をやったり、社会科の授業研究員の仕事をしたり、PTAの主事を任されたり、毎日毎日、早朝に出勤して、深夜に帰宅して、数時間寝て、また出勤、みたいな」

俺は首を傾げる。

「小学校教師って、そんなハードな仕事だったっけ。一人の教師にそんなに仕事押しつけるなんて、誰か止めたりしねえの」

「普通はそうだと思うけど、でも、そういう雰囲気为学校だったから、誰も彼も、見て見ぬふりだったらしいわ。生徒が暴れて、怪我をさせられそうになっても、他の先生は素知らぬ顔で、残業代だつて出なくなるくらい深夜まで学校に残つても、お父さんを残して、みんな揃って定時退社していく……」

すうつと、受話越しに息を吐く音が聞こえる。

「ストレスで、ついに胃に穴が空いちゃって、お父さんは入院したわ。たった一週間の入院で復職したけど、数日出勤しただけで、またすぐ休職したの。お父さん、完全に鬱になっちゃって」

俺は黙って早川の言葉を飲み込み、身体の中に沈めてみる。

俺は今まで、バイトすらしたこともないから、仕事で責任を負わ

される辛さなんて、まだよく理解できない。しかし、その一週間の入院が早川の父にとって、目を覚ます機会になってしまったのではないかと思う。一日中を職場で過ごす生活から、入院という名の休息を与えられた瞬間、自分に課せられてきた理不尽の数々、職員たちの本質、過酷さに気づいてしまった。人間不信にだって、鬱にだってなるかもしれない。あくまで、俺の想像だけだ。

「お父さんはそのまま長期の休職に入って、そうなれば当然、家庭を支えるために、今度はお母さんが仕事に復帰しなければならなくなったの。私、昔からお母さんに依存していたところがあって、よく一緒に出掛けたり遊んでりしていたから、その時間を削られるのが、ものすごく気に食わなくて」

早川の言葉に、静かに嫌悪が混ざる。

「私の目には、仕事が嫌だからって、何ヶ月も働こうとしないお父さんは、甘えているようにしか見えなかった。今まで、主婦やパートのイメージしかなかったお母さんが、教職に復帰するのは、なにかおかしいんじゃないかって、私は真面目に思った。お母さんとお兄ちゃんには、お父さんのことは、出来るだけそつとしておいてって言われたんだけど、私は、我慢出来なかったのよ。ひどいことをいっぱい言ったわ。もう、何をどれだけ言ったのか、思い出せないくらいに」

しばらくの無音が続く。煙草に火を点け、じっと待つ。自嘲したような、殺したような笑いが漏れてくる。

「そつやって、お父さんが私の言葉に責任を感じて、自分で命を断つたきり、お兄ちゃんは私と口も利いてくれなくなって。気づいたらお兄ちゃんは、父方のお祖父ちゃんの家で暮らすようになっていた。何故お父さんが死んだのか、自分のどこが悪いのか、全然分かんなくて、意味分かんないって感じで」

「それが、五年前に起こったことか」

「うん。私って今までずつと、やけになってて、色んなへましてたんだなって。今日の屋上で、お兄ちゃんに色々言われて、叱られて、

気づいちゃった。まあ、半分叱られるつもりで、私もお兄ちゃんに会いにいった所もあるんだけど」

早川の声の調子に自虐が混ざるが、俺はあえて尋ねる。

「依子のこと、原村にキレられた？」

彼女は何も言わなかったが、なんとなく、電話の奥でうなずいてるのが、雰囲気伝わる。

原村がこの日の放課後、早川に本音をぶちまけたのは、原村自身依子がいじめを受けている事実には耐えられなくなったのだろう。自分の妹が、友達を傷つけることに耐えられなかったんだ。

それからの早川は、徐々に泣き出してしまったために、ほとんど言葉が聞き取れなかったが、今まで依子をいじめたり、からかったりしたことへの謝罪を連ねてきたことだけは分かった。

「そういうの、依子に謝ってくんなきゃ意味ないと思うんだけど」

「そつだよ、ごめん」早川は鼻をすすって言う。「明日、ちよつと頑張つて、謝つてみる。でも、美野里になんて言われるかな」

「吉岡？ 吉岡なら、お前が止めようって言うてやれば、納得してくれるんじゃないの」

「……そつだよ。そつだといけど」

ここでほつと息をつく。柄にもなく人の話を真面目に聞いたせいか、すごい勢いで脱力してきた。

「ありがとね。今泉に話してよかった」

ぼつぼつと挨拶をして通話を断つ。携帯を閉じ、布団の上に投げ出して転がる。

これが昨日の晩の、早川とのやりとりだった。

HRも終わり、宮下が退室したあと、生徒たちはそれぞれ帰る用意をしたり、部活に行く準備を始めていた。

俺ものんびり支度して席を立ち、早川の席へと歩み寄る。昨日の

電話を境に、早川とのわだかまりはいくらか解消できただろうと思う。それに、依子への謝罪も手伝ってやんなきゃだし。

早川の隣に近づくと、彼女は照れくさそうに顔を上げる。とりあえず、一つ問題が解決しそうだな。そう俺が安堵の息を吐いた、そのときだった。後方から、村瀬の不快感をあらわにした声上がる。「なんだよ、うぜえなっ。もうどいてっば！」

見ると、教室を出て行くこととする村瀬の前に、依子が立ち尽くしていた。明らかな敵意を向ける目で。

「どうして、あやまらないの」

「だから、あたしが由多加に謝ることなんか何もねーだろっ」  
なにやってるんだろっ、この人たち。



教室を出ようとした生徒たちが足を止める。教室内の異変に気づき、クラスメイトの視線が依子と村瀬に集まる。

依子が一步詰め寄り、村瀬は一步退いた。

「おい今泉、こいつどうにかしろよっ。なんか恐えんだけど！」

村瀬に名前を呼ばれて、今度は俺に注目が集まってくる。慣れない多数の視線に気持ち悪さを覚えながらも、一度早川と顔を見合わせ、やむなく依子に近寄る。肩を叩くと、依子が俺を見た。たしかに目恐いかも。

「なにがあった？」

依子が、村瀬の隣にいた女子を流し見つつ言う。

「あの子が、どうして鍋島さんは今日休んだの、って言ったんだけど、そしたら村瀬さんが、昨日の鍋島さんのこと、ばかにするみたいにあの子に話してたから」

こいつがキレるのって、なんだかんだで鍋島のことばかりだ。中途半端な説明だけど、詳細を省いて依子の背中を押す。

「分かった。気持ちは分かるけど落ち着けよ。なにも、こんな所でする話じゃないんだしさ」

「あたしは落ち着いてるし、ここじゃなきゃだめな話」

「ここじゃなきゃ駄目って……」

辺りを見回す。HR終了直後のため、二組のほぼ全ての生徒が、教室、または廊下側に残っている。つまり依子の言いたいことってのは、クラス全員に向けてってこと？

「いや、でも唐突過ぎるよ。もう帰れお前。帰って頭冷やせよ。図書室の仕事は、宮下先生に言っただけだから」

「やだ」

依子に胸を押され、俺は半歩さがる。

すると、村瀬の鞆の端を吉岡がひいた。吉岡は蔑んだように俺た

ちを見て言っ。

「もうこんな奴ら放っという帰ろうよ、彩音。ほら沙樹も。一緒に帰る」

吉岡が振り返る。早川は机に着いたまま視線だけを上げ、弾かれるように立ち上がった。

「俺らも帰るぞ」

依子の肩を掴んで村瀬たちから遠ざける。早川が依子に謝るのはもう今日じゃなくていいだろう。ふと思い出し、城川にも声をかける。

「城川も一緒に帰る？ ほら、駅前の本屋でも寄ってかね？」

二人とも本好きそうだし。適当に誘いをかけると、城川は少し怯むが、鞆を持って席を立つ。空気も少しずつ和らぎ始めるが、俺の手は依子によって叩き返される。

おい依子、ひっくり返ったみたいなお恥ずかしい声で俺は呼びかけたが、依子は村瀬たちへと歩み寄る。村瀬が眉をひそめた。

「まだ何か用？」

「これからあたしといっしょに、鍋島さんの家について」

「謝りにいけってか？ ざけんな。こっちは何も悪いことしてねえっつーの」

俺も依子たちのもとへと近づくが、なんと口を挟んでいいのか分からない。どうでもいいけど、今俺の手汗、すごいことになってる。「じゃあどうして、今日鍋島さんは休んだの。あなたに、ひどいことされたからじゃないの。原村先輩のこと、鍋島さんから無理に引き離そうとしてるんでしょ」

「だったらなんだよっ！」

ついに声を荒げ、教室中の空気が一気に慄然とする。村瀬は口ごもり、何かを言いかけるが、依子が続ける。

「それに、鍋島さんはもつと、村瀬さんに遠慮して言えないことがある。村瀬さん、その鞆かして」

意味が分からない、という表情で村瀬が固まっていると、依子が

ぱつと村瀬の鞆を取り上げた。流れるような動作で、誰もが一瞬反応を遅らせる。最初に動いたのは、すぐ後ろにいた俺だった。

「なにするつもりだお前。もうやめろって」  
「うるさい」

依子は俺を引きはがし、村瀬の鞆を開く。何故か村瀬は、その行為を無然として見届けるだけだった。

彼女が鞆から出したのは、一着の体操服だった。クルーネックの首もとが赤色で、一年の女子用のものである。依子はそれを近くの机に乗せた。ハーフパンツの腰部分には名前が書かれており、そこには依子の名前があった。

鞆のファスナーを閉じ、村瀬に返す。辺りがしんと静まりかえると、ほどなく依子が口を開いた。

「あなたがたまに人の物を盗んでいること、たぶん、鍋島さんは気づいてる。盗んだものを捨てているのか、燃やしているのか知らないけれど、そのせいで、鍋島さんは余計、あなたに不信感をいだいている」

村瀬はそれを聞くと、口元に笑みを浮かべた。

「人の物っていうか、平野の物だけだけだな。由多加が気づいてるんだらうなっことは、なんとなく分かってたけど、まあ、平野の物を盗んでるのって、あたしだけじゃないし」

俺は息を呑み、周りに視線を這わせた。いじめに荷担しているであろう女子たちが、それぞれ後ろめたそうに顔を下げている。村瀬の背後で、吉岡がひそかに唇を噛んでいるのが分かった。

「ていうか、そっちこそいつになったら気づくの？ 平野さ、お前女子全員から嫌われてるよ？ いじめられてるくせに、馬鹿みてえにぼけーっとしてるのを見るとさ、マジ笑えてくるんですけど」

「村瀬さんこそ、ばかじゃないの。そんなこと、言われなくても誰だって知ってるし、あたしはそんなの、どうでもいい」

挑発されるが、意外にも村瀬は表情を変えない。むしろ、彼女はさらに笑みを浮かべて言った。

「あたし、別にいじめ自体には興味ないんだけどさ、平野とか由多加みたいなの見てると、イラついてくるんだよね。異性とのいざこざで、わーっ、てなってる感じ。馬鹿みたい。ピエロじゃん。結局最後はやるかやらないかなんだろ？ 恋愛相談とかってたまにあるけど、どうせ友達のことなんか見えてないんだろ？ 男しか見えてねえんだろ。そういう話されるの、いい加減うんざりなんだよ」

村瀬のヒステリックな声がさらに続く。

「やるならやるで、どっかで隠れてやれよ。友達との間で、んなくだらねえ話持ち込んでくんの、マジ迷惑なんだよ。気持ちわりい。平野もそろそろ今泉とやりたいんだろ？ だったらきっぱりそう言つてよ。だからいじめられるんだよ。曖昧にするから沙樹が傷つくんだよ。ほら言えよ。あたしは今泉とセックスしたいですってさあ！」

教室は水をうったように静まり返り、俺も生唾を呑んで押し黙った。いくらなんでもぶっっちゃけ過ぎだ。依子は何も言わず、呼吸を荒く繰り返す村瀬を見つめる。

環境音だけが耳に届く。誰かが鞆を持ち直す音、椅子や机を鳴らす音、果てには、遠くからのプラスチック部の演奏音まで聞こえてくる。

早川の拳動に気づく。今まで吉岡の斜め後ろで、ずっと下を向いていた彼女だったが、鞆を肩にかけなおし、弱々しい目つきで辺りを見回していた。覚悟を決めたように、早川は唇を結んで一歩前に出る。

「ねえ、みんな」

生徒たちもそれに気づき、早川へと視線を集める。

「平野のこといじめると、もう止めない？ 最初は、平野が私をいじめるところからって、みんなに味方してもらってたけど、あんなの、全部私たちのでたらめだったって、みんなもすぐに気づいてたんですよ？」

誰となく無差別に視線を絡め合い、お互いの顔色を確認しあって

いる。

「私の上履きがズタズタにされたのだって、私の教科書に落書きされたのだって、どれも平野がやったんじゃない。私たちの自作自演。そんなの、みんな知ってたくせに、馬鹿だよこんなの。いくらなんでも平野が可哀想よ」

誰かが鼻をすすった。そちらを見ると、城川心結だった。彼女も一度いじめに協力されられていた。それを思い返して心を痛めているようだった。

吉岡はしきりに早川から視線を逸らしていた。早川の台詞の中に吉岡の名前が出てこないのは、早川が少しでも彼女をかばおうとしているからだろう。

「平野、一番悪いのは私だから、まずは私に謝らせて」

依子の前に立ち、早川は頭を下げる。目に溜まった涙がこぼれ落ち、依子は黙ってそれを見下ろす。

「ごめんなさい。許してもらえるか分からないけれど、もう絶対、こんなことしないから」

泣き顔を上げ、早川はクラスメイト一人一人を見回していた。しかし俺はここで、ある不穏な気配を感じた。

「ねえ、みんな、どうして黙ってるの……？」

一部の女子の表情に、何か煮えきらない色がある。言葉にしないそれは伝藩し、白けたような空気だけが全員に共通しはじめていた。その正体がなんなのか分からず、ふらつきかける足元を持ち直し、俺は声をあげた。

「おい、どういうことだよ。いじめを始めた本人が正直に告白してちゃんと謝ってんだろ。そそのかされて早川に味方したやつらにだって、いじめの責任があるはずだ。お前らもちゃんと謝るべきだろうが」

俺の言葉もクラスメイトたちには届かない。訳が分からなくなつて、俺はその場に立ち惚ける。

そのとき、依子が静かに呼びかけた。

「早川さん」

何故か早川は、依子の顔を見ようとしなかった。

「きのうの、早川さんと純との電話の内容、純から教えてもらった。早川さんがあたしにあやまってくれることも、わるいけど、全部しってた」

でも、話がちがうよね。丁寧に問う依子の横顔を、俺は呆然と見つめる。彼女は冷えきった瞳をたたえていた。

依子は自分の机に近づき、引き出しからある物を取り出す。使い古されたメモ帳だった。めくっていくと、依子のシャーペンの字の上に、マジックで書いたような落書きが殴り書きされていた。

「これ、今日の朝、あたしの机に入ってた。字体を崩して書いたみたいだけど、文字のくせだけは隠せない。あたし、この字に見覚えがある」

次に依子が向かったのは、早川の机だった。俺は早川を流し見る。彼女は下を向いたまま肩を震わせ、おぼつかない指先で学生鞆の紐を掴んでいた。

依子は机の足を掴み、乱暴にひっくり返す。床と机がぶつかる激しい音が響いた。折りたたみ鏡や筆記用具、ノートが床に散らばり、そのうちの一冊を手取る。それから依子は、そのノートと先ほどのメモ帳を放った。ノートとメモ帳は空中で音を立てて開き、早川の足下に落下する。

近くにいた吉岡と村瀬もそれに注目した。

「メモ帳の落書きと、早川さんのノートの字、あたしには同じに見える」

ひそひそとした声があちこちから漏れる。

「わ、私じゃない」

「早川さんはまだ、あたしのことが憎いんだよね。純にあんな約束までしておいて、今度は隠れて、一人でいじめを続けるつもりなんだね」

「これは、私じゃ……」

早川はだんだん声を小さくしていく。

「もういいよ。他の誰かも、早川さんがあたしの机にこのメモ帳を入れてるところ、見てたんでしょ。だからみんな、早川さんが謝ってるのに、しらけてるんだよ」

「ちよつといいかなあ、平野さん」

吉岡が黒板に寄りかかり、声を低くして言った。依子は怪訝に吉岡を見返す。

「いじめられてたからって、あんまり調子に乗るのもよくないなあ、と思って。そんな落書きの一つくらい、目をつむってあげたらどうかな？」

その問いかけに依子は答えない。吉岡は呆れたように息を吐く。

「沙樹ね、まだ今泉のこと、諦められてないみたいなの。昨日の今泉との電話のことだって、沙樹、超嬉しそうに話してくれたんだよ。今泉ってお人好しな所あるし、ちゃんと相談聞いてもらえて、沙樹がそういう気持ちになるのも無理はないよね。好きだったらなおさらだよ。高ぶってたみたいだし、沙樹もちよつと魔が差しただけじゃん。だいたいさ、平野さんって、ノートとかメモ帳に落書きされたくらいじゃ、大して気にも止めないでしょう？」

「それとこれとは関係ねえだろうが！」そう叫ぶのは、廊下側から荒っぽく入ってきた曾根本だった。つーかいたのかお前。「いじめを止めようって言い出すやつが、また同じこと繰り返してたら全く意味がねえ。だから皆こんな空気になつてんだよっ」

みんな、と曾根本は言うが、少しだけ雰囲気が変わりつつある。クラスの女子が段々、今の吉岡の意見に賛同し、早川に同情するよくな様子が見受けられるのだ。

「いいじゃん。沙樹だって真面目に謝ったんだし。平野さんも、沙樹の机ひっくり返したり、酷いことだってたくさん言ったんだから、もうおあいこでしょ」

吉岡の口調は、まるで二組の女子の総意であるかのように聞こえた。実際、みんなの気持ちは傾き始めており、どこからともなく意

見が飛んでくる。

「そもそも、原因は平野じゃん。わざと早川が傷つくようなことしたんだし。あれマジ引いた」

誰かが語感を荒げて言う。

「だからっていじめが許されると思ってんのかよ。引いたのは俺らの方だ。陰湿なんだよ。これだから女子は」

誰かが責任転嫁を口にする。

「いじめる方もそうだけど、男子だってずっと見て見ぬ振りだったよね。あんたらには何も言う資格ないと思うんですけどー」

「黙つとけよブス。てめえが平野の靴箱に雀の死骸入れてんの、俺見てんだからな」「だからそれ見るだけじゃん！　今まで何も注意出来なかつたくせして、こんなときだけ調子こいてんじゃねーよデブ！」「落ち着けこうよみんな。というか、結局一番悪いのはいじめる方なわけだからさ」「はあ、なにそれ？　見てるだけなのもいじめだって、小学校で習いませんでしたあ？」

誰かが身も蓋もない中傷を発した。お互いを責めあい、罪をなすりつけあう。クラス中が騒然として、女子の一人が泣きだし、ある男子が椅子を蹴り倒した。

「そついやばくも、平野さんの弁当箱がひっくり返されてるの見たなあ」「あれって翠のせいでしょ」「はあ？　なんであたし？」

どこかで言い合いが始まる。

「もう医者に診てもらえよお前。いいか、診てもらうのは頭と顔だ」「え、顔関係なくない？」

我関せずとふざけ合う奴もいる。

「私カンケーないし塾あるんで帰っていいすかー」「あたしも部活ー」「逃げんのかよ」「は？　つかお前だれ」「おーどうしたの二組ー」

騒ぎを聞きつけた隣のクラスの生徒が顔を出す。

「離せバーカ」「みんな当事者だから」「あんだ、一昨日平野の財布から金ばくつたべ」「信じらんない！　そのことは秘密って約束



したじゃん！」

どこかで悲痛な声があがる。

「女子全員が謝れば済む話だろ」「お前、茜まで加害者だって言いたいのか?」「だって事実がそうなんだから」「いいからもうどけっ」  
男子の一人が床に倒れ込む。

「てめーも謝ってこい」「いやウチは加わってないし」「あれもいじめに入んの?」「最低。死ぬ」「あー、手出すとかやっぱー」「今のはこいつが勝手に」「言い訳すんな」「これももう停学もんだよ」  
はつとして顔を上げる。早川が自分の机のそばで座り込んでいて、依子がそれを見下ろしていた。騒ぎの中、二人の会話は聞き取れず、俺は焦りつつもそこへ歩み寄る。

「どうしてなにも言わないの。全部あなたのせいだよ」

俺は依子の腕を掴み、早川から遠ざける。それから依子を睨み据える。

「お前、頭おかしいんじゃないのか。謝るときの早川の顔見たよな。こいつ、もう反省してただろ。もう十分だ」

「純も、吉岡さんと同じこというの」

「これ以上言い合う必要はねえつつつてんの」

腕を掴む手に力が入り、依子が顔を歪める。そのとき、座り込んだままの早川が顔を下げたまま、何かを呟いた。

「なにか言った」依子が訊くと、早川が涙をためた目を見せる。

「もう、今泉に近づかないで」

ふっ、と鼻だけで嘲笑するような音が聞こえる。見ると、依子の口元が少し笑っていた。ぞつとして、俺は掴んだ腕を離す。

「純はもう、早川さんのこと、嫌いっていったよ。なのに、あなたがそうやっていつまでも執着するから、こんなことになった」

何をするのかと身構えていると、不意に、依子が俺の腕を抱いた。怪訝に見下ろすと、依子もこちらを見つめ返してくる。

「村瀬さんが言ったように、もう一度、はっきりさせればいいんだよね」

「やめてよっ、お願いだからっ……」

すぐ周辺に居た生徒たちが気づき、俺たちを注視する。そこに居た、泣き出しそうな顔をする城川と目を合わせると、依子がさらに密着してきた。視線を戻す。依子の顔がすぐそばにあり、次にはもう、俺たちの唇は重なっていた。頭でなにか浮かぶが、すぐに消えてなくなる。

周囲の人間が言葉を失い、不穩に気づいた他のクラスメイトたちも、やがてこの光景に啞然とする。

俺はなにかを叫び、依子を突き飛ばしていた。思考が蘇り、頭の中に残るのは、判然としない出所不明の怒りだけだった。無意識のうちに、尻もちをつく依子の胸ぐらを掴もうと手を伸ばしかけると、視界の端で早川が立ち上がった。

右手を止め、戦慄してそれを見上げる。彼女の右手に握られていたのは、十センチ近く刃を露出させたカッターナイフだった。窓からの斜光を受け、刃が光を反射する。

付近にいた女子数人が悲鳴を上げる。ほぼ全員の生徒が危険を察し、後退って距離を取るなか、吉岡だけは駆け寄ろうとする。しかし、早川はすでに依子の前に佇んでいた。見開いた瞳で依子を見下ろす。

早川が動いた。俺はとっさに、二人の間に身体を入れこもうとする。もう一度吉岡が叫び、手を伸ばした。

「沙樹！」

ほんの一秒あと、鮮血が飛んだ。

時が止まったかのように思える数瞬の静寂ののち、すぐさま、この世が終わったような悲鳴と呼号が上がった。

頬にぬめつく感触があり、左手で擦る。指に付着してきたのは真っ赤な液体。まばたきもせずにそれに見入る。どう見ても血だった。血液。誰の？

「見てないでだれか先生呼んでよっ！」

背後で叫んだのが誰なのかは知らないが、俺は我に返り、まず自分の胸元へと視線を落とす。依子の頭があった。開ききった瞳で一点を見つめる依子。俺はこいつをかばうように抱いていた。ということ、待って、俺、もしかして刺された？

気を失いそうになるのを何とかこらえ、依子を離し、慌てて自分の全身をまさぐる。全然、まったく、どこも痛くない。

「沙樹っ、沙樹っ……」

先程と同じ声にびくりとして、振り返る。視界に飛び込んでくるのは、早川と吉岡の凄絶な光景だった。早川が膝から床に崩れ落ち、青ざめた顔色で失神していた。彼女の左の手首を吉岡がおおうように握り、指の間から締めどなく血が溢れ出す。さっと血の気が引き、目を逸らしたい気持ちをおさえる。

「なんで、沙樹、どうして、目開けてよ、ねえってばっ」

早川の頭がうなだれ、力なく垂れ落ちた右手から、カッターナイフが滑り落ちる。鈍色の刃が鮮血を運び、無機質な音を立てて静かに床へと転がる。

吉岡は彼女を片手で支えるようにして、早川の左手首の出血を直接指でおさえ続けている。

これは本来、流れ出てはいけないものだった。自分と誰かと誰かが、いくつもの失敗を積み重ね、間違えたままの道を歩み、嫉妬と未練と執着を繰り返し、ついに仕舞い込めなくなったものが、とう

とう溢れ出した。

教室中を切迫した足音が行き交い、次から次へと人が殺到する。

依子が床に膝をつき、四つん這いに片手を伸ばした。

「早川さん、あたし」

「触るなあっ！」

怒号に反応し、依子の手が震える。瞳が揺れ、唇がだらしなく開く。吉岡が憎悪を込め、依子を睥睨した。

「沙樹に、触るなっ……！」

吉岡の様相に俺は絶句し、歯噛みをして視線を落とす。教師が荒々しく駆けつけ、早川と吉岡を抱くようにして立ち上がらせる。視界から三人の足が消えてからも、俺は尚へたり込み、誰かから肩を叩かれるまで顔を下げ続けた。

暗み始めた教室。

五頭が教卓に立ち、何事かをクラスメイト全員に向けて説いていた。その斜め後ろには宮下がおり、黒板のふちに背中を預けて腕を組んで、明後日の方を流し見していた。

ふと、五頭が怒声を発する。俺の耳には、その内容はほとんど届いてこなかった。クラスメイトは誰一人として反応せず、それぞれの席に着いたまま机や床を見つめ続けている。依子も同じようにしていた。城川がうずくまってすすり泣き、村瀬は静かに眼鏡を外し、机に置いた。

早川と吉岡の姿がなく、二人分の空いた席からは、明白とした事実だけが発散されていた。

首をもたげ、俺は横目に後ろの席を見る。

鍋島が居れば、この状況は変わっていただろうか。俺だけでは止められないことも、俺自身の失敗も、彼女が居れば埋め合わせてくれたのだろうか。

無理だと思った。今の鍋島には何も出来ない。うるたえることに

終始し、唇を噛んで黙り込む。傷つくのをおそれて、村瀬や城川を拒絶した鍋島には、きつと何も出来ない。俺はどこまでも否定的に、そう決めつける。

それもそのはずだ。止められなかった俺は鍋島と同じようなものなのだ。しかも、俺は恐らく、これからそれ以上のことをする。

コンビニに自転車を止め、ミニッツメイドを購入して依子に手渡す。

真つ暗な街道を依子と二人で歩くと、すぐ近くでキジバトが鳴いた。見上げると、外灯に照らされ、エンジュの樹の枝に止まる灰褐色の鳥を発見した。よく鳴くくせに、滅多にお目にかかれない鳥だなと思う。

道を逸れ、薄明かりに包まれた公園に足を踏み入れる。依子は一度足を止めるが、黙って俺についてきた。

靴の裏に感じる砂の感触に懐かしさを覚えつつ、俺は木製のくたびれたベンチに腰掛けた。涼しい風が吹き、少しずつ汗が引いていく。

依子と目が合う。ぴたりと口を閉じ、彼女はベンチのそばで突っ立っていた。

「なにしてんの。早く座れば」

依子は一瞬不快そうな顔を見せたが、結局何も言わず、俺の隣に座った。ミニッツメイドを三分の二ぐらいまで飲み、キャップを締めて膝の上に置く。それから依子は、じつと前方へと視線を向け続けていた。関係ないけど、依子のスカートのポケットからまりもっこりストラップが顔を出していて、少し滑稽だった。

しばらくの沈黙のあと、なるべく声を柔らかくして俺は訊く。

「五頭の話が終わったあと、お前、一番最初に教室出てったよな。やっぱ、あれ以上あそこに居んのかって、超気まずいよな」

「でもそのあと、すぐに純が追いかけてきて、つかまった」

「だって、俺もたまには依子と一緒に帰りたいし」

依子は黙し、少しずつ視線を足元へと落としていく。ときどき吹いてくる風が涼しいが、あれからずっと何も飲んでないし、喉が渴いた。

俺は依子の前に手を出す。

「飲まして」

依子は膝の上に置いたミニッツメイドを手に取り、俺の手のひらに乗せる。まだ買ったばかりなので、ひんやりとしている。開けたキャップを適当に地面に投げ捨て、ペットボトルを傾ける。半分まで減ったところで膝元に下げ、俺は息を吐いた。

「うめえな、ミニッツメイド」

「トロピカーナ」

依子の言っている意味が分からなかったが、ペットボトルを改めて見て気づく。あ、ほんとだ。これトロピカーナじゃん。マジでどうでもいい。

しばらく、俺たちはキジバトの鳴き声に耳を傾けた。人差し指と親指でペットボトルをつまみ、ぶらぶらと揺らす。煙草を一本吸って、吸い殻はペットボトルの中に入れた。

「帰らないの」

癪にさわるような口調で依子がつ。俺は少しいらついてしまっが、しかし出来るだけ優しく答える。

「まだ、ちょっと聞きたいことあって」

依子が何も言わないので、俺は続ける。

「お前、俺のこと好きなの？」

依子が何も言わないので、当然場は無音に包まれる。キジバトの鳴き声も、今は聞こえてこなかった。

ふいに、依子がこちらを見る。見てきたはいいものの、やはり何も答えてくれなかった。腹立つくらいは無表情で。

「なんか言えよ」

ペットボトルを持ち上げ、依子の頭の上でひっくり返す。灰色が

かったオレンジの液体が依子の髪に降りかかる。額から頬にかけて濁ったものが流れ、髪から伝った液体も合わせて、彼女の制服のブラウスを汚す。ペットボトルの口から煙草の吸い殻がこぼれ、一瞬だけ頭に乗る、滑り落ちてベンチの板にへばりつく。

空になつたペットボトルを遠くへ投げ、俺は依子を見る。

依子は、それでも表情を変えなかった。

「べつに好きじゃない」

「だろうな」

「むしろ嫌い」

「俺も嫌い」

それから、見つめあつたままの無言。言い訳すらせず、超然とするばかりの依子にまた苛つく。何を考えているか分からない面にも腹が立つ。

はつきり言つて、高校でこいつと再会して以来、俺はこの感情のない目が嫌いだった。悲劇を終え、何もかもを失い、感情すらなくしてしまいました、みたいな、無慈悲で悲観的な目が大嫌いだった。「ねえ、なんか言うことないわけ？　なんでさっきから俺の質問に答えるばつかなの」

依子はそれでも、何も答えなかった。俺も一応彼女の発言を待つてみたが、十秒で限界だった。

手を伸ばし、依子の左頬をねじるように掴む。依子が目を細くし、かすかに眉根を寄せて睨んでくる。

「この口は何のためについてんだ？　おい。四六時中喋らねえし答えねえ。珍しく口開いたと思ったら、自分の都合のいいことしか言わねえだろ。自分の言いたいことしか言わねえだろうが」

さらに頬をつねり上げると、指がずれた分だけ、その跡がほんのりと赤く染まつていた。依子は、痛みを耐えるように目をつむる。

「お前何様だよ。どういふ脳みそしてたら、あいつの前で二回もあんなこと出来んだよ。行為自体に意味はない？　ありまくりだ馬鹿意味がないのは、てめえの頭ん中だけの話だろうが」

「純が嫌いだって言ったのに、早川さんがいつまでもしつこいから、あたしは、純のために」

「俺のため。あー、あれ、俺のためだったのね。じゃあ聞くけどさ、お前が誰かのために考えて動いたり、発言したことが、今の今まで一度でもあったのかよ！」

依子が俺の腕を掴む。爪が徐々に食い込んでくるが、俺は構わず続けた。

「鍋島のことだって、お前が死なせたっていう昔の友達に重ねて、好き勝手にやってきただけじゃねえか。あれで罪滅ぼしのつもりかよ。笑わせんな。鍋島はなんだ、てめえの罪悪感から逃れるための道具か。結局お前がやってんのは、一方通行で自分本位な妄想とんち騒ぎじゃねえか。違うかつ！」

依子が少しずつ目を開いていく。俺が依子に対して、ここまで不満や怒りを抱えていたことに驚きだった。自分の中でもはつきりとしなかった感情の正体は、不思議なことに、俺自身の口から次々と吐き出されていく。

さらに何かを怒鳴り散らそうとした所、不意に依子が右手を振りかざし、俺の頬を叩いた。指先が耳に当たったのか、頬自体の痛みより、鼓膜がキンと震えて全身に不快感がただよ。俺はたまらずベンチから立ち上がり、耳ごと頬をおさえて依子から距離を取る。「いってえ」

見ると、依子も無意識に手が出たらいいのか、ばつの悪そうな顔をしていた。だからといって俺が冷静になれるわけではなく、むしろ、そういった依子らしくない表情にも苛々してきて、視線で殺せるぐらいに睨みを利かせて依子へと飛ばした。半身程度にベンチに腰掛けていた依子が、それとなく俺から顔を逸らす。

ふと俺は、依子のスカートに目がいく。スカートのポケットから、携帯から繋がるブルーガのまりもっこりストラップが露出している。なんだかもう、俺は訳が分からなくなっていた。

「それ、返せよ」



何言つてんだろ、俺。依子も似たような心境なのか、疑問を浮かべて見返してくる。

「そのストラップ、返せよ。また周りから勘違いされんだろ。俺があげたやつ、いつまでも大事そうにつけてるみたいに思われて、俺も気分悪いんだけど」

彼女は唇を噛み、まりもっこりをポケットの中に隠す。

「やだ」

「返せつつつてんだろ」

依子の手首を掴む。無理矢理奪い取ろうとすると、依子が敵意を込めた目をして、掴まれていない自由な方の手をぐっと握った。殴られるんだろうな、ということは分かったけど、当然避ける暇はなく、やっぱり殴られた。わりとマジっぽく。舌が切れたらしくて、血の味が口内を満たした。

俺は依子の手首を掴んだまま後退り、依子は立ち上がる力を利用して地面を蹴る。今度は、額を思いつきり俺の鼻めがけてぶちかましてきた。めち、みたいな生々しい音が頭の中で響いて、結構な量の鼻血が流れ落ちた。

俺は尻もちをつき、依子の手首を放す。今まで経験したことのない量の鼻血で、ありえないくらい出てきて、逆に笑いそうになってしまったが、もちろんそんな隙だって与えられず、依子から肩を押され、俺は地面にひれ伏した。

すぐさま、腹を圧迫されるような感覚がする。空を見上げて、俺はやっと状況を把握する。依子が馬乗り状態で、俺の胸ぐらを掴んでいた。

依子ってこんな動けるんだ、と何故かそんな冷静な思考がよぎる。依子が無言で俺を殴り始めた。容赦なく、しかも顔面しか狙ってこない。これでこいつが無表情だったら、俺はこのまま殺されるのだろうと覚悟を決めるが、依子の顔には様々な感情があった。

失望とか、怒りとか、悔しさとか、色んなものが爆発していた。

半分無自覚に、倒れたままの俺もやり返していた。一発だけパー

で叩き返すが、それだけで依子の右の鼻穴から血が垂れ出てきて、彼女の頭も少しふらつく。痛いくらい体力の差を感じた。小学生のときとはもう違うんだな、ということが分かって、いや、最初から分かっていたものを身体で理解できて、虚しくなって、俺はもう、黙って殴られることに徹した。

奥歯が一本、地面に転がっていた。俺は公園の砂に頭をつけたまま、それを見つめていた。

見上げると、依子が泣きそうな顔をしていた。でも、ぎりぎり泣いていなかった。鼻血を拭いた跡があり、全体的に痛々しい顔だった。たぶん俺ほどではないんだろうけど。

俺は悪あがきに唾を吐く。血の混じったそれは依子の頬に付着し、時間をかけて頬を伝って行って、ただいまをするように、俺の制服の上に戻ってきた。

「どげよ」

吐き捨てるように言うと、依子はゆっくりと立ち上がる。その両手の拳は赤く擦り切れており、俺も相当殴られたんだろうなと思った。

顔が曲がっているのではないかと思うほどの痛みに耐え、上半身を起こす。息をするたびに口の中で刺さるような激痛が走り、頭がきしんで熱を帯びる。

「お前、やっぱ一回いじめられた方がいいよ」

吉岡美野里と同じ言葉をぶつける。

依子は俺を見下し、息を荒げて言い捨てる。

「しね」

「てめえが死ね」

睨み合い、やがて、依子が背中を見せて歩き出した。そのとき、空気を読み終えたキジバトが再び鳴き声を上げ始める。

結局、まりもっこりは返してもらえなかった。

俺は胸ポケットに手を入れ、煙草の箱を取り出す。ふたを開けると、案の定、煙草は全て折れていた。しばらくそれを見つめて、まあいいや、とそのへんに箱を放り捨てる。

早く帰って鏡見たい。

家に入ると、ちょうど風呂から出てきた親父と廊下で遭遇する。

親父はまさに、ぽかん、みたいな顔で俺を凝視した。

「どうした、純一。死人みたいな面して」

「野生のメスゴリラが襲いかかってきた」

そう答えると、親父は十秒間くらい俺を見つめて、

「災難だったな」

と言つて廊下を歩いて行った。

革靴を脱ぎ、靴箱へと叩き込んで納戸に向かう。押し入れを漁りつつ、居間に向けて声を張る。

「母ちゃん、救急箱どこだったけー」

すると、即座に襖から母ちゃんが顔を出し、俺はちよつとびつくりした。母ちゃんは納戸の明かりのスイッチを入れると、俺を見てかなり引いたような顔をする。

「純一、どうしたの。そのゾンビみたいな顔」

「野生のメスゴリラが襲いかかってきた」

母ちゃんはちよつと吹き出してから、

「あー、そう。それじゃあ仕方ないわ」

そう言つて、タンスの上から救急箱を降ろした。夫婦だなあと思つた。

親父も母ちゃんも大して心配してくれないので、怪我也大したことないのだろうと思ひ、部屋の姿見鏡をちら見すると、やつぱり全然大丈夫そうじゃなかった。死人以上、ゾンビ以下の顔だった。

母ちゃんに手伝ってもらい、傷の手当てを済ませ、風呂に入る。口ん中切れまくってるし飯を食うのも憂鬱なので、自分の部屋に戻り、ぐだぐだしつつ煙草を吸った。煙草の煙も傷に染みた。

やがて、風呂上がりの全裸の弟がタオルを振り回しながら部屋に乱入してきた。水を十分に含んだタオルで俺をしばきに來たようだ

つたが、俺の顔面の異常に気づいた途端、弟は鳩の糞でも見るかのような目つきを向けてきた。

弟はその場に立ち尽くすばかりで、こっちもだんだん、鬱陶しくてたまらなくなってくる。

「いつまでも汚ねえもん見せんな。さっさと服着ろ」

タオルで頭を拭きつつ弟は部屋を出て行く。俺はベッドに横になり、図書室から持ち出したリアル五巻を広げた。

十分ほどして、全裸を卒業した弟が、再び俺の部屋に舞い戻ってくる。俺の隣に寝ころび、横たわったまま、俺の横顔を見つめた。

「依子姉ちゃんと喧嘩したの」

どきりとして、変な汗をかく。流し気味に弟を見る。

「なんで分かん。気持ち悪っ」

「だって、顔しか怪我してない」

「それがなんで、依子と喧嘩したことになるんだよ」

「依子姉ちゃん、兄ちゃんと喧嘩するときは、顔しか殴らない」

たしかに、今日は顔面タコ殴りにしてきやがったけど、昔からそうだった。俺でさえあんまり覚えてないのに、当時物心つくかつかないかぐらいの弟が覚えてるなんて、俺らが兄弟なのが本気で怪しくなってきた。ちよっとだけでいいから記憶力分けてほしい。

「姉ちゃんは、兄ちゃんの顔が嫌いなんだよ。昔言ってたもん。いつも睨んでるみたいだし、見下してるみたいだし、とにかく殴りたくなる顔してるんだって」

自分でもなんとなく分かるのが悔しい。

「だから俺って、よく人から殴られんのかな」

既に鍋島からグーもらってるし、たまに五頭からげんこつ食らうし、親父は俺が文句言うたびに横っ面ひっぱたいてくるし、当の弟は、三日に一回のペースで理由もなく襲いかかってくる。

「優しいのって、顔に出てくるんだよ」

「なにそれ。もっと優しくなれってか。何なんだよお前、俺に説教しにきたの？」

「ぼくも一発殴っていい？」

「聞けよ」

もちろん馬耳東風で、弟は横になった状態から、力士風の突っ張りをかましてきた。痛んだ頬骨が、みしりと鳴った気がした。何故、怪我人相手にこんな真似が出来るのだろう。

呆然としたまましていると、弟はおもむろにベッドから起きあがり、無言で部屋を出ていった。

弟の手の大きさ分だけ頬がひりひりとして、痛みと痒さが必要以上にとわりついてきて、何故だか無性に悲しくなってきた。

弟が覚えているくらいだから、親父も母ちゃんも、実は気づいてたんじゃないか。譲歩して、そこまでは勘付かれてもいい。

どうしてなのか、俺が依子にしたこととか、言ったこととか、そんな知られるはずのないことまで見抜かれているような気がして、なんていうか、ものすごく胸が苦しい。そんなの、どう考えても俺の思い込みなんだけど、恥ずかしくて穴があったらダイブしたいくらいだった。あわよくば、穴の深さが四百メートルくらいあったらいいのになと思った。

涙ぐんでいるのに気づいて、リアル五巻を壁に向かって投げつける。頭から布団を被ってうんうん唸り、一時間くらいそうしていたら、いつのまにか寝てた。

翌日の土曜日。

本格的にやることなくった俺は、昼を過ぎた頃、散歩に出かけることにした。

なるべく顔を隠すため、マスクをして、サングラスをして、夏なのにニット帽を被った。完全に不審者だった。マスクとサングラスを外した。

居間に降りると、母ちゃんが「出かける？」と訊いてくる。うなずくと、本が五冊入ったエコバックを渡された。

「それ、父ちゃんが図書館で借りた本。返ってきて」  
俺は家を出た。自転車で行こうかと迷ったが、暇なので歩いて行くことにした。

道すがら、エコバックの中を見る。料理の本が二冊、護身術の本が一冊、鉄道写真集が一冊、経済のハウツー本が一冊入っていた。親父の趣味はよく分からない。

住宅路を二十分ほど歩くと人見川があり、川沿いの遊歩道を四十分ほど進むと、市の図書館に到着する。

その近くには中央総合病院があり、俺は図書館の駐車場から病院を遠望する。あそこは、叔父さんの入院する病院だ。

そういえばと記憶を掘り下げる。昨日の五頭の話の中に、早川の搬送先の病院名が出ていた気がする。たしかあの病院だったはずだ。まあ、町で一番大きいところだし、偶然でもなんでもないか。

暑いので、さっさと図書館に入ることにした。

入り口の自動ドアが開くと、ほどよくきいた冷房にほっとして、俺は中へと入っていく。受付に本を返却するとき、受付係員が俺の顔を見てぎょっとしていた。気にしないようにする。

適当に館内をぶらつく。

フットサルマガジンを立ち読みして、それから求人情報誌コーナーに行く。ラックに無料配布があったので、適当に一冊持ち出した。この図書館は一階と地下に分かれており、一階の階段柵から覗くと、ホールのように開けた地下階を望める。柵に寄りかかって見ると、地下には自習スペースがあるようだった。

あそこで求人読もうかな、と考えて逡巡する。目があまり良くないから分からないけど、自習スペースに依子らしき人物が居た。そうか、あいつって、土曜は必ずここに来るんだよな。

念のため地下に降り、依子とおぼしき女の背後に近づく。背後五メートルくらいで、半分本棚に隠れながら、その後ろ姿を確認した。色白で細く、プライベートなのに、お行儀よく背筋を正して自習テーブルに着いていた。どう見ても依子だった。しかも、土曜日限

定のパイナップルヘアースタイル。なんだかんだで気に入ってるんだろうな。

逃げるように、静かに階段を上がる。どうして依子を前に、ここまでこそしななければならぬのか、本当に情けなくて仕方ないが、俺はそのまま図書館を出た。

帰りの遊歩道を歩いていて、河川敷の土手に見知った横顔を発見する。

彼女は、オーバーオールの上半身部分を前後に垂らし、上は涼しげな赤銅色のタンクトップを着ており、キャップにリストバンドという、イメージ通りのボーイッシュな格好をしていた。土手に座り、例のレッドカラーのDSでぶよぶよをしている。

「暇そうじゃん、村瀬」

彼女の隣に腰をおろす。斜面には土手草が生えており、あんまり尻も痛くない。村瀬はぶよぶよを停止させ、顔をあげる。

「おっす、今泉。相変わらずひでえ顔してんね」

「え、うん」

相変わらずつてなんだ。なんで傷だらけのこの顔を俺のデフォルトみたいに言うの？

村瀬がまたぶよぶよを始めた。怪我についてはやっぱり突っ込んでこない。逆に助かるけど、なんだか釈然としない。

「今泉、その求人誌どうしたの」

村瀬はDS画面を見つめたまま言った。俺は求人情報誌をパラパラとめくる。

「夏休み、バイトでもしようかなって。友達のスマホ壊したからさ、弁償しなきゃなんだよな」

友達っていうか、元だけど。

「あたしも夏休みはバイトするよ。部活やってねーし暇だし金ほしいし。もうアルバイト申請も出したしー、バイト先も決まってるし



「なに、アルバイト申請って」

「いや、うちの学校、基本バイト禁止じゃん。長期休暇なら申請出せばオツケーみたいな。五頭せんせーが何度も説明してたでしょ」

「あー」

そういえばそんなこと言ってた気がする。

「バレなきゃよくね？ 面倒くさいし」

「いいんじゃない」

すぐくどうでもよさそうに返された。適当な話題すら浮かばないので、場しのぎ程度に煙草をくわえる。これ吸ったら帰る。

「病院行ってきた」

村瀬が六連鎖を達成させつつ言った。病院と聞いて、叔父さんのことと、早川のことを思い浮かべた。村瀬が俺に振る話だから、早川のことだろう。とっさに返す言葉が浮かんでこなくて、火を点けながら黙っていると、村瀬が続けた。

「沙樹のお見舞い行こうと思ってさあ、美野里と受付行ったんだけどね、面会謝絶だって。精神状態が安定するまでご面会できませんん、って。アポなしで行くもんじゃないよな、こっぴつ」

「……ふうん」

何故この話を俺にしてくるんだろう。もしか俺は責められているのだろうか。俺と依子のせいどころなっただぞって。

しかし、村瀬の口調は淡々としており、ただ事実を単調に語るのみだった。ていつか、ぶよぶよやりながらだし。

俺は辺りを見回した。まっさらな土手は青々としており、周囲には人の影すら見られない。

「吉岡とって言ってたけど、お前一人なんだな。あいつ、もう帰ったの？」

「うーん」

気難しそうに唸って、村瀬は一度ぶよぶよをポーズさせ、日光を浴びてきらめく人見川を見つめる。キャップのつばを触って、また

ぶよぶよを再開した。

「それなんだけどさ、聞けよ、今泉。これがひでえ話なんだ。病院出たあと、美野里にね、これから二人で遊びいかねーって誘ったんだけど、なんと断られたんだ。せつかくの休日なのに」

声のトーンが微妙に落ちてる。俺は紫煙を前方に吹き出し、彼女の横顔を見る。真顔なのか、落ち込んでいるのか、どちらとも取れるような表情をしていた。

「吉岡、そういうテンションじゃなかったんじゃないの。空気読み間違えたんじゃないね」

「KYなこと言ったあたしもあたしなんだけど、でも、断り方がさあ。いや、そもそも断られたっていうか、なんだろ……」

村瀬は画面を見つめたまま、吉岡の甘ったるい感じの声真似をして言った。

「うけるね、それ。私が、彩音ちゃんと二人で遊びに行くの？ ねえ、勘違いしないでほしいんだけど、私、彩音ちゃんのことなんて最初から友達だなんて思ってないよ？ だってさ！ ひどくない！？」

俺は言葉を失って、そつと村瀬から視線を外した。安易に、「ひどいな」なんて返せるレベルではないと思った。

「しかも、美野里はこう言ったわけ。彩音ちゃん、いつも人の身体触ってくるでしょ。うざいし、きもいし、私ね、あなたのそういう所、虫酸が走るくらい嫌なの。でもね、友達じゃなくても、仲良くすることは出来るでしょう？ だって」

「……意味分かんないんだけど」

「あたしも最初は意味分かんなかったさ。でも、つまりはこういうこと。学校では友達の振りをしてあげるけど、他ではうざいから関わってこないでね、みたいな。馬鹿にしてんのかっ。お前誰だよ。なに上からもの言ってたんだよ。お前は女帝か？ お前は女王様にもなつたつもりなのかっ」

半分笑いながら言う様がさらに痛々しい。黙って煙草を吸って

ると、村瀬がしつこく、「ねえひどくない!？」と尋ねてくるので、俺は声を低くして、「ひどいな」と答えた。

閑散として、DSのBGMしか聞こえてこない。川の水面を魚が跳ね、波紋の消えていく様を眺める。儂い気分になって、途切れ途切れな雲が泳いでいく空を見上げた。

「ばたんきゅー。吐き出される息。」

「ぷよぷよって、くつついたら消えるよな」

「なにそれ」

「いや、あたしみたいたなあって思って」

手に触れる草の感触をたしかめる。千切って、風に乗せて飛ばすと、空中でちりぢりになって視界から遠ざかる。手の砂を払い、またポケットの煙草へと手を伸ばす。火を点けて息を吐くと、煙も空気に溶けてなくなった。

「なに泣いてんの」

「……泣いてねーし」

村瀬はDSを閉じ、それを片手に握りしめ、地面を蹴るように立ち上がった。俺はそれを静かに見守る。

DSが彼女の手から放たれた。回転しながら飛んでいくレッドカラーは、やがて川の水面とぶつかり、さっきより何倍も大きな波紋をつくる。もとの穏やかな水流になるのを待って、村瀬がゆっくり腰を下ろした。

「あーあ、もったいね」

「あんなの、もう飽きちゃったし。飽きたもんは即捨てる。これ、人生をより無駄なく生きるための常識だぜ」

「よく覚えとく」

村瀬はリストバンドで目をこすって、俺が吐く煙を目で追った。どんどん吐き出されて、どんどん消えていく。

横を見ると、今度は体育座りで腕に顔を埋めていた。もつと素直に泣けばいいのに、と俺は思っただけ。

「なんでさっきからキレてこないの。あたしに気い使ってるのかよ」

「なんの話だよ」

「昨日はつきり分かったじゃん。あたしが平野をいじめてるってこと。いじめ、あの調子じゃまだまだ続くだろうし、あたしもやるよ」  
煙草を吸うか、携帯灰皿に入れるかを迷って、結局灰皿行きにして俺は答える。

「いじめりゃいいじゃん。俺、もう関係ないし」

「なにそれ。最低だね」

いじめる側に言われるんだから、たしかに最低なんだろうな。臀部の砂を払い、土手をのぼる。遊歩道に乗り、百メートルほど進んで、さつき居た場所を振り返る。村瀬はもう居ない。

代わりに、道の先から自転車に乗ってやってくる者がいた。目を凝らすと、依子だった。

ニット帽を深く下げ、斜め下のアスファルトを見下ろす。自転車の車輪と、ペダルを漕ぐ依子の足が通過していく。そのあとも、十分ほどその姿勢で立ち尽くした。そろそろ頭が熱くて仕方なかったが、結局帽子は脱げずに終わり、後ろめたさを抱えるように俺は帰路についた。

翌々日の月曜日。

ちよつと遅刻して学校に到着し、生徒玄関に入る。

靴箱の正面には、二年生の階へとつづく階段があるのだが、何故かその階段の傍には、ぼつんと机と椅子が置かれていた。

その後、廊下で依子とすれ違う。お互い目も合わせなかったが、依子が玄関の方へ歩いていくのを見て、そういうことかと得心する。廊下を進んでいくと、二組の教室から宮下が出てくる。ちよつど今、朝のHRが終わったらしい。宮下は俺を見つけると、アホみたいにはっぺを膨らませた。

「もう、今泉くんはやっぱり遅刻？ あんまり遅刻されるとこつちも困るんだよね。宮下、ただでさえ非常勤なんだから。まー、でも欠席じゃなくてよかった。一応、遅刻なしの出席にチェックしたからさ、こつそりと」

ねつ造教師め。地味に助かるけどさ。

じゃあ昼休みに図書室で、と俺の肩を叩き、宮下は廊下を歩き去る。今日は図書室行く気ないんだけどな。

教室のドアを開ける。みんなの視線がこちらに集まる。俺の顔を見るなり、一同、一瞬表情を引きつらせるが、それだけで、グループ各々で談笑が再開される。

予想通りだけど、依子の席は机ごとなくなっていた。

ここまで堂々としたものを見ると、やはり以前とは違うのだなと改めて実感する。

ふいに、俺の背中に、堅い何かがぶつかった。それは見事背骨にクリーンヒットし、反射的に背中をおさえて痛みに耐える。

「じゃま」

後ろを向く。机を両手で抱えた依子だった。やっぱ机の角を当てられたらしい。それっきり、彼女は俺の睨みを無視し、机を持ち直

して教室に入っていく。何も言わず、俺も教室に入る。

自分の机へ行く途中、添野の席を通りかかるとき、彼から腕を掴まれ、引き留められた。俺を見上げ、添野は口元に笑みをたたえる。「おい、今日は平野と仲良く遅刻かよ。めでたくカップル公認したからって、あんまり目立ち過ぎんなよ」

左隣の女子が笑いをこらえる。俺はため息を吐き、わざと周りに聞こえるように舌打ちをして、掴まれた腕を振り払った。啞然とする彼を睨み据え、椅子の足を蹴ると、その瞬間、教室中がしんと静まりかえった。

再び歩を進めると、あちこちから冷やかすような笑いが漏れ出す。机を通り過ぎていくたびに、ひそめた会話の内容が聞こえてくる。

「見た、今の」「本気で恥ずかしがってるよっ」「つか何あの顔？ やばくね？」「おい目合わせんな」「マジびびった。添野くん殺されるかと思っただし」「中学生かつつの」「おいやめろって、もう可哀想だろ」

奥歯を噛んで、誰の顔も見ないようにする。悔し過ぎて泣けてくるが、表情を変えないように気を付けて席に着く。椅子に浅く腰掛け、視線を手元へと落とす。

俺への注目が止み、それを見計らうように、後ろから控えめな声がかかる。

「久しぶりですね」

俺は振り返らずに答える。

「三、四日振りだし、あんま久しぶりって感じしないんだけど」

「仕方ないじゃないですか。家族以外で人と話すの、私、久しぶりなんですから」

「あっそ」

切り捨てるように言って、俺は机に突っ伏した。

二時限目の体育。身体を動かす気分でもないので、俺は顔の怪我

を言い訳にして、制服のまま見学と雑用に徹した。

一年の体育にはプール授業がないため、夏の時期でも体育館の球技授業となる。男子はバスケット、女子はバレーボールに別れ、体育館の中央には防球用の間仕切りネットが張られた。

雑用とは言うものの、俺はほとんどサボるように防球ネット際に座り込んでいた。男子連中は後先考えずに無邪気にボールを追い合っている。俺もつい最近まではあんな感じだったけど、こうして冷めた心持ちで眺めてみると、公園でフリスビーを取り合う数匹の飼い犬のように見えてきて、なんだかちよつとだけ笑えた。でも、やることなく死ぬほど暇でもあった。

頭を傾け、後方を盗み見る。

依子も、俺と同じように制服のままだったが、あいつの場合、見学理由を推し量るまでもなかった。審判台に膝を正して座り、無感情に首を左右に動かす、作業的に得点板をめくる。そんな彼女の後ろ姿を、俺は暇つぶし程度に眺める。

依子の斜め後ろでは吉岡と村瀬がトス練習をしており、これがまた、寒気がするくらい喧しい。

ふいに、ネット越しに俺の向かい側へと腰掛ける者があった。

彼女は、普段は二つにしているはずのおさげを一つにまとめたり、心なしか、俺の目には少しやつれて見えた。なのに、彼女は妙なくらいに、生き生きとした目をして言った。

「早川さんのこと、さっき、宮下先生から聞きました。大変だったみたいですね」

そう言うつと、鍋島は体操服の襟を引き、軽く口元を隠すようにした。

「やけに見せびらかすようにいじめるなあと思ったら、そういうことだったんですね」

俺は腰を引き、わずかながら鍋島へと近づいてから、声を低くして言う。

「平気そうだな、お前」

鍋島は襟を引いたまま、なんのことだという風に小首を傾げる。あまりにわざとらしいその仕草に、俺は不快感と気持ち悪さを同時に覚え、彼女からそつと視線を外した。

やがて教師から、男女ともに五分間の休憩を取るようにとの指示が出る。指示を受けてから喧噪が収まるまで、若干のラグが生じるが、その間に村瀬が弾いたバレーボールが、吉岡のもとを大きく逸れて飛んでいく。

ボールの先には、依子が居た。

自分に向かつてきたのだと分かると、流石の依子も身を硬直させる。俺も少しぎくりとしたが、かろうじて依子が半身を縮めると、ボールは彼女の頭すれすれを通り越していった。それを見届けた吉岡はそれとなく笑みを浮かべて、くすくすと笑いながら村瀬のもとへと走り寄っていく。

「もう、彩音ちゃんつてば。いくらなんでも狙いすぎだよ」

「えー？ そんなつもりはなかったんだけどな」

明らかに作想的に打たれたボールだったが、村瀬自身も自覚しているためか、その口元で作られた笑みは不気味だった。それ以上に不自然なのは、あの二人の和気藹々とした光景のだけだ。

「女子つて、偽るの上手いよな」

「ですな」

彼女らの事情を知ってか知らずか、ネット越しの鍋島は短くそう答える。流し目に視線を交わしあい、俺は静かにその場から離れた。

昼休みになって、屋上で弁当を食べるため席を立つと、何故か鍋島まで俺のあとを着いてきた。教室を出てからそれに気付き、廊下で足を止め、俺は怪訝に振り返る。

「なんで着いてくんの」

「一緒にお昼を食べるような友達、もう今泉くんくらいしか居ないですから」



この状況で平気そうな笑みを見せる彼女は、もう俺の知る鍋島ではないように思えた。顔は同じなのに、誰か別の人物と対話しているような気分までする。俺自身、ただでさえ複雑な心境の中、ひしと着いてくる彼女をどう追い返そうかと頭を悩ませる。

ふと、教室から城川が出てきて、おずおずと俺たちのところへ歩み寄ってきた。

「あ、あの、由多加ちゃん」

鍋島が振り返る。彼女の顔からは、感情が失せていた。その反応にたじろぎながらも、城川は喉を鳴らして口を開く。

「えっとね、わたし、この前のこと、全然気にしてないから、だから」

「だから、一緒にご飯を食べましょう、ですか？」

「あ、うう、うん……」

弁当箱の紐を握ってうつむく城川は、母からの叱りを受ける意志薄弱な童女のように見えた。そんな彼女の目を覗き込み、丁寧な口調で、かつ突き放すように鍋島は問いかける。

「どうして私なんかより、平野さんと一緒に食べてあげようとしな  
いんですか？」

その言葉に貫かれ、城川の唇が震える。瞼を開ききり、視線を教室の方へと泳がせ、うめきにすら聞こえるような返答をする。

「それは、由多加ちゃんと、その」

「私との関係を取り戻したいからですか？　ねえ、城川さん。今はそんなことをしている場合じゃないですよ。ほら、見てくださいよ」

鍋島の瞳が動き、教室内部を捉える。そこには、床の上で上下反転した弁当箱があり、撒き散らかされた米やおかずを、何の躊躇いもなく手で拾いあつめる依子の姿があった。

周りで昼食を食べる生徒たちは、一切彼女を手伝おうとせず、むしろ、初めから見物を目的としたように、それぞれが声を高くして笑いあっていた。

それ以上見る必要はないと切り捨て、俺は城川へと視線を戻す。彼女は、教室を見ようともしていなかった。そんな城川に、鍋島はきつく問い詰める。

「平野さん、あれじゃもう、お昼ご飯食べられませんよね。ねえ、可哀想だと思いませんか。私とご飯を食べることなんかより、正常な良心を持ち合わせた人なら、ましてや友達なら、普通は、彼女とお昼を共にしようと考えますよね？」

城川は後退り、呼吸を乱したように喘いで、開いた目に涙を溜める。ふらつき、廊下の壁側へと後退していく。それでも鍋島は詰め寄り、酷薄な詰問を連ねる。

「私には何も言う資格はない、城川さん、あなた今そう思いましたよね。たしかに、私にはそんなもの、欠片もありませんね」

「だんだん、これが自分へ向けられた言葉のような気がしてきて、俺は黙り込み、彼女の言葉を胸に沈める。」

「じゃあ、城川さんはどうですか？ あなた、いつまで被害者振っているつもりですか？ 私はね、今のあなたと同じなんですよ。いじめが大嫌いで、見るもの嫌なくせに、自分がいじめられるのが怖いから、絶対に助けない。いじめられた者にしか分からない恐怖心があるから、絶対的に、助けない。私たちはね、その恐怖心を盾に自分を守っているんです」

廊下の壁に城川の背中が付き、徐々に降下していく。その様を見下ろしながら、鍋島は自嘲的な笑みを浮かべる。

「城川さんは、どうしてそれを自覚しようとしなんでしょうか？ どうにかしなければいいや、誰かがなんとかしてくれる、本当はそう思っているんですよ。最低ですよ。人でなしにも程があります。私たちがみたいな人間こそ、平野さんの代わりにいじめられるべきなんです。ねえ城川さん、平野さんをかばって、代わりにいじめられてみてくださいよ。ほら、城川さんをかばって、代わりにいじめられた、昔の私にみたいに」

床にへたり込み、精魂が抜け果てたように見上げる城川の頬に、

一筋の涙が伝った。

「昔の私みたいに、人をいじめから庇ったことを、“後悔”してみてくださいよ」

鍋島と屋上へ行き、貯水タンクの段差に並んで座り、弁当袋をひるげる。鍋島は卵焼きを口にし、嚙下してから息を吐く。おいしい、そう言っつて、ぎこちない笑みをする鍋島の顔は、ひどく青ざめていた。

「今泉くん、私、」

口元に手を当て、膝に置いた弁当箱がコンクリートに落下する。一度えすいたかと思うと、鍋島は段差から腰を離してひざまづき、地面に向けて一気に吐き出した。堰を切つて絶え間なく流れ出すそれは、ほとんどが白みを帯びた透明の液体だった。

俺は段差に置いたペットボトルのお茶を取り、鍋島に手渡そうとするが、彼女はひたすら、地面に広がる吐瀉物を見つめ続けていた。ひっかかるような耳障りな呼吸をして、鍋島は泣きそうな目で笑う。

「私、頭おかしくなつたかも」

その日、昼休み終了と同時に、鍋島を保健室へと連れていった。

HRになり、鍋島がそのまま病院に運ばれたことを宮下が教えてくれた。話によると、彼女は先週の金曜からほとんど食事をとっていないかつたらしく、点滴と自宅療養が必要らしいとのことだった。

夏休みまであと三日という時期。もしかしたら、当分鍋島とは顔を合わせないかもしれない。

HRが終了し、椅子に横向きに座り、鍋島の机を見下ろした。ここで初めて知ったのが、その木面に刻まれた悪意だった。彫刻刀がカッターで彫られたのか、一画一画を定規で引いたように、それは悪辣に刻まれていた。

『KY』

よく聞く略語だし、俺もたまに使う。ただ、この状況での『空気を読む』という行為の悪質さに、今の俺は、ただ目を背けることしかしない。このクラスで出来上がっている空気というのが、いじめを促すこと、いじめを見過ごすことであり、みじめなことに、俺もある意味その荷担者だった。

今日、鍋島が見過ごしてきたいじめの数々も、この『KY』が引き起こした結果なのだろう。城川に振りかざした言葉は、鍋島自身に向けた言葉でもある。結局彼女は、机に彫られた二文字と、自身の意志に挟まれ、限界を迎えた。

すぐそばで気配を感じて、俺は顔を上げる。

城川が鞆を片手に提げ、制服の胸あたりをぎゅっと掴んでいた。机に刻まれた文字へと徐々に視線を落としていく。

「この言葉、わたし、昔よく言われた」

呟いて、鍋島の席に座り、床に鞆を下ろす。彫られた二文字を指でなぞった。

「初対面のひと、すぐ怖がって、なかなか友達も出来なかったし。」

喋らなきゃいけないときでも、うまく喋れなくて、喉がつつかえる。怒られたり、からかわれたりしたら、すぐ泣いちゃって。だから、ばかにされて、何回も言われた。何回言われても、ぜんぜん慣れない言葉だった」

三分の1だけ開放した窓から風が入り込み、睫毛を撫でた。城川は胸辺りでゆるく拳を握り、こちらまで聞こえてくるような小刻みな息を繰り返す。

「KYって言われるたびに、もしかしたらわたしは、ここに居ちゃいけないんじゃないかって思った。わたしがここに居るのは何かの間違いで、わたしが死んだって、学校は何も変わらないんじゃないかって。わたしは、綺麗な風景の中でぽつんと浮かぶ、異物みたいなものじゃないかって」

教室に残っていたのは、俺と城川、そして、依子だけだった。依子は鞆を肩にかけ、生徒用ロッカー付近に立ち尽くし、前方の黒板を静観していた。彼女の左手を注視する。ボールペンで刺されたような赤くて黒い点が、親指の付け根付近に一つ穿たれていた。

「でも由多加ちゃんは、空気なんか読めなくても大丈夫、って言うてくれた」

横風にすら負けてしまいそうな繊細な声。

「無理に空気を読むと、わたしがわたしじゃなくなるから嫌だって、昔、由多加ちゃんが言うてくれた。自分がしたいことをしたいよう出来るような、純粹で素直な子でいるのが、一番素敵なんだって、由多加ちゃん、言うてくれたから」

俺は頭を垂れ、顔を左手で支えた。左目を閉じ、手のひらにずっしりと沈める。

「だからわたし、いじめ、止めてみる。KYでもいいから、わたし、依ちゃんを助けてあげたい。由多加ちゃんが言うてくれたように、わたしは、自分がしたいようにしたいから、大好きな友達と一緒に笑ったり、一緒に泣いたりしたい」

瞳を動かさず、城川と目を合わせる。その目を見ると、余計に自分

の醜さを露呈されるようで、俺はほとほと嫌気がさして、左手で顔を隠しきった。

それを見届けるように城川は席を立ち、依子と並んで教室を出て行く。

自分の意志を実行に移すのがどれだけ難しいことか、城川は分かっているのだろうか。それが出来ない奴ばかりだから、俺たちのクラスはこんな風になっているのに。

翌日の朝、教室の扉を開けると、女子の一人が黒板に何かを描いていた。

彼女は俺を認めると、慌ててチョークを板から離した。その挙動に、そこに何が書かれているのか、あらかた検討がついた。俺は例の如く深いため息を吐き、彼女の手にするチョークを叩いて落とし、女子は叩かれた手を抑え、痛みを訴えるかのような仰々しいしかめっ面をしたが、俺は構わず、その肩を押して退かし、黒板に書かれたものを見ないように、雑ばくに黒板消しで拭い去った。

周囲のリアクションを相手にするのも面倒なので、速やかに移動し、自分の席に着く。

その後依子が入ってくると、教室内のあちこちから含み笑いが聞こえた。

依子の机の上には、濡れた雑巾が数枚張り付くように乗っており、さらに、コンビニで買ったような500mlの牛乳パックが無造作に転がっていた。机の端から雑巾が垂れさがり、その先から白く濁った液体が滴る。

依子の後ろから城川が顔を出し、一瞬身を引き、頬をこわばらせた。彼女らしい反応はそこまでで、すぐさま教室後方のロッカーに向かい、箒とちりとりを手に依子の机へと戻ってくる。

「片付け、手伝う」

ひたむきな口調で城川が言うと、依子が無言で箒を取った。場が

静まりかえり、誰もが不純物を見るかのような目をする。いくら彼女らが純正だとしても、不純だらけのこの環境の中では、二人は異物に他ならないのだ。

「城川」

誰かがぼつりと言い、雑巾をつまむ手が止まる。

「空気」

投げ捨てられたように強調したその言葉に、城川の肩が次第に上下し、呼吸が乱れ始めた。ちりとりへと放りかけた雑巾が、宙ぶらりんに停止する。黙然とした教室で、やがて城川が引きつった笑みをする。鞆からポケットトテッシュを出し、つたない手つきで一枚ずつ引き抜く。

「依ちゃん、わたし、机拭くね」

そのとき、城川の背中めがけ、丸められた菓子パンのビニール袋が飛ぶ。それは彼女の後頭部に当たり、かざりと音を立てて床に落下した。

「KY、つってんじゃん」

それを皮切りに、次々とゴミ屑や消しゴムの欠片が放られ、彼女の背中や頭に当たっていく。浅ましい集団心理の迫害に晒される中、城川はひたむきに頭を下げ、一心に机を拭いていく。依子から肩に手をかけられ、押しとどめられようとしても、城川は大きく首を振り、ただ手だけを動かし続けた。

三時限目の物理室に移動する最中、城川の姿が無いことを知ると、俺は踵を返して教室へ向かった。

東棟二階の階段で、うずくまって座る城川の背中を発見する。足を止め、その後ろ姿を見る。頭から水をかけられたのか、髪と制服が濡れそぼっており、人気のない階段の途中、城川は膝を抱えて震えていた。髪の毛先から水滴が落ち、赤く染まった膝に止まる。

「辛いのは、わたしだけじゃ、ない」

薄暗く、静かなその場所で、浮ついたように吐き出された独り言を耳にする。それを確認すると、俺はそつとその場をあとにした。

辛いのは自分だけじゃないとか、やれば出来るとか、ありのままの自分でいいとか、誰かが無責任に発した『人を勇気付ける言葉』に、今だけは、嫌悪しか抱けなかった。



chapter 34 - KY - (後書き)

城川心結さん。いつも泣いてるイメージ。

> i21791 | 884 <

イラスト：ふにょこさん

その日の放課後、親父から一件のメールが届く。

『薄力粉。牛乳。生クリーム。クリームチーズ。ゼラチン。各一点ずつ購入してくるように。金は後で払う』

俺の目がおかしくなければ、どう見てもケーキ作りに使われる材料だった。あの親父がケーキ。山登りしてたらキノコ狩りの婆さんに熊と間違われたあの親父が、あのゴツゴツした野生児みたいなオッサンが、スイーツ作り。いくら料理に熱中してるからって、流石にこれは似合わない。想像するだけでおぞましい。

とはいえ、親父に逆らえば問答無用の鉄拳制裁なので、俺は学校を出ると、まっすぐ駅方面へとおもむき、その向かいにある食料品店に入った。

買い物かご片手に店内を闊歩する。帰宅ラッシュ時間帯の駅前店だけあり、それなりに混雑していたが、なんとか乳製品コーナーを見つけ、生クリームや牛乳などをかごに放り込んでいく。

おばちゃん二、三人と肩をどつき合わせながら、今度は調味料コーナーへとたどり着く。

薄力粉を探していると、ふと、棚の奥から、あんまり顔を合わせたくない奴が姿を見せる。そいつは俺を認めると、やけに朗らかな笑顔をつくり、正面から駆けてくるチビっ子三人組をすいすいとかわしながら俺のもとに近づいてくる。

「奇遇だね。買い食い？」

嘲笑気味に、吉岡美野里がわりと失礼なことを言ってきた。一方の俺は、ふにゃ、みたいなやる気のない愛想笑いで買い物かごを持ち上げる。

「いや、最近暇でしょうがないから、お菓子でも作るうかなくて」  
親父がだけど。

吉岡はかごをのぞき込むと、ちょっと頬を膨らませ、音もなく吹

き出した。

「うわ、意外。その顔でお菓子作り？ うけるんだけど。なに、ギヤップ萌えとか狙ってる？」

うるせえ。

「そっちはなにしてたの」

「私は普通に、学校帰りの暇つぶし。なんなら、買い物手伝おつか」「あー、うん」

激しく一人にしてほしかったけど、せっかくのご好意なので俺はそう答える。なにを欲しいのかと尋ねられ、さっきから探してるクリームチーズやその他の材料を伝えると、吉岡は「それ、このコーナーじゃないよ」と言っただけで棚を折れて進み、その場を去った。

わずか数分ほどして戻ってきた彼女の手には、まさに見つからなくて困っていた材料数点があった。

「慣れてるんだな」

「私たまに、アキラに料理作ってあげてるし」

いきなり聞き覚えのある個人名を出され、俺は一瞬だけ反応に困る。

「彼氏？」

そう訊くと、吉岡は意味深な笑みを返した。

それから、何故か俺は、吉岡と共にサーティワンに入り、のんき過ぎるくらいにカフェモカアイスを食べた。そのアイスは、さきほどの食品店の三階に位置し、開放的に開けたガラス窓から駅前の様子を見下ろせる高さにあった。

吉岡は丸テーブルの向かいに座り、カップの中のベリーチーズをつつきながら、頬杖をついて窓の方を流し見していた。無理矢理に俺を誘ってきたくせに、すごくつまらなさそう。

「なんか面白い話してよ」

こんなことまで言い出す始末。俺は無言でプラスチックスプーン

を動かし、アイスを口に運んだ。なんか、奥歯痛い。虫歯あるのかな。

そのうち、流し気味の辛辣な視線を感じる。

「いまさら、俺とお前で盛り上げられる話とかなくない」

投げやりに言つと、吉岡はむすつとした上目遣いで俺を見上げ、俺と同じく、かなりだるそうに携帯をいじりはじめた。西へと落ちる日の光をはじき返し、無駄にデコレーションされた携帯の表面が輝く。たびたび思うけど、女子って、よくこういう機能性無視の過剰装飾に没頭出来るよな。

食べ終わると一気に暇になり、店内を見回した。おそるべき女性客率。そしてあり得ないくらいの疎外感。うんざりして、俺は窓から街道を見下ろした。

ささやかに賑わう駅前商店街を、一人の小柄な女子高生風が歩いていく。位置的に顔は分からなかったが、歩幅の短い特徴的な歩き方に見覚えがあった。たぶんあれ、城川しろかわみゆ心結だと思う。

吉岡もそれを見ていた。なんの感慨もなく、城川の歩く様を眺めている。

あつ、と吉岡が視線を固定したまま短く声を上げ、俺もそちらを見る。

城川が路上で派手に転んでいた。ヘッドスライディングしたみたいな、漫画のような転び方で、見てるだけで痛そうだった。学生鞆から教科書や文具類が地面に散らばり、よく見ると、すぐそばで薬局の立て看板が倒れていた。彼女はそれにぶつかって転んだらしい。「ほんと、幸薄いよね、心結ちゃんって」

痛みのためか、地面に伏したままピクリとも動かない城川の姿に確かに幸福など欠片も見あたらなかった。しかし、吉岡はそんな彼女に辟易としたようなため息を吐く。

「ま、幸薄いつて言ってもさ、心結ちゃんみたいに背がちっさくて、まさに可愛がられるために生まれてきましたーって見た目の子、大抵は周りが良くしてくれるから得だよな」

城川の周囲にぼつぼつと集う人ばかり。OL風の女性が城川を抱き起こし、制服のほこりを払う。優しそうな老人が地面に散らかったものを丁寧拾っていき、薬局からは若い男性店員が出てきて、人のよさそうな笑顔で看板を立てなおし、彼女の安否をうかがっていた。

城川自身は、助けしてくれる人々を前にして申し訳なそうにおどおどしていたが、吉岡が指摘するように、自分が得をしているだなんて、一切自覚していなさそうだ。

ふと、不機嫌な雰囲気を感じ、俺は半分からかうように言う。

「ああいうの、吉岡でも嫉妬するんだな」

「別に。あそこまでのチビに生まれたら、ちょっと格好悪いもん」  
「不服という顔をして、空のカップにスプーンを放った。」

「ああいう子ってね、見る人が見たら不快でしかないんだよ。高校生っぽい容姿に、いかにも身体の大きさに合っていないって感じの学生鞆。しかも十代後半に入ってから、年甲斐もなくまともなコミュニケーションすら取れないでしょ。なのにあの子、今日みたいに出しゃばっちゃおうし。頭からっぽなのに無理して頑張ってる、結局ぜんぶ空回り。今泉もさ、ああいうの見ててイラついてこない？」

周囲に向け、何度も頭を下げながら足早に去っていく城川の背中を眺めつつ、俺は半ば無意識に答える。

「まあ確かに、イラつくっちゃイラつくのかもな」

「でしょ」

「だからって、いじめていいかつつたら、違うと思うけど」  
携帯から目を上げる吉岡と視線をつきあわせ、俺は抑揚もなく言う。

「城川までいじめられるのはどうなのって思ったよ、今日はさすがに。どうせ、あいつがいじめなんか止められるわけないんだしさ、もうシカトで、城川の好きにやらせときゃいいじゃん」

頬杖をつき、顔を傾けさせたまま、吉岡は携帯を閉じて俺の顔を見つめる。俺は慥然として背もたれに腰を預け、怪訝にそれを見

返す。

「やっぱり変わらないね。その中途半端なカンジ」

「なにが言いたいわけ」

吉岡はこちらの気を逆なでするようなため息を吐き、カップの中のスプーンを手に取って指先でいじる。

「心結ちゃんのこといじめなかつたら、逆に可哀想だよ。だってあの子、いじめを止めたい、っていうより、平野さんと一緒にいじめられたい、って思ってるんじゃないかなあ」

「なにそれ。それじゃ本末転倒だろ。そんなの、いじめ自体が無くならないし」

吉岡は、本気で呆れたような顔をしていた。はあ、みたいな口元をたたえて、なんつーか、ものすごく面倒臭そうに説明する。

「だから、いじめなんか二の次なんだってば。心結ちゃんが一番したいことって、まずは平野さんと同じ立場になりたいってことなんじゃないかな。友達と気持ち共有したいって、これ、当たり前な感覚だと思うけど、私、なにか間違ったこと言ってるかな」

何も言い返せず、俺は仏頂面で黙る。痛いところ突っつかれた気分になって、それで何故か、原村の顔が浮かんだ。

「今泉って、友達いないの？」

どういうことういう、人の腹を探るような残酷な質問を平気で投げてくるかな。傷つくからそういうこと言うなよ、とか、あぁいねえよ悪いか、とか、軽く受け流すみたいに返したかったけど、最近すこぶる気が滅入っていた俺は、焦りを隠すべくスラックスの太もも部分をぐっと握り、心底正直に、どこまでも深刻そうにことう返していた。

「この前まで居たけど、そいつが俺のこと、必要としてなかったっぼくてさ。お前が言うみたいに、俺もそいつと気持ちを共有したかったんだけど、全力で裏切られた。俺、もうすっげえ腹立って、気づいたら、絶交言い渡してた」

「それ、最初から友達じゃなかったんじゃないの？ ていうか、今

泉がその友達のこと、分かってあげられなかったんだよ」

「はあ？ お前にそこまで言われる筋合いないんだけど」  
さっそく開き直ってる俺。

「俺は知ろうとしたんだよ、そいつのこと。でもさ、あっちから拒否ってきたわけ。つまり俺は振られたんだよ。男に振られるってのも変な話だけど」

吉岡はさっさと表情を失くし、頬杖を外す。両手を膝に置き、軽く伸びをするようにして、斜め下をじっと見つめる。

「昔からそうだよ、今泉って。なーんか、可哀想」

俺は完全に言葉を失い、可哀想とまで言われる意味が分からなくて、ただ、不信感をあらわに固まった。やがて吉岡が微笑みを浮かべ、

「もう出よつか。バス停まで送ってよ」

床に置いた鞆を取った。

「私たちが付き合ってたときのこと、覚えてる？」

そのままバス停に直行するものと思っていた俺は、なんの断りもなく道中のアクセサリーショップに入っていく吉岡に戸惑い、さらに、キーホルダーコーナーを物色しながらそんな突拍子もないことを尋ねてくる彼女に、意表を突かれて足を止めた。

「たった二週間くらいだったけど、私はよく覚えてるなあ。思い出っていうか、教訓みたいな意味でね」

吉岡がタヌキの尻尾みたいなどでかいキーホルダーを手にして、感心したようにその毛先を撫でていた。

俺は携帯灰皿付きのキーホルダーを眺めながら、ひそかに当時のことを回想する。

中二に入ったばかりの頃、俺たちのクラスでは無数にカップルが出来上がる現象が頻発していて、恐らくそんなに好きでもなかったくせに、もはや流行みたいないな調子でお互いがくっついたり離れたり

を繰り返していた。

そんな流れの中で付き合ってしまったのが俺たちで、その二週間があまりにも無味乾燥に過ぎていき、結局、俺が誰かと付き合ったのってその一回こっきりだったんだけど、それだってほとんど記憶にないくらいの淡泊さだった。どっちが告ったとか、どっちが振ったとか、それすら曖昧なほどに。

「結局、一回デートしただけで、キスもせずに別れちゃったし、なんだかんだで付き合ったこと自体もポーズだったけどさ、それでも分かるときは分かっちゃうんだよね。付き合った相手の本質っていうのかな」

「本質って、また大きく出たな」

「これ、アキラにプレゼントしようかな」

意味不明のタイミングでスルーされ、タヌキの尻尾キーホルダーをなで続ける吉岡をじっと睨む。なんでもいいけど、そんな邪魔くさいものプレゼントされても男は嬉しくないだろうな。

俺は灰皿キーホルダーを棚に戻し、ケーキの材料数点が入ったビニール袋を手に持ち直す。棚に向かって横歩きに進んでいく吉岡のあとを追わず、その場に立って店の外をぼんやり見つめた。

「ああ、そういえばこれ。ねえ今泉、ちよつと来て」

手招きされ、不承不承に近づく。吉岡が腰を屈めつつ指したのは、ご当地キーホルダーを集めた棚で、彼女はその中の一点を手にとった。

「これ、平野さんの携帯についてたやつと一緒にだよ」

八景島限定のベルーガまりもっこり。俺が依子にあげたやつと、まさに同じストラップだった。

「私が図書室に遊びに行ったとき、平野さんが言ってたよ。今泉からもらったんだって」

「だからなに？」

俺は微妙に視線を逸らしつつ言う。そんな俺を観察するように見上げ、棚にまりもっこりを戻して腰を上げる。



「ごつごつの、下手にあげない方がいいよ。たとえ親戚でもね。男がくれたものって、女は意外と執着しちゃうからね」

「好きじゃなくても？」

「好きじゃなくても」

念を押されるみたいに言われた。自分なりに後悔しているわけで、俺はそれを深く胸に刻み込むように押し黙った。

店を出ると、吉岡はさつき購入した尻尾キーホルダーを鞆に仕舞った。駅に向かつて一歩一歩踏みしめるように歩き、背の低いビル群を見ると、眩しく煌めく夕日が背景の裾野へと落ち窪んでいた。「そういう無自覚なところ、いい加減、目障りで仕方ないんだよね」毒舌風味の上、意味の分からないことを言われ、俺は彼女の顔を見て思わず首を傾げる。

「無自覚って、俺が？」

「無自覚だよ。相手を勘違いさせて、正義ぶって他人を助けて、人が良いように見せておきながら、その実、相手のことを一切考えてあげられない。さらに手に負えないのが、今泉自身にその自覚がないってこと」

吉岡は俺を見ずに言った。駅に到着し、ゆるやかに人の往来が増えていく。バスロータリーは逆の出口側にあるため、駅の中を進んでいくところだが、ふと吉岡が足を止め、ある集団を指さした。

「ちょうど、あれと似たような感じ」

指したのは、駅の出口付近でたむろする大学生六人組。彼らは、肩や首からかけた募金箱を抱えており、しきりに声を上げ、自分たちの活動への協力を通行人に促していた。

世界一貧しい国、カンボジアの恵まれない子供たちに向けてのユニセフ募金活動。

「小中学生ならまだしも、いい年して募金活動でしょ。本当にカンボジアの子供たちが可哀想だって思うなら、数時間も突っ立って他

人のお金なんか集めてないで、もう大学生なんだから、バイトぐら  
いして、そのお金を募金に回した方が、よっぽど効率がいいし良心  
的じゃない？」

「そういうひねくれた極論言うの、ほんと好きだよな吉岡って」

「今泉こそ、その放棄したような言い方止めてよ」

吉岡は財布を出し、大学生たちに歩み寄りつつ言う。すれ違いざ  
まに彼らの募金箱に千円札を入れ、振り返りもせずに駅構内へと進  
んでいく。すると、大学生らの視線がそれとなくこっちに来て、俺  
は瞬間的に迷ったが、ポケットから四百円程度を出して箱に入れ、  
慌てて吉岡の背中を追った。

隣に追いつくと、彼女は鬱憤をため込んだような目を前方に向け、  
若干ながら歩む速度を緩めた。

「とにかく自覚がないんだよ。今泉も、あの大学生たちも。人を助  
けることに真剣じゃない。人を思いやることに本気じゃない。その  
くせ、外面だけはいいやつ振って、あるとき、無自覚に人を傷つけ  
る」

バス停に到着する。こちら側の出口からは人も少なく、そのバス  
停も閑散としており、待ち人は俺たち以外にいなかった。

ベンチがあるのに吉岡は腰をおろそうとせず、立ち尽くし、建物  
の先にあるオレンジに染まった山を見つめた。俺は口を閉ざし、そ  
れと同じように突っ立つ。

「ねえ、今泉はすぐに私を悪者扱いしようとするけど、私とあんた  
の何が違うわけ？ 人を傷つけた大きさなら、私たち、たぶん同じ  
くらいだと思うよ」

「自覚してるか、自覚してないか、それだけ違いってこと？ なあ、  
俺が誰かを傷つけてるって、なんでお前なんかに分かんの。俺の全  
てを知ってるようなその言い方、甘く見られてるみたいで心外なん  
だけど」

「分かるよ。普段話さなくなたって、昔を知ってるんだもん。大体の  
ことは分かる」

言つと、ふいに吉岡が俺の顔を指した。

「その顔の怪我。あと、平野さんの手の傷」

手に変な汗がにじむのが分かつて、俺は自然と拳をゆるく握る。

「そして、予定調和のように今泉がいじめを無視し始めた。平野さんと喧嘩したんだよね。しかも、殴り合いの喧嘩。これだけあからさまな物を見せつけられて、どうして私が気づかないと思うの？」

依子との公園での一件がフラッシュバックして、俺は静かにそれを鎮める。

「平野さんが手以外を怪我していないところを見ると、今泉、一方的に殴られてあげたんだよね。ねえ、それが平野さんへの思いやりのつもり？ 好き勝手に彼女を責めてしまったから、今泉の失言も、罪も、黙って殴られたら精算されるとでも思った？」

「俺の腹ん中知つたつもりになって、いい気になるのは分かるけどさ、」

「人を軽く見るのも大概にしなよ」

俺の台詞は吉岡の一言でねじ伏せられる。

「なんで殴り返さなかったの？ 男と女だから？ 平野さんがそう頼んだの？ 黙って殴られてくださいって、彼女がお願いしたのかな。違うよね。口で勝つたなら、喧嘩でだって礼儀を持って相手してあげるべきだよ。殴られることで対等に振る舞つたつもりなのかもしれないけど、実は今泉って、平野さんのこと見下してるんだよね」

「俺が、依子を？」

「そうだよ。いじめられるような情けない奴、苛々して見てらんないけど、しょうがないから俺が助けてやるか、みたいな。そういう感覚だったんだよね。同じ目線じゃなかったんだよね。だから平気で彼女の欠点をつついたり、簡単に見捨てたりすることが出来るんだよ」

ゆるく握られたはずの手が、強く固められていることに気づいた。手の汗も分からないほどに、俺の中の何かを抑えつけるように、自

我を保つように拳は握られていた。俺はそつと、それをポケットの中に隠す。

繰り返し繰り返し、頭の中で再生される、あの公園での映像。

「心結ちゃんの事だって、鍋島さんの事だって、絶交したって、友達のことだって、誰のことだって、いつだって、今泉は他人を下に見るんだよね。だから友達も出来ないし、誰とも分かり合えないし、なにもかもが中途半端で終わる。ところで、ねえ、今泉ってさ」

じゃあ聞くけどさ、お前が誰かのために考えて動いたり、発言したことが、今の今まで一度でもあったのかよ！

「人の気持ち、一度でも真剣に見ようとしたこと、あるの？」

あたしは、純のために。

俺のため？

顔を上げると、もう夕日は沈んでいた。遠くで改札の誘導音が鳴り、人々が革靴を鳴らして歩く音が響いた。やけに喧しく。すぐ隣の息づかいすら、俺の耳には入ってこないのに。

「殴りたいなら殴れば」

口の中が張り付くように渴いて、訳も分からず握った拳がポケットから抜け出ていた。頭を下げ、それを見ると、頬に伝った汗が地面に落ちた。

「自覚がないから、その拳は固められてるんだよね。いいじゃん、殴れば。私は叫ばないし、今なら人もいない」

「もう、黙れよお前。俺が人の気持ちを知らうとしないとか、俺と誰かがどうだとか、マジで、吉岡だけには言われたくない」

「私だけには、ね」

吉岡が俺を見る。唇の端をつり上げ、目を細めて。

「ねえ、私たちが付き合ってたとき、たった二週間足らずの間だったけど、私、今泉のことなんて呼んでたか、覚えてる？」

呆然として、瞬間的に記憶を掘り下げる。探れども探れども、呼び名どころか、そのときの吉岡の顔すらもやがかかったように霞ん

だ。やがて笑んだ彼女の唇から、刻み込むようにそれは呼ばれる。

「純くん」

音が歪んだように振動し、頭の中がぐるぐると回る。

あの日の放課後。図書室。そうだ、つい最近のこと。吉岡は受付の中にいて、俺を見るなりそう呼んだ。それで俺は、あのとき、なんて言った？

その呼び方やめてくんない。なんか気味悪いんだけど。

馬鹿じゃん。どこまで人のこと忘れてんだよ、俺。

「付き合っても、最後まで今泉のことは好きになれなかったけど、今思えば正解だったなあ。でも、そのあと沙樹に譲ったのは失敗だった。もっと私がしっかりしていれば、沙樹が今泉のことを好きにならずに終わったのに」

走行音に気付き、道の先を見る。路線バスがもう目前で、まもなくして俺たちの前に停車した。手のひらに爪が食い込み、下唇の裏を噛む。

「時間切れ」

吉岡が切り離すように言うと、ふっと握った手の力が緩んだ。緊張の糸を切ったように膝が落ち、俺は倒れるみたいにベンチに座り込んだ。

扉が開き、吉岡がステップに乗る。振り返る彼女の瞳が、暗く俺を見下ろした。

「中途半端に人を助けて、知らん顔で傷つけて、罪をあつさり忘れて、その上、その無自覚な拳すらも振りかざせない。ねえ、今泉って、なんのために生きてるの」

バスの扉が音を立てて閉じる。自分の呼吸すら聞こえてこず、俺は啞然と、ガラスの向こうの彼女の口元を見る。

死ねば？

そう、吉岡の唇がうごめいた。

翌日、あまりの暑さに目を覚ますと、まだ早朝の五時だった。

布団から重い身体を起こす。背中が寝汗でびっしょりで、脳みそに直接響くような鈍痛もあった。内容は全く覚えていないが、かなり悪い夢を見た気がする。

「純一、昨日うなされてたよ。歯ぎしりも、すっごいやかましかったです」

居間に降りると、朝飯を作る母ちゃんがそう告げた。

汗を流すべくシャワーを浴びる。その後は自分の部屋でぐったりしようと考えたが、寝転ぶだけで、床と当たる部分が蒸し暑かった。シャワー浴びたばかりだし、汗をかきたくないので、諦めて制服を着て部屋を出る。

そこで、ちょうど部屋から出てきた弟と廊下ではち合わせる。

「兄ちゃん、昨日寝てるとき、壁ドンドン蹴ってたでしょ。寝相悪すぎ。超うるさかったよ。ねえ、死んで」

死んで？

朝っぱらからトラウマレベルのきつい一言を浴びせられ、俺はデシオンをガタガタに落とし、とぼとぼと弟の横を通り過ぎる。

「すみませんでした」

ちっちゃく謝りながら。俺が弟に謝ったのって、何年ぶりだろ。

朝の天気予報によると、本日はここ四年内で最高気温を叩き出しているらしい。どつりでくそ暑いわけだ。

生徒玄関で村瀬彩音と出会う。

村瀬は靴箱から上履きを出しながら、片手に団扇をあおいでいた。俺に気づき、その顔を向ける。すると、玄関側からの日光にあてられ、なにかが光ったような気がした。すぐさま、その正体に気づく。

村瀬が前髪を全開で上げていたのだ。赤いピンで髪を止めており、つるつるな額が、心なしか神々しく瞬いた。暑さのせいか、彼女は気だるそうに細めた目を赤縁眼鏡の奥から覗かせる。

その前に、どうでもいいことかもしれないけれど、

「でこ広っ」

「うるっせえっ！ 死ねっ！」

死ね？

ひどく落ち込み、いよいよ本気で死にたくなってきた俺は、黙って村瀬の隣を通り過ぎた。今度は、謝る気力すら出てこなかった。

一時限目が始まる直前、トイレから戻ってきた依子が、全身ずぶ濡れで席に着いた。すごく当たり前のように。

「涼しそうでいいねー、平野」

その後、教室に入ってきた女子が、依子の机を通りかかりつつ笑った。

「うっわ、ブラの紐、超透けてるし。俺、ちょっと興奮してきたかも」

教室後方で談笑していた男子の一人がそう言った。無性に癪に障って、俺は黙って席を立つ。また冷やかされそうだったが、あの依子には、さすがに何か言ってやりたかった。

しかし、そちらを見ると、依子の隣には既に曾根本が居た。彼はうわずらせたような声で言う。

「保健室、いけば」

依子が顔を上げ、曾根本の真っ赤な面を見る。そのせいで彼はさらに顔を赤くして、そろそろ鼻血でも出るんじゃないかくらいに紅潮させて、目をぎゅっつつむって教室の扉を指した。

「だからあ、保健室いけって。ブラウスの替えくらい、貰えるからさあっ」

思いつきり声が裏返っていた。依子は小さく頷き、音もなく席を

立つ。髪や制服の端からしずくを垂らしながら、曾根本の指し示す方向へと導かれるように、静かに教室を出ていった。

その瞬間、あちこちから、曾根本を茶化すような歓声や口笛が巻き起こる。たじろぎ、曾根本は慌てて辺りを見回した。

「うるせえっ、黙れよ、お前らっ……」

だんだん声を小さくして、ついに耳まで赤くなる。それっきり彼は、口を結んで席に着き、じっと顔を下げた。

それでも鳴り止まない冷やかし。ずっと俺は、この空気が気に食わなかった。黄色くて目障りな声に、耳がうずうずとして、腹の中に真っ黒なものが溜まっていく。

「もう一回告つてくりゃいいじゃん、ロベルト」

「そうそう、今ならオツケーもらえるかもよー」

曾根本はさらに顔を下げ、唇を噛む。

鼓膜がどんどん汚染されていく感じがした。視界もぐつと狭まる。意図せず、頬が引き吊る。

曾根本が机に顔を伏せ、耳を塞ぐ。ジェルで固められたその頭を、近くに居た男子がぐしゃぐしゃと揺らした。

「きめえんだよお前。死ねよ」

死ねよ。

あいつに死ね。こいつに死ね。どっかの誰かに死ね。じゃあこいつらは、何を考えて、何を思って、何が楽しくて、こんな下らない生き方を続けるんだろう。

だんだん、全身になにか衝動感みたいなものが張りつめてきて、なんだかよく分からない、架空の糸みたいなのが切れた。ぷつぷつりと。

全力で蹴った椅子が軽く浮き、後方の生徒用ロッカーに激突する。そばにいた男子生徒が小さく悲鳴を上げると、激しい音を立て、椅子が床を壊さんばかりに落下した。

蹴った足が、じんじんと痺れた。

「黙れつつってんだろっが」



俺は荒い息吹をして、気持ち悪いくらい大人しくなったクラスメイトたちを見渡す。

「毎日毎日ピーピーぎゃーぎゃー。気色のわりい団結力見せつけやがって。なんだよお前ら。全員どっかで頭でも打ってんのか」

前方に目を向けると、扉付近に、教材を脇に持った宮下が立ち尽くしていた。どうでもいい。

「黙って席着いて勉強でもしてるよ。マジでうぜんだよ。マジで耳障りなんだよマジで吐き気がするんだよ。おい、いつそ殺してやるか。全員この場でぶっ殺してやるうか」

昨日の今日。俺も俺。マジで、何言ってるんだろ。

「殺せるなら殺してみろよー」

視線を移す。窓際に背中を預けていた男子が、はっと口元を抑えた。

「あつそ。じゃあお前から殺すよ。おい、どけ」

前方にたむろする生徒たちを押し退かし、その男子めがけて突き進む。思考が完全に意識と分断されていて、止まりそうになかったし、止められそうになかった。

硬直して動けない男子の胸ぐらを掴む。それと同時に、俺の振り上げた手首が、誰かの手によって強く握られた。

「はいそこまで」

掴んでくる相手を睨むと、宮下だった。つか、なんでこんな時まで笑顔ぶっこいてんのこの人。

「全く今泉くんって子は。ガチな不良にでもなるつもり？ そいういじめの止め方、よくないですよ」

「はあ、何なの？ どの口がほざくんだよ。じゃあお前ら教師が止めてみるよ、いじめ。毎日アホみてえに繰り返されるこの糞集團のせつこいいじめをさ。なにボサツとしてんだ、馬鹿かてめえら。早川が手首切った時点ではつきりしてんだろ。人にも教える前に授業捨てて原因洗い出せよ。どこまで無能なんだてめえら教」

手のひらの先を全力で首に突かれた。思わず首もとを抑え、俺は

一步後ずさる。短い間だが、息が出来なかった。なんて言うんだっけこれ。貫手？

「宮下の学生時代なら、目上の人にそんな口を利く子は、おもつきしグーをお見舞いされてただけだね。時代の流れって、めんどくせーよね」

「充分殺人的だわハゲ教師」

「宮下はハゲていません。宮下家は先祖代々、フサフサ遺伝子をフサフサに受け継いでいます」

「うっせえどけ」

宮下の肩を押そうとするが、またしても手首を取られ、今度は背中に回すようにねじられた。すごく痛い。意味分からん。

「とりあえず、生徒指導室いこっか」

痛みで徐々に戻ってくる理性は、やがて教室中から向けられる視線により、一気に冷静になる。誰もが軽蔑の眼差しを俺に向けていた。視界の端に、吉岡の顔が映る。あざ笑うかのように口元を隠し、体温が下がるかのような冷たい瞳で俺を射抜く。

やっぱり、全然変わらない。

吉岡は、そんな目をしていて。

急に羞恥心が込み上げてきて、捕まれた手首を無我夢中で振り払う。腕の関節がみしみしいってるのも関係なく。危険を察したのか、宮下がぱっと手を離れた。

俺を食い潰さんばかりの視線の雨。息づかい。漏れる嘲笑。疎外感。差別感。圧迫感。

痛んだ腕を振り、乱れきった息を吐いて、それからすっと吸い込む。

死ねよ、てめえら全員。

たぶんそう叫んで、俺は教室を飛び出した。

旧校舎屋上の扉を開ける。

腹立つくらい生暖かい風が全身を通り抜け、太陽から逃げるように、俺は視線をコンクリートへと落とす。

背後から生徒呼び出しの放送が聞こえた。五頭の低い声が、粛々と俺の名前を呼ぶ。後ろ手に扉を閉じ、その音を遮断した。

いつまで経っても変わらない。どうしても変えることが出来ない。頭に血が上ったら、それで全部終わり。もしかしたらこれは、不治の病なのではないかと思った。今朝感じた頭痛がぶり返し、その場にしゃがみ込もうとしたとき、ふいに声が聞こえた。

「おー、久しぶり」

顔を上げる。原村が、地面を通るパイプ管に腰をおろし、アイスを食べていた。

俺はしばらく呆然として、声が出てこない代わりに、煙草をくわえた。いまだ高ぶった息を整えつつ、俺は尋ねる。

「何？ なにしてんのお前」

「なにつて、どう見てもサボりだろう」

「よく聞こえない」

ていうか、今はあんまり人と話したくない。ましてや、原村とか。だから、サボりだよサボり。リピートアフタミー？ さーぼーりー。はい」

「言うか馬鹿」

俺はその場で火を点け、彼から顔を逸らし、腹に溜まったものを全てを排出するように煙を吐いた。

横目で確認すると、原村はもうアイスに夢中になっていた。どう話しかけていいものか分からず、俺はただ所在なさに立ち惚け、間を埋めるようにひたすら煙草を吸った。

時間がやけに長く感じた。授業終了のチャイムが鳴る頃、気づけば俺は煙草七本を消費していた。

改めて、ちらりと隣を見る。原村は食べきったアイスの棒をしゃぶるようにくわえており、何故か、俺の横顔を見つめていた。

「なに見てんだよ」

訊くと、原村は口から伸びる棒をぶんぶんと上下させ、ぱつちりと脛をしばたかせた。

「いや、顔の怪我の具合、眺めてた。絵になるのではないかと考えてみたけど、やっぱ、ぜんぜん駄目だね」

駄目とか言うなかつ。

俺は原村の左手首へと目を移した。その手首には、根性焼きの痕を隠すように、細く包帯が巻かれていた。俺は次に、あの日の早川のことを思い出した。

自傷兄妹。不謹慎にもそんな造語が浮かぶ。

プツ、そんな間抜けな音がして、前方から何かが飛んできた。俺は煙草をくわえた状態のまま、避けもせず、それを顔面で受ける。ぴちゃり。嫌な音。飛んできたそれが一瞬だけ顔に貼り付き、地面に落ちていく。

視線を落とす。俺の顔にくっついて落ちたそれは、原村がくわえていたアイスの棒だった。うわっ、汚ねえ。俺は死にものぐるいで顔を拭った。

「そのうち、ぽっくり逝っちゃうんじゃないか、みたいな顔してるね、今泉。隙だらけだったよ」

言って、原村が爽やかな笑顔を見せた。緩みきつたその顔を眺めているうちに、何故だか俺は、奇妙な気分になっていた。今までとは別物の感情の渦だった。脛と眼球の間が熱くて、鼻の奥がじんとして、頭の中が熱でいっぱいになって、息が出来ないくらい、胸が苦しい。

そんな俺を気遣うように、ふいに原村が視線を逸らし、非常扉の方を見つめた。

空気が静けさを増す。暑苦しい風が、屋上一帯に吹き付ける。

しかし、優しい笑みをたたえる原村の横顔は、吹いてくる風なんかより数十倍あたたかくて、俺はどうにも、溢れて出てくるものを我慢できそうになかった。

「おい、こつち見んなよ」

「見ないよ」

原村は体育座りするみたいに膝を折って、パイプ管の上で回転した。その背中を確認すると、俺は声を殺して泣いた。

高校に入って、人前で泣くのはこれで二度目だった。一度目は叔父さんの前。二度目は、今この瞬間。泣き顔を見られない分だけ、少しだけ気が楽だった。だから俺は安心して泣いた。声を出さないようにだけ注意して、それはもう、まさに隙だらけのクソガキみたいな面で。

なんでこんな優しいのこいつ。俺がお前に何したか忘れちゃったの？ 知られたくないこと、無理に聞き出そうとしたし、手首焼いたし、友達じゃねえとか言っちゃってるしさ。訳分かんねえ。頭悪いんじゃないの。もう死ぬよお前。あ、死ぬのは俺か。分かったよ、死ぬばいいんだろうが。今からここでノーロープバンジーで死んでやる。やってやるよ、上等だボケ共が。その代わり、てめえらも全員死ぬ。

「もう大丈夫？」

動かしかけた足を止める。

「暇だし、散歩でも行こっか」

二時限目開始の予鈴が鳴り響き、原村がそう言った。背中越しでは見えないのに、俺は何も言わずに頷いた。

二時限目が始まるのを見計らい、原村と共に学校敷地の裏出口から抜け出す。

俺たちはあてもなく歩いた。

今まで一度も通ったことのない住宅街で、原村も知らない場所らしい。人の気配すら感じられず、そこら一帯が死んだように静まり返っていた。一応、俺たちの住む町だとはいえ、どこか別の国にでも迷い込んだ気分だった。

知らない道を通り、知らない風景を拜んでいく。住宅に挟まれた道の中で、俺たちは軽く圧迫されたような感覚を得ていた。

「僕らは、この町のことだつてよく知らない」

原村の口調はこちらの返答を求めているかのようで、俺は答えず、黙つて彼の隣を歩いた。

だんだん、家と家の間隔も広まっていき、前方には、蝉の巣窟かと思えるほど小五月蠅い山があった。一言も言葉を発さず、俺たちはその山道に入る。

荒っぽい舗装の道路をこつこつと進み、頭上から責め立てるように鳴き喚く蝉たちに辟易としながら、俺たちは黙々と歩いた。

時間の感覚すら忘れてしまいそうなほどに、足を動かすことだけに神経を注いだ。

木々が開け、見覚えのない田舎町に到着したころ、気づけば俺たちは汗だくで、腕や足を蚊に刺されまくっていた。

右方向を見ると、一面に田んぼや畑が広がっており、その先にはぼつぼつと民家を確認できる。さらに先には、目に優しい、健康的な色をした山々があった。

左を見ると、山の間から、太陽の光を一身に浴びる海を望めた。祖母ちゃんの家とよく似た風景だ。こことは逆の方角だけだ。

見ると、原村が俺を置いて、ずんずんと先を進んでいた。俺はそ

れを追い、隣に着いてから声をかける。

「なあ、ちよつと休まない？ 暑いし、さすがに疲れたよ」

「嫌だ」

原村は断固として拒否を示す。

「無心で身体を動かせば、なにもかもを忘れられる」

俺は首筋を流れていく汗を拭い、道の先を見つめた。何も考えずに身体を動かす。

知らない場所で、いじめも、喧嘩も、痴情のもつれもない田舎町で。

確かに、忘れられる気がした。

どこまでも続いていそうな畑の中、向日葵が背丈を競い合っていた。

入道雲が太陽を隠し、和らいだ夏の光が一面を覆う。

コンバースのスニーカーの中、蒸れた足がむず痒い。

もう涙を出さないように、とことん汗を流そう。俺はそう決める。

隣を歩く原村の横顔。唇をだらしなく開き、絶え間なく流れ出る

頬の汗を拭い、クマのできた虚ろな目をひたむきに前へと向ける。

どっちが死にそうな顔なんだか、と俺は言った。

無視されたけど。

個人経営らしき駄菓子屋を見つける。店の前で、ガリガリ君ソーダ味を原村と二人でガリガリやる。美味すぎた。

駄菓子屋の正面には、これまた見知らぬ線路があった。くたびれた木の柵。その下に、棘みたいに尖った夏草が伸びていた。

ガリガリくんを食べ終え、俺たちは線路沿いをさらに歩いた。背中を撫でるような追い風により、少しずつ汗が引いていく。

「鍋島のことなんだけどさ」

原村がぼつりと切り出し、俺は相づちを打つ。しかし、いつまでも話を始めない原村を不審に思い、彼の顔を確認する。

原村は、隣を通る線路を見つめていた。顔がよく見えなかった。

「鍋島が、どうかしたの？」

こちらから尋ねてみると、原村は少し逡巡したように間を置いて、「沙樹のことを話せなかった代わりに、もう一つの懺悔くらいはしておこうかな、と」

原村が歩みを止め、俺も立ち止まる。

微妙に落ちた目線をして、彼は木の柵に歩み寄り、そこに背中を預けた。俺は煙草を吸って、その懺悔とやらを待つ。

「先週の木曜日。例の、根性焼きパーティーのあとの話なんだけどさ」

また嫌な言い方しやがる。

俺はその日のことを思い出した。たしかあの日は、屋上を出たあと、図書室を閉室させた依子と電車に乗り、一原駅前のドトールに入った。

「夜になって、鍋島が僕の家に来てね」

俺はてつきり、鍋島はあの日、村瀬や城川と別れたあと、すぐ家に帰ったものと思っていたが、それは思い違いだったようだ。

「鍋島って、原村の家知ってんの？」

「うん。たしか、あれで来たのは三回目。あ、家っていうか、安いボロアパートの一室なんだけどね。実は僕、一人暮らしなんだけどさ」

驚愕の事実。鍋島がたまに原村のアパートを訪れていて、しかも、

原村が一人暮らし。

「いや待って、引くにはまだ早い」

謎の注意点を提示する原村。

「別に変なこととか、今まで全然なかったよ。ただ遊びに来ただけだったし。お互い絵を描き合ったり、ゲームしたりしてただけ。今までは、それだけだったんだけど」



「だけど？」

「あの日、連絡もなしに、しかも夜だよ。鍋島が突然僕の部屋に来てさ、しかも、すっごく落ち込んでる感じだったのね」

「ああ。あの日のあいつ、村瀬や城川と一悶着あったもんな」

俺は出来るだけ動揺を隠すべく煙草を吸った。あんまり気分は変わりそうもなかったけど、思いつきり吸った。

原村が、足下に生えている草をいじった。恥ずかしさを隠すように、ブチブチちぎっていた。

「んで、僕は鍋島の悩みを聞いてみたわけ。友達を見捨てたとか、酷いこと言っちゃったとか、そんなこと話してたっけ。僕の方も、その日は今泉といざこざがあったわけじゃん。鍋島にえらく共感してしまっただけ」

「気まづくなつて、俺は頷きもせず黙り込む。

「あらかた話が済んで、それでまあ、いい雰囲気になるよね？」

「……なるかもな」

それ以上は聞きたくないが、俺は腹を決めて話を促した。原村は座り込み、草を根っこからむしり始める。

「まあ、それで、チューしちやつただけ」

「へ、へえー」

語尾を上げて、ものすごく余裕ぶって応えた。ちよつと膝笑ってわけだ。

本当のことを言うと、俺にとっては、鍋島も原村もそれなりに仲がいいわけで、どういう奴なのかも大体知っているわけで、その二人がそういう状況になってしまったということが、逆にリアル過ぎて引いた。

「引いた？ まだ付き合ってもないのにチューって。ねえ引いた？」

「別に。全然引いてない」

とりあえず嘘を吐き、耳を塞ぎたい気持ちを堪え、修行僧のような面持ちで俺は待つ。

大丈夫大丈夫。俺なんか依子と二回もしてるし。お互い好きでも

ない上、親戚なのに二回もしてるし。俺らが異常だし。全然大丈夫だし。

「それで？」

「それでまあ、チューした後はどうなるか、分かるよね？」

「全く、いやちよつと、微妙に分かんない」

「なんか日本語おかしいな俺。」

「お互い、別々にシャワーを浴びて、先に浴びた僕は布団の上で待っていたんだけど」

「どうしよう。ちよつとそこの木の柵に両耳打ちつけて鼓膜破りた  
い。」

「でも、これは不味いだろ、って僕はふと思ったのね。我に返った  
のね」

「はいはい、それで？」

「そろそろ限界だが、やはり俺は余裕ぶっこいて話を聞く。」

「で、シャワーから上がった鍋島に、僕はこう言ったわけ」

「なんて言ったわけ？」

「やっぱり、もう帰った方がいいよ。時間も時間だし。明日は学校  
だし。そもそも僕ら、まだ付き合ってすらいないし、って」

「で、鍋島はなんて？」

「両親には、友達の家に泊まるって言うてあります。なんなら、明  
日は休みます。それに、付き合ってないなら、今から付き合えばい  
いです。私は昭文くんが好きです、って」

「普段の鍋島からは想像出来ないくらい強引で、理不尽過ぎた。」

「それ、本当に鍋島？」

「違ったら誰だって言うんだ」

「もはや鍋島がいつどんな言動をするのか、俺には予測出来ない。」

「二本目の煙草着火。上手く点かない。すげえ手震えてる。」

「原村はなんて答えたの、それに」

「原村は頭を垂れ、地面に着かんばかりに顔を下げて、渴いた地面  
に指を這わせていた。」

「すごく動揺しててさ、そのときの僕。こう言っちゃったの。鍋島のこと、好きなのかどうか、まだ自分でもよく分からないので、考えさせてください、みたいな」

やっと点いた煙草の煙を肺に入れ、そのまま呼吸を止めた。煙も、身体の中で動きを止めていただろう。

原村の話を整理すると、どこかに矛盾点があるように思えた。なので彼の発言をさかのぼっていくと、やっぱりその疑問にぶち当たった。ここで煙を吐く。

好きかどうか分からないのに、なんでキスしたんだよ。

「で、鍋島はこう言ったわけ。じゃあ、どうしてキスしたんですかって」

余計なところでシンク口しなくていい。ここで黙り込む原村。俺は充分の間を置き、当たり前のことを恐る恐る尋ねる。

「本当だよ、マジで。なんでキスしたの？」

「いや、かわいいから」

「かわいいから？」

「あと、いい匂いだったから」

「いい匂いだったから？」

俺は惜しげもなく、はあ、という顔をして、喉をつつかえらせて訊く。

「なに、その気持ち悪い理由。かわいくていい匂いだったからって、お前、マジでそう言ったの？」

「うん。動揺してたから、本音がつい」

「本音って、お前……」

俺は絶句し、煙草を吸うことすら忘れて、原村のマッシュルームカットのつむじを凝視した。

風が線路沿いの道を吹き抜け、自分がまた汗をかいていたことに気づく。制服がびっしょりなくらい濡れており、独特の不快感に身を包んでいるようだった。

原村は、枯れ果てたような情けない声で、

「ちょっと泣かれて、軽くビンタされて、で、さいなら」  
そう言って、頭の上で手を挙げ、力無く左右に振った。

挙げた手が草の中に落ちると、痛々しい沈黙が俺たちを取り囲んだ。

五分ほど、その沈黙を味わう。煙草が根本まで燃烧されていることに気づき、地面に転がして、かかとで踏んで火種にとどめを刺した。

鍋島があそこまで人が変わったように見えたのも、これも原因の一つだったのだろうか。俺は遅蒔きながらも気づく。

でも、少しでも分かっただけマシだ、俺は無理矢理そう思うことにした。そして、話題を変えようと思った。鍋島のことより、実はもっと重要かもしれないことに。

「なあ、早川が手首切って病院に運ばれたこと、知ってるよな」

原村は、なにも反応してくれなかった。だが俺は続ける。学習もせず、俺がまた原村を追い詰めることになって、早川から相談を受けてしまった以上、こちらも引くわけにはいかない。

「あいつのお見舞い、行かないの」

「行かないよ」

早すぎる冷めた返答に寒気がした。俺は唾を飲み込み、ため息を吐く。

「なんかお前、知れば知るほど最低だな」

本当に俺が言えた義理じゃないんだけど。

原村は肯定せず、否定せず、ただただ顔を下げて押し黙る。

さきほどとは違う方向からやってくるといふ奇妙な風を受け、吹き止むと、俺は一步前に出た。日が傾き始めている。俺はこれ以上原村になにも言うことは出来ない。あとは黙って帰路に着くだけだ。すると、ふいに原村が立ち上がった。それがあまりに唐突だったため、俺はとっさに出しかけた足を引く。

なにをするつもりなのかと見ていると、おもむろに原村が木の柵をまたいだ。柵の向こうは、線路だ。

俺は冷静に柵へ近づき、その間にも原村は線路の上へと到着する。そして、その上で寝そべった。線路の上で、軌条を枕みたいにして、大の字に天を仰いだ。

俺は柵に手をかけ、それを見下ろす。

「なにしてんの」

「電車が来るのを待っている」

この局面での回りくどい言い方に、俺は無性に癪に障った。一度口を閉じ、奥歯を噛んで、後頭部をがさつに搔きむしった。

「そっかそっか。あー、そういうことね。はいはいはい。つまり逃げるわけだ。なにもかもが気ままずくなつて、自己嫌悪でいっぱい、謝ることも悔やむことも面倒臭くて、で、結局最後は逃げるわけだ。はいはい、そういう奴だったのね」

原村の無言にまたいらついで、俺は声を荒げる。

「おいざげんな。俺だつてまだ死んでねえぞ。俺もお前ぐらいか、それ以上に最低なんだよ。でも生きてるし、つーか、恥晒しながらだつて生きる気まんまんだよ。なのにお前は逃げるのかよ」

本気でなにも答えない原村。ただ表情を固めて、青空一点を睨む原村。くそつたれ原村。

地団太を踏みたくらいだったが、それを我慢して俺は言う。

「あ、マジで逃げるんだ。分かったよ、じゃあお前の好きにしろ。言っとくけど俺は助けないからな。死にたいならさっさと死ね。このクソキノコ」

俺は柵から身を乗り出し、線路の先を見据えて叫ぶ。

「おい電車まだかよつ。早くこのキノコ潰せよつ。ダイヤ遅れてんのか？ じゃあ俺が鉄道会社に電話してやる。早く電車来させろつてな。くそつ」

ポケットから携帯を取り出し、知りもしない番号を一心不乱に打ち込んでいく。そのとき、やっと原村が言葉を発した。

「今泉も、さつきまで死にたがってたよね。なあ、今泉もこっちは来ない？」

「は？」

携帯片手に固まると、原村が顔だけをびよこつと上げ、気持ち悪い感じのうるんだ目をした。

「一人で死ぬのは怖いよ。僕らの友情、もう復活したたる？　なあ、僕は、一人で死ぬのは怖い」

言つて、彼は再びレールに頭を乗せた。言いたいことは言った、あとは今泉次第だ、とでも言うように。

本当に最低だ。どこまで罪な男なのだろう。男の俺にとつても罪作りの男。それが原村昭文なのか。

携帯のディスプレイを見ると、時刻は午後三時ジャストだった。手汗のせいか、携帯を持つ指がぬめついた。気分が悪いので、開きっぱなしの携帯をアスファルトに放り投げる。音を立て、携帯の角が欠けた。

「わかつたよ」

俺は五歩あと退り、助走をつけて柵を跳び越えた。普通にまたいでもよかつたのだが、ともかく、俺はまともな精神状態ではなかつたのだ。

一度立ち止まるが、覚悟を決めてレールを一本越える。原村と同じように、もう片方のレールに頭を乗せ、背中を枕木に預けた。頭は鉄で、背中は木。両方とも地味に痛い。

「天国、行けるといいな」

「行けないよ。地獄にも行けない。世間から見れば、僕らの罪なんてまだまだシヨボいし、中途半端だ」

じゃあ、あとは現世に残つて地縛霊にでもなるしかないな。確かに、俺たちにはそれがお似合いだと思つた。今死んだら、きつと後悔だらけなのだから。

場所と状況と心境によつて、空はいくらでも見え方が変わる。今見上げる空は、俺の人生でもつとも青く、広がつた。

十分後。

相変わらず線路の上で大の字になって、二人で電車が来るのを待っている、原村が暇つぶしのようにこう言った。

「頭悪くて、エロくて、融通が利かなくて、頑固で、気持ち悪くて、なのに無駄に爽やかなのが、男なんだと思う」

「それ、原村だけじゃね」

半分笑いながら言うと、原村が気持ちよさそうに高笑いした。

「男はみんなそうだよ」

言って、物憂げな表情をしたかと思うと、

「ああ、うんこみたいな人生だった」

と、また笑った。

また十分後。

暇過ぎて、俺たちはしりとりをしていた。中々決着がつかないので、しりとりの遊び方を変えてみた。

適当な単語を出して、どっちが先に『ん』で終わらせる言葉を引き出せるか、という天の邪鬼的なしりとりだ。

三回やってみたが案外つまらなくて、速攻で終わるので間が持たなくて、しかも、お題を出す側が圧倒的に有利だということが判明し、結局、天の邪鬼しりとりも中止になった。

さらに十分後。

「電車まだ来ないねー!」

「さつさと来いやあ! ビビってんのか俺らによお!」

俺たちはシャウトしまくっていた。

あれからどれほどの時間が経っただろう。

俺は線路の上で横になったまま居眠りをしていたらしく、突如、誰かに顔を舐められる感覚がして、はっと覚醒して半身を上げた。レールに乗せっぱだった後頭部に軽い鈍痛が残る。

俺は生きていた。そして、顔面が臭い液体でびちゃびちゃだった。夕日が射し、周囲を澄色に染めている。ふと、獣のような臭いと息づかいに気づき、すぐそばに目を落とす。

クリーム色のゴールデンレトリバーが、枕木の上でお座りしていた。雄か雌かは知らないが、そいつはとにかく悪そうな目つきをたたえており、舌を出してはあはあ言いながらこっちを見つめていた。俺は、食べられてしまうのだろうか。

「ん、どうしたの、その犬」

原村が目尻をこすりながら上半身を起こした。こいつも寝ていたらしい。

「分かんない。すつげえ顔舐めてきたけど、俺のこと食つつもりなのかな」

すると、原村が口笛を吹き、両の手のひらを差し出してゴールデンレトリバーを呼んだ。人間に慣れているのか、犬はすぐに原村のもとへ近づき、彼の胸あたりを嗅ぎ出した。よく見ると、犬には赤い首輪とリードが付いていた。

原村はあくらをかき、犬を抱いて頭を撫でる。

「なんかこの犬、今泉に顔似てない？」

「そう？」

俺は犬の顔を覗き込んだ。犬に似るって信じられない話だけど、本当に似てるかもしれない。原村が、猫撫で声ならぬ犬撫で声で犬に話しかける。

「おいボク、名前はなんて言うの。今泉？ 今泉純一なの？」

「アンジェリー」

犬が喋った、と思った。でも違った。俺たちのすぐ後ろで、人間の男の声がしたのだ。

二人同時に、ついでに犬も同時に振り返る。



そこには、柵に肘をかけ、煙草を口にくわえた男が居た。切れ長の目にパーマがかかった茶髪。服は、ランニングでもしていたのか、アディダスの紺色ジャージだった。彼はイヤフォンを片耳だけ外し、心底どうでもよさそうな目をこちらに向けてくる。

俺はその目に見覚えがあつて、というか、たぶんその男を知っていた。しかし、喉のあたりまで出かかっているのに、名前が出てこない。

すると、男が原村へと視線を移す。

「ボク、じゃないよ。アンジェリーは女の子だから」

「あ、すみません。ごめんね、お嬢ちゃん」

原村がアンジェリーと顔を突き合わせて謝罪する。男はその様を見て、よしというように頷いた。そして、彼はジャージのポケットに手を入れる。

「で、お宅ら、こんな所でなにしてたの？」

「自殺だよー、アンジェリーちゃん」

原村は一体どういうノリで死ぬつもりなのだろう。男は一度ぼかんとして、ぼりぼりと茶髪を撫でた。

「あー、うん、死ぬのはいいんだけどさ。この線、十日くらい前に廃線になつてるから。やるなら余所でやってよ」

またタイムリーな。

あ、待って、思い出したかも。

「分かった、浅海あそみさんだ」

そうだ、たしか俺の四つ上で、中学のときのサッカー部OB。で、俺に煙草教えた人。

「そーだよ。つか、あんた誰」

「え、俺ですよ。今泉純一」

浅海さんは俺をじつと見つめて固まる。軽く首を傾げたが、やがて、ああはいはい純一くんね、と言って、片手でポケットを探った。ほんとに覚えてんのかよ。

浅海さんがポケットから何かを引き摺り出した。いや、携帯なん

「ただ、携帯についていたキーホルダーが異様にでかかったため、引き摺り出した、と表現した方が正解だろうと思った。よくこんなもんポケットに入ってたな。」

「そのキーホルダーがまた邪魔くさそうな感じで、まるでタヌキの尻尾みたいで、長くて太くて茶色でふさふさで、何故こんなものを好きこのんで携帯に付けているのかと」

「浅海さんって、下の名前なんだっけ」

「あれ？」

「アキラだけど。えーと、さんづくりの方の、彰」  
マジすか。

三人でだらだらと歩き、学校へと向かう道中。

アンジェリーのリードを引く役目を負わされ、前方では原村と浅海さんが肩を並べて歩いていていた。

「そついや彰くん、夏祭りで捕ったっていうあの金魚、どうしたの？」

「あー、エミカのこと？ 金魚鉢に入んないくらい肥大化したから、近所の小川に放流した」

二人が普通に会話していた。

「うわ、言ってくれれば僕ん家の水槽で飼ったのに」

「いいけど、昭文んこの水槽くせえじゃん。エミカが可哀想だろ」

「それはそうだけど、その辺の川じゃ、金魚死んじゃうと思うよ」

「そうなの？ やっぱ、どうしょ」

当たり前のように談笑していた。別に変だっというわけじゃないけど、いや、でもなんか違う。やっぱ変だ。

「お前ら、適当に話してるだろ」

二人がこちらを振り返る。昭文と彰。ダブルアッキー。どうでもいいか。

ぼかんとして、俺とアンジェリーを交互に見ていた。

やっぱ似てるわ、そんな浅海さんの言葉を無視しつつ、俺は原村へと視線を移した。すると、原村が納得したように柏手を打つ。

「そつか。そういうことか。ほら、去年の卒業生で、今泉みたいに屋上に通ってた先輩がいたって、前に話したじゃん」

「それが浅海さんだったの？」

「そういうこと。なんだ、彰くんと知り合いならもう気づいてると思ってたのに」

こっちは、浅海さんが俺らと同じ高校に在籍していたことすら知らなかったのに。そしてこの人まで屋上に。同じ法律無視の未成年

喫煙者だとはいえ、いくらなんでも世間は狭い。

浅海さんの案内誘導により、線路沿いの道を折れ、学校への近道らしい川沿いの道を歩く。アンジェリーは大人しかった。常にはあはあ言ってるけど、見た目に寄らず無口だった。

リードの輪に手首を差し込み、ハイライトに火を灯す。

浅海さんが今吸っている煙草も同じ銘柄だ。というか、彼が俺に勧めてきたのがその銘柄だったため、俺もそのままハイライトを吸い続けてるだけなんだけど。

中学時代、サッカー部のグラウンドに浅海さんが顔を出したのは、期間にしてたった二週間ほど。特に理由もなく、ただ暇つぶしに來ただけだと彼は言っていた。グラウンドの隅っこでリフティングをしながら、ぼうつと俺たちの練習試合を観戦していた記憶がある。

俺は対して気にも止めなかったし、浅海さんがどういう人なのかも興味がなかった。

ある日、プール付近の人気のないトイレの個室内で、未成年であるはずの浅海さんが煙草をふかしていた。俺がそのトイレに立ち寄ったのは偶然のことだった。慣れない匂いに気づき、その個室を開けたのも、ほんの気まぐれでしかない。

当時から癖っ毛気味の茶髪で、在校生に見つかったのに一切反応を見せず、生気もやる気もない面持ちで、閉じた便座の蓋の上に座っていた。

付き合ってよ、一本だけ。

しばらく無言で視線を交わしていると、浅海さんがそう言った。

俺たちがまともに会話を交わしたのはそれっきりで、どうして物覚えの悪い俺が名字しか知らない彼を覚えていたのか、やっぱり、喫煙のきっかけをよこした人だからだろうと思う。それだけ浅海さんはミステリアスだったし、あの喫煙姿も妙に印象に残っていた。

やがて、見慣れた町並みが視界に入ってくる。

俺の通っていた中学校の校舎が、民家からひょこりと頭を出していた。ぽつぽつと住宅が増えていき、行きつけの煙草屋のある商店街を進んでいく。

俺の斜め前を歩きながら、浅海さんが尻尾キーホルダー付きの携帯をいじっていた。すごく操作しづらそう。

「吉岡美野里って、知ってるよな」

尋ねてみると、彼はタヌキの尻尾を肩にかけ、ディスプレイに顔を近づけて答えた。

「知ってるもなにも、あいつって俺の従妹だから」

そうだったのか。あんたらもいと同じか。そうかそうか。ええーっ。

「いや今泉、さすがにそこは知っておくべきでしょ」と笑う原村。お前は知ってたなら教える。

それにしても、なにかが腑に落ちない。俺の中の人物相関図のどこかが破綻している気がする。

気を落ち着かせ、じっくり過去を掘り下げる。貧困な記憶力に渴を入れ、今までの情報を整理してみる。

そう、二組のあいだで、密かにささやかれている噂がある。誰がどう噂したのかあんまり覚えてないけど、たしかこんな感じだった。

うちのクラスに、家庭教師と付き合ってるやついるだろ。実はその家庭教師ってのがいとこらしいぜー。

これとか。

他にも親戚とくっついてる子がいるって話じゃん。ただの噂かもだけど。

あー思い出した！あれでしょ、いとこでカテキョっていうあれ。

これとか。だんだん頭が回らなくなってきた。もう嫌な予感しかない。

「浅海さんって、バイトか何かしてる？」

細々と尋ねてみる。浅海さんはなんでもないことのように答えた。「むしろ、最近はバイトしかしてないね。個人経営の喫茶店の手伝いがメインで、あとはピザ屋と、たまに家庭教師とかもやってる」「もろじゃねえか。」

「ちゃんと大学も行かなきゃだめだよー」と原村がせせら笑う。今だけは本当に黙っていてほしい。

「え、なに。親戚なのに、もしかして吉岡と付き合ってたりする？」「どうしてそうなる？」

浅海さんは怪訝に眉をひそめ、くわえた煙草を手に持ち変えて言った。

「まあ、付き合ってるっつーか、たまにやるだけだけど」「やる、って」

「だから、従妹兼セフレ」「セ……」

それ以上何も言えなくなって、笑顔のまま硬直する原村と顔を合わせた。こいつもここまでは知らなかったようだ。

「あいつおっかねーし、欲しがりだし、別に興味ないんだけど、半分強制なんだよな。って、あれUFOじゃね？」

浅海さんは暗み始めた空を見上げ、天気の話でもするみたいにぼやいた。彼の指す空を見る。どう見ても飛行機だった。

浅海さんは携帯からぶら下がる尻尾をくるくると振り回して、煙をいっぱい吐き出した。

ドン引きする俺たちにも全く気づかないようで、やがて前方に開けた大通りが見えてくると、彼はやはりどうでもよさそうな口調でこう告げた。

「学校はこの道の先だから。俺、ジョギングに戻るわ」

無言でリードを浅海さんに手渡す。彼は一度アンジェリーの頭をかき撫でると、振り返らずに元来た道を駆けていった。

黙ってその背中を見送り、俺は切実な質問を原村に振る。

「で、結局あの人はなんなの」

「僕の口からは何も言えない」

「なんだそれ」

辺りはもう薄暗くなっており、浅海さんとアンジェリーがマンションの影に入ると、すっかり姿が見えなくなってしまった。蒸し暑さのせいかわりに鈍りきった頭で、もつと深い突っ込みを入れるべきだったのだろうかと思いついたが、だんだん面倒くさくなってきて、俺たちはどちらともなく学校へ向けて歩きだした。

今日はほとんどパニック状態で教室を飛び出してしまったため、教室に鞆を忘れてきた。

校舎内は薄暗く、生徒の姿はなかったが、念を入れて忍び足で廊下を進んだ。一年二組の教室に到着し、扉から中を覗く。暗すぎてうまく確認できないが、ともかく人の気配は感じられない。

扉を開け、右足を出すと、つま先が何かにぶつかった。ごっつん、みたいな感覚。悲鳴を上げそうになるのをこらえ、ゆっくり下を見下ろす。

宮下が、体育座りで俺を見上げていた。俺は彼のすねを蹴ってしまっていたらしく、宮下は足を抑えてすごく痛そうにしていた。

一方の俺は、ビビリ過ぎて声すら上げずに固まっていたのだけど。「今泉くん、先生を見下しつつ蹴るなんて、君も中々やるようになったね」

言い返したいことや突っ込みたいことは山ほどあったが、丁寧に息を整え、宮下をシカトして教室内へと歩を進めた。

痛がりながらも、俺の背後をキープして着いてくる宮下。しかも電気を点けていないので、思いつきり暗がりの中である。なんの妖怪だよ。

自分の席に掛けられた学生鞆を取り、早足で教室を抜け出そうとしたが、やっぱり宮下から肩を掴まれて引き留められた。

「んだよ、生徒指導はこんな夜中までやんなきゃなんないの？ マジ大変だな、教師って」

「そうじゃない」

俺のすね蹴りは相当効いていたらしく、声が引きつっていた。

「宮下はね、今泉くんには、今日のことぐらいでグレてほしくないんですよ」

「今日のことぐらいって、俺的にはもう引っ込みつかないんだけど。」



それに、もうすぐ終業式だしいいじゃん。二学期からは来るからさ、たぶん」

「そんなのやだ。最近の宮下、ただでさえ今泉くんが図書室来なくて寂しい思いをしてるんですよ。宮下が図書室に通えるようになったのだって、ほとんど今泉くんのお陰なんだからね。宮下、教員の仲間内では半分八ブられてるからね？」

「なんだか気色悪くなってきて、俺は宮下の手を振り払った。」

「知らねえよ。俺には関係ないし、つか、なにその理由。あんたほんとに教師？それが精神的にまいってる生徒にかける言葉かよ」「教師だとか生徒だとか、授業時間外の、今この瞬間では全く意味を為しません。現時刻においての宮下と今泉くんは、ただの友人同士です」

暗くてよく分からないが、そんな破綻しまくった理論を振りかざす宮下の顔つきは、信じ難いことに真面目一辺倒だった。

俺は引くと同時に、目の前に立つ教師が頭の病気にでもかかったのかと心配したり、それともこういう教育方針なのかと疑ったり、しかし最後までなにも言い返せず、黙って背を向けて教室を出た。

また背後からなにやら声を掛けられたが、俺は聞こえないふりをして廊下を突っ走っていった。

で、結局。

翌日の俺は、学校へと赴いてしまっていた。

一体なにが俺の足をここへ運んでしまったのか自分でも不思議でならない。俺は、宮下のあの訳の分からない話術に、まんまと嵌められてしまったのだろうか。

学校の敷地に入り、生徒玄関に向かうにつれ、校舎全体から拒絶されるような感覚を受けた。気のせいだと思いたかったが、自分の靴箱を開けた途端、それは確信に変わった。

雰囲気悪くなるから早く帰ってね（笑）

丁寧に二つ折りにされた便せんに、これまたクソ丁寧な字でそう書かれていた。膝の力が抜け落ちてしまいそうだった。

冷静に考えれば当然の扱いなのだろうが、俺はそれでも、心のどこかで信じていた。

へまをしでかした馬鹿な俺を、快く受け入れてくれるクラスメイトの良心を。

玄関から、昨日と同じく前髪全開の村瀬が入ってくる。俺は頬が引きつるのを我慢して、挨拶をしようとした。だけど、出来なかった。

目を、逸らされてしまったのだから。

教室に入ると、まるで空気が変わっていた。俺に対する反応だ。誰もが俺を見ようとしなない。冷やかもしなければ、嘲笑もしない。誰も彼もが俺を避けようとしていた。いや、これは避けるなんて生易しいものではない。

俺の存在を、最初からなかったものとしている。俺だけを別の世界に閉じこめ、クラス内では、何事もなかったかのような談笑が交わされている。

目の前の女子が財布から小銭を落とす、五百円玉が俺の足下に転がってくる。俺はそれを拾おうとしたが、伸ばしかけた手は追いつかなかった。俺の手をわざとらしく押し退け、近くに居た男子が拾い上げたのだ。彼はことも無げに女子にそれを渡し、俺の存在はあっさり否定される。

俺は得体の知れない寂寥感に全身を支配され、力無く自分の席に着いた。

何気なく机の引き出しに手を入れると、そこにも、靴箱と似たような内容の紙が数枚入っていた。

ゴミ箱に捨てにいく気力も沸かないので、俺はそのまま机に突っ伏した。

宮下を恨むべきなのだろうか。

違う。これは間違いなく俺の責任だ。人間関係なんて、結局そうなんだ。自分の意志で起こした行動だって、他人からそのかされて起こした行動だって、全てのしっぺ返しは自分に返ってくる。そのしっぺ返しを予測出来ない、覚悟できない、俺自身が悪いのだ。机に顔を落としてしっつ、俺はいつかの、鍋島の言葉を思い出していた。

いじめられて、初めて見える景色があつて。

そう、こんな感じ。

景色が色あせて見えるんです。視界が狭くなるんです。何も見えなくなつて、目の前が、真つ黒のどろどろになつちゃうんです。なるほど、どろどろかもな。

自分だけは大丈夫、俺はきっとそんな風に思い込んでいた。どれだけいじめに首を突っ込んだって、どれだけ親身になつていいる風を装つていたつて、所詮、他人は他人でしかないと思つていたんだ。

だからこんな風に、途端に自分の環境を崩されると、プライドも存在もあっさり否定されてしまうと、いともたやすく殻が破られ、どろどろになつてしまうのだ。

ふいに、頭になにかが当たつた。

顔を上げて確認する。机の端に、一枚の紙飛行機が乗っていた。誰が飛ばしたものは検討もつかない。だけど、そこに何が書かれているのかは、大体予想がつく。

見る必要もないし、見たくもないはずなのに、俺はその紙飛行機に手を伸ばし、開いていた。

学校辞めるor死ぬ？

その日の記憶は驚くほど希薄だった。

そしてその翌日、懲りずに俺が学校へ向かったのは、もはや義務感のみが原動力となっていたからだ。これは、『無視』といういじめを受け入れるべきだという、俺自らに課せられた義務であり、罰なのだと思った。そう思うことにした。

依子や城川は相変わらず何らかのいじめを受けていたようだが、とにかく興味が沸かなかった。明日は終業式だし、お互い、どうせあと一日我慢すればいいだけの話だ。俺はただ机に伏し、また歪み始めていく視界をふさいだ。

昼休みを屋上で過ごし、掃除の時間となる。

裏庭に出向き、一人で掃除を開始した。同じ持ち場である城川が五分遅れでやってくる。俺は彼女の到着を無視し、いつものようにプランターの水やりを始めた。

そのとき、城川が俺の制服のすそを引いた。

振り返る。彼女は手に白いビニール袋を持っており、すがりつくような目で俺を見つめていた。俺はその視線にたじろぎ、黙って見返すことしか出来なかった。

「手伝って、ほしいの」

俺の制服から手を離し、彼女はビニール袋を広げた。ためらいつつも、俺はその中を覗き込む。そして、思わず顔をしかめた。

袋の中には、数羽の雀の死骸があった。眠っているのではないかと思うほど綺麗な死骸もあれば、内臓や羽が抜け落ちた凄惨な死骸もあり、数は十羽ほどあった。

城川はその死骸の山へと目を向けつつ、ぽつりと口を開く。

「わたしと依ちゃんの靴箱に、今まで入れ続けられたもの。埋めてあげないと、可哀想だから」

「なんで俺なんだよ。お前らんとこに入れられたんだから、依子に手伝ってもらえばいいじゃん」

城川は唇をふるわせ、小さく首を振った。何かを伝えようとしきりに口をうごめかせていたが、嗚咽によってそれは遮られる。俺は彼女の説明をじっと待つ。

掃除終了を知らせるチャイムが鳴った。目の前の渡り廊下を続々と生徒が通り過ぎていく。俺たちに怪訝な目を向ける者もいたが、さして気にした様子もなく、俺と城川は徐々にその流れから取り残されていく。

顔を下げ続ける城川を見る。死骸に涙を数粒落とす彼女に、俺はやむなくため息を吐いた。

「どこに埋める？」

太陽光が雲によって遮られ、昼間にしては地面がやけに灰色がかって見えた。俺は城川の背中を軽く押す。

ありがとう、短くそう聞こえた。

校庭用のガーデニングスコップを一個ずつ持ち出し、裏庭に戻る。そこから校舎の壁を右に曲がる。そこは校舎と校門から伸びる壁に挟まれ、閑散とした細い通路となっていた。雑草が伸びきってはいるが、土も軟らかく、校内では最も人通りのない場所だ。雀の墓を作るには最適だろう。

校舎の壁際に寄り添い、城川と並んでしゃがみ込む。二人の間に例のビニール袋を置いた。

そこで、五時限目開始を告げるチャイムが鳴り響く。それを聞き届け、俺たちは作業を始めた。

俺はハンドスコップで雑草ごと砂を掘りあげようとしたが、根っこにスコップの先が当たり、動きが一瞬止まってしまった。見た目以上に、地面が固かった。

「俺が掘るから、城川はその辺の草むしりしといて」

指示を出すと、城川は小さくうなずき、さっそく草に手をかけた。俺も黙って手を動かす。

やがて、一つ目の墓穴が出来あがった。

城川が素手で雀を取り出そうとするので、俺は慌ててその手を掴んだ。

「雑菌だらけだからさ、雀って」

そう言って、俺はビニール袋の中にスコップを差し入れようとしたが、今度は城川の方が俺の手を制止してきた。

「手でする」

彼女らしくない、意志のこもった目だった。俺はスコップをおろし、城川が雀を取り出すのを見届けた。

雀を両手で包むようにして、ゆっくりと墓穴へ運ぶ。そっと穴の中に入ると、城川の指が雀の背中を撫でた。

十センチにも満たない小さな身体を、俺は羽毛の細部まで見つめた。

「小さいな」

当たり前のことを言うと、城川は声もなくうなずいた。

「こんなに小さいのに、飛べたんだよな。力無いくせに、俺らにも出来ないこと、平気でやってんだよ。よく考えると不思議だよな。信じらんねえ」

雀のすぐそばに、一滴のしずくが滴り落ちる。城川の指が雀から離れ、震えていた。そんな彼女の姿に、思わず頬が緩む。

「雀が死んだくらいで泣けんの、うちのクラスじゃお前くらいだよ」  
一滴ずつ規則的に落ちていき、いつそう、指の震えが強まってくる。

「ちがう」

ふいに、城川が大きく首を振った。

「わたし、そんなにいいやつじゃない」

悲鳴にも似た声をあげ、乱暴な手つきで雀に土をかけていく。

「わたしは、こんな雀、可哀想だなんて思っただけ」

俺は閉口し、墓穴を埋めていく城川の様子をじっと眺めた。投げるように土を放り入れ、叩くように地面を固め、荒っぽく土の表面を

ならしていく。指先に土がまとわりつき、爪の間が汚れる。

埋葬し終わると、彼女は真っ赤にした目をこちらに向けた。

「道ばたで孤独に死んで、死んだあとも、こうして誰かが誰かをあざ笑うために使われる。すぐくみじめで、救いのない死に方。わたしも、最後はこんな風に死ぬのになって思えてきて、怖くなって、手が震えて、だから泣いた。自分もこうなるんだって、想像したら怖くなっただけで、わたし、雀のことが可哀想だなんて、ぜんぜん思っていないっ」

ほとんど呼吸を挟まずに言い切り、城川は大きく息を吐き出し、俺を見据えた。

「でも、雀の死で泣いたことに、変わりはないだろ」

城川はかたくなに頭を振って否定するが、俺はそのまま二つ目の墓を掘り始めた。

ふと異変に気づき、隣を見ると、城川が地面に両膝を押しつけ、スコップも持たずに地面に指を立てていた。やめるよう言いつけたが、やはり彼女は首を振った。

口出しはもう野暮なのだろうか。逡巡するが、どう考えても放っておくわけにはいかず、俺はその両手を掴んで地面から引き離れた。怪我したらばい菌入んだろうが。ちよつと落ち着けよお前」

「依ちゃんが、もういいって……」  
目をつむり、語尾に些少の嗚咽が混ざる。城川が急に大人しくなったのに気づくと、俺はそつと手を放した。

城川が地面に両手をつき、手の甲に涙を落とす。

「いじめ、もう止めなくていいって。もう、心結までいじめられることはないって。さっき、依ちゃんにそう言われた」

それにわたしは、と続け、いったん言葉が途切れる。うめきが絶えず喉元から漏れる。一度大きく深呼吸をして、城川が叫ぶように言った。

「依ちゃんの言葉に、わたしはほっとした。もういじめられなくていいんだって、安心したっ。依ちゃんばかりが苦しんでいるのに、

わたしは、どうしても自分がかわいいっ……」

俺は奥歯を噛み、耳を塞ぎたい気持ち在必死で抑えた。城川の指が草を握り、少しずつ繊維が裂かれる音がする。耳障りな音に俺は眉をひそめ、ついに彼女から視線を外した。

「ずっと、ずっと由多加ちゃんみたいになりたかった。由多加ちゃんみたいに、格好よくて、明るくて、勉強ができて、誰にでも優しく、いじめだって、構わず止めてくれる」

城川さん、昔いじめられてたんですよ。

「いじめにだって負けないような……」

私、助けようとしたんです。止めるって喚いたり、直接先生に訴えたり。そうすると、今度は私がいじめられ出したんです。いじめられて初めて見える風景があるんだなって。

「由多加ちゃんみたいになっ……」

結局、私は逃げました。

「わたしは、」

私、弱いものいじめは大嫌いだし、見るのも嫌なんですけど、でも、されるのはもっと、嫌だったから。

「由多加ちゃん」

人をいじめから庇ったことを、後悔してみてくださいよ。

小さな拳が地面に落ちる。

「後悔なんかしないでよっ！ 後悔するくらいなら、最初から助けないでよっ。わたしまで、後悔しちゃうよっ……」

続けざまに振り落とされる拳をつかんで止める。

「城川」

名前を呼ぶ。しかし、それ以上の言葉が浮かばなかった。

逃げることにそのものではなく、そこから腐りきってしまうことが駄目なんだ。俺は鍋島の過去に、そう結論づけた。本当にそれでいいのか？ 結局なにも解決していない。自己満足で終わり、自分に



言い訳をつけて、とどのつまり、逃げたことに変わりはないんじゃないか。

「やだっ、やだよっ……」

偽善で終わることに、苦しむ者がいるのに。

六羽目の雀を埋葬し終わると、俺は顔を上げた。

もう随分時間が経っていた。腕時計を見ると、六時限目の中程という時刻だった。

隣では城川が体育座りで沈黙しており、俺はずっと一人で雀の墓を掘っていた。もはや授業どころではない。作業が終わるころには、日が暮れているだろう。

そういった状況の中、俺がのんきに顔を上げたのは、目の前に宮下が立っていたからだだった。

射してくる日の光によって影になり、彼の表情はうまく確認出来なかった。俺たちの正面に座り、雀の死骸へと目を向けたとき、初めてその顔色が分かった。

もの悲しい目をしていた。俺が初めて見る表情で、いつもの陽気な雰囲気完全に取られ、俺もスコップの動きを止めた。

城川が斜め下を向き、俺もスコップの動きを止めた。

無音がその場を支配する。

代わりに、宮下は地面に放置された城川のスコップを手にして、無言で地面を掘り始めた。俺は途端にむずがゆい気分になり、宮下にならって穴を作る作業に集中した。城川は泣くのを止めて、黙って俺たちの動静を見つめた。

ざく、ざく。校舎と壁に挟まれ、絶えず反響していく。

七羽目の墓が出来上がった。

俺は、死骸を素手で包むように袋から出した。腹部辺りの羽毛が黒い血で汚れている。そこから垂れ下がる内臓が手に張りついたが、さほど不快感はなく、むしろ雀に対する慈悲が増していくのを感じた。

七羽目を埋めきったところ、宮下が八羽目の墓穴を掘りあげた。城川は変わらず、身じろぎ一つしない。

「この世に正義のヒーローが存在しないのは、仕方のないことなんです」

無音の中、宮下が口ずさんだ。スコップの裏で地面を叩きながら、俺は灰色の砂粒をじつくり眺めた。

「人は、まとまりを作らずにはいられない。組織に属していなければ、人間はまともに生きていけない。なのに、ですよ」

俺は手を休め、手首で額の汗を拭った。

宮下は掘ったばかりの墓穴へと目を向けるばかりだった。

「誰かが善を主張しても、その善が、他の誰かの目には悪としか捉えられない場合もある。集団の価値観とベクトルを定めようとする一方、裏ではそれぞれが違う目標を持ち、ときには正反対の思想を掲げるんです。集団の中でしか生きていけないにも関わらず、人は理屈を無視したジレンマに頭を悩ませる。これが組織におけるコンフリクトの元凶です」

宮下がビニール袋に手を入れる。彼も、素手で雀を包んでいた。

沈んだ地面の窪みに入れると、しばらく、横たわる雀の様を見つめていた。

彼が顔をあげたのは、それから一分近くも経ってからだった。俺は、その眼差しと真正面に向き合う。

「全ての人間に共通した正義なんてあり得ない。だからコンフリクトが生まれる。けれど、この状況から目を逸らしてはいけません。正義がないのなら、悪という概念だって考えてはいけません。したがって、君たちの不誠実で怠慢な対応が最悪を招くことだってある。

このままでは、君たちはきつと後悔します」

「後悔」

繰り返して言うてみると、言葉が余計に重く、肩にのしかかった後悔の中で安易に死のうと考えた俺と、後悔の上で傷つくことに耐えられなくなつた城川には、重すぎるくらいだった。

「どうしてだい、今泉くん。何故後悔するような道を選ばなきゃいけない」

ふいに、宮下が俺の手を掴んだ。俺はたじろぎ、握られた手に目をやることしか出来なかった。

「今まで出会ってきた人たちを、よく思い出してみよ。彼らの中に、本物の悪人がどれだけ居た？ 理由もなく悪意を振りかざす人が、どれだけ居たんだ。もし居たとして、それは、君が後悔を選ぶほど許せない人なの？」

そんなやつは居ない。本当はもう分かっている。俺自身が弱いから許せないのであって、大抵の場合、相手も俺と同じだ。

あの夜の依子の姿が脳裏を占める。

泣き出しそうな顔で、それでも涙を呑んだ依子。

あれは何を意味していた？ それすら分からないまま、俺は依子を見捨てた。彼女が本音を言わなかったただけではなく、俺自身も、聞く耳を持つとうとしなかった。

次に、宮下は城川の手も取った。これで彼の両手は、俺たちの手によって塞がった。顔を背ける彼女にも宮下はひたむきに視線を送る。

「城川さん、逃げるなどは言わない。ただ、不真面目にだけはなつてほしくないんだよ。直接いじめに関わらなかつて、君にも出来ることはいくらだつてある」

相変わらず太陽を隠し続ける積雲。細い通路を涼風が抜けていき、頬に伝う汗を少しずつ冷却した。

「正義も悪も、一切考えなくていい。そんな身勝手な言葉、いまさら誰のためにもならない。ただ、後悔だけはしてほしくない。誰かに謝り忘れていないか、伝えきれなかつたことはないか、本当の声を聞きそびれていないか、それだけを考えて、動いてほしい」

「いっばいある」

答えたのは城川だった。

「言いたかつたことも、聞きたかつたことも、謝りたかつたことも、あり過ぎるくらい、いっばいある」

城川は、宮下の手にもう片方の手を添え、その上に額を乗せた。

葛藤や思いを巡らせ、彼女の頭がその重みに耐えきれなくなったように見えた。

「あるのに、できない」

俺はうなずき、少しだけ頭を垂れた。

あり過ぎるんだ。俺たちはここに来るまで、多くの失敗を繰り返した。言いたいことも謝りたいことも、その分多くなってしまった。多すぎて、もう後戻りだって出来ないかもしれない。

「少なくとも宮下には、君たちのやりそびれたことが、人を傷つけるものだとは思えない。君たちだけじゃなく、みんなそうだよ。二人が考えているよりずっと、多くの人が優しさと思いやりを内に秘めている。なのに、それを上手く伝えられないなんて、虚しすぎるじゃないか」

それっきり、その空間は無音に包まれた。

うつむく俺たちに、宮下はそれ以上の言葉をかけなかった。あとは俺たちが決めることだから、彼は何も言わないのだ。

十一羽すべての雀を埋め終えたのは、放課後に入って十五分ほど経ってからだだった。俺と城川は宮下に連れられ、大人しく生徒指導室に向かった。中では、五頭が静かに俺たちを待っていた。

午後の授業をサボったとはいえ、これまで真面目に授業を受けてきた城川は嚴重注意だけで終わり、あっさりと帰宅を許された。

問題は俺の方である。

今日のことに加え、一昨日は教師や生徒に暴力を振るいかけた上、その後は原村と散歩に出掛けて丸一日を無断で欠席した。いつものように拳骨をかましてくれた方がいくらか楽だったが、今回の五頭は本気で俺の処分を考えているようだった。

とはいえ、俺を停学させようにも、明後日から夏休みが始まってしまふ。

「夏休み初めから登校日までの二週間、朝九時からの校内清掃に来

い

それが五頭の下した処罰だった。

「毎日すか」

念のため尋ねてみたが、五頭は鋭い眼光だけしか返してくれなかった。俺は諦めて、厳正な態度で肃々と謝罪を述べた。

今日出す予定だったアルバイト申請は、当然のごとく却下されてしまっただろう。だから俺は、教師の目の届かなさそうなバイト先を静かに頭の中で模索した。

二時間近くにわたる説教が終わる。

五頭があらかじめ、教室から俺の鞆を持ってきていた。俺は鞆を受け取り、そのまま外に出た。

自転車置き場には相変わらず、放置された自転車が大量に並んでいた。辺りは暗くなっていたが、そこだけ照明でうつすらと照らされている。もはや見慣れた光景なので大して気にも止めず、俺は自分の自転車を探した。

俺の自転車は、前後両方のタイヤが見事にパンクしていた。

かつて自転車を盗まれた経験のある依子のように平然とはしていません、怒りにまかせて並べられた放置自転車を蹴り倒そうと試みたが、これ以上の不祥事は避けるべきだと思いとどまり、ぐっと我慢した。

タイヤを確認してみる。穴を開けられたという形跡はない。しかしよく見ると、空気注入口のキャップとバルブがすっぽり無くなっていた。前後共に同じ具合で部品を抜かれている。

周辺の地面を探したが見つかるはずもなく、俺は魂ごと絞り出るくらいに深いため息を吐き、徒歩で校門を抜けた。

四十分ほど歩いたところだろうか。まだ営業しているかは疑問だ

つたが、俺はいつもの廃れた商店街に入り、いきつけの煙草屋に立ち寄った。婆さんはやはり居眠りをしており、営業時間外にも関わらず、店を開けっ放しにしていた。

いつものように婆さんを起こし、ハイライトを三箱購入する。

自宅へ向けてさらに歩き、途中のコンビニに入った。適当に雑誌を読んで時間をつぶし、結局何も買わずに外へ出る。コンビニ前に設置された灰皿で煙草を吸いながら、なにげなく携帯を開いた。

時刻はすでに九時近くを回っていて、携帯の画面を見た俺は、思わず眉をひそめる。

着信二十一件。未読メール四件。

親父と母ちゃんからの着信がほとんどだったが、その中には珍しく、道子叔母さんの携帯番号も混ざっていた。

俺の携帯は、サイレントモードのままだった。だから今の今まで、着信に気づけなかった。

不穏な空気を感じた俺は、メールを確認することもなく、最も多く着信があった母ちゃんの携帯にかけなおした。

一度煙を吸い込み、呼吸を整える。コール三回。母ちゃんが電話に出た。

「純一、いまだこ？」

第一声がそれだった。かなり座りの悪い、それでいて鬼気迫った口調である。俺が夜遅くに帰るのはよくあることだし、なにが原因なのか分からず、俺は声を低くして現在地を答えた。

すると、受話口から苛立ったような金切り声があがる。

「依子ちゃんといるんでしょ？」

「いや、依子は」

「依子ちゃん連れて、いますぐ中央病院に来なさい」

すぐには意図が分からず、しかし、俺の心臓は意識と離れて早鐘を打ちはじめていた。投げるように煙草を灰皿に放る。

「なんかあったのかよ」

聞き漏らさないように、しっかりと携帯を耳に当てる。母ちゃん

の声が短く、はっきりと聞こえた。

通話を切り、すみやかに依子の携帯に電話をかける。彼女との不仲など、もはや気にしている場合ではなかった。

さきほどの母ちゃんの話だと、依子も俺同様に、誰が電話をかけても出なかったらしい。俺のこの電話だって出ない可能性が高い。依子のことだから、いくら着信が来ても平気で無視してしまうのだろう。だが、それを踏まえた上でもおかしい。

依子が、まだ家に戻って来ないらしいのだ。夜九時になったこの時刻にも関わらず。

二回目のコール音。依子が電話に出ないことで、さらに焦燥が高まっていく。背後でやかましく鳴り響く音にさらに苛立ちを覚える。四回目のコール音。依子はまだ出ない。

店内からの視線など知ったことではなく、俺は駐車場の車止めを思いきり蹴った。コンクリートのため、逆にこっちの足が痛むはずだが、その痛みすら気にならなかった。そして、いまだに後ろから聞こえる耳障りな電子音。

十回目のコール音を聞く。

ここで俺は携帯を顔から離し、背後を振り返った。俺のすぐ後ろにはゴミ箱が設置されている。

プラスチック製の、どこにでもあるコンビニ用のゴミ箱。

その中からだ。さつきからずっと、電子音がけたたましく鳴り響いている。コールを続行したまま、携帯を手元にぶらさげ、俺はそのゴミ箱へと歩み寄る。

その中に、光るなにかを発見した。迷わず手を突っ込み、それを取り出す。

音の正体は、一昔前に発売されたような卵型の携帯電話だった。いまどきこんな化石みたいな携帯を使うやつなんて、俺は一人しか知らない。



その意味を理解した直後、俺は即座に学校に向けて走り出した。

暗がりの街路を突っ走る。

ここから学校まで、全力で走っても三十分はくだらないだろう。つか、なんで俺走ってんだよ。なんで自転車じゃねえんだ。なんで今日に限ってパンクなんかさせられんだよ。

錯乱し続けた俺の頭の中は、今まで、空っぽの器でしかなかった。本当はなにも考えていなかった。約束も義理も、すべてほっぽりだしていた。

今、この器に、混濁した真っ白な洪水が押し寄せてきたのだ。呼吸すらままならず、俺の全てをどろどろに溶かす。

息を荒げ、俺はあのことを思い出していた。

叔父さんと約束を交わしたあの日のこと。

「依子の依は、たよる、という字なんだけだよ」

叔父さんは入道雲の空を見上げ、静かに言った。

鳶の鳴き声を耳にしながら、俺は叔父さんの手元の簡易台へと目を向けた。

台の上ではノートが開かれており、『よりこ』と、ひらがなで書かれていた。叔父さんの字だ。弱々しく、震えきった文字。

窓が十センチほど開いていて、病室の白いカーテンが揺れた。

「依子、いじめに遭っているんだろっ」

脈絡もなく、かつ確信めいた口調で叔父さんが言った。

「道子が教えてくれたんだ。依子の自転車が盗まれたらしいって。道子が問い詰めて、依子もようやく白状したよ。純一の家から貸してもらってるってな」

俺は躊躇いがちにうなずき、赤くなつた目を今一度拭った。

「ありがとつな、純一。いつもあいつの世話してくれて。その話聞いたとき、俺、思わず昔のこと思い出したよ」

「昔って?」

「小学生の頃、依子のこと、自転車で送り迎えしてくれたことがあったよな。依子な、そのときも黙ってたんだよ。純一の世話になったこと」

「自転車通学禁止だったもんな。そりゃ依子もバレないようにするだろ」

「まあ、俺も道子もすぐに気づいたけどな」

まじかよ、と俺は小さく笑った。叔父さんは笑わなかった。俺はすぐに口元に緊張を浮かべ、その横顔を見つめた。

依子は、いじめられていることを叔父さんに教えないままだったのだ。

依子、ああ見えて全然俺に甘えてくれねえんだよ。

さつきは遠回しな言い方だったけど、俺はやっと、叔父さんの言葉の意味を知った。

「もう大人になっちまったんだな、依子も、純一も」

また感情の波が押し寄せてくる。俺はそれを抑えつけて、代わりに頭を大きく振った。

「全然大人じゃねえよ、俺たちなんか」

「大人さ。いや、もう大人になってもらわなきゃ困る」

「なんだよその言い方。困るってなんだよ。そういうのやめろって、マジで」

俺は太ももをズボンごと掴み、少しだけ言葉を荒げた。反対に、俺を落ち着かせるように叔父さんは語感を和らげた。

「純一に、頼みたいことがある」

聞きたくない、直感的にそう思った。

「依子のこと、これからも助けてやってくれ」

「……だから、やめろってば」

拳で膝を叩く。一回では足りなくて、何度も何度も叩いた。痛み

は内側まで届き、骨がきしんだような気がした。

「叔父さんが助けるよ。意味わかんねえ。なんで俺なんだよ。あんな親だろ。依子の面倒、叔父さんが最後まで見てやるべきだろ」

「俺じゃ駄目なんだ」

叔父さんが首を振った。台に投げ出した仰向けの右手が、やがてうつ伏せに転がった。

「駄目なんだよ」

叔父さんは再度ペンを取る。さっきよりも震えが増して見えるのは、なにも腕の疲れからだけではなかった。彼の目に涙がにじむのを、俺は見た。

黙ってその右手を注視する。

「いつまでもあいつの親でありたい。大人になっても、ずっと、俺や道子をたよって欲している。だからこそ『依子』だ。だけどなペン先が紙面に立ち、『よ』の字を書く。『り』の字を書こうとしたところ、握力の限界か、それとも気持ちがあくじけたか、叔父さんの指からペンが滑り落ちる。台の上で転がり、縁のぎりぎり落下を免れる。

我慢できなくなって、俺はボールペンを取り、叔父さんに差し出した。書いてくれ、嗚咽を混じらせながら頼み込んだ。

叔父さんは、もう泣いていた。細った指でペンを受け取ると、無言でノートに向かった。

『り』を書き終える。『こ』の二画目へとペン先を進める。ゆっくりと手を動かしつつ、叔父さんは顔をうつむかせた。

「もう、無理なんだよ」

涙が紙面を打つ。

「日に日に頭回らなくなって、漢字、忘れちゃってさ。手の震え、止まらなくてさ。たよるって字、もう、書けねえんだよ。一人でぼうつとしていると、忘れちゃうんだよ、依子の顔」

滴る間隔がしだいに短くなっていく。叔父さんの手が動きを止めた。『こ』の二画目を書ききれずに、ついにペンが落下する。床を

転がっていく音が耳に痛い。

俺は、頭を垂れ続けるその横顔から目を離さなかった。片手で胸を掴み、台に頭をつけて嗚咽を漏らし続ける叔父さんには、どんな励ましも、どんな言葉も出てこなかった。

「依子が、離れていく」

台に額を押しつけたままの叔父さんは、声もなく静かに泣いた。相変わらず、遠くでは鳶が鳴き喚いており、入道雲の色が純白さを増していた。

この日、俺は叔父さんからもう一つの頼みを受けた。

「俺の最期を、是非依子と純一にも看取ってほしい。そのとき、依子が俺のために泣いてくれたなら、それで俺の人生は勝ちだと思いうことにする。馬鹿なお願いだろう。でもな、お前らに必要とされてたんだってこと、最後までいは錯覚させてほしいんだ」

叔父さんはすっかり元気を取り戻したように言った。俺は無言でうなずき、パイプ椅子を立った。錯覚なんかじゃない、その言葉は言えずじまいだった。

待合室では、依子が待っていた。俺の泣き顔を依子は指摘してきたが、知らんぷりしておいた。

「依子。これからは自分の携帯、いつも近くに置いとけよ」

「どうして」

「いいから」

依子の前を歩き、情けない顔を隠す。

頭の中で葛藤を巡らせた。

叔父さんの諦めたものを、俺なんかが受け取っていいのか。叔父さんの本心を依子に伝えなくていいのだろうか。

どれだけ時間が残されているかも分からないのに、俺はいつまでも悠長に葛藤を繰り返した。

「馬鹿かよ」

もつれそうになる足にむち打ち、学校への近道である裏道を疾走する。右手に掴んだ依子の携帯をさらに強く握りしめた。

「どこまで馬鹿なんだよつ、俺はっ……」

こうして道を踏み外す最後まで分からない。俺は今まで、一体何を悩んでいたんだ。

小手先ばかりの言葉を羅列し、自分や他人に対して日和見的な言い訳をつけ、気に入らないもの追いつめ、他人の気持ちを知った気になって、ときに冷めた態度で達観したつもりになって、結局、俺はなにも達成していない。どうやって場をやり過ぎるか、それしか考えないでいなかった。最優先事項は、いつだって自分だった。

路地を折れる。国道が目の前にあり、車のライトが幾度も通過していく。この道の先に学校がある。

いよいよ息切れが限界を迎えてきた。中学の頃と比べればかなり体力が落ちてている。

なんで煙草なんかにはまったのか、今の俺ならよく分かる。

まだ続けられるにも関わらず、足の怪我を理由に部活を辞めた。

トラウマなんていう大嫌いな言葉をひた隠しにし、煙草を吸ってそれを紛らわせた。自分が逃げたつてことが信じられなくて、受験勉強にのめり込んで自分を騙した。

面白いくらい逃げてばっかだ。可笑しいくらい口先だけだ。阿呆みたいに全部忘れてきた。その代償が、今ここで叩きつけられたのだ。

学校が目前となる。

一般歩道と学校敷地を隔て、背の高いフェンスが鎮座していた。

俺はフェンスに指をかけ、そこから見える校内の自転車駐輪場のぞき込んだ。

一つ、見落としていたことがある。並べられた放置自転車だ。学校を出る前、あれが視界に入ったにも関わらず、俺は見落としてい

たのかもしれない。

視線を巡らせ探してみると、それがあつた。母ちゃんの赤いママチャリ、つまり、依子に貸していた自転車だ。

フェンス沿いに校門へと走る。

校門に到着すると、ちょうどそのとき、荒々しい音を立てて扉が開いた。そこから顔を出したのは五頭だった。彼は俺を認めると、弾んだ呼吸を整えもせずと言った。

「今泉、さつき平野の親御さんから連絡があつた。平野はどこだ」

俺は腰を屈め、両膝に手をつけて息を吐き出した。ちょうどよく門が開いて助かつた。俺は切れ切れになる息で無理矢理に声を出す。「依子は、たぶんまだ、校内に居るっ」

視界の斜め上で五頭がうなずく。右手に持った二つの懐中電灯のうち、一本を俺に差し出した。

「まだ警備員も到着していない。教師も私一人だ。二人で捜すぞ」俺は懐中電灯を受け取つた。

五頭は旧校舎に、俺は西棟に別れて依子を捜した。生徒玄関を通り、まずは一階の廊下を駆けながら一年の教室を覗いていく。二組の教室に入る。依子の机を一応見てみたが、当然のごとく整然とそこに佇むだけで、脇には鞆も掛かっていない。教室を出て階段へ向かつた。

二階、三階、四階。どこにもいない。五階、廊下の突き当たりで踵を返す。全階のトイレを確認し忘れたことに気づき、廊下に足を滑らせながらも来た経路を戻る。

しかし、駄目だった。ならば東棟だろうか。一年の女子トイレに入ったのち、頭の中で校舎内の図を作る。

ここで、トイレの床に置かれた小型のゴミ箱に足を取られ、俺は大きく転倒してしまった。

ゴミ箱の中身が散乱する。ふいに、地面に伏す俺の眼前に何か

入り込んだ。

一冊の文庫本。トイレのゴミ箱に捨てられるにはあまりにも不自然なものだった。とっさに手に取り、懐中電灯の明かりで表紙を照らす。

司馬遼太郎の著作だ。本の裏を返すと、裏表紙の左端に、見覚えのある図書館のバーコードが貼り付けてあった。恐らく、依子が図書館で借りた本だろう。

本を落とし、トイレを出て走り出した。

俺の想像したことは間違いじゃなかったようだ。街のコンビニに捨てられた依子の携帯、そして、あのトイレに捨てられた文庫本。そういついじめだ。どうやって隙をついたのかは知らないが、依子の私物が盗られ、学校中の至るところに捨てられた。学校内だけじゃ飽きたらず、あんな街に点在するゴミ箱にまで。

依子はいまだに何かを探しているのだろう。それが財布か、家や自転車の鍵かは知らないが、駐輪場に置かれた依子の自転車からして校内にいるのは確からしい。

東棟の一階から順に見て回る。三階の教室の窓際から旧校舎を見上げた。五頭が旧校舎五階の窓を開け、俺を見下ろした。

「居たかつ」

五頭の息は相当上がっていた。ただし、俺の方も返事すら出来ないくらい呼吸が乱れていたため、大きく手を振って否定を示した。

窓際から、旧校舎と東棟に挟まれた中庭へと視線を落とした。明かりを向けるが、照らした箇所以外はほとんど暗闇で見えない。外は直接降りて確認しなければ埒が明かないだろう。

東棟の四階に上がり、部屋という部屋を見ていくが、依子がどこにも居ない。

「うそだろ」

焦りきって頭が回らなくなる。細かい虫が背中を這ってくるような悪寒がした。浮上しかけた諦念を打ち消すべく、廊下の壁を叩く。はっとして、俺は廊下側の窓から顔を出した。



そこから見下ろせば、裏庭がある。裏庭には焼却炉やゴミ倉庫があるはずだ。人目につきにくい場所で、もし私物を捨てるのならそこが狙われやすいと思った。しかし、この位置からではうまく確認出来ない。

慌てて廊下を進み、焼却炉を見下ろせる窓から再度顔を出した。

懐中電灯を向ける。

見つけた。

焼却炉の蓋が開かれ、いそいそと黒い人影がうごめいている。

「依子！」

聞こえていないのか、それとも聞こえないふりなのか、影は反応を見せなかった。別にあれが依子だという確証はないが、ことこの場においては彼女以外にあり得ないだろう。

何度叫んでも変わらない。喉に痰咳が絡まる。俺は下の階へと走った。

校外のマンションから入る仄かな照明を受け、裏庭周辺は薄明かりに包まれていた。

やはり、焼却炉には依子が居た。

「おいっ……」

声が上手く出ない。酸欠で目の前が歪んでいた。それでもうつすらと分かったのが、依子が焼却炉の炭に手を突っ込み、しきりに中を漁っているということだった。

駆け寄り、その肩に手を置く。

「依子、早く」

「はなして」

依子が振り向きざまに俺の肩を押した。突然のことで、俺はその場で尻もちをつく。

「携帯がない」

彼女はそう言った。声が出ないかわりに、ポケットから依子の携

帯を出し、立ち上がりつつ差し出す。依子は黙ってそれを受け取った。

一瞬だけ呼吸を整え、依子の腕を掴む。

「行くぞ」

掠れているが、声も出る。しかし、

「いらない」

依子が携帯を放った。濃い灰色に染まった地面に落ち、かつんと音を立てて暗闇の先に消えた。

また身体を押され、俺は後退る。依子は背を見せ、また焼却炉と向き合った。

「いい加減にしろっ、叔父さんが」

「ベルーガがない」

この状況だというのに、俺はその言葉に固まった。

「ストラップが見つからない。純がくれたのに、見つからない」

暗闇を見やる。その中にうつすらと、白い卵型携帯を認めた。たしかにストラップはついていなかった。気づくわけがない、依子が探していたものがあれだなんて。

「悪かったよ……」

訳も分らず俺は涙ぐんでいて、理由すら曖昧に謝っていた。気に入っているからとか、物の価値観とか、そんなものどつくに飛び越えて、あんなくだらない物に執着していたんだ。その意味が俺なんかに分かるはずがない。

「俺が悪かった、ごめんつてば。もう返せつて言わないし、新しいの、また今度買ってやるから、今だけは、こっちの話聞いてくれ」  
ほとんど抱くようにして依子を止める。しばらくの沈黙ののち、彼女は顔を上げた。

「叔父さんの容態が急変したつて。時間、もう無いかもしれないんだよ」

懐中電灯が滑り落ち、不快音を鳴らして周囲に響く。依子の腕を掴んで走る。俺たちは自転車置き場に向かった。

自転車を二人乗りで走らせ、病院に到着する。俺の腹を掴んでいた依子の手が離れる。ママチャリを捨てるようにアスファルトに倒し、病院の正門を抜ける。玄関には弟と母ちゃんが居て、俺たちを認めた瞬間、うつむかせた顔を弾くように上げた。

徐々に速度を落としていく俺の足が、ついに玄関前で止まった。依子が顔面から俺の背中にぶつかる。弟と母ちゃんが、ゆっくりとした足取りで俺たちのもとに歩み寄る。

喉の奥で血の味がした。薄ら寒い空気に全身を撫でられた気がして、立っていられなくなり、俺は両膝を地面に落とした。さっきまで依子に掴まれていた脇腹に手を当てる。疲れと痛みが足元からじわじわと沸き上がり、だらしなく口を開けたまま、母ちゃんと、泣き顔を見せる弟を見上げた。

依子は俺たちに目もくれず、駆け足で病院玄関を通っていく。母ちゃんの顔がやけに優しく、包むように俺の手を取る。

「清志さんの顔、見てあげて」

案内されたのは202号室ではなく、地下の霊安室だった。

エレベーターで地下一階に降りる。暗い照明に照らされた通路。

白とは言い難く、ベージュにくすんだ色合いの細長い景色の先、親父が壁に背中を預け、俺の到着を横目で見た。

無言で親父の横を通る。親父はなにも言わなかったし、それ以上の視線を送ってこなかった。

遠くからか、近くからか、轟々としたボイラーの音が届いてくる。通路を進むごとに増していく線香の匂いが独特だった。

斜め前を歩いていた担当医師が足を止め、ある一室の扉を開ける。今度こそ、白一色の風景が目前にあった。殺風景なその部屋には、

すでに依子と道子叔母さんの背中があつた。二人ともこちらに背中を見せている。叔母さんは跪いて泣いており、依子は白い布を手にして立ち尽くしていた。彼女の背中に隠され、俺にはその顔が分からない。

お悔やみ申し上げます。

背後にいた医師が小さく言った。途端に寒気が襲ってくる。異常なほどの冷気が部屋に立ちこめていることに今更気づいた。自分の二の腕を掴み、小刻みにさする。

依子は相変わらず布を持ったままで、その手はぴたりと空中で制止していた。俺は、そこから一歩たりとも足を踏み出せなかった。顔が見えない。誰の顔も見ることができなかった。

清志叔父さんが亡くなったのは、俺たちが到着する十六分ほど前だったそうだ。この数字は何の意味も持たない。

間に合わなかったという事実だけだった。静かに重々しく、常に眼前に横たわっているようで、俺の脳裏に張り付いて離れなかった。

遺体は祖母ちゃんの家へ搬送され、通夜は翌日に行われた。

葬儀社スタッフの指示に基づき、母ちゃんの補助として、俺と依子は交代で受付と香典の管理を手伝った。喪主を務めあげる道子叔母さんは終始家中を動き回っており、しきりに参列客に頭を下げていた。

芳名帳に見知った名前を幾度も発見する。叔父さんが監督をしていた、地元の少年サッカーのメンバー達だった。彼らとの思い出は、むしろ中学での部活以上に深く記憶に刻まれている。純粹に、俺がサッカーを楽しんでいたからに違いない。

高校初の終業式には、結局出られず仕舞だった。参列客の中に五頭が居て、夏休みの校内清掃の件について変更の説明があるかと思

つたが、弔問以外は何も受け取れなかった。

さらに翌日、祖母ちゃんの家で肅々と葬儀が行われる。十二畳の広間に読経が響きわたる。

依子の背中を前に、俺は座布団の上に座していた。斜め前に座る道子叔母さんも、ここでは依子と同じく微動だにしない。

叔父さんは生前から、誘い笑いでもかけるかのような笑みをよくしていた。遺影に映るその顔も、まさにそういう瞬間を切り取っていた。叔父さんが俺に「笑え」と促しているように見えた。

笑う、というより、涙すら出てこなかったけど。

あれから七日が経つ。

もうとつくに夏休みが始まっているはずだが、実感が全くなかった。俺を氣遣つてかは知らないが、いまだに夏休みの課題が手元に来ない。もうこつちから受け取りに行った方がいいのかな。何にしろ、葬儀を終えた直後は精神肉体共に疲れ果てて何もできなかった。朝九時ごろに起床し、地味な暑さと闘いながら布団で横になり、労働意欲の有無など知れずに求人誌を広げた。なんだかんだで二日は煙草を吸っていないことに気づき、火を点けてくわえてみたが、肺に来る刺激が久しく、かつ不快であったためにすぐに灰皿行きとなった。

求人誌を畳に投げる。天井を見上げると、いまだに蜘蛛の巣が張られていた。明日こそ掃除しよう。今日はだるいからしないけど。

起きあがって制服に着替える。今日は法要であるため、昼は祖母ちゃんの家で食事をする事になっていた。親父の車に乗ってもいいのだけど、のんびりと自転車で行きたい気分だった。俺の自転車は、昨日学校に出向き、キャップとバルブを取り付けて持ち帰ってきていた。

親父と母ちゃんに一人で行く旨を伝え、ついでこようとする弟を振り払い、単独で自転車を漕いだ。

朝方にも関わらず、日光にやられて五分走っただけで額に汗が浮かんだ。完全に夏が到来していた。

時間があるため、遠回りをする。

人見川沿いを無意味に走った。向かい風が頬を打つたび、鼻の中がすつと通るのが気持ちよかった。澄んだ水面に反射する太陽光が目にも痛い、逆にそれも心地よい。

土手で、村瀬がまた携帯ゲームを投げていないかなと思った。もし今度見かけたら、捨てるくらいなら俺にくれ、と言いたい。

本心から欲しいと思っっているわけではない。ずるずると引きずられていく人の死という現実から、少しでも解放されてみたいと思っただけだ。

当たり前だけど、村瀬はどこにもいなかった。

橋のたもとで自転車を止める。対岸のさらに向こう、その先には祖母ちゃんたちの住む田舎町があり、青々とした山が広がっていた。錆びた高身長鉄塔があり、その頂上ではカラスが数羽舞っていた。あの鉄塔をゴジラが踏み倒してくれればどんなに気が晴れることか、そんなことを意味なく夢想した。

親戚一同が介し、葬儀の行われた例の大広間で食事が始まった。

親父が作ったという黒ずんだスモークチキンには誰一人として手を伸ばさず、見かねた俺が口に入れていく。見た目は悪いが、味はさほど問題ない。

上座には道子叔母さんと祖母ちゃんが着き、左隣には親父と母ちゃんが座った。祖母ちゃんの右隣に依子、弟、俺の順で座る。

叔父さんの友人という壮年の男が俺の隣に座った。煩わしいくらい話しかけてくる。俺は黙って相づちを打った。

それと同じように、弟がひたすら依子に話しかける。俺と同じく無言でうなずく依子。

親父と叔母さんは、ときおり笑みを浮かべながら焼酎を煽りあっ

ていた。俺は、その光景に訝しんだ視線を送らずにはいられない。叔父さんの死はもう過去のことなのだろうか。そんなはずはないのだが、そう疑わざるを得ない。

「清志くん、昔から純一を息子みたいに可愛がってくれたよな。なあ、純一」

ふいに親父から話を振られる。周囲の視線が集まるのを感じつつ、俺は閉口してうなずく。無神経だ、と言いたくなるのを我慢した。

道子叔母さんが柔和な笑みで俺を見る。依子とそっくりな顔で、常に張り付いたような笑顔だけは相変わらずだった。

「兄さんは知らないでしょう。純一くん、依子と一緒に、こっさり清志さんのお見舞いに行ってくれたのよ。そうよね？」

うなずく。うなずいたまま、下を向いた。依子が流し目で俺を見る。もうやめてほしい、と思った。

俺の様子を察したのか、残念だったわね、と誰かが言う。叔母さんが潤んだ声をしてそれに答える。

「もう仕方ないことだけど、ただ心残りは、そうですね」

俺がまだ子供だから、分からないのだろうか。故人の悔いとか、遺族の念とか、たとえ配偶者だからって、どうしてこうも平気で代弁できるのだろう。たしかに周知しておくべきかもしれない。でなければこの会食の意味はない。悲しみを血縁者全員で共有することに意義がある。

だとしても、どうしても腑に落ちない。

「依子と純一くん、あの日せつかく駆けつけてくれたのに」  
信じられない。本当に言うつもりかよ。

「清志さんね、依子と純一くんには、」  
「やめろ」

台の裏に膝を打ちつけながら立ち上がる。コップが倒れ、オレングジュースが畳と座布団を汚した。空気が張りつめ、誰もが口を閉ざす。手が震え、いいようのない怒りがこみ上げてくる。

「誰に向けて話してんだよ。もう言うなよ。聞きたくない、そんな

話

叔母さんが目を見開き、こちらを見上げた。

あるいは、悪いのは俺だけなのかもしれない。一度依子を見捨て、そのために叔父さんの要望に応えられなかった。これは俺が招いた行き違いで、悔いるのは依子の方だ。俺の抱える悔いは、依子とは種類が違う。

親父が憤怒を浮かべ、膝を立てる。それを冷静に止めるのは叔母さんだった。顔にしろ、性格にしろ、とてもこの二人が兄妹だとは思えない。

「ごめんね、純一くん」

我に返り、慌てて首を振った。

「いや、違う。ただ、俺はさ」

道子叔母さんの目から感じ取る。清志叔父さんの願いが俺に伝えられていたなんて、きつと叔母さんは知らなかったのだろう。だから彼女は、この場で俺たちに伝えてあげようとした。

「本当は俺、叔父さんから、その」

そして、これは俺が言うべきことだった。本来は叔母さんの口からではなく、俺が依子に伝えておくべきことなのだ。

それなのに、喉元からせり上がってくる異物みたいなものに邪魔されて、上手く言葉が出てこない。家族や親戚からの視線にやられ、実際はそういう意図じゃないって分かっているんだけど、疎ましさや軽蔑を向けられているように思えてきて、俺は突っ立ったまま、まともに喋ることすら出来なかった。

「ごめん、ごめんなさい……」

依子に謝るつもりだったが、俺は明後日の方を向いて頭を下げていた。叔父さんが死んでから、俺はちゃんと依子と話せないままだったし、後ろめたさで顔を合わせることできなかった。この瞬間でもそうなのかと、自分の情けなさが嫌で仕方がなかった。

「依子」

ここで道子叔母さんが、小さいのによく通る声で依子を呼んだ。



依子の反応はなかった。

「もうお腹いっぱいでしょう。純一くんといっしょに、散歩にでも行ってらっしゃい」

しんと静まり返る広間の中、一つの衣擦れ音がかすかに聞こえる。頭を下げたまま固まる俺の手が、後ろから引かれた。

力無く振り返り、俺の手を握ってくる依子を見た。彼女の顔にはいつも通り、表情がなかった。

「あたし、神社いきたい」

鼻をすすり、俺は引張られるように依子の後ろを歩いた。

小学生の頃、依子と喧嘩をするたびに思ったことがある。

俺に妹がいたら、こんな感じなんだろうなと。

口数は少ないくせに人遣いが荒い。笑うより、怒ったり泣いたりする方が多い。乱暴な兄と真っ向から殴り合い、無駄に懐いてくる弟には冷たいくらい無関心。

そういつた想像を重ねるごとに、依子が本当に妹でなくてよかつたと思つた。当時、依子を妹のように思っていたことから、それは大きな安堵につながる。

今、俺は依子に手を引かれ、子供のように嗚咽しながら田園のあぜ道を進んでいた。依子の後ろ姿を見ながら、俺はその光景を昔の依子と重ねた。

妹のようだと思ひ込んでいたが、一度だけ、それを覆されたことがある。

俺が、叔母さんの陶芸趣味で作った湯呑みを割ってしまった日のことだ。そのとき、俺は祖母ちゃんの家において、依子と二人きりだった。

おやつのパウムクーヘンを依子と取り合つた直後だったため、彼女はこちらの危機を全く心配してくれず、慌てふためく俺をかたくなに無視して、かいけつゾロリをのうのうと読んでいた。

割れた破片をくつつけてみても、接着剤やセロハンテープを駆使してみても駄目だった。畳の上で散乱する破片群を前に、俺は膝を抱えて怯えた。

怒られてしまうからとか、そういう理由で怯えていたわけじゃない。

割れたものが元に戻ることはない。俺がなんとなく生きていた世界の絶対的な法則と虚無感に、気持ちが折れておののいていたのだ。まもなくして帰ってきた叔母さんに正直に告白したことが功を奏

したのか、叔母さんは怒らなかつた。むしろ俺の馬鹿正直さを褒めてくれたくらいなのだ、何故か俺はそこで泣き出してしまふ。

昔から、叱られることを楽観的に考えていた。この説教さえ終われば解放される。そう思っていた。だから、俺に対する罰を端折り、その上褒められてしまふだなんて、耐えられるわけがない。

そんなとき、今まで黙っていた依子がふいに俺の手を取った。泣き顔の俺はあえなく依子に連れ出され、訳も分からず野山の散歩に付き合わされた。

そのときの依子の横顔を、今でもはっきりと覚えている。

依子は笑っていた。気にする必要はない、だからもう笑っていい、そう言われてるみたいだった。

今と昔で違うのは、季節が秋か夏かということと、二人の身長差と、お互いが制服を着ているということと、依子が無表情なことぐらいだろうか。

この瞬間、依子は妹というより、ひどく姉然としていた。

もう七年以上も前のことなのに、やけに鮮明だった。そのときの空気や匂い、鼻から垂れる鼻水の不快感、依子の手の形、鈴虫の鳴く音、地面に捨てられたポロポロのタオル、声や足音、細かな心境まではつきりと。

ふと、依子が足を止めた。現在の依子である。振り返り、テンションがた落ちの俺に缶コーヒを差し出す。いつの間にも買ったのかは知らないが、また姉ぶってんのかよ、と心の中で毒づくしかなかった。

依子の言う神社とは、思った通り、彼女がよく願掛けに通っていた神社だった。

依子がいまだに手を掴んで引いてくる。暑いし、いい加減歩きにくい。本殿の脇を通り、裏側へと回っていく。その途中、床下に隠されたスケッチブックがはみ出て見えた。原村もたまにここへ来る

と言っていたから、多分彼の忘れ物だろう。

本殿の裏は木陰になっていた。若干ながらも日光が遮られており、心なしか涼しかった。依子は本殿の高床に腰掛け、俺もその隣に座る。

雑木林が目前で存在感を主張していた。蝉がやかましい。

俺はここで初めてコーヒーを開け、少しだけ飲んで口内を潤した。黙り込み、手にした缶の縁を指でなぞる。

「吸っていいよ」

なんのことかと思っただが、どう考えても煙草のことだろう。しかし、吸い殻を捨てる場所がこの缶以外に思いつかない。あの公園での出来事が思い出されて勝手に嫌な気分になる。

とは言っても、とにかく間が埋まらない。仕方なく胸ポケットから煙草を出した。煙を味わいながら、禁煙でも始めようかと画策する。

「うまい？」

「まずい」

そう答えるしかなかった。三口だけ吸って、缶の中に入れる。じゆう、という音を立てて缶の底に沈下していく。蝉の喚き声に全てかき消された。

依子の横顔を見る。相変わらず、何の感情もない顔をしていた。そんな彼女を見ながら、俺は改めて思いなおす。昔みたいに笑わないう依子に、俺は腹を立てていたわけではない。ただ、不安だっただけだ。怒るだとか、不快そうな顔だけは今でもする。だけど、泣いたり、笑ったりという表情は、再会して以来一度も見えていない。

出来ないわけではない、そう便宜的に仮定した。もしかして、笑ったり泣いたりという感情の表現が、自分には許されないとでも思っているのではないか。

そこで依子と目が合う。

なんとなく、さっき俺が謝った意味を教えてほしいと、依子から急かされているように思えた。

俺は罪悪感から顔を逸らし、缶コーヒのパッケージを見つめながら、やがて口を開いた。

あの日、叔父さんと交わした会話の内容、約束、頼みごと、細部まで漏らすことなく、たまに胸が苦しくなって断念しそうになる気持ちに喝を入れながら、俺は一部始終を全て話した。

「それで、叔父さんから、俺と依子に最期を看取ってほしいって、そうお願いされたんだよな。結果は、まあ、ああいう感じだったけど」

終わりまで言い切ってみたが、依子が反応を見せないの、一向に肩の重荷が降りなかった。手どころか足まで小刻みに震え、心底この場から消え去りたいという思いで満ちていた。

「ごめん。叔父さん、依子に会いたがってたのに」

依子はなにも言わない。気づくと、蝉の気配が消えていた。一切の音が断絶されている。顔を上げられない。肅然とした空気に押しつぶされそうになる。肌がびりびりと苛まれた。俺はさらに頭をうなだれる。もう、消えてしまいたい。

「ひぐらしが鳴きそう」

林の隙間からこぼれる陽光を見つめながら、依子が言った。

「ここに居ると、きれいに聞こえる。いつか、聞かせたいと思ってた」

誰にだろう、一瞬そう思ったが、その答えを出すのに深く考える必要はなかった。

涸れたはずの涙がこみ上げる。涸れるなんて嘘だろってくらい溢れてきて、ぼたぼたと指の間に流れ落ちていく。

わずか数分後、依子の言う通り、ひぐらしの鳴き声が辺りにこだましていた。気づけば、俺の頭に手が乗っていた。叔父さんの手だ。そう錯覚した。

「聞こえる？」

うなずき、声にならない返事をする。

「きれい？」

「ああ、すげえ、きれい」

本当はなにも聞こえなかった。喉や鼻がつまり、咳き込んだり頭が熱かったりで、ひぐらしの鳴き声どころではなかった。でも、きれいに聞こえないはずがないと思った。涙も鼻水も、出すもの全部出したら、いつまでも、ここでのんびりと聞いていたい。

「あるとき、いっぱい殴って、ごめんなさい」

俺の少し後ろを歩きながら依子が言った。空はすっかり暗んでいる。前方にぼつんと置かれた古めかしい自販機を横切り、俺たちは祖母ちゃんの家に向けてゆつくりと進んでいた。

「もう気にしなくていいよ。傷とか、一週間で完治したし」

笑いながらそう返す。やけに気分が晴れ晴れとしていた。夜の田舎町は、民家も雑音もほとんどなく、俺のこぼす小さな笑いはずぐに空中に吸い込まれた。

「純のこと、もう嫌いじゃないから」

「俺も嫌いじゃないよ」

口に出してみても、こっ恥ずかしさから語尾が小さくなってしまふ。

「もう、だれのこと、嫌いになりたくない」

依子の声がわずかに遠まった気がして、俺は歩みを止める。

「本当はみんなのこと、ゆるしてあげたい。好きになりたい」

振り返る。依子は足を止め佇立していた。後ろの自販機からの逆光により、顔がよく分からない。

「でも、どうすればいいかわからない」

一歩、二歩と近づいていく。依子が泣いていることを知ると、俺はそれ以上進めなかった。

「ねえ、あたし、どうすればいい」

宮下の言葉が頭をかすめ、静かにそれを反芻する。

誰かに謝り忘れていないか。伝えきれなかったことはないか。本当の声を聞きそびれていないか。

それが出来なかったから、叔父さんとの約束はこんな形で幕を閉じた。

俺たちのやりそびれたこと、それはきつと人を傷つけるものではない。相手も同じだけの優しさと思いやりを秘め、隠し持っていることを、俺たちも信じてあげなければいけない。信じなければ、相手のために行動出来るわけがないのだから。

「純」

依子が歩み寄り、俺の制服の端を掴む。頭を俺の胸へと預ける。

それは徐々に腹部へと下がっていき、やがて彼女は地面に膝をついた。むせびながら、それでも腕を俺の足に回す。

「たすけてっ……」

依子はずっと、この言葉を我慢していたのだろう。

友達をいじめ、自殺にまで追いやった自分には、この言葉を口にする資格はない。依子はそう思っていたはずだ。あの公園で泣き出しそうな顔をした彼女も、これを言いかけたに違いない。涙と共に、それは依子の中に押し込まれた。

腰を屈め、顔を伏せる依子を見る。おぼつかない腕で彼女を抱きとめると、くず折れ、抑えつけたものが決壊したように泣き出した。それを耳に響かせる。言葉なんかより、この泣き喚く声こそが、依子の胸中の全てだ。

助ける。助けられる。信じる。信じられる。たよる。たよられる。叔父さんとの約束は、まだ終わっていない。

その日は祖母ちゃんの家泊まった。

翌日の朝。居間に降りると、依子と弟がWiiのマリオで遊んでいた。俺は二人の後ろに寝転がり、ときおり奇声をあげる弟を中心にその様をぼうつと眺めた。

2プレイのマリオ。ルイージの動きが激しくトロい。依子の操作するルイージだとすぐに分かった。

「もう、依子姉ちゃん真面目にやってよ！」

「やってる」

「やってない！」

寝起きから弟の黄色い声を聞くのは辛かった。

親父と母ちゃんの仕事のため、すでに荷物をまとめて家を出ていたらしい。俺らを置いて颯爽と。俺は自転車で来たからいいけど、弟はどうやって帰ればいいのかだろう。

台所から道子叔母さんがやってきて、食卓に置かれたご飯と目玉焼きのラップを剥がした。俺の朝食らしい。

叔母さんが食卓を挟んで俺の正面に座る。昨日から続く気まずさを我慢し、俺は黙って箸を取った。

叔母さんがお茶を淹れ、俺の手元に差し出す。

「純一くん、バイト探してるのよね」

顔を上げ、湯呑みを受け取る。叔母さんは口元でゆるく笑みを作っていた。

「探してるけど、何していいか分かんないんだよね」

道子叔母さん、年々依子に顔似ていくなあと思いつつ答える。あ、逆か。依子が叔母さんに似ていくんだ。

「よければ、うちで働かない？」

「いいの？」

叔母さんが笑顔でうなずく。



たしか叔母さんは個人経営店で働いているはずだ。行ったことないけど、たしか喫茶店だったような。

「今年は求人取らないつもりだったけど、今年の夏は思ったより忙しくて。従業員も少ないし、純一くんさえよければ、お手伝いしてほしいのよ」

娘と違つて簡潔で分かりやすい勧誘。五頭から下された校内清掃もうやむやになった今、暇を持て余した俺に断る理由はなかった。

叔母さんはこれから仕事に向かうという。俺は叔母さんに着いていくことにした。

身支度をして、懸命に画面とコントローラーとを見つめる依子に声をかける。

「依子、それが終わったら雄二に宿題させて」「させる」

弟がなにかぶつぶつと不満を漏らしたが、俺は無視して家を出た。叔母さんの車に乗り、初夏の田植えにいそしむ祖母ちゃんに向けて、ちよつといつてくる、と手を振った。

祖母ちゃんをよく分かっているようだったが、「いつてくりやええ」とだけ言つて笑った。

叔母さんの勤め先まで車で五十分近くもかかったが、その間、お店のこと以外ほとんど会話はなかった。なのに、叔母さんは常時微笑みっぱなしだった。

その喫茶店は、中島丘駅から徒歩十五分の場所で、何故か駐車場の脇奥という分かりにくい位置取りにあった。

いわゆる一軒家カフェというやつで、外観も別の角度から見れば民家と間違えてしまいそうだ。車から降り、喫茶店を正面から捉えて見る。

屋根のすぐ下に、『軽食・喫茶 ソレイユ』と書かれた看板があった。

「ソレイユって、フランス語で太陽、もしくは向日葵って意味らしいわ」

叔母さんが店の一角を指した。そこはオープンテラスになっており、そばには樹木や菜園が造り込まれていた。その中に、こじんまりと向日葵の姿もある。

なんでもいいけど、全体の作りが本当に一般家屋のようだ。立て看板やテラスがなければ喫茶店には見えない。

「普通の民家を改築したお店なの。大学の講師だった人が始めたお店だね。私も、卒業からずっとここに勤めさせてもらっているのよ」どこか誇らしそうに語る叔母さんに連れられ、板チョコのような色合いと形をした扉を開ける。

古びた鐘が鳴る。目の前のカウンターには、白みがかったの頭髮と口ひげの初老男が居た。

「私の甥の今泉純一くんです。店長さんみたいに無愛想な子ですけど、責任感は強いですから、どうぞよろしくお願いします」

叔母さんの紹介のあと、俺はすぐに頭を下げる。どうして叔母さんの口から責任感という言葉が出たのかは知らないが、思いのほか緊張していた俺に考える余裕はなかった。

彼が叔母さんの言う、元大学講師の店長らしい。

店長は低く小さな声で「ああ、よろしく」と言うと、静かな足取りで調理場へと下がっていった。

それから休憩室という名の古めかしい六畳間に通され、埃っぽい押入れから出された胡桃色のエプロンを着用した。

営業時間は午前十一時から午後七時まで。開店まであと一時間ほど。

「従業員は私と店長、あとは、あそこのバイトくんが一人だけ。少ないでしょう。純一くんが来てくれて助かったわ」

木製のログハウスみたいな店内を見回していると、叔母さんがテラスの方を指してそう言った。

テラスは喫煙席らしく、癖っ毛茶髪の男が藤椅子に深く腰掛けて

いた。のほほんと煙草をふかし、邪魔くさそうな尻尾ストラップ付きの携帯をいじっている。

どう見ても浅海さんだった。

店の方針は『我が家よりもアットホームに』らしい。

店長以外が全員顔見知りだと知って、俺も一気にアットホームな気分になっていた。店長も店長で、親父に雰囲気似てるし。

開店二十分前。

浅海さんの隣の幅広な藤椅子に座り、庭に植えられた草木を眺めた。テラスには屋根があり、植え込まれた木々によつて斜光も和らげられている。彼と同じタイミングでハイライトを吸う。

「あれがハナミズキ。で、あそこの鉢でプカプカしてんのが睡蓮ね」  
なんの前触れもなく、浅海さんの造園解説が始まった。これがあまりに唐突だったため、俺はなんにも反応できず、黙って浅海さんの言葉を聞いた。これ、メモった方がいいのかな。

解説が終わると、浅海さんが後付けのようにこう付け足す。

「造園趣味のボケた爺さんがよく来るからさ。趣味のくせに、花とか樹の名前すぐ忘れちゃうの。毎回聞いてきやがるから、その都度教えてあげて」

そういうのもっと早く言ってほしい。俺は煙草を灰皿に置き、エプロンのポケットからメモ帳を取り出した。

「すみません。もう一回教えて」

「えー、めんどくせーなあ」

嫌そうな顔をされたが、しぶしぶという感じで造園解説がリストアップした。

中島丘駅周辺には大型ショッピングモールがあり、喫茶店『ソレイユ』もその客足のおこぼれを授かり、夏休みはそれなりに繁盛す

るようだった。

調理場は店長と叔母さんの担当で、俺と浅海さんがオーダーやその他雑務に努めた。とはいえ、俺はバイト初日のため、まずは浅海さんについて業務を覚えることに専念する。

客は子連れが中心で、店内に設置された本棚には児童文庫類が散見された。次に多いのが、浅海さんと同年代くらいの若者だった。どうやら、近くに在籍人員一万人以上の大学があるらしく、浅海さんもそこに通っているらしい。

造園趣味のボケた爺さんとやらは、夕方ごろにのっそりと現れた。すると浅海さんが、テラス席で喫煙する爺さんをそれとなく顎で指した。

「純一、あれの相手してやって。いい加減に対応したら癩癩おこすかもしんねーから、気をつけて」

新人になんて役目を託すんだ。しかし、浅海さんも来客対応に忙しいようなので、仕方なく俺は爺さんのもとに歩み寄った。

「誰だ貴様。名を名乗れ」

爺さんがじろりと俺を睨んだ。なにこの時代劇みたいな口調。

「新人の今泉つす。お客さま、注文は」

「いつもの」

すげえ常連ぶってる。いや、実際常連なんだろうけど。しかも俺、新人だって言っただけかなのに。

もうこの時点で面倒くさくなってきたので、聞き返さずに適当にアイスコーヒーを持ってくると、爺さんは「やるな。新米のくせに」と、顔をくしゃくしゃにさせて笑った。

爺さんの希望する『いつもの』にたまたま正解したのか、それとも、『いつもの』を爺さん自身が忘れてしまっただけなのか、多分後者なんだろうけど、本気でどうでもよかった。

もう戻りたかったけど、やっぱり爺さんが離してくれなかった。

俺を隣に座らせ、延々と造園話をしてくる。この店もなかなか厄介な常連を持ったものだ。

バイト初日が終了し、叔母さんの車に揺られて祖母ちゃんの家に向かう。

「ありがとうね、純一くん。あのお爺さん、純一くんのこと気に入ってくれたみたい」

「マジか。全然嬉しくない」

「帰っていくとき、純一くんのこと孫に欲しいって言ってたわよ」

たった一日でどんだけ好かれんだよ俺。明日からの勤務が憂鬱なり、俺は密かにため息を吐いた。

家に着くと、依子の作った夕飯が待っていた。弟の要望にでも応えたのか、メインはハンバーグだった。しかも依子のハンバーグは半分だけで、もう半分は弟の皿に追加されている。やはり依子は、弟にだけは敵わないようである。

うまいかと依子に尋ねられ、「うまい。今度親父に教えてやって」と答えると、もう半分のハンバーグも俺の皿に乗せられた。

「いいよ。依子の分がなくなるじゃん」

「太るから、いらない」

なんて下手くそな嘘。

叔母さんと祖母ちゃんが俺たち三人をネタにして大げさに笑い、俺は無駄に照れながら飯をかき込んだ。

二階の空き部屋で、弟と布団を並べる。

弟が「まだ帰りたくない」と駄々をこねたため、なんだかんだで今日も泊まることになってしまった。明日も依子にべったりするつもりなのだろうか。依子が可哀想だ。つか、着替え多めに持ってきていてよかった。

弟が風呂に入っている間、一階の縁側に腰掛け、団扇をあおいで涼んだ。風鈴の音色を楽しんでいると、ふいに俺の携帯が鳴った。

見ると、今日番号を交換したばかりの浅海さんからだった。出てみると、彼の寝起きみたいな声が聞こえてくる。

「あー、八月はじめの五日間さ、ソレイユの休業日じゃん？」

「いや、知らないっすけど」

「仲間と沖繩旅行行くんだけどさ、昭文も連れていこうと思ってんだよね。純一も来る？ お前らの旅費は俺がおごるから」

浅海さんと原村の仲の良さに俺はたじろぐ。しかも旅費おごるってどんだけだよ。本当なら行きたいところだったが、俺は丁寧に断りを入れる。

「俺、結構やることあるんで。他にも何かバイト掛け持たいし」

「あー残念。つか、んな金稼いででも使わなきゃ意味ないよ。あ、それとこの話、美野里には内緒な」

お忍びなのか。普段どれだけ浅海さんが吉岡の尻に敷かれているのか、想像するだけで彼が不憫でならない。

それから二、三、言葉を交わし、通話を終えた。携帯を閉じ、煙草を吸いながら団扇をあおぐ。

俺が壊した原村の iPhone 代、あれだけなら喫茶店のバイトだけで足りるだろう。しかし、俺にはもっと稼がなくてはならない理由と目標が出来てしまった。

俺自身のため、依子や皆のため、そして、叔父さんとの約束のため、夏休みは働き詰めなくてはいけない。だけど、これはまだ皆には内緒にしておこう。

振り返る。テレビを見ていた依子と目が合う。

意味もなくぼうつと目配せしていると、依子の背後の襖から、全裸の弟が裸族ばりの動きで飛び出してきた。

「兄ちゃん風呂入れー」

「お前は服着ろ」

「きて」

俺も依子も嫌がった。

翌日のバイトを終えた夜、叔母さんたちに礼を言っ、祖母ちゃんの家を出て自転車自宅へと戻る。弟は叔母さんの車で送ってもらえるそう。

次の日、保険証と印鑑をバッグに放り込み、郵便局に出向いた。今後のため、差し当たってゆうちょの銀行口座を開設しておく。初めて持つ銀行通帳にこそばゆい気分になりながらも、とりあえず口座番号を叔母さんに伝えた。

ソレイユからの給与が振り込まれるのは八月の終わり頃。そこらは原村のiPhone代に回せばいいだろう。しかし俺には、夏休み中にやっておきたいことがまだまだある。まとまった金が必要だ。ソレイユの定休日は月曜と木曜。他のバイトと言っても、喫茶店の開店日に掛け持つのは現実的に難しい。

もう日雇いしかないか。だるそうなイメージだし、すごい抵抗あるけど、選んでる余裕なんてない。

両親の寝室に入り、母ちゃんのノートパソコンを拝借して派遣会社をいくつか検索してみる。そしてよく分からんが、さっきから母ちゃんが俺の後ろでそわそわしてる。なんだろう。

「あ、あたしのブログ、絶対対に見ないでね」  
「うわー、死ぬほど興味ない。」

「いや見たくないから、そんなもん」  
「と言いつつ、お気に入りを開く。」

「ええと、出来るオナナの節約」  
「あーあー！」

ノートパソコンを取り上げられた。タイトルの時点でもう恥ずかしいし、俺もこれ以上見たくなかったけど。まあいい、大体の目星

はつけた。寝室を出て、自室で横になりつつ、携帯から派遣会社サ  
イトに登録した。

明日は木曜だ。喫茶店も休みのため、出来れば明日にでも日雇い  
で出稼ぎたい。

数時間ほどで、企業からメールが来た。

俺がこれだけ活動的になった夏休みは、おそらく史上初の事態だ  
った。当然のごとく、今までバイト経験のなかった俺には、世の中  
には未知の世界が数多く広がっているのだなと実感させられた。

喫茶店と日雇いで一日たりとも休まず、ソレイユ常連の爺さんに  
こき使われたり、犬猫同然の扱いで森林調査に狩り出されたり、ジ  
ヤニーズコンサートのスタッフで熱狂ファンに揉まれて圧死させら  
れそうになったり、特に工場の手伝い要員に加わったときなどは、  
謎の取り扱い説明書の訂正シール貼りを十時間やらされて、うつか  
り発狂してしまいそうになったのだが、なんとか正常な思考を保ち  
つつ八月を迎えることが出来た。

気づけば、ソレイユの五日間の休業期間が始まっていた。

俺はこの五日間、出身校である小学校のプール監視員のバイトを  
任されていた。小学生時代の知り合いから、『夏風邪にかかってプ  
ール監視に出られなくなりました』と代理を募る一斉送信メールが  
来て、たまたまソレイユの休業日と重なった俺が務めることになっ  
たのだ。

こんな状況じゃなかったら、こんな面倒くさい頼みなんか絶対に  
受けないんだけど。

プールサイドのビーチチェアに腰掛け、ほのかな塩素の匂いを懐  
かしみ、ぎゃあぎゃああと騒ぐ小学生の群れを眺める。

ああ、俺も思いつきりプールに飛び込んでみたい。

今頃、原村は浅海さんに連れられて、沖縄へと旅立っているのだ  
ろう。気楽なものだ。俺も行きかけたのに。



暴力的に降り注ぐ日照りを避けるべく、麦素材のカンカン帽を被りなおす。小学校から支給された帽子だけど、これがまた水槽の亀みたいな臭いで鼻がひん曲がってしまいそうだった。

「兄ちゃん暑そうだなー」

プールの水面からゴーグル姿の弟が顔を出し、俺に向けて嘲笑を送ってくる。シカトしておいた。

「あー涼しー」

再び水に潜っていく弟。そのまま浮かんでこなきやいいのに。

辟易とした息を吐く。仕事自体は楽だったが、弟含め、さつきからやたらと小学生共からちよっかいを出される。暑いし帽子臭いしで、優しい気持ちになれるわけがなかったが、俺は必死に取り繕った笑顔でちびっ子たちを見守った。

突然、高学年くらいの童女から水鉄砲の洗礼を受ける。顔面に冷水を叩きつけられ、心も冷ややかになっっていく気がした。

「ねえ、笑顔こわいよ。彼女いなさそー」

とんだご挨拶である。口元に笑みを、目に怒りを浮かべ、それを童女に向ける。しかし、俺のそんな暗示は虚しくも通じた様子はなく、そのガキは水鉄砲片手にぴょんとプールに飛び込んでいった。

今、はつきりと分かった。俺は子供が嫌いだ。

「すまん。あれでも私の娘なんだ」

隣で音がして、俺の真横にスツールが置かれる。そこに座った男を見ると、我が校の現代文担当教師、五頭だった。しかもこのくそ暑い中で何故か背広姿。

ここで俺はあることを思い出す。慌ててカンカン帽を目深に被り、なるべく顔を隠すようにした。

そうだ。処分対象者の俺はアルバイト申請を学校に提出しておらず、こうして無断で働いているのだ。

「暑い中、精が出るな今泉」

駄目だ、普通にバシてるし。あきらめて帽子を取り、両手で鍔を持って押し黙った。

「どうだ、働くのは」

五頭の皮肉めいた質問。俺は軽く頭を下げる。

「あの、すみません、えーと……」

「働くのはどうだ、と聞いている」

前方に視線を固定したまま、五頭が威圧的に言った。全身の筋肉が萎縮してしまい、俺は声を小さくして答える。

「いや、よく分かんないっす。楽しいとか、辛いとかってより、とにかく無我夢中って感じで」

「お前ぐらいの歳なら、それくらいがちょうどいいだろうな」

五頭は前だけを見つめていた。日光に当てられ、でかい眼鏡レンズが反射して輝く。目が痛いので、俺も顔を前に戻した。

さっき俺に水をかけてきた五頭の娘とやらが、今度は俺の弟に絡んでいた。弟の背中に抱きつき、というか、首根っこを絞めつけているようだった。

この光景だけ見ると、俺と五頭の力関係に酷似しているな、と思っただ。

「そんな風に稼いだ金で、一体なにが欲しいんだ」

あ、説教始まった。

「なにがっていうか。とにかく、俺には必要なんです」

「なんだ、欲しいゲームでもあるのか？」

頬が紅潮し、耳まで真っ赤になっていくのが分かった。五頭の方に身体を向け、彼の冷淡な瞳を見据える。

「そんな下らないものじゃない。自分だけのために安易にバイトなんかしないよ。俺にはちゃんと目標がある」

「しかし、規則を破ったことに変わりはない」

なんだよ、五頭じゃなくて石頭かよ。叩き割ってやりたい。

だけど、それもそうか。たしかに俺は正しいやり方で目標に向かっているわけではない。正規ではなく強引で、もし今目指している金額を手に入れたとしても、その目標が達成されるとは限らない。

だからって、他にどうしようもないんだ。規則や秩序に従い、今

までのように行動を起こさないうで終わるより、多少強引でもやってみるべきだ。

しばらく無感情な五頭の顔と向き合っていると、ふと彼の方から口を開く。

「たまには、自分のことも大事にしてみる」

口調に俺をいたわるような影があり、いささか拍子抜けしてしまう。彼の言いたいことは分かるが、しかし見当違いだ。俺は首を振る。

「俺、結構寂しがりっぽくて。他人がいないと駄目みたいで。これでも俺なりに、自分のこと大切にしているつもりなんですけど」

「そんなことは分かっている。それを踏まえた上でだ」

五頭が、俺の手からカンカン帽を取り上げる。帽子を手に立ち上がる彼を見上げる。相変わらず淡々とした表情と動作で、俺の頭に、押し込むように帽子を被せた。

「背伸びをするにしても、無理だけはするな」

「するよ」

即答し、せめてもの抵抗を見せる。したり顔で帽子の位置をなおす。五頭は深くため息を吐いたが、やがて、プールに向けて声をかけた。

「理香、もう帰る準備をしなさい」

「やだー」

もう一度、頭上でため息。

「いつもこうだ。子供というやつは」

小さく漏らし、五頭はプール出口へと向かっていく。

去っていくその背中に、俺はあること言い忘れていて、蹴るようにビーチチェアを立った。

「あの、ありがとうございます」

五頭が振り返る。礼を言われる意味がわからない、という表情だった。

「いや、その、見逃してくれて、ありがとうございます」

あ、確かにおかしいな、教師に対してこのお礼は。すると、五頭が鼻だけで笑った。

「勘違いするな馬鹿が。お前は二学期からの一ヶ月間、毎日朝七時からの清掃に來い」  
鬼め。

夏休み期間の登校日を目前に控えた、ある日の土曜日。

たとえ長期休暇だろうが、依子が必ず土曜に図書館に來ることは分かっていた。

自転車で一時間も離れた祖母ちゃんの家に行くより、図書館で依子を待ち伏せる方が効率がいい。

昼下がりの市立図書館、駐輪場にて。

キックスタンドを立てた自転車に寄りかかり、煙草とコーラの味を交互に楽しむ。

駐輪場の屋根から木の枝が頭を出し、蝉のじわじわとした鳴き声が俺の気分を高ぶらせた。枝葉が作った網目模様の地面を睨んでいると、少しだけ緊張が治まってくる。

依子が赤ママチャリでやってきた。俺の存在に気づくと、自転車置き場にママチャリを止め、音も立てずに俺のもとに歩みよってくる。

土曜日なので、当然、頭はパイナップルヘア。何回見ても面白い。そろそろ写メ撮らせてくれないかな。

こんな所だなにをしている、依子はそんな顔をしていた。口には出さないようだけど。

俺は自転車のかごに入れたシヨルダーバッグを手に取り、中から一枚の紙切れを出した。それを依子に手渡す。

「みんなで行こうと思ってさ」

依子はそれを胸の高さに掲げ、紙に記載された文字をまじまじと目で追った。

八景島シーパラダイスのワンデーパス。一枚五千円で、しかも八人分。計四万円。高すぎ。日雇いの分ほとんど消えたわ。

しかし、まずは一枚、依子に渡せた。

依子はチケット片手に俺を見つめた。しかも、どことなく怒っているような、興奮しているような感じで。なんで？

「ああいや、どこ行こうかなくなって迷ってたんだけど、ほら、お前無くしたじゃん、ベルーガのまりもっこり。だから八景島でいいかなって。みんなを誘って、夏の思い出？ みたいな作りたいなーって」

俺は相当照れつつ、回らない呂律で補足する。なんだこれ、ラブレター渡したわけでもあるまいし。

「いく」

依子が、何故か俺のシャツの胸元を掴んで詰め寄ってくる。俺は思わず引いてしまい、一歩どころか五歩ほど後ずさったのだが、それでも依子は俺の胸ぐらを掴んだまま追いかけてきた。駐輪場の柱に背中がぶつかる。

「ぜったい、いく」

依子が恐い。

「うん、分かった、分かったから」

俺は懸命に愛想笑って、そっと依子の手を離させ、彼女の背中を叩いた。

「ちよつと俺の給与日だし、二十五日にしたいから、ちゃんと空けとけよ」

依子がつなずいた。

ほどよい案配に太陽を隠した曇り空。空気も乾いており、清涼感を肌を感じながら登校日を迎える。

自転車で校門を抜けると、渡り廊下を歩いていた宮下がアンニユイな笑顔で手を振ってきた。ご機嫌な俺も軽く振り返す。

明るく堂々としなければ、そう思う一日。

登校日はいたずらもお休みなのか、俺の靴箱は無事そのものという感じだった。教室に入っても気だるそうな視線しか向けられない。挨拶は誰もしてくれないけど。

クラスメイトの半数はすでに登校している。その中に城川と鍋島を認めた。

まず城川の席に歩み寄り、机に例のワンデーパスを置く。城川はそれを両手で取り、興味津々に顔を近づけた。リスみたいだった。

「これ……?」

腰を屈め、彼女と同じ目線になって照れ笑いみたいなものをしてみせる。

「依子と鍋島と、あと、村瀬たちなんかも誘ってみようと思ってる。瞬時に城川が暗い顔をするので、俺は続けざまにフォローを入れる。」

「いや、お前も鍋島や村瀬と遊ぶのはまだ気まずいだろ? だったら俺や依子と一緒に回ってくれてもいいし。もしよかったらでいいんだよ、俺らに付き合ってくれ」

「でも、チケット代……」

「いいよ。こっちから一方的に頼んでるわけだし」

城川は恥ずかしそうに笑い、ありがとう、とつぶやく。いつもより一段と声が小さい。

日時と時間を伝え、俺は城川の席を離れた。

鍋島と細々とした挨拶を交わし、自分の席に着く。当然だが、彼

女の体調も復活しているようだ。しかし渡す瞬間ってのはやっぱり緊張する。呼吸を整え、ぱつと後ろを振り返る。

窓の外に目を向けていた鍋島がびくりと反応した。しまった、思いつきり驚かせてしまった。

「おはよう」

「なんですか？ さっきもしましたよね、挨拶」

「なんでこういうときに限って喧嘩腰なのこいつ。」

もう誰からも話しかけられたくない、そう言いたげな鍋島の態度に気づかないふりをして、財布からシーパラダイスのチケットを出し、半ば叩くように鍋島の机に置く。

鍋島は戦々恐々としてそれを手に取り、異星人でも見るかのような目つきで俺を見た。

「え、なにこれ、は？ え？」

みるみる赤くなっていく鍋島。逆に青ざめていく俺。なんだか勘違いされているようだった。

「いや違う。違うわ、その反応」

咳払いをして、拳で軽く机を叩く。

「みんなで行きたいと思って、俺が自腹切って買ってきてやったわけ。だからお前も来い。分かったか？ 分かったら黙って来い」

言い捨てて前を向く。すぐに後ろ襟を掴まれた。しびしび鍋島と向かい合う。

「意味が分かりません。どういうことかちゃんと説明しなさい」

「だから、夏の思い出にしたいから、シーパラ行きたいなって。みんなを誘って行くこうかなと」

「そこですよそこ。みんなって、誰と誰を誘うつもりですか」

俺は諦めてうなだれる。鍋島なら突っ込んでくると思ったけどさ。声をひそめ、勧誘対象のメンバーを弱々しく連ねていく。鍋島の表情が露骨に歪んだ。

「大丈夫なんですか？ 何故そのメンバーにしよう」と

「むしろこうじゃなきゃ駄目なの。ていうか、半分そのために買った

てきたようなものなんだし」

「あと、昭文くんも誘うって……」

「あ、やっぱ原村は駄目かな」

さつき俺がメンバーを言い並べたときも、鍋島がなにより反応を見せたのが原村だった。流石にこれだけは不味いのか。

しばらく鍋島は沈黙し、俺も気の咎めから黙り込む。

「いえ、是非誘ってください」

鍋島がはにかみ笑いを浮かべた。

「私、実は夏休み前に、昭文くんにひどいことしたんです。よく考えたら、これって謝るチャンスなんですよ。是非、昭文くんも誘ってください」

大体の事情は原村から聞いているけど、かまとと振って俺はうなずく。

「うまくいくといいな」

「あと、できれば城川さんと村瀬さんにも」

「ああ、そつちもな」

その後、鍋島も城川と同じくチケット代を返金してこようとするので言い訳混じりに遠慮し、HR開始までひそひそと当日の予定を話し合った。

だけど問題はここからだ。

HRと全校集会を終え、大掃除で裏庭から中庭までを徹底的に清掃していく。いつもなら手を抜いて、むしろサボって他のやつらに丸投げしてしまう俺だったが、これまでバイト漬けだったために身体を動かさなければ気が済まなかった。軽く職業病。

いまだに空を覆う雲が少しずつ黒ずみ始めている。

終業のHRで宮下が夏休みの注意事項の確認を取っている間、俺は窓越しから天気の様子を気にしていた。おかしいな、今日は雨降らないはずなのに、朝からずつと曇ってる。



放課となり、生徒が帰る準備を始める。俺は席を立った。

向かったのは、早川の机だった。

そこに集う早川、吉岡、村瀬が談笑を止め、怪訝にこちらを見上げた。周りから目立たないように注意して、一人一人にワンデーパスを手渡していく。それぞれ不審げに手の中のチケットを見つめた。「ちよつと、屋上に来てほしい」

そう告げて振り返る。依子と目を合わせると、彼女は静かに席を立った。

旧校舎の屋上。

相変わらず雲に押しつけられそうな空の下、仲夏の熱気が気配を殺されているようだった。かすかな薄暗さの中、俺と依子は鉄柵を背にして彼女ら三人と対面する。

「うわあ、なんか秘密基地みたいだね」

「あたし、すでに一回ここに来たことあるんだぜー」

吉岡と村瀬は旧校舎屋上という異質な空間にはしゃいでいたが、早川は黙って腕を組み、寂れた貯水タンクへと視線を向けていた。まもなく早川が口火を切る。

「それで、何か用があるんでしょ。私たちに」

斜め後ろに立つ依子と視線を交わし、うなずき合う。

「謝りたいことがある」

背中を押すと、依子が一步前に出た。吉岡と村瀬が会話を止める。

「今まで、意地をはっていました」

言うつと、依子は両膝を地面につけた。

「本当のことを言えば、あたしは今まで、自分はいじめられるべきだと思っていた。あたしは昔、友達をいじめて自殺にまで追い込んだことがある。だからあたしは、みんなから嫌われて、いじめられてしまえばいいんだって、心の中で思っていた」

依子の両手が乾いた地面につく。俺はそれをじつと見つめた。行

列から外れた一匹の蟻がコンクリートを這い、彼女の人差し指の上を通過していく。

「だけど、それは間違いだった。あたしがしてきたことは、最終的にあなたたちを、あたしと同じような罪悪感で苦しめることになる。あたしも、もうあなたたちを傷つけたくない。喧嘩もいじめも、もうしたくないし、されたくない。そして出来れば、これからあなたたちのことを好きになっていきたい」

だから、あやまります。

静まり返り、その場の全員が依子の言葉に耳を傾ける。

「吉岡さん。今まで無視したり、変に避けたり、早川さんのことを悪く言つてごめんなさい」

吉岡の口角がつり上がる。彼女は貯水タンクそばの段差にそつと腰掛けた。

「村瀬さん。鍋島さんとの仲を邪魔したり、ひっぱいたり、いつもあなたを追いつめるようなことをして、ごめんなさい」

村瀬は視線を落とす。彼女らしくもなく、手元で組んだ指をうごめかせた。

「そして、早川さん」

早川はもう斜め下の地面を見下ろしていた。組んだ腕がわずかに反応する。左の手首に巻かれた包帯をぎゅつと握った。

「純とは、本当になにもありません。たしかに大切な親戚だけど、彼を恋愛対象にとつたことはないし、いたずらに、あなたの気持ちに踏みに行いました。本当なら、もっと早く、あやまらなければいけなかったのに……」

言葉尻が切れ、依子の声は潤んでいた。見れば彼女の頭はすでに地面に着いており、涙のこぼれた跡が見え隠れしていた。

「本当に、すみませんでした」

俺は依子の隣にかがみ、もういい、と言って身体を起こさせる。

依子は赤くなつた鼻を鳴らし、悄然として俺の腕に支えられる。やはり、初めて泣いたあの日から涙もろくなっているようだ。

しゃがんだまま、俺は三人を見上げる。

「俺も謝りたい。俺の中途半端な行動や言葉が、お前らだけじゃなく、クラス全体の心を乱した。助けることも人を思いやることも、俺は今まで真剣じゃなかった。ほんと、ごめん」

三人からの反応はない。

「さつき渡したチケツトはせめてものお詫びの印。どうか受け取ってくれ。そして、出来れば仲直りして、俺たちと遊びに出てほしい。嫌だったら別行動でもいい。なんなら、俺らと日にちをずらしてくれたって……」

唾を飲み込み、言うべきこと、伝えるべきことを頭の中で整理する。

「だから、お前らも依子に謝ってほしい。いじめのことは埒が明かないからこの際もういい。でもさ、こいつの父親、お前らが依子の私物を隠した日に亡くなっただよ」

依子の嗚咽が耳につく。叔父さんのことを思い出しているらしい。この先、一生言葉を交わせなくなった叔父さんのことを。

「大切にしていたもの、こいつは夜中まで探してたんだ。携帯もないし、依子も必死だったから、誰かと連絡を取ろうなんて考えていなかった。こいつの父親、死に目に依子と会いたがってたのに、こうして発見が遅れたせいで、父親とすれ違っただ」

怒りをあらわにしないように気をつけながら、俺は三人の顔を見回した。俺と目を合わせるのは吉岡だけだった。

「俺も悪い。依子を見捨てて、こいつの近くから離れた。でも隠した奴らにだって責任があると思うんだよ。だから頼む、どうか謝ってほしい」

頭を下げ、蟻の這う地面を見る。固く目をつむり、三人からの返答を黙って待った。

肌寒いほどの風が産毛を触り、吹きやんだあとに依子の鼻をすする音が聞こえた。いまだに返ってこない返事に不安を覚える。そのとき、早川の冷めた声がかかった。

「証拠は？」

耳を疑って顔をあげる。早川の薄く開いた瞳を見返した。

「証拠はないの。私はその頃入院していたから犯人じゃないけど、平野の私物を隠したなんて、この子たちがやったって証拠はあるの？」

は、と軟弱に吐かれた俺の息が空気に溶ける。吉岡がくすりと微笑み、音もなく手のひらを合わせた。

「沙樹の言う通りだよ。私や彩音ちゃんたちがやったっていう証拠を見せてよ。あ、ていうか、そもそも私は最初からいじめに加わってないんだっけ？」

何故だかそこで嘲笑が起こった。誰のものかは知らないし、さっきの言葉だつてよく耳に入ってこなかった。表皮を逆撫でされるようなおぞましさだけが纏わりつく。

「そんな、俺は、お前らの良心を信じて」

「なに、その精神論。うざいんですけど」

吉岡の言葉が俺の全てを打ち消す。

「信じるとか良心とかってなに？ それは何になるの？ そんな押しつけて犯人扱いされるんだ。逆に被害者じゃん、私たち」

「言えてる」

そうやって笑い合うのは吉岡と早川だった。俺の腕が掴まれる。

見ると、依子の目が据わっていた。スカートのポケットから取り出されたものを俺は見落とさない。

「やっぱり、悪意には、悪意で返すべきなのかな」

依子は右手に持ったカッターナイフをきりきりと鳴らし、刃を深く露出させる。俺は首を振り、その手を掴んだ。止めなければいけない。だが声が出ない。そのとき、

「ちよつと、ちよつと待とうよ、二人とも」

村瀬が不安定に紡がれた声をあげた。吉岡と早川が彼女に視線を送る。急に止んだ嘲笑に村瀬はたじろぎ、たどたどしく続ける。

「いや、謝ってんじゃん、あの二人。っーかさ、あたしらがやった

とか、最初から見え透いてね？ あとほら、こんなチケットまでく  
れたり」

「ちよつと黙つててくれるかなあ、彩音ちゃん」

怯え、村瀬が口を閉ざした。絡ませた指を強く握り、ひきつった  
笑みを浮かべる。

「いや、悪い。出しゃばつた」

すぐさま笑みが消える。誰からも視線を逸らす村瀬を、俺もそれ  
以上見ることが出来ない。

「物で釣ろつて魂胆も、」

吉岡が手にしたチケットを掲げ、見せびらかすように真つ二つに  
破り捨てる。

「気に食わない」

依子の右手が動いた。刃先が手首の甲をかすめたが、俺は懸命に  
彼女の手を地面に押しつける。上腕に薄い線が走り、血が一筋流れ  
出ていく。

激情に駆られて顔を上げる。しかし、そんな感情もすぐに融解さ  
れた。

吉岡と早川のせせら笑う顔に陰が差していた。暗雲に隠れた太陽  
が傾き、わずかな光すら貯水タンクに遮られ、二人の姿は漆黒に染  
められていた。高笑いがうめきのように届き、彼女らの姿が歪んで  
見える。

「悪魔だろ、まるつきり」

暴れる依子の手を抑えつけ、虚脱してつぶやく。

悪魔は本物の善意を知っている。だから、どうすれば相手を傷つ  
けられるのかが分かる。簡単だからだ。善意とは真逆のことをすれ  
ばいい。もっとも人を傷けられる方法を逆説的に理解できる。

依子が悲鳴じみた声を上げた。俺は意味も分からず首を振る。

「ねえ、証拠が欲しいんだよね」

吉岡が柔らかく問いかけた。俺たちは動きを止め、啞然と彼女を  
見上げた。

「これなーんだ」

吉岡のポケットから出された物を知った瞬間、俺は戦慄する。俺があげた。

依子が大切にしていた。

無くして、ずっと見つからなかったもの。

「ベルーガまりもっこり。笑えるよね、こんなキモイストラップにしがみついちやうんだもん。平野さんの神経、疑っちゃうなあ」

「か、かえして……」

カッターナイフを取り落とし、依子の手が前へとまっすぐに伸びる。

吉岡が段差の上に立つ。手の中で揺れるストラップを彼女は一瞥した。その暗い瞳に、背筋が凍る。

相手を傷つけるには、善意とは真逆のことをすればいい。

ストラップが地面に落下する。一秒後、飛び降りた吉岡によって、それはあっさりと踏み砕かれた。

「証拠隠滅？」

言葉を失い、一帯が無音に包まれる。砕かれた音の残滓がいつまでも耳に反響した。

ふいに地面と金属がこすれるような音がした。はっとして横を見る。依子がカッターを取り、地を蹴った。

「吉岡あああっ！」

すぐさま依子の腹に手を回す。細い身体はどこからこんな力が出るのか、俺は数十センチほど引きずられ、足元でこらえて彼女を止める。無茶苦茶に振り回される肘が俺の腹を打った。その腕ごと依子を抑えつける。

「ころす、ころして、やるっ……！」

「なんで殺すんだよ。駄目だってば、お前約束しただろ。許してあげるって、約束じゃん。駄目なんだよ、こんなの」

依子の手からカッターを取り上げ、地面に放り投げる。抵抗が徐々に収まっていくのも関係なく、きつく抱き止める。

俺はあざ笑う吉岡を睨み据えた。どうして笑える？ 優しさを知らないわけじゃないだろう。俺が人を真剣に思いやれていないって、それを教えてくれたのは誰だ。

「何がそんなに気に食わないんだよ。ここまでする意味あんのか！」  
吉岡が何か言い返そうとしたところで、早川が彼女の手を引いた。  
「もう行こ、美野里。ちよつと寄り道でもして帰りたい」

早川の様子は見えなかったが、押し殺したような声色になっていたことに俺は気づく。吉岡の手を引いて扉の方へと向かう彼女に、俺は声を荒げた。

「早川！」  
歩みが止まる。しかし、早川はこちらを見なかった。

「いつからそんな風になったんだよ。いつか俺と映画観に行ったよな。ピクサーの下らねえアニメ観て、お前泣いてただろ。あれ嘘だよ。嘘泣きで可愛こぶってたのかよー！」

実際、俺の方が号泣してたけどさ。本当、今みたいに。

早川は何も言わず、黙って吉岡の手を引いた。依子を離して追いつがろうとしたが、コンクリートの縁に足が掛かり、俺はその場にひざまずく。

鉄の非常扉が、重々しい音を立てて閉ざされた。

両手をつけて地面を見下ろす。破られたワンデーパスが、先ほど早川が立ち止まっていた辺りに落ちていた。それを手に取り、掌の中で押し潰す。

「嘘だろ」  
違う。こんなはずじゃない。何度も破って千切り、地面に叩きつける。

ふいに、俺の肩に手が置かれる。視界の端で紙切れが泳いだ。顔を上げると、村瀬がゆっくりと俺の隣にしゃがみ込んだ。

「ごめんな、今泉。あたしも行けないっばい」

差し出されたチケットを受け取る。紙の触感がやけにぼんやりとして手から滑り落ちそうになる。

枯れたような、繕ったような言葉が俺の喉から漏れた。

「いや、いいんだ。別に、上手く全員を誘えるだなんて、最初から思っただけから」

「換金するとかさ、あと、弟いるんだっけ？ そいつ連れてってあげてよ。な？」

俺の肩を叩き、村瀬は立ち上がる。

「ほんと、ごめん」

駆け足で去っていく村瀬の背中を、俺は惚けたように眺めた。

雨は土砂降りだった。呆然としていた俺はしばらくそのことに気づかず、見れば、制服が濡れて重たくなっていった。立ち上がる。服のせいだけではなく、足取りも鈍りきっている。

依子はまだ地面にうずくまっていた。肩に触れてみるが反応はない。仕方なく腕を持って立ち上がらせる。

髪が顔の前に垂れ、その表情は判然としない。

屋上は一面が水溜まりのようになっており、視線を巡らせてストラップの破片を探してみるものの、水に流されて見つけられる状態ではなかった。

貯水タンクに目を向ける。先ほどの早川は、ずっとそちらを気にしていた。

「いつまで隠れてんだよ」

気配も所作音も、全て雨音によってかき消されていた。しかし、やがて彼はタンクの裏からその姿を見せる。

そば濡れたスケッチブックを片手に、原村は力なく笑った。



傘が三本並んでいた。

紺、橙、黒。

原村、依子、俺。

学校を出ると、俺たちは市街地の奥へと進んでいた。黒々とした雨雲からは絶えず雨が降りそそぐ。歩道がだんだん狭くなっていき、縦一列でなければ進めない。自然と会話が途絶える。

先頭を原村が歩く。その後ろに依子。最後尾が俺。

小学校の集団登下校を思い出した。一列縦隊で、必ず年長者が前を歩くことになっている。列の間に女子を挟み、一番後ろは男子。

過去の俺は決まって、一番後ろを任されていた。後ろは大抵、喧嘩っ早い男子が歩くべきだという不文律がある。

皆の背中を見守れるし、背後から現れる悪者から身を挺することだって出来る。喧嘩っ早いとは心外だと思っていたが、よくよく考えると悪い気はしない。

正義のヒーローになりたかった。多分、男子の誰もが一度は夢見たことだし、少なくとも俺はなりたいたいと思っていた。

ヒーローがないと知ったのはいつ頃だろう。

正義なんかあり得ないって知ったのはいつ頃だろう。

世間は単純な勧善懲悪では成立しない。理屈が不条理に負かされてしまう。いつからそんな風に思うようになった？

当時小学生の俺は、どんな高校生になりたいと思っていたのだろうか。

今の自分は、昔の自分の期待に応えられているのだろうか。

「久しぶりだよな」

先頭の原村が前を向いたまま、空中へと放り投げるように言った。なにがだよ、と一番後ろの俺は訊き返す。

「なにがって。この三人で同じ時間を共有するのって、結構久しぶ

りでしょ」

「そうかな」

気のない相づちを打つ。

一学期、図書室の受付内で、俺たち三人はよく集まっていた。大した会話もなかったし、依子は勉強や受付仕事で忙しかったし、俺と原村なんかは漫画を読むだけだった。

あれがたったの一ヶ月前。俺の中でのそれは、『最近のこと』というより、『思い出』と表現する方が適切だった。

図書室受付と旧校舎屋上は、俺にとっての聖地であり、アジトであり、居場所だった。何事もなく、退屈過ぎて、何気ないようなあの場所を気に入っていた。

今となつては、両方ともに嫌な思い出を作ってしまったわけだけど。

「二学期から、また三人で集まれるといいな」

俺はそう呟いた。雨の音が返事をさらう。あるいは、初めから誰も返答してくれなかったのかもしれない。それでも、十分だと思う。二人の背中から、ちゃんと伝わってくる気がした。

原村が先頭ということとは、当然寄り道先も原村が決めるわけで、やがて俺たちはある寂れた廃墟に到着した。

看板は降ろされているが、その建物の頂上には錆びたボウリングピンが立っていた。もとはアミューズメント施設か何かだったのだろう。

道が開けたにも関わらず、俺たちは相変わらず縦一列で歩き続けた。

施設の壁沿いには低級クッションのような広葉低木が生えおり、それは建物の周囲を取り囲むように際限なく伸びきっている。

本来は自動ドアがあったであろう広い入り口を通り、中へと侵入していく。

屋内には、めまいを覚えるほどの広大な空間が広がっていた。木製力ウンターらしきものはあったが、アトラクションやゲーム機器類は全て撤去されているようだ。横を見るとエスカレーターがあったが、稼働するどころか、現在は埃をかぶることに専念しているようだった。

原村が迷いの無い足取りで進んでいく。俺と依子は彼の背中を追いかけた。

奥には階段があり、俺たちはそこを上っていく。段差はワックスどころかタイルすら剥がれており、踏みしめるたびに退廃したような原始的な音が鳴った。

施設は四階建てで、階段はそのまま屋上まで続いていた。

屋上の扉は消失している。歩を進めると、無惨に削がれた人工芝の感触が靴の裏にあった。水気をたっぷり含み、ぐちゃぐちゃと不快な音がする。

屋上を見回すと、パンダの乗り物が放置されていることに気づいた。その他には、今にも崩れ落ちそうなベンチがぼつぼつとあるだけだ。ある意味、あの旧校舎屋上よりも寂しい場所かもしれない。

「ここが僕のベストプレイス。こうして雨さえ降ってなきゃ、最高にいい場所なんだけどね」

そうだ、と言って原村はポケットを探る。中から出したのは、シーサー型のライターだった。

「シーサーライター。彭くんとのお縄土産だよ」

ぼんと投げて渡される。受け取ると、俺は笑顔満点なシーサーの面を見つめた。なんだか、腹立つ顔だった。

蓋の部分が顔になっており、ためしに開けてみる。

『イーヤーササー、ハイイヤ』

ライターがしゃべった。しかも沖縄の伝統曲みたいな歌ってる。超うぜえ。

「面白いだろ」

「面白いつてか、なんかイラツときた」

ケラケラと馬鹿笑いする原村だったが、一応、お礼を言ってポケットにしまった。

「あ、平野には紅芋タルト十二個セット買ってきたから。今度機会があつたら渡すね」

「俺も紅芋タルト食いたかつたんだけど」

原村は憎たらしい笑みで肩をすくめる。リアクションはそれだけだった。くそ、あとで依子から分けてもらおう。

すると、何故か原村がパンダの乗り物に近づいていく。パンダの背中には取っ手があり、開くと、中は空洞になっていた。鍵すらついていないらしい。

彼はパンダの中から一冊のスケッチブックを取り出す。何年も前に捨てられたような、薄汚いイエローのスケッチブックだった。

「ここはずつと前から廃墟だったし、僕も昔つからここに通つていた」

「昔からつて？」

尋ねると、原村は紺傘の内天井を見上げ、指を折りながら数えた。軽く、八年くらい前？」

俺たちは黙り込む。原村と早川が生き別れたのは五年前だから、それよりずつと前。

「散歩してたらね、偶然、この秘密基地を見つけたんだ」

「秘密基地、ね」

「そう。僕、昔から秘密基地つてのが好きだったからね。学校帰り、毎日のように仲間を連れてここで遊んだものだよ」

原村は傘の柄を顔と肩で挟み、両手でスケッチブックをめくった。

「絵も、よくここで描いた」

俺と依子が近づくと、原村はあるページを開いて見せてきた。

「みんなの集合絵。へつたくそだろ」

依子と同時に覗き込む。開いた二ページいっぱいにはそれは描かれていた。

鉛筆で描かれたものだからか、線は薄くなりきっており、ほとん

ど何が描かれているか分からなかった。

人物らしき者が六人。女子が二人、男子が四人だろうか。みんな笑っていて、それぞれ変なポーズをとらされていた。背景にパンダの乗り物があることから、絵の舞台はこの屋上だろう。

その中に、マッシュルームカットの少年が描かれていた。少年は、それ実際やつたらそれ大怪我だろ、みたいな勢いでスライディングしていた。これが原村だと思うけど、本人の言う通りへったくそだった。

「まあでも、俺よりは上手いんじゃないの」

「そうなの？ これより下手なら是非見てみたいもんだね、今泉の絵」

「今度描いてやろうか、原村のえびすスマイル」

原村はきょとんとして、それまじで描いてよ、と手を叩いて笑った。

すると依子が、絵のある箇所を指した。そこを注視する。

スライディング少年の隣に、ポニーテールの少女が描かれていた。少女は複雑骨折したみたいなたが、それでも楽しそうに宙を跳ねている。依子はそのポニーテール少女を指したままで、特にコメントすることはなかった。

代弁するように、描いた本人が口を開く。

「それは、沙樹だね」

その言葉を聞き届けたように、依子の手が降りた。橙傘の柄を両手で握り、傘の際から雨雲を見上げた。

原村が静かにスケッチブックを閉じる。傘が少し傾き、彼の顔が隠れた。

「沙樹を連れて、仲間と一緒によく遊んだ。あの頃は楽しかったよ、本当に」

原村の足がフェンスへと向いた。一步步確かめるように進んでいき、俺たちも黙ってそれについていく。

「でも、ちよっとした事件があつてね」

原村がフェンスに前のめりになって、片手に下を指さす。茶色にくすんだフェンス。そこから身を乗り出し、俺たちも彼の指さす先を見下ろす。

そこには、先ほど見た広葉低木が広がっていた。

「沙樹と同じ年の女の子がね、ちょうどあの辺りに落ちたんだ」

原村がフェンスから離れ、俺たちに背中を見せる。傘を後ろにして空を見上げた。

「突き落としたんだ、沙樹が」

原村が言い切る。しかし、彼は頭を振った。

「とは言っても、お互い、落としあう真似をしてじゃれ合っただけで、たまたま、って感じだったんだけどね」

首を振りきつたままの横顔。それはぴたりと止まり、彼の頬に雨が当たった。

「目撃者は、僕だけだった」

息を呑む。それがなにを意味しているのか、俺たちは彼の言葉を待った。

「子供の僕らには、人を殺したらどうなるかだなんて、分かりつこなかった。だけど、怖くなつたんだ。とにかく僕は、隠さなければいけないと思つた。沙樹を守ることで精一杯だった。沙樹の行いには目をつむり、他の仲間たちには、本当のことを言わないようにしたんだ。あの子は一人で足を滑らせて、勝手に落ちたんだって」

背中に構えた傘が、ずるずると下がっていく。

「奇跡的に女の子は生きていた。あの木の上に落ちたことが不幸中の幸いだった。後遺症もなかったけれど、ただ、ちゃんと覚えていてね。沙樹に突き落とされたこと」

傘が存在意義を失い、原村は顔から一心に雨を受ける。

「もうこの場所では遊んじや駄目だつて、大人たちからこっぴどく叱られた。あの事故以来、沙樹は一時期、クラス中から悪口を言われたり、いじめられたりしたよ。だけど僕は、必死に沙樹をかばつた。何故だか分からないけれど、あの事故のことで僕も責任を感じ

ていたのかもしれない。結局、その子と沙樹はいがみ合ったまま、疎遠になり、やがてその子は遠い地に転校してしまった」

やがて傘が地面に着いた頃、それと同時に彼は柄を手離した。傘は完全に役目を負われ、地面の上で静かに佇む。脇に抱えた古びたスケッチブックが、じわじわと雨に浸食されていく。

「沙樹はあの日から、僕に甘えるようになったんだ。どんなに悪いことをしても、僕なら見逃してくれるし、助けてくれると思ったらいい。精神病を患った父さんを追いつめて、彼が自殺したときも、沙樹は僕にすがってきたよ。『私のせいじゃないよね』、『私が悪いわけじゃないじゃん』、っていう具合に」

原村はスケッチブックを開き、あるページで止める。おそらく、先ほどの集合絵だろう。そう直感した。

「僕は、沙樹から離れることに決めた。僕がいつまでもあいつのそばに居たら、あいつはずーっと駄目なままだからね。まあ、それでも……それでも」

雨が横風に吹き付け、屋上全体を叩いた。霧が視界を拒み、俺は思わず目をつむる。

「それでもさ！」

豪雨を切り裂き、原村が叫んだ。

風が吹き止み、臉を押し上げると、原村がこちらを向いていた。

頭から足元までずぶ濡れで、顔中が雨にまみれ、泣いているのかどうかすら分からなかった。俺も依子も、黙して原村と向き合う。

「あいつを甘やかし続けた僕が、こんなことを頼むのも、おかしい話なんだけどさ……」

顔面に無防備な感情を晒し、ひねり出された言葉は苦悶に歪む。

「あいつのこと、許してやってくれないかな」

依子が俺の二の腕を掴む。流し見ると、彼女はうつむき、片手に握った拳を震わせていた。

唇を噛み、原村を見る。原村はひざまずき、地面の上で乱暴にスケッチブックを開いた。ページに手をかけ、一気に引き裂く。

かけがえのないはずの思い出は、彼自身の手によって断ち切られる。

「許せだなんて、絶対おかしいんだけどさ。君たちに酷いことをしておいて、悪いのは沙樹の方なんだけどさ。そんなの、分かってるのよ」

裂かれる音が雨音と混じり、悲痛に叫ぶような不協和音を生んだ。「他に許してもらえる人、もうあいつには居ないんだよ……」

次々と破り捨てられ、風に乗り、そして雨に打ち落とされる。原村はうずくまり、地面の上で拳を握った。

「僕が許したって意味がない。あいつの顔を見たら、どうしても甘やかしてしまう。叱れないし、守ってあげたくなる。僕は君たちと友達でありたいのに、沙樹ともう一度顔を合わせてしまったら、もしかしたら、君たちの敵になってしまいかもしれない。僕はもうこれ以上、あいつの近くに居てはいけない。吉岡でも、村瀬でも駄目なんだ。もう、君らじゃなきゃ、駄目なんだよ」

飛ばされたページの切れ端が俺たちの足下にへばりつく。あの絵だった。

「僕は、どうかしてるんだ。今泉も、平野も、二人とも僕の友達なのに。君たちと沙樹のどっちが悪いのか、自分でもよく分かっていないのに。僕はどうしても、沙樹を嫌いになれない……」

依子の腕を引く。辺りに散乱する紙を踏みしめ、原村のもとに歩み寄る。ページは破りきられ、スケッチブックは裏表の表紙だけだった。原村は頭を下げ、それを見下ろしていた。

「許すから」

依子の腕を離し、地面にしゃがむ。開いたままの傘を置き、原村の両肩を掴んだ。身体を押し、無理矢理顔を上げさせる。

「俺や依子にしたことなんて、お前の代わりに、俺たちが許す。許せるよう頑張ってみるから。だから、はやく笑ってくれ。似合わねえんだよ、お前のそんな顔」

肩を前後に揺さぶる。原村の顔が上下すると、その分表情が分か



らなくなる。この調子で笑うまで揺すってやる。

「は……」

笑った、そう思って手を止める。しかし、原村の顔はくしゃくしゃのままだった。口元だけが不格好に緩む。

「沙樹を、許してあげてくれ……」

「許すよ。許せるよう、頑張るから」

動きを止めると、今度は原村が俺の首に腕を回してきた。ちょっと驚いたけど、俺は無言でその背中を抱き返す。

どいつもこいつも、どうしてこんなに上手く弱音を吐けないのだろう。弱々しいくせに去勢を張り、自傷までしておいて、それでもしたたかを演じ続ける彼の背中。こんな不安定なものに抑え込んでどうして平気でいられる。

深く息を吐き、しっかりとその背中を撫でつける。

依子が傘を放った。腰を下ろし、俺たち二人を包みこむように抱く。何も言わず、ただ強く抱き込んだ。

「う、あぁっ……」

しだいに、雨が勢いをなくしていく。光の柱が差し込み、徐々に三人の体温が温められる。小雨の中、俺は二人から送られる温もりを身に寄せた。

原村は子供のように泣き続けた。もう笑えとは言わないようにしよう。今日くらい泣かせてあげよう。

明日から、ちゃんと笑ってくれればいい。

数日後の朝早く。

駅前では依子と待ち合わせる。夏休み真っ直中だが、俺たち二人は制服姿で集合した。

昨日、電話で依子と話し合い、お互いの親に了承を得て、俺たちはとある場所へと赴くことにしていた。

駅に隣接したゆうちょのATMから残額を全て引き出し、電車で

新幹線乗車駅まで行く。

東海道新幹線を使い、俺たちは三駅離れた隣県へ向かった。右手に富士山を望みながら、ときおり依子の顔色をうかがう。

「大丈夫かよお前」

依子は答えず、じつと車窓の先を見据えていた。さっきの待ち合わせ場所ではいつも通りだったけど、こうして目的地が近づくにつれ、もともと少ない口数がさらに減っていた。

新幹線はとづくに静岡県に入っている。下車駅に到着するが、依子がシートから立たないため、俺は訝しみながらも彼女の名前を呼んだ。

「依子、ここなんだけど。降りる駅」

依子は窓の外の駅名看板を見つめたままだった。発車ベルが聞こえ、俺は慌てて依子の手を掴んで立ち上がらせる。網棚の荷物を引つたくるように取り、ほとんど駆けるようにして新幹線から飛び出る。

すぐに扉が閉まった。駆け込み乗車ならぬ駆け込み下車だ。

降りた位置から一步も動かず、微妙に視線を下げたままの依子を黙視する。背後で新幹線が徐々に速度を上げ、発車していく。俺は依子の動きを待った。

彼女が動き出したのは、新幹線が完全にいなくなつて、数分ほどしたあとだった。いまだに斜め下を見下ろし、無言で俺の前を歩いていく。

俺は依子の隣に並び、その肩に手を置き、足を止めた。

「まだ戻れるぞ」

依子は首を振った。

「いく」

駅のバス停留所から、一時間に一本しか通らないローカルバスに乗る。

二人用シートに並んで座る。窓越しに、少しずつ緑が増えていく風景を目に焼き付けた。いよいよ、依子は完全に口を閉ざしている。

俺も、もう依子に話しかけるのは止めておいた。

バスで一時間以上揺られると、あらかじめ確認しておいた停留所名を運転士が車内放送で述べた。下車合図ボタンを押し、荷物と依子の腕を取る。

依子の重い足を引きずり、バスから降りる。

すると一番に、潮の匂いが鼻をついた。バス停小屋から覗いてみると、下り坂の国道の先に、夏の陽光にきらめく海があった。思いきり深呼吸をすると、肺の中が洗浄されるようで清々しかった。

「着いたな」

依子がうつむきがちに頷く。

海沿いに、こじんまりと民家の塊を見つけた。あとは、坂を何度か折れて下るだけ。深呼吸を終えると、依子と共に歩き出した。

みんなと円満を迎えるためには、まだ一つだけ足りないものがあった。

許してもらえないかもしれないし、許してもらえないかもしれないけど、結果だけを見てはいけない。許されたこと、許されなかったことを学び、過去を乗り越えなくてはいけない。

徐々に姿を見せる海辺の町。

俺が初めて訪れる、清志叔父さんの生まれ故郷。

そして、依子が中学時代を過ごした地だ。

町に到着する。この地域は坂が多いらしく、ここに来るまでずっとなだらかな下り坂だった。

俺たちはある民宿に入った。

叔父さんの知り合いの平塚とかいう爺さんがやっている民宿らしい。道子叔母さん経由で連絡してもらい、タダ同然で一泊させてもらうことになっていた。

平塚さんは小太りで、真っ黒だった。性格のことではなく、肌的な意味で。

「依子ちゃん、べっぴんになった。えれえ、べっぴん」

平塚さんは片言みたいな話し方だった。お世話になります、と依子が頭を下げると、俺たちは二階の一室に案内された。六畳一間の和室。廊下とは襖一枚で仕切られていて、一応トイレと洗面台はあったが、普通の民家の一室のようだった。

まだ昼を過ぎた頃なので、部屋でのんびりしてから出かけることにする。

窓を開放すると、海辺独特の磯の香りが部屋に入り込んできた。見ると、民家の先に青い海が広がっていた。遠くでうみねこがミャーミャーと鳴く。すぐ近くからは、子供の笑い声が細々と届いてきた。初めて来た場所なのにどこかノスタルジックで、ぼうつと眺めていると思考が止まってしまいそうだ。

窓の縁に灰皿を置き、煙草をくわえる。原村からもらったシーソーライターで着火する。

『イヤーササー、ハイーヤ』

雰囲気崩れた。ここ沖縄じゃねえし。

「いいとこじゃん、こじ」

振り返ると、依子は座椅子に座って本を読んでいた。こちらに顔を向けようとしてもしない。久々の地を懐かしもうという気は一切ない

ようだ。

外に出ると、依子が折りたたみ式の日傘を広げた。

縁にレースの入った白い日傘。高校の制服姿とはアンバランス。この町で暮らしていたとは思えないほどの日差し対策っぷりだ。

海で砂遊びでもしたい気分だったが、あいにく目的地は山側にある。そこには寺があり、俺たちはそこで墓参りをすることにしていた。

町には市場通りがある。

漁業が盛んな町なのか、商売の中心は魚貝類だった。果物や野菜などもそこそこに売り出されている。炎天下のもと、精力的に飛び交う売り文句を聞き流し、のろのろと歩きながら通りの様子を見物する。

通りを抜けると、そこからはささやかな住宅地帯になっていた。ここから上り坂に入っていく。

どこからか、下手くそなギターの音色が聞こえた。すると何故か、依子が俺の背中に隠れた。

音のする方を見る。そこには空き地があり、その入り口付近で、中学生くらいの男子がパイプ椅子に足を組んで座り、ギターを弾き鳴らしていた。やり過ぎなくらい切り詰めた短髪。健康的な小麦肌。将来、海の男にでもなりそうな風貌だ。

彼の前には手作りらしき木製の台が置かれていた。その上には白梨の入った袋がいくつかと、梨の値段表らしき紙が張り付けてあった。

男子が演奏を止め、じろりとこちらを見た。依子がさらに俺の後ろに隠れる。

彼は空色のTシャツの裾を肩までまくり、ギターを持ち直した。

「お兄ちゃん、演奏聞いてけ。後ろのお姉ちゃんも」

江戸っ子みたいな喋り方。こちらの返事を待たず、男子が演奏を

始めた。演奏はやっぱり酷かった。でたらめに弾いてるとしか思えないし、ずっと聞いていると精神崩壊を招きそうな旋律だった。イントロが終わると、これまた耳が痛い感じの声で歌詞を乗せてくる。うわべばかりをなでまわされて―。

なんか聞いたことある歌詞だなあ、と思ってよくよく聞いてみると、ミスチルだった。知ってる曲なのに歌詞に入ってやっと気づいた。ギターも歌声も音外しまくり。

いーまぼくのいるばしょがー。

やっとサビに入った。どうしよう帰りたい。だが聴き始めてしまったものは仕方なく、曲が終わるまで直立不動の無表情で待機する。やがて演奏を終えた男子中学生は、自信満々な笑みを浮かべた。白梨の袋を取り、ずいっと差し出してくる。

「梨五個入り。演奏料込みで二千円だ」

「行くぞ依子」

依子の背中を押して早歩きで進む。

「あつ、せめて演奏料払ってけやドロボー！」

無視して進む。後ろを流し見ると、男子がギターを椅子に降ろし、全力で俺たちを追いかけてきた。恐ろしくなつて俺たちも足を早める。

「ていうか待つて、平野先輩じゃないの！ おい止まれーっ！」

はっとして足を止める。依子は俺を待たず、さっさと走っていく。

男子が俺の隣で立ち止まった。膝に手をついて息を吐き、去っていく依子の背中を上目遣いで見上げた。

「お兄ちゃん、平野先輩のなんなの。彼氏？」

「いとこ」

「そっか。どこことなく似てるもんな」

俺と依子が似てるだなんて、何気に言われたの初めてかも。

依子は民家の角を曲がり、姿を眩ませた。そうだ、俺は寺の場所を知らない。今すぐ追いかければ。

走り出そうとすると、すぐに男子から引き留められる。

「待てお兄ちゃん。アンタら、ここに何しに来た」

「墓参りだよ。あいつの友達の」、「逡巡し、曖昧にぼやかして答える。「いや、色々と事情があつて」

すると、男子が真剣な目をした。

「オレの姉貴の墓だろ」

俺は戸惑い、依子の去つた場所から、完全に彼へと目を向けた。

男子中学生は確信めいた口調で言う。

「答えなくても分かる。この近くに姉貴の墓があるんだ。わざわざ先輩が訪ねてくるつてことは、それしかないだろ」

男子は少し悩むようにして頭を掻き、続けて尋ねる。

「いつまでここに居る？」

「明日には帰るけど」

「そうか。じゃあ今日の夜、またここに来い。渡したいものがある。年下のはずなのに、かなり高圧的に命令してくる。しかも夜に来いって。またいい加減な。」

「何時ごろに来りゃいいの」

「いつでもいい。オレは夜明けまであそこに居る。とにかく来い」

男子は一度、依子の行つた方を睨む。そちらを指さし、「寺はそのこの角を曲がつて、道なりに行けば見えてくる」と言つて、先ほどの空き地入り口付近へと歩いていく。

「オレは趣味に戻るけど、お兄ちゃん、絶対来いよ」

男子は念を押して言った。つか、あれ趣味だったんだ。

シーサーライターで煙草に火を着けると、突如鳴り出す沖縄伝統曲に、男子がぎょつとして振り返る。煙草を吸う俺にも若干引いていた。しかし結局何も言わず、彼はギターのもとへと静かに歩み寄つていった。

寺の敷地内に入る。

狭い敷地の中、依子はすぐに見つかった。彼女はある墓の前で腰

を屈め、じつと手を合わせていた。近づくと、供えられた線香の匂いが鼻孔をついた。

寒いほど人の気配は感じられない。ちょうどお盆だし、墓参りも正装がいいかなと思って制服で来たけれど、住職の姿すら見当たらないと虚しいものだった。

依子の隣に屈み、俺も線香を立てる。墓石には『花田家の墓』と刻まれていた。

蝉が喚く。依子と同じように手を合わせ、目をつむっても、その喚きが耳に張り付いて離れない。蝉が俺たちを追い出そうと躍りになっっているように思えた。

合掌を解き、目を閉じる依子の横顔を見る。頬の筋肉一つ動かさず、依子はその体勢で固まっていた。心の中で、懸命に声をかけているのかもしれない。あの子がちゃんと依子の謝罪を聞いてくれているのか、それだけが心配だった。

潮風がやってきて、辺りの木々を揺らす。いったん鳴き止んだ蝉も、また数秒後に呻き始めた。

依子は動かない。もしかしたら、こんな事のためにこの町に来て、なんの意味もなかったのかもしれない。死人に口無し。何をどう足掻いても、依子は二度とあの子の声を聞けない。怨恨も、赦免も、依子には一切届かない。

「ゆるしてもらえない」  
依子が囁く。

「あたしには、あの子の、怒った顔しか見えない」

依子が瞼を開け、立ち上がる。蝉がいつそう喚きを強めた。

「あの子の弟からも逃げた。ゆるされないことが怖かった。だからあの子も、まだ怒ってる」

俺は腰を上げ、黙って寺の出口へと向かう。背後で、依子が折り日傘を開く音がした。俺の後ろを着いて歩く、依子の足音を耳にする。

「明日も来るか」



見えないけど、依子は多分うなずいた。

民宿まで続く坂を下りながら、空と海とを隔てる水平線を見つめた。

どちらも、俺たちの住む町では決して見られないほど濃い青をしていた。空は吸い込まれそうなほど幻想的に着色され、海は波がうねる度に色を変え、防波堤に当たって白い飛沫をあげる。どちらも濃厚なのに、絶対に混じり合うことのない青同士。俺たちが水平線を見分けられるのは、空と海のそれぞれが、己の存在を示そうとせめぎ合っているからなのか。

それとも、片方に拒絶されてしまったのだとしたら。片方が歩み寄ろうとしても、もう片方が頑なに拒んでいるのかもしれない。

離れずに繋がっていてほしい。水平線なんて見分けたくない、とふと思った。

民宿には、宿泊客用の風呂すらないという。その代わり、民宿のすぐそばに銭湯があると聞き、さっそく俺たちはそこへ向かった。

サンダル履きで、お互い寝間着姿のまま暗い道を歩く。街灯などあるはずもなく、平塚さんから渡された懐中電灯で夜道を照らす。依子は紺のパジャマで、俺は黒のスウェット。遠くから見れば、二人とも闇に溶けて、頭と手足だけで動いているように見えそうだ。怖いな。

銭湯から戻り、民宿二階の部屋に入る。

依子が露骨に布団を離したので、頭にきた俺も壁際まで布団を遠ざける。今までそんな素振りなんか見せなかったはずなのに、どうも信用されていない。

依子は基本的に自分から挨拶をしない。俺からでなければ、おやすみも言ってくれないのだ。お互い無言で布団に入った。

寝たふりをして、布団の中で携帯をいじって待つ。約一時間後、

携帯の充電残量が一本になったところで、おもむろに布団から起きあがる。そろそろ男子中学生の所へ行かなければ。

忍び足で近づき、依子の寝顔を確認。目と口を自然に閉じ、寝顔までいつもの能面だった。それにしても、よく出来た顔だなと改めて思う。さすがにモテていただけはある。本当に俺のいところ？ なんて言ったら、親父と道子叔母さんの似てなさ具合の方がすごい。

まじまじと観察していると、突如、依子がぱつと目を開けた。普通に起きてた。枕に頭をつけたまま、死ぬほど驚いた俺を見上げる。「さつきから、なに」

「いや、寝たかなと思って」

「ねてない」

「そつみたいだな」

俺は咳払いをする真似をして、必死で言い訳を考える。依子の刺すような痛い視線を我慢して、俺はやつとの思いで口を開いた。

「眠れないから散歩でもしようかなって。でもお前のご起こしたくないじゃん？ だからちょっと確認してただけなの。分かる？

お前が想像してるようなことじゃないからね」

なにこの言い訳。これじゃ余計に怪しまれる。

「わかった。はやく散歩いけ」

やつぱり怪しまれてるし、キレてるときの口調だった。俺は「いやマジだからマジ。お前なんかに興味ねえんだよバーカ」と、さらに疑われるような駄目押し文句を残して早々に部屋を飛び出した。

地味に傷心した俺は海沿いの夜道を散策し、波の音で心を癒した。真っ黒でどろどろな海を眺めていると、だんだん気持ちが落ち着いてきたので、改めて市場通りに向かった。

通りを抜けると、約束通り、空き地の入り口には男子中学生が居た。昼間のように白梨の台はなかったが、彼はパイプ椅子に腰掛けてアコースティックギターを弾いていた。

男子中学生に近寄るが、彼は演奏を止めない。弾くのはやっぱりミスチルで、曲は旅立ちの唄だった。うるさいしイライラするし、煙草でも吸って待とう。

『イヤーササー、ハーイヤ』

こつちもうるさい。

「おい深夜だぞ。そのライター、近所迷惑だから」

早口で注意して、歌に戻る男子中学生。お前の騒音ギターのが近所迷惑だよ、と言いたかったけど止めておいた。引くくらい下手なので逆に突っ込めない。

演奏が終了すると、彼は椅子の下に置いたペットボトルの水を取り、少し傾けて口を潤した。

やっと用件とやらが始まるな、と思ったら、男子中学生は二曲目を弾きだした。今度は何の曲なのか本気で分からなかったけど、よく聞くとバンクだった。しかもラフメイカー。鼓膜破れそう。

結局彼が口を開いたのは五曲目のあと、スピッツのおっぱいを歌い終えてからだだった。

きみのおっぱいはせかいいちー。

コードの残響が鳴り止む。男子中学生は息を吐き、満足そうに笑った。

「よく来たな、お兄ちゃん。今度こそ演奏料払え」

「嫌だ。つか、おっぱいが締めつてどうなの？」

男子中学生は俺の切実な疑問を無視し、傍らに置いたギターケースから一枚の封筒を取り出した。

「姉貴が、死に際に平野先輩に宛てて書いた手紙だ」

煙草を口に挟み、それを受け取る。封筒には何も書かれておらず、真っ白な紙の端に、小さくミッキーマウスが描かれていた。

「平野先輩、反省してんだろ」

「多分な」

「じゃあ、これも先輩に伝えとけ。姉貴が許しても俺は許さない、つてな」

男子中学生は立ち上がり、俺の胸を小突いた。イラツときたが、俺は黙つて封筒に目を落とした。

姉貴が許しても、俺は許さない。

この手紙に書かれた内容への暗示だろうか。だとすれば、これはいつ依子に渡せばいいのだろう。

「その手紙は、帰りの新幹線ででも渡してくれ。ここに居るあいだで読まれるのは、なんとなく嫌だからな」

俺は顔を上げた。

「明日、また会えるか。依子はさ、本当はお前にも謝っておきたいはずなんだよ。昼間に依子が逃げたのは、まだ心の準備が出来ていなかったっただけで」

「いいよ。オレなんかに謝らなくても」

男子中学生は再びパイプ椅子に着き、弦全体を掻き鳴らす。

「オレ、一応先輩には感謝してんだよ。中学で世話になつたからな。特に、生徒会なんかでは」

手をぶらんと下げ、彼は寂しそうな目をした。

「平野先輩、なんか変わったな」

俺は相づちをして、彼を見下ろす。

「昔の先輩だったら、絶対反省なんかしないのに。叩いたら叩きっぱなしで、いじめたらいじめっぱなしで。明るくて、傲慢で、乱暴で」

「そういうやつだったからな、昔は」

「あのさぁお兄ちゃん。オレさ、本当は」

男子は眉根を寄せ、一度だけ口ごもる。

「平野先輩には、姉貴の墓参りになんか来て欲しくなかった。一生、反省なんてしてほしくなかった。ずっと恨んでいたかった。先輩に反省されたら、オレ、」

彼は口を閉じ、顔をそむける。声の震えを必死で抑えようとしていた。

「もう、どうしたらいいか分かんないよ」

俺は彼の頭に手を置く。海辺育ちだけあって、髪質がざらりとしていた。

「もう一回聞くけど、明日も会えないか」

「やだね」

「ばっさりと断られた。諦めて手を離し、封筒を手に歩き出す。」

「じゃあ、来年もまたここに来るよ」

「おう、来てくれ。むしろ毎年来い。毎年罪を悔い改めさせてやれ。絶対来い」

絶対来い、がこいつの口癖なのか。男子中学生は顔を逸らし続けており、俺も見ないようにして通り過ぎる。

湿気を感じられず、さらっと乾いた風も気持ちが良い。足がもつれそうなくらい急な下り坂。平行感覚を確かめ、しっかりとした足取りで進んでいく。

「来年も、絶対来いよ！」

男子中学生の声を背中に受けながら。

民宿に戻る。部屋に入ると、依子が布団ごと居なくなっていた。しかし、なんとなく予測していた事態なので、俺は特に心配せず、布団に入っすすみやかに眠りに落ちた。

そして翌朝。

昨晚の予想通り、依子が寝ぼけ眼で押入れから出てきた。ドラえもんかよ。

せつかくの港町なんだから海で遊んでえんだけど、と俺は駄々をこねた。

なので、民宿の平塚お爺さんから釣り道具一式と餌を借り、朝っぱらから依子と二人で防波堤の上に座り込んで釣り糸を垂らしつつ、東方向斜め五度くらいに位置する朝日を拝みながらウキの反応を待っていたのだが、わずか三十分ほどで依子が「釣れない」と言っただけで竿をほっぽり出した。

「付き合いわりーなおい」

爽快と去っていく依子の背中に嫌みを飛ばしてみたが、何も返してくれなかった。

というわけで、一人つきりで早朝の海辺をやり過ごすことに。八月らしくない海の冷気と塩気にやられ、瞼と鼻の奥がつんとして涙が出そうだった。別に依子に冷たくされたからとか、決してそんなセンチメンタルな理由からではない。

と思つたら、依子が文庫本と日傘を手に舞い戻ってきた。俺の隣に腰掛け、文庫本を開いて日傘を頭上で構える。終始、言葉を発さず黙々と。

それでも俺はなんだか温かい気持ちになって、優しく清らかな気分にもなつて、昨晚俺を完全に拒絶して押入れに立てこもられたことも記憶の彼方に飛んでしまつて、心なしかテンションを取り戻した俺は気分上々で依子に話しかけまくつた。

「今日もいい具合に晴れそうだなあ」とどうでもいいことを言ってみたり、「お前最近髪切った?」とタモさんみたいなことを訊いてみたり、「うわ全然釣れねえ。なあ依子、俺魚にモテなさ過ぎじゃね?」とヘラヘラしながら尋ねてみたり、とにかくここ数ヶ月で俺が最も饒舌になれた瞬間だったんだけど、依子は結局一言たりとも返事をしてくれず、どころか徐々に不機嫌オーラを発散していき、

挙げ句の果てに「だまれ」と暴言を吐き捨てて民宿に戻っていった。結局、魚は一匹も釣れなかった。

朝九時、民宿で朝飯を食べる。

平塚さんの奥さんが作ったという海の幸料理が部屋に運ばれてきた。奥さんの世間話を聞きながら朝食に舌鼓みを打つ。

美味しいことこの上ないのだが、この旅行に来てからというもの、一切肉類を食べていない。美味しいのに物足りなく感じてしまうのは、俺はとことん育ち盛りだからに違いない。

今日の予定は観光と、そしてもう一度、墓参りに行ってから帰ることにする。

制服に着替えてから部屋で一息。すると、俺の携帯に浅海さんから着信があった。通話ボタンを押し、いつもの寝起きっぽい彼の声を聞く。

「よう純一。いとちゃんとのラブラブ小旅行はどーよ。ミッチーも心配してたよ。ちゃんとあの子たちラブラブしてんのかしらねー、つってな。ははは。冗談冗談」

いきなりすごい勢いで冷やかされた。テンションたけえ。ちなみにミッチーとは道子叔母さんのことだ。

「ラブラブって、浅海さんたちと一緒にしないでくんない」お返しに浅海さんと吉岡のことを揶揄しておく。「で、なんの用すか」

「いや、お前いつ帰ってくんのかなって。駅から家まで送ってやるよ」

他人に興味なさそうな雰囲気出して、浅海さんはいつも面倒見がいい。流石に吉岡から気に入られるだけはある。

「わざわざそんな面倒な事までしなくても。ていうか、本当は何か他に用事があるんじゃないの」

「えー、なんでそんな細かく突っ込んでくるかなあ」

浅海さんは少し悩むように小休止を入れて、

「あ、そうだ。俺の分の沖縄土産まだあげてねーんだった。それやるついでに帰り送ってやるってことで」

今考えました、みたいな理由をつけてきた。釈然としないものの、送ってくれるのはありがたいので、明日帰ってくる時間帯を伝えてお礼を言った。

電話を終え、後ろを見ると、依子が早くも出掛ける準備を始めていた。準備とはつまり身だしなみのセットで、しかも今日は土曜日なので、依子は髪をパイナップルに結わえようとしていた。たとえ旅行先とはいえど、土曜パイナップルは依子の中で確固たるマイルールとなっっているようだった。

携帯でこっそりパイナップルを撮影した。

朝っぱらからモチベーション上がりまくりな俺は依子を置いていく勢いで砂浜に直行し、砂のお城を作り、依子をビーチボールに誘って断られ、町をだらだらと歩き、お土産を買いあさり、それから一度、民宿に戻って昼寝をした。

起きると、午後三時を過ぎていた。

依子が不機嫌だった。

寝起きで気分が落ち着いてきた俺は、依子の様子にひどく反省してしまった。いくら名目上が旅行だからといって、今朝から舞い上がり過ぎたかもしれない。

「ごめん。なんか俺、無神経だったな」

茶木製のテーブルを挟み、依子と座椅子で向かい合って座る。部屋の雰囲気は一気に重くなっていった。依子は湯呑みを細かく傾け、さらに細かな動作で首を振った。

「あたしも、暗すぎたかもしれない。せつかく、純につれてきてもらったのに」

依子から気遣いの言葉をかけられるのは、実は俺にとって結構辛いことだった。俺と依子は基本的にお互いに無関心で、行動するに



してもどちらかがどちらかを振り回すだけのような、かなりがさつな間柄だったはずだ。依子に謝られたり気遣われたりしたら、俺は途端に何も言えなくなる。多分、依子も同じような心境なのだろう。俺は、部屋の隅に置かれた自分のバツクパツクを見る。あの荷物には、昨日男子中学生から渡された手紙が入っている。男子中学生との約束通り、依子にはこの町を出てから渡すつもりだ。

正面から依子の声が聞こえる。

「パパのことか、吉岡さんとか、原村先輩たちと、色々あったから、純はあたしを元気づけようとしているんだよね」

「そういつの、わざわざ言わなくていいよ」

「いつも暗くて、ごめんなさい」

「だから……」

黒のバツクパツクを見つめたまま言葉が詰まる。本当にこいつらしくない台詞ばかりだ。返すべき言葉を迷って閉口していると、依子が膝を立てて移動し、俺の視界に入ってきた。

「ほんとうに、いつもありがとう」

しかも、やたらと熱のこもった声で。表情がないのが非常に惜しいけど。

「お前らしくないよ。なんなの、さつきから」

「ごめんなさいと、ありがとって、純にはいつも、ちゃんと言えなかった気がしたから」

この瞬間、やはり依子のキャラは崩壊していた。何か言いにくそうに口を開け閉めして、ぎこちのない声色で言う。

「身近なひとにさえ言えないままなのに、遠くはなれたひとに、ちゃんと伝えられるはずがないとおもったから」

視線を突き合わせたまま互いに硬直する。よく分からんけど、俺はえらい勢いで感動していた。泣けるってほどじゃないけど、何故だろう、極悪人がたまに見せる優しさに心動かされる現象に似てるなあ、とは思った。

こんな依子もたまにはいいかもしれない、そう思い始める。いや、

ずっとこんななんだつたら付き合いくいけど。

「そろそろ墓参り行くか」

この湿っぽいような空気に終止符を打つべく、俺は出来るだけ明るく笑ってみせた。

町を歩き回って花屋を見つけた。ちゃんと墓花を供えたい、と依子が強く希望したのだ。

「かわいらしくしてください」

依子がそうお願いすると、花屋の兄ちゃんが威勢の良い返事をして、てきぱきと花を見繕ってくれた。カーネーション、白菊、黄菊など。ピンクと白と黄色が主で、なかなか鮮やかにまとまっている。こつこつのはあんまり詳しくないけれど、素人目にはいい腕してると思う。

寺の敷地に入り、住職に掃除用具を借りて墓周辺を掃除する。もともと、花田家の墓石には苔のひとつも生えていなかった。全体的に汚れが少ないのは、遺族が頻繁に訪れているからだろうか。

手桶で水をかける。じゅう、と鉄板のお好み焼きみたいな音がして、かすかに石から湯気が立つのが見えた。

「ちよーすずしい」

墓石が喋った、とありもしないことを妄想してみる。普通に考えれば隣から。依子って、ちよーとか言えるんだな。びっくりするからやめてほしい。

墓花と線香を供えて、昨日と同じように並んで合掌。

しばらくして目を開く。依子の希望通りに可愛らしく生けられた花たちが、墓前を控えめに彩っていた。依子の息遣いが少し荒くなつたのに気づいて、俺は静かに声をかける。

「そういえばさ、さっきのあれ。ありがとうとか、ごめんとか、俺に言ってきたやつ。実は俺、結構ビビってたからね。お前もかなり勇氣出したんじゃないの」

「うん」

「頭悪い俺にだって伝わったんだしさ。もしお前の友達が許してくれなくたって、依子が謝ってんのは、ちゃんと伝わったはずだから」  
「うん」

「だから、もう泣かなくていいよ」  
透き通るような夏空の下。波音も、うみねこの鳴き声も、こんなところにまで届く。今日は蝉もおとなしい。

依子はもう何も言わず、手を合わせたまま顔を下に傾ける。瞼の間からこぼれるものが光を通して刹那に瞬き、濁いた地面に浸った。ふと、依子の隣に、一人の女性が腰をおろす。年齢は二十代にも三十代にも見える。もしかしたら四十代かもしれない。涼しげな水色のキャミソール風ワンピースの上に、白のレース編みカーディガンを羽織っている。一つにまとめた三つ編みを片胸の前に流していて、その横顔は、誰かに似ていた。

鍋島由多加。しかし、実際は鍋島の姉でも、母親でもないだろう。雰囲気似ているだけだ。

そうか、と心の中で納得して、俺は墓石に目を向ける。そのとき、女性がささやきかけた。

「依子ちゃんが来てくれて、夏菜も喜んでると思います」

依子は目を閉じ、うつむいたまま下唇をかんだ。

その女性は首を傾げ、依子を挟んだ先から俺を覗き込む。

「花田恵美です。あなたは、依子ちゃんのお親戚さんだそうですね。今朝、息子から聞きました」

柔らかく丁寧な言葉遣いに俺は柄にもなく恐縮し、小さく会釈をする。

彼女は、あの子 花田夏菜と昨日の男子中学生の母親だという。そうすると、彼女の年齢は四十前後ぐらいのはずだけど、外見は二十代で時を止めたかのような若々しさがあつた。それとは逆に、落ち着いた雰囲気と話し方だけは実年齢に見合っているのだろう。

「ご旅行はどうでした？ 本当に何も無い田舎町ですけど」

「いや、俺はいい町だなんて思いました。変に喧しくないし、波の音とか、虫や動物の鳴き声聞いているだけで心が和むっていうか」

「あら、まだお若いのに。お爺さんみたいこと言いますね」

花田さんが口元に手を当ててやけにお上品に笑うので、俺は上手く笑い返すことが出来ず、不格好なはにかみ笑いで顔を逸らした。なんかやりにくい。鍋島と初対面で挨拶をしたときもこれに近い感じだったような。今でこそ憎まれ口だって言い合えるようになってはいるけど。

母親ですらここまで似てるんだ。依子が今まで、鍋島を花田夏菜に重ねて必死になっていたのも分かる。

「夏菜が死んで、もう半年も経つんですね」

花田さんは膝を抱いて墓石を見上げながら、世間話でもするように言った。

「あの子は幸せです。なかなか友達も出来なかつたし、悩みの多い子でしたけど、こうして依子ちゃんや親戚さんにお墓参りに来てもらえて」

花田さんは依子の横顔へと微笑みかける。依子はずっと、手を合

わせて目を閉じていた。涙が止まり、その代わりに、額に汗の玉がにじんでいた。

依子に向けられる笑みには皮肉も敵意もない。花田さんは純粹に、感謝と敬意を込めていた。

「ありがとうね、依子ちゃん。こんな素敵なお花までお供えしてくださって」

依子が強く唇を噛み、小さく首を振る。

「ありがとうだなんて、やめてください」

言うと、依子は片膝をつき、パイナップルの髪を揺らしながら花田さんを見た。傾いた両肩が頼りなく上下する。

「ゆるさないでください。あなたは、全部しってるはずですよ。あたしをゆるさないでください」

花田さんは驚いたような顔をした。唇をぴたりと閉じ、斜め下を見下ろす。

俺はそれを静観しつつ、軽く足元に力を入れた。万が一依子に手を出すようなら止めるつもりだった。

やがて、花田さんは無理に口元だけで笑う。

「もういいですから。そのお気持ちだけで充分です。そうやって悔やんでいただけのだけで、私は充分ですから」

「そんな駄目です。お墓参りにきたぐらいで、簡単にゆるさないでください」

「反省した人にそんなことは出来ません。ねえ依子ちゃん。お願いですから、もうそんなこと」

依子が息を荒くして花田さんに詰め寄った。

「ぶったり、蹴ったりしてください。だってあたしは、夏菜ちゃんをいじめて……」

嗚咽に続きが遮られ、罪悪感に苛まれた依子の背中が揺れる。過呼吸のように吐き出される息の中に、細かく刻んだ言葉が漏れていく。

「あたしのせいだから、こんなの、絶対おかしいから、だって、だ

つてあたしが……」

「お願いですから、聞いてください」

花田さんが慈しむように依子の手を握る。依子は怯え、取られた手も一瞬震えるが、徐々に彼女の掌の中にゆだねられていく。

「自分のせいだなんて、もう思わないでください。あなたと私は同じなんです」

もう依子は何も言い返さず、黙って握られた手を見つめた。

「あのときああしていればよかったとか、こう言えば誰も傷つけなかったとか、どうすれば助けられたとか、そう思う気持ちはみんな一緒なんです。なのにみんな、終わってしまったてから気づくんですよ。私も、あなたと同じだけ夏菜を傷つけたし、助けてあげられなかったし、あの子の気持ちに気づいてあげられなかった。だとすれば今、夏菜に対して後悔する気持ちは、私も依子ちゃんも同じじゃないですか」

依子の右手の上に、もう一つの手が重なる。重ねた手が依子の右手を丁寧に撫でた。

「だから、あなたがそうやって悔やんでくれるだけで、私は満足です。それに、あなたを許すのは私ではなく夏菜です。でもあの子、もう話せないでしょう？ 依子ちゃんがいくら求めたって、夏菜はもう戻ってこないでしょう。それでも、どうしても後悔が抑えられなくなったら」

依子の右手が持ち上がる。花田さんの両手にぎゅっと包まれると、依子がかすかに顔をあげた。

「自分のことと、周りの人たちのこと、もつと大切にしてください。今、夏菜に対して込めた気持ちと同じくらい、自分と誰かのことを想ってあげてください。私がお願い出来るのは、それだけです。だから、依子はうなずく。花田さんの手を握り返し、依子は小声で、たいせつにします、ともう一度うなずいた。

花田さんが俺にも微笑みかける。

「あなたも、依子ちゃんのことを大切にしてくださいね。優

しそうな人だから、大丈夫だとは思いますが」

「優しそう……」

恐いつてのは一日一回くらい言われるけど、優しそうは言われ慣れていない。感激を通り越して恥ずかしい。

「頑張ります」

俺は照れ笑いでそう答えた。

そのあと、改めて三人で墓石に拝みなおした。蝉を押し退け、しだいにひぐらしの音が辺りを包み始める。目を閉じ、耳を傾けてそれを聴く。その音色は、いつか依子と神社に行ったときのものとよく似ていた。依子が俺を許してくれたとき、俺はこれに癒された。きつと依子も、あのときの俺と同じように、このひぐらしの音に癒されるのだろう。

民宿で荷物を受け取り、平塚夫妻にお礼を言って町を出る。坂を何度も曲がって上り、国道の先に沈んでいく夕日を目指す。

振り返ると、薄暗い空と海が見えた。境界線が曖昧になり、それらのボーダーはもう見分けられない。

バス停に着くと、一台の自転車がバス停小屋の前に停まっていた。そして、聞き覚えのある下手くそなギター音が孤独に飛び交っていた。

小屋の中を覗く。やはりあの男子中学生だった。持参したらしいパイプ椅子に腰掛け、俺たちの到着と同時に弾く手を止める。浅黒い顔面に爽やかな笑みを浮かべ、俺たちに向けて軽く手を上げた。

「なにしてんだよ」

「見送りにきた。ずいぶん遅かったな」

遅かったもなにも、こいつには帰る時間なんて教えていないはずだ。いつから待ってたんだろう。ていうか、もう来年まで俺らには会わないんじゃないのか。

依子は半分、俺の後ろに隠れていたが、もう逃げるような素振り

は見せなかった。

「バスが来るまで、オレ渾身の一曲を聴かせてやるよ」

「遠慮しとく」

「よっしゃ、まずはそのベンチに座んな」

聞いてないよこの人。俺たちは黙ってバス停小屋奥の木製ベンチに腰掛ける。男子中学生がベンチのはす向かいにパイプ椅子を置き、その上で足を組んでギターを持ち直した。

ピックを構えたところで、彼は思い出したように手を止める。

「そっだお兄ちゃん。あの手紙、今渡していいぜ」

そう言われて、俺はとつさに膝に抱えたバックパックに目を落としました。躊躇し、男子中学生を見返す。

「もういいのかよ」

「おう。オレの歌聴きながら読んだ方が、雰囲気出るだろ」

「どんだけ自意識過剰なんだ。」

しかし、俺としてはいつ渡しても問題はないので、バックパックの外ファスナーを開き、ミッキーマウスの封筒を取り出した。一人だけ話についてこれない依子は首を傾げるばかりだった。

「花田夏菜が最後に、お前に宛てて書いた手紙らしいよ」

依子に手渡す。自分の手にこじんまりと収まる封筒を前に、依子は固まった。

「平野先輩、今読んでやってくれ」

言うやいなや、男子中学生が弦を鳴らし始めた。意外なことに、その音は今までと違い、迷いなく軽やかに弾かれるものだった。すると男子中学生は、聞いてて恥ずかしくなるくらい気障な口調で言う。

「we are the world。世界平和を謳った超有名な一曲だ。ぶつちやけこれ、オレが一番練習した曲だからな」

彼は歌い始める。しかも結構まともに、英語の発音もしっかりしていた。俺は依子に目で合図をする。依子は躊躇いがちにうなずき、封筒を開けた。



中から出したのは、三枚の真っ白な便箋だった。依子はそれを手に、瞼を閉じて息を吐く。俺は便せんの内容を見ないようにして、そっと男子中学生へと顔を向けた。依子と花田夏菜の二人きりの時間を、これ以上邪魔しないように。

男子中学生は目を閉じて歌う。弾き慣れた弦を今一度確かめるように弾き、世界平和を歌った。

曲が終わり、男子中学生は疲れて頭をうなだれる。隣を見ると、依子が前を見据えていた。丁寧に折りたたんだ便箋を膝の上に添え、国道の先の暗い雑木林を見つめる。涙の伝ったあとが頬に残っていたが、依子は静かにベンチの上で佇んでいた。泣き声が聞こえてこなかったのは、曲を邪魔しなためだったのだろうか。

「上手だった」

依子が言うと、男子中学生は朗らかな笑みを見せる。そして彼はギターを降ろし、居住まいを正した。

「卒業のときにした告白の返事、今聞きたい」

彼はよく届くような声に氣勢を入れ、依子と正対した。まばたきもせず、依子の返答を待つ。

依子が腰を浮かし、ベンチ上で斜めに座った。彼女も男子中学生を真正面に捉える。俺が視界に入ってちよつと邪魔かもしれない。

ここは空気を読んで退くべきかなと考えあぐねているうちに、依子が口を開いた。

「ごめんなさい」

依子が流れるような所作で頭を下げた。下げたまま彼女は言う。

「でも、とても大切な後輩です」

一言一句を丁寧言い切り、依子は顔を上げる。遠くからバスの走行音が聞こえた。

男子中学生は脱力したように頬を緩めた。身体の中のものを全てを出すかのようなため息を吐き、膝の上で両手を組む。

「よかった。ちゃんとフラれて」

「よかったって。変なやつだな、フラれたのに」

空気が和らいだのを見計らって、俺は男子中学生をからかう。男子中学生は、こっちまで力が抜けてしまいそうな声で笑った。

「いや、オレって今、付き合ってるやつがいるんだけどさ」  
くそが。

「彼女のこと好きはずなんだけど、先輩のこと、ずっと忘れらんなかったんだ。でも、やっと吹っ切れた」

男子中学生は頭の上で手を組み、小屋の屋根の合間から、すっかり暗くなつた空を見上げた。つられて、俺もそちらを見る。星の大群がくつきりと闇夜に浮き出ている、俺は純粹に、綺麗だと思った。「おかしいよな。平野先輩のこと恨んでたはずなのに、それと同じくらい、オレは先輩のことが好きだったんだ」

バスが到着する。車体が星空を隠し、アイドリング音が静寂を破る。

荷物を手に、俺たちはベンチを立った。それと合わせるように、男子中学生がギターの腹を太ももに置いた。

「ありがとな。来年も絶対来るから」

俺のかけた別れの言葉は、ギターの音色によって返された。

「あの手紙、なんて書かれてた？」

バスの車内、他に客が居ないのいいことに、俺はそう尋ねる。

俺たちは、後ろから三つめの二人用の座席に座っていた。窓際に座る依子は前方を見つめたまま戸惑う。戸惑うとってもかなり微妙な仕草で、開きかけた口を閉じ、もう一度開けて、その状態でぼんやりするだけだった。その顔がおかしくて仕方がなかったが、真剣な質問をした手前、俺も茶化すことは出来なかった。

「いろんなこと、書かれてた」

大ざっぱ過ぎて何一つ情報を得られない。

「色んなこと？」

「いろんなこと」

依子はそれつきり口を閉ざす。俺もそれ以上尋ねるのは止めておいた。依子だって、言いたくないことくらいあるのだろう。

肩に重みが掛かる。見ると、依子の頭が俺の右肩に乗っていた。パイナップルヘアーのへた部分が頬をくすぐってくる。

「どうしたの」

反応がない。気絶したのかとちょっと焦ったが、荒く吐かれる彼女の吐息がそれを否定した。そんな息遣いのまま、依子が言う。

「いじめられるのは嫌だったけど、大切な、友達だったって」

潤んだ声に胸が痛くなる。依子が俺の服を掴む。顔を胸元に埋めてきて、半ば無理矢理に言葉を発した。

「嫌いだったけど、それ以上に、大好きでしたって……」

依子の右肩を軽く叩くと、彼女は声も無く泣き始めた。そのまま肩を撫で下ろす。

「あたしも、あの子のこと、本当は大好きだったはずなのに……」

依子が涙もろくなった、とは何度も思ったけど、こればかりは仕方ない。ていうか俺も結構泣くし。

依子も、花田夏菜も、男子中学生も、あの母親も、こうして相反し合うジレンマに頭を悩ませ葛藤する。

もし花田夏菜が自殺なんかしなければ、依子とやり直せていたのだろうか。きっと出来たはずだ。でも、今そんなことを考えても誰も救われない。

あのときああしていれば、こう言っていれば、もっと考えていれば、たしかに後悔も必要だけど、それより、これからのことをもっと大切にしてほしい。それが花田恵美さんなりの許しだったんだと思う。

「若いねー」

バスの運転士が車内マイクで空気の読めないことを言ってきた。俺たち、バックミラーで丸見えらしい。

依子はそれでも俺の胸から離れない。だから俺も動くわけにはいかないんだけど、これじゃ普通にカップルに見える。心臓の方も無駄に高鳴ってきた。

俺はもう言い訳する気力も沸いてこず、えへへうちの連れがお恥ずかしい、みたいな愛想笑いをミラー越しの運転士にしてみせた。

『おじさんも君たちみたいな時代があつてね。いや、ほんと凄かったんだからね？ そりゃもう紆余曲折の波瀾万丈な純愛活劇つてやつでさあ』

そこから四十分、運転士のどうでもいい武勇伝を聞かされた。いや、でもちよつと面白かった。

chapter 50 - 海辺の町(下) - (後書き)

海辺の町編は終了です。次回より最終章?みたいなものに入ります。

新幹線で静岡から出ると、電車で地元駅まで寄り道なしで直行した。駅に到着し、北口広場に設けられた時計台を見上げる。もう夜の九時を回っていた。

ここで、浅海さんからの着信。

「南口から二百メートルちょい歩くとローソンがあるっしょ。そこに車停めてるから。シルバーのセダンね」

とのことらしい。何の目的があつて俺たちを送ってくれるのかは知らないが、時間も時間だし、ここは甘えさせてもらおう。もしかしたら飯にでも誘われるのかもしれない。もし奢られそうになつたらちゃんと断らなきゃな。

駅のコンコースを通つて南口に出る。北口側はそれなりに店舗で栄えているが、南口からだど、風景のほとんどが一般家屋で占められている。

バスロータリーを横切り、路地に入る。依子は俺の半歩後ろ、振り返ればすぐの位置を歩いていた。

目が合うと、依子は口を開いた。

「たよつてる」

主語抜きでそんなことを言ってくる。

「なにが？」

「あたしは、純のことをたよつてる」

今日の昼間といい、依子はこここのところ、言われるこっちが恥ずかしくなるような台詞を平気で吐いてくる。しかも、依子にしては口数の多い一日だった。これも進歩なのだろうか。それとも、それだけ必死こいてまで伝えたいことがあつたのか。

「あ、そう」

せっかく依子が頑張つて言ってくれたのに、素っ気ない返事しか出来ない。だって、まともに答えるのだって恥ずかしいし。

依子が俺の腕を取ってくる。腕というのはつまり、二の腕の肘に限りなく近いあたり。ちょっとくすぐりたい。

「純もこれからは、あたしのこと、もっとたよっていい」

妙な新鮮さ漂う空気になってきた。たよる、たよられるって、依子としては清志叔父さんの言葉から引き出して使ったつもりなのだろうが、なら、この掴んでくる手は何なんだ。何の意味があつてのスキンシップなんだ。

「じゃあ、勉強方面でなら頼らせてもらおうよ」

思考不能に陥る前にそう答える。依子が小さくうなずいた。

青く光る看板がマンションの影から覗く。浅海さんの指定した口ーソンだった。駐車場はまだ隠れているので、当然、彼のセダンはまだ見えない。

ここで俺は足を止める。

物音一つしない閑散とした住宅路。人影も気配も全くない。

数メートル先に電柱がある。電柱には外灯が取り付けられていて、丸く照らされた光源に羽虫が寄り集まっていた。

首を巡らせ、俺と同じく立ち止まる依子を見る。軽く目が合う。

「さつきからなに？ この手」

あくまで冷たく指摘する。依子がそつと、俺の腕から手を離れた。離れた左手は地へとぶら下がる。右手は肩にかけて荷物の紐に。依子は自然体で立ち尽くす。

一歩だけ、依子に近づいてみる。バックパックが遅れて背中にくく。接近したことで、思いつきり依子を見下ろす形になった。

「じつとしてるよ」

俺は不審さ満点なことをほざいて、依子を抱き寄せた。どうしてこうなるのか自分でも分からないけど、単純にそうしてみたいと思つて、やってみた。

悲鳴でも上げられるかと心配したが、依子は黙って俺に引き寄せられた。嫌がる素振りもないし、それどころか、全てこちらの為すがままだった。一応、自分の足で立ってはいるけど、体重をずっし

りと俺に預けてくる。人型等身大のぬいぐるみでも抱いてるような感覚だった。

こうしてみても、改めて分かる依子の細さ。この体格で俺をぼこぼこに出来たのだから頭が上がらない。

依子の頭頂は、俺の鼻の下あたり、ちょうど口か顎付近にあった。お互いの身長差を実感すると共に、依子の髪の毛の匂いがばっちり鼻孔をついてくる。

どこかで嗅いだことのあるシャンプールの香りがした。椿かラックス？俺は基本的に無香料のシャンプーやコンディショナーを使うけど、母ちゃんがこの前買ってきたものになんとなく似てるような。もちろん、依子独特の匂いもある。匂いは人によつて多種多様で、好き嫌いもかなり別れる。こいつのことだから、本や文房具や食材の匂いなんか染みついていそうだ。俺にはあまり馴染みのない物ばかりだが、依子本人の匂いは意外と鼻に合う。

で、何故俺がこんなどうでもいい事をねちっこく考察したのかというのと、なんと俺、気づかぬうちに依子の髪をじっくり嗅いでいたらしい。音も立てずにこっそりと。なんか変態みたいで嫌だ。

逆に俺の匂いは、依子的にどうなんだろ。やっぱり煙草臭いのかな。そう思われているなら無性に申し訳ない。

それ以前になんで俺、依子のことを抱きしめようと思ったのだろう。あと、どうして依子は黙ってこっちに寄りかかったままだ。ずっとこうしてみたかった。それも心のどこかにあったのかもしれない。いや、決して変な意味ではなく。

家族で例えてみれば、弟だって、もう少し生意気じゃなかったら月一で抱きしめて頭撫でてやってもいいかなって思うし、もし犬か猫でも飼ってたら毎日抱っこしてやりたい。母ちゃんと親父は、悪いけどちよつとご遠慮したい。ていうか、親父に抱き着いたら柔道と間違われて一本背負いされそう。

依子はもともと、家族の延長みたいなものだ。妹みたいだとか、たまに姉っぽい所もあるとか。そこまで考えた事もあるくらいだか



ら、それは間違いないと思う。だからこそその抱擁で、これは家族愛に近いものだ。

「ちよつと、目閉じてくんない」

いや、そのはずなんだけど。何言っただよ俺。依子の両肩に手を乗せたまま、少し身体を離す。

依子がマジで目を閉じていた。馬鹿じゃないの。

自分の頬が火照るのが分かった。変な汗までかいてきた。

とりあえず依子の頬に触れてみる。人差し指と中指が滑るよう頬を顎下まで撫でていく。産毛の感触はほとんどなく、気体を撫でるのに近いほど滑らかな感覚。依子は眉をびくりと反応させるが、やはり目は開けない。軽く唇のすぐ真横をつまむ。柔らかい、というより、弾力がある、と表現する方が適切だった。伸ばしてみると、ぼっ、という音を立てて口の端が微妙に開いた。面白い。

それでも瞼は閉じられたまま。

俺が今から何をしようとしているのか、依子は本気で理解できないのだろうか。早く気づいて欲しいってのと、終わるまで気づかないで欲しいってのが、両極端で渦巻いていた。

つか、今更自分がこんな気持ちになるのだからよく分からない。既にこいつとは二回しているはずだ。どっちもドツキりだったけど、でも、たしかに事実だ。

依子に近づく。死に際のじじいレベルのスローモーションで、ゆっくり近づく。

あと十センチくらいの距離で止める。

うわ、顔ちけえ。やばい笑いそう。近過ぎ。

相変わらず目を閉じたままの依子。息づかひまで聞こえてきそうだし、その逆もまた然り。いい加減気づけ。そして目開ける。

でも、と心の中で思考のベクトルを変えてみる。

そもそも、俺がこんな風になったのって、全部依子のせいじゃないのか。バスの中でもたれかかってきたし、さっきだって、意味もなく腕掴んできたし。それよりなにより、やっぱりあれだ、こいつ

に二回もドツキリかまされたんだ。それなのに、今まで依子のことを意識してこなかった俺の方がどうかしていたんだ。依子が俺に対して、必要以上に思わせぶりに振る舞ってきたことが原因なんだ。なら、一回くらいやり返してもいいだろ。ここまできるともう、そう思えてならない。

お前だつてしてきたんだから文句ねえだろ、つて言えばいい。そうだよ。そうやって突っ撥ねてしまえばいい。

いいのかな。

なんか俺、すげえ卑怯。

ていうか、超情けない。

「拒否れよ馬鹿」

依子の肩を押し、顔を離す。やがて、依子がゆっくりと目を開けた。外灯も届かないこの場所で、開かれた瞳に映る感情はうまく読みとれなかった。

彼女の両肩から手を離し、ため息を吐き出すように俺は言った。

「もう行こう。浅海さんも待つてるし」

しばらく、二人で硬直して向かい合う。依子が踵を返し、コンビ二へと歩き出した。

少し遅れてこちらも一步踏み出す。しかし、俺はそれ以上進めなかった。

依子が身を震わせ立ち止まる。外灯の明かりに侵入し、吉岡美野里が姿を見せたのだ。

「みーちやったあ」

吉岡は闇に溶けそうな黒いランニングウェアを着ていた。彼女は左手に持ったものを掲げる。デジタルカメラだった。

「恋愛感情、無いんじゃないっけ？」

口角を上げて笑い、左手のデジカメを下げる。すると唐突に、吉岡は依子へと歩み寄っていった。右手は何故か、背中に隠されていた。

依子の眼前まで迫るが、彼女は歩みを止めない。

やがて、吉岡が前のめりに依子とぶつかつた。ここで、青白い光が辺りに閃く。瞬間遅れ、バチツという空気を切り裂く音がした。依子はその場にうずくまつた。肩から荷物がずり落ちる。彼女は膝を着き、両手で腹を抑えた。瞳を見開き、口をだらしなく開けたまま絶句した。

「おつかしいなあ。お腹に当てたら一発で気絶しますよーって、ネツトで見たんだけど」

吉岡は右手に収まるスタンガンを不思議そうに見つめる。

俺は一度よろめき、二人のもとへ駆け寄ろうとした。吉岡が腰を屈めた次の瞬間、再度、閃光が瞬く。次に狙われた部位は首筋だった。依子は一度びくりと全身を跳ね上げ、悲鳴も上げずにアスファルトへと倒れ伏す。

俺は猛然と吉岡の右手首を捕った。

「何やってんだお前。洒落になつてねえんだよ」

吉岡は意に介さない。魔性的な笑みを浮かべ、

「もういいよお」

そう言い放った。

突如俺の首元に、細く筋肉質な腕が回ってきた。背後に誰か居る。横目で、必死にそれを確認した。

「ごめんな純一。ちょっとだけ、寝ててもらおう」

「浅海さ……」

もう片方の手で頭部を固定された直後、一気に気道を締め上げられる。それ以上の言葉は切り捨てられた。視界が徐々に白んでいく。鬱血していく頭には、まともな思考は浮かんでこない。

吉岡が見せる笑みすらも判別出来なくなつた頃、意識は完全に脳から切り離された。

爆音のレゲエに目を覚ます。

目の前にあつたのはガラス越しに流れていく町並みだった。ただし、夜中の上にガラス自体が曇っているのもあって、ゴーグル無しで真つ暗な水中を遊泳するかのような不透明さだった。

遊泳、と例えてはみたものの、やけに身動きが取り辛い。両手が背中に回っていて、手首にも違和感がある。意味分かんねえ。

とりあえず、くしゃみを一つ。

「あ、今泉起きたよ。ねえアキラっ」

右方向を見ると、眼前すぐに吉岡が居た。大音量のBGMに負けないように声を張る吉岡。どうやらここは車の中らしく、俺は後部座席で胎児のような体勢で座らせられていた。

「はえーなおい。ま、ほっとけばよくね。どうせすぐに起きてもらうんだし」

これは運転席から、浅海さんの声。

吉岡が助手席の座席ヘッド部に腕を回し、俺の顔をのぞき込んできた。

「大丈夫？ 目、焦点合っていないけど」

いや、大丈夫とか言われても。って声出ねえし。喉の奥で鉄っばい味がする。

無造作に手を喉へと持っていこうとしたが、やはり背中に回ったまま動かせない。後ろを見ると、見慣れた後ろ姿があつた。依子だった。俺と同じような姿勢でシートに肩を預けている。

嫌な汗がにじんできて、依子の背中からゆっくりと視線を落とす。二つの手錠によって、俺たちの両手は背中合わせで拘束されていた。俺の右手首と依子の右手首で一セット、左手首も同じようにされていて、二本の鎖がちょうど俺たちの間でクロスしていた。

吉岡のきょとん顔に目を戻す。

「ねえ、なにこれ。誘拐？」

「え、なに？ 聞こえない」

騒々しい車内BGMが俺たちの会話を妨げる。首が筋肉痛を起こしたように引きつるが、我慢して大声を上げる。

「犯罪じゃねえのかつつつてんの！ なにお前、捕まりたいの？」

「犯罪じゃないもん。ただの誘拐ごっこだよ」

「馬鹿だろお前」

そのとき、脊髄に直接届くような激痛が走った。視界が白黒反転したようになって、俺は身をよじらせて変な声を上げる。

「やめとけつての美野里」

浅海さんの暢気な声が意識の外から聞こえた。

「だってこいつ、私のこと馬鹿つて言ったあ」

聴覚が戻ってくる。次に感じたのは、脇腹の焼けるような痛みだった。やっぱリスタンガンがまされたらしい。

吉岡は口を尖らせ、不満そうに手の中のスタンガンを見つめた。

その先端を俺の眼前に突きつける。煙草の箱より二回りほど大きく黒いボディの先に二本の電極、さらに内側にも二本で、合わせて四本ある。吉岡はトリガーに指をかける。先端がばちりとまたいた。

「さっきのやつ、半分しか電圧出さなかったけど、それでも痛い？」

「すげえ痛い」

いまだに脇腹が熱を帯びている。

「もうやめてほしい？」

速攻でうなずく。うなずいたのに、今度は太股にスタンガンを押しつけられた。とっさに息を止める。すぐさま浅海さんの声がかかった。

「美野里」

「はいはい、分かっているつてば」

親に叱られた女子小学生のような返事をして、吉岡はスタンガンを離れた。もつと使いたいのにな、そんな顔をして前を向き、助手席に座りなおした。

俺は首が痛くなるくらい顔を後ろに回した。依子はぴくりとも反応を見せず、さっきからずっと座席に身体を預け続けている。背中をぶつけてみても反応なし。

「おい、こいつ動かねえぞ！」

「生きてるから大丈夫だよ」吉岡が前を向いたまま答える。「気絶してるだけだから平気平気ー」

平気って。気絶してること自体がもうやばくね？ あ、でも俺もさっきまで気絶してたのか。そういう問題でもないけど。

ある地点から、車のスピードが少しずつ落とされていく。

スモークガラス越しに見ても、周囲には建物の陰すらないことが分かった。手入れの為されていない畑、空き地、その先にはアパートらしき建造物も見えるが、それだけの寂しい場所だった。

そして、なんだか見覚えがあるような。フロントガラスへと顔を向け、目を凝らしてみる。やっぱりそうだ。暗くて印象が違うけど、いつか原村に連れてきてもらった廃墟のアミューズメント施設だった。

セダンがゆるやかに徐行し、廃施設の低木際に横付けされる。ここでレゲエ曲が強制終了された。

運転席と助手席側の二つの扉が開く。吉岡と浅海さんは二人とも黒のランニングウェアを着ていて、気持ちよさそうに互いに背伸びをしていた。吉岡が車の向かいに回っていく。

依子側の後部ドアが開かれた。吉岡の顔が月夜に照らされる。

「そろそろ起きてもらおうっかなあ」

右手のスタンガンを、さっと依子の足首にかざした。

「おいやめろ」

俺の制止は依子の小さな悲鳴によって遮られた。依子は呻き、上半身をかがめる。すぐに手首の違和感にも気づいたようだった。

「これ……」

「二人の愛を手錠という形で繋いでみましたー、みたいな？」

吉岡が全く笑えないことを言って、依子の前髪を鷲掴んだ。

「さつさと動いてくれない？　こんな場所でも、人が通らないって保障はないんだし」

スタンガンをかざす吉岡に戦慄し、俺は背中であつ子を押しした。あ子は聞こえるか聞こえないかという矮小な声量で、うごくからはなして、とささやき、俺の押し出しに身を任せた。吉岡が身体を避ける。

二人まとめて、車から強かに転がり出た。

俺はあ子をおぶって歩いた。さつき足首にスタンガンを当てられたため、あ子は歩くことすら困難だった。ただし、俺たちは両手同士で手錠につながっていたため、お互いの手首をくっつけたままあ子の尻の下に回して負ぶる形となっていた。

施設に入ってさつさと歩いていく浅海さんと、後ろからスタンガンを突きつけて急かす吉岡。施設内は暗くて一向に視界が開けないが、ここには学校の体育館が平気で入りそうなほど広大な空間が広がっている。薄ら寒い気味悪さを禁じえない。

あ子を背負いなおし、重い足を踏み出す。

「あ子、体重何キロ？」

「41」

「骨かよ。もつと食った方がいいよ」

別に期待してないが、あ子はもう何も返してくれなかった。吉岡が後ろから押してくるので、俺は危うく転びかけた。

「やけに落ち着いてるじゃん今泉。足の方もちゃんと動かしてもらえると嬉しいなあ」

「ごめん」

謝りたくないのに謝ってしまうのは吉岡の手にある凶器のせいだろうか。彼女の調教のもとに敷かれるのは本意ではない。

「お前ら何がしたいんだよ」

重要な疑問点だったが、吉岡は無言を貫いた。

階段を上がると、二階のある扉の前で浅海さんが足を止めた。いい加減息切れしてきた俺は浅海さんの後ろで座り込み、背中の依子を荒っぽく地面に降ろした。額から流れ出る汗が不快だったが、両手が不自由なために拭うことも出来ない。

薄暗い中、扉の隣に掲げられた表札を見る。『従業員宿泊室』とある。かつての一般利用者用の部屋ではないようだ。

浅海さんは扉の前にもたついていた。ジャージをまさ探って首をひねっている。吉岡がなにか思い出したようにポケットに手を入れた。

「私が持ってた」

吉岡は人差し指でリング付きの鍵を回した。

「なんでそんなの持ってたんだよ」

「アキラからのありがたーいコネだよ。ちなみにここ、半年後に取り壊されるから、これがラストチャンスってわけ」

彼女の声はこれからテemapパークにでも行くかの如く楽しげな調子だった。錆び付いたような嫌な音を立て、鍵穴がぎこちなく回った。

従業員宿泊室と表された部屋の扉を開けると、中からクリーム色のゴールドレトリバーが迎えた。相当目つきの悪い犬で、浅海さんがいつか散歩に連れていた犬だと分かった。たしか名前はアンジーエリー。

吉岡がアンジェリーと戯れる横で、浅海さんが部屋の電気を点けた。

「すぐくね？　いまだに電気通ってたんの」

彼の軽い問いかけにうなづく元気はない。蛍光灯が一本切れてはいるが、しかし部屋はなんなく照らされた。

広さは十二帖ほど。灰色のモノクロタイルカーペットが一面に敷かれており、部屋の中央にはテーブルが一脚。テーブルの手前には



布張りのカウチソファが配置されている。左を見るとキッチンがあり、角には薄型テレビが床高に取り付けられていた。全体的に埃かぶったように見えるが、たしかに宿泊室らしき面影がある。

浅海さんが奥のパーテーションを引くと、そこには部屋と一体化したような金属パイプの二段ベッドがあった。

「ここが二人の愛の巣です」

唐突に吉岡が俺たちを引っ張って歩いた。俺はなんとかついていくが、依子は足首の痛みをうったえるように小さく呻く。

浅海さんの手にはこれまた一対の手錠があった。まず俺の右手首に取り付け、もう一方をベッドの柱につなぐ。ここで、依子と繋いだ二本の手錠は外された。突き飛ばされ、俺は床に尻もちをつく。

依子はベッド下段の隅へと追いやられ、俺と同じく、奥の柱に片手を繋がれた。俺たちは啞然としたまま、彼らの手慣れた拘束を奇異に思うのだった。

「一件落着ー」

浅海さんと吉岡がハイタッチして自分たちの犯行劇を喜び合う。

依子はベッドの上に座りなおしながら、ぼかんと彼らの様子を眺めていた。

「じゃ、今日のところは帰るか」

「待て待て」

何事もなかったように部屋を出ていこうとする浅海さんたちをあわてて引き留める。片手はベッドの足に繋がれているため、半立ち程度でしか立ち上がれない。

「どうするつもりなの、俺らのこと。これ監禁だろ。飯とかないの？」

「すげえな純一。もう監禁って割り切ってるし」

浅海さんが感心したように言って、思案顔で顎をさすった。

「飯なら明日持つてくるけど、我慢できる？」

「いや、できると思うけど……」

なんだこの緊迫感を欠いたようなやりとり。もっとお互い心配す

ることとか、そう、たとえば。

「便所とかどうすりゃいいの。俺らここで垂れ流し？」

これも違う。今聞かなきゃいけないのはそういうことじゃない。

「あー、たしかに。それは可哀想だわ」

「いいじゃん垂れ流しちゃえば」

吉岡が真顔でとんでもないことを言った。浅海さんが部屋中を見回した。

「トイレにキッチン、シャワー室まである」

それを聞いて、吉岡が嫌そうな顔をした。

「俺らもしばらく泊まるか、ここに」

「やだ、こんな汚いところ。ほっとけばいいよこんなやつら」

「でもさ、よく考えてみ？俺らここまでほとんどノープランだろ。ほっといて目離してる隙に逃げられでもしたら事だよ。しばらく見張っとくべきだって」

二人は押し問答をしながら時折こちらを指さし、たまに視線を投げてくる。さながらケージの中のペットの処遇でも話し合うように。依子が柱に繋がれた右手をのばしてベッド際に移動し、やけに冷静にローファアを脱いでたもとに並べた。

俺はベッドの構造をたしかめた。金属製ベッドの柱は地面と一体化しており、柱上部も頭上まで伸び、天井とボルトで固定されている。柱か手錠を壊さない限り逃げ出せないだろう。俺は一旦床に座り込み、浅海さんたちの決断を待った。

吉岡が慥然としてソファに腰掛けた。どうやら密談は終わったらしい。浅海さんが俺の前にかがむ。

「トイレ行きたい？」

「べつに」

「あつそ。いとこちゃんは？」

依子は無言で首を振った。意外なことに、依子がここで質問を切り返す。

「なんであたしたちに、こんなことするんですか」

浅海さんははっとしたように固まって、眉をひそめながら吉岡を振り返った。どう見ても吉岡に返答を求めている。俺の思い違いだといいが、もしかして浅海さんはこの誘拐の目的を知らないんじゃないだろうか。いや、そんなまさか。

「なんでだっけ、美野里」

俺にはもう何も言えない。吉岡はリモコンを取ってテレビを点けた。物静かな部屋の雰囲気バラエティの笑い声によってかき消される。

「それは今後のお楽しみ」

およそ一時間後。誘拐犯二人は悠長にソファでくつろぎ、テレビを眺めていた。アンジェリーはすでにソファの下でうたた寝している。無駄だと分かっているものの、手錠が外れないかと俺は奮闘しているのだが、もし外れたところで無益な乱闘騒ぎになることは必至だし、なにより依子は全てをあきらめたようにベッドの隅で柱に寄りかかって、さっきから眠たそうにうつらうつらとしている。危機感持つてるのは俺だけである。

ここで誰かの携帯が鳴った。もちろん俺や依子の携帯は没収されているので、浅海さんか吉岡のものだろうが、流れ出す着メロに聞き覚えがあった。久石譲の一曲だった。

「これ、依子のじゃないの」

しかし、音源はどうも他所から聞こえてくる。見ると、吉岡がポケットから白い卵携帯を取り出していた。依子の携帯だった。吉岡は当たり前のように通話ボタンを押し、携帯を耳に当てた。

「平野さんのお母さん？ お久しぶりです、美野里です」

吉岡は専業主婦よろしく変わり身の激しい猫なで声で応対した。

俺は緊張して吉岡を睨めつけた。

「私たち、今日からしばらくアキラの所に泊まることになったのですみません、突然で。今泉が遊び足りないって聞かなくて」

なんで俺なんだよ。吉岡が人差し指を唇に当て、ふつと笑った。静かにしてる、という意味。俺はむしろその仕草に反感心が沸いてしまつて、軽く身を乗り出して大声を張り上げた。

「道子叔母さん、俺ら誘拐されてるから！ 警察呼んで警察！」

吉岡が電話越しの叔母さんと談笑しながらソファを立った。「今泉、テンション上がりまくっちゃって」とか言いながら部屋の奥まで遠ざかっていく。知恵を借りようと依子を見るが、彼女は無駄だと言つ風首を振るだけだった。なんでこいつは端っから諦め腰なんだ。洒落でこんな状態にされるわけがないのに。

吉岡が戻ってきた。右手に携帯を、左手にスタンガンを持って。彼女はベッドに膝をたてて乗り、依子に身体を寄せた。依子は身を反らせて逃げようとしたが、吉岡が即座に依子の首に手を回し、耳元に口寄せた。

「おばさん、平野さんと話したいんだってさ。ちゃんと口裏合わせてね」

吉岡の手が依子の腹部へ伸びる。ブラウスをスカートからはだけさせ、白い腹が露出する。スタンガンがへそ付近にかざされた。

「今泉も、分かつてるよね。口出ししたら即、バチバチーっするから」

そう脅しかけると、携帯を片手で操作し、依子の耳元に近づかせた。依子は腹に当てられたスタンガンを凝視し、首筋に汗を伝わせた。あの依子でさえ、スタンガンの痛みに怯えきつている。

やがて依子が上擦った声を上げた。電話がつながったらしい。

「ママ。いま、純たちと一緒に。さっき、吉岡さんが言ったと思うけど」

通話が終わると、依子は深く息を吐き出した。吉岡が鷹揚にうなずき、スタンガンの矛先をシフトさせた。依子の繋がれていない方の手、左の二の腕だった。

「なんでだよ。依子、口裏合わせたじゃん」

抵抗する気も起きないのか、依子は当てられた左腕を震わせるだ

けだった。吉岡の吐息で依子の前髪が揺れる。俺は手錠を張り、ベッド内へと身体を伸ばしたが、うまい具合に吉岡たちに届かない。「困るんだよね、もつとちゃんと演技してもらわなきゃ。怪しまれたら大変でしょ？ だめな子にはお仕置きしないとね」

「ごめんなさ」

直後、ベッド下段内で青白い光が二回瞬いた。一度目は依子がつさに腕を引き抜いたために直撃をまぬがれ、それを察した瞬間、吉岡がすぐさまスタンガンを下方に向けた。奇しくも依子は日に二度、右足首に電流を打たれたのだった。依子はうずくまり、肩を震わせて足首をぎゅっと握った。悠々とベッドを出ていく吉岡へと左手を伸ばしたが、俺の手は虚しくも空を掴む。

信じられないことに、浅海さんはソファで横になり、アンジェリ―と一緒にいびきをかいていた。

眠りから覚めると、身体の節々が軋んで痛んだ。カーペットが敷いてあるとはいえ、床でじかに寝るのは辛い。横たわった状態から右腕を見るとまだ手錠は繋がれたままで、俺はなんとも言えない深いため息をついた。

半身を上げる。

おはよ、と声が聞こえた。風呂上がりらしい吉岡がタオルで髪を梳きながら、棒アイスを食べていた。退屈そうにテレビに向けていた目が一瞥だけ俺に送られる。

「よく寝ていられたね、そんなところで。もう十一時だよ」

後ろを見ると、依子が柱に寄り添って体育座りになり、何をすることもなくベッドの天井を見ていた。

昨日、床の寝心地の悪さに俺が苦戦していた横で、依子はずいぶん先に眠りに落ちてしまった。いくらベッドの中だからって、所構わず熟睡できる依子の神経の太さをうらやましく思ったものだ。

俺の目の前をアンジェリーが横切っていく。暇つぶしに部屋中を徘徊してまわっているようだった。はあはあ言いながら。その音を聞いていると、俺までのどが渴いてくる。

「吉岡、水」

「平野さんからもらって」

「は？」

背後からとんとんと肩を叩かれる。見ると、依子が飲みかけの2L烏龍茶を手に使っていた。腕をうんと伸ばして差し出してくる。

「依子と共用かよ。扱い悪すぎ」

ペットボトルを受け取りながら悪態をつく。

「扱いだなんて、監禁にはかなりマシでしょ」

烏龍茶を一気に喉に流し込んで宙を仰ぐ。たしかにそうかもしれない、と思ってしまう自分が嫌だった。

便所に行きたいと言えば行かせてくれるが、もちろん嚴重に拘束された上だ。手錠を両手に繋ぎなおされ、どれだけ用意がいいんだか、脚用の手錠までかけられる。そこで初めて部屋のトイレ使用を許可されるのだ。

飯の方は、キッチンの冷蔵庫にあった食材で吉岡が作ってくれた。海老チャーハン。あらかじめ、彼らが食材を買い貯めていたらしい。ただ、目的の見えないこの監禁に俺は不条理を覚えずにはいられなかった。誤魔化されているように思えるし、俺自身もなにか忘れていた気がしてならない。

「もう、アキラは優しすぎるんだよ」

吉岡の不満を聞き流そうとして、あることに気づいて部屋を見回す。

「浅海さんは？」

「バイト行った。休めばいいって言ったのに、二人もバイト居なくなったら店が回らないって」

その説明だけでソレイユのことだと分かった。たしかに俺は物理的に行けないし、今の時期だとあそこは忙しい。

「俺もバイト行きたいんだけど」

冗談で言っただつもりだったが、吉岡は思いのほか不快そうな目で俺を睨んだ。

吉岡がレンタルDVDをレコーダーにセットした。

暇を持て余していた俺もベッドの梯子に背中を預けて座りこみ、画面に現れるワーナーのロゴを見つめた。

吉岡がどんな映画を観るのかちよつと興味があったが、映画ではなく、海外の長編ドラマだった。無人島に漂流してどうのこうのという内容で、不親切なことにシーズン三の第四巻からだった。俺はいきなりストーリーから置き去りにされてしまう。

それでも情性的に画面を眺めていた。依子は位置的にテレビを見

られないようだが、彼女にとって興味のある内容とも思えないので、取り立てて不憫に思うこともない。ときおり、吉岡にこの監禁の目的を訊いてみたりもしたが、一切のシカトを通されるばかりだった。「あ、アキラ帰ってきた」

第七巻を観ていたところ、吉岡がテレビの音量を下げつつ言った。施設の外から、かすかにエンジン音が聞こえてくる。

「よかったあ。借りてきたDVD、ちょうど全部観終わる所だったし、TSUTAYAに連れてってもらおうと」

吉岡は立ち上がり、おもむろにこちらに近づいてしゃがむと、俺の自由な方の手を取った。

「なに？」

「ちよっとお留守番しててね」

新しい手錠を取り出し、俺の両手を背中中で拘束しようとする。彼女一人ならここで暴れることも出来たが、たとえ抵抗したところで、すでに柱と繋がれた方の手錠を外してもらえないわけではない。ここは大人しく従っておくべきだと諦めた。

両手の自由を奪われ、黙ってあぐらを掻く俺を観察して、はたと吉岡が手を打った。

「そうだ、口もふさいであげる」

彼女は部屋の用具棚からガムテープを引っ張りだした。どうして口までふさぐ必要がある、そんな顔をしていると、吉岡はガムテープを適度に切り分けながら言った。

「私たちがいない間に、平野さんと逃げる算段でも付けられたら困るからね。ちゃんといい子にしてるんだよ」

吉岡の舌つたるい声でそんな台詞を吐かれると正直きもかった。口に何重もテープを貼られ、依子の両手と口にも俺と同じようにさせる、吉岡は部屋を出ていった。扉が閉じられる音を最後に、言語伝達法を失った俺たちは途方に暮れてお互いの顔色をうかがい合った。



しばらく、カーペットの床を虚ろに見下ろしていたが、アンジェリーのあまりの騒々しさにふと顔を上げた。そして俺は目を見張る。アンジェリーが、依子のシヨルダーバッグをくわえて遊んでいたのだ。一体どこから持ってきたのか。

正面に置かれたソファの端からは、俺のバックパックも頭を出していた。どうやら俺たちの荷物は、ずっとあのソファの背中に隠されていたらしい。焦ってアンジェリーを呼ぼうとしたが、今はうめき声程度しか出せないのだとすぐに気づいた。手招きすることも出来ない。それは依子も同じだった。

俺は足に力を込め、地面を踏んだ。

カーペットと踵がぶつかる、どん、という音にアンジェリーがびくりと反応し、こちらを向いた。依子のバッグをくわえたままだ。

こつちに来い、そういつた念じを込めて顎を引く。怖がらせないように頬をほころばせて、顎だけでこつちに来るよう合図する。

固まるアンジェリー。全然伝わってなさそう。

依子を見ると、彼女も俺の行動を不可思議そうに見るばかりだった。彼女にもアンジェリーを見るよう顎で指し示す。

依子は曖昧にうなずいた。こいつには大体伝わったようだ。かくして俺たちは、硬直するアンジェリーに向け、二人して熱い視線を送りつづけたのだった。

長い奮闘の末、ようやくアンジェリーをおびき寄せることに成功した。アンジェリーはどうやら俺たちの視線が怖いのだと気づき、今度は努めて目を逸らすようにしたのだ。すると、アンジェリーは俺の伏せた顔を舐め始めた。相変わらず俺に似て面構えの凶暴な犬なので、身の危険を感じざるを得ない。

その際、地面に落ちた依子のバッグを引き寄せ、繋がれた後ろ手に中身を探った。中はポーチやデジカメ、文庫本数冊が主だった。

やがて依子の卵型携帯を探り当てた。しかし、あまり喜んでいない。顔をうんと後ろに向け、背中で拘束されたままの手で携帯を開いた。

だが、俺は絶望で頭をうなだれてしまった。

数字ボタンが全て壊されていたのだ。キリかドライバーでも突き立てたのか、巧みに0から9までが外され、剥きだしの基盤にも傷を入れられていた。これでは110番を押せない。

ただし、十字キーと決定ボタンは生きているようだった。キー破壊は念のための工作だったのだろうが、吉岡たちもまだまだ詰めが甘い。

メニュー画面からメール欄を開き、返信メールで助けを呼ぶ文を打とう、そこまで考えたところで、そういえば数字キーがないということは、文字すら打てないのだと思い至る。絵文字はなんとか打てるが、それだけで誰かにSOSを送れるだろうか。ドクロマークでも送りまくるか？

すると、俺の背中に何かが触れた。依子の足だった。細い足を伸ばし、親指を俺の背中に立て、ひたすら何かをなぞった。何度も何度も、同じ形を描き続けている。

『でんわちよう』

それは六文字のひらがなだった。電話帳。依子に携帯機能の新たな可能性を気づかされるとは驚きだった。単に俺が忘れっぽいだけかもしれないが。

幸いなことに電話帳のキーも機能した。110番が登録されているれば言うことなしたが、もちろん依子がそんな番号を都合よく登録しているわけがなかった。だけど十分だ。だれか一人でも電話に出てくれれば。

次々と電話帳のページを表示させていき、通話相手を選定している最中、ある不安点が浮上してくる。

今、俺や依子の口に固く貼られたガムテープの存在だ。依子の知り合いの誰かにつながったとして、この状況をどうして伝えること

ができるだろう。

唇や頬の筋肉をめちやくちやに動かしてみる。何重にも貼られたテープに剥がれる余地はなかった。それは依子も同じようだった。足で地面を叩いてモールス信号でも送ってやりたかったが、俺にはその知識がないし、通話相手はその信号を解読できる可能性も限りなく少ない。こういう予期せぬ緊急事態のため、モールス信号を義務教育化してほしいものだ。

開いたままの携帯を床につけ、依子と顔を見合わせた。どうすればいい。無言の視線交差会議が始まった。

依子は自分の腰あたりを見下ろした。柱に固定された両手で不由そうにスカートのポケットを探った。使える道具がないか探しているようだ。藁にもすがる思いで、俺も依子の真似をした。

俺のポケットから出てきたのは、ぐしゃぐしゃのレシート、iPod、煙草、ライターだけだった。

いや違う、ただのライターじゃない。原村からもらったシーサーライターだ。手汗まみれの指で顔の形をした蓋を押し上げる。首のへし折れたシーサーが、耳障りなキンキン声を上げた。

『シーサーサー、ハイヤー』  
これだ。

床に転がった携帯を手探りで拾い、もう一度電話帳を開く。『原村先輩』の欄を開いた。携帯番号はだめだ。彼のiPhoneは以前、俺が誤って屋上から投げて壊した。

縋る思いでさらに下へとスクロールしていく。すると、原村の自宅の電話番号が画面に映り込んだ。

電話越しの原村は、猛獣のようにうめく俺と、絶えず鳴らされるシーサーライターの間抜けな歌声に終始爆笑していた。

「なに、どうしたの平野。あ、この音、僕があげたライターだよ。ね。だったら今泉？ なんの暗号さ。いたずら電話にしちゃ難易度高す

ぎるだろうよ」

どうして俺は、今まで腹話術の習得を怠っていたのだろう。こういう予期せぬ緊急事態のため、腹話術を義務教育化してほしいものだ。いや、もうこれ以上余計なこと考えるのはやめよう。

助けに来い、痛切なうめき声で何度も叫んだ。

「読めたよ、その暗号」

しばし沈黙していた原村がそう言った。

「僕がそのライターをあげた場所は、たしか僕の秘密基地だったね。つまり君らは今、あの廃墟の施設にいる。どうだ、正解だろう」

原村の声が神の啓示のように聞こえた。ライターの蓋を開ける。

シーサーも原村の正解を祝し、心なしかオクターブ高めの歌声を披露した。

「なに、正解でいいの？ で、僕はどうすりゃいいのさ。正解者特別サービスの豪華賞品はもらえるのかね」

それに返答する術は俺たちにはなかった。とりあえずシーサーを鳴らす。原村は明らかに困惑していた。

「まあいいや。訳分かんないけど、とりあえず行けばいいんでしょ。でもちよつと待っててね。四日間お風呂に入ってないから全身から雄の臭いが漂いまくってた。シャワー浴びてから行くよ」

ベッドの柱を蹴って怒りを現してみたが、通話はすでに途切れていた。

一時間と十五分後。

俺は、隣の柱で手錠につながれた原村を睨みつけた。瞼の上に青あざを作った彼は、いまだに意味が分からないという顔をして、ベッドに並んで一息つく浅海さんと吉岡を見上げた。

「これが君らの用意した豪華賞品か。なかなかディーブなプレイだけど、残念ながら僕にこういう趣味はない」

「もういいよそのネタ」

原村がここに到着したのはおよそ十分前。俺がシーサーライターをもらったのは正確には施設の屋上だった。シャワーを浴びてのうと廃墟にやってきた原村は、騙されたような気分で屋上を探し回ったのだろう。この部屋の扉を開けた原村は、半ば諦めたような表情をしていた。扉の鍵がかかっていなかった事に、また吉岡の中途半端さが窺えた。

「なんだ、こんなところに居たのか二人とも。で、それは何の遊び？」

開口一番彼はそう言った。あろうことか、原村は俺たちの無様な姿をむしろ面白がり、「ちよつとデッサンさせて」と手のひらサイズのスケッチブックを広げたのだ。口のガムテープすら剥がしてもらえずに。

そして三分ほど前。扉を開けた浅海さんと吉岡に、原村はスマイル満開で挨拶をした。直後、吉岡にスタンガンを当てられ、浅海さんからは顔面への強烈な右ストレートをもらったのだった。

「わりいな昭文。びっくりして思わず殴っちまった」

浅海さんがソファに深く腰を沈め、ハイライトを吹かした。吉岡は半分眠たそうにしている、原村侵入の件についてはノーコメントだった。片手の自由を許された俺は十数時間ぶりの煙草を味わい、千切れそうなほど腕を伸ばしてテーパー上の灰皿に灰を落とした。

「思わず殴って、思わず拘束しちゃうんだな」

「仕方ねーだろ。見られたもんは捕まえとかなきゃ」

俺は本日何度目かの憔悴し切ったため息を吐く。口の周りがガムテープ型にひりひりと疼いた。

「ほんと、原村って役立たねーのな」

「反省してる」

アンジェリーの方がよっぽどいい仕事してくれる。依子が烏龍茶を飲み干して、しみじみと言った。

「原村先輩、きてくれて、ありがとうございます」

「どうも。最近の平野は優しいなあ」

聖母だよ本当。

誘拐犯二人がいちやつき出したのは深夜を回った頃だった。

「アキラ、喉ぼとけ触っていい？」

さつきまでうたた寝していた吉岡は起きた瞬間、急に目を爛々とさせて、彼の返答も待たずに手を伸ばした。首筋全体を撫で付けられ、浅海さんは黙って煙草を吸っていたが、それほどまんざらでもないように吉岡の髪を優しく梳き始めた。

二人のそういう表情を見るのは初めてだった。吉岡はよつぽど喉ぼとけが好きなのか、十分近くは撫で回していたように思う。

目がとろんとし出したところで、吉岡は浅海さんに唇を押しつけ、そのまま彼をソファに押し倒した。当然の流れというようにランニングウェアの上を脱がせ、タンクトップ一枚させる。浅海さんの程良く筋肉質な腕が吉岡の背中に回される。その一部始終は、俺たち三人がばっちり目撃していたにも関わらずの奇行であった。

「おい、せめて電気消せ」

原村が弾かれるように俺を見た。それでいいのか、とでも言いたげな顔をして。分かつてる。全然いい訳ない。

俺の言葉に反応したのは浅海さんだけで、吉岡はまるで聞こえていないみたいに、むしろ彼の首筋に噛みつくので忙しいようだった。浅海さんの冷めた目が部屋中をさまよい、俺たちが身を寄せている二段ベッドに止まった。

首もとに顔を埋める吉岡をその体勢のまま、お姫様抱っこに近い形で抱きかかえると、彼らはベッドの二階へと忙しく上っていった。直後、室内に甘い囁き声がさざめいた。

ベッド上段を見ないよう視線を泳がせると、俺と同じく拳動不審の原村と高頻度で目が合った。依子は両手で耳を塞ぎ、彼女のちよつと頭上で巻き起こる物音に嫌悪感いっぱいな表情を浮かべていたが、やがて腕が疲れたのか、布団を頭まで被り外界とのシャットア

ウトを計った。

「雑談でもしよう」

原村がえらく明るいい声で提案した。答えないでいると、彼は右手の手錠を示した。

「せっかくこういう状況にある。僕たちは自由を切望する身でいるべきだ。じゃないと不自然だろう。さあ今泉、自由になったらまず何がしたい」

「外で思いつき深呼吸する」

「実に野生的な答えだ。平野は？」

引きこもり状態の依子に問う。返答はなかった。ただ、盛り立った布団の膨らみが静かに佇むだけだった。

「平野は？」原村がもう一度訊く。依子はサイレントモードを維持する。

「おい依子、なんか喋れ」

ついに俺が半ギレ気味でけしかけると、布団がかすかにもぞりと動いた。

「お風呂はいりたい」

原村がほっとしたように微笑んだ。

「実に現代人らしい答えじゃないか」

吉岡が短くあえいだ。

夜が更ける。

聞こえてくる寝息は三つ。ベッド一階の布団から中途半端に顔を露出させて目を閉じる依子と、二階で仲良くアンサンブルする誘拐犯二人のものだった。

鼠色のスウェット姿の原村が床で寝たふりをする姿は、どこかホームレスのようで、端的に言えばみすばらしかった。

しばらく三人の寝息に耳を澄ませて煙草を吸っていると、原村が所作音を最小限に上半身をあげた。首の骨を左右に鳴らして、音も



なく息を吐く。手錠の鎖が限界まで伸びる位置まで俺へと体を寄せると、彼はほふく前進のような体勢でささやいた。

「ちよつと考えたんだけどさ」

灰皿に火種をすり付けて消すと、俺は原村に向き直った。

「なんだよ」

「夜明けまでに、いや、せめて明日までに逃げ出さないと、色々まずいことになると思う」

「まずいこと」

「ただの憶測だけだね。今泉、ちよつと耳貸せ」

戸惑いながら、恐る恐る原村の耳打ちを聞く。その憶測とやらを聞き終えると、俺は半信半疑に彼と顔をつき合わせた。

「そこまでするか、あいつらが」

「だから憶測だってば。だけど、ありえなくはないだろ」

俺はあることを尋ねる。

「早川は、今どこにいる？」

「今、お袋と二人で田舎に帰ってる。こっちに戻ってくるのは明日だ。僕らの都合と併せて考えても、吉岡たちがそれを決行するには明日がちよつどいい」

明日、つまり八月二十五日。俺たちが八景島シーパラダイスに行く予定を立てていた、まさにその日だった。吉岡はとことんそれが気に食わなかったらしい。それで俺たちの浮かれた行楽を妨害してやるつと、この監禁は突飛もない子供じみた動機からだったのかもしれない。

それは俺も薄々感じ取っていたし、お互い口にしないまでも、子供も感じていただろう。しかし、本気でそれだけならほとんどサイコパスだ。だからこそ俺たちは違和感を感じてしまう。

原村はその上で、更なる悪い予感を感じていた。

「それが本当だったら、二人してマジで頭おかしいって。ていうかさ、浅海さんがこんな計画に本気で協力すると思ってるんのかよ」

原村は首を振った。

「君は、彰くんを知らなすぎる」

確かにそうかもしれないが、俺は原村の言葉を信じたくなかった。彼の言うとおり、もし俺の中の浅海さんが実際の浅海さんとかけ離れた人物だと考えると、俺は純粹に信じなくなかったのだ。

「絶望するのはまだ早い。一個だけ、この手錠から抜け出す方法を思いついたんだ」

考え込む俺に、原村がしたり顔で笑いかけた。俺はうなずき、その方法とやらに期待した。

手錠付きの右手を床に仰臥させ、原村はその手をじつと見下ろした。

「今泉、僕の手を踏め」

「お前、やっぱそういう趣味あったの？」

「違う。手をぺしゃんこにしるって意味だ」

俺の冗談は空中で叩き落とされる。原村の真剣な横顔が、かすかに汗ばむのが分かった。

「それ利き手だろ。絵、描けなくなるかもしれないよ」

彼は口元だけで笑った。

「いい。僕はもう、二度と絵は描かないから」

自己犠牲が原村なりの処世術なのだろうか。歪んでやがる。本心からそうするつもりならさっさと自分の足で潰せばいいものだが、原村はそうしない。自傷を知り、恐れているから、俺に頼もつとしているのだ。それが卑怯であろうと、そうでなかりうと、俺は従うつもりはなかった。

「そんなに潰したいなら、自分でやれ」

冷たく言い放つと、俺は床に転がった。

## 翌朝の二十五日。

吉岡は携帯を閉じ、俺たちに向けて意地悪く笑んだ。

「スペシャルゲストを呼んだから、楽しみにしててね」

ゲストの正体など俺と原村は昨晚で見抜いてしまっていたので、吉岡の期待するような反応はできなかった。依子は最後までシーパラダイスのことを口にしない。気持ちはなんとなく分かる。依子は、あの海辺の町から少しだけ変化した。

煙草の箱を開ける。昨日の時点ですべて吸いつくしたことは知っていたが、暇なので何度も箱のふたを開け閉めしていた。ポケットの中のビスケット法則で一本くらい出現してくれてもいいのにな、と思った。

「んだよ、無くなっただんなら言えよな。フツーに分けてやるつての」  
浅海さんが俺の正面に腰をおろし、ハイライトを俺の口に挟んできた。ドンキで売ってそうな風変わりなジツポで火を灯してくれる。この状況下で接待されているような気分を味わうのも中々奇妙だった。

三時間後、部屋の扉を押し、おずおずと顔を出してくる者があった。早川沙樹だった。チャコールブラウンのカットソーにカーキ色のポトムスで、まさに今駆けつけて来ましたというラフな格好だった。

「なに、これ」

早川は歓迎しようとする吉岡を押し退け、俺たち三人を前に立ちすくんだ。依子と俺を交互に見て躊躇し、最終的に原村のもとで腰をかがめた。彼女にとっての優先順位は、なにがなんでも原村が一番らしい。

「どうしたの、お兄ちゃん。目の上、たんこぶ出来てる……」

原村は困惑して視線を斜め下に落とした。早川がさつと振り返る。

「美野里、これって……」

「原村くん、私たちのこと邪魔しにきたみたいだから、仕方なかったんだよ」

「邪魔つて、いったい、何の邪魔なのよ」

俺は、すぐ目の前で煙草を吸う浅海さんを流し見た。小首を傾げる彼を見て、この人は本当に何も知らされていないのだなと改めて思った。

早川は吉岡の座るソファへと歩み寄る。

「手錠の鍵はどこ？　せめてお兄ちゃんは外してあげてよ」

「まだダメだよ。これから、沙樹に面白いものを見せてあげるんだから」

吉岡は、まあ座りなよ、と早川をなだめて両肩をつかみ、隣に着座させた。

「じゃ、そろそろ始めよつか、アキラ」

「なにを？」

吉岡は、嗜虐的な目を依子に向けた。

「平野さんを犯して」

きた、と俺は思った。眼前すぐで啞然とする浅海さんを目に留めて離さないようにする。俺と彼との間で挟まれたビンテージ灰皿の位置を確かめる。それと同時に、原村が手錠付きの右手を俺に差し出した。

「今泉、平野を助けたいか」

「助けたくないつつつたら、それこそ鬼畜だろ」

「だったら僕の手を踏め。早く」

原村には一目もくれず、俺はゆっくりと首を振る。浅海さんを睨みながら、まだだ、と言った。

いとこ二組と兄妹一組という数奇でトライアングルな状況下で吉岡だけが平坦にはやし立てる様は滑稽だった。

「どうしたのアキラ。早く犯しちゃってよ」

焦れたように俺たちを振り向く。クーラーの風はちょうど真下に流れてきているのに身体の芯が火照って暑い。背後で物音一つ立っていない依子からの視線を感じると、浅海さんは止めかけた煙草を吸いなおした。

「いや、流石にそれはまずくね？」

「まずいかな」

「まずいっしょ。純一ブチ切れるよ。どう見てもできてるじゃん、こいつら」

吉岡は鼻で笑った。

「だからやるんでしょ」

行動が起こる前に、俺は浅海さんの腕をつかまえた。

「待って、前提がおかしいだろ。そもそもなんでこの人にさせんの。お前ら付き合ってたんだよな。吉岡はいいのかよ、浅海さんにそういうことさせて」

「だから、最初からアキラとは付き合ってたなんかいないの。ただのセフレ。アキラは私のためならなんだってしてくれるんだよ」

いつか聞いたようなこの台詞。浅海さんも俺の手をふりほどきながら、「一応、そういうことになってる」とかほざいてる。一人、状況についていけない早川は俺たちのやりとりに狼狽するだけだった。俺は顎で吉岡を指し、困惑する早川をほとんど非難するように言った。

「早川、そいつどうにかしろよ。どうかしてるよ、お前の友達」

早川は唇を噛んでうつむいた。

「無駄無駄。沙樹だって見たいんだよ、平野さんが傷つくところ」

俺にはそうは思えないのに、こうして流されていくだけの状況が全てを物語っていた。灰皿にハイライトが押しつけられる。浅海さんの口から最後の煙が吐き出された。

原村を流し見る。彼は期待するような目つきで右手を差し出した。深く息を吐き、その要領で深呼吸をする。この場にまともなやつはいない。あるいは、俺だってその一人か。脳みその血とか逆流して鬱血しそうな感じ。せめて何か抵抗してやろうと、そう思った。

奥歯を噛みしめ、頭を鉄球にでも見立てて浅海さんの顔面に叩き込んだ。額のあたりが鼻梁にぶつかり、何かがへし折れる感覚が伝わってくる。俺も経験のある痛みで、つい最近依子にかまされたばかりだから分かるけど、これがまた何のやる気も出なくなるくらい痛い。浅海さんは上げかけた腰を地面に落とし、言いかけた台詞を閉じて鼻を手で覆った。指の間から止めどなく流れ出る血に、誰もが蒼然として閉口した。

「あー、鼻折れた」

感慨もなく言うのと彼は半身立ちし、俺から遠ざかった。鈍いように鋭い感覚が額に残る。何故か俺はそのとき、中学時代の部活帰りの夜を思い出していた。かなり鮮明に、閃光が瞬くように前触れもなく。ずっと疑問にして、目を背けていたことだった。

「そうやって、今までずっと吉岡の使いつぱしりにされてたんだな」  
浅海さんは何も言わなかった。代わりに、吉岡が今更気づいたのかという風にいやらしく笑った。

「昔、バットで俺の足ぶつ叩いたのも、浅海さんだったんだよな」  
中学の頃、初めて早川を振って間もないあの夜のこと。無差別だと思っていた原付の通り魔は、その実裏に目的があったわけで、無差別だなんて俺の思いこみに過ぎなかった。浅海さんはテッシュを鼻に押し当て、顔を口元ごと隠した。そして、昔の思い出でも語るように、

「そんなこともあったな」

と、細かく鼻をすすって顔を上に向け、何事もなく止血措置にい

そしんだ。

「自分の意志とかねえのかよ」

「いや、あんどきゃ、半分自分の意志もあったな」

上へと傾けたままの冷たい目が向けられると、身が凍るようだった。

「あんときのお前、すげえ目障りだったよ」

睨みつけるような目とか。常に斜に構えた感じとか。ガキのくせに分かりきったような説教吐くところとか。聞いてることっちが恥ずかしくなるような青い台詞とか。薄っぺらい思想とか。なのに、全力出してないですよみたいなスカした態度で自分を守ってるるところとか。

「見てるだけで苛々したわ。ま、全部昔のことだけだな。今はそうでもないし、安心しな」

「私は今でも十分ムカつくけどね」

かつての通り魔の首謀者はなんの悪気もなく言った。俺は、昔の自分がまるで生き恥の塊にでも思えてきて、憤るところか逆にひどい憂鬱感に苛まれた。だが、自己嫌悪に浸るくらいならもっと出来ることがある。

「原村、ポジション交代するか」

原村は差し出した右手を引っ込めて、顎に手を当てて考えた。

「つまり、逆に僕が君の手を潰すってことか」

物わかり良すぎて怖い。

「でも待つて。僕にそんな恐ろしいことは出来ないし、小さい頃から虫一匹殺せなかった」

「その恐ろしいことを俺に頼もうとしたお前が一番恐ろしい」

俺は膝立ちになって、右手をベッドの柱にあてがった。手錠の輪を鉄パイプに固定して手が動かないようにする。手のひらに腰を当て、体重を乗せた。手錠から抜ける方法なんて、なにも原村だけが考えていたわけじゃない。俺だって策の一つや二つは練る。といっても本質は原村と同じだけだ。

枝葉みたいな無防備な手のひらが恐れのおいか震え、無言で柱に身を預けていた。腰を浮かす。顔中に脂汗がにじんできた。自分の身体を傷つけるのって、こんなに緊張するものなのか。

さっさと覚悟を決めて、せーのの掛け声一つで右手に向けて体当たりする。親指を中心に圧迫感と粉骨感が中途半端に押し寄せてきて、痛みがくる寸前に「やっちまった」みたいな見誤りを直感した。固定されたはずのベッドが頼りないくらい大きく傾いたあと、俺は激痛に負けてうずくまった。親指が変な方向に曲がっただけで、手錠の円周を下回るほどに潰せなかった。腰骨辺りの固い部位をぶつけるつもりが、思いのほか軸がぶれて尻肉を押しひしいでしまい、圧迫される力だけが余計に荷担されたようだった。さっきより濃厚な汗が全身から浮き出てきて、そのたびに折れた骨に染みた。

「大丈夫か、今泉」

枕に「頭は」とつけられそうだった。俺は憔悴して首を振る。

「そこまでやったんだ。もう一発いけ」

「ごめん、やっぱもう無理」

自分でも情けないと思うが、予想以上に痛かった。痛いものは痛い。依子からの白けた空気を感じた気がした。黙って右手を震わせながら下を向く。

長い静寂を破って浅海さんが発したのは、まるで拍子抜けするよくな言葉だった。

「ていうか俺、いとこちゃん犯すなんて一言も言っていないからね。」

手錠外すとか、手潰そうとか、俺が頭突き食らう意味だって分かんねーんだけど」

「は？」

そんな間延びした鼻抜け声を出したのは吉岡だった。

「なんで。なに言ってるの」

「だって、もう精子切れ」

「嘘。一日最高四回までしたことある」

ほんとに下品。



「あと、後輩のツレ犯すとかマジ後味悪いっつーか」

「ねえ、つまんない嘘はもういいよ。それとも何、あの子はタイプじゃないとか？ いいじゃん、平野さん絶対処女だよ」

これは失礼すぎるだろうと思った。好き放題に言われて可哀想にとベッドの方を見遣ったが、依子はぴくりとも反応せず無表情を維持していた。一度でいいからこいつの恥じる姿を見てみたい。

「ほんつとつまんない。ここまできて、マジありえない。ねえ、なんとか言つてよ」

浅海さんは言い合いにだれてソファにどかんと腰掛けた。くせつ毛茶髪を苛立たしげに撫でつけると、その辺の路地裏にいそうな野良猫のような毛並みになった。それに感化されたアンジェリーが膝の上に寝そべってくると、彼は不動の置物みたいになった。

俺は一方の異変にも気づいた。早川と原村の奇妙な目配せだった。立ち往生する吉岡と澄まし顔の依子の睨み合いとは対照的に、原村と早川の目配せの意図は読みとれない。

「いい気なもんだな、沙樹。昔みたいに高見の見物か」

突然、原村が何か揶揄したように言った。

「僕も一緒だつて言いたいんだろ。家族から逃げて、隠れるように暮らしていたんだつて、そう言いたいんだろ」

「違う」

早川は首を振った。原村が吉岡に目を向けると、彼女はさらにうるたえる素振りを見せた。

「吉岡、君は本当に、沙樹のためにこんなことをしているのかな。違うだろ。ただ、楽しかったからじゃないか。そうだよな、いじめのつて、本当はすごく楽しいことなんだ。そうだろ。誰かをいじめるとききの君、すごくいい顔してたぜ」

原村は鎖を引いて吉岡にぐんと近づいた。細く堅牢な柱が悲鳴を上げる。吉岡の顔がゆがんだ。

「おら、言えよ。いじめるのは楽しいですつて。一本の手錠にもがく姿とか、スタンガンでバチバチやられたときの不細工な顔とか、

友達を傷つけられて怒り狂う様とか、見ていてすごく楽しいですってさ」

吉岡は一步後ずさった。原村の引きつった右手首が赤くなり、やがて血がにじんだ。

「結局自分のためじゃないか。証拠に沙樹の顔を見てみるよ。ぜんぜん楽しそうじゃない。むしろ異常者を見るような目つきだよ。なにが沙樹のためだ。こういうの、吉岡論で何て言うんだっけ。人を思いやることに真剣じゃない？」

次の瞬間、吉岡は堅く握った拳を振り抜いた。乾いた音が鳴り、原村の青たんが切れ、赤い液体が一筋伝った。

「ずっと、沙樹のこと見捨ててたくせに」

「で、君があいつのこと見ていてあげたんだな」

「当然。友達なんだから」

「それ、本当に友達だったの」

吉岡がポケットからスタンガンを抜いた。原村は即座にその手をつかんで止めたが、彼女は蹴足で彼の足をすくって転倒させた。

原村の腹に膝が落とされる。そのまま上に乗しかかると、むき出しの首もとにスタンガンを押しつけた。

「何が言いたいのか？ このまま殺してあげてもいいんだよ」

「じゃあはつきり言うよ。君には最初から友達なんかいなかったんだ。そっちで煙草ふかしてる君の親戚がいい例だな。誰一人として君を心の底から信頼してくれる人なんかいなかった」

トリガーに指がかかる。

「美野里」

躊躇うような声が上がった。早川は手元で合わせた手の甲に深く爪を突き立て、すり潰すようなおぼつかない声色で言った。

「私を使って、誰かを痛めつけるの、もうやめてよ」

吉岡は振り返る。早川を凝視するその目は、驚きに見開かれていた。

「これ以上、お兄ちゃんや平野になにかしたら、」

友達、やめるから。

早川は消え入りそうに言った。言葉の端が聞き取れないくらいだったが、吉岡の瞳が失意や焦りに替わるにはそれで十分だった。

スタンガンが床に落ちる。原村の首にかかった手が放されると、吉岡は一度よろけて立ち上がった。早川は絡ませた両指を外し、両手をぶらさげた。頬を緊張させ、彼女が歩み寄るのを黙って待った。早川の腕をとり、吉岡は甘えるような上目遣いでした。

「何もしなかったら、友達でいてくれる？」

「うん」

「もしかして、原村くんが言う通り、こういうの沙樹は嫌だった？」

「嫌に決まってるじゃない」

「ごめんね、私、なんか勘違いしてた」

「私もごめん。美野里があんまり怖いから、今まで何も言えなかったの」

吉岡はもう早川の胸に顔を埋めていた。まるで母親のように彼女の頭を撫でる早川の姿は、この場の雰囲気には全くなじまず俺たちを置いてけぼりにした。

「ぶつちやけ、もう疲れたでしょ？ 美野里、いろいろと頑張ってたもんね」

「うん、疲れた」

「じゃあ、もうひどいことするの止めよ」

「うん、止める」

早川の、半ば呆れたような微笑みが俺たちに送られた。あまりのあっけなさに肩の力が抜ける。その途端、思い出したように壊れた右手が悲鳴をあげた。小さくうめきながら、俺は抱き合う早川たちを眺めて首をひねった。

吉岡の幼児化したような笑えてくる拳動より、むしろ早川の変貌ぶりを不思議に思った。原村から肩を叩かれる。彼の意味深な笑みと立てられた親指がこちらを向いていた。

「あらかじめ沙樹に魔法をかけておいた」

あまりに意味不明で気持ち悪い発言。さりげなく無視して、今度は最後まで一言も発しなかった依子を見た。

依子はぼんやりと口元を開いて、まばたきもせず早川と吉岡を静観していた。

ふとしたきっかけからあっさりと幕を閉じた監禁事件の直後。

原村は、今までのことが嘘みたいに早川を連れ立って帰路に着き、浅海さんと吉岡とアンジェリーは謝罪も挨拶もなしにセダンに乗ってそのままどこかへ出かけていった。

俺は依子を連れ、共働きで両親が家を出払っている俺の家に招き入れた。シャワーを貸して身だしなみを整えさせ、旅行出発前となら変わらない状態で家に帰した。俺は納戸に籠もり、折れた親指に添え木を当てて包帯を巻いた。この怪我のことを家族にどう言い訳するか悩んだが、依子にぼこられて顔面ゾンビ状態になったときも誤魔化したから、どうにかなるだろうと楽観して家族の帰りを待った。

三日振りに開いた携帯には、鍋島と城川からのメールや着信が鬼のように届いていた。後半はほとんどがシーパラダイスを無断でばっくれたことへの心配事だったけど、最新のメールでは鍋島の殺意を剥きだしにした文面が目だったので、俺は申し訳なく思いながらも返信をあきらめて携帯を閉じた。

夏休みが終わるまで、漫然とした不安を抱えながら残りの休日を過ごした。

あれからテレビや新聞をこまめにチェックしていたが、一文たりとも、あの誘拐監禁を記事にしたものはなかった。みんな考えることは同じなのか、野暮に吉岡たちを通報するような者は、あの場にはいなかったようだ。

本当にそうなのか。俺たちは別に、彼女たちを許したわけではない。謝罪を聞いていないのだから、それは当然と言える。夏休みが明けるまでに何かしなくてはならないと、俺は天からのお告げよろしくひしひしと感じていた。しかし何も思いつかず、特別に誰かに連絡を取るわけでもなく、ついに二期が始まってしまった。

依子や城川へのいじめは、二期開始とともに自然消滅することとなる。主犯の吉岡が一時的に息を潜めていたからかもしれない。

しかし、このクラスのいじめがそれで終わるわけがなかった。いじめの矢面が、予想だにしない所に向いた。

chapter 55 - トライアングル - (後書き)

最終回までカウントダウンとなりました。

夏休み明けの全校集会を終え、教室で一時限目を終えたあと、鍋島からの恨みがましい視線に俺は耐えかねていた。仕方なく後ろを振り返ってみる。

「どうだった、シーパラ」

「どうだもこうだもありませんよ」

鍋島は顔をうつむかせた。

「二人つきりでしたよ、城川さんと」

それつきり黙りこくってしまふ。例の誘拐監禁のことは、鍋島たちには何も教えていない。ただ、ただならぬ事情だけは察したように、俺の包帯に包まれた親指を見つめていた。

「ごめんつてば」

「別に、もういいですけど」

俺は右手をポケットに差し入れながら、鍋島から視線を逸らして前に向き直った。

教卓の方では、早川や吉岡を含む女子グループが談笑しあう姿があった。その中に居た村瀬彩音が、時折こちらをうかがっているのに気づいた。

昼休み、久しぶりに旧校舎屋上へ出向くことにした。九月の空は灰色に覆われ、うねった巻き雲が不気味に映えた。

屋上にいたのは、一学期同様に貯水タンク際でスケッチブックを広げる原村と、フェンスを背にして座りこむ村瀬だった。二人はちよつど対面する位置取りで、ひと雑談を終えた余韻に浸るよう互いに曇った空を見上げていた。

煙草に火を灯してコンクリートを見下ろす。シーパラダイスのチケットの破片が、しわを寄せたまま乾いて地面にへばりついていた。

「おつす今泉」

村瀬が手招きをする。俺は彼女の隣に座り、錆びたベンチに背中を寄せた。原村がスケッチブックに鉛筆を走らせ始めた。

「今さら何の用だよ」

「今さらって、まだあのこと根に持つてる？」

チケツトを返してきたことを言いたいのだろう。俺はかるく首を振った。

「そうじゃなくて。ここってさ、俺と原村の縄張りみたいなもんだから」

「うっわ、ホモくせー」

「レズに言われたくない」

あたしはレズじゃねえ、そういう返答を期待していた。しかし肯定も否定も返ってこず、村瀬はなにか意味ありげに煙草の先端から噴出する煙を目で追っていた。

「なんだよ」

「あたしも煙草吸う」

「お前、この前駄目だったじゃん」

「いいから、黙ってよこせ」

俺はここで初めて村瀬の顔を見た。彼女はとくにこれといった感情を露わにしておらず、俺の目は自然と、トレードマークの赤縁眼鏡と前髪を全開にした自己主張の激しいおでこにいった。村瀬に従い、黙って煙草とライターを差し出す。彼女は箱から一本引き抜き、口にくわえた。火を点けようとするが、風のせいでうまく着火できないようだった。

ライターを奪い返し、代わりに点けてあげることにした。着火源に掌をかざし、手の甲を防風壁にすると、なんとか火は灯った。

「ありがと」

軽くせき込みながら村瀬は無理して煙草を吸った。なんとなくその姿は痛々しく見えた。

「男っていいよな、煙草似合うし。女が吸っても嫌われるだけだ」



「うん」

「煙草吸ってる今泉、かつこいいよ」

「どうも」

雲が細く割れ、昼間の太陽が覗いた。俺はその光を見守った。煙が目にしみたのか、村瀬の目元には涙が浮かんでいた。それを指でこすって彼女は言う。

「あたし、男に生まれてくりゃよかった。超めんどくせーんだぜ、女の付き合いつて。あいつはどんな奴だとか、あの子が最近調子に乗ってるとか、うざいだのなんだの、色々。そんな気が滅入るような陰口ばつかで、平気で盛り上げられるんだぜ女つて。一触即発、お世辞と差別の応酬で、評判第一。あたしもつかうかしてたら揚げ足取られるかもつて、ここんとこ心配でならないよ」

最近、村瀬が女子の誰かに抱きついたりするスキンシップを控えているような気がしていた。村瀬は頭の後ろで両手を組み、俺と同じく、くわえ煙草で空を仰いだ。

「あたしが男だったら、絶対、今泉やアッキーと友達になるのになあ。ねえ、アッキー」

原村は一瞬だけスケッチブックから顔をあげ、にこやかに手を振った。俺は村瀬の横顔に話しかける。

「意外だな。村瀬が男だったら、もつと喧しい男子のグループに入りそうだけど」

「そうでもないよ。あたしは女だから、わざとこーいう風に姦しくしてんのさ。もしあたしが男だったら、今泉みたいな冷めた野郎共とつるみたいね」

「意味分かんねえ」

「だって、楽ちんそうじゃん」

俺らは俺らで関係保つの大変なのに。

あーあ、そう村瀬はぼやいて、地面に灰を落とす。

「夏休み、終わっちゃったね」

「だな」

「ねえ、今泉」

「なに」

返事が来ないので、俺は村瀬の顔を再度仰ぎ見た。村瀬の煙草に火は点いていなかった。火種ごと灰を落としてしまったらしい。地面に落ちた灰が赤く熱を帯びていた。それが燃え尽きるまで、彼女は消えゆく火種を見つめ続けた。

「あたしと付き合わない？」

俺は何も言えなかった。

「やっぱ、平野がいるから駄目か」

若干苛つきながら煙草を吸う。村瀬がポケットから出したものに気づくと、俺はさらに絶句した。

「駄目でもいい。付き合わなくなたっていいから、一回だけ、相手になつてほしい」

煙草を地面に押しつけて、村瀬が手にするコンドームから意識を逸らした。目頭を押さえてため息混じりに訊く。

「どうしたんだよお前……」

村瀬の顔つきは真剣であり、やはり痛々しくもあった。

「こうして他の連中に必死こいて着いていくばかりだとさ、だんだん分からなくなるのさ。誰が本当の友達だったのかとか、性別の区切りとか、恋とか愛とか友情とか。もしかしたらあたし、何も分かってないのかもしれない。あいつらが夢中になる恋愛やセックスって、友情なんて簡単に蔑ろに出来るくらい、本当はすごく良いものなのかもって」

ゴムを押しつけられた。指でつまんで、嫌々ながら手の中でぶら下がる四角い袋を見遣る。

「すっかりビビっちゃってさ、あたし。美野里や沙樹や、由多加や平野も、何考えてんのか全然分かんなくて。ほんと怖い。知らないでいること、すげえ不安っていうか。訳分かんなくなって、思わず誰か攻撃したくなる。これビョーキだよな、もう」

「だから、とりあえずやってみようってこと？ 好きでもない男と」

「よく分かんない。してる間に、今泉のこと好きなるかもしれないじゃん」

「安く見られてるな」

つまんだものを後方へと放る。それは音もなく屋上の下へと落下していく。もしも今、下を歩いている者に見られていたらどうなるだろう。空からゴムが振ってきたって、一種の怪奇現象として話のネタにされそうだ。

あっ、と短く声を上げて、村瀬はフェンスの間からはるか下の地面を見下ろした。

「なんで受けてくんないの。あたしも恥を忍んで頼んでんだぜ」

「童貞の無駄遣い」

村瀬はむっと顔をしかめて、おもむろに立ち上がった。いきなりフェンスを蹴りつけられ、俺はびくりとして彼女を見上げる。村瀬は俺を睨み据えていた。何か罵倒がくるかと構えたが、結局彼女は何も言わなかった。ため込んだフラストレーションを足踏みに変え、荒々しく屋上出口へと歩いていった。

ばん、と鉄扉が閉められる。

原村は全く動じず、我閉せずで絵の世界に入り込んでいた。

「どう断ればよかったんだよ、俺」

原村は鉛筆を動かせ続けたまま答えた。

「僕は、『非常に嬉しいお申し出ですが、ご遠慮しておきます』みたいな感じで、丁重にお断りした」

「お前も誘われたのかよ」

それから数日後の放課後。真っ先に教室を出て自転車置き場に行くけど、そこには激しく口論しあう二人の女子がいた。吉岡と村瀬だった。

自転車通学ではない二人がそこにいるのは珍しく、しかも放課後開始からまもなくという時間帯だったので、俺は不審に思いながら

自転車小屋の陰に身を隠した。

「話はそれだけかなあ。私、教室に沙樹待たせてるからそろそろ帰りたんだけど」

吉岡は小屋の柱に寄りかかり、だるそうな目つきで村瀬を見返していた。村瀬は今にも彼女に掴みかかりそうにしている、その手を抑えるようにそばの自転車のハンドルを握っていた。一体なんの偶然なのか、俺の自転車だった。

何も言えないでいる村瀬に呆れ、吉岡はその場を後にしようとする。村瀬が吉岡の腕を捕まえて止めた。

「待ってっつの。ちゃんと答えていけ。なんでいじめのこと、先生にチクったんだよ」

「だって、もう平野さんと心結ちゃんが可哀想だよ。私もだんだん嫌になってきちゃった。沙樹だって言ってたし。もう止めさせようって」

「だったら、どうして美野里と沙樹だけはやってないことになったんだよ。五時限目のあとで宮下先生に呼び出されたよ。美野里から相談受けたんだって。こんなの、絶対おかしいじゃんか。美野里たちだけいい子ちゃんぶってさ」

吉岡は捕まれた手を振りほどき、唇の端をゆがめて笑った。

「当然でしょ。私は直接、平野さんたちをいじめたことはないんだし。沙樹は昔やってたかもしれないけど、ちゃんと平野さんに謝ったこともある。皆の前で、もう止めようって言ったことだってあるじゃん。いまだにいじめ続けてるのって、彩音ちゃんたちだけでしょ？」

村瀬は耳を疑うように、飄々と言ったのける吉岡を呆然と見ていた。

「彩音ちゃんも、今のうちに止めといた方がいいんじゃない？ やっぱさあ、高校生にもなっついていじめなんてダサいし、いき過ぎると内申にも響いちゃうかもよ」

吉岡はくすりと笑って、村瀬の横を通り過ぎていく。俺は後ずさ

り、前方を通り過ぎていく彼女を見送った。

再び自転車置き場へと目を向けた。村瀬はうつむき、両手を震わせていた。

突然、勢いよく俺の自転車が蹴られる。自転車は耳障りな音を立て、地面に倒れた。

「ふざけんなっ……」

村瀬の瞳が憎悪に染まっていることを知り、俺は自転車について言及するタイミングを失った。地面に置いた学生鞆を肩にかけ、その後ろ姿に黙って近づいた。

倒れた俺の自転車を二、三度蹴りつけていた村瀬だったが、俺が後ろに居ることに気づくとすぐに足を止めた。赤くした目を伏せ、そっぽを向く。

掛けるべき言葉を迷っているうちに、彼女は校門へと駆けていった。

次の日から、依子と城川へのいじめはびたりと止まった。しかしそれは、クラスの女子たちが吉岡をいじめるための前触れでしかなかった。

九月も中旬に差し掛かるころ。旧校舎の屋上へと続く道すがら、軽音部や合唱部などの音楽系部室がやけに騒がしいなと思っていたら、どうやら文化祭が近いらしい。

次に文化祭のことを意識したのは、その日のHRでのことだった。宮下の説明のあと、クラス委員長である鍋島が教卓に立ち、二組の出し物のアイデアを募った。消極的に席でうなだれ、他力本願に徹する俺とは反対に、教室内では様々な意見が飛び交った。

真っ先に切り落とされた意見は曾根本の『仮装喫茶』で、逆に指示率が圧倒的だったのは添野が提案した『プラネタリウム展示』だった。鍋島によると、プラネタリウム展示は偶然にも他クラスでは出なかったアイデアらしかったので、添野の出した案はあっさり採用された。

「出し物も決まったようなので、他に部活や委員会などから伝達事項があればお願いします」

鍋島が事務的に言うと、やや間を置いて依子が手をあげた。

「図書委員会では、図書室で漫画喫茶をすることになっていきます」  
依子の声を聞くのは、俺含めクラスメイトたちも久しぶりだっただろう。

「いま、図書委員で漫画をあつめているんですけど、喫茶店を開くには委員会だけでは十分にあつめられないみたいです。なので、それぞれ誰かから漫画をかしてもらって、このまえ会議でいわれました」

若干要領を得ない伝達を終え、依子は席に着いた。言われたからなんだというのだろう。つまり依子が言いたいのは、このクラスの中に漫画を貸してくれる者はいないか、ということだろう。鍋島はタイミングを計りかねたようにワントンポ置いて、教室を見渡した。

「えっと、そういうことなので、貸しても構わないという方、ぜひ平野さんに声をかけてくださいな」

なにか触れてはいけないものに触れてしまったような気がおとずれ、教室内が一気に静まり返った。

「では、他に伝達があれば……」

「あ、あの」

ためらいがちに城川が挙手した。

「どついう漫画を、あつめればいいんですか？」

依子は席に着いたまま、軽く城川を振り返った。一度口ごもって答える。

「図書委員は男子が多いので、少年漫画と青年漫画はだいぶあつまつてる。でも、少女漫画がすごくすくないです」

その発言のあと、クラス中がざわざわと沸き出した。気のせいではなく、クラス間の空気が少しだけ和らいだようだった。女子の一人が気さくに声をかける。

「ねえ平野。私、NANA最新刊まで全巻持つてるけど、どうする？」

「なな」

「そうNANA。うそ、知らない？ 明日持つてきてあげよっか」  
依子は意外そうな顔をしてうなずいた。

「もつてきてくれたら、うれしい」

今度は依子の隣の男子が話しかけてきた。

「オレ、けつこー漫画オタクだからさ、今度いい感じの持つてくるよ」

「ありがと」

素っ気ない返事に聞こえなくもないが、そもそも依子が素直にお礼を返す姿が珍しかった。彼女の態度に気を許したクラスメイトたちが、次々と依子に話しかけていく。微笑ましいというより、俺はむしろその光景が不思議でならなかった。もう二度と見られないのではないのかというくらい、二組の生徒は依子を中心に話題を広げ

ていた。

「あんまいつぱい持ってきても逆に困らない？」

不自然さを払拭できず、俺は教室後方から教卓を見た。出し物の意見を募ったときより盛り上がるクラスに鍋島は戸惑い、しかしどこか楽しげにまとめ役を努めた。

「漫画喫茶ですから、漫画の数が多いに越したことはないと思います。でも、あんまり多すぎると平野さんが図書室に運ぶときに大変ですよ。じゃあ、こうしませんか。持ってきてくださった方は平野さんや私に一言伝えて、ご自身で図書室に運ぶようにしましょう。委員会の人たちも助かると思います」

「暇つぶしに、漫画読みに図書室いいっていい？」

ある男子の脳天気な質問に、鍋島は苦笑した。

「文化祭の準備に支障が出ない程度でなら、いいんじゃないですか」  
教卓横でパイプ椅子に座る宮下がご満悦そうに言った。

「この機会に皆さん、どんどん図書室に遊びにきてください。井上雄彦漫画なら宮下が一冊残らず用意してるからね」

「漫画喫茶って、もしかして宮下先生の案じゃねーの？」

「当然です」

ささやかな笑いが巻き起こる。皆が楽しげにざわめく中、一人煮えきらない表情を浮かべていた吉岡が直接依子に話しかけた。

「平野さん」

隣の男子の漫画談義に耳を傾けていた依子が、ふと顔をあげた。

吉岡と依子を挟んだいくつかの席の生徒が一瞬沈黙する。

「喫茶店って言ったけど、つまり、お客さんに飲み物やお菓子を出すってことかな」

「うん。コーヒーとか、紅茶とか、クッキー」

「なら、私たちが貸す漫画が汚れるかもしれないよね」

俺の位置からは彼女らの会話は耳を澄ませなければ聞こえないが、吉岡の小姑じみた突っ込みはたしかに耳に届いた。依子はうまく答えられず、視線を天井へと泳がせた。



二人の会話に横やりを入れたのは村瀬だった。

「んなこと、わざわざ言わなくてもみんな分かっていると思うけどな。その上で貸してやるつつってんだろ」

和気藹々とした空気の中で、村瀬の口調には棘があつて浮いていた。生徒の大半が歓談を止め、彼女たちに視線を集めた。

「分かつていない人もいそうだから、私はそのわざわざを言ったの」「あ、そう。つくづく抜け目ないっていうか、なさすぎっていうか。ていうか美野里さ、さっき『私たちが貸す』って言ったよね。美野里もなんか漫画持ち寄ってくれるわけ？」

吉岡は不快そうに村瀬と視線を合わせた。

「それは、分かんないけど」

「そっか。言葉のあやつてやつね」

「ねえ彩音ちゃん。それとこれとは今関係なくない？ 私は、漫画を集めるにしても図書委員からの説明が足りないんじゃないかって、そう言いたいだけで」

村瀬は失笑気味に言い返す。

「スカしてんじゃないよ。どうせ平野に協力する気なんかないんだろ。また下らないいちゃもん、あれこれ考えてたんじゃないの」

「なにそれ。なにを根拠に言ってるの」

この頃には、余計なお喋りをする者はいなくなっていた。主に、不信任を露わにした女子たちの目が吉岡へと向けられていた。それは今までにない異様な光景で、裏でなにか意図的な力が働いているとしか思えなかった。

再び静寂する中、鍋島が感情を抑えた声色で場を制した。

「いま二人が話し合っていたように、貸した本が汚れることも考えられるので、それでも構わないという人だけ、協力してください」

HRが終わり、教室を出て図書室に向けて廊下を歩いていると、とある二人組の女子に呼び止められた。

「今泉くん。最近、平野さんのお父さんが亡くなったって本当？」  
シヨートヘアーの女子から尋ねられ、特に隠す必要もないので俺はうなずいた。

「吉岡が平野さんの私物を隠したから、そのせいでお父さんの最期を看取ってあげられなかつたって聞いたけど」

吉岡が、という言い方を俺は不審に思った。まるで、吉岡の単独犯だともいうような物言いだ。もう一方のセミロングの女子が間髪入れず言う。

「それは本当らしいよ。問題はその後で、平野からパクった思い出のストラップ、平野の目の前で踏みつぶしてみせたって話。それもマジなの？」

真偽を問う視線を浴びせられ、俺は疑心暗鬼に答える。

「ストラップ潰されたのはマジだけど、でも、依子の物隠したのって……」

「ほら、実話だったじゃん。あーあ、やっぱり吉岡って頭イカれちゃってるよね」

俺の後半の台詞は故意にさえぎられた。女子二人組はひそひそと陰口を応酬しながら俺の横を通り過ぎていく。俺は、二人の背中から後ろめたさのようなものを感じ取った気がして、あの二人も依子の物を隠した犯人だったのではないかと疑った。

クラス展示の準備が始まって間もないことだった。

教室にプラネタリウムのドームを作る作業に、二組全体が没頭していた。俺もその一人になるはずだったが、俺だけ生徒会やその他委員会が担当する模擬店を手伝わされる羽目になってしまった。ドーム作りを抜け出して煙草を吸いに行くと、鍋島に見咎められたのだ。

「ちようど良いところでサボってくれましたね、今泉くん」

屋上の隅っこで屈んで喫煙している俺の後ろから、気配もなく鍋

島の声がかかってきた。

「意味不明なこと言うの止めてくんない。これ吸ったら作業に戻るから」

「いいえ、もう来なくて結構です。いま戻っても皆からブーイングを食らうだけです。その代わり、今泉くんにはもつと忙しい場所を手伝ってもらいます」

模擬店をやるには、もともと生徒会と委員会だけでは人員が足りなかつたらしい。全クラスから一人ずつ手伝い要因を選出するそうだ。運悪く、この一件で俺が選ばれてしまった。

「それより、早川さんと吉岡さんはここには居ないんですか？」

「なんのこと」

「あの二人も、作業抜け出しちゃってるみたいなんですよ」

鍋島は難しい顔をして、指でおさをいじった。

模擬店の準備は旧校舎側で行われる。放課後、東棟と旧校舎をつなぐ渡り廊下を歩いていたらと、ふと俺は足を止めた。

視線の先には中庭と、そこに設置された屋外用の手洗い場があった。鍋島の捜していた二人は、その手洗い場に居た。

早川は手にしたタオルを蛇口につけて濡らし、それで吉岡の顔や髪を拭いていた。九月中旬と言ってもまだ日差しが強い。しかし、彼女たちは決して避暑のためにそんなことをしているわけではなかった。

本来なら素通りすべきかもしれないが、老婆心に駆られ、俺は二人のもとに近づいた。早川が手を止めて俺を見つめた。吉岡は彼女の手からタオルを奪い、再び水を含ませて髪を拭いた。彼女の髪にへばり付いていた青いペンキは、中途半端に乾いたまま白いタオルを汚した。

「空き教室で看板作ってたら、美野里、いきなり女子のみんなに囲まれて」

そこで早川は言葉を切つてうつむいた。彼女はポケットから、吉岡の携帯電話を取り出した。デコレーションされた派手な二つ折り携帯は無残にも逆側に開かれ、所々ペンキで汚れ、折れた箇所からは剥き出しの基盤が覗いていた。割られたディスプレイには靴跡らしきものが残っていて、そこには早川の泣きだしそうな顔がいびつに映っていた。

吉岡は既に体操服に着替えており、ひたすら顔に付着したペンキの残骸を落としていた。しだいに汚れていくタオルに、俺の心は複雑に痛んだ。彼女は布の端で目と口元を隠した。

「ほんと下らないよね。うちのクラスって」

声の調子だけは、いつものように高飛車に繕われていた。

「誰かの言葉に流されるだけの指示待ち人間ばっか。自分の意志も主張出来ないくせして、周りとの連帯感ばかり意識して、それで強くなつた気であるんだから。虎の威を借る狐、素知らぬ顔で手のひら返し、おててつないでみんなでゴール。中身の無い人間がやりがちなことだね。ほんと、見下しちゃうなあ」

タオルを首にかけ、吉岡は東棟校舎を見上げる。その瞳には悪意から生じる歪みはなく、ただ純粹な哀れみだけが込められていた。

その日、城川が雀の墓を作りたいと言い出したのは、一学期以来のことだった。

昼休みと五時限目に挟まれた校内清掃の時間。彼女は雀の死骸が入ったビニール袋を手に、裏庭にあらわれた。同じ持ち場である鍋島はちょうど、生徒会室で文化祭経費の計算を手伝っているところだった。

「また靴箱に入れられてたのか？」

「これは、ちがう。わたしのに入ってたんじゃない……」

城川は言いにくそうにして言葉を濁した。俺も念のためそう尋ねただけで、これが誰の靴箱に入れられていたのかなんて、本当は検討がついていた。城川が自責の念に駆られるのは他人の靴箱を勝手に開けてしまったからに違いない。

校舎裏の湿った砂地に墓穴を掘っていると、体育座りで座る城川がぼつりと言う。

「あのとき、ここで宮下先生が言ったこと、やっと分かった気がする」

ガーデニングスコップを斜めに地面に突き立て、隣で雑草をいじる彼女の指先に目を落とした。

一学期の最後、ここで雀の墓を作ったとき、たしか俺と城川でほとんどの雑草はきれいに抜き取ったはずだった。なのに見渡してみると、通路一带は前よりずっと無秩序な雑草地帯になっていた。はからずも、雀の死骸が土を豊かにしてしまったのだろうか。

「なんて言ってたっけ、宮下先生」

「全ての人間に共通する正義はあり得ない。だからコンフリクトが生まれる。正義がないなら、悪だって考えてはいけない。それを知ってなお不誠実なままなら、わたしたちはきつと後悔する、って」  
指に絡みつく草の葉を見つめながら彼女はそらんじるように言っ

た。

以前俺は、夏休み中にふと宮下の言葉を思いだして、コンフリクトの意味を調べたことがある。

コンフリクトは様々な言葉で表現されていた。和訳すれば、つまり衝突であり、軋轢であり、葛藤でも当てはめられる。ある種の競合状態を意味しており、また、二つ以上の個人や集団の間に生じる、対立的ないし敵対的な関係を指している。

その多くは経済学や企業で用いられる言葉だが、おそらく今の俺たちの状況もコンフリクトに分類されるのだろう。

風が湿った空気を持ち去る。とはいえ清涼感はあまりなく、湿気の立ちこめた空間は風が吹き止むたびに維持された。

「先生が言った、後悔するって、たぶん、自分だけが後悔するってことじゃないんだと思う」

城川が右手のひらを差し出した。その手にスコップの柄を乗せる。「みんな、わたしと同じだから。みんなも教室のどこかに、神さまとか、悪魔みたいな、そんな絶対的な存在がいるって信じてる。上からじつとわたしたちを観察する神さまや悪魔がいて、わたしたちは目を閉じて耳をふさいで体を丸めるばかりで、抵抗する力もなく操られるだけで、いつも何かに怯えながら毎日を過ごしている」

もしそんな存在がいれば、さしずめ、いじめられる人間は生け贄というところだろうか。生け贄を差し出して、自分たちの身の安全を確かめるように。

「神さまも悪魔も、そんなの、本当はいるわけないのに」

城川が墓穴を掘りあげた。俺はすでに、両手に一匹の雀を抱えていた。穴の中に寝かせると、しばらく二人で雀の寝顔を眺めた。

「なんか、ちゃんと喋れるようになったな、城川」

「わたし、今度こそ、変わるって決めたから……」

そう宣言する城川は、自分の台詞が恥ずかしくなったのか、急に語尾を小さくしてうつむいた。

生徒会室にて、名前も知らない生徒会役員とともに文化祭の客引き看板にコサージユの飾り付けをしていると、入り口の方から鍋島由多加が入ってきて、いきなり俺を呼びつけた。

「これはちょうど良いところに。今泉くん、コピー室まで着いてきてください。仕事があります」

鍋島は見事なまでの棒読み台詞だった。疑わしい眼差しで見つめていると、隣の寡黙な副生徒会長に「さっさと行ってさっさと戻ってこい」と急かされた。俺のサボり癖に、彼はすっかり辛辣な態度を身につけてしまっていた。

鍋島の焦る歩調を追い、コピー室に入る。彼女は一度扉から顔を出して廊下の人通りを警戒し、そっと扉を閉じた。

「わざわざ今泉くんを呼び出したのは、他でもありません」

「やっぱり仕事じゃないのかよ」

「あ、いえ。仕事もあります」

鍋島から一枚のA4用紙を渡される。文化祭のポスターだった。うちの制服を着た謎の金髪女が描かれている。ギターを手に、躍動感ほとばしるジャンプをしていた。結構上手い。

「これ、鍋島が描いたの」

「なんで分かったんですか」

「いや、適当に言っただけ。鍋島って絵上手かったんだな」

「元美術部なんだから、これくらいは描けます」

ちよつと照れくさそうに言っつて、鍋島はそばのコピー機を指した。八十枚ほど印刷しろ、と命じてくる。

こんなもの、俺に手伝わせなくても一人で出来そうなものだが、しかし本題は別にあるという。

「実は、そろそろ告白しようと思っているんですけど」

「そうなの」

印刷設定に苦戦しながら相づちすると、鍋島が幾分憤慨した。

「真面目に聞いてください。今泉くんにも作戦を考えてもらおうと

思っているのに」

「作戦もなにも、もう原村には好きって伝えてあるんじゃない」おもわず口を滑らせる。

「なんで知ってるんですか？」

「いや、勘でそう言っただけ」

「勘？ それならいいですけど。あまりいい加減なこと言うの止めてくださいね」

本当は勘じゃない。彼女が原村のアパートに乗り込んでいったことは、もう原村本人から聞いていた。俺がそのことを知ってるって分かったら、なんとなく怒られそうな気がする。

「そうじゃなくて、今度こそちゃんと告白したいんです。成り行きとか、その場の流れとかじゃなくて、ちゃんと」

印字の途切れたポスターが出てきた。慌ててリセットボタンを押す。紙を正しくセットし直す。

「聞いてます？ それで、告白するときって、その、何かプレゼントとか用意した方がいいんでしょうか」

「なに、プレゼントって。お前いつの時代の人間だよ」

半笑いで顔を上げる。鍋島が顔を真っ赤にして硬直していた。

「いや、ごめん」

「もういいです。今泉くんには相談しません」

鍋島は腕を組んでパイプ椅子に腰を下ろした。もう何を言っても駄目そうな空気だった。気まずい思いでコピー機に向き直る。

「昭文くんって、最近どうなんですか」

相談しないと聞いた矢先だ。これが乙女の気まぐれなのか。

「なんだよ、どうって」

「村瀬さんと、どうなんですか」

「村瀬？」

天井を見上げて考える。何故ここで村瀬が出てくるのかよく分からない。鍋島はパイプ椅子で縮こまり、頭を垂れ、手元で指を絡ませていた。まるで先生からお叱りを受ける小学生のように。



「最近、屋上へ出入りする村瀬さんをよく見かけます」

それで納得する。村瀬はあれ以来、やたらと俺や原村とつるみたがつている。原村はどうか知らないが、俺ら以外の人間が頻繁に屋上に訪れることを俺はよく思っていない。いや、今はそんなことどうでもいいか。

「別に、普通だよ。あいつ、ここんとこ早川や吉岡と上手くいっていないみたいだし。新しい友達探してもしたいんじゃないの」

「私、村瀬さんになら、昭文くんのこと取られてもいいかなって思うんです」

ちようど設定し終えた俺は、疑惑混じりに鍋島を振り返った。

「大丈夫かよ鍋島。いきなりなにを言い出すんだ」

「村瀬さんはきつと、友達に失望しているんです。私たちが、村瀬さんを裏切り続けたのがいけないんです。彼女はきつと、新しいものを求めているはずですよ。今はたぶん、男の子ならどうかなって」

「なんでそうなるかな」

「昭文さんに伝えてください。私と村瀬さん、好きな方を選んでくださいって」

張り飛ばしてやろうかこいつ、と思ったが、残念ながら相手は女子だった。

「お前、村瀬のこと哀れんでるだろ。色んな友達に見捨てられて、憂さ晴らしに吉岡をいじめて、ついに男にまで手を出そうとしてる村瀬に、ただ同情してるだけだろ。馬鹿じゃねえの。そんなんで好きになやつ取られてもいいとか言い出すんだからさ」

「なにが馬鹿なんですか」

鍋島の声色はおぼつかない。

「一人ぼっちは、寂しいじゃないですか」

「だからって……」

突如しおらしくなった鍋島に俺は戸惑う。叩くように印刷機のスartetボタンを押した。

「私たちが彼女の寂しさを埋めてあげられなかった。それなら、責

任を取るのも私たちじゃないですか」

「それが馬鹿だつて言つてんだよ」

これから自分が言うべき言葉を、胸の中で何度か繰り返してみる。とにかく恥ずかしい台詞だが、それ以外の言い回しが思い浮かばないのだから仕方ない。

「もう一回、あいつと友達になつてやればいいだけだろ」

あとはよろしく、そう言い残してコピー室を出る。背後で椅子を立つ気配を感じ取ったが、俺は構わず廊下を進んだ。

土曜日。

夏休み中に原村の携帯代を稼ぎきれなかった俺は、学校の目を盗んでバイトに精を出していた。

喫茶店ソレイユに到着し、従業員ルームで着替えていると、浅海さんがくわえ煙草で入室してきた。

「禁煙つすよ、ここ」

「お、わりーわりー」

あの事件以来、俺はぎこちない思いでバイト先に足を運んでいた。浅海さんが不自然なくらいいつも通りに接してくるせいだ。いや、不自然と感じてしまうのは俺だけだろうか。

午後二時。

癩癩爺さんの相手を済ませて、店先のスタンド灰皿で一服していると、駐車場の先から早川沙樹がやってきた。

「アキラくんはいる？」

早川はすこし興奮気味に詰め寄ってきた。俺は半歩後ろにさがつて、後方の喫茶店の扉を流し見た。

「いるけど」

「今泉は、いま休憩中？」

「うん」

「じゃあ、私が出てくるまで、お店には入ってこないで」

店員を相手取って店に入って来るなどはどういう見だろう。俺が何か言う前に、早川はソレイユの扉を開けた。それで勢いよく閉めるものだから、ポニーテールが扉に挟まって小さな悲鳴を上げていた。

ただ事ではない何かを感じつつ、落ち着かない気分で店頭のベンチに座る。

昨日までとは打って変わって、空は晴天。煙草を三本消費した。

待機すること二十分。ため息混じりの早川が店から出てきた。手招きをして、ベンチの隣を指し示す。ここまで来て、訳も聞かずに彼女を帰すわけにはいかなかった。

「なんかあったの」

早川は入店時とは反対に、生気の抜けた目で青空を眺めていた。履いていたサンダルを地面に投げ出し、膝を抱いて憂いを帯びたため息を吐く。

「美野里と、アキラくんのことなんだけど」

そこで、沈黙。俺は根気強く待つ。新しいハイライトの箱を開ける。くわえる。火を灯す。

「美野里、告白されたらしいのよ、アキラくん」

煙を吹く。どう受け止めればいいのか分からない。

「付き合ってたかったっけ？」

「だから、付き合ってたかったの。その、なんていうんだっけ……」

「セフレ」

「そう、それよ」

そうだった。俺ってとことん学習能力ない。

「さっき、アキラくんに問いつめてきた。美野里のこと、本気なのかって」

「そしたら？」

「本気、だってさ」

俺は浅海さんの顔を思い浮かべてみた。告白したってのは、つまりいつのことだろう。早川の様子だどつい最近なのは間違いなさそ

うだが、彼は今日も飄々と振る舞っていた。

実は、この日が来ることを前々から予感していた。あの監禁事件で、吉岡から『平野さんを犯して』と命令されたときの浅海さんの反応。何故あのとき彼が吉岡を裏切ったのか。その意味をずっと考え続けていたが、やはり、そういうことなのだろう。

「本気がどうか、そんなこと訊くために、わざわざここまで来たのか」

「だって、本気じゃなきゃ困るもの」

早川は両膝に顔を埋めた。つむじ辺りで結わえられた髪の毛の結び目が上を向き、髪先が肩から垂れ落ちた。

「美野里、最近元気なくて。上の空って感じだったのよ。最近みんなから意地悪されてるから、そのせいかなって最初は思ってたけど、それも違うみたいで。思い切って話を聞いたら、実はそんなことがあったなんて……」

吉岡が上の空という図が俺には想像できなかった。

「今泉、美野里と付き合ったことあるのよね。そのときはどうだった？」

「中学のときな。二週間くらいで別れたし、あんまり覚えてないけど、多分、お互い好きでもなんでもなかったと思う」

告白される側の気持ちって、どんな感じだっただろう。俺も中学時代、いま隣にいるやつにされたことがある。なのに全く思い出せない。あるいは、あのときは何も考えていなかっただけかもしれない。

「今泉は、誰かを本気で好きになったことってある？」  
よく分からない。

「私は、今でも今泉のことが好きだから、アキラくんの気持ちがよく分かる。美野里もそう。相手が好きだって気づいたとき、すごく心が落ち着くんだよ。テストで難しい問題が出て、やっと解けたときの感覚に似てるかも。でも、それは心の中でだけ。相手の前に立てば、途端に気持ちが入ってしまう。無駄に意識しちゃって、何

も見えなくなつて、最悪、一人じゃ全然喋れなくなる」

俺は早川の顔を直視できなかった。昔、安易な気持ちのまま彼女の告白を挫いたこと、いま改めて後悔していた。

「美野里もきつと、自分がどうしたらいいのか分からないんだと思う。告白される側って不利よね。告白する方は十分心の整理をつけてくるものだけど、告白される方はそうじゃない。頭の中をかき回されて、相手の心まで委ねられる気分なのよね」

「どうするんだろうな、吉岡」

「迷うのは、それだけアキラくんが気になるってことなのよ」

でも、と早川は言う。

「美野里、分からないみたい」

「分からないって」

「どうすれば相手に優しくできるのか、もう忘れちゃったみたいな

……」

「……それは、さすがに大袈裟だな」

傾いた日差しが喫茶店の屋根に隠れ、俺たちの周囲に三角形の陰を作っていた。頬に伝う汗を拭う。シャツの胸元を引っ張り、生ぬるい風を入れて涼んだ。

「もう、休憩が長いわよ純一くん……」

扉を開けて道子叔母さんが顔を出した。並んで座る俺たちを見て、目をしばたかせる。

「お邪魔だった？」

「いえ、私はもう帰ります。まだ他の用事もあるし。ごめんね、今泉」

早川はサンダルを履いて立ち上がり、叔母さんに小さく会釈して去っていった。

翌日の日曜日。急遽学校に呼び出され、例によって生徒会室で看板作りを手伝わされた。

昼になり、各自昼食休憩となったところで、生徒会室の雰囲気にうんざりしていた俺は図書室に行くことにした。

図書室には原村と依子がいた。漫画喫茶の準備のために自主的に休日登校したのだという。真面目なのか、それとも暇なだけなのか。依子はもう昼食を済ませたという。受付内で原村と長机を挟んで座り、昼食を共にしながら雑談した。

「まだ今泉には言っただけでなかったと思うけど、僕、沙樹んとこに住むことにしたから」

穏やかそうな表情を浮かべて原村が言った。サンドイッチを頬張りながら、観察するようにその顔を見る。

「もう、大丈夫なのか」

「うん。どうやら、僕が意地張ってただけみたい。やっぱ、最低なのは僕の方だったんだなって。そりゃ、妹を守るだなんて、そんな大層なことはまだ言えないけどさ」

「昔は、早川の話をするこすら嫌がってたのにな」

原村は頭を掻きながら、ぽつりと、もうそのことは許してくれ、と言う。そして思い出したように顔を上げた。

「そうだ。昨日の夕方に、沙樹が僕のアパートに来てね」

昨日の夕方、つまり彼女がソレイユを訪れたあとだ。他の用事と書いていたがこのことだったらしい。なんていうか、兄に受け入れられた途端べったりだ。ブラコン臭い。

「で、二人で行って見たんだよ、あの廃墟の屋上。懐かしかったなあ。思い出の地とは言いがね、なんだろう。十年近くも前のことなのに、びっくりするくらい鮮明に思い出させて。嘘みたいに広がった屋上は、今でも変わらず広大で。自分の身長が、あの頃に戻ったよ。うな錯覚まで起こしたよ」

原村は弁当箱のふたを閉じる。箸箱に箸を入れて、そこで手を止めた。視線を机の木目に向けると、原村らしくない感傷的な声が漏れてきた。

「沙樹、泣いてたんだ」

そして自嘲的な笑みを口元に浮かべる。

「どうして沙樹が泣いていたのか、全然分からなかった。僕は、その訳を訊くことさえ出来なかった。分からなかったことも、訊けなかったことも、全部が悔しかった。やり残したことが知らないうちに膨らみ過ぎていた。僕は一体、今まで何をしていたんだろう。あいつの兄貴として、僕がどれだけその役目を果たせていたんだろう。そう考え出したら、本当に悔しくて」

ふいに弟のことが頭をよぎって、胸がどきりとした。当たり前過ぎて、今まで考えたこともなかった感情が自分の中にあふれていた。そんな中で、受付カウンターで図書文集を広げていた依子が口を開いた。

「それでもあたしは、原村先輩や純がうらやましい」  
俺たちは同時に彼女を見る。依子は文集を閉じて、俺たちに向けて座りなおした。

「兄弟がいるからうらやましい、ということじゃない。身近で、当たり前になった人のことを、ちゃんと考えなおしてあげられることに、価値があると思う。そういう風に家族から想ってもらえることも、すごくうらやましい」

言い切ったぞ、みたいな感じで依子は前に向き直った。俺と原村は顔を見合わせ、しばらくきょとんとしていた。次第におかしくなってきた、そしてどちらともなく笑い合った。依子はかたくなに文集へと目を落としていた。

副生徒会長の帰宅許可を得て、校舎を出る。駐輪場の灰色の壁を抜けると、そこには髪の毛の長い女が忽然と立っていて、俺は激しくビビってしまった。よく見れば依子で、よく見なくても依子だった。

依子は俺の自転車のすぐ隣に立っていて、なにもしていなかった。不気味で仕方がない。うっかり声をかければ藁人形でも差し出されそうな雰囲気だ。

「なにしてんの、こんな所で」

「一緒に帰ろうと思って」

依子が言わなさそうな台詞ランキングがあればこれは間違いなくランクインする。なんかデジヤブ。しかし今回は、依子の赤ママチャリはしつかりと駐輪場の隅に停められていた。

安心して自分の自転車に乗る。依子が荷台に乗ってきた。

「おい。自分の自転車あるだろ」

依子は返事をしなかった。早く走らせろ、と言わんばかりに俺の腹に手を回してくる。その状態で二分間。何も考えずにペダルに足をかけた。緩めに漕いで校門を抜ける。

日が落ちるのが早い。夏の終わりを肌で感じる。依子の手は俺のシャツを掴んだまま離さない。背中に密着した彼女の体温が、生々しく届いてきた。

依子だって、無条件で甘えたくなくなるときくらいある。例えばこういう日。文化祭の準備に焦燥として、いじめられなくなったけれども代わりに他の誰かがいじめられて、特に自分に何があったわけでもないのに身体だけが疲れて、心にぽっかりと穴が空いてしまったような、そんな空虚な日曜日。

一言も会話を交わさず、やがて郊外に出る。階段状に連なった田んぼと、山の裾野から見はらせる海の青があつて、祖母ちゃんの家が近いことを知った。

この心音はどちらのものだろうと考えた。依子のものか、それとも俺のものか。

次に早川や鍋島の言葉を反芻して、浅海さんが吉岡に告白したことを思い出して、ある感情について考えてみた。この歳で常識として体感しているはずの感情を、俺はまだよく知らないままだった。恋情か父性が家族愛か。恥ずかしいことに、俺にはうまく判別できない。

気付けば、全力でペダルを漕いでいた。息が切れるのも、肺が苦しくなるのも気にならなかった。苛ついていたし、寂しかったし、



もどかしかった。思いつきり、依子の手を引き剥がしてやりたいくらいだった。

神社を通り過ぎ、古びた自販機を横切って、耕耘機を移動させる爺さんを追い抜く。

道を折れ、あぜ道に入る。二本の轍に挟まれた細長い雑草地帯をわざわざ選んで、そこを駆け抜けた。祖母ちゃんの家が目前にある。ここで急ブレーキを掛ける。

タイヤが湿った草に取られ、自転車が大きく傾いた。車体が左に折れ曲がって祖母ちゃんの田んぼに突っ込みそうになる。スニーカーが汚れるのも構わず強く地面を踏んで、無理矢理自転車を止めた。依子は転びかけて、なんとか土の上に降り立った。水たまりが跳ね、彼女の膝を汚す。自転車が地面を滑って水田に半分突っ込み、俺の片足も作土層に浸かって濡れた。膝をつき、無理に立ち上がる。「いい加減にしろ……」

息が途切れて言葉にできない。依子は地面に落ちた二つの学生鞆を拾いもせず、固まったまま俺を見ていた。

「どうしたいんだよ、俺のこと。いつまでもいつまでも思わせぶりやがって」

ぬめった土から足を引き抜いて、依子に詰め寄る。何故か知らんが二の腕を引つ掴んで、睨むように見下ろした。

「いいよもう、こついつの。今まで我慢してたけど、やっぱり性に合わないんだよ。俺のことどう思ってたのか、もう、はっきり言ってくれ」

依子は逡巡して、逸らしかけた目を必死に俺へと向け続けた。やがて俺の手を取って、ゆっくりと離させる。

「わからない。純のことは好きだけど、でもたぶん、そういう好きじゃ、ないと思う」

取られた手を中心に力が抜けていく。羞恥心から耳が赤くなっていくのが分かった。いっそ泣いてしまいたいような、理不尽ながら裏切られたような気分にもなった。

「ごめんなさい」

謝られた瞬間、頭の中で何かが切れた。必死にそれを抑えた結果、彼女の両肩を突き飛ばすだけにとどまった。依子はよろめいて後退した。俺は田んぼに突っ込んだ自転車を起こしてあぜ道に戻し、泥まみれの鞆をかごに入れた。ついでに足にへばり付いていた泥を手にとって依子の足元に投げつけた。泥水でローファーが汚れる。なんかのしょぼい妖怪にでもなった気分。自分のあまりの情けなさにまた涙が出てきそうだった。

呼吸を荒くして睨む。依子は両手を中途半端に宙に上げたまま、俺に近づこうとした。

「来んな」

吐き捨てるように叫ぶ。自転車に飛び乗り、逃げるようにその場をあとにした。

文化祭がすぐそこまで迫っていた。

その日、授業は行われず、全クラスが文化祭の準備をするための時間に充てられた。

昼休み。生徒会室を抜け出し、弁当を取りに行くために二組の教室におもむいた。教室の脇にはプラネタリウムのドームに使う竹ひごや材木が並べられていて、生徒たちは教室後方で机を固めて昼食をとっていた。

自分の弁当箱を取って教室を出る。

東棟を歩いていると、最奥の空き教室内で早川と吉岡が弁当箱をつつき合っているのが見えた。そこは二組の飯の作業場で、主に看板や木材の加工をする場となっている。そのとき室内にいたのは、その二人つきりだった。

早川が俺に気づいた。扉を開けると彼女は笑いかけた。

「ここシンナーっぽい臭いがするし、木くずでほこりっぽいよね。なんか食欲なくなっちゃう。他にいい場所知らない？」

「屋上来る？ 旧校舎のだけど」

「行かない」

と、きっぱり言ったのは吉岡だった。

「沙樹と二人がいい」

幼児後退したような口調で断られた。どうすればいい、と早川を見る。彼女は意を決して言う。

「美野里、午後の看板作り、サボっちゃおうか」

「えー！ なんで？」

「だって、またあいつらの相手するのダルくない？ 午後はずっと屋上にいようよ。たぶんお兄ちゃんもサボってるだろうし。みんなでトランプでもしよう」

吉岡の笑みは虚仮に見えた。細められた瞳は静かで暗い。早川は

すこし怖じ気ながら、椅子を立って吉岡の手を取った。

「行こつては美野里。もう頑張ったじゃん。疲れたでしょ、もう」  
「疲れたって？」

吉岡は引かれる手を引き戻した。

「頑張るとか疲れるとかつてなに。私、ぜんぜん疲れてないんだけど」

「私にはそうは見えない」

「疲れてるのつて、沙樹の方でしょ」

吉岡は取られた手を振り払って箸を持ち直した。

「そんなに今泉たちのとこに行きたいなら、一人で行けばいいじゃん。無理して一緒にいてくれなくていいよ。今度は沙樹が目つけられちゃうかもしれないし。それに、私さあ、もう誰かと馴れ合う必要なくなっちゃったんだよね」

「なにそれ。美野里、なに言ってるのよ」

「転校しようかなつて考えてるんだ。この学校、進学系のくせに見ての通り馬鹿ばかりでしょ。アキラと一緒に遠くへ引っ越して、もっとレベルの高い高校に通いたいなあ」

凍てついたように早川は固まり、頬を緩ませて斜め上を見上げる吉岡を見つめた。その手はスカートの端を掴み、生地が爪が立って食い込んでいた。俺は、早川がそのまま吉岡の頬を叩いてしまうのではないかと心配した。

しかし、そうはならなかった。早川は俺の方を振り向き、自然に作った笑みで「ごめん、二人にさせて」と言った。

旧校舎屋上へ行くためには図書室を通らなければならない。図書室入り口付近には、立ち話をする三人の女子が居た。俺は声をかけられないように足早に廊下を進んだ。

しかし、俺のそんな行動も徒労に終わった。

「また屋上ですか、今泉くん」

鍋島に呼び止められ、残りの二人も俺に気づいた。城川と、依子も居た。俺はとっさに依子から視線を逸らした。

「たまには図書室で食べませんか。積もる話もあることですし」

「ねえよそんなもん」

もう行ってしまうおうとすると、依子が俺の前に立ちはだかつてきた。驚きで首筋に冷や汗が浮かぶ。

「きて。原村先輩も呼んでいいから」

一昨日みたいに突き飛ばしてしまいましたかった。けど今は他の者の目もあるので止めておく。それでもこいつの無神経さがいやに鼻についてしまって、構わず歩を進めながら肩をぶつけて依子をどかした。

ここまで潔さを欠いた情けない男も、なかなか居ないのではないかと自分でも思う。

屋上に原村はいなかった。

隠れているだけかもしれない。貯水タンクの裏側を確認してみたが、やっぱり居ない。一昨日の依子との一件を話しておこうと思っていたのに、肝心なときに神隠しを決め込むのだ。

正真正銘の一人ぼっち。

原村の定位置である段差に腰掛ける。弁当箱を広げると、とんかつソースの匂いが解放された。

すると、屋上扉がゆっくりと開かれた。期待してそちらを見遣る。屋上にあらわれたのは原村ではなかった。鍋島と城川が弁当箱を提げ、こちらへと歩み寄ってくる。幸いなことに、今度は依子はいなかった。

「また平野さんと喧嘩したんですか？ 平野さん、今泉くんとなにがあったのか全然教えてくれないんだから」

鍋島の鈍感さを今ばかりは有り難く思った。鍋島が隣に座ってくる。さらに彼女の隣に城川が座る。

「本当おせっかいだな。そつとしいてくれよマジで」

「今泉くんのために来たわけじゃありません。私たちもたまたま屋上で食べたくなっただけです。ね、城川さん」

城川はあわてて首をぶんぶんと縦に振った。

サンドイツチを食べる。鍋島は前口上通り、城川にばかり話を振った。二人が半分も食べないうちに俺は食事を終えて、さつさと立ち上がって煙草を取り出した。

「そういえばこの三人の組み合わせって、あのとき以来じゃないですか？」

鍋島が俺を話題に入れたのは、そんな瞬間だった。

「あのとき？」

「夏休み前の、あの放課後のことです。忘れたとは言わせませんよ。今泉くん、教室で城川さんを泣かせていたんです。そこで私が助けに入った」

もうかなり昔のことに思える。依子をいじめるよう、城川は周りから強要されていた。ある日の放課後、俺がそれを問いつめた。梅雨ごろのことだっただろうか。ぶっちゃけ忘れかけていた。

城川はたどたどしく弁護する。

「あれは、今泉くんがわたしのために怒ってくれただけで、わたしが勝手に泣いちゃっただけで、そういうんじゃないよ、由多加ちゃん」

「でも泣かせたことは事実ですよ。女の子が泣いているのに、なおも嬉々として責め立てるだなんて。そんなの、なまはげか絶叫マシンか今泉くんくらいのものです」

意味分からん。いや、反省してるけど。

「城川は知らないと思うけど、城川が行ったあとの鍋島、俺の前で号泣してたんだぜ」

仕返しに言つてやると、鍋島は口に含んだものを吹きかけて、城川の興味深げな反応に首を振って否定した。あまりの必死さに笑えた。

それをきっかけに、三人の記憶をたよりにして、今までの出来事を語り合っていた。

当時の俺が人の名前を間違えまくっていたこと。鍋島と一緒に廊下に立たされたこと。城川が吉岡にあっかんべーしたこと。鍋島が依子から避けられまくって相当苦労したこと。俺が女子更衣室を覗こうとしたなんて疑惑をかけられたこと。誰と誰が喧嘩して、くっついたり離れたりして。俺と依子が殴りあって、村瀬が川にDS投げて、城川と雀の墓作って、叔父さんと依子の故郷に行つて。そのうち、だんだん空気が重くなつていくのを感じた。

徐々に口数が少なくなつていき、誰ともなく口を閉ざす。城川がもともと小さい声をさらに小さくした。

「由多加ちゃんは、」  
怯えながら目を伏せる。

後悔なんかしないでよっ！ 後悔するくらいなら、最初から助けないでよっ。わたしまで、後悔しちゃうよっ……。

「わたしをいじめから庇つたこと、まだ後悔してる？」  
鍋島ははつとして、城川の横顔を見た。城川は身体まで小さくしてうつむき、神からのお告げを待つように黙り込んだ。

「私は……」

城川さんがああして恐がる気持ち、なんとなく分かる気がします。逃げたくなる気持ちも、よく分かります。実際、私も逃げちゃいましたから。

弱いものいじめは大嫌いだし、見るのも嫌だけど、でも、されるのはもつと嫌だったから。

どうして今、城川さんが私に普通に接してくれるのか、正直、よく分かりません。

長い長い沈黙が続いていた。いつまで経っても返事ができない鍋島に、その答えがあるように思えた。

「私は、本当に成長しませんね」

それつきり、俺たちの間に会話はなかった。

昼休みが終わる。三人で屋上を出て、無言で廊下を歩いていく。そのまま何事もなく教室に戻ることができれば、どんなによかっただろう。

カーテンが閉じられていた。東棟の最奥の部屋。まさに、さつきまで吉岡たちが居た空き教室だった。それを思い出さなければ、カーテンの閉じられた空き教室など見向きもしなかっただろう。

足を止める。後ろの二人も不思議そうに立ち止まった。空き教室に目を向ける。廊下側から見えないように閉じられたカーテン、その奥から聞こえてくるかすかな嘲笑が耳に届いた。

普通なら、中で生徒たちが仲良く騒いでいるだけだと思う。だけど脳裏に走る直感はその可能性を否定した。

窓のカーテンが少し開いていた。注意深く近づき、そこから中を覗く。

第一に、水を滴らせた灰色のモップが視界に映り込んだ。次の瞬間、それは床で頭を抱えて座り込んでいた吉岡の後頭部に押しつけられる。吉岡は十人ほどの女子に囲まれていた。ある者から髪を掴まれ、ある者からは足蹴にされていた。その中に居た村瀬は、雑多に置かれた机の上に座り、足をぶらぶらさせてその様子を眺めていた。

何故かそこに早川の姿はなかった。

「どいてください」

肩を押され、俺は扉の前から退いてしまう。鍋島の手だった。

「今泉さんと城川さんは、先生を呼びに行ってください」

扉の取っ手に指をかけ、一度動きを止める。深呼吸をして、手の



震えを止めようとしていた。

「俺が行くから、無理するな」

「うるさい！」

鍋島の怒号が廊下中に鳴り響く。俺と城川がびくりと身を揺らした直後、扉は開かれた。

中にも声が届いていたらしく、吉岡を囲んでいた女子たちが一樣にこちらに注目した。そのうちの一人が慄然と後ずさる。吉岡の背中に濡れたモップを押しつけていた女子だった。見れば、鍋島は彼女を睨んでいた。

鍋島は瞳を動かし、また一人睨み据える。今度は髪をつかんでいた女子の手が離れた。そこで吉岡は顔を上げる。唇の端に血がにじみ、なにも考えていないような、無気力な表情をしていた。

鍋島は教室の中に入って進んでいく。取り囲んでいた女子たちがそれに合わせて後ろに退がった。村瀬が机から降りる。

息づかい。誰かが上履きで床を擦る音。細かな衣擦れ。

抱き寄せる。吉岡はぼうっと宙を見上げたまま、鍋島の腕の中に収まっていた。庇うようにして彼女の頭を胸に抱きなおす。

「貸せ」

村瀬がそばにいた女子からモップを取り上げた。足音を強くして、床で座り込む二人のもとに来る。彼女はそのまま鍋島を吉岡から引き剥がした。

「こいつが今までなにをしてきたのか、分かってんのかよ由多加」  
モップの持ち手を鍋島に押しつける。

「やれよ。このクラスでいじめが始まったのも、みんながぎくしゃくし出したのも、全部こいつのせいなんだ。ほら、やれ」

「吉岡さんが全部悪いから、私も吉岡さんをいじめればいいんですか」

「そうだよ。由多加もやれば、由多加が今やったことは見なかったことにしてやるから」

「私がいじめれば、見なかったことにする」

「ああ、黙ってやれば、由多加がいじめられなくて済む」

村瀬は鍋島の肩を押し、さらに吉岡から引き離そうとする。ここで村瀬の表情が曇った。モップの柄を両手で握った鍋島は、腕で彼女の手を押し返していた。

「私がいじめられなくて済む。それなら確かに、そうした方がいいかもしれませんね。私は、いじめられることが何よりも嫌です。いじめを見過ごすのも、助けられないのも確かに嫌だけど、自分がいじめられるのは、もっと嫌だからです。でも」

モップが宙を舞い、からんと音を立てて床に転がった。

「私は、誰かをいじめるのは嫌」

村瀬を押し退け、また吉岡を庇う。指が食い込むほど強く抱いて、ぎゅっと目を瞑る。

「誰かをいじめるのは、もっともっと嫌！」

室内に反響するのは一つのすすり泣く声。いつから続いていたのかわからない。吉岡を包んでいた鍋島の腕が徐々に緩んでいく。やがて彼女の肩にしがみつくまでになると、鍋島はそのまま頭をうなだれて鼻をすすった。

「いじめるって、苦しいものじゃないんですか。叩く方だって、本当は痛いはずじゃないですか。みんなは、痛い嫌じゃないんですか」

吉岡は胸元でしゃくり上げる鍋島を一瞥し、それから周りを見渡した。無感情に首と瞳を動かし一人一人の表情を確かめる。

「こういうの、なんて言うんだっけ。泣き落とし？」

両腕を抱き、寒さを耐えるような仕草をして、

「鳥肌立つちゃう。なんなの、この子。なに大声で喚いてんの。耳きーんてした。みっともなく感情むき出しにして、言ってることもおかしいし。押しつけがましいっいたらないよね。ねえ鍋島さん、それどこの宗教？ それにこの手、超痛いんですけど。はやく離してよ」

鍋島の腕をつかみ上げ、離そうとして、吉岡は眉をひそめる。口元のかすり傷を拭う。血痕のついた右手は痛々しく、その手で鍋島の身体を引き剥がそうとする。それでも離れなかった。

骨を抜かれたように脱力して、痛いつてば、とつぶやく。

取り囲んでいた女子たちが目配せを始めた。へたり込む二人を指して、ぎこちなく笑い合うも、すぐに白けて黙り込んだ。

モップの繊維の先から灰色の汚水がしたたり、床に小さな水たまりを作っていた。村瀬はモップの柄を遊ぶように持ちながら、立ち尽くして二人を見下ろしていた。その肩に手が置かれる。

「もうどっか行こ。先生呼ばれてたらマズいし」

彼女のすぐ背後に居た女子は入り口の方を見ながら言った。

村瀬はうなずいて扉の方に向かう。

その道を立ち往生でふさいだのは城川だった。城川の目は村瀬だけではなく、教室全体を透かして見ていた。

「美野里ちゃんに、あやまって」

そう言つて室内に視線を巡らせる。俺は彼女の後ろ姿から目を離せなくなっていた。

「わたしが言えたことじゃないけれど、みんなはもうこれ以上、卑怯な臆病者になっちゃだめだよ」

村瀬は頬をかつと赤くする。空いた手で城川の身体を突き飛ばそうとする。俺はその手を押し戻した。彼女は驚いて俺を見返した。

「やめとけよ。城川、もう泣いてるから」

「泣いてない」

城川は顔を隠すように軽く伏せ、前へ進み出て村瀬の腕を押しした。「はやくあやまってよっ」

必死にしがみついてくる城川に、村瀬は瞳を小刻みに揺らして戸惑う。群衆の誰もが口を閉ざして、彼女の弱々しい反抗を見守った。

「弱い者いじめしたら、あやまらなきゃ、だめなんだよっ」

やがて小さなため息がひとつ聞こえた。

「興ざめ」

言つて村瀬が腕を振り払うと、城川はよろめいて後ずさった。背中から俺にぶつかって支えられる。

「あーあ、冷めた。つまんね。つか、そういうのもういいし。ていうかこれ、もうつまんねーよ。もう飽きちゃったし」

乾いた声で言つて彼女はモップを投げ捨てた。床に落下し、乱暴な反響音が空き教室内にこだました。

村瀬が教室を飛び出していった直後、教室を見回すと、吉岡の姿はなかった。教室に残った女子たちに村瀬や吉岡を追う者はいなかった。ただ、それぞれが離散して孤立しあい、啜り泣く者もいれば

何をしてもなく黙って窓の外を眺めている者もいた。

鍋島は涙の跡を拭いもせず、いつのまにか城川のそばで彼女の手を握っていた。下を向いてときおり滴を落とす鍋島は、今だけは城川より小さく見えた。

「手、もう震えてないです」と彼女は言う。

城川も同じようにうつむいて謙遜のかぶりを振った。

「そんなことない」

「いつか私は言いました。あなたと私は同じだって。保身を盾に自分を守っているから、私たちは誰かを見捨てることに慣れてしまっただんだって。でも城川さんは変わっただんです。だから私も勇気が出せたんだと思います」

「そんなこと、ないのに」

城川は取られた手を離すことができない。あるいはそこに身をゆだねているように思えた。

「ほんとうに、ありがとう……」

そのまま二人は言葉を交わさなくなってしまった。その代わりに、少なくとも俺が教室を出ていくその瞬間まで彼女たちは手を握り合っていた。

村瀬と吉岡はついに六時限目まで姿を見せなかったが、放課後になると村瀬は教室に顔を出して、そそくさと帰り支度を始めていた。俺はあれから屋上に顔を出していない。ずっと生徒会室にこもりつきりだったからだ。村瀬は今まで、おそらく屋上に入り浸っていたのだろうと思った。屋上に買い溜めて置いてある煙草に火を灯す彼女の姿を、俺は勝手に想像してみる。あくまで想像上だが、彼女の喫煙姿はそこそこ様になっているのだった。

なんとなく、俺は席に着いたまま二組の教室を眺めていた。

誰かが置きっぱなしにした携帯のアラームが鳴る。その頃には生徒の姿は数えるほどしかおらず、ポップなアラーム音はおもちゃの鍵盤みたいに湿った空気をぼんぼんと叩いた。

俺同様に依子が席に着いて待っていた。音もなく立ち、俺の隣まで近づいてぴたりと止まった。どうしても俺と仲直りしたいらしい。しかし彼女の口から言葉らしい言葉は出てこない。じつとこちらを見下ろしてくるばかりだった。

ふと、俺たちはほぼ同時に、廊下側へと目を向けた。

それはちょうど教室前方の入り口、廊下と教室との境界をまたぎ、その三人は向き合っていた。鍋島、城川と、村瀬の三人だった。

鍋島と城川はこちらに背を向けて顔が分からない。村瀬はいささか廊下へはみ出す形でたたずみ、視線を泳がせながら二人と対面していた。

声量が小さいのもあるが、ここからでは彼女らの会話は聞こえてこない。ただし、雰囲気だけで伝わるものがあつた。

村瀬は肩に鞆をかけ、手を後ろで組んでいた。それも、かたくなにというほど両手は微動にしない。

俺は、過去に村瀬が女子の誰かに抱きつき、髪を撫で回したりする映像を思い浮かべた。その行為が女子の間でひそかに迷惑がられていたことも、吉岡から面と向かって拒絶されたことも、彼女が屋上で自分の腕を抱き、物憂げに煙草を吸っていたことも、俺は緻密に再現して思い起こした。

そして鍋島の手が伸びる。腕が村瀬の首もとに回された。はつとする間もなく、今度は城川が寄り添っていく。二人の手によってかんじがらめに抱き寄せられる。身動きの取れなくなった村瀬はしばらくの間呆然として、やがてぽつりと一筋の涙を伝わせた。

静かな放課後だった。午後五時十六分。空気の波が潮の満ち引きのように肌に触れる。辺りはしんと沈黙し、些少の耳鳴りを起こさせた。

気をつけて椅子を引き、足音を立てないように教室入り口へと向

かう。依子が黙ってついてくる。

抱き合う三人の横を通り過ぎるとき、後ろで依子が立ち止まる気配を察した。依子は薄桃色のハンカチを手にしていた。泣き止まない村瀬の手にハンカチを持たせると、彼女はまた俺のあとを追って歩き出した。

学校を出て自転車をゆつくりと漕ぐ。その後ろを依子の赤チャリが着いて走る。

ある公園の前で自転車を止める。エンジュの樹でキジバトがよく鳴いていた。かつて依子と大喧嘩したあの公園。夜になれば人通りはなく、俺はたまに学校の帰りに煙草を吸いにここへ来る。今日もそのつもりだった。依子が俺の背後を離れないことを除けば普段通りの習慣風景だった。

ベンチに座ってキジバトの寂しげな音に耳を傾け、ハイライトを肺いっぱい吸い込んだ。依子は隣に座ってじっとしていた。俺は彼女の方を見ないよう細心の注意を払う。

公園の隅には砂場がある。近所の子供が忘れていったのか、プラスチック製のカラフルなバケツやシャベルが上手い具合にグラデーシオンを模し、砂地に整然かつシックに打ち捨てられていた。俺はそれとなく感心し、そして自分の幼児時代を思い出そうとして、すんでのところまで止めておいた。どうしても当時の依子がちらついてしまう。

「純の気持ち、あたしはまだ聞いてない」

現在の依子は言う。俺の吐く煙より数段質量の薄い声で、依子は口ずさむ。

「あれからいろいろ考えた。あたしは自分の気持ちを言っただけど、よく考えたら、純の気持ちは、まだあたし、聞いてない」

街灯が依子の横顔に影を落とし、目元を隠している。自分がとっ

さに彼女を見ていたのだと気付いたのはそのときだった。携帯灰皿に吸い殻を押し込む。ビニール越しに熱を感じる。

「十分だけ、ここに居て」

返答は確認しなかった。依子は大抵の要求には黙って従う。だから、それに甘えてあえて確認せず、どこか別の方に顔を背けながら俺はベンチを立った。

公園を出て街道に出る。五十メートルほど先にはコンビニがあった。あそこでまたミニッツメイドを買ってこよう。いや、トロピカーナだ。

地方展開らしき名もなきコンビニに入ると、まず雑誌コーナーで週刊雑誌を手にとった。大して興味もない税制問題の記事に目を通す。頭の隅で一通り思考を巡らせると、トロピカーナの350mlペットボトルを二本購入した。

店先で一本開ける。キャップを開けてペットボトルを傾けてからもう一本煙草を吸った。

そして再び街道に出る。

公園まであと数メートルという位置。エンジュの幹の間から、ベンチに座る依子の後ろ姿を確認できた。脇に停めてある自転車のかごに二本のペットボトルを入れて、今置かれた状況について考えた。依子がここで反問してきたことは、逆に幸いだったように思える。俺はこれまで依子にばかり答えを求め過ぎていた。相手の身勝手な言葉と行動に振り回されていたのは、俺だけでなく依子も同じだったのではないか。

こうして立ち止まり、見るともなしに上を見上げながらぼんやり考えるということ、俺はたびたび放棄してきた。こういうとき、毎回そうだったと気づく。そのたびに自分の言動への後悔を繰り返していた。深呼吸をして、相手ではなく自分と対話する。答えのほとんどは、往々にして自分の中にしかない。

改めて自分の身体を見回す。右手の治りかけた親指は、いまだ薄茶に変色して不格好だった。スラックスをたくし上げて足首を露出



させる。一昨日田んぼに突っ込んだ左足には縦線の裂傷が走り、右足には中学時代の手術痕がうつすらと残っていた。さらに、ふくらはぎの上部にはスタンガンの火傷痕が裾から見え隠れしている。頬に触れる。色んな奴らにぶん殴られたためか、ここ最近ずっと奥歯のあたりの鈍痛が消えてくれない。それに、鼻骨を悪くしたのかこの所よく鼻血が出る。

怪我してばかりだ。小学生みたいに。

何故こんなに怪我を負わねばならないのか。色んな人たちと様々な確執を作ってしまったせいだ、とすぐに理解した。

依子のことについて思考を戻した。さっき彼女に尋ねられたばかりなのだ。こっちはもう伝えた、じゃあ俺の気持ちはどうなのだと依子を特別視しただしたのはいつからだっただろう。全身のこの傷はなにも依子のためだけに負ったものではない。誰かのそばで身を固めるということを俺は今までしなかった。今さら依子の隣に居続けたいと思う自分が分からない。

純のことは好きだけど、でも、そういう好きじゃ、ないと思う。

結局、俺も依子と同じ考えなのだろう。今の俺は勘違いしているだけだ。依子を好きかもしれないと、錯覚しているだけなのだ。

今まで色々あり過ぎたせいだ。きつと吊り橋効果かなにかで、不可抗力的に感情のフィルターがかかってしまった。そうでないとおかしい。中学時代を抜いても、依子とは何年の付き合いだと思ってる。ここに来ていきなりこういう気持ちになる方がおかしいのだから。

やっぱり錯覚だったんだ。俺の中ではもう、そういう確信で満ちていた。

そういう好きじゃ、ないと思う。

突然、息が詰まるような苦しさに襲われた。この決断で正しいかどうか、もう一度息を整えて確かめよう。そう思ったときだった。この息苦しさがなんなのか、俺はまた分からなくなっていた。まる

で誰かの手によって心臓をつかまれ、揺さぶられているみたいだった。

これは誰の手だろう、と考えた。最初は依子の手だと思った。しかし、それはどうやら違うようだった。

俺自身の手だった。答えは大抵自分の中で見つかると、ついさっき考えたばかりだったのに、やっと気づいた。身体の内側から自分ですら知覚できない何か強い力が働いている。身体の外側、すなわち現実の手のひらで抑えつけようとしても抵抗できないもののようにだった。

これまでも辛いと思うことは何度もあったが、これはもっと違う種類の辛さだった。

これは一体なんだろう。ここまでの痛み、他の皆も今まで耐えてきたのだろうか。鍋島や早川や浅海さんもこれを通してきたのだろうか。もし知らないままなら、知らないまま終わった方がよかったんじゃないか。

トロピカーナを手に取り、公園へと足を踏み入れた。

依子は俺に気付くと、糸で引かれたようにふらりと立ち上がった。近づくと、俺はペットボトルを差し出した。依子はそれを受け取る。

「とりあえず、これで仲直りでいいよな」

依子は無言でうなずく。気をつけなければ分からないほど微妙な差異で頬がゆるんでいた。それに安心して俺は言う。

「俺も、落ち着いてよく考えたんだけど」

そうして俺は気づく。心の底をここまで開いて見せたのは、依子が初めてだった。

九月二十四日、文化祭一日目。

季節の変わり目など関係なく、文化祭は馬鹿みたいに照りつける太陽の下で行われた。あとで聞いた話だと、熱射病で一般客が一人倒れたらしい。

生徒会その他委員会主催の飲食出店の一つ、お好み焼き屋台を俺は手伝わされ、一日目のほとんどはそこでこき使われた。ふつう、一年生は文化部や委員会にでも入っていない限り、クラス展示などを無事完成させれば初の文化祭を思う存分楽しめる手筈になっているが、俺は作業中のサボりがたたってこのざまである。

お好み焼き屋台は生徒玄関のちょうど前に配置されている。太陽はいよいよ真上を越え、直射光がテントからはみ出て俺の顔を蜂みたいにちくちくと刺してきた。頭に巻いたタオルが汗で重くなる。隣で黙々と売り上げ金を管理する副生徒会長。彼の監視下のもと、俺は黙って鉄板に生地を広げていく。

「一日目の今日、何事もなく最後まで働けば明日は解放してやる」  
副生徒会長のお告げを信じ、持てる真心のすべてをお好み焼きに叩き込んだ。

依子と弟がやってきた。仲良く手をつなぐ依子と弟の姿は、はたから見れば母子のようであり、歳の離れた姉弟のようにも見えた。弟はパンフレット片手にきよるきよると辺りを見回し、やがて俺を見つけて「いた！」と指をさしてきた。依子を引っ張り、屋台へと駆けてくる。

「兄ちゃん、お好み焼き作れるんだ。すっげー」

「ちゃんと買ってけよ雄二」

弟は依子の制服のすそを引き、「だつてさ。買ってよ姉ちゃん」  
などとほざいた。

「依子に払わせんな。自分のお小遣いあるだろ」

「だって、姉ちゃんが全部おごってくれていうから」

眉を下げてしょんぼりする弟。彼を背中に隠し、依子は財布からお好み焼き代を出した。何とも言えない気分で彼女の手の中の三百円を眺めていると、背後の副生徒会長から尻を蹴られた。俺は恐れをなして速やかに三百円を受け取り、お好み焼きの準備を再開した。「文化祭だからって、雄二のこと甘やかさなくていいからな」

お好み焼きを手渡ししながら俺は言う。そしてあることを思い出した。

「そっいえば依子、図書室の漫画喫茶は？」

「一日目と二日目で、二つの班に分かれてる。今日は原村先輩たちの班。あたしたちの班は二日目」

つまり依子が忙しくなるのは明日ということだ。ちょうど俺とはすれ違う形になる。

「でも、午後の二時半からだったら抜けられるけど」

気付けば、依子が気遣うように俺の顔をうかがっていた。途端に恥ずかしくなって、照れ隠しに鼻で笑ってみせた。

「なにそれ。一緒に回りたいとか、俺ひとことも言っていないんだけど」

依子は深々と相づちして、

「あたしも言っていない」

そして踵を返し、モールで飾り付けされた生徒玄関を颯爽と通り抜けていった。弟はすぐには依子のあとを追わず、不思議そうに俺を見つめた。

「なんで赤くなってんの？」

このガキ思いつきり小突いてやるつか。だが相手は一応客ということになってるので、俺は誤魔化し混じりに首筋の汗を拭うのだった。

「たぶん暑いからだな。いやほんと暑い。マジで」

四十五分後、弟から差し入れのかき氷をもらった。

九月二十五日、文化祭二日目。

一年二組のプラネタリウム展示を軽く回っていると、偶然そこで原村と合流できた。彼と共に十一時から体育館で行われた演劇部の公演を鑑賞し、俺たちは旧校舎屋上上がった。

屋上は今日もほどよく荒廃し、文化祭の慌ただしさや喧噪も知らん顔のシカト状態で通常営業していた。

鉄扉を開けた俺たちは、そこに居た思いがけない先客にしばし身を硬直させた。

彼は柵に身を預けて煙草をふかし、器用に焼きそばを食べていた。俺たちに向け、煙草を持った方の手をあげてみせた。

「やっぱ来たかお前ら」

浅海さんは煙草を口にくわえ直し、俺たちに歩み寄って焼きそばを差し出した。

「俺のおごりだ。まあ遠慮しないで食べよ」

食べかけなのに。いまいち釈然としないが黙って受け取る。

「じゃあ僕からもおごり」

原村はお返しに半分まで食べたフランクフルトを浅海さんに渡した。二人はそれでしばらく爆笑していた。意味分かった。

「こうしていると、高校時代を思い出すね」

「それ俺の台詞じゃね？」

貯水タンクの段差に並んで座り、彼ら二人は唐突に漫才を始めた。俺は焼きそばをすすりながらそれを眺めていた。

ふと俺は問う。

「そっぴやさ、原村」

「ん」

「知ってた？ 吉岡のこと」

原村はその質問の意味をすぐ理解したようだった。俺はさっき鑑

賞した演劇部の公演、つまりそれに出演していた吉岡のことを尋ねたのだ。

脚本はオリジナルらしく、内容は戦時中に離ればなれになっていく二人の男女を描いた悲劇だった。ヒロインの配役が予想斜め上の吉岡美野里で、俺はそんな話を一度も聞いたことがなかったし、それはもうしこたま驚いて直前に飲んだコーラを吹き出しそうになっただくらいだ。

「あれね。ヒロイン役の子が急な病欠で、急遽吉岡がってことになったらしいけど」原村はなんでもないことのように答えた。「しかし、代役とは思えないほどの名演技だったなあ」

「吉岡って演劇部だったの」

「むしろなんで君は知らなかったんだ」

俺は何も言えなくなつた。そして浅海さんの顔を流し見た。

「そついや美野里、一昨日と昨日で必死に何か練習してたな。このことだったのか」

浅海さんは上空高く煙を吹き出しながら空をあおいだ。原村は若干興奮していた。

「いや、でも本当良かったね。なんなのあれ。吉岡のあの感涙シーンはなに？ 目薬？」

俺たちはしばらくうなり、彼女の演技のことについて考えた。

演劇のストーリーはこうである。時代は昭和初期、日ソ国境紛争が勃発し、ある富豪の夫婦のもとに政府から通知が来るところから始まる。亭主へ宛てられた手紙で、師団の幹部として仕官するようにとの内容だった。妻は戦争へ出ていく夫を快く送り出すのだが、その心中は複雑だった。その妻役が吉岡というわけだ。

紛争地から送られてくる夫の手紙に彼女は一喜一憂する。やがて、のちにノモンハン事件と称される紛争が起こり、日本軍の戦況はさらに悪化する。送られてくる手紙は徐々に減り、彼女の絶望はさらに深くなっていく。

荒んだ気分を晴らすように、彼女は女中に嫌がらせを始めた。掃除が足りないと言いがかりをつけて女たちを箒で叩き、わざと花瓶を割って誰かに責任をなすりつけ、気に入らない者は次々と解雇させた。しかし結局、そんな彼女の行為も気休めに過ぎなかった。

戦況の悪化によって国は富を失い、彼女の屋敷もその影響は免れなかった。ついに夫の戦死を知らせる手紙が届いたとき、彼女の地位は決定的に暴落した。そこで初めて、彼女は自分の罪深さに気づくのだった。

薄暗いバーで一人、彼女は夢の中で人生を振り返る。彼と出会ったときの清らかな淑女だった自分、そして、動かし難い現実を受け止められず、罪もない人々に八つ当たりを繰り返してきた今の愚かしい自分。対比し、後悔をさらに深くする。夢の中の夫はそんな妻の愚行に呆れ、彼女の幻想からも遠ざかっていく。

彼が戻ってこなかったのは、きっと私のせいだったのだろう。彼女は確信する。

すでに私は、醜い悪魔となり果てていたのだ。

彼の墓前に花を手向け、彼女は崖に向かう。

崖で身を投げようとしたそのとき、彼女を抱き止める者があった。以前彼女が解雇させた、あの女中であつた。

「私の夫も旦那様と同じように、ハルハの地で命を捧げました。ですから、奥様のお気持ちはよく存じているつもりです。貴女が身投げしたいと思う気持ちも痛いほど伝わってきます。ですが、いけません。ここで貴女が死ねば、旦那様もきつと浮かばれないでしょう」元女中の身をていした行為に彼女は衝撃を受ける。彼女の愚かしさを理解し、過去を帳消しにしてまで、助けようと言うのだ。彼女は元女中の慈悲深さに感動し、同時に強く心を打たれた。

その場に崩れ落ち、涙をこぼし始める。彼のためにも変わらなければいけない。そして再び、彼女は夢の中で夫と再会するのだった。

「あれは目薬じゃねえよ」

浅海さんは確信めいた口調で言った。

「お前らは気づいてないと思うけど、あいつ、マジで演技上手いからな」

俺と原村は拍子を抜かれて顔を見合わせた。

演技が上手い、という言葉が何故か引っかけた。劇における表面上だけの意味を指したのか、それとも、普段の吉岡のもっと深い場所を示唆した言葉なのか、俺たちは判断しかねていた。

「じゃ、俺もう帰るわ」

追求する間もなく、浅海さんは屋上をあとにした。

午後二時二十分。依子が漫画喫茶から離脱するまで幾ばくもない。俺は意を決し、財布から紙幣数枚を出し、原村に近づいた。半分眠りかけていた原村は俺の気配に気づき、ぼうつと顔をあげた。俺は彼の手に数枚の紙幣を握らせた。

「遅くなったけど、これ、俺が壊したiPhoneの弁償代だから。たぶんこれだけあれば買い換えられると思う」

原村は、自分の手の中でくしゃくしゃになった一万円札五枚を見つめた。ふつと口元を緩め、気持ち悪いくらい満面の笑みを向けてきた。

「いいよ、こんな大金」

紙幣を俺に返してくる。そして彼はポケットから真新しいスマートフォンを取り出した。Docomoの最新モデルだった。

「沙樹のところで暮らすようになったからさ、家族割が利くんだ。母さんも沙樹もDocomoだからね。つい三日前に買ってもらったばかりなんだぜ」

少し申し訳なさそうな顔をして、そうだ、と原村は言う。

「せっかくだ。さっそくメアド交換しようぜ」

「お前の絵、いくらだったっけ」

原村ははっと目を見開いた。そう来たか、と幾分感心しているよ



うだった。返事を待つのももどかしく、俺は畳みかけて言う。

「たしか五万で売るつつたよな、原村の絵」

もう一度、原村の手に金を握らせる。今度こそ返されないように、しつこく、かつ強固に拳を握らせた。

「絵、買わせてくれ」

団子状になった紙幣を手に、原村はとことん気の抜けた笑みを浮かべた。

「何を描いてほしい？」

俺が絵の注文を告げたその直後、屋上の扉を開いて依子がやってきた。

chapter 61 - 絵の価値、涙の意味 - (後書き)

次話で最終回です。

とある土曜の午後。喫茶店ソレイユにて。

注文のパンケーキとチャイ・ラテをテラス席の癩癩爺さんのテーブルまで運びに行くと、爺さんが剣呑な面もちで手招きした。

「ちよつとここ座れ」

爺さんの言うがままに隣の藤椅子に座らせられる。他に客いないからいいけど、このじじいは業務中の店員をなんだと思っているんだらう。

爺さんがシヨートホープのどぎつい煙草を俺に寄越してきた。

「お前、これ吸え」

本当になんだと思ってたんだ。そしていまだに名前を覚えてもらっていない。振り返って、レジカウンターで休めの姿勢で待機する浅海さんを見た。浅海さんは親指を立ててゴーサインを送った。

エプロンの前ポケットからライターを出して、おっかなびっくり火を点ける。道子叔母さんに見つかったら問答無用で叱られる。

癩癩爺さんは俺の喫煙姿をまじまじと睨み据えて、一言、「ふざけるなよお前」と凄んだ。

「え、なにがっすか」

爺さんはソレイユの入り口を指さした。

「表の看板はなんだ」

俺は店先に設置した立て看板のことを思い出した。今朝、その黒板式の看板に向かい、自分の字の下手くそさ加減に絶望しながらチヨークであくせく書いた短い文。

『本日、十八時より貸し切り予約のため、まことに勝手ながら十七時をもって閉店とさせていただきます』

俺はおそろおそろ答える。

「なんだと言われても、あれに書いてある通りですけど」

「おれは閉店まで居るぞ」

「居ればいいじゃないですか。午後五時までだけど」

爺さんはテーブルをどんと叩いた。皿に乗ったパンケーキが一瞬宙に浮いた。

「おれは通常営業の二十時まで居るっ」

俺は爺さんをぶっ飛ばしたくなる気持ちをぐっところらえた。

「いや、だから十八時から貸し切りですって。予約ももう取ってるんですけど」

「それで、何をするつもりだ」

「貸し切りライブと、あと個人的な誕生日パーティみたいなものですけど」

「誰だ、その予約を取ったやつは。今すぐここに呼べ。止めさせてやる」

二口だけ吸ったショートホープを灰皿に押しつけて、どう答えたものかと俺は悩んだ。しかし即座に浮かんでくるような言い訳は思いつかないし、嘘をついたらついで後が面倒なので、俺は正直に答えることにした。

「俺です」

爺さんの顔色が変わった。悪い風ではなく、なんとなく良い方向で。

「誕生日とは、誰の誕生日だ」

「俺の親戚のですが」

俺は厨房の陰から心配そうに見てくる道子叔母さんをそれとなく顎で指して言った。

「あの人の娘の誕生日」

爺さんが俺の腕をつかんできた。意外と握力があって痛い。

「道子さんの娘っこか」

「だから、そう言ってんじゃないすか」俺はかなりうんざりしていた。

「じゃあ俺も祝ってやる。参加していいな」

テラスのたもとで鳩が「ぼっぼ」とか言いながら餌を期待してい

る。その鳴き声がよく聞こえた。それくらいの重たい沈黙が俺と爺さんとの間に流れていた。

俺は振り返り、浅海さんの反応を期待した。また親指を立てられた。

癩癩爺さんは息子の嫁を嫌っている、というか恐れているらしい。だから連日連夜ソレイユで時間をつぶし、出来るだけ家には帰るまいとしているそうだ。まあそんなことはどうでもいいんだけど。

十七時の閉店を見計らったように、まず鍋島と村瀬と城川のかしまし三姉妹がやってきた。彼女らはイベントの準備を手伝おうと厨房にやってきたが、一応ゲストなので、適当なテーブルにオレンジジュースを出して着座させた。

それから浅海さんがセダンを出し、どこぞでぶらついているはずの早川と吉岡を迎えに行った。

待っている間、村瀬が手提げバッグからクラッカーを取り出した。「平野が来たときに備えて、今から作戦考えとこうぜ」

彼女はどうも誕生日ドツキリ的なものをやりたいらしい。それはいいが、そもそも依子は最初からこの会の開催を知っているわけで、依子が気を使ってクラッカーに驚くふりでもしてくれない限り、ドツキリもくそもないわけだ。しかしそれはありえない。依子は空気を読むということを基本的にしない。

次にやって来たのは宮下と五頭の教師二人。五頭は小学生の娘を連れてきていた。いつか、プールサイドで俺に水鉄砲を食らわたのちに弟を羽交い締めにして溺れさせようとしたあのガキだ。

というか俺、宮下は誘ったけど、五頭は誘った覚えがない。盛り上がった勢いで誰かが酒呑むかもしれなかったし。というか俺、このバイトも無断なんだけど。

五頭が近くに寄ってきて、周りに聞こえないようにぼそりと言う。「この件は月曜に改めて聞く」

やはりぬかりはない。話を聞けば、どうやら宮下經由で伝わってしまったのだという。

店の奥から店長がやってきた。店長は五頭を見た瞬間、普段絶対崩さないはずの無表情を破顔し、彼を歓迎した。

宮下がそつと俺に耳打ちした。

「店長さん、高校時代の同窓生みたいですよ。五頭先生ね、お店の名前出した途端、急に『私も行きます』って聞かなくなって」

浅海さんのセダンがソレイユの駐車場に停まった。早川と、他二名の女子が降車してくる。彼女らを降ろすと、浅海さんはまたどこかへと車を走らせた。どうやら数が多いため二グループに分けて送迎するという。予想外に人が増えてしまったようだ。

十分ほどで吉岡の女子グループがやってきた。二グループ合わせて合計七名。彼女らはしばらく店先で話し込み、そろそろと店内に入ってきた。

その中にしれつと依子が混じっていて、村瀬はしばらくそれに気づかず、やがて依子を見つけて慌ててクラツカーを鳴らした。

「いるならいるって言えばよ」

逆ギレして、使用済みのクラツカーで椅子の端を叩いていた。

親父と母ちゃんを残念ながら仕事を抜けられないようだったが、弟は十八時四十分ほどにやってきた。すぐに五頭の娘に絡まれていた。

続々と客が入店してくる。たぶん誰かの友達や知り合いなのだろうが、ほとんど俺の知らない人ばかりだった。

その間、店長はライブの準備を始めていた。道子叔母さんだけでは厨房が回らなくなってきたので、浅海さんもその手伝いをした。俺ひとりで来客名簿と入店料を管理するのはなかなか骨が折れたが、不思議と今は忙しければ忙しいほど楽しいと感じる。

入店もまばらになり、客もほとんど揃い踏みになった頃。見覚えのある中学生風の男子がギターケースを提げ、店に入ってきた。

「ようお兄ちゃん。夏休みぶりだな」

男子中学生の後ろには、彼と同年くらいの少女が居た。彼の背中に半分隠れていて、いかにも控えめそうな城川みたいな女の子だった。男子中学生は彼女を指し、「これ、いつか話したオレの彼女」と若干にやけて言った。

ノーコメントで名簿を差し出す。男子中学生は名前を書き込む。

『花田和人』。案外普通の名前。

最後にやってきたのは原村だった。彼はでかいキャンパスを脇に抱え、息を切らしながら店に入ってきた。

「いやー、間に合った間に合った。タイヤがパンクしちゃってさ。自転車そのへんに放置して走ってきたよ」

「相変わらずすげえ根性してるな」

店内はすでに人で混雑していた。テーブルのキャパシティなど軽くオーバーし、立ったままライブ開始を待つ人も多数だった。

十九時になったところで、俺はいったん来場を締め切った。

「ていうか原村、絵完成したんだな」

「もちろん。見せてあげよう」

原村はキャンパスのカバーに手をかける。俺はそれに待ったをかけ、厨房の道子叔母さんと浅海さんと依子、そしてギターの調律をしていた店長を呼んだ。

レジカウンターの壁が広く空いていた。飾るならそこがいいだろうと思う、前々からスポンサーなどの広告は控えてもらうよう頼んでおいたのだ。

店内中の視線がにわかにも集まる。原村はキャンパスに掛けられたブルーのカバーを外した。

「この絵にタイトルをつけるとすれば、『ソレイユの皆さまへ』でいいかな」

あらかじめ壁に打っておいた釘にキャンパスを掛ける。軽く揺らし、角度を直す。俺は改めて絵を眺めた。

そこにはソレイユの洋風一軒家ような外観が斜めから描かれている。空は巻層雲を含んだ快晴。壁沿いに設置されたベンチや、ドー

△状の灰皿、店看板、その端からのぞく菜園などが細かく描き込まれていた。人物は五人。皆思い思いの自然体で描かれ、それぞれ特徴を捉えた笑みを浮かべている。触れるか否かという加減でキャンパスの表面を指でなぞる。俺、浅海さん、店長、道子叔母さん。

「これ、依子？」

俺の指はそこで止まった。

「そう。ちょうど平野の誕生日だし、このお店とも関わり深いと思つて」

他四人は店オリジナルの胡桃色エプロンを着用しているが、依子は従業員ではないので制服姿。依子は俺の右隣、店の壁に背を預ける形で腰を屈め、快晴の空を見上げるようにして微笑んでいた。

「笑ってるな、依子」

見たまんまの感想を述べると、原村はマッシュルームカットを掻いて笑った。

「僕の想像だけだね。実際とは違うかもしれない」

「いや、でも自然だな。たぶん笑ったらこんな感じだろ」

道子叔母さんに背中を押され、依子は絵の前に立った。じつとそれを見つめる。数十秒たつぷりかけて眺め、少しうつぶしがちにうなずいた。

「きつと、こんなかんじ」そうつぶやいた。

俺もきつとそうだと思う。原村が描いた時価五万相当の絵。ここバイトで稼ぎ、そしてこの店に飾るわけだから、なんだか上手いこと循環している気がする。

店長から握手を求められ、俺と原村は順番にそれに応えた。「ありがとう。大切に飾らせてもらう」幾度か繰り返し、店長は俺たちと握手を交わした。

拍手が巻き起こる。純粹な祝福が込められた拍手だった。

店貸し切りの一夜ライブが始まった。カウンターのそばにテーブ



ルを出し、店長がリーダーのインディーズバンドCDを並べた。一枚千円。無事売り切れるといいけど。

舞台はオープンテラスである。満席御礼で立ち見客もごった返している。メインはもちろん店長のバンドだが、いつの間に打ち合わせたのか、男子中学生こと花田和人少年が前座演奏を受け持つことになっていろいろらしい。

「えーと、平野先輩の中学時代の後輩ということで、隣の田舎から呼ばれてまいりました。今回、センエツながら前座をつとめさせていただきます、花田和人です」

花田和人はがちがちに緊張していた。無理もない。路上の梨売り兼、詐欺演奏師からこの昇格っぷりなのだから。

俺はレジカウンターでジンジャーエールを飲みながら、ひやひやしつつ見守った。あら可愛い、とか道子叔母さんが隣でこぼしている。

「ご来場の方で、今日誕生日のひとはいいますか？」

依子と他二名が挙手する。十月十五日生まれ意外と多い。花田和人がハッピーバースデーの演奏をかけ、客とともに合唱する。俺はショートケーキを用意してさりげなく配っていった。

「それでは、演奏させていただきます」

彼はギターを担ぎなおす。

「オリジナル曲も一応あるけど、やっぱりオレはこれを弾きたいなっと思ってました。世界平和を謳った有名な一曲です」

花田和人は視線を二度動かせた。初めに依子、次に俺である。ちよっと目が笑ってる。あの曲だな、と俺は確信した。

二時間後。ライブは終了し、来場客がぼつぼつと店をあとにしていく。店長のCDは見事完売、彼らの演奏もかなり盛り上がった。た。

店内もまばらになつてくると、花田和人が彼女を連れて俺のもとまで来た。

「どうだったかな、オレの演奏。変じゃなかった？」

「いや全然。むしろお前、あのときよりも断然上手くなってたよ」  
素直にそう感じたので俺はそう答えた。花田和人ははにかんで笑い、そりゃよかった、と言って彼女の手を引いた。海辺の町では常に自信満々な彼だったが、さすがに今回はプレッシャーが大きかったのだらう。

「お疲れ。ありがとな、来てくれて」

店を出ていく花田和人の背中に声をかけると、彼は背中越しにきざっぱく片手を振った。

夜十時を越え、片づけと店仕舞いもなんとか終えた。駐車場ではいまだ女子数人がたむろしていた。俺は店長や浅海さんと一緒に店先で煙草を吸った。終始動きっぱなしだった身体はひどく汗ばんでおり、シャツが背中にへばりついていていた。初秋の夜風が吹き、少しずつ肌を冷やしていく。空では黄金色が黒の下地を丸く切り取っていた。

夏はもう終わったんだな、ふとそう思った。

「帰るぞ、美野里」

浅海さんが呼びかける。女子集団の中から吉岡が抜け出てくる。

「じゃあな純一。明日も遅刻すんなよ」

浅海さんは吉岡を携えて歩き出す。そういえば、あの二人つてもう付き合っていることになっているのかな。相変わらず微妙なラインを均衡し続けている。

ふいに吉岡が立ち止まった。俺の方を向くと、「今泉」と呼びかけてきた。

「なんだよ」

少し沈黙が流れる。くすぐったいような、しかも煮えきらない沈黙。薄暗いので、彼女の顔は表情が読めるか読めないかという程度だった。

「楽しかったよ」

吉岡は手を軽く振って、すぐさま浅海さんの背中を追いかけた。

店長も店を出てゆき、やっと一人になったところで俺も帰ることにした。

一般歩道に出て、駅方面に向けて数十メートル歩くと、そこにはコンビニがあった。そこを通りかかるとき、また騒がしいグループに呼び止められた。鍋島三姉妹、原村と早川兄妹、そして依子。これがまた変な空気がそいつらの間に流れていた。鍋島は何故か赤面し、そわそわして見て見るから拳動不審である。それをにやにやししながら見る村瀬と早川。原村が俺に近づいてくる。俺に両肩に手を置き、意味深にうなずいた。

「お前、もしかして告った？」

原村は答えなかったが、場の雰囲気でもう丸分かりである。俺は原村と鍋島の顔を交互に確認して、なんといいものか分からず、とりあえず「俺の居ないときにすんな」と原村の腹を小突いてついでに鍋島の肩もひつ叩いた。

「よかつたじゃん」

鍋島は叩かれた肩をおさえて、動転して目を白黒させた。この反応。ぶつちゃけこの二人は出来レースだ。いつかこんな風になると思っていたし、そこまで驚くものだろうか。彼女は一、二歩後ずさり、しばらく口をぱくぱくさせていたが、結局なにも言えずに黙り込んでしまった。村瀬がぼつりと言う。

「今泉、興奮し過ぎ」

もつとからかってやりたかったけど、これ以上は可哀想なのでやめた。

原村と早川は俺たちの二つ先の駅で降りる。電車内は座席が埋まりきり、俺たち四人はつり革に掴まって立っていた。早川はつり革一個分奥にずれて、依子を引っ張った。彼女らは二人、俺たちから離れてひそひそ話を始めた。どうやら聞かれたくない話らしい。

「なあ今泉」

女子側に対抗するように、原村も声をひそめた。

「君さ、最近やけに平野と距離近くない？ 物理的な意味じゃなくて」

物理的な意味だと勘違いしてボケでもかまそうと思ってたのに、先回りされた。寝たふりでもして誤魔化したかった。俺は視線を斜め上にあげて、荷台の一点を見つめた。あの日、夜の公園で依子と交わした言葉を一つ一つ思い返していた。

「俺が正直に伝えたから」

「正直に伝えた？ 好きだった？」

「お前と一緒にすんな」

俺は誰の顔も見ないように心がけた。しかし、原村が隣でいやらしく笑っている様が目に浮かぶようだった。

「お前のこと好きかもしれないって思ったけど、やっぱり錯覚だったって、そう伝えた」

原村はなにも言わなかった。ただ、彼の熱すぎる抗議の視線だけは横っ面にびりびりと感じた。

正直に伝えたなんて、もちろん嘘だ。錯覚だった、なんていうのも。

でも、俺は言わないようにしたのだ。やっぱり柄じゃないし、俺と依子はこのままがベストなのだから。今はそう思う。

降車駅に着く。早川が依子を解放した。俺たちは余裕を持って降り、電車内の兄妹を振り返る。原村の未練がましい視線は無視しておく。早川は笑顔で手を振っていた。

「早川、なんて言ってたの」

ふと気になって尋ねる。早川に愛想笑いを返していると、依子が

小さく言った。

「今泉はシャイだから、平野から手をつないでみたら、って」

俺は振り返そうとした手を止める。動き出す電車の窓の奥へと、かたく目をこらした。

その瞬間、早川の目に浮かんだ微かな涙を、俺はたしかに見ていた。

自転車を漕いでしばらく進む。突然、どうしてだか歩きたい衝動に駆られて俺は自転車から降りた。依子もそれに気付き、少し先で自転車を止めた。相変わらず、お互い無言で黙々と。そして俺のわがままのせいで二人して自転車を押して歩くことに。

そもそも俺の家は駅から十分の距離だからそのまま帰ってもよかったんだけど、依子にはまだ渡す物が残っていたし、その渡すタイミングもなかなかつかめなかった。だから送ってあげることにしたのだ。

神社の前で立ち止まって、俺は自転車のかごに入れたバッグを探った。依子は不思議そうに俺の行動を見つめた。

俺が取り出したベルーガまりもっこりに気付くと、彼女は驚愕、とまではいかないものの多少の驚きを見せた。手渡しながら俺は言う。

「これ、駅前のアクセサリーショップでたまたま見つけたんだよな。ご当地コーナーみたいな所。ほんとはシーパラで買ったかったんだけど、中々すぐにはいけないし、お前もう誕生日だし……」

依子はベルーガを手のひらに乗せて、長い時間をかけて眺めた。いちいち彼女の反応を待つのも面倒だし、ていうか照れ臭いので俺はすぐに歩き出した。依子は自転車を片手で押しながら、もう片方の手にあるストラップを気にし続けた。

「あんまり見られても困るんだけど」

それでも依子は見るのをやめない。その目はクリスマス直前の五歳児のよう。

今にも壊れそうな古い自販機を通り過ぎる。たしか依子はこの辺りで泣き崩れて、俺に初めて助けを求めた。俺は清志叔父さんのことを思い出した。叔父さんとの約束は守れただろうか。胸のうちから、薄い灰色のもやが消えてくれない。これはいったいどういうわけだろう。

祖母ちゃんの家へと続くあぜ道の前で、依子と別れることにした。「じゃあ、また明後日」

彼女はいまだに右手にストラップを握りしめている。これじゃ逆に俺の方が気になってしまう。

「ばいばい」  
別れの言葉を聞き届けると、俺はさっさと踵を返して来た道を戻った。

何も考えまいと思った。寂しいとか、もうちょっとだけとかいう考えは、今の俺には毒にしかない。

そういや、なんでまだ歩いてるんだろう。自転車あるんだからもう普通に乘ればいいじゃん。そう思い、ペダルに足をかけようとしたそのとき、遠く後方から声が聞こえた。

「純」

依子っぼくない妙に生き生きとした声。俺は無意識に振り返る。

「これ、ありがとう」

依子は軽く右手を浮かせた。そこから下がるベルーガまりもつこりも同時に揺れていた。そうして俺は息を止める。

照れ臭いだとか、寂しいだとか、薄い灰色のもやだとか、そんな愚にもつかないような不安は、全部そこで吹き飛んでいた。

しだいに握力が緩んでいく。ハンドルはいつの間にか指からすり抜けた。自転車が横倒しになり、バッグが地面に転がる。

俺は一回つんのめって小走りに依子へと駆け寄った。徐々に近づいていくにつれ、月明かりに照射された彼女の顔がより明確になっ

ていった。

「依子」

彼女のそばに来る。少しだけ走っただけなのに心臓が痛いほど高鳴っていた。

「お前、笑ってんのか」

口から出た言葉を確認するように、俺は依子を見た。依子は恥ずかしそうに唇を噛み、それでも口元を緩ませていた。数秒見ただけで喉の奥からこみ上げてくる。決壊し出したものはもう戻ってはくれないかった。

「原村先輩の絵、真似した」

まじまじと見つめて、俺は改めて原村の想像力に感心した。たしかにそっくりだ。

「お前、そうやって笑ってた方が、絶対いいっていうか……」

もっと上手いこと褒めたかったけど、喉がつかまってそれどころじゃないし、もう声が出なかった。途端に力が抜けてその場に膝をついた。舌の奥が震えて仕方ないので俺はついに嗚咽を漏らした。

俺の頭に手のひらが乗る。今度こそ叔父さんの手じゃない。間違いない。依子の手。

こうして笑顔を見せる依子は、まさに別人のようだった。詰まるどころ俺はこれが欲しかったんだと思う。こういう具体的な見返り欲しさに、俺は今までやってきたんだ。そう考えたら笑えてきた。やっぱ俺、小さいなって。

「そんなにうれしい？」

「うん」

「じゃあ、もっと笑えるようにがんばる」

「そうしてくれ」

依子は目元を指でこすって、もう一度笑った。

> i  
3  
2  
4  
4  
7  
5  
—  
8  
8  
4  
<



まず、この長い長い物語に最後まで付き合ってくださいの方へ大きな感謝を送りたいと思います。本当にありがとうございました。

作品の出来・問題点は掘り返せば山ほど出てきそうですが、まず完結させたことで作者は新たなステップを踏めたと感じています。原稿用紙1000枚以上、文庫本なら二冊半？ 正直これ終わらない話なんじゃないかって思っていました。

笑顔は武器でありたいなあ、とかクサイ台詞までつぶやいてしまいそうなあられもない状態です。恥ずかしいのであんまり見ないでください。

なにはともあれ、ここまでお付き合いいただき真にありがとうございます。また次回作でお会いできればうれしいです。

2011/10/7 素敵なイラストをありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6361p/>

---

コンフリクト

2011年11月12日03時15分発行